

# 福岡南バイパス関係

## 埋蔵文化財調査報告

第 8 集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)

1 9 7 8

福岡県教育委員会

# 福岡南バイパス関係

## 埋蔵文化財調査報告

第 8 集

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)



## 序

この報告書は、福岡県が九州地方建設局の委託を受けて、昭和46年度から昭和47年度に実施した一般国道3号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、これまで数回にわたり報告した御笠川南条坊遺跡のうち第1次、第2次調査の成果を中心とした内容であります。

十分な報告ではありませんが、この報告を通して太宰府の歴史を御理解していただければ幸いです。

なお、当遺跡の調査に対して御協力をいただいた地方の方々をはじめ、関係各位の御援助により本報告書を刊行することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

# 例 言

1. 本書は、国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和46年度から昭和47年度に実施した御笠川南条坊遺跡の第1次・2次発掘調査の概要報告である。
2. 調査は九州地方建設局福岡工事事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。
3. 御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器の素地、釉の蛍光X線分析を国立佐賀大学理工学部工業化学科の竹山尚賢教授に依頼し、その分析結果を掲載した。

なお、当分析は同学科助手中島紀美枝および近畿大学九州工学部工業化学科講師坂本栄治、同助手山田昭朗の援助による。

4. 本書に同バイパス建設事業に関連して、昭和52年度に実施した都府楼前条坊遺跡(第5地点)の発掘調査の概要を報告する。
5. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I.	.....	浜田信也	
II. 一	.....	浜田信也	
二	.....	浜田信也	
三 1~3・5	.....	浜田信也	
4	.....	新原正典	
四 1・4・5・9~11	.....	馬田弘稔	
2・3・6~8	.....	前川威洋	
12・14	.....	新原正典	
13	.....	浜田信也	
III. 一	.....	浜田信也	
二	.....	浜田信也	
三 1~3・5	.....	浜田信也	
4	.....	新原正典	
四 1	.....	田浦郁子	
4~7	.....	前川威洋	
2・3・8~10	.....	馬田弘稔	
11・13	.....	新原正典	
12・14・15	.....	浜田信也	
IV.	.....	竹山尚賢	中島紀美枝
		坂本栄治	山田昭朗

- V. .... 浜 田 信 也  
一 ..... 新 原 正 典  
二 ..... 前 川 威 洋

VI. .... 前 川 威 洋 馬 田 弘 稔

6. 掲載写真の撮影、実測図の作成および製図は執筆分担者が行なったが、遺物の実測・製図にあたっては、川村 博、田浦 郁子、山本 祥子、大坪 安子、宮崎真理子の諸氏の協力に依るところが大きく、遺物写真は九州歴史資料館の石丸 洋技師指導のもとに岡紀久夫と前田次郎の両氏にお願いした。
7. 本書の編集は前川威洋、浜田信也、新原正典、馬田弘稔が担当した。

# 本文目次

	頁
I. はじめに .....	1
II. 第 1 次 調 査 .....	4
一. 調 査 の 経 過 .....	4
二. 層 位 .....	4
三. 遺 構 .....	5
1. 建物・柱穴 .....	5
2. 溝 .....	5
3. 土 塚 .....	6
4. 井 戸 .....	7
5. その他の遺構 .....	14
四. 遺 物 .....	16
1. 須恵器 .....	16
2. 下層土師器・I類 .....	19
3. 上層土師器・II類 .....	21
4. 須恵質および瓦質土器 .....	28
5. その他の土師器 .....	28
6. 瓦器・内黒土器 .....	28
7. 磁 器 .....	30
8. 雑 器 .....	41
9. 滑石製品 .....	45
10. その他の石製品 .....	55
11. 土製品 .....	57
12. 木製品 .....	61
13. 鉄製品 .....	68
14. 銅 銭 .....	70
15. 鋳物関係遺物 .....	74
III. 第 2 次 調 査 .....	
一. 調 査 の 経 過 .....	74
二. 層 位 .....	74
三. 遺 構 .....	75
1. 建物・柱穴 .....	75

	頁
2. 溝	77
3. 土 塚	78
4. 井 戸	81
5. 窯 跡	88
四. 遺 物	89
1. 土師器・Ⅱ類	89
2. 須恵質および瓦質土器	118
3. その他の土師器	122
4. 瓦 器	124
5. 磁 器	124
6. 雑 器	146
7. 灰釉陶器・古瀬戸・常滑陶器	157
8. 滑石製品	157
9. その他の石製品	162
10. 土製品	165
11. 木製品	165
12. 鉄製品	169
13. 銅 銭	170
14. 鋳物関係遺物	173
15. 呪術関係遺物	186
IV. 御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器破片の蛍光X線分析	194
V. おわりに	212
一. 第1・2次調査出土の井戸について	212
二. 御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器片の蛍光X線分析の結果について	214
VI. 都府楼前条坊遺跡	215
一. はじめに	215
二. 調査の概要	215
三. ま と め	217

# 図 版 目 次

## 第1次調査

本文対称頁

図版 1	遺跡付近航空写真（北西から）	4
2	1. 調査区全景（東から）	5
	2. 調査区西側全景（北から）	5
3	1. 調査区全景（東から）	5
	2. 調査区西側遺構全景（北から）	5
4	1. 調査区東側調査状況（北から）	5
	2. KP26の層位と杭列	14
5	1. SX105 木器等出土状態（南から）	14
	2. SX105 木樋状遺構	14
6	1. SE101 井戸	9
	2. SE101 井戸	9
7	1. SE102 井戸	9
	2. SE102 井戸	9
8	1. SE103 井戸	9
	2. SE103 井戸	9
9	1. SE104 井戸	12
	2. SE102・SE110・SE104 井戸	12
10	1. SE105 井戸	12
	2. SE105 井戸	12
11	1. SE106 井戸	13
	2. SE106 井戸	13
12	1. SE107 井戸	13
	2. SE107 井戸	13
13	1. SE108 井戸	13
	2. SE108 井戸	13
14	1. SE109 井戸	7
	2. SE111 井戸	14
15	1. SE110 井戸	8
	2. SE110 井戸	8
16	1. SE112 井戸	8・9
	2. SE112 井戸	8・9

図版17	1. S E103 井戸遺物出土状態	9
	2. S E105 井戸遺物出土状態	12
18	1. 漆器出土状態	61
	2. 漆塗り椀出土状態	61
19	1. 下駄出土状態	63
	2. 下駄出土状態	63
20	1. 扇骨・櫛等出土状態	63
	2. 扇骨・櫛等出土状態	63
21	1. 土坑内遺物出土状態	6
	2. 四耳壺出土状態	41
22	1. S K112 土坑遺物出土状態	6
	2. 犁鏡出土状態	68
23	磁器	30
24	1. 磁器	30
	2. 合子	40
25	1. 雑器1類	41
	2. 雑器7類	44
26	1. 石鍋	45
	2. 基石	55
	3. 有孔鈕付菊花文印	51
27	1. 滑石有(方形)孔円板使用方法想定例	49
	2. 滑石有(方形)孔円板	47
28	1. 滑石有(円形)孔円板・有(円形)孔製品	49
	2. 滑石有孔鈕付製品	51
29	1. 滑石製品	54
	2. 石製硯	55
30	1. 土錘	57
	2. カワラ玉類	58
31	1. 木製品(1)	61
	2. 木製品(2)	63
32	1. 木製品(箸)	63
	2. 木製品(椀・折敷)	61
33	1. 扇骨出土状態	63

図版33	2. 扇骨	63
34	1. 下駄	63
	2. 履物状木製品 (右は第2次調査出土)	68
35	1. 犁鏡表面	68
	2. 犁鏡裏面	68
36	銅錢	70
第2次調査		
37	1. 調査区全景 (東から)	75
	2. 上面遺構全景 (西から)	75
38	1. 上面遺構全景 (整地層除去後・南から)	75
	2. 上面遺構全景 (整地層除去後・西から)	75
39	1. 下面遺構全景 (南から)	75
	2. 下面遺構全景 (西から)	75
40	1. SB201 建物 (東から)	75
	2. SB201 建物 (南から)	75
41	1. SB201 建物近景 (東から)	75
	2. SB201 建物近景 (南から)	75
42	1. SD202 溝、SK202～204 土壇	78
	2. SD206 溝、SE202・207～209 井戸	78
43	1. SK206・207 土壇	78
	2. SK216 土壇	78
44	1. SK219 土壇	78
	2. SK220 土壇	78
45	1. 下面遺構出土状態 (西から)	75
	2. SK230～236 土壇 (北から)	79
46	1. SE201 井戸	82
	2. SE202 井戸	82
47	1. SE203 井戸	84
	2. SE206 井戸	81
48	1. SE207 井戸	82
	2. SE207 井戸部分	82
49	1. SE208 井戸	81
	2. SE208 井戸部分	81



図版50	1. S E 209 井戸	84
	2. S E 211 井戸	84
51	1. S E 213 井戸	84
	2. S E 213 井戸	84
52	1. S E 215 井戸	87
	2. S E 216 井戸	87
53	1. S X 201 窯跡 (北から)	88
	2. S X 201 窯跡断面	88
54	1. やつとこ出土状態	169
	2. 華瓶鑄型出土状態	173
55	1. 土師器出土状態	123
	2. 銅銭出土状態	170
56	1. 須恵質および瓦質土器	118
	2. 土 鍋	118
	3. 石 鍋	157
57	磁 器 (1)	124
58	磁 器 (2)	124
59	1. 磁 器 (9類)	139
	2. 磁 器 (9類)	139
60	1. 雑 器 (3類、6類)	149~150
	2. 雑 器 (11類)	150
61	雑 器 (7類)	150
62	瓦器・古瀬戸・6 A Y E C K内関連遺跡出土土器	157
63	1. 滑石および瓦製有(方形)孔円板	157
	2. 滑石有(円形)孔製品	161
64	1. 滑石製品・石製品	162
	2. 石製硯 (1)	162
65	1. 石製硯 (2)	162
	2. 土製立像	165
	3. 土製品	165
	4. カワラ玉類	165
66	1. 木製品 (1)	165
	2. 木製品 (2)	165

図版67	1. 木製品 (3) .....	165
	2. 木製品 (6 A Y E C K内関連遺跡出土) .....	
68	1. やつとこ .....	169
	2. 耳搔付簪 .....	183
	3. 銅製品 .....	183
69	銅 錢 .....	170
70	1. 華瓶鑄型 (1) .....	173
	2. 華瓶鑄型 (2) .....	176
71	仏具等鑄型 .....	176
72	1. 鑄型等鑄物関係遺物 (1) .....	179~181
	2. 鑄型等鑄物関係遺物 (2) .....	179~181
73	1. 鑄物関係遺物 (1) .....	181
	2. 鑄物関係遺物 (2) .....	181
74	1. 呪符墨書壺 .....	186
	2. 呪符墨書壺底部 .....	186
75	墨書の呪符 .....	186
76	1. 塔 婆 (第2次調査) .....	186
	2. 塔 婆 (左・第3次調査、右・第2次調査) .....	186
77	1. 塔 婆 (第3次調査) .....	186
	2. 塔 婆 (第3次調査) .....	186

# 挿 図 目 次

## 第 1 次調査

		頁
1	図 遺跡位置図	2
2	図 遺跡全図	3
3	図 遺構配置図	5~6
4	図 SE109 井戸実測図	7
5	図 SE110 ・SE112 井戸実測図	8
6	図 SE101 ・SE102 井戸実測図	10
7	図 SE103 ・SE105 ・SE106 井戸実測図	11
8	図 SE107 ・SE108 井戸実測図	12
9	図 SX105 不明遺構実測図	15
10	図 須恵器・土師器実測図	17
11	図 須恵器実測図	18
12	図 土師器実測図 1 (下層出土)	20
13	図 土師器実測図 2 (井戸出土)	23
14	図 土師器実測図 3 (SX105 不明遺構・SD103 溝)	25
15	図 瓦質土器・土師器実測図	29
16	図 瓦器・内黒土器実測図	30
17	図 磁器実測図 1 (1~5類)	31
18	図 磁器実測図 2 (6類・その他の白磁)	18
19	図 磁器実測図 3 (7類)	35
20	図 磁器実測図 4 (7D類)	36
21	図 磁器実測図 5	37
22	図 磁器実測図 6 (7類小椀・9類)	38
23	図 磁器実測図 7 (11・12類・その他)	41
24	図 雑器実測図 1	42
25	図 雑器実測図 2	43
26	図 雑器実測図 3	44
27	図 石鍋実測図	46
28	図 滑石・瓦製有(方形)孔円板実測図	46
29	図 滑石有(円形)孔円板・有(円形)孔製品実測図	50
30	図 滑石有孔鈕付製品実測図	52
31	図 滑石有孔鈕付菊花文印実測図	53

	頁
32 図 各種滑石製品実測図	54
33 図 基石実測図	55
34 図 石製硯実測図	56
35 図 土錘実測図	57
36 図 カワラ玉類実測図	59
37 図 木製品実測図 1	62
38 図 木製品実測図 2	64
39 図 木製品実測図 3	65
40 図 木製品実測図 4	66
41 図 木製品実測図 5	67
42 図 鉄製犁鑿実測図	69
43 図 銅銭拓影	72
44 図	
45 図 鋳物関係遺物実測図	73

## 第 2 次調査

46 図 遺構配置図 1	74~75
47 図 遺構配置図 2	74~75
48 図 S B 201 ・ S B 202 建物実測図	76
49 図 S E 206 井戸実測図	81
50 図 S E 207 ・ S E 208 井戸実測図	82
51 図 S E 201 ・ S E 202 井戸実測図	83
52 図 S E 203 ・ S E 209 井戸実測図	85
53 図 S E 211 ・ S E 213 井戸実測図	86
54 図 S X 201 窯跡実測図	88
55 図 土師器実測図 1 (S K 201 土塚出土)	91
56 図 土師器実測図 2 (S K 211 ・ S 212 土塚出土)	93
57 図 土師器実測図 3 (S K 219 土塚出土 1)	94
58 図 土師器実測図 4 (S K 219 土塚出土 2)	95
59 図 土師器実測図 5 (S K 202 ・ 220 ・ 238 土塚出土)	97
60 図 土師器実測図 6 (S K 231 土塚出土)	99
61 図 土師器実測図 7 (S K 232 土塚出土)	101
62 図 土師器実測図 8 (S K 239 土塚出土)	103
63 図 土師器実測図 9 (S D 202 溝出土)	104

	頁
64 図 土師器実測図10 (S D 201 ・ S D 202 溝出土) .....	106
65 図 土師器実測図11 (S D 202 溝カブリ土出土) .....	108
66 図 陶磁器実測図 (S D 202 溝カブリ土出土) .....	109
67 図 土師器実測図12 (5層出土1) .....	113
68 図 土師器実測図13 (5層出土2) .....	114
69 図 土師器実測図14 (5層出土3) .....	115
70 図 土師器実測図15 (S X 201窯・R 34—5層出土) .....	116
71 図 須恵質および瓦質土器実測図 .....	119
72 図 片口実測図 .....	120
73 図 土鍋実測図 .....	121
74 図 土鍋・瓦質甕実測図 .....	123
75 図 瓦器実測図 .....	124
76 図 磁器実測図1 .....	125
77 図 磁器実測図2 (c類) .....	126
78 図 磁器実測図3 .....	128
79 図 磁器実測図4 (6類) .....	129
80 図 磁器実測図5 (7A類) .....	131
81 図 磁器実測図6 (7B類) .....	132
82 図 磁器実測図7 (7C類) .....	133
83 図 磁器実測図8 (7類) .....	135
84 図 磁器実測図9 (青磁) .....	137
85 図 磁器実測図10 (8類) .....	138
86 図 磁器実測図11 (9類の1) .....	140
87 図 磁器実測図12 (9類の2) .....	141
88 図 磁器実測図13 .....	143
89 図 磁器実測図14 (10~12類) .....	145
90 図 雑器実測図1 .....	147
91 図 雑器実測図2 .....	148
92 図 雑器実測図3 (6類) .....	151
93 図 雑器実測図4 (7類) .....	152
94 図 雑器実測図5 .....	153
95 図 雑器実測図6 .....	154
96 図 雑器実測図7 .....	156

	頁
97 図 灰釉陶器・古瀬戸・常滑陶器実測図	157
98 図 石鍋実測図	158
99 図 滑石・瓦製有(方形)孔円板実測図	159
100 図 滑石有(円形)孔円板・有(円形)孔製品実測図	160
101 図 各種滑石製品実測図	161
102 図 石製硯実測図	163
103 図 砥石実測図	164
104 図 カワラ玉類実測図	164
105 図 土製品実測図	165
106 図 木製品実測図 1	166
107 図 木製品実測図 2	167
108 図 木製品実測図 3	168
109 図 鉄製品実測図	169
110 図 銅銭拓影	172・173
111 図 華瓶鑄型実測図 1	174
112 図 華瓶鑄型実測図 2	175
113 図 華瓶復原図	175
114 図 鑄物関係遺物実測図 1	177
115 図 鑄物関係遺物実測図 2	178
116 図 鑄物関係遺物実測図 3	180
117 図 鑄物関係遺物実測図 4	181
118 図 鑄物関係遺物実測図 5	182
119 図 御笠川南条坊遺跡出土銅製品	183
120 図 銅地金溶解方法想定模式図	185
121 図 呪符墨書壺実測図	187
122 図 墨書呪符実測図(2/3)	188
123 図 呪符訳文	189
124 図 塔婆実測図 1	190
125 図 塔婆実測図 2	191
126 図 塔婆実測図 3	192
127 図 陶磁器破片の素地についての重金属成分( $2\theta=19^{\circ}\sim 28^{\circ}$ 域)の蛍光X線スペクトル	199
128 図 陶磁器破片の釉についての重金属成分( $2\theta=19^{\circ}\sim 28^{\circ}$ 域)の蛍光X線スペクトル	200
129 図 佐賀県有田周辺の陶磁器原料石及び古窯跡出土の陶磁器破片についての重金属成	

	頁
分( $2\theta=19^\circ\sim 28^\circ$ 域)の蛍光X線スペクトル	201
130 図 陶磁器破片の素地及び釉についての重金属成分(ルビジウム・ストロンチウム・イットリウム)のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット	202
131 図 有田周辺の陶磁器原料石についての重金属成分(ルビジウム, ストロンチウム・イットリウム)のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット	203
132 図 有田周辺古窯跡出土の陶磁器破片についての重金属成分(ルビジウム・ストロンチウム・イットリウム)のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット	203
133 図 陶磁器破片の素地及び釉についての軽金属成分(カリウム・カルシウム・チタン)のケイ素に対する蛍光X線強度比プロット	206
134 図 有田周辺の陶磁器原料石についての軽金属成分(カリウム・カルシウム・チタン)のケイ素に対する蛍光X線強度比プロット	207
135 図 陶磁器破片の素地及び釉についてのカルシウム( $K\beta$ 線)蛍光X線強度とカリウム( $K\alpha$ 線)蛍光X線強度との相関	208
136 図 都府楼前条坊遺跡(5地点A~D地区)全図	215~216
137 図 A~C地区土層図	216
138 図 D地区遺構配置図	218

## 表 目 次

	頁
1表 発掘調査工程表	1
2表 土塚一覧表	6
3表 井戸一覧表	13
4表 下層出土(5・6層)土師器計測表	21
5表 各井戸出土土師器計測表	22
6表 S X105不明遺構出土土師器の法量	26
7表 S X105不明遺構・S D103溝出土土師器計測表	26
8表 S D103溝出土土師器の法量	27
9表 有(方形)孔円板計測表	48
10表 有孔鈕付製品計測表	51
11表 土錘計測表	57
12表 カワラ玉類計測表	60
13表 銅銭計測一覧表(第1次調査出土)	70・71
14表 土塚一覧表	79・80
15表 井戸一覧表	87・88
16表 S K201土塚出土土師器の法量	90
17表 S K201土塚出土土師器計測表	90
18表 S K211・S K212土塚出土土師器計測表	92
19表 S K219土塚出土土師器計測表	95
20表 S K202・S K220・S K238土塚出土土師器計測表	96
21表 S K231土塚出土土師器計測表	98
22表 S K231土塚出土土師器の法量	100
23表 S K232土塚出土土師器計測表	100
24表 S K239土塚出土土師器の法量	102
25表 S K239土塚出土土師器計測表	102
26表 S D201・S D202溝出土土師器の法量	105
27表 S D201・S D202溝出土土師器計測表	105
28表 S D202溝かぶり土出土土師器計測表	107
29表 5層出土土師器の法量	111
30表 5層出土土師器計測表	112
31表 R34-5層・S X201窯跡出土土師器計測表	117
32表 銅銭計測一覧表(第2次調査出土)	171
33表 御笠川南条坊遺跡出土陶磁器一覧表	196・197
34表 蛍光X線分析による組分けと考古学的組分けとの対比表	209



# I. は じ め に

御笠川南条坊遺跡は、昭和46年度から昭和49年度にかけて6次にわたる発掘調査を実施し、これまでに第3次から第6次の調査成果の報告がなされている。今回第1次・第2次調査の成果を報告し、当遺跡の調査報告の最終としたい。

第1次・第2次の調査成果の特徴は、多数の井戸の検出と鑄造関係遺物の発見であり、建物等の遺構は少ない。

発掘調査および整理関係者は次のとおりである。

## 発掘調査関係者

庶務担当	福岡県教育庁文化課	庶務係長	姫野博	
		主事	中村一世	師岡満
発掘担当		技師	石山勲	浜田信也
			新原正典	

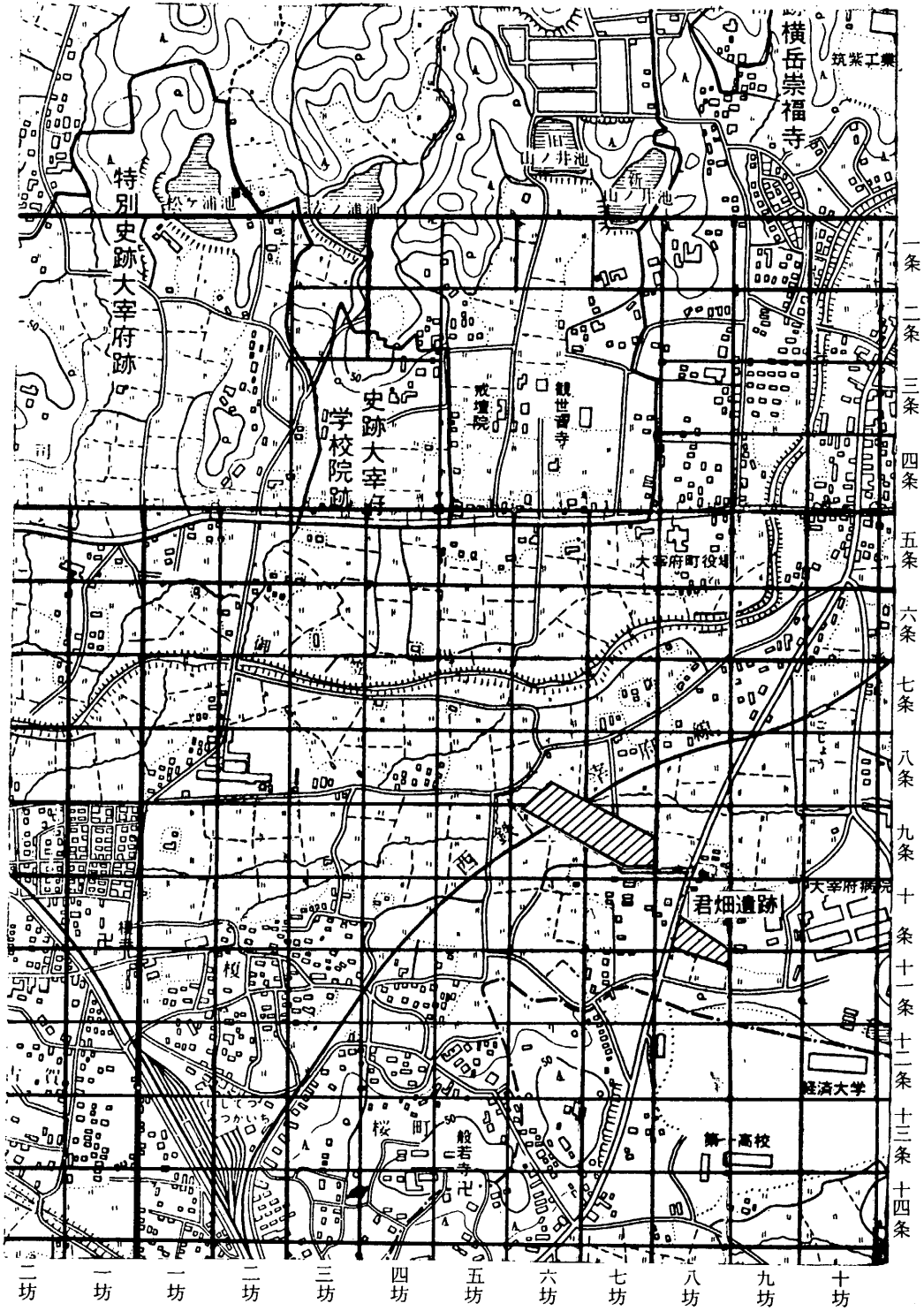
## 整理関係者

庶務担当	福岡県教育庁文化課	庶務係長	大淵幸夫	
		主任主事	入江智徳	
整理担当		主任技師	前川威洋	浜田信也
		技師	新原正典	馬田弘稔
整理補助員	川村博			
整理準補助員	田浦郁子	大坪安子	山本祥子	
	宮崎真理子	岡部正巳	木林万里子	
	平柴淳子			

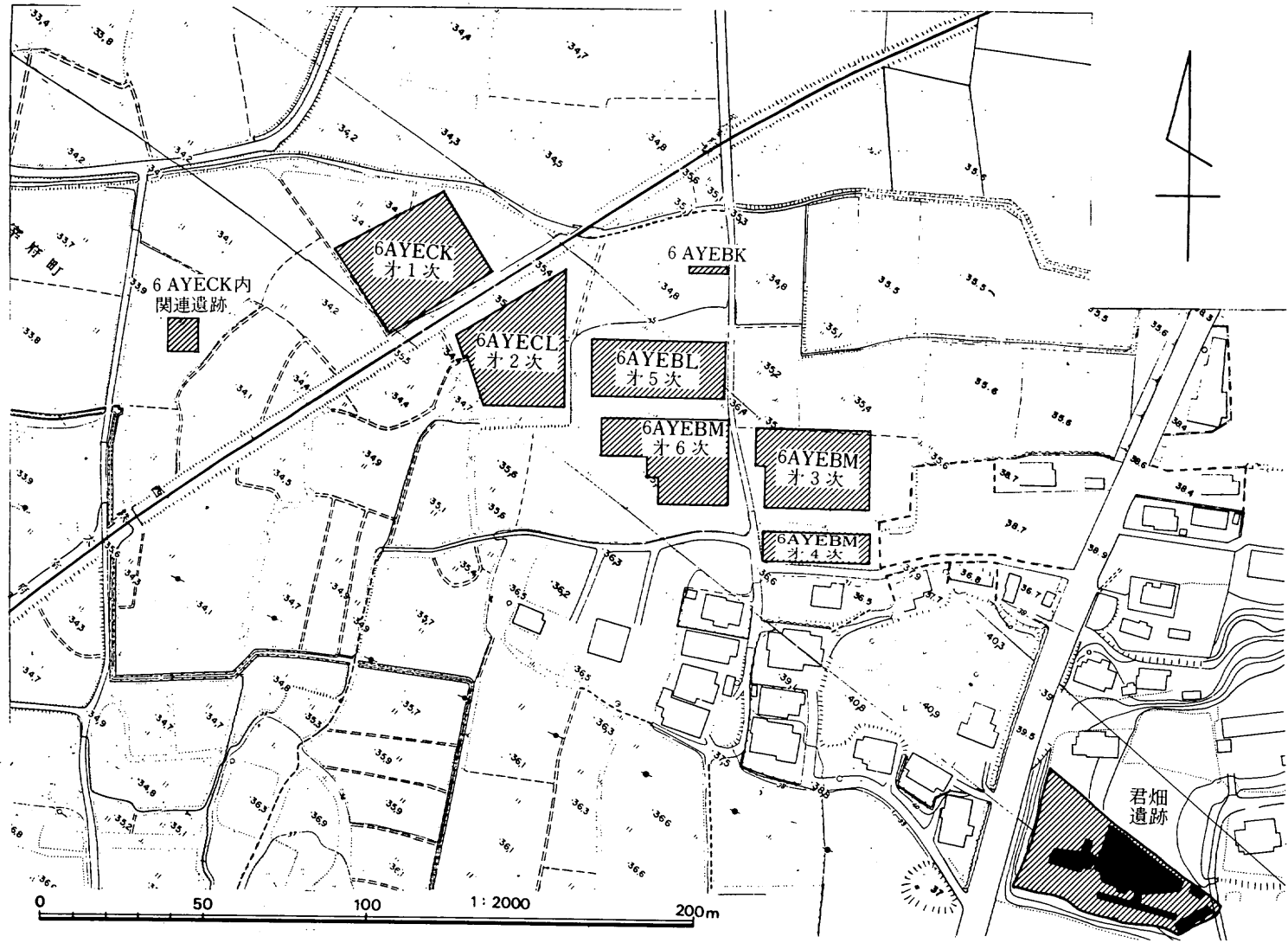
なお、当遺跡の発掘調査の発掘作業や遺物整理作業には地元太宰府町、筑紫野市の方々の御協力を得た。

調査次	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	6AYECK	2,000㎡	昭和46年10月11日～昭和47年3月20日 昭和47年8月18日～昭和47年9月12日
第2次	6AYECL	1,000㎡	昭和47年9月13日～昭和48年3月17日
第3次	6AYEBM	1,000㎡	昭和48年2月10日～昭和48年6月19日
第4次	6AYEBM	700㎡	昭和48年9月10日～昭和49年1月10日
第5次	6AYEBL	1,400㎡	昭和48年11月22日～昭和49年3月20日
第6次	6AYEBM	1,050㎡	昭和49年4月8日～昭和49年8月24日
第7次	6AYF-A (君畑遺跡)	700㎡	昭和50年11月17日～昭和51年3月1日

1表 発掘調査工程表



1 遺跡位置図(1/10,000) (鏡山猛著『大宰府都城の研究』より)



2 遺跡全図

## Ⅱ、第 1 次 調 査

### 一、調 査 経 過

第1次調査は6 A Y E C K区で実施した。6 A Y E C K区は小谷の開口部にあり、御笠川の氾濫原に近い位置にあり、標高約34mの水田地である。大宰府政庁との関係では、政庁中軸線より東へ約580 m，観世音寺より南へ約470 mの地点にあたる。地番は太宰府町大字平野2700-2である。

本調査に先立ち、昭和45年度には御笠川南条坊遺跡にかかる当バイパス路線内のトレンチによる予備調査を実施しており、当6 A Y E C K区はほぼ中央に南北方向の3 m幅のトレンチを設け実施している。この予備調査により、当調査区の北側地区（6 A Y E C J区以北）は、御笠川の氾濫原であることが確認され、当調査区も遺構の確認はなかったが、北側地区と土層の堆積状況が異なり、6 A Y E C K区については再度調査することとした。

予備調査の結果から当地区の調査は、一辺3 mのグリッドを設定し、このグリッドを一松模様状に掘り下げ遺構の有無を確認した上で調査区の全域を発掘調査することとした。当調査区は低湿地であるため湧水が多く、かつ秋期の降雨により調査区が冠水し調査は困難を要し、遺跡の内容確認も困難を極めた。このため調査の内容は十分とはいえ不明確な部分が多い。

調査期間は、昭和46年10月11日から昭和47年3月20日までと昭和47年8月18日から昭和47年9月12日までの長期にわたる調査となった。

### 二、層 位

土層はおおむね水平に近い堆積であり、おおむね上・下層の二つに分けることができる。上層は同一土層で広く覆われ、その下部（遺構面上）で若干の堆積の変化が見られる。土層は上部より第1層から第6層に分けられ、**第1層**は耕作土で約10cmの厚さである。**第2層**は黄褐色土の床土で、鉄分を多く含んでいる。厚さ10～15cm程度である。次に**第3層**となる茶褐色土が厚く堆積し、この層から遺物を含む土層となる。厚さは40cm前後である。鉄器や土師器の小片等を出土する。**第4層**は黒褐色粘質土で30cm程度の厚さで、漆器、木製品、磁器、銅銭、糸切

り底土師器等の遺物が多く出土し、中には完形品や大形破片も多い。第4層と第5層との間には部分的に灰青色を呈する薄い砂質土があるが、これは第4層に含めた。第5層は青色粘土層で、井戸等の遺構面である。この土層は20～30cmの厚さで、遺物は少ない。この第5層下は、砂層、砂礫層を続き、これらを第6層とした。この層からは奈良時代末期の須恵器が出土している。

各層の遺物の出土は、第1、第2、第3の各層は少なく、第4層において多量の出土をみる。糸切り底の土師器を主体とし、遺構面である第5層以下ではヘラ切り土師器や須恵器が出土し、第4層から上層と第5層から下層の二つの時期に分けることができる。

当地区における井戸、土壇、溝、杭列は第5層上面より設けられたものであり、これらの遺構出土の土師器は第4層出土の土師器と大差はない。

### 三、遺 構

第1次調査の6 A Y E C K区では、第5層上面において遺構が確認された。井戸、土壇、柱穴、杭列等の遺構である。

#### 1. 建物・柱穴

柱穴は径20cm内外のもので数少なく、これらは調査区の21・22列の南と北に集中し、K Q・K Rの28・29に検出された程度である。これらの柱穴群は建物跡として想定できるものはない。これらの柱穴内からは糸切り底の土師器の小片が出土している。

#### 2. 溝

溝は調査区の東側において、S D 101・S D 102の2条の小溝とS D 103の大溝1条が検出された。

S D 101は調査区北側のK K 25区内において部分的に確認されたもので、ほぼ東西に延びる溝は東端が不明瞭である。小溝であり、溝幅は最大約1mであり、青色粘土層に掘り込まれた浅いもので、中ほどに杭が並ぶ。溝内より腐朽した板材の一部と糸切り底土師器を主体とする遺物の出土があった。

S D 102は小溝で、南北方向より西に片寄る方向で確認され、ほぼ南北に延びる杭列を切っている。幅約50cmのもので、延べ4mの長さで確認された。

S D103 は青色粘土層に掘り込まれた大溝である。北北東から南南西の方向に延びるものである。溝は東側の肩部が確認され西側は確認されていない。しかしながら溝東肩部の南側では杭が打ち込まれており、これと並行する杭列(S X102)が西側にあり、この杭列間の幅が溝幅とほぼ同一であることから、S X102 杭列部が西側の溝肩部と考えられ、横断面による検討によってもこれが確認された。この結果、溝幅は約3 m、深さ40cmであるが解かったが、南へどのように延びるか確認できず、S X101・S X104杭列との係りも不明である。溝内出土の土師器はⅡ-2類である。

### 3. 土 塚

土塚は12基を数え、この他に浅い不整形の落ち込みが若干検出されている。ここにあげる12基の土塚は形態、規模などの点で差異がある。

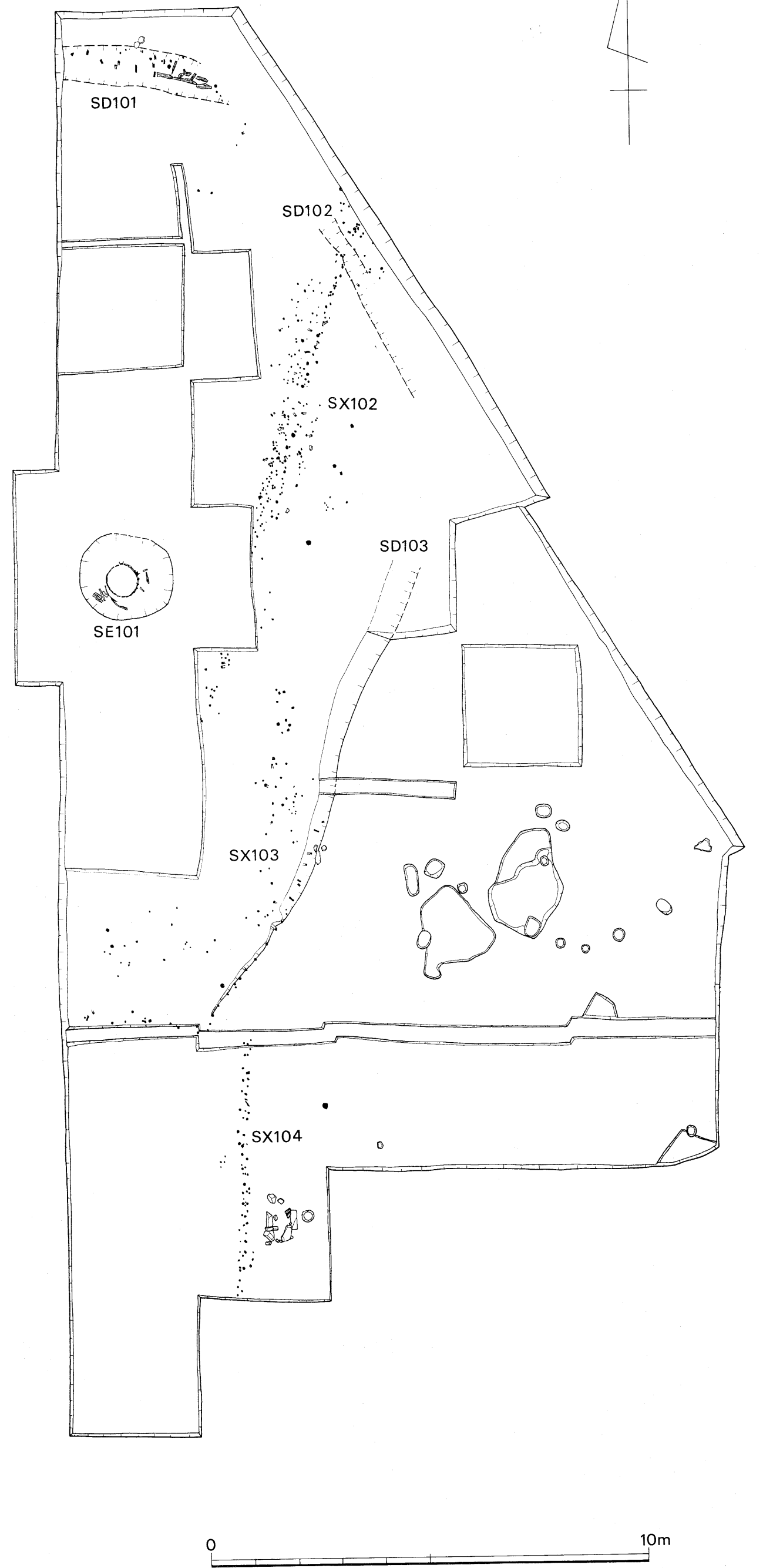
S K110 は円形に近い形をなすもので、S K102, S K106, S K111, S K112などは未完掘ではあるが同様の形をなすものと考えられる。S K110 は二重の塚で、径約120cm、深さ20cmの塚を掘っている。同様の形態をとるものにS K106 がある。S K111, S K112は深さ約20cmの浅い塚であるが、S K111 からは下駄片、S K112 からは板材と曲物が出土している。

S K103 は楕円形を呈するもので、深さ10cmほどの浅い摺鉢状を呈する底部である。

2表 土 塚 一 覧 表

遺構番号	地 区	旧番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
S K 101	KV18・19		不 整 形		1.73 × 0.2		
〃 102	KU20		円 形	1.25 × (1.13) × 0.1			
〃 103	KV20		楕 円 形	2.03 × (1.47) × 0.45			
〃 104	KW19		不 整 形	1.8 × 1.1 × 0.16			磁器7類、陶器1類、片口
〃 105	KW19	P-55	不 整 形	2.88 × 0.1			土師器、磁器7類、土鍋、石鍋 有孔円形板
〃 106	KT21		円 形	1.71 × 0.4			
〃 107	KW21		楕 円 形	3.28 × 1.29 × 0.14			土師器、磁器7類、陶器1・3類、 土鍋、石鍋、片口、とりべ、 土製菊花文押型
〃 108	KW・KX21		隅丸長方形	4.02 × (0.75) × 0.2			土師器、須恵器、磁器3・7・9類、 陶器1類、土鍋、
〃 109	KW・KX21		隅丸長方形	1.88 × 1.11 × 0.08			
〃 110	KT18		円 形	1.24 × 1.15 × 0.1			
〃 111	KP22		円 形	1.2 × 0.16			下駄
〃 112	KP22		円 形	1.06 × 0.23			板材、曲物
〃 113	KV・W20	P-54	長方形(?)				土師器、須恵器、磁器6・7・9類、 陶器1・3・11類、土鍋、石鍋、 轆羽口
〃 114	KX20	P-56	円 形(?)				土師器、須恵器、磁器6・7類、 陶器1・7・8・10・11類、瓦質碗、 内黒土器

(単位 m)



3 園 遺 構 配 置 図

14  
E:560029m

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29  
E:609029m

KJ  
S:453308m

KK

KL

KM

KN

KO

KP

KQ

KR

KS

KT

KU

KV

KW

KX  
S:496308m

S K 101, S K 104, S K 105 は不整形を呈する土壇である。S K 101 は本来長方形を呈するもので、その東側の一部が不整形を成すものであろう。深さ約20cmである。S K 105 は長楕円形に近い形状を示すが、やや不整形のもので、非常に浅い壇である。壇内より円形で中央に方形孔のある木製品が出土している。

S K 107 は楕円形を呈し、壇底は数cmと非常に浅く、壇壁に沿ってめぐり深さ5cmほどの溝によって壇の平面形を確認し得ることができた。

S K 108, S K 109 は隅丸長方形を呈し、S K 108 は長軸が短軸に較べ非常に長い形を呈する。S K 109 は長軸約2m, 短軸約1mの壇のほぼ中央に径約50cmの浅い円形壇をもつ浅い土壇である。

S K 108 に類似すると考えられる落ち込みがS K 103 の南に隣接して確認された。これら長方形土壇は長軸の方向をほぼ同じとするものである。

#### 4. 井戸

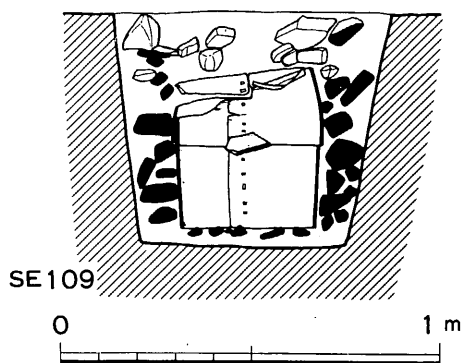
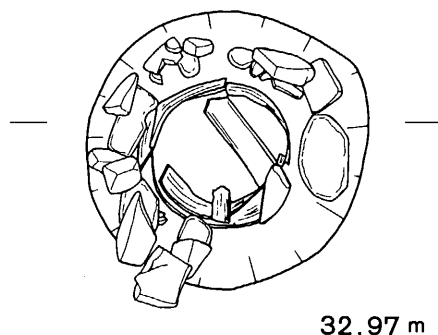
1次の調査では12基の井戸が検出された。井戸側の組み合わせによる内訳では、曲物だけのもの1, 桶+曲物のもの1, 方形枠組+桶+曲物のもの1, 桶あるいは桶+桶のもの8, 井戸側の抜かれたもの1の計12である。井戸の設置分布をみると、調査区の東側では1基のみ検出されただけで、他はすべて西側にみられ、それも19・20列の南北方向に連なるように設置されているが、個々の井戸が同一時期のものとは限らないので一概には言えない。

以下井戸側の組み合わせ別に各井戸についてみる。

##### S E 109 (4図, 図版14-1)

調査区北側にて検出され、曲物だけで設置された井戸である。井戸掘り方は平面円形で径0.74m, 深さは0.61mをはかる浅くて小形の井戸である。井戸側として曲物を上・下2段に裾え、上の曲物は高さ20cm, 内径39cm, 下の曲物は高さ22cm, 内径37cmとともに桜皮でとめている。

掘り方底面には小さい河原石を敷き、掘り方と曲物の隙間には上端部まで大き



4図 SE 109井戸実測図



い河原石を充填している。井戸内からの出土遺物はない。

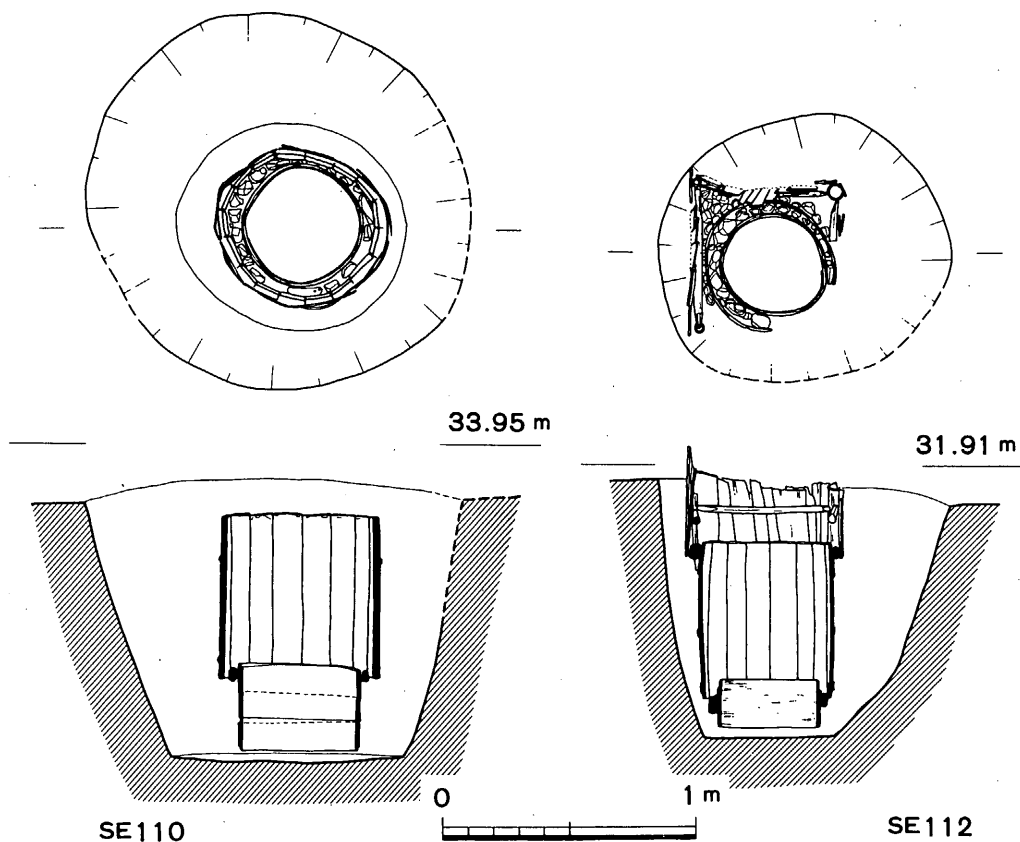
**SE110** (5図, 図版15)

調査区の北側にて検出され, SE104 井戸を切り, SE102 井戸より切られている。掘り方平面は円形で長径1.52m, 短径1.43m, 深さは1.03mをはかる。

井戸側は上段が桶, 下段が曲物による構築で桶は高さ64cm, 上端内径57cm, 下端内径58cm, 桶板は17枚使われており上下2ヶ所タガによる緊縛がなされている。曲物は10cmほど重複させて上下2段に積み, とともに一部二重に巻かれている。上の曲物は高さ20cm, 内径45cm, 下の曲物は高さ22cm, 内径44cmをはかる。桶と曲物との接合部隙間には小礫をつめて充填し, 桶下端も一部分外側から石をあてて固定している。井戸内より土師器Ⅱ-3類, 青磁, 常滑陶器などが出土している。

**SE112** (5図, 図版16)

昭和47年度の補足調査の際に検出された井戸で, 掘り方は平面長径1.15m, 短径1.05mの円



5図 SE110・112井戸実測図

形を呈し、深さは約1 mをはかる。井戸側は、上段方形枠縦板組、中段は桶、下段は曲物と各種の井戸側が組み合わされている。上段の方形枠縦板組は四隅に竹の隅柱を立て、それに柄穴を2ヶ所切り込んで横棧を受けている。横棧は両端を尖がらせた丸杭で一段のみ現存し、それに幅10～15cmほどの薄い縦板を外側から10枚ほどあてて側板としている。方形枠の一辺の長さは57cm、高さは現存長40cmをはかる。中段の桶は高さ62cm、内径49cmで胴中位が土圧にてやや膨らむ。

上端及び上中下の4ヶ所にタガによる緊縛がみられ、特に上段のものは5本ほどの竹で編まれている。下段の曲物は二重に巻かれていて、高さ19cm、内径37cmをはかる。井戸側構築に際し、上段と中段、及び中段と下段の接合部隙間には礫を詰めて固定している。井戸内より土師器Ⅱ-3類、青磁、石鍋、土鍋などが出土している。

#### SE101 (6図、図版6)

調査区の東側において検出された。長径2.1 m 短径2 mの平面円形の掘り方を呈し、礫混じりの砂層まで1 mほど掘り下げている。掘り方壁面が軟弱で崩壊が著しかったが、2段掘りかとも考えられる。井戸側は桶を上下2段に構築したもので、上の桶は現存高64cm、下端内径74cmで、24枚の桶板を使用し、上下2ヶ所にタガによる緊縛がなされている。下段桶は高さ72cm、上端内径68cm、下端内径73cmで、桶板22枚が上下2ヶ所タガにて緊縛されている。上段桶より上の構造は不明であるが、上段桶の外側に板材が数枚立て掛けられている所から方形枠組状のものが設置されていた可能性もある。上段桶内部に大きな石が4～5個埋没しており、廃棄後に投げ込んだものであろう。井戸内からは土師器Ⅱ-1～3類、須恵器、青磁、常滑陶器、石鍋などが出土している

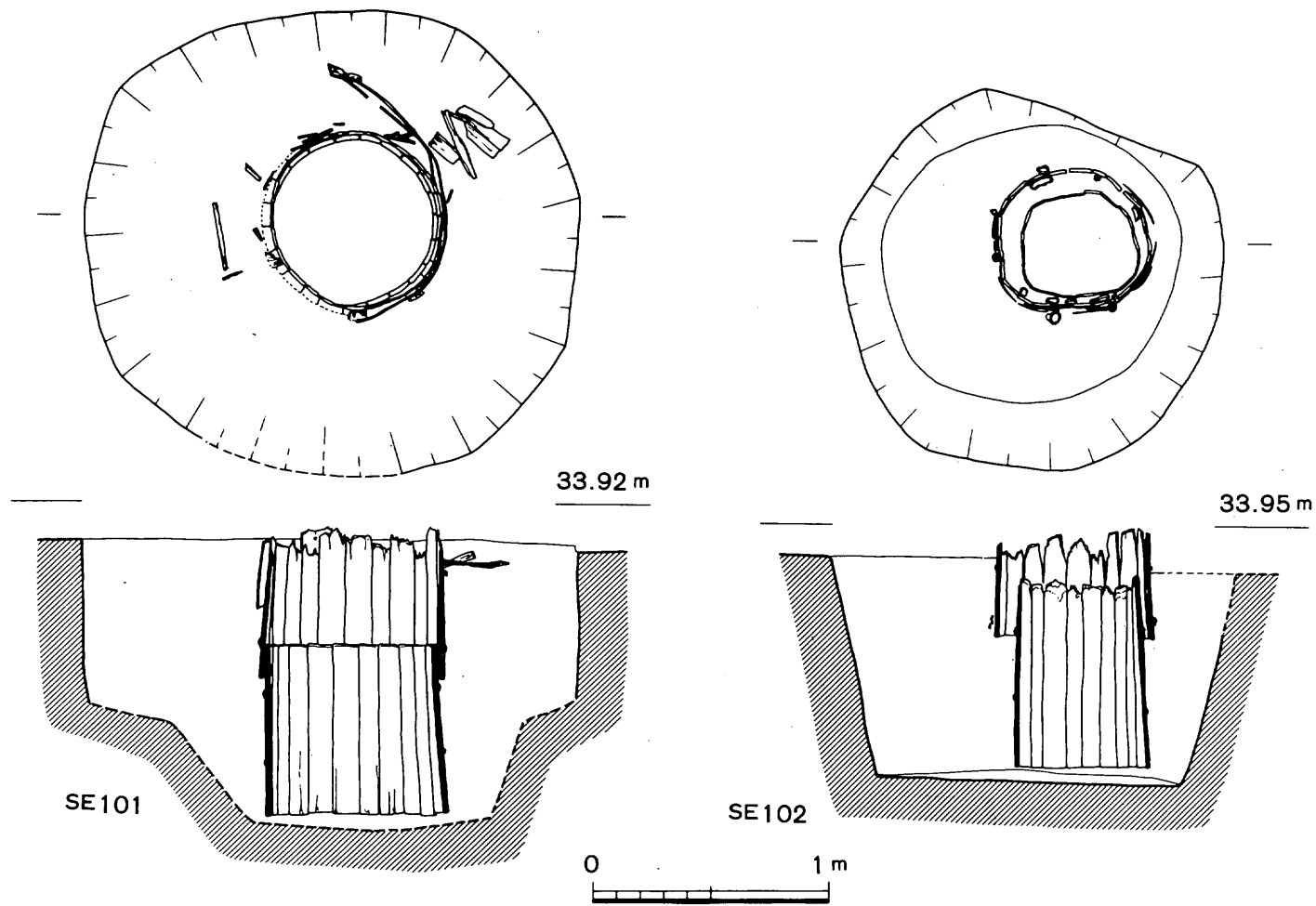
#### SE102 (6図、図版7)

調査区北において検出され、SE110 井戸を切っている。掘り方平面は正円で径1.6 m、深さ0.95 mをはかる。井戸側は桶を2段に据えたもので上段のものは現存高47cm、下端内径64cm、桶板は22枚使われたうち1枚は方形孔が穿たれている。

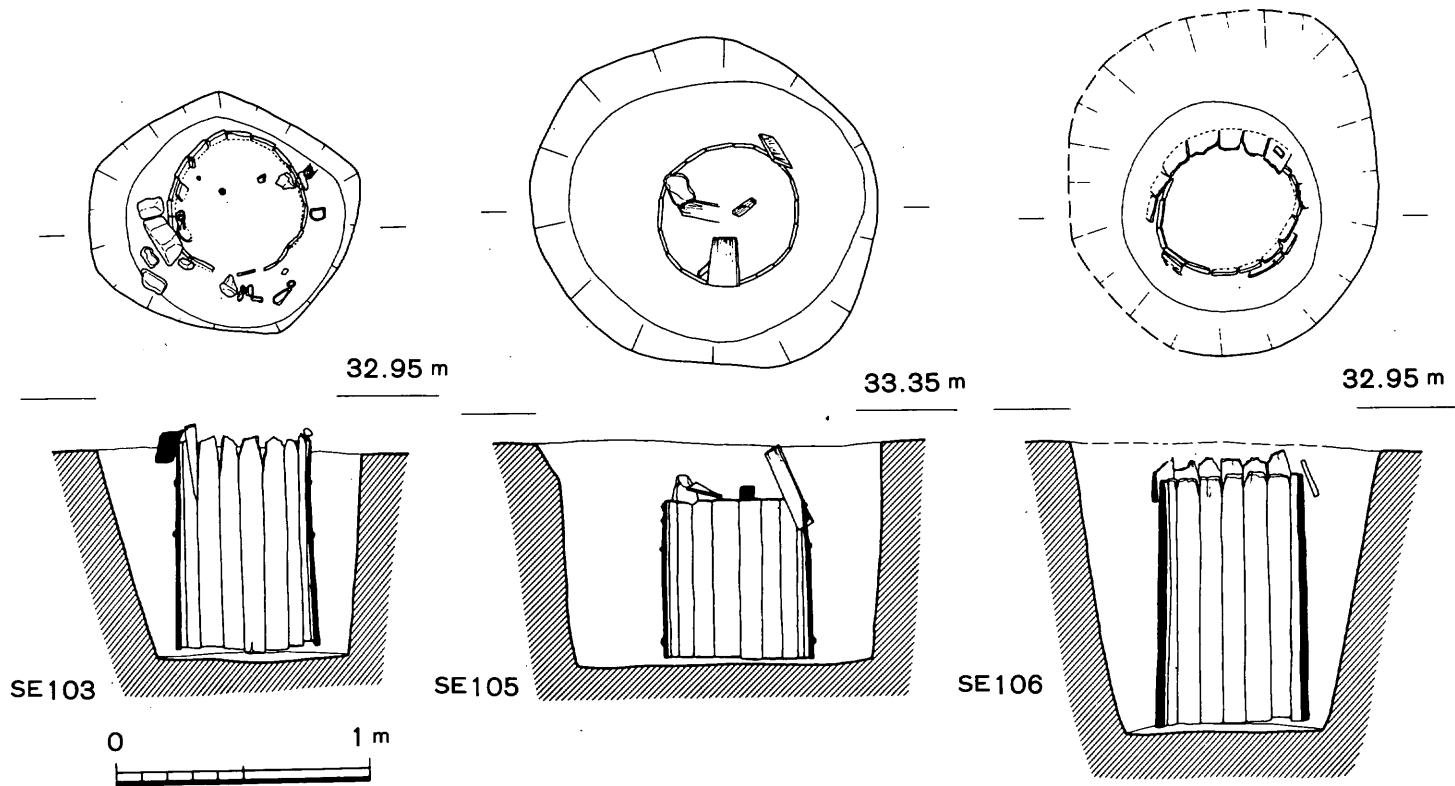
下段のものは、高さ82cm、上端内径48cm、下端内径54cmで、桶板は18枚使われ、上下2ヶ所でタガにより緊縛されている。上段桶外側には丸杭2本と竹杭1本が打ち込まれ、桶の接合部隙間には一部礫が詰められている。井戸内からは土師器Ⅱ-4類、青磁、常滑陶器、石鍋、銅銭(大観通寶)が出土している。

#### SE103 (7図、図版8)

調査区西側のほぼ中央にて検出された桶1段だけの井戸である。掘り方は不整形円で長径1.06 m、短径0.95 m、深さ0.84 mをはかる。桶は現存高86cm、上端内径50cm、下端内径52cmで、19枚の桶板が上下2ヶ所でタガにより緊縛されているが、桶板下端に方形孔の穿たれたもの5枚がみられる。また、桶上端周縁に青磁碗の底部のみが7個、それも5個が底部を上向にした状態で並べられていた。6次にわたる調査で70基ほどの井戸が検出されているが、今回のような例は



6图 SE101・102井戸実測図



7图 SE103·105·106井戸実測図

初めての事であり、何か特別な意味合いでもあるのであろうか。なお、井戸埋土内に杭が打ち込まれた状態で検出されているが、この杭はS X101 杭列に連なるもので、井戸埋没後に打たれたものである。井戸内より土師器Ⅱ-1~2類、青磁、石鍋、木製椀などが出土している。

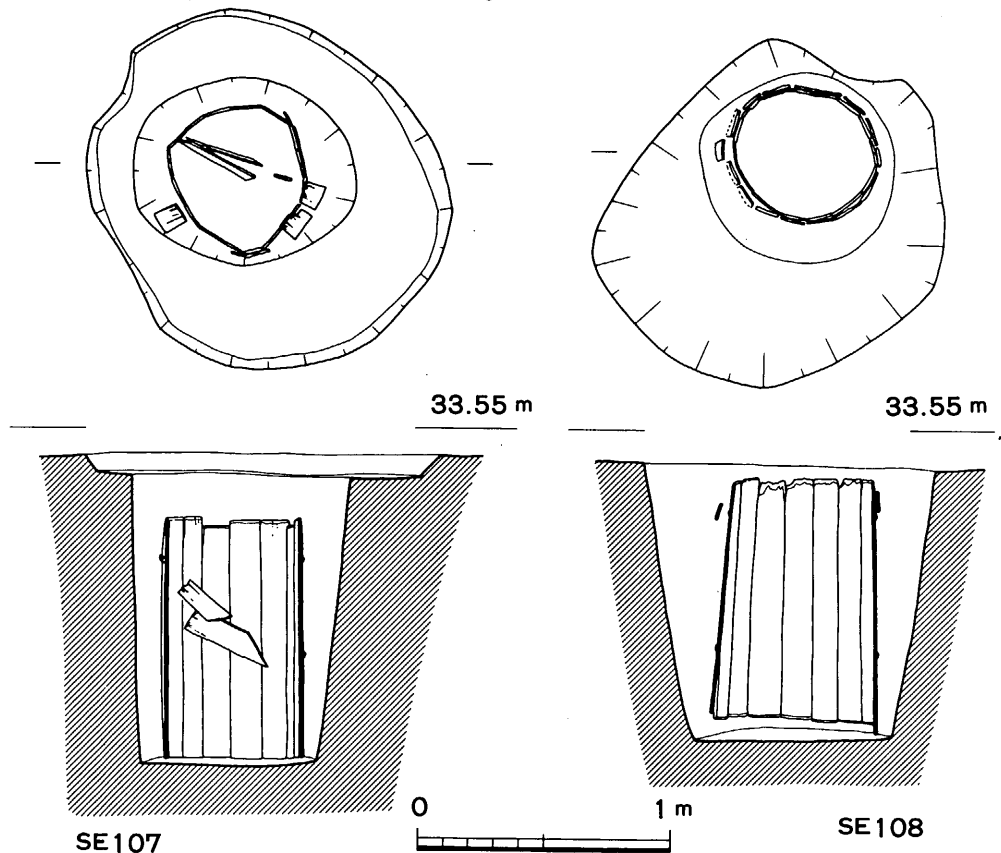
**SE104** (図版9-1)

SE110 井戸に切られた井戸で、平面楕円形を呈し長径1.4m、短径1.13m、深さ0.6mをはかる。桶側井戸の抜かれた抜き跡で、掘り方壁に桶板とタガの圧痕が上下2ヶ所にわたって一部残っており、桶が2段据えられていたことが分る。

井戸内からは土師器Ⅱ-4類、青磁、須恵器甕などが出土している。

**SE105** (7図, 図版10)

SE103 井戸の西側にて検出され、掘り方は長径1.41m、短径1.27mの楕円形を呈し、深さは0.87mをはかる。井戸側は桶を2段に据えたものであるが、上段桶は下端のタガと桶板が3枚残るのみで他は抜かれていた。下段の桶は保存されていて高さ62cm、上端内径53cm、下端内径56cmで、桶板18枚が上半部で3ヶ所、下端部に1ヶ所タガで緊縛されている。井戸内からは土師器Ⅱ-4類、青磁、土鍋などが出土している。



8図 SE107・108井戸実測図

**SE106** (7図, 図版11)

調査区の北端にて検出されるが、掘り方上面にSX105が作られていて、それより古いことがわかる。掘り方は全掘できていないが径1.4mほどの円形をなすものと思われ、深さは1.15mをはかる。井戸側は桶を2段に据えたもので、上段のものは下端部のみしか残存せず、しかも桶枚の数枚は抜かれている。下段の桶は高さ97cm, 上端内径51cm, 下端内径53cmをはかり、16枚の桶板が上端部でタガにより緊縛されている。

井戸内上部には大石が数個投棄されていて、土師器Ⅱ類, 緑釉, 常滑陶器などが出土している。

**SE107** (8図, 図版12)

調査区中央付近にて検出された2段掘りの井戸で、掘り方は長径1.4m, 短径1.32mの不整形円形を呈し、深さは1.23mをはかる。井戸側は桶を2段に据えたもので、上の桶は桶板が一部残存するのみである。下段の桶は高さ95cm, 内径51cmで、18枚の桶板が上中2ヶ所でタガにより緊縛されている。井戸内からは土師器Ⅱ-3類, 青磁, 白磁などが出土している。

**SE108** (8図, 図版13)

SE107井戸の南にて検出されたもので、掘り方は長径1.3m, 短径1.2mの不整形円形を呈し、深さは1.08mをはかる。井戸側は桶を2段に据えたもので、上段の桶は下端部のみ残存している。

下段の桶は、高さ98cm, 上端内径53cm, 下端内径62cmと下端の方がやや広がっている。桶板

3表 井戸一覧表

井戸番号	掘方規模		井戸側組み合わせ			出土遺物	備考
	平面	深さ	上段	中段	下段		
SE101	210×200	124	桶		桶	土師器Ⅱ-1~3類, 須恵器甕, 青磁7・9類, 高麗青磁白磁5類, 陶器3・11類, 瓦, 土鍋, 常滑陶器, 石鍋	2段掘りか
◇ 102	162×160	95	桶		桶	土師器Ⅱ-4類, 須恵器, 青磁1・7・9類, 白磁6類, 陶器1・7・10類, 常滑陶器, 石鍋, 大観通宝	
◇ 103	106×95	84			桶	土師器Ⅱ-1~2類, 須恵器, 青磁7類, 白磁, 瓦, 片口, 瓦器椀, 陶器1・11類, 石鍋, 土鍋	
◇ 104	140×113	60	桶		桶	土師器Ⅱ-3~4類, 青磁7類, 陶器3類, 須恵器甕	抜き跡
◇ 105	141×127	87	桶		桶	土師器Ⅱ-4類, 須恵器, 青磁7類, 白磁5類, 土鍋	
◇ 106	141×—	115	桶		桶	土師器Ⅱ類, 瓦, 土鍋, 常滑陶器, 緑釉	
◇ 107	140×132	123	桶		桶	土師器Ⅱ-3類, 青磁7・8類, 白磁4・6類, 陶器3類, 片口	2段掘り
◇ 108	130×120	108	桶		桶	土師器Ⅱ-4類, 須恵器, 青磁7・9類, 白磁6類, 陶器1・7・11類, 石鍋, 片口	
◇ 109	74×73	61	曲物2段				
◇ 110	143×—	103	桶		曲物	土師器Ⅱ-3類, 須恵器, 青磁7・9類, 常滑陶器, とりべ, 灰釉, 片口, 瓦器椀	
◇ 111	83×82					土師器Ⅱ-3類, 青磁7類, 白磁6類, 陶器1・9類, 片口, 土鍋	抜き跡
◇ 112	115×105	98	方形縦板組	桶	曲物	土師器Ⅱ-3類, 青磁7類, 石鍋, 土鍋, 片口	

(単位cm)

は15枚使われ、上下2ヶ所タガにより緊縛されている。掘り方上部より下駄が1点、井戸内より土師器Ⅱ-4類、須恵器、青磁、白磁、石鍋などが出土している。

#### SE111 (図版14-2)

調査区の最も南側にて検出された井戸であるが、抜き跡である。長径1.82m、短径1.7mの不整円形をなすが、深さは不明である。掘り方内より土師器Ⅱ-3類、須恵器、青磁、片口、土鍋などが出土している。

## 5. その他の遺構

その他の遺構として杭列と不明遺構がある。杭列は4条が検出された。いずれも溝と係りのあるものと考えられるが、溝が検出されないものもある。

**SX101** はほぼ東西方向に延びる杭列であり、東側で杭数は少なく不明瞭であり、SK104の北端付近で途切れている。東側は南北に延びる溝状遺構で切断されている。西側では約30cmの幅で杭は不規則に打ち込まれ、一部分ではあるが、この杭列の南に約30cmの間隔を置いて並行して延びる杭列が一部観察され、この間が溝であるかは確認が困難であった。SE103 井戸より古いものである。

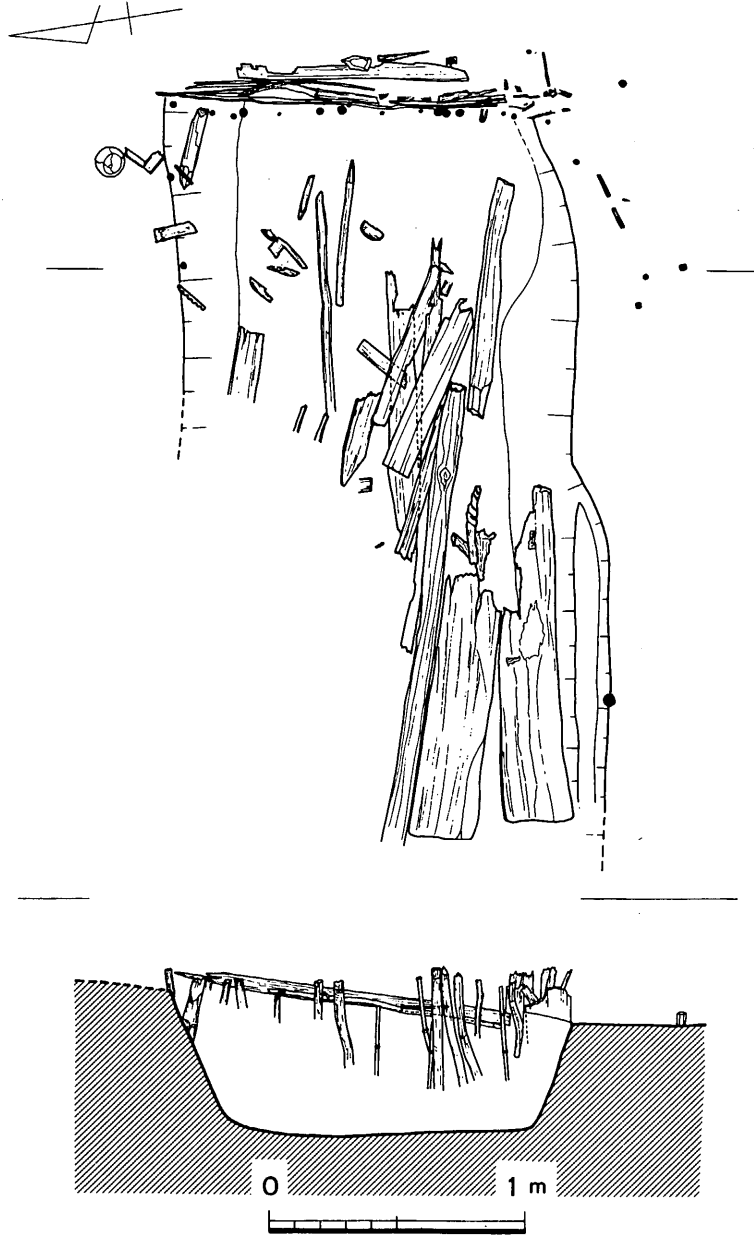
**SX102** は南北方向でやや東に片寄る方向で延びる杭列で、約40cmの幅で多くの杭が不規則に打ち込まれている。この杭列はSE101より古く、杭列の東側は深くなり、SD103の溝肩部に打ち込まれたものと考えられる。

**SX103** と **SX104** はほぼ南北に延びる杭列で、これらが同一の杭列かは確認できない。前者はSD103溝内に打ち込まれ、杭にばらつきがあり、後者は杭の位置にまとまりのあるもので、別個の杭列である可能性が高い。

これらの杭列に使用された杭は自然材を適当な長さに切断し、一方を尖がらせたもので、板材や角材という加工材は使用していない。またこれらの杭列は、出土の状況からして溝肩部の補強として用をなしたものと考えられるが、溝確認が困難であり、断定はできない。

その他の遺構として**SX105**の不明遺構がある(9図、図版5-1)。これはSE106井戸の西側において検出されたもので、重複の状況からしてSE106井戸より新しい遺構である。遺構は溝状に掘られたものの東端部と考えられ、その上部に板、板材加工品、丸太、自然木等が多量に発見された。東端部には木および竹の杭を打ち込み、これに板を横架している。横架された板は上部だけであって、その南端は板を並行して二列に立て、長さ約40cm、幅約15cmの空間を設けている(図版5-2)。さらに横架された板は南に低くなっており、このことからこれがその西に掘られた木材の堆積する塚と関連するものとは速断できず、むしろ形態的には樋状のものであり、SE106井戸と係りをもつ遺構とも考えられる。

木材等と伴出した土師器はⅡ-4類である。



9 図 S X101不明遺構実測図



## 四、遺物

### 1. 須恵器 (10・11図)

前回の報告書では遺物包含層からの出土資料を示したが(註1)、本報でも遺構に伴った明確な資料はない。遺構への流入によるものや、砂層・青色粘土層・砂礫層などの遺物包含層からの出土である。

#### 杯蓋 (1581～1585・1591～1593)

1581は、宝珠状の鈕をもち、天井部をヘラ削りし、天井部内面をヨコナデする。他も同様の削り・ヨコナデを施し、口縁部のシャープなもの(1582)、やや丸味をもつもの(1583)、平坦面なもの(1593)がある。1585は天井部をヨコナデ後、巾0.25cmのハケ目状痕を残し、砂粒をほとんど含まず、焼成は瓦器質に近い。1592・1593の体部内径は、21.1cm・22.4cm・22.4cmを測り、1600に示すような大きい器形の蓋であろう。

#### 杯 (1601)

体部および底部内面をヨコナデし、その後底部内面をナデる。底部はヘラ切り離しのままである。

#### 高台付杯 (1586～1589・1594～1600・1605)

体部が外反しつつ口縁部までほぼ直線的にのびるもの(1587・1589・1596)、口縁部で若干開口するもの(1599・1600)、体部がやや直立しつつ若干内弯気味にのびるもの(1596)がある。また、高台が外方向にふんばって体部との境が明瞭なもの(1595・1596)と、そうでないもの(1587)があるが、前者がほとんどである。1596は完形で、口縁部径17.5cm・高台径9.8cm・器高4.5cmを測り、体部はヨコナデ、底部内面不定方向ナデで仕上げ、底部はヘラ切り離しのままである。1605は体部高6.0cmを測るが、高台がつくものと思われる。

#### 皿 (1602)

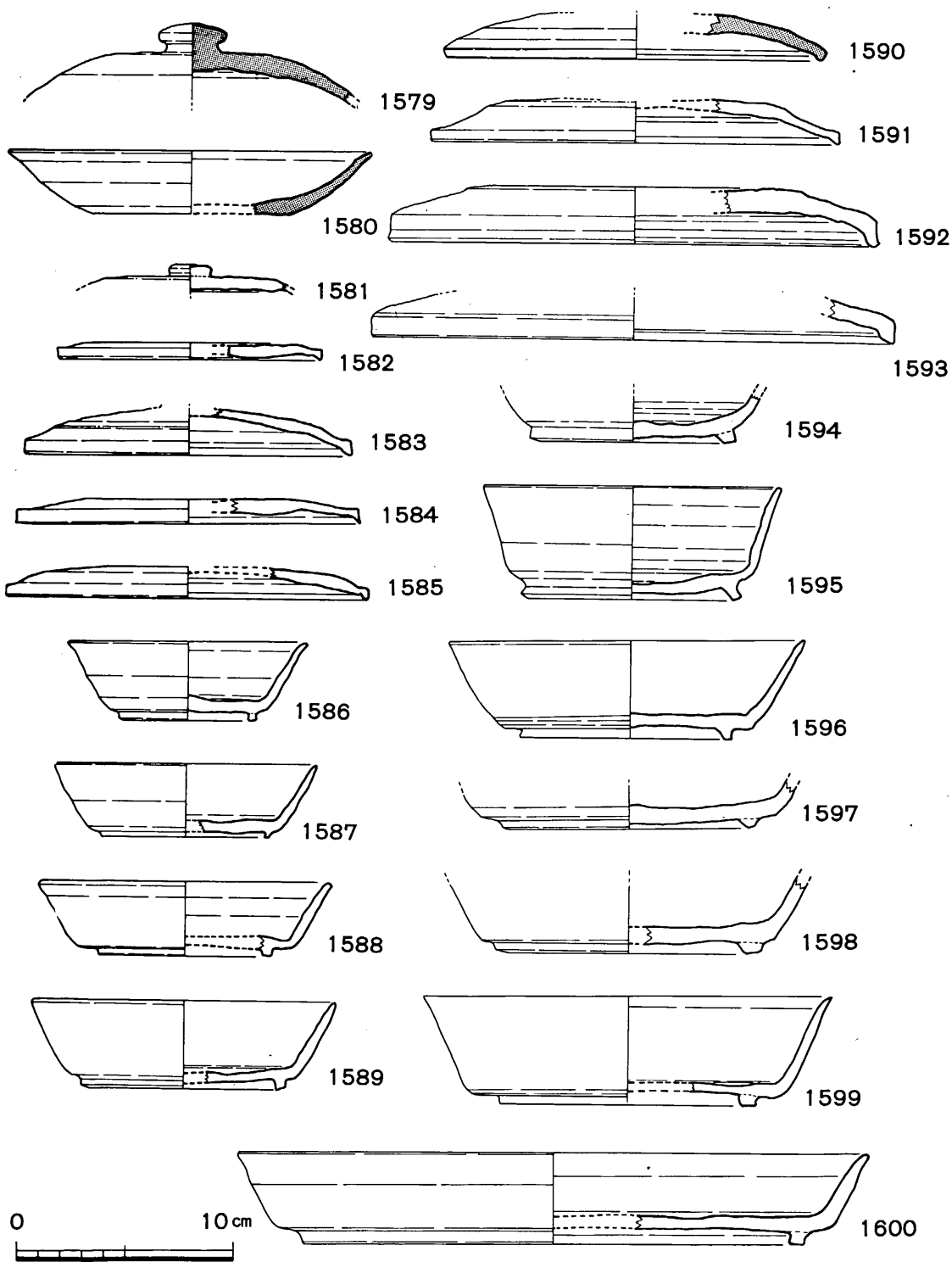
杯と同様の整形技法で、ヒズミが大きく、器高1.0cm～2.7cm・口径19.6cm・底径16.9cmを測る。底部内面に墨が付着する。

#### 鉢 (1606)

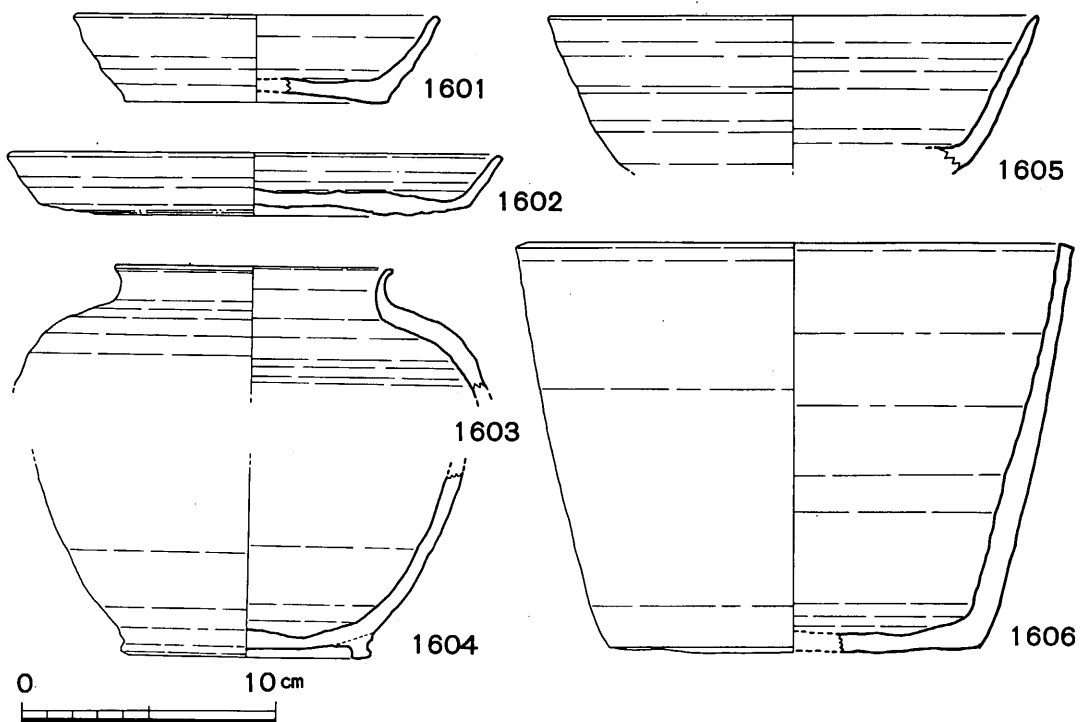
体部をヨコナデで仕上げ、体部の下から2cmと底部は丁寧なヘラ削りを施す。口径22.0cm・底径14.6cm・器高16.1cmを測る。

その他に壺1603があり、1604は頸部を欠くが長頸壺と思われる。

1579・1580・1590は土師器であるが、時期的に後述する「その他の土師器」類とは明確に区別されるのでここに示した。1579・1590は天井部をヘラ削りし、天井部内面から体部をヨコナデ後、丁寧にヘラで研いている。1580は体部が内弯気味に開口し、口縁部内面で稜をなして



10图 須惠器・土師器実測図



11図 須恵器 実測図

反転する。ヨコナデ後、内面はヘラ研ぎを施し、底部は平坦にヘラ切りする。口径17.0cm・底径9.2cm・器高2.9cmを測り、砂粒をほとんど含まない胎土で、淡赤茶色に焼成する。

以上が遺物包含層出土例であるが、土師器1579・1580にも須恵器の影響が認められ、奈良時代後半（8世紀後半）に位置づけられている太宰府史跡第43次出土のS E1081井戸・S K1084土坑の一括遺物（註2）に比較すれば、明らかに古い一群に属しよう。

註1. 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集1977年 — 五、遺物 1. 須恵器 — の項で脱行等が多いので以下のとおり正誤表を示す。

頁	行	誤	正
28	3	2類 (21図953~970)	<b>3類</b>
	6	3類 (22図971~981)	<b>3'類</b>
30	2	1類 (23図983~986)	<b>2類</b>
	4	2類 (23図987~992)	<b>3類</b>
	5	3類 (24図993~1003)	<b>3'類</b>
31	2	1類 (1004・1005)	<b>2類</b>

31	5	2類 (1006)	3類
	6	3類 (1007・1008)	3類
	14	3類 (1014~1017)	3類
32	7	に属するものであろう。	であるが、Ⅱ式に属するもので、6世紀前半でも古い所産である。
	7 ↓ 10	杯蓋および……Ⅲ式に属するもので、6世紀後半でも古い所産である。	2類 杯蓋および……Ⅲ式に属するもので、6世紀半ばの所産である。
	11	2類 杯身はタタキ……	3類 杯身はタタキ……
		区別は可能で3類に	区別は可能で3類に……
	16	3類	3類

註2. 『大宰府史跡 — 昭和51年度発掘調査概報』昭和52年 九州歴史資料館

## 2. 下層土師器・Ⅰ類 (12図)

下層から出土したヘラ切り離し底 (以下ヘラ切り底) の土師器を総称してⅠ類とした。Ⅰ類はR20~21区付近の5・6層に顕著にみられる。

### 5層 (1607~1611, 4表)

b. 小皿 (1607・1608) 口径9.7~10.0cm, 底径7.7~8.0cm, 器高1.2~1.7cmで, 器面には回転によるナデが, 内底には指頭によるナデが施され, 底面にヘラ切り痕と板目がついている。橙灰色ないし灰黄色を呈し, 胎土に少量の砂粒を含む。

m. 丸底杯 (1609~1611) 口径14.9~15.2cm, 器高2.9~3.1cmで, 器面に横ナデが施され, 内面にはヘラナデが行なわれ, なめらかである。体部下半に指で押さえた痕があり, 底部は丸味をもち, 底面にヘラ切り痕と板目がついている。灰黄色ないし褐灰色を呈し, 胎土は少量砂粒を含む。

### 6層 (1612~1621, 4表)

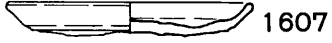
糸切り底の土師器が少量混入している。1612は小皿で, 口径9.4cm, 器高0.95cmでⅡ-1類の小皿に似ている。1613は杯で口径11.9cm, 器高2.45cmで, Ⅱ-4類の杯と思われる。

b. 小皿 (1614) 口径9.2cm, 底径6.7cm, 器高1.4cmで, 底面にヘラ切り痕と板目がついている。

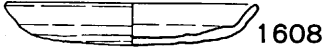
m. 丸底杯 (1616~1620) 口径14.7~16.4cm, 器高3.3~(4.2)cmで, 器面に横ナデを施した後, 内面にヘラナデが行なわれている。底部は丸味をもち, ヘラ切り痕と板目が残っている。ヘラ切り部の周縁に指圧痕が残っている。灰白色ないし灰褐色を呈し, 胎土は精製され, 少量砂粒を含む程度である。

そのほか1615のような蓋がある。口径13.1cmで内面の口縁端に凹線が入れられ, 器面には横

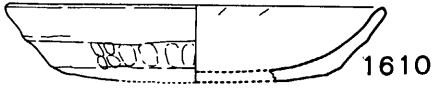
5層



1607



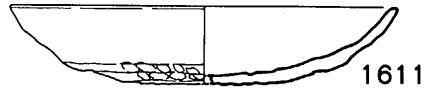
1608



1610

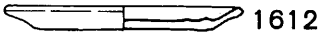


1609

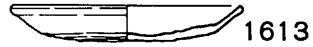


1611

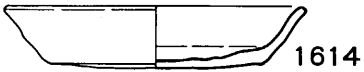
6層



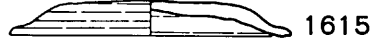
1612



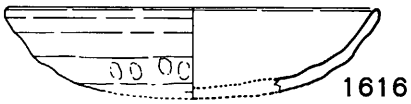
1613



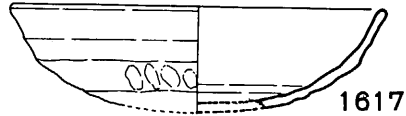
1614



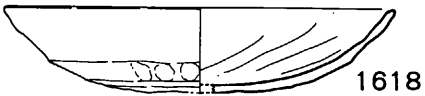
1615



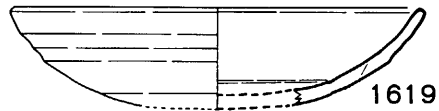
1616



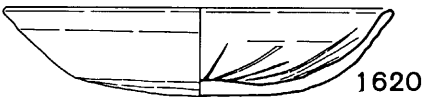
1617



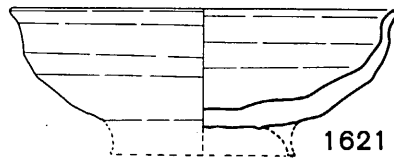
1618



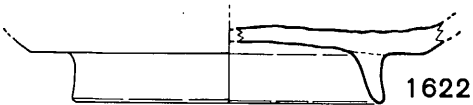
1619



1620



1621



1622



12図 土師器実測図1 (下層出土)

5 層				6 層				丸 底 杯			
小 皿				小 皿				No	口径	底径	器高
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	1	14.7		(3.6)
1	9.7	7.7	1.2	1	9.4	6.6	0.95	2	14.8		(4.2)
2	(10.0)	8.0	1.7	2	(9.2)	6.7	1.4	3	15.3		3.3
丸 底 杯				杯				4	(16.4)		(4.0)
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	5	15.35		3.45
1	14.9		2.9	1	11.9	7.9	2.45	高 台 付 椀			
2	14.9		3.1	蓋				No	口径	高台底	器高
3	15.2		3.1	No	口径		器高	1	15.2		
				1	11.1		1.35	高 台 付 杯			
								No	口径	高台底	器高
								1		12.3	

4表 下層出土（5・6層）土師器計測表。

ナデが、天井部にヘラ切り痕と板目が認められる。灰白色を程し、胎土に砂粒を少量含む。1621は高台付椀で、口径15.2cmで口径に対してやや浅く淡黄色を呈し、胎土に砂粒を含まない。1622はⅠ-4類からⅡ-1類にかけてみられる高台付杯の底部と思われるもので、灰黄色を呈し、胎土に砂粒を含む。

以上のように5・6層の土師器は、混入と考えられる糸切り底の土師器を除くと、ヘラ切り底の小皿、丸底杯、それに高台付椀であり、小皿は口径9.2~10.0cmでⅠ-3B類ないしⅠ-3C類にはいるものと思われる。

### 3. 上層土師器・Ⅱ類（13~14図）

上層から出土した糸切り離し底（以下ヘラ切り底）の土師器を総称してⅡ類とした。

3・4層からも多量の土師器が出土しているが、特に1時期に限定できるものはなく、各時期のものが混在してみられた。ここでは井戸や土坑、溝内から出土したものを説明したい。

まず井戸から出土した土師器（13図）であるが、まとまったものはない。

SE101 井戸（1623~1629）

b. 小皿（1623~1626）口径8.9~9.25cmであり、Ⅰ-4類からⅡ-2類に相当するものである。

c. 杯（1627・1628）1627の口径は12.7cmでⅡ-3類に、1628の口径は15.2cmでⅡ-1類に属するものであろう。

1629は高台付杯の大形のもので、口径は20.0cmである。Ⅰ-4類かⅡ-1類に伴うもので

あろう。

このことからSE101 井戸出土土器はⅡ-1類を主体にⅡ-3類までを含んでいる。

SE102 井戸 (1630・1631)

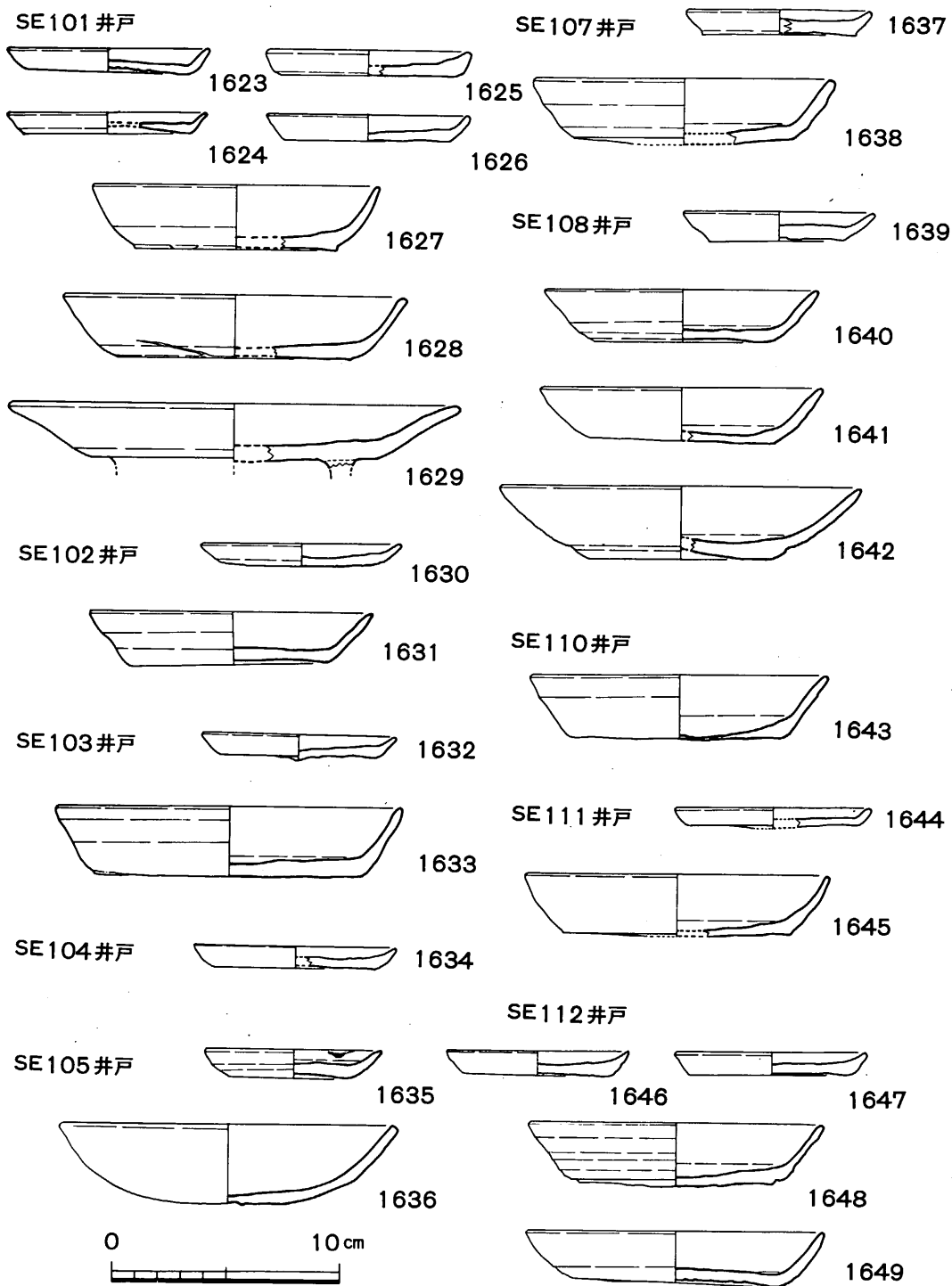
- b. 小皿 (1631) 掘り方内からの出土でへら切り底をもち口径8.9cmである。
- c. 杯 (1631) 井戸内から出土し、口径11.8cmである。Ⅱ-4類に属するものであろう。

SE103 井戸 (1632・1633)

- b. 小皿 (1632) 糸切り底をもち口径8.6cmである。

SE101井戸				杯				杯			
小 皿				No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
No	口径	底径	器高	1	(15.2)	11.8	3.15	1	12.1	7.5	2.3
1	8.9	7.1	1.15	SE104井戸				2	12.5	8.2	2.5
2	(8.95)	(7.4)	0.95	小 皿				3	15.9	8.0	3.3
3	(9.05)	(7.8)	1.1	No	口径	底径	器高	SE110井戸			
4	9.25	7.6	1.15	1	(9.0)	(7.1)	0.95	杯			
杯				SE105井戸				No	口径	底径	器高
No	口径	底径	器高	小 皿				1	13.1	9.5	2.9
1	(12.7)	(8.9)	2.8	No	口径	底径	器高	SE111井戸			
2	(15.2)	(10.4)	2.8	1	7.9	5.3	1.35	小 皿			
高台付杯				丸底杯				No	口径	底径	器高
No	口径			No	口径		器高	1	(8.6)	(7.4)	0.85
1	20.0			1	14.95		3.55	杯			
SE102井戸				SE107井戸				No	口径	底径	器高
小 皿				小 皿				1	(13.4)	(10.0)	2.7
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	SE112井戸			
1	8.9	7.5	1.05	1	(8.2)	(6.8)	1.1	小 皿			
杯				杯				No	口径	底径	器高
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	1	8.1	6.6	1.15
1	11.8	8.4	2.6	1	(13.2)	(9.6)	2.9	2	8.4	7.05	1.05
SE103井戸				SE108井戸				杯			
小 皿				小 皿				No	口径	底径	器高
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	1	(13.0)	(6.6)	2.8
1	(8.6)	(6.8)	1.1	1	8.4	5.8	1.3	2	13.55	9.4	2.5

5表 各井戸出土土器計測表



13图 土師器実測図2 (井戸出土)



c. 杯 (1633) 糸切り底で口径15.2cmである。Ⅱ-1類に属するものであるが、小皿はⅡ-1類ないしそれよりやや時期の下るものかもしれない。

SE104 井戸 (1634)

b. 小皿 (1634) 糸切り底で口径9.0cmで、他の杯の径は11.9~11.05cmでありⅡ-3~4類と考えられる。

SE105 井戸 (1635・1636)

b. 小皿 (1635) 糸切り底で口径7.9cmである。Ⅱ-4類あたりのものであろう。

m. 丸底杯 (1636) 口径1495cmでヘラ切り底に板目がついている。下層からの混入であろうか。

SE107 井戸 (1637・1638)

b. 小皿 (1637) 糸切り底で口径は8.2cmである。器形からもⅡ-3類の小皿である。

c. 杯 (1638) 糸切り底で口径13.2cmである。小皿・杯ともに掘り方出土で、Ⅱ-3類のものである。

SE108 井戸 (1639~1642)

b. 小皿 (1639) 糸切り底で口径8.4cmである。

c. 杯 (1640・1641) とともに糸切り底で、口径は12.1~12.5cm、底径7.5~8.2cm、器高2.3~2.5cmである。

そのほか1642のような杯があるが、胎土は精製され、焼成も良好である。器面がやや荒れているため調整は不明である。復元口径15.9cmで、奈良時代の土師器杯と思われる。この1642を除くと他はⅡ-4類である。すべて掘り方出土である。

SE110 井戸 (1643)

c. 杯 (1643) 糸切り底で口径13.1cmである。Ⅱ-3類の杯と思われる。

SE111 井戸 (1644・1645)

b. 小皿 (1644) 糸切り底で口径8.6cmである。

c. 杯 (1645) 糸切り底で口径13.4cmであり、Ⅱ-3類と思われる。

SE112 井戸 (1646~1649)

b. 小皿 (1646・1647) 糸切り底で口径8.1~8.4cmである。器形からもⅡ-3類である。

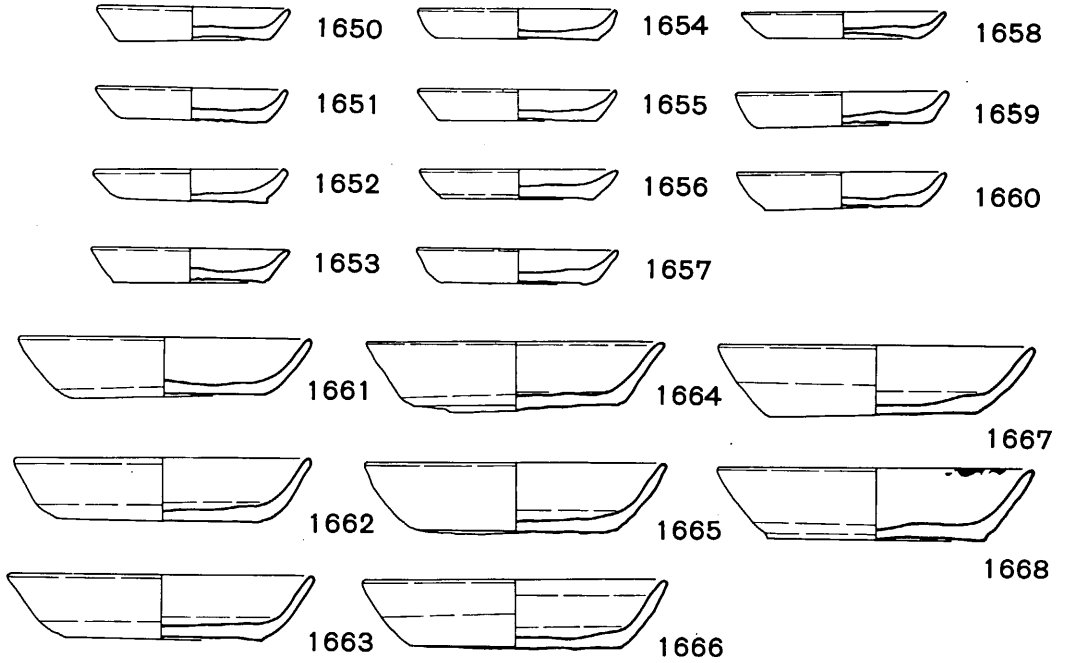
c. 杯 (1648・1649) 糸切り底で口径13.0~13.55cmであり、Ⅱ-3類と思われる。

次にN19区に「木器溜り」とでも呼ぶべき、木片、木製品が多く出土した不明遺構があり、そこからも土師器が一括して出土している。

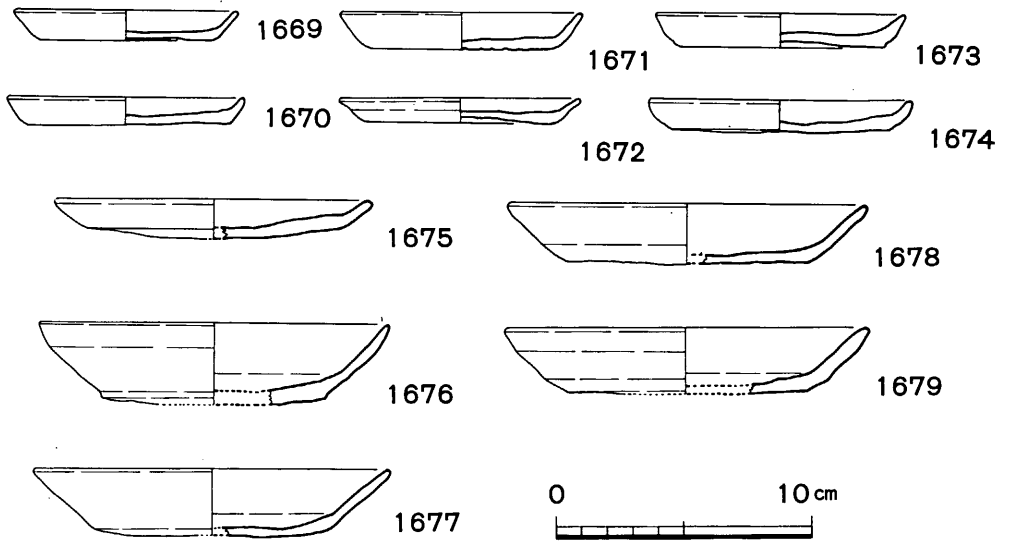
SX105 不明遺構 (14区1650~1668, 6・7表)

b. 小皿 (Ⅱ-4-b) (1650~1660) 口径7.6~8.3cm、底径5.95~6.55cm、器高1.1~1.5cmで、器面に横ナデが、内底にナデが施してあり、底面に糸切り痕と板目が残っている。灰黄色ないし灰橙色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。

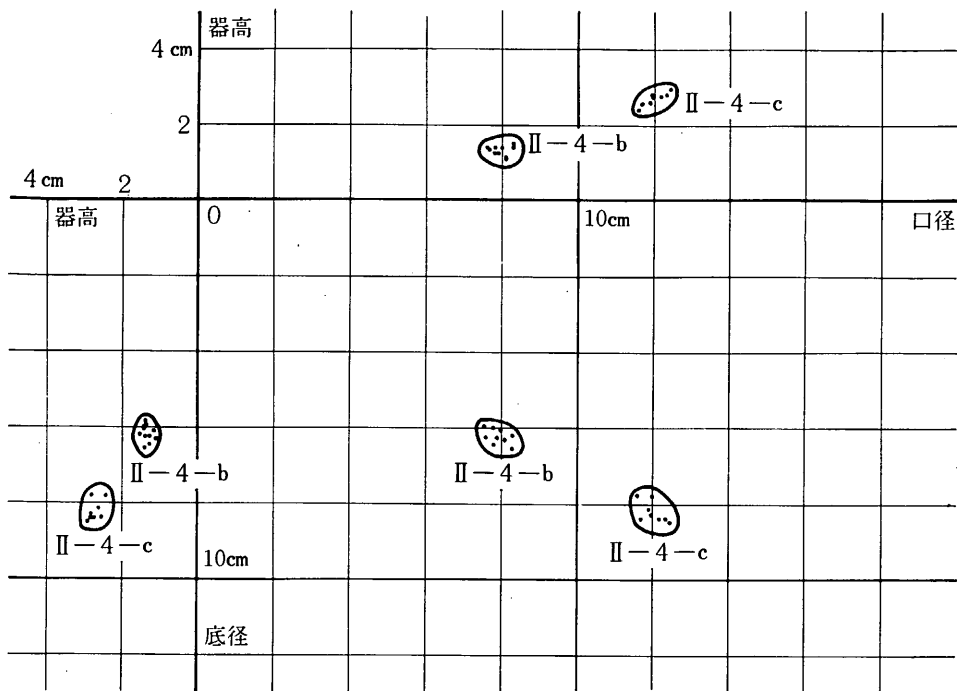
SX105不明遺構



SD103溝



14図 土師器実測図 (S X105不明遺構, S D103溝出土)



6表 S X 105不明遺構出土土師器の法量

S X 105不明遺構				杯				2	9.3	7.9	1.1
小 皿				No	口径	底径	器高	3	(9.5)	(7.0)	1.45
No	口径	底径	器高	1	11.6	7.8	2.4	4	9.55	7.25	1.05
1	7.6	6.25	1.4	2	11.7	8.4	2.55	5	(9.8)	7.9	1.3
2	7.65	5.95	1.35	3	11.9	8.15	2.6	6	10.4	8.6	1.3
3	(7.7)	5.85	1.35	4	11.95	8.3	2.8	杯			
4	7.8	6.0	1.4	5	12.0	7.8	2.8	No	口径	底径	器高
5	7.8	6.45	1.25	6	12.2	8.4	2.75	1	(12.5)	(9.8)	1.6
6	7.9	6.25	1.25	7	12.35	8.4	2.8	2	(13.8)	(8.8)	3.2
7	(7.9)	6.1	1.15	8	12.45	8.5	2.9	3	(14.0)	9.5	2.7
8	8.0	6.05	1.4	S D 103溝				4	(14.2)	9.5	2.35
9	8.1	6.3	1.1	小 皿				5	(14.4)	(9.5)	2.35
10	8.3	6.55	1.4	No	口径	底径	器高				
11	8.3	6.2	1.5	1	(8.8)	6.7	1.2				

7表 S X 105不明遺構・S D 103溝出土土師器計測表

c. 杯 (Ⅱ-4-b) (1661~1668) 口径11.6~12.45cm, 底径7.8~8.5cm, 器高2.4~2.9cm  
 で、器面に横ナデが、内底にナデが施してあり、底面に糸切り痕と板目が残っている。灰黄な  
 いし灰黄褐色を呈し、胎土に少量砂粒を含む。

これらの土師器はⅡ-4類の典型的なものである。

溝から出土した土師器は少なく、S K103 溝からのものがややまとまっている。

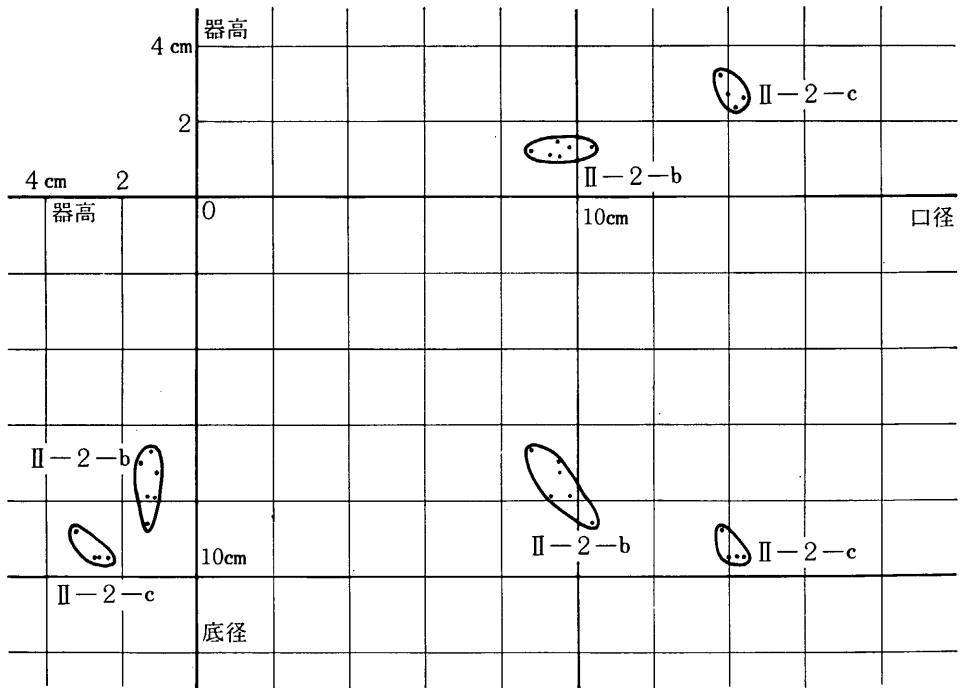
S D103 溝 (14図1669~1679, 7・8表)

b. 小皿 (Ⅱ-2-b) (1669~1674) 口径8.8~10.4cm, 底径6.7~8.6cm, 器高1.05~1.45  
 cm, 器面に横ナデが、内底にナデが施してあり、底面に糸切り痕と板目が残っている。灰色な  
 いし灰褐色を呈し、胎土に少量砂粒を含む。

このほかに1675のような皿形のものがあり、口径12.5cmで、底面に糸切り痕と板目が残って  
 いる。

c. 杯 (Ⅱ-2-c) (1676~1679) 口径13.8~14.4cm, 底径8.8~9.5cm, 器高2.35~3.2cm  
 で、器面に横ナデが、内底にナデが施してあり、底面に糸切り痕と板目が残っている。灰黄色  
 を呈し胎土に砂粒を少量含んでいる。

このようにS D103 溝出土土師器はⅡ-2類に分類できる。



8表 S D103溝出土土師器の法量

## 4. 須恵質および瓦質土器 (15図)

### 鍋 (15図1872)

K U20区 5層出土。体部はヨコナデを施し、底部近くの内面はへら削りで仕上げる。外面に煤の付着がある。器周残1/6からの復原口径22.5cmを測る。砂粒を若干含むが精製されており、焼成は良く、青灰色を呈し、瓦質。

### 甕 (15図1864)

K P41区出土。肩部外面にシャープなタタキ目痕を残し、他はヨコナデで仕上げる。器周残1/6からの復原口径21.3cmを測る。砂粒をほとんど含まず、焼成は良く、青青色を呈し、瓦質。

### 片口 (15図1680)

K S26区出土。体部内面は密にハケ目で仕上げるが、外面は底部から口縁部の向って縦方向ハケ目を間隔をおいて施す。片口部を欠くが、器周残1/4からの復原口径18.2cm・器高6.3cmを測り、やや小形である。砂粒を若干含み、焼成は良く、灰色～青灰色を呈し、瓦質。

### 火舎 (15図1685)

K N21区出土。体部内面のヨコナデは雑であるが、口縁部から体部外面にかけてのそれは丁寧に施す。体部壁の厚さに比較して底部壁は薄手で、口縁部近くに3連の菊花文を認める。破片であるため脚の数は不明である。復原口径40.5cm・器高15.6cmを測る。砂粒をほとんど含まず、焼成は普通で、灰色を呈し、瓦質。

## 5. その他の土師器 (15図)

### 壺 (15図1681)

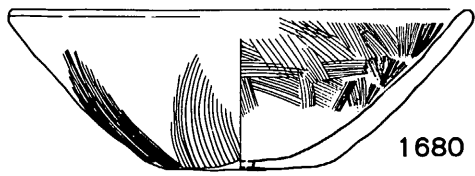
K H27区 杭列近くから出土。底部の内面はナデ・外面はへら削りを施し、胴部内面はヨコナデを施すが、胎土の接合面を明瞭に残し、外面は横方向にナデる。口縁部はヨコナデにより跳ね上げる。小さい砂粒を含み、焼成は良く、淡灰褐色を呈し、土師質。

### 鍋 (15図1683)

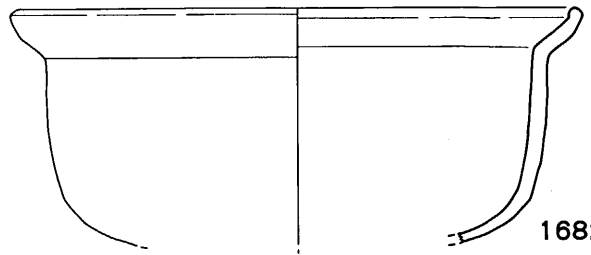
K S39区 4層出土。体部内面は斜方向にナデ、口縁部から鏝部にかけては丁寧にヨコナデを施し、シャープな口唇部は平坦に仕上げる。鏝部以下に煤の付着がある。器周残1/6からの復原口径22.4cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は良く、褐色を呈し、土師質。

## 6. 瓦器・内黒土器 (16図)

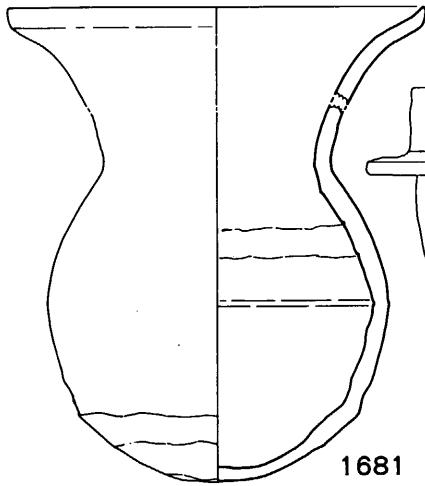
瓦器の量は全体として、量は少ない。1686はやや深めで、底部近くはへら切りかへら削りが施され、高台は先端が尖り、接着部は幅広い。また高台内に糸切痕らしきものが残っている。内面にへらナデ状のものが認められるが、内外面とも研磨らしきものはほとんどみられない。



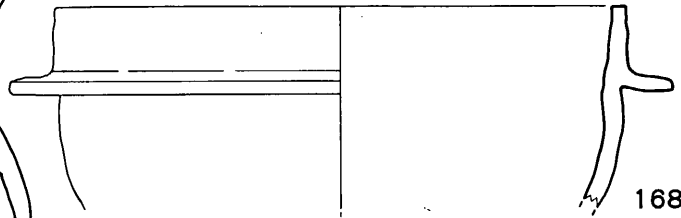
1680



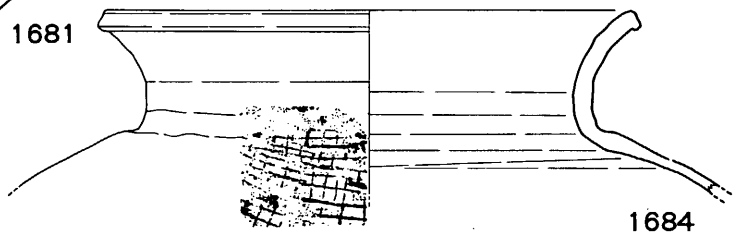
1682



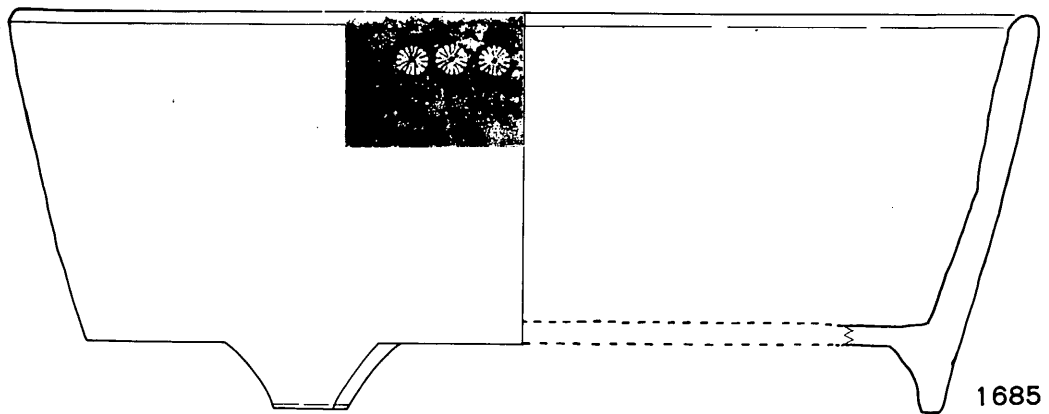
1681



1683

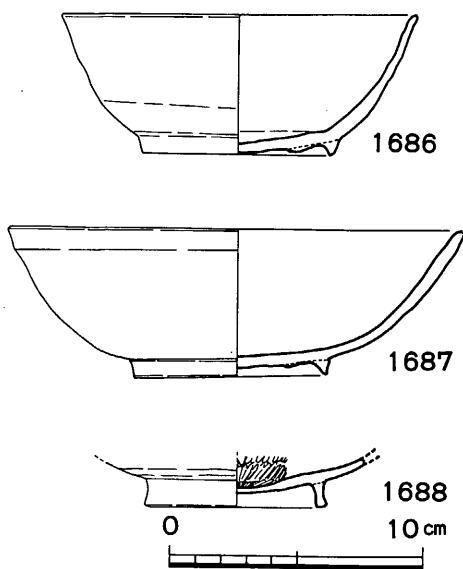


1684



1685

15図 瓦質土器・土師器実測図



16図 瓦器・内黒土器実測図

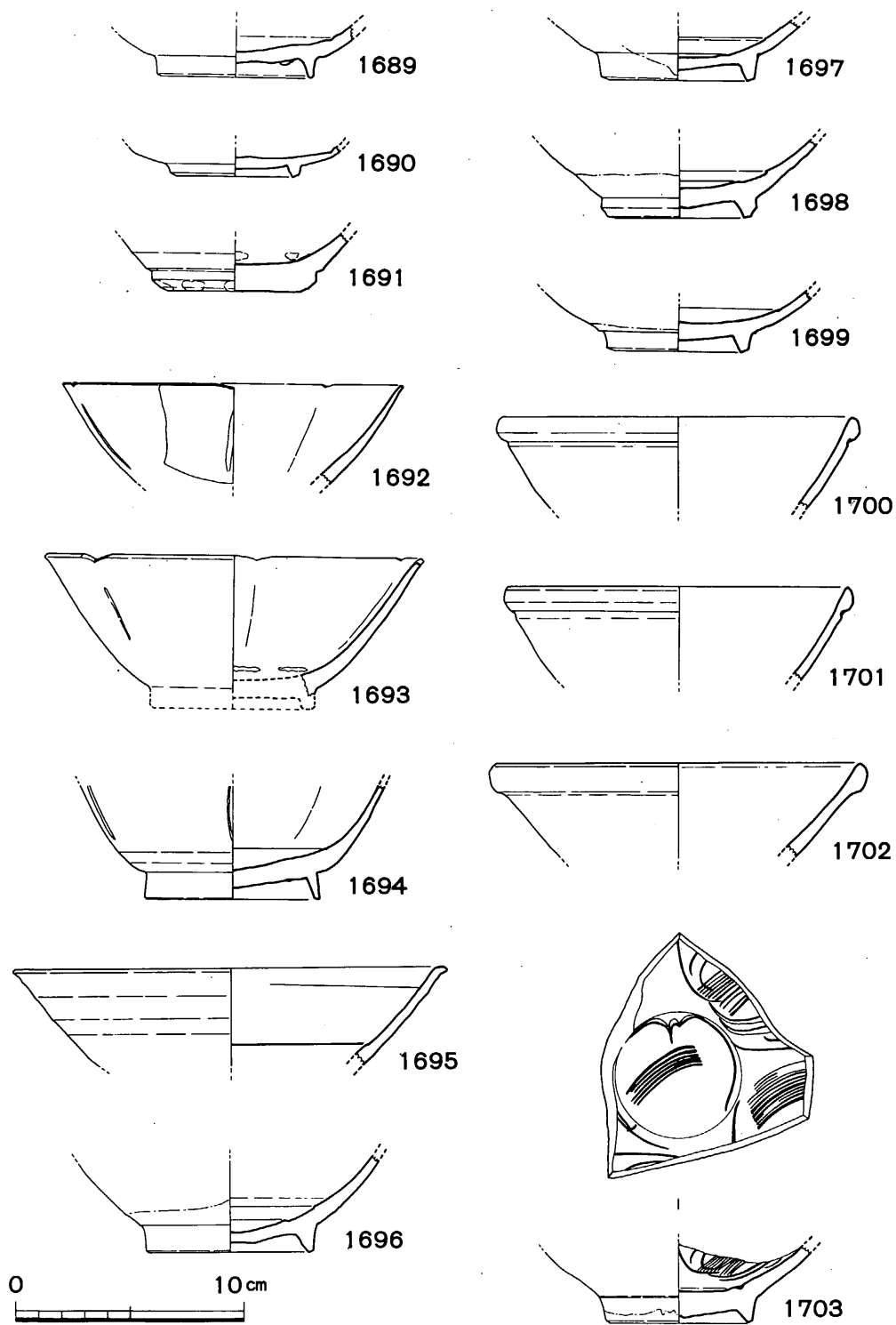
胎土は精製され、器面は黒色で一部明灰色である。瓦器碗の中でも終末に近い頃のものであろう。4層出土。1687は体部下半に指圧痕がみられ、高台の先端は尖り、接着部は幅広く、前者に似ている。口縁内外にヨコナデがみられ、内外面とも研磨されている。胎土は精製され、灰色ないし灰白色を呈している。4層出土。1688は内黒土器碗で、内面は黒色で放射状に細かな研磨が施され、高台は薄手で高く、その高台内に糸切り痕がみられ、従来の内黒土器碗と異なるため、あるいは他地方からの将来品かもしれない。器壁は薄く、焼成は堅微で、外面は淡黄橙色ないし灰黒色である。出土層位不明。

## 7. 磁器 (17~23図)

第1次調査においても磁器類は多量に出土している。ただし完形品や大形破片の量はそれほど多くない。なお分類は従来通りであるが、それらの分類にあてはまらないものも出現している。

**1類** (17図1689~1694) いわゆる越州窯系の青磁で、1689は高台内の4箇所を重ね土の跡が残っている。胎土は灰褐色で、釉は緑味褐色である。4層出土。1690は見込みに底径と同大に7箇所を重ね土の跡が残る、床付部は重ね土跡を擦りとったようになめらかで、釉は無い。他は全面に灰緑色の釉がかかり、胎土は灰色である。6層出土。1691は見込みと床付部に6箇所の重ね土の跡が残っているもので、底面に釉はかけられていない。胎土は明灰色で、釉は緑味灰色で、SE103井戸周辺3層出土。1692は輪花の刻みの下を縦長にくぼませている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。出土層位不明。1693は5箇所の刻みのある輪花碗で、刻みの下を縦長にくぼませている。見込みには重ね土の跡が残っている。胎土は灰色で、釉は灰緑色を呈するが、光沢はない。出土層位不明。1694は体部に5箇所の縦長のくぼみがあり、高台内に重ね土の跡が残っている。胎土は明灰色で、透明に近い明緑色の釉がかけられている。3層出土。

**4類** (17図1695~1698) 白磁で、見込みに環状に釉をかきとったあとがあるもので、1695は口縁端がやや外へ張り出し、口唇部が平坦である。内面上部と見込みに沈線がめぐり。胎土は明灰色で、釉は黄味明灰色である。SE101井戸内出土。1696は見込みに沈線がめぐり、その中に環状の釉はかきとりがみられる。胎土は灰白色で、釉は青味白色である。4層出土。1697は前



17圖 磁器実測図 1 (1~5類)



者とほぼ同じで、胎土、釉ともに白色である。4層出土。1698は、釉かきとり部分に薄い重ね土が塗られ、床付部にもついている。高台部はやや厚い。胎土は灰白色を、釉は緑味灰白色を呈している。4層出土。

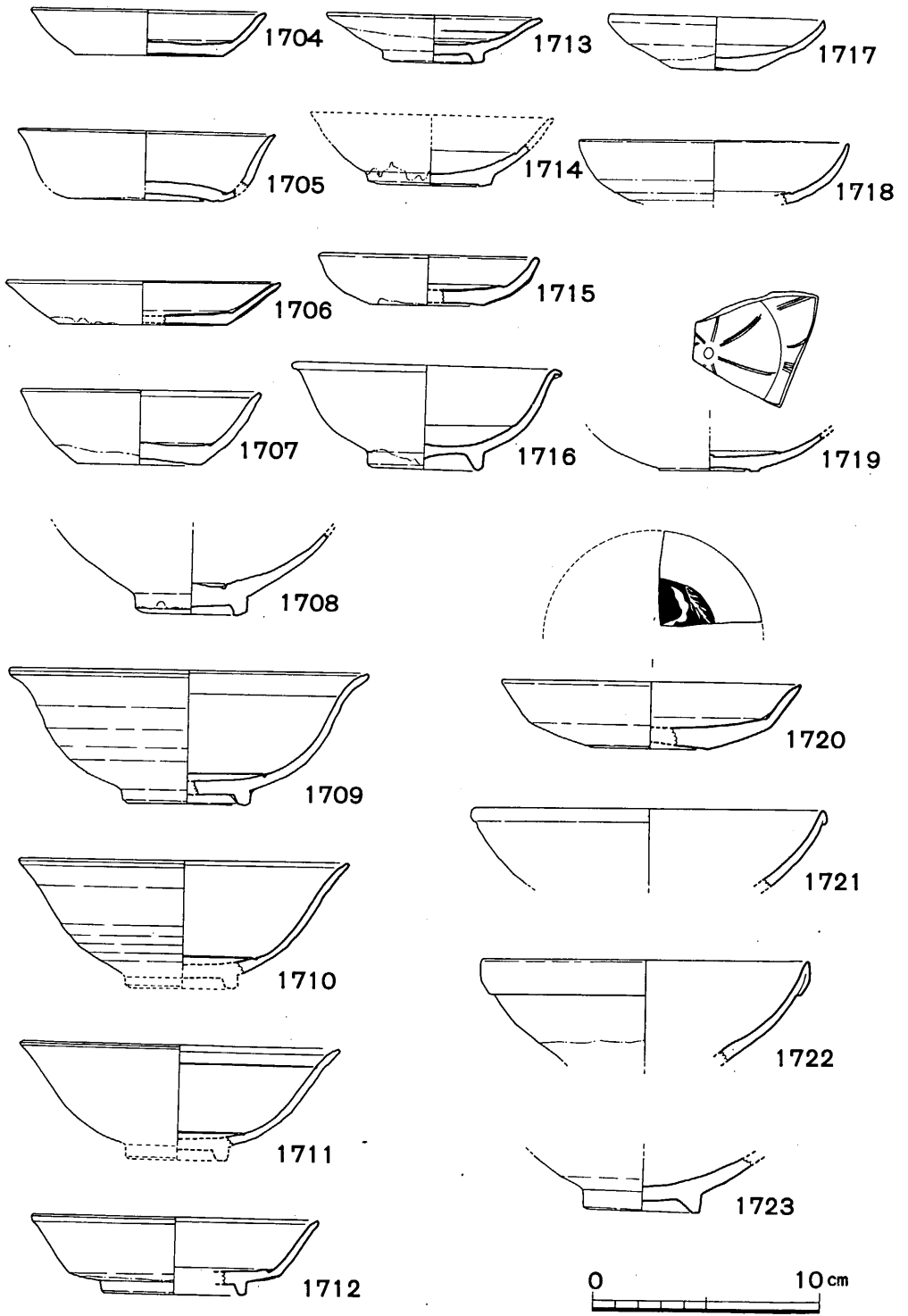
1699は見込みに沈線がめぐるので、釉のかきとりはみられない。高台部は1696・1697とほぼ同じである。4層出土。

**5類** (17図1700~1702) 口縁が玉縁状につくられた白磁である。1700の胎土は白色で、釉は黄白色である。出土層位不明。

1703は内面にヘラと櫛歯による文様が描かれた白磁で見込みの部分は一段くぼんだようにつくられている。内外面に化粧土がかけられ、高台およびその内面を除いて灰黄色の釉がかけられている。胎土は黄味灰白色である。4層出土。

**6類** (18図1704~1712) 口縁先端部分の釉がかきとられた、いわゆる口禿の白磁である。1704~1707は皿ないし杯形のもので、1704の胎土は白色で、釉は明灰色で、底部にも薄くかけられている。3層出土。1705は底面には釉はかけられていない。径5.4cm、幅2.5mmの胎土と同じ焼成台の跡が残っている。胎土は灰白色で、釉は灰色である。出土層位不明。1706は底部に薄く釉があり、胎土は白色で、釉は青味白色である。S E 101 井戸内出土。1707は底面に釉はかからず、径5cmの胎土と同じ焼成台の跡が残り、口唇部の釉かきとり部分にも同様な跡がみられる。胎土は白色で、明灰色の釉がかけられている。4層上面出土。1708~1711は椀で、1708は底面に釉はなく、褐色を呈している。見込みは小さく径3.0cmである。胎土は白色で、釉は青味灰白色である。4層出土。1709は底面にも釉はかけられ、沈線をめぐらされた見込みは径6.8cmと大きい。胎土は白色で、釉は青味白色である。出土層位不明。1710は見込みの径は6.4cmで、胎土は白色を、釉は灰白色を呈している。4層出土。1711の見込みは径5.8cmで胎土は白色を、釉は青味白色を呈している。3層出土。1712は高台のついた皿形のもので、器形として珍しい。高台部に釉はかからず、胎土は白色で、釉は緑味白色である。3層出土。

その他の白磁として1713は内面に沈線と、見込みに環状の釉のかきとりがあるもので、底部に釉はない。胎土は白色で、釉は緑味白色である。4層出土。1714は見込みに沈線がめぐり、底部は5類白磁に似て、高台部は低い。胎土は灰白色で、釉は明黄灰色である。出土層位不明。1715は底面の釉がかきとられ、径3.8cmの焼成台の跡が残っている。胎土は白色で、釉は薄青白色であり、青白磁としてよいかもしれない。4層出土。1716は口縁が折り曲げられて、丸味を帯び、見込みに沈線がめぐり、胎土は白色で、釉は明緑白色であり、青白磁の類かもしれない。2~3層出土。1717は口縁が薄くてとがり内外面に化粧土がかけられているが、底面はかきとられ、釉は底部にはない。胎土は灰白色で、釉は黄味灰白色で薄い。4層出土。1718は口縁部が薄くとがり、見込みに段がついている。胎土は白色で、釉は青味白色である。第2次調査で出土したものであるが、1717との関連で、ここに図示した。1719は底面の釉がかきとられて、



18図 磁器実測図 2 (6類・その他の白磁)

小さな突起があり、3本組の櫛歯状のもので、文様が描かれている。胎土は灰白色で、釉は黄白色であり細かな貫入がみられる。S E102 井戸掘方出土。1720はb類としたもので、見込みに文様を浮き立たせた印文がある。底面の釉はかきとられ、胎土は灰色で、釉は緑灰色である。S E108 井戸周辺出土。

1721～1723は口縁を折り曲げて小さな玉縁状にするもので、5類とは形態、底部ともに異なる。底部に釉はない。1717～1719のような小皿が伴うものと思われる。1721の胎土は灰白色で、釉は青味灰白色であり、細かな貫入がみられる。出土層位不明。1722は口縁の折り曲げ部の幅が広く、胎土は灰白色で、釉は青味灰白色で薄くかかっている。出土層位不明。1723は底部で外面に釉はない。胎土は明灰色で内面に黄灰色の釉が薄くかかっている。4層出土。

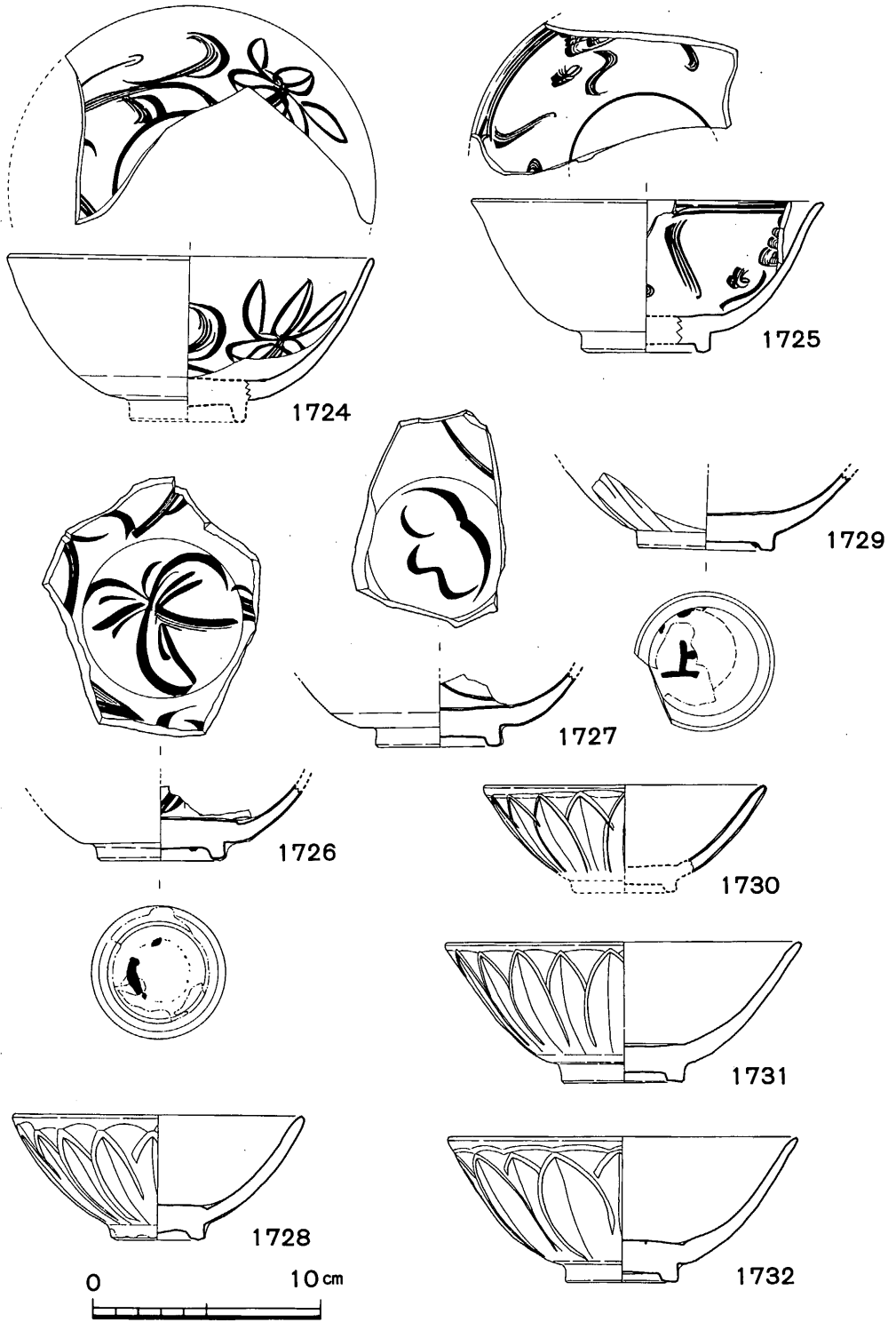
**7類** (19・20図1724～1743) 低い高台を有し、高台内は平坦で、胴部はやや丸味をおびた青磁で、文様により数種に分けられるが、底部でみるかぎり、あまり差はない。

**A** (19図1725) 外側は無文で、内面に縦線で区切られた空間に飛雲状文が描かれたもので、1725の胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。4層出土。

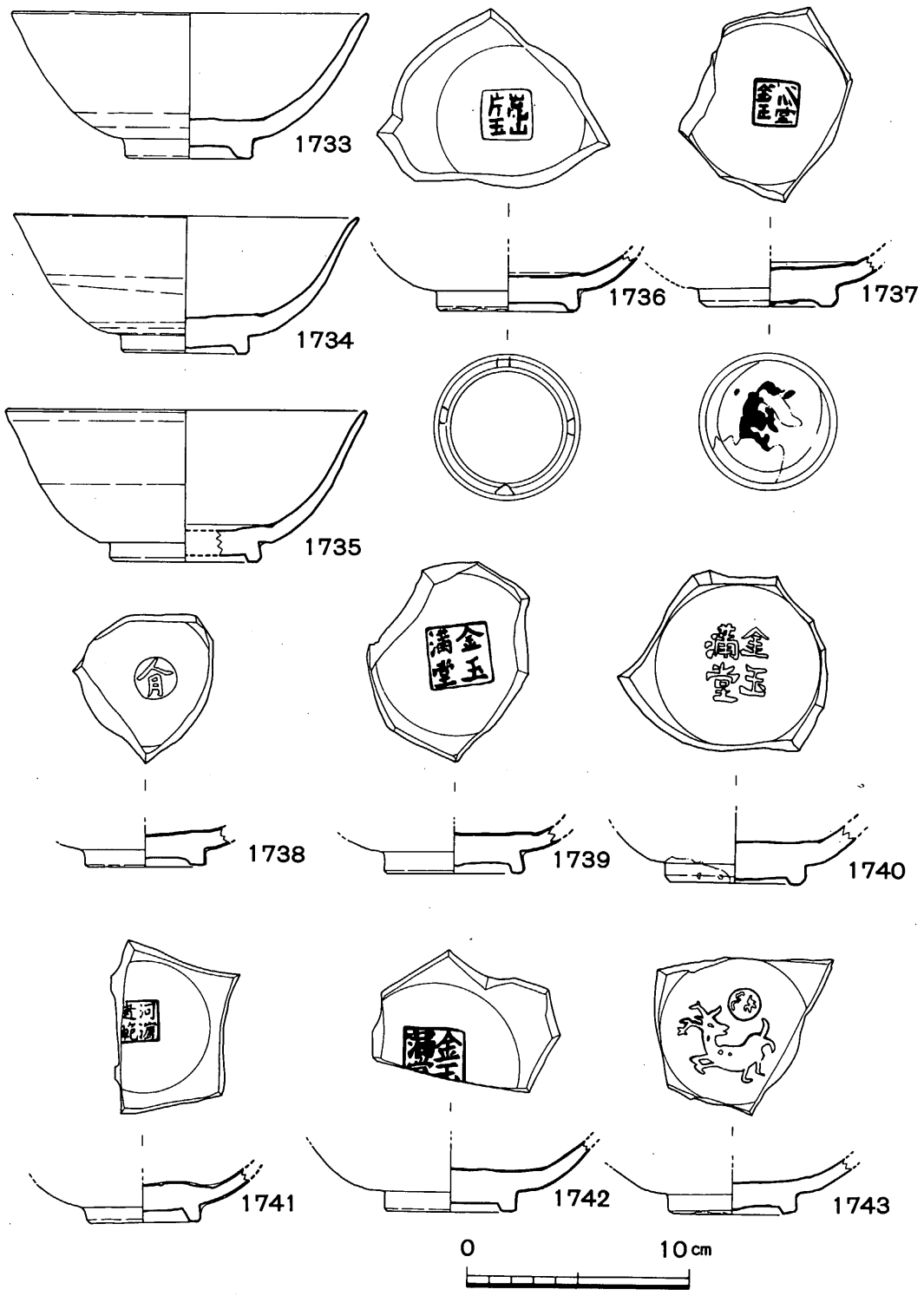
**B** (19図1724・1726・1727) 内面にヘラによる花文が描かれているもので、見込みに草花文が描かれている。1724の胎土は黄味灰色で、釉はオリーブ色で貫入がみられる。4層出土。1726は高台内に径2.9cmの円柱状焼成台のあとが残っている。胎土は明灰色で、釉は明緑色である。S E101 井戸内出土。1727も高台内に径3.2cmの円柱状焼成台の跡が残り、胎土は黄味明灰色で、釉は黄味緑灰色で気泡を多く含む。4層出土。

**C** (19図1728～1732) 外面に蓮弁文が削り出されたものである。1728は小形の椀で高台内に径2.2cmの円柱状焼成台の跡が残っている。胎土は白色で、釉は明緑灰色である。4層出土。1730も小形の椀で、胎土は灰白色で、釉は明緑灰色である。出土層位不明。1731の胎土は灰褐色で、釉はオリーブ褐色である。3層出土。1732の胎土は灰白色を、釉は緑灰色を呈する。3層出土。

**D** (20図1733～1743) 器形は同じで、無文であるが、見込みに銘や文様の印文が押されているものもある。1733は高台内に焼成台の跡が残り、胎土は明灰色で、釉は明灰緑色である。4層出土。1734の胎土は灰白色で、釉は淡黄緑色である。4層出土。1735は高台床付部に目跡があり、胎土は灰色で、釉は暗オリーブ色である。出土層位不明。1736は見込みに「崑山片玉」の文字が押され、高台床付部に4箇所目跡が残っている。胎土は明灰色で、釉はオリーブ灰色である。3層出土。1737は見込みに「金玉満堂」の逆字が押され、高台内に焼成台の跡が残っている。胎土は灰白色で、釉は灰緑色である。S E103 井戸周辺出土。1738は見込みに文字の浮文が押され、胎土は明灰色で、釉はオリーブ灰色である。S D103 溝出土。1739は見込みに「金玉満堂」の文字が押され、高台内に円形の焼成台の跡が残っている。胎土は暗灰色で、釉は暗緑色である。S E108 井戸掘り方出土。1740は見込みに「金玉満堂」の浮文が押され、胎土



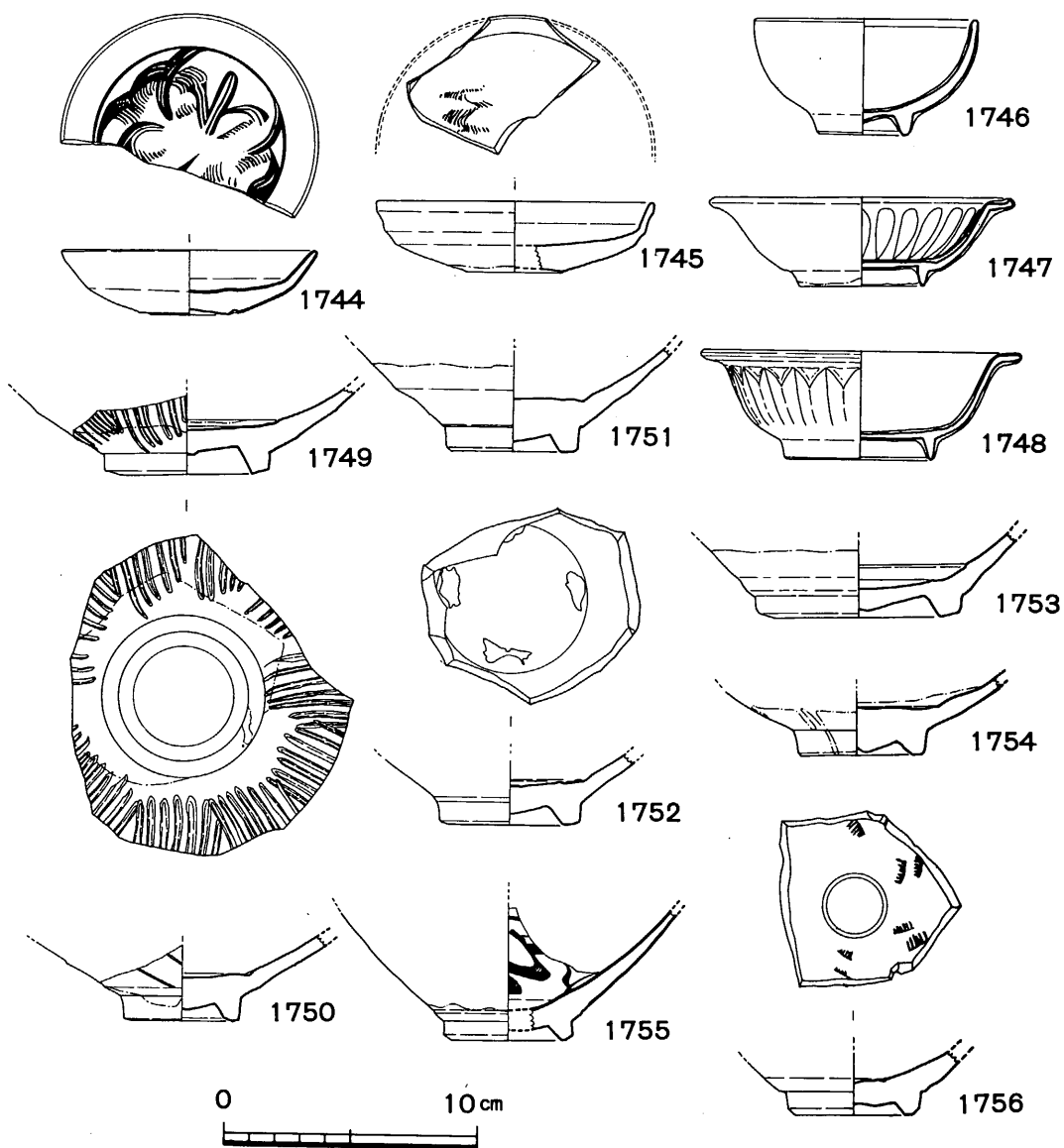
19图 磁器实测图 3 (7類)



20図 磁器実測図4 (7D類)

は灰色で、釉は暗オリーブ色である。SE103 井戸周辺の出土。1741は見込みに「河浜遺範」の文字が押されていて、胎土は灰白色で、釉は緑色である。4層出土。1742は見込みに「金玉満堂」の文字が押され、高台床付部は焼成後、磨かれている。胎土は褐味明灰色で、釉は暗オリーブ色である。4層出土。1743は見込みに鹿の文様が押され、高台床付部に4箇所が目跡が残っている。胎土は灰色で、釉は灰緑色である。SE102 井戸掘り方出土。

そのほか一応7類に入れてもよいと思われるものに22図1757~1760の小椀がある。1757は高台の内面および床付部にも薄く釉がかけられている。胎土は明灰色で、釉は灰オリーブ色である。



21図 磁器実測図 5

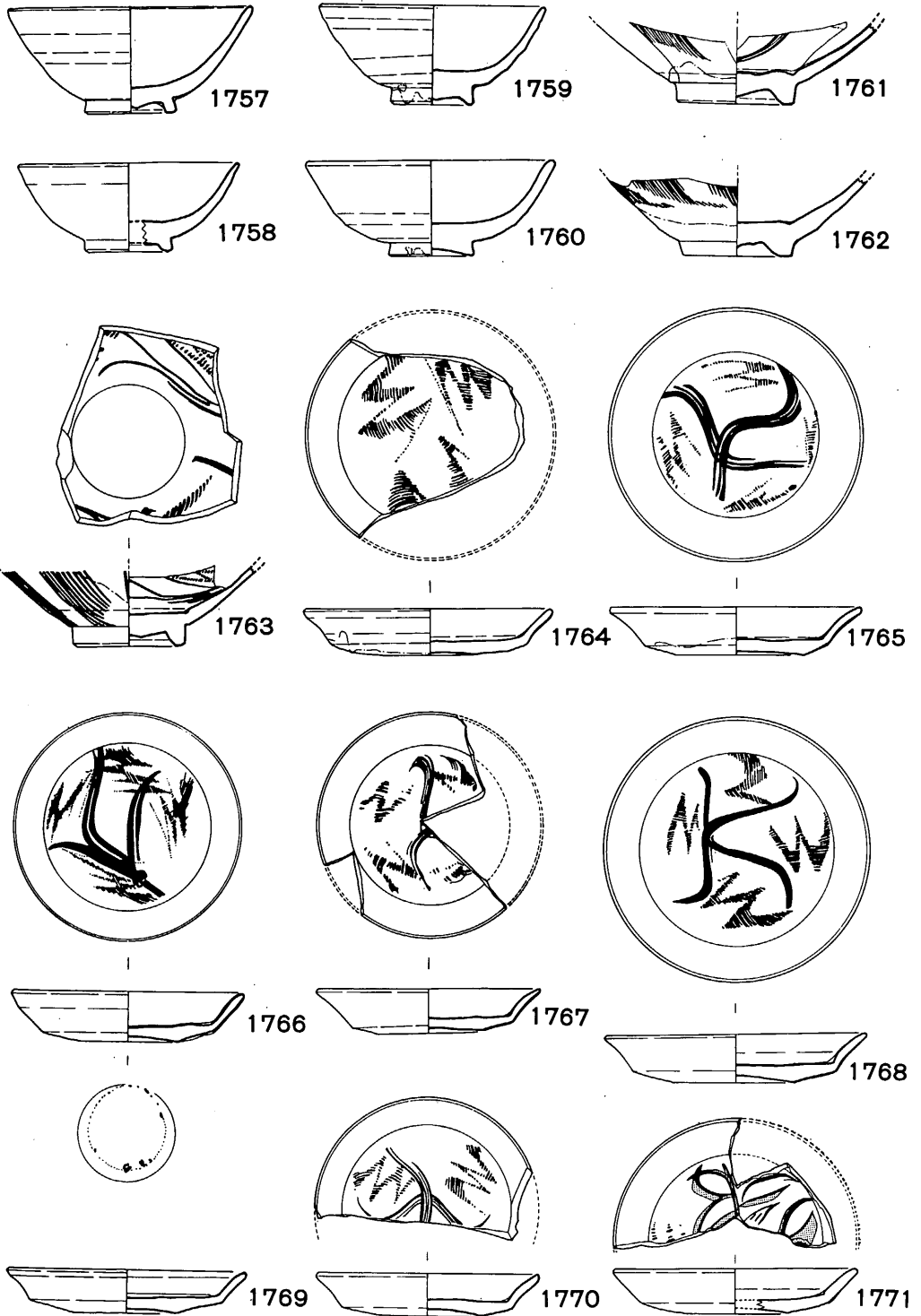
る。4層出土。1758は高台内に焼成台の跡が残り、胎土は明灰色で、釉は緑灰色である。出土層位不明。1759の胎土は白灰色で、釉はオリーブ灰色である。2層出土。1760の底部は高台ではなくややくぼむ程度で、釉はかからない。胎土は明灰色で釉は透明に近く明オリーブ色を呈し、貫入がみられる。S E112 井戸内出土。なお7類にともなう小皿としては次のものがある。e (21図1744) 1744は見込みに櫛歯による曲線文と引っかき文が描かれたもので、底面の釉はかきとられている。胎土は白灰色で、釉は緑灰色である。4層出土。

このほか21図1745は見込みに櫛歯文が描かれ、釉は底部にかけられていない。胎土は明灰色で、釉は透明な薄緑色で、青白磁のものに近い。出土層位不明。

**8類** (21図1746～1748) 釉は厚く、床付部の釉がかきとられ褐色を呈するもので、1746は口唇部と床付部に釉のかきとりがあり、胎土は灰色で、釉は暗オリーブ色で、気泡を多く含む。出土層位不明。1747は内面に蓮弁状文が削られたもので、胎土は灰白色で、釉は緑色で、細かな気泡を多く含む。4層出土。1748は外面に鎬蓮弁が削り出されたもので、胎土は灰白色で、釉は緑灰色ないし青灰色を呈している。4層出土。

**9類** (22図1761～1771) いわゆる珠光青磁とよばれているもので、細かな櫛歯による文様が特徴的である。1761～1763は椀で、1761の胎土は灰白色で、釉は明灰緑色である。S E101 井戸出土。1762は内面は無文と思われるもので、胎土は灰白色を、釉は明灰色を呈している。4層出土。1763の胎土は明灰色で、釉は緑味灰色である。S E101 井戸内出土。1764～1771は小皿で、底部に釉のかからないものと、底面および床付部にはみだした釉がかきとられたものがある。1764は見込みに櫛歯文のみが描かれたもので、胎土は黄味明灰色を、釉は灰黄色を呈し、底部に釉はない。出土層位不明。1765は底部に釉は無く、胎土は明灰色で、釉は緑灰色である。3層出土。1766は底面の釉はかきとられ、径3.8cmの円形の焼成台の跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。S E101 井戸内出土。1767は底面の釉はかきとられ、胎土は明灰色で、釉は透明に近い薄青灰色である。3層出土。1768も床付部にはみだした釉がかきとられ、胎土は灰白色で、釉は薄灰緑色である。4層出土。1769は無文で底面の釉はかきとられ、胎土は灰白色を、釉は不透明な緑灰色を呈している。4層出土。1770も底面の釉はかきとられ、胎土は灰白色で、釉は透明に近い明灰青色である。4層出土。1771は見込みにへらによる花文と櫛歯文が描かれ、底面の釉はかきとられている。胎土は灰色で、釉は灰緑色である。4層出土。

なお、これら以外に次のような青磁 (21図1749～1756) があるが、まだ類別はしていない。1749は見込みに浅い環状の溝があり、その見込みの釉をかきとっている。外面には太い櫛目で条線が描かれている。底部に釉はかからない。胎土は明灰色で、釉は暗オリーブ色である。S E101 井戸内出土。1750は外面に櫛目ではなくへらで荒い条線が入れられ、内面にも文様が描かれているようである。見込みの径は5.5cmである。胎土は明灰色で、釉はオリーブ色である。



22图 磁器实测图 6 (7类小碗·9类)



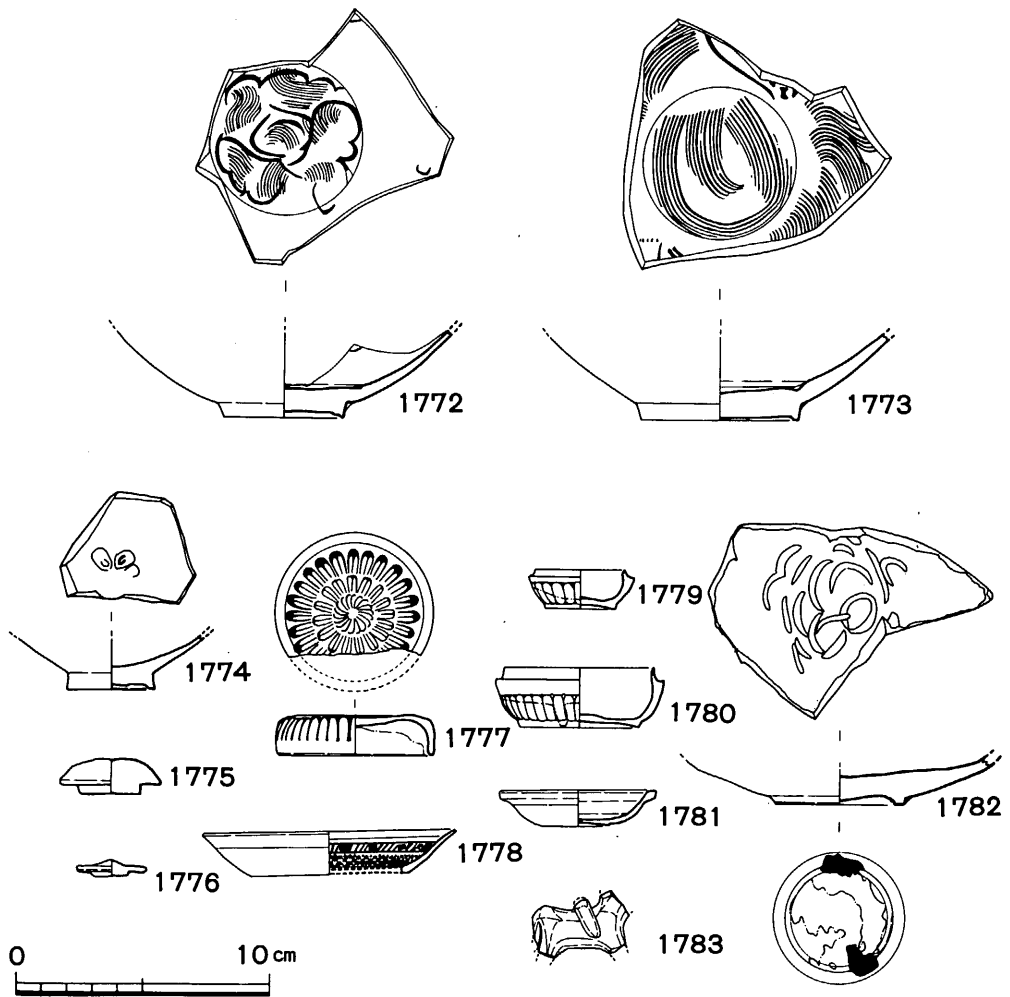
S D103 溝出土。1751は見込みに浅い環状の溝があるが、釉はかかっている。胎土は灰色で、釉は緑味灰色である。4層出土。1752も見込みに浅い環状の溝があり、その部分に4箇所目跡が残っている。見込みの径は5.8cmである。胎土は明灰色で、釉は灰色である。出土層位不明。1753は見込みに深い環状の釉をかきとった跡があり、底径は8.2cmと大きい。胎土は灰色で、釉は明灰色であり、白磁の類に入れるべきかもしれない。3層出土。1754は見込みに浅い環状の溝があるが、見込み全体に釉はかかっていない。胎土は灰白色で、釉は薄緑色である。S E103 井戸周辺出土。

1755～1756は見込みが小さいもので、内面にヘラや櫛歯で文様が描かれ、底部に釉はかかっていない。あるいは白磁か青白磁の類にはいるものかもしれない。1755の胎土は明灰色で、釉は透明に近い灰白色である。3層出土。1756の胎土は明灰色で、釉は透明に近い緑味灰白色である。4層出土。

11類 (23図1772～1781) 薄い釉のかかった青白磁で、1次調査では、椀のほかは小皿、合子などの小形のものが多い。1772は椀の底部で、底面は施釉後釉をかきとって小さな高台をつくらせている。その底面に径3.5cmの円形焼成台の跡が残る、見込みにヘラと櫛歯による花文が描かれている。胎土は白色で、釉は淡緑青色である。S E103 井戸周辺出土。1773は底面のつくりは前者と同じで、底面に径3.9cmの焼成台の跡が残っている。内面および見込みに櫛歯文とヘラ描き文があり、胎土は白色ないし黄白色で、釉は淡青色である。4層出土。1774は薄手の小椀で、見込みに花の印文がある。底面は釉がかきとられて、焼成台の跡が残っている。胎土は白色で、釉は緑白色である。3層出土。1775は壺形合子の蓋で、胎土は灰白色で、釉は灰白色である。出土層位不明。1776も壺形合子の蓋で、胎土は灰白色で、釉は黄味灰白色である。出土層位不明。1777は型押しの子の蓋で、胎土は灰白色を、釉は明緑灰色を呈している。出土層位不明。1778は内面型押しの子皿で、口縁部のみ幅広く釉がかきとられている。胎土は黄白色で、釉は青白色である。3層出土。1779は合子の身で、体部は型押しでつくられ、胎土は灰白色で、釉は緑白色である。4層出土。1780も合子の身で、型押しでつくられている。胎土は白色で、釉は緑味灰色である。4層出土。1781は内面にのみ釉がかけられ、型押しでつくられたもので、胎土は灰白色を、釉は明オリーブ灰色を呈している。4層出土。

12類 (23図1782) 高麗青磁で、1782は見込みに浮き出た印花文があり、高台内にも部分的に釉がかけられ、床付部に2箇所目跡が残っている。胎土は灰色で、釉は明灰緑色である。4層出土。

このほか磁器と思われる小さな馬形土製品が出土している(23図1783)。頭部および四脚は欠損しているが、背に騎乗した人物の脚部があり、磁器の飾りとしてつけられたものと思われる。胎土は灰白色で、釉は灰味白色で薄くかけられている。4層出土。

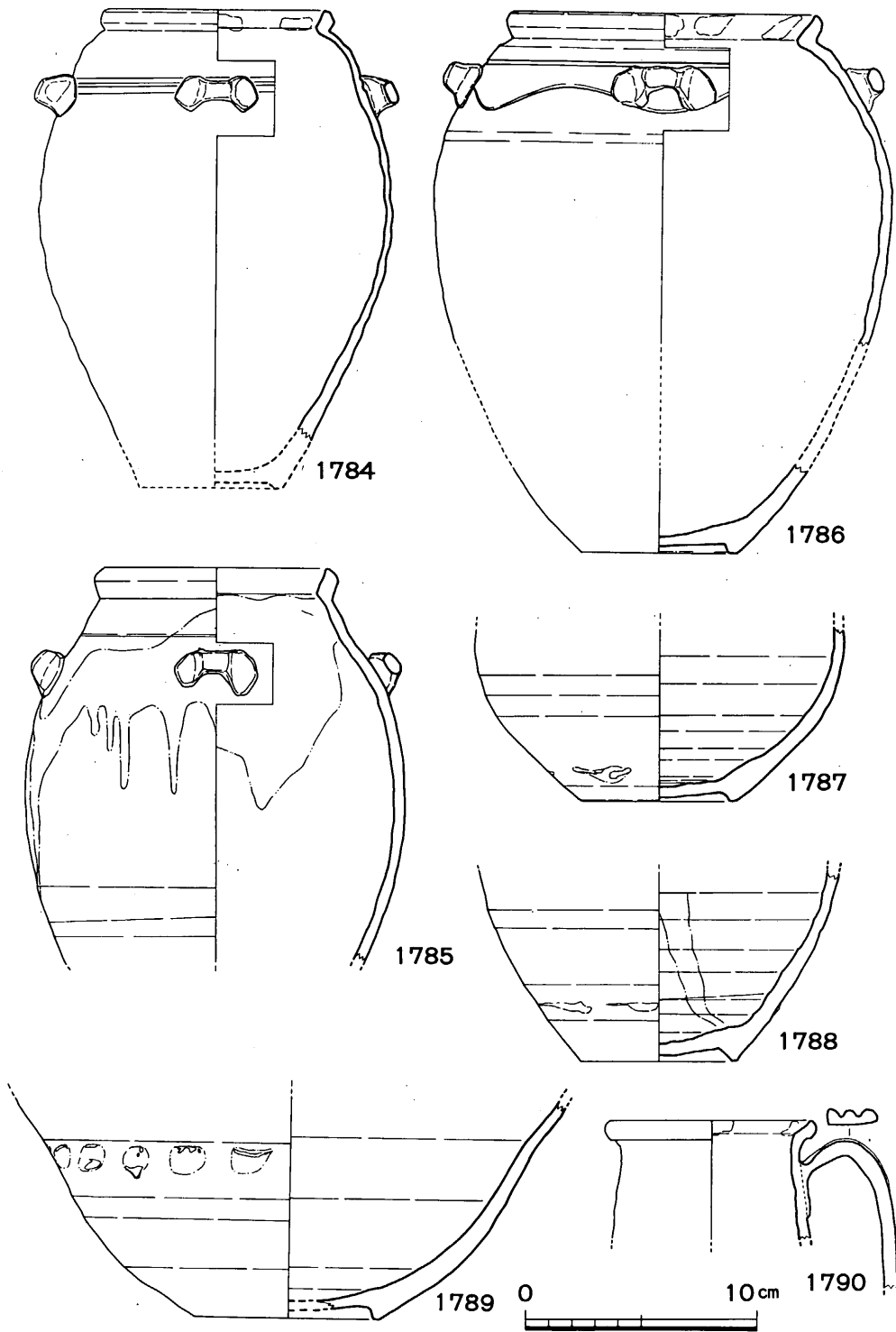


23図 磁器実測図 7 (11・12類, その他)

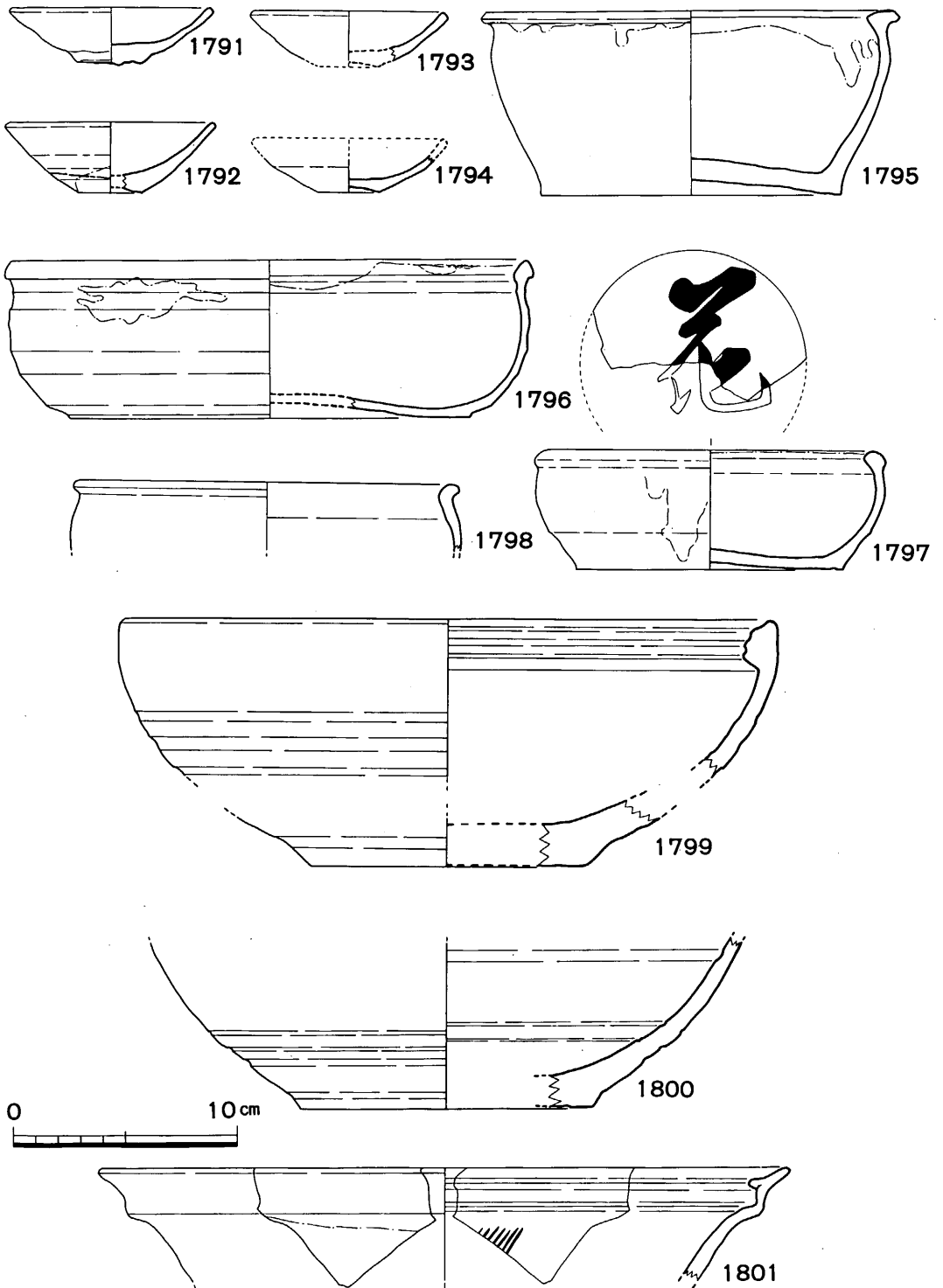
## 8. 雑器 (24~26図)

明瞭な青磁・白磁などの磁器のほかに、色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないので、一応雑器としてまとめた。分類は従来通りであるが、4類は11類に含めた。

**1類** (24図1784~1789) 短い口縁がやや開き、肩部に波状沈線や横沈線が入られているものが多い。また肩部に耳がつく四耳壺となるものも多い。底部は小さな高台状をなしている。口縁内側と外面の底部近くに重ね土の目跡が残っている。全体に灰緑色の釉がかけられているが、風化が進んでいるものも多い。1784は肩部に2本の沈線が入られ、四耳がつけられている。



24图 雑器実測図 1



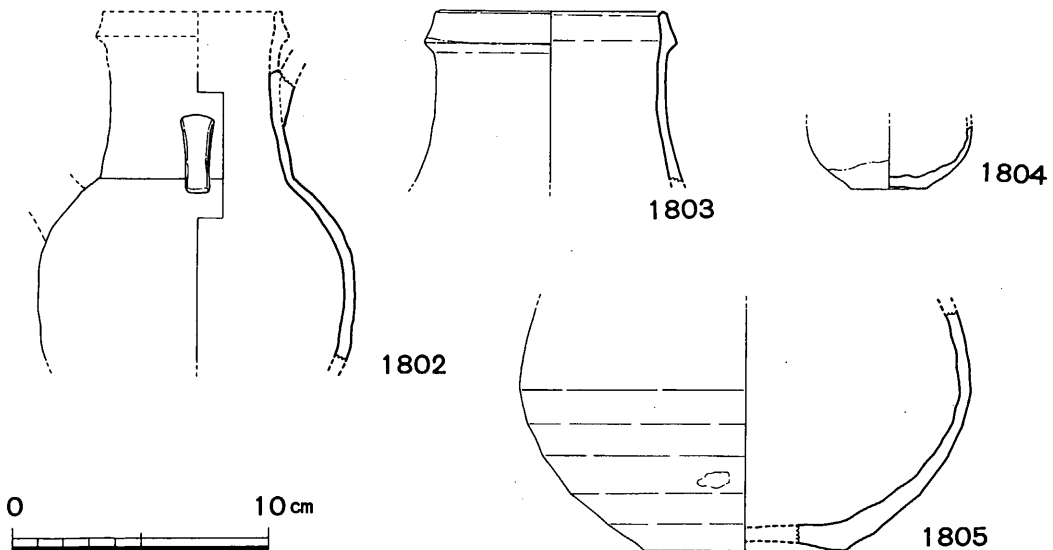
25図 雑器実測図 2

口縁内側に重ね土の目跡が残っている。胎土は暗灰色で、釉はオリーブ色である。SD103 溝出土。1785は緑味黄灰色の釉をかけた上に、黒褐色の釉を肩部に流している。胎土は明橙灰色である。SE101 井戸傍出土。1786はやや大形で、胎土は褐灰色で、釉はオリーブ色である。4層出土。1787は胴部が丸味をもつもので、外面の底部近くに目跡が残っている。胎土は内面近くは灰色を、外面近くは明褐色を呈し、釉は風化して灰黄色である。4層出土。1788はやはり底部近くに目跡が残るが、釉は褐灰色で、光沢があり、胎土は灰褐色である。SE110 井戸掘り方出土。1789は大形の底部で、釉は目跡から上は暗オリーブ色を、目跡から下と内面は黄白色を呈し、胎土は明灰褐色である。4層出土。

1790は1類に近い水差で、口縁は横に開きその内側に目跡が残っている。把手の外面には深い沈線が2本入れられている。胎土は明灰褐色で、釉は暗灰褐色である。4層出土。

**4類** (25図1791~1794) 小皿で、化粧土か釉が薄くかかり、光沢はなく3類に類似している。1791の底面は切り離しのままで胎土は褐灰色を、器面は暗灰褐色を呈している。出土層位不明。1792は体部下半に焼成台の跡が残っている。胎土は灰色で、器面は明黒褐色である。4層出土。1793の胎土は赤褐色で、器面は暗褐色である。4層出土。1794の胎土は明灰色で、外面は灰色を、内面は灰黒色を呈している。3層出土。

**7類** (25図1795~1797) 内面に釉がかけられているもので、1795のように口縁は横に折れ、その上端が平担で、体部はやや立ち、内面に灰黄色の釉がかけられたものと、1796のように口縁は肥厚して丸味をもち、その内側に目跡残り、体部は丸味をおび内面に黄褐色釉がかけられ胎土の粒子が粗いものなどがある。1795は口辺部および内面に黄白色の釉がかけられ、その上



26図 雑器実測図3

に内面には黄灰色の釉がかけられている。外面の釉がない部分は灰色ないし紫灰色を呈している。胎土は灰色で、白砂を含み口縁上面に重ね焼の痕が残っている。4層出土。1796は底面を除いて化粧土がかけられ、内面はその上から黄褐色の釉がかけられ、見込みに褐色の釉で文様が描かれている。小さな口縁の内側に重ね土の目跡が残っている。外面は褐色を呈し、胎土は黄灰色である。4層出土。1797の器形は1796に似るが、内面は1795に似ていて、見込みに「花」の字が褐色の釉で書かれている。口唇部に重ね焼のあとがみられる。胎土は灰味黄白色で、釉は灰黄色である。3層出土。

1798は胎土・器形は7類に似るが、内外面に鮮やかな緑釉がかかっている。出土層位不明。

**8類** (25図1799・1800) 口縁内側が肥厚し、そこに数本の沈線が入れられ、見込みはよく研磨されているが、無数のあばた状のくぼみがみられる。胎土は多孔質でなく、白砂を含むが、粒子は小さいため、あるいは乾燥前に荒砂をまき、押しつけて型をつけ、その後荒砂を払い落して、故意にあばたをつけ、摺鉢のような役目を果させたものかもしれない。焼成は堅い。1799の胎土は灰赤色である。4層出土。1800は紫灰色を呈し、4層からの出土である。

**9類** (25図1801) 摺鉢で、内面に櫛目がついている。口縁は外反し、内面に折り曲げている。胎土は黒灰色で、口縁内外面に暗灰紫色の釉がかけられているが、口縁最上端部に釉はない。4層出土。

**11類** (26図1802～1803) いわゆる褐釉の陶器で、1802は水差で口縁と把手は欠損している。おそらく注口が付くものと思われる。頭部下部に縦形の耳が付いている。胎土は灰黒色ないし暗灰紫色で、黒褐色の釉が内外面にかけられている。出土層位不明。1803は同じく水差の口縁部で、口唇部の釉はかきとられ、口縁外面にも釉はかけられていない。胎土は赤褐色で、釉は暗褐色である。4層出土。

そのほか1804は薄手の小壺で、底面に糸切り痕が残っている。胎土は紫灰色で、釉は薄く、褐色を呈し、内面と底部にはかけられていない。4層出土。1805は底部近くに目跡が残り、それより上部にかすかに釉らしきものが薄くかかっているように思われるが明瞭でなく、底部および内面に釉はない。胎土は橙味明灰色である。出土層位不明。

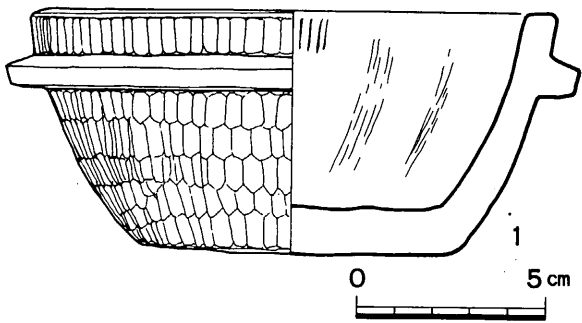
## 9. 滑石製品 (27～32図, 図版26～31・63)

### 石 鍋 (27図, 図版26—1)

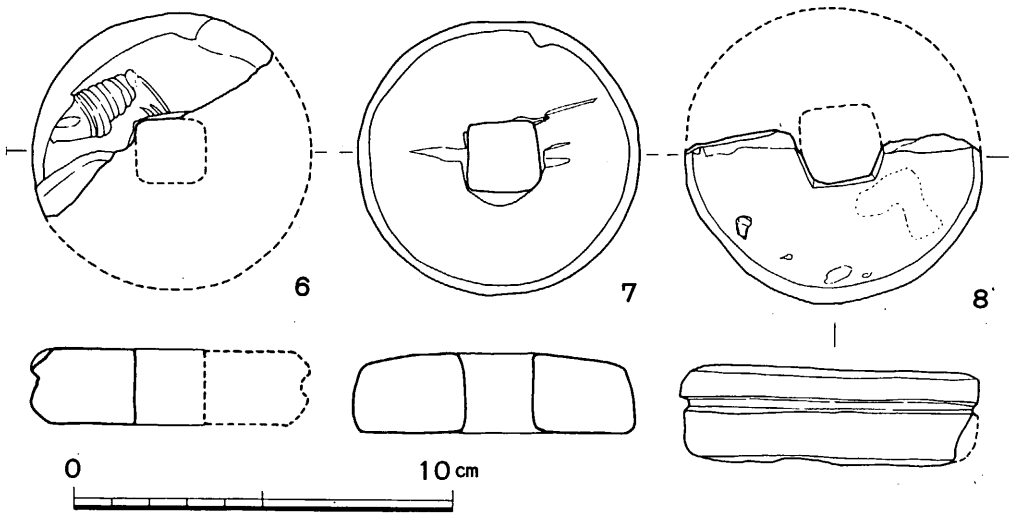
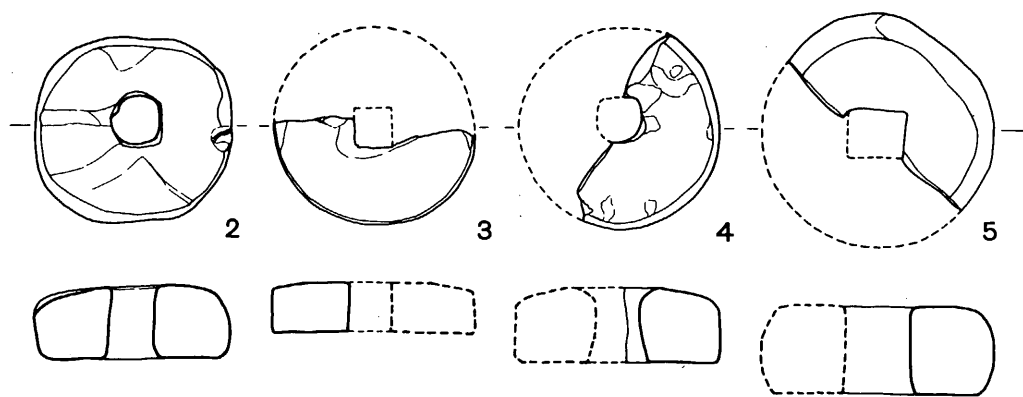
すべて滑石製である。既報告ではその滑石原材料の色調で、(1)青味を帯びるもの、(2)雲母を含んだように黄味を帯びて光るもの、(3)白濁色および灰色のもの三者に類別され、形態で①方形のこぶ状把手をもつもの、②口縁部下に全周する鐔を有するもの二者に分類されている。

(註1)

K区(1次)でも、その原材料の色調は大略上記の三者が認められるが、その形態でいま一つ



27図 石鍋実測図



28図 滑石・瓦製有(方形)孔円板実測図

③逆L字状口縁を有するものが1例存在する。これら石鍋破片の出土量は多く、口縁部だけの破片で90個体を数え、底部片およびその他の残片で有孔円板等に再加工された例を加えれば、100個体を越えるであろう。その破片の3形態別の数量は、①こぶ状把手付が1例、②鋳付が76例、③逆L字状口縁が1例で、その他口縁部小片が12例である。

図示したものは、KR区SE105出土。底部に径1cm程度の破損孔があるだけのほぼ完全な形をしており、口縁径14.0cm・器高6.4cm・器壁厚1.0cmを測る。器内面および口唇部はほとんど工具痕を残さぬまでに研磨し、体部外面は規則性をもって数段の工具痕を明瞭に残し、丁寧な仕上げである。

有(方形)孔円板(28・99図, 9表, 図版27・63)

2次(L区)出土例もここで説明する。1次(K区)で15例(滑石製10・土製5)、2次で8例(滑石製6・土製2)の計23例が出土し、その中で20例を第9表①~⑳に示す。

ところで、その用途については確定するに至っていないので、ここでは第9表に示した計測値を中心に説明を加えるが、①~㉔の表記順については次の点に留意した。

㉑滑石製は、石鍋を再利用・再加工したもので、円板の厚さは、石鍋壁の工具痕・煤等を除去しきった後の原材の厚さの各種により、1.3~2.35cmと多様である。

㉒土製は、瓦を再利用・再加工したもので、円板の厚さは、瓦表面の縄・布目痕やタタキ目痕が認められることから、原材の厚さがそのまま生きており、2.2cmを前後する。

㉓滑石製・土製共にその外径に大・小が認められるが、その孔径はあまり差がない。

㉔共にその重さは、厚さも当然関係はあるが、本例ではより外径に大きく影響されるものと考えられる。

㉑~㉔からして、一応外径の大・小を基準として計測表を作成し、次のI・II類を得た。

**I類**……①の完形例で示されるように、①~⑥の平均値〔重さ87.5g・外径5.5×5.6cm・孔径1.3×1.3cm・厚さ1.6cm〕をもつ小形のグループが指摘される。

**II類**……⑭・⑮の完形例で示されるように、⑧~⑳の平均値〔同157.2g・同7.6×7.6cm・同1.6×1.6cm〕をもつやや大形のグループが指摘される。

その他に、

㉑外径で、③と④・⑫と⑱などに一致するものや、極似する例があり、孔径でも一致する例がある。

㉒外径・孔径共にその〔最小×最大〕を⑮7.5×7.6cm・1.6×1.65cmと測定したが、その差位はほとんどなく、それぞれ同心の正円形・正方孔径が意図されている。

㉓㉔はその製作途中のものと考えられ、瓦を概略円形に打裂し、孔は円形の穿孔途中のもので、重さ193.6gと若干大きい値が測定されている。外形は研磨で円形に整え、孔は99図㉗に示すように円孔を穿った後で方形に整えて完成させるものであろう。



番号	出土地点		材質		現存 周率	重さ g (復原)	外径 cm (復原)	孔径 cm (復原)	厚さ cm	挿図 番号	図版 番号	備考
	地区	層位	滑石製	瓦製								
①	K	表採	○		完形	93	4.9×5.25	1.3×1.3	2.0	28-2	27-2	
②	KT18		○		$\frac{170}{360}$ 残	32.25 (68.3)	(5.3×5.3)	(1.0×1.0)	1.3	28-3	27-3	
③	LQ36-37		○		$\frac{125}{360}$ 残	30.5 (87.8)	(5.35×5.35)	(1.45×1.6)	1.8	99-8	63-8	
④	KO26	4層	○		$\frac{180}{360}$ 残	46.3 (92.6)	5.35×(5.35)	(1.0×1.15)	2.0	28-4	27-4	
⑤	LQ35	石組付近	○		$\frac{180}{360}$ 残	42.7 (85.4)	6.0×(6.0)	(1.75)×1.8 1.35×(1.35)	1.3	99-6	63-6	孔2段 有り
⑥	L		○		$\frac{205}{360}$ 残	56.4 (99.0)	6.1×(6.0)	1.4×(1.5)	1.35	-2 99-7	63-7	
⑦	KV22	4層	○		$\frac{180}{360}$ 残	81.4 (162.8)	6.25×(6.25)	(1.65)×1.8	2.35	28-5	27-5	
⑧	LS38	4層	○		$\frac{180}{360}$ 残	56.5 (113.0)	7.0×(7.0)	(1.3×1.4)	1.35	99-9	63-9	
⑨	SE203号 井戸周辺部		○		$\frac{205}{360}$ 残	86 (151.0)	(7.0)×7.2	1.7×(1.7)	1.8	99-11	63-11	
⑩	KT22	4層	○		一部残	37.7 (?)	7.2×(7.2)	1.7×(1.7)	2.2			
⑪	LQ40	4層	○		$\frac{117}{360}$ 残	42.4 (130.5)	(7.3×7.4)	(1.2×1.4)	2.1			円形孔
⑫	L		○		$\frac{195}{360}$ 残	61.1 (112.8)	(7.4×7.4)	(1.6)×1.7	1.3			
⑬	KS25		○		$\frac{150}{360}$ 残	74.5 (178.8)	(7.4×7.4)	(1.7×1.85)	2.0	28-6	27-6	側面溝有
⑭	KX22		○		完形	195.4	7.35×7.5	1.9×1.9	2.15	28-7	27-7	
⑮	LT38	4層	○		完形	132.4	7.5×7.6	1.6×1.65	1.35	99-12	63-12	
⑯	LO40	4層	○		$\frac{160}{360}$ 残	80.9 (182.0)	(7.8×7.8)	(1.35×1.5)	1.65	99-10	63-10	側面溝有 表面線刻有
⑰	KS27	3層	○		$\frac{180}{360}$ 残	92.2 (184.4)	7.8×(7.8)	(2.0)×2.1	2.5	28-8	27-8	側面溝有
⑱	LQ37	5層	○		$\frac{165}{360}$ 残	73.5 (160.3)	(8.0×8.0)	(1.5×1.5)	1.3			
⑲	LO38	3層	○		$\frac{195}{360}$ 残	82.5 (152.3)	8.4×(8.4)	1.4×(1.5)	1.8	99-13	63-13	
⑳	LS32-33	3層	○		$\frac{135}{360}$ 残	72.6 (193.6)	(8.6×8.6)	(1.4×1.4)	2.2			円形穿孔 途中
①～⑥平均						87.7	5.5×5.6	1.3×1.3	1.6			
⑧～⑳平均						157.2	7.6×7.6	1.6×1.6	1.8			

9表 1・2次調査出土滑石・瓦製有(方形)孔円板計測表

⑨⑫は3の断面図に示すとおり、その外側端部は明確な稜をもって上・下面が共に平坦に仕上げられている唯一の例で、その為に重さは若干小さくなっている。その他はすべて端部を隅丸に仕上げ、また滑石製では石鍋体部がカーブをもつことから、上・下面は平坦とならず、それに近いカーブを示している。

⑩20例中の3例(⑬・⑭・⑮)と他に1例にのみ外側円周部に溝が一周して彫られている。その彫り方は、同心円の正方孔形と正円板形の丁寧さに比較すると、雑な仕上げである。

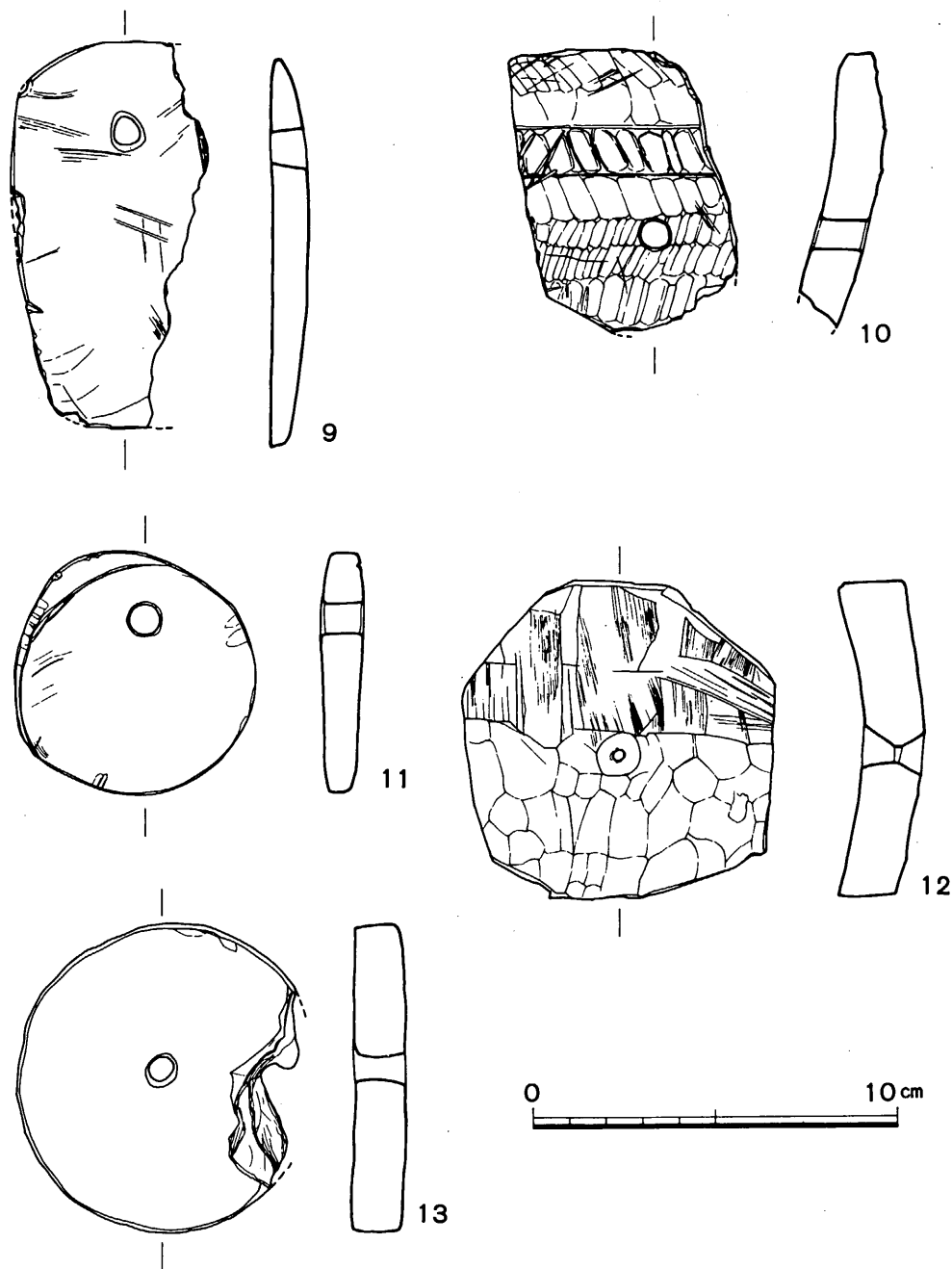
このように、①～⑩までの特徴を指摘してきたが、初めにも記したように、その用途を現認するまでには至らなかった。しかし、⑨・⑩および大きめの砂粒を含み、また縄目痕を残す瓦製もあることから、表飾の具としての用途は少ない。また①・②・④から、その重さにⅠ・Ⅱ類の二者はあるが、一定せず、衝としての分銅の可能性も少ない。むしろ③・⑥からは方形孔に棒状のものを通し、①からはそれが回転を意識し、④からはその運動には必ずしも労して研磨するよりも、石鍋のカーブを若干研磨することで形状を修正すれば、回転での左右への振れを少なくすることはできよう。また、⑤の1に示すような孔が二段になった例は、一段浅い孔の側を下面として使用すれば、孔を通る棒状のものへの円板の固定ができ、その落下を防ぐことができる。そこで、これはあくまでもその可能性の一例ではあるが、これらの条件を満たすものとして、①を使用して図版27-1に示す火鑽弓を作成した。当初は不慣れの為苦労したが、やがてその無鑽に慣れると、作動開始後2分弱で白煙で目が開けられる。40図23、図版31-2に示した火鑽臼は1次で出土したものである。南バイパス関係五条周辺遺跡の特徴は、本報告付図土器編年表にも示すとおり、土器溜めと言われる土塚からの一括出土土師器が多く、祭祀供膳に使用されたものである。ここでは、“一応その機能を発火具とし、祭祀供膳の為の燈火およびその調理の為の、特別の用途に使用したもの”としてとり扱っておきたい。しかし、同様の回転運動をなすものとして、紡錘車や穿孔用鑽もあるので、今少しの検討が必要であろう。

有(円形)孔円板・方形板(29図、図版28-1)

その形態から、円板と方形板の二者が認められ、共に一孔を設ける。

9はKR18区出土。中心部が厚く1.1cmを測り、周囲端部は0.15～0.4cmと薄くなるが、裏面は平坦に仕上げる。孔径0.8cm・長径10.2cm・重さ88.5gを測る。10はKW23区3層出土。石鍋口縁部片を再加工したもので、鋸部は除去しているがその痕跡をとどめる。表・裏面はその体部面をそのまま残し、左側面は切断したままで、右・下側面に面取り仕上げを施す。孔径0.8cm・短径5.4cm・長径7.8cm・厚さ1.4cm・重さ128.5gを測る。11はSD104出土。円形にシャープな割り付け刻線をなした後、側面を削ったものであろうか。最後まで仕上げをせず、長楕円形を呈す。孔径0.8cm・短径6.5cm・長径6.8cm・厚さ1.2cm・重さ98.5gを測る。12はKU21区4層出土。石鍋口縁部片を再加工したもので、鋸部除去の痕跡をとどめ、表・裏面はその体部面をそのまま残す。口縁部を生かして側面を概形八角形に切断したままで、孔は両面穿

孔である。孔径0.4cm・短径8.3cm・長径8.7cm・厚さ1.6cm・重さ253gを測る。13はKV21区4層出土。表・裏面および側面すべてほとんど工具痕を残さぬまでに丁寧に研磨する。一部に円形割り付け刻線を残す。孔径0.6cm・径8.5cm・厚さ1.5cm・重さ184.8gを測る。



29図 滑石有(円形)孔円板・有(円形)孔製品実測品

以上の中で、9は2次出土の100図14・16と同様に一部に火気を受けて黒変している。また12は、有（方形）孔円板の未製品の可能性が高い。

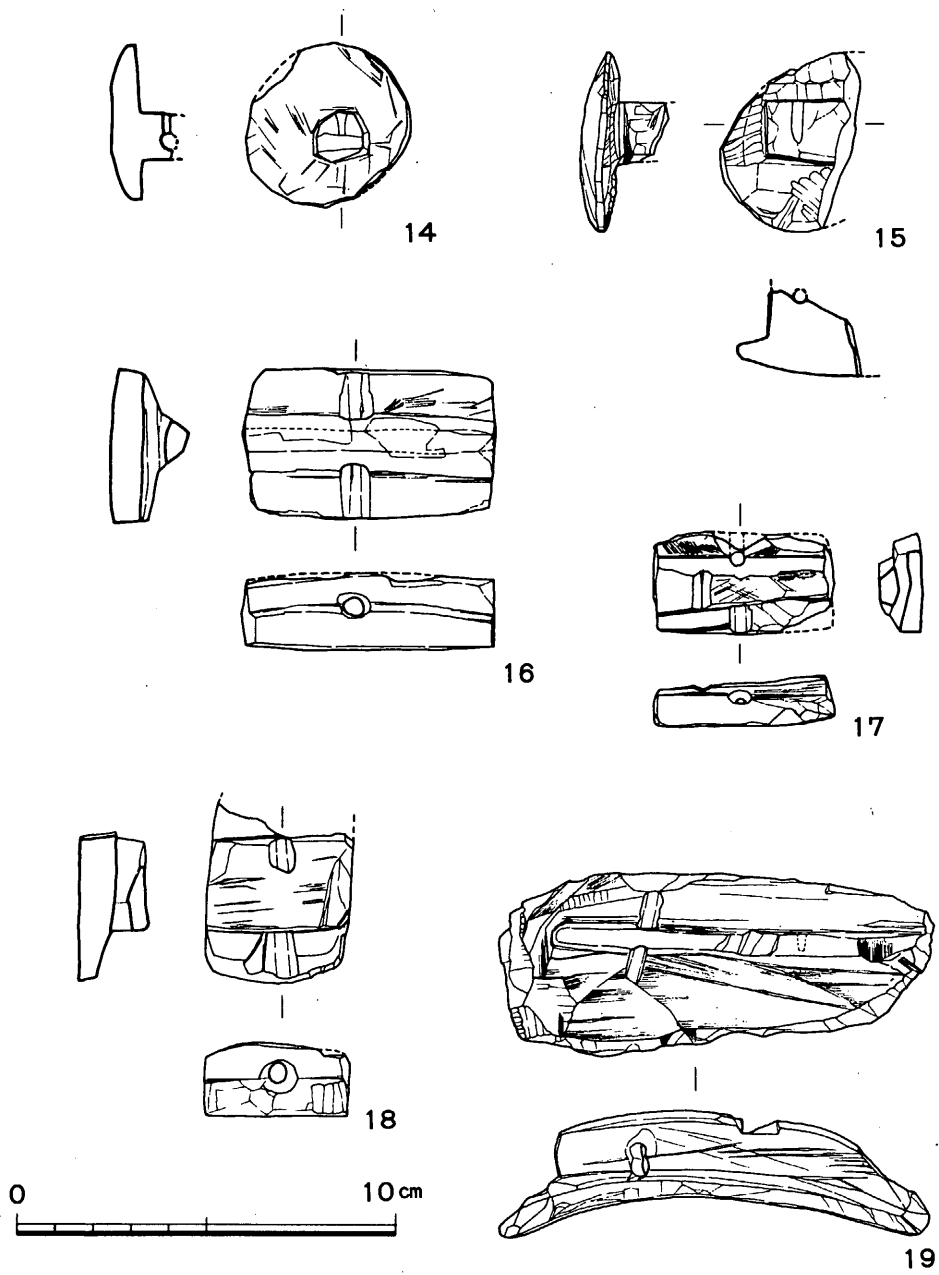
有孔鈕付製品（30・31・101図，表10，図版26—3・28—2）

2次（L区）出土例もここで説明する。1次（K区）で7例，2次で3例の計10例が出土し，その計測値を第10表①～⑩に示す。

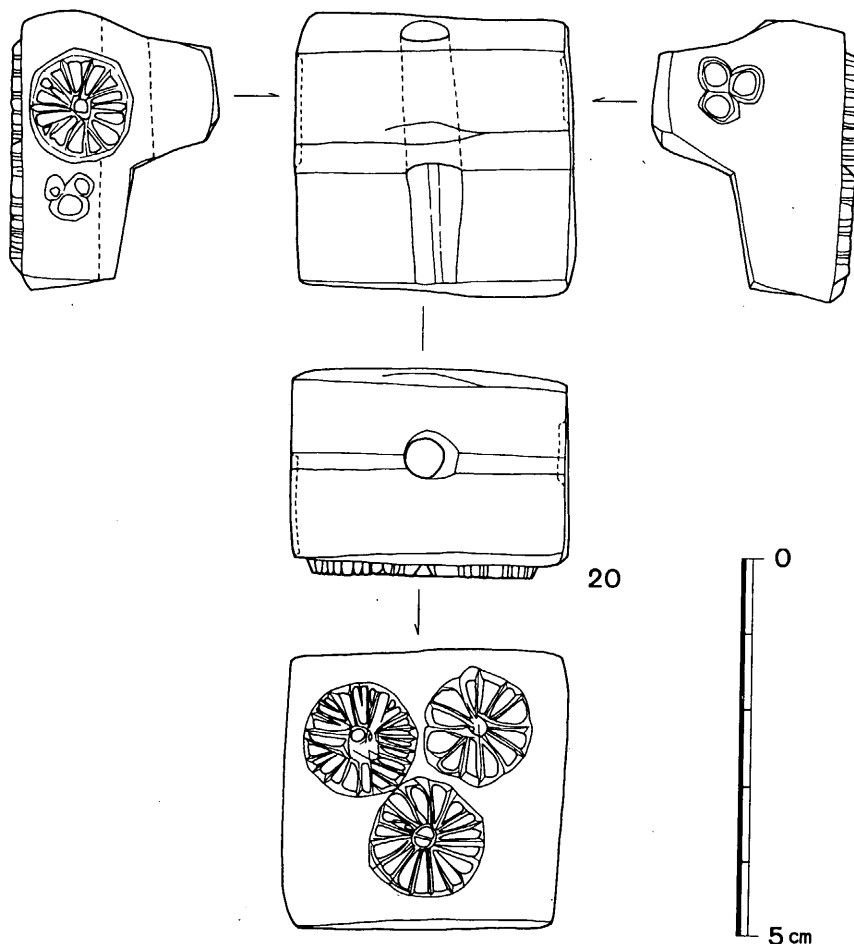
①は鈕を中心部から若干図上右端に寄せ，ほぼ隅丸方形に削る。鈕孔も若干片寄り，やや小さな穿孔中途の小孔をいま一つ認める。体部背面（鈕付部）は工具痕を認めるが，ほぼ平坦に丁寧に仕上げ，表面は全体に反りを出す為の削り工具痕を残す。平面形は楕円形を呈す。②は，鈕を中心部から若干左端に寄せ，ほぼ長方形に削る。体部背面はやや深い工具痕を認めるがほぼ平坦に仕上げ，表面は工具痕を全く認めないが，それが研磨仕上げによるものか使用によるものかは不明である。③は上辺部に石鍋口唇部をそのまま生かし，鈕も鍋鋳部そのまま若干左寄りに1孔を設ける。孔は鈕部だけでなく体部にも削り込むが，体部背面は鍋器表面そのままのカーブを呈しており，後の背面を平坦に削る際に消えるものか。鍋口唇部以外の側面および表面は研磨を丁寧に施す。④はほぼ中心部に孔を設ける。孔の左右の鈕部や，鈕と体部の境等に裁断用の彫り込み線があり，背面および表面も深い削り込みを中途で残し，平坦でない点などから，未完成品であろう。⑤は上辺部に鍋口唇部をそのまま生かし，鈕も鍋鋳部そのままで左側に1孔を設けるが，右側に穿孔中途の孔をいま一つ認める。また鈕右端は垂直に切断する途中と思われる，斜めに削ったままである。背面は多くの削り工具痕をそのまま残す。表面は鍋内面カーブを若干修正して，半分ほどをその器面を削り取っているが，その工具痕は明瞭である。このように全体に未完成の様相が多く，鈕の中ほどで半截し，2個体を作る前の段階か。⑦は鍋鋳部を利用し，側面および表面を平坦に研磨し，2側面と表面に文様を彫る。左側面は菊花文と3連円文を陰刻し，右側面には3連円文のみを同様に陰刻する。表面には3個の菊花文を相接して陽刻する。⑧は鈕を長方形に削り出し，背面は表面と逆のカーブを呈するが，ともにほとんどその工具痕を残さぬまでに丁寧に仕上げる。⑨は上辺部に鍋口唇部をそのまま使用し，鈕も鍋鋳部をそのまま，体部に1孔を認めるが，その穿孔は石鍋時の可能性も

番号	出土地点		重さg	長径cm (復原)	短径cm (復原)	孔径cm (復原)	器高cm	返りcm	挿図 番号	図版 番号	備考
	地区	層位									
①	K S22	4層	25.8+?	4.5	(4.0)	(0.5)	1.6+?	0.4~0.6	30-14	28-14	略完形
②	KN26		29.9+?	3.5+?	4.4+?	(0.3)	2.3+?	0.45~0.7	30-15	28-15	約半残
③	K Q27	3層	74.8+?	6.7	4.0	0.55	2.1+?	0.1~0.15	30-16	28-16	略完形
④	KN26		22.1+?	4.8	(2.7)	0.3	1.2	0~0.25	30-17	28-17	略完形
⑤	KK25	溝内4層	50.0+?	(5.25)	3.8	0.55	1.9	0	30-18	28-18	約半残
⑥	K SE108号	井戸内	110.3	11.5	4.9	0.45	3.35	-1.1	30-19	28-19	完形
⑦	K Q27	3層	54.5	3.65	3.65	0.55	2.75	0	31-20	28-20	完形，陰・陽刻文あり
⑧	LS42	4層	21.3+?	(4.7)	(4.5)	0.35	1.9+?	0.4	101-18	64-18	約半残
⑨	LR36	2層	53.1					—	101-21	64-21	完形，孔は体部にあり
⑩	L Q40	溝	127.5+?	(10.3)	(7.4)	(1.05)	2.5	0	101-20	64-20	約半残

10表 1・2次出土滑石有孔鈕付製品計測表



30图 滑石有孔鈕付製品実測図



31図 滑石有孔鈕付菊花文印実測図

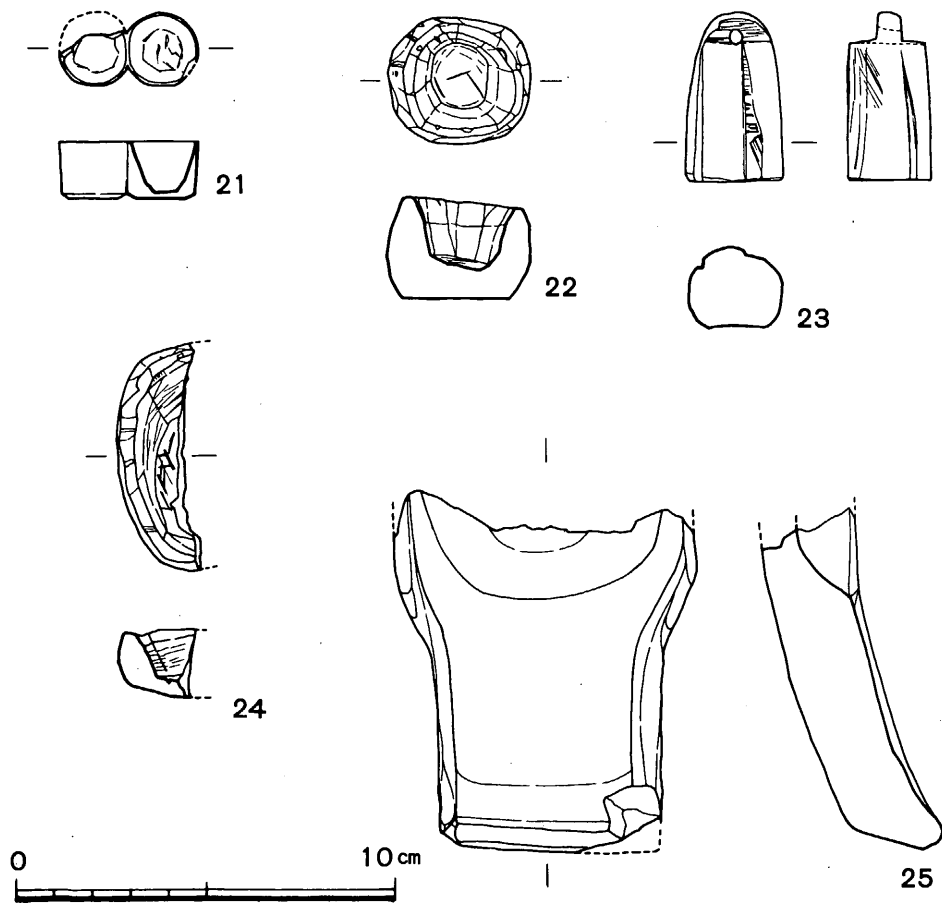
ある。体部の背・表面共に鍋器表面のままである。⑩は鈕状部が全体のほとんどを占め、その周囲に背面部を設け、共に工具痕を明瞭に残す。表面は条痕を無数に認めるが平坦で、仕上げによるものか使用によるものかは不明。なお、表面中央部が若干内くぼみを呈する。

上記10例の中で、⑦はその文様からして火舎・土鍋・土釜に認められる菊花文などの原型スタンプと考えられる。①・②・⑨は、(a)鈕が中心部から若干ズレた位置にあり、(b)背面のほぼ平坦な面が鈕を一周し、(c)表面に意図的に丁寧仕上げられた反りが認められ、(d)体部が円形ないし楕円形を呈する点などに共通するものがある。またその表面は平滑で、それが使用による磨滅であるのか、研磨仕上げによるものかは断定できないが、その表面を使用することを意識して製作されている。その用途の確定はできないが、比較的大形の土器製作工具に関与する

ものか。③・⑤は、(e)鈕が中心部に位置し、(f)背面が鈕を一周せず、(g)表面の反りが少なく、(h)体部が隅丸長方形を呈する点が、前者と相異なるが、表面の使用などに類似するものもあり、その関係は否定できない。

その他の滑石製品 (32図, 図版29-1)

21はK T18区青色粘土層上面出土。口縁部を厚さ0.1cmの薄手に仕上げ、器内外共に丁寧な作りである。底部外面は平坦に仕上げるが、体部との屈折部は断面図に示すとおり、その中央部にまで面取りを行なう。小形円形容器を2連してその概形を整え、その後切断するにしては、その中央の器壁の薄さからして無理が生じよう。22はK U22区4層出土。完形品で、器壁が全体に厚手に仕上げる。23はK V22区4層出土。分銅形を呈し、1孔を設け、鈕のつくりも丁寧である。鈕高0.75・鈕高0.7・短径2.6・長径4.5・厚さ2.1を測る(単位:cm)。図左の平面図に示すとおり、縦方向の彫り込み線が2条認められ、その裏面は断面図に示すとおり若干の



32図 各種滑石製品実測図

くぼみを呈す。体部および鈕上面は丁寧に研磨し、それ以外は平坦に削り上げる。重さ44.0gを測る。25はKU22区4層出土。匙残欠であろう。鍋残片を再加工したもので、その体部外面をそのまま背面に利用し、柄上面はその内面の黒色付着物をそのまま残す。匙内部はそれを削り込んだものであるが、匙としての使用による火気を受けた為か、黒変する。

註①. 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 第2集 1975年 — 六, 遺物 17, 石鍋

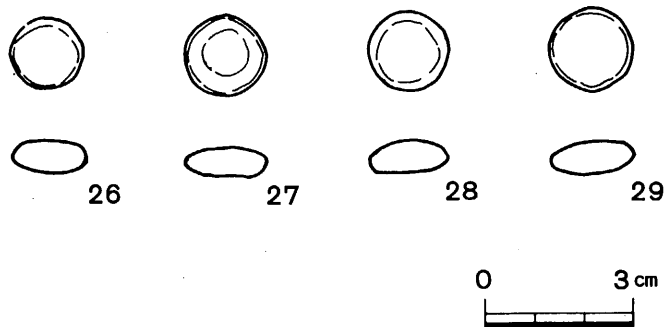
## 10. その他の石製品 (33・34図, 図版26—1・29—2)

基石 (33図, 図版26—2)

K区で4個出土した。26~29の、径・厚さ・重量の計測値はそれぞれ、(1.5cm・0.7cm・2.5g), (1.7cm・0.7cm・2.5g), (1.7cm・0.7cm・3.0g)を測り、30は水晶で、他は頁岩で黒色を呈し、断面隅丸扁平の平面正円形に近く、丁寧に研磨されている。大宰府史跡第9次学校院地区の調査(註①)で東部南北溝(鎌倉期)出土の4例の計測値平均(1.7cm・0.7cm・3.3g)や秋根遺跡(註②)出土の完形例の径1.6~1.8cm・厚さ0.7~0.8cmの計測値に近い。

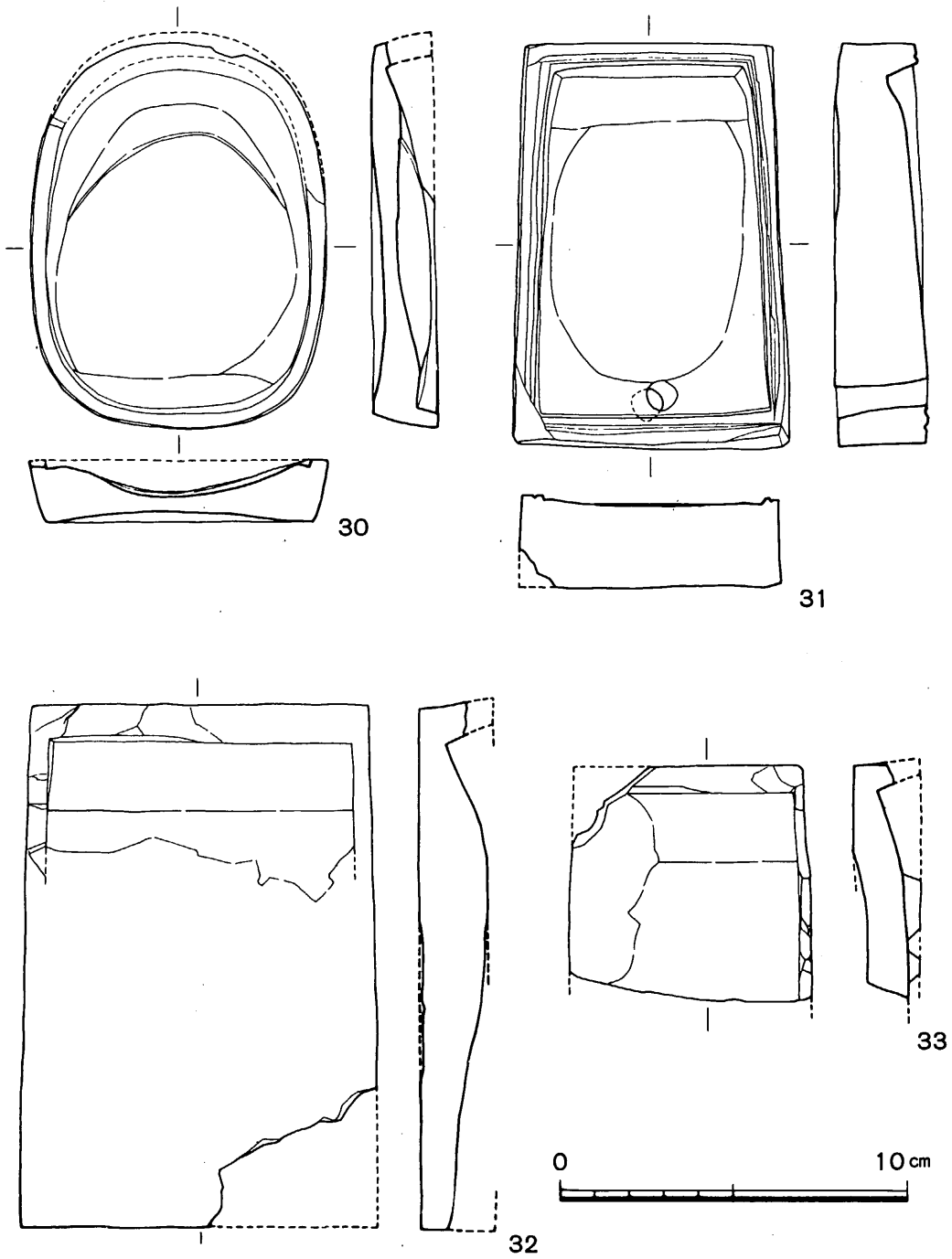
硯 (34図, 図版29—1)

30はKN22区2層出土。やや深めの陸部をなし、海部への移行に際して明瞭な段を有し、陸部手元で若干深くなる。陸立ち上がり壁高0.2cm, 復原長径11.4cm, 短径8.5cm, 厚さ1.8cmを測り、裏面は0.3cmの上げ底状を呈す。灰色の硬質粘板岩製。31はKV22区4層出土。立ち上がり部に1条の沈刻線を4周し、陸部端に径0.7cmの孔を穿つ。陸立ち上がり壁高0.15cm, 長径11.7cm, 短径7.9cm, 厚さ2.7cmを測り、裏面は0.1cmの上げ底状を呈す。暗青灰色雲母変岩製。32はKO22区1号井戸内出土。陸部は剝落し不明。長径約15.3cm, 短径10.1cmを測り、裏面は水平に仕上げるが幅0.5cmの工具痕を残す。小豆色輝緑凝灰岩製。33はKO20区出土。陸立ち上がり壁高0.3cmを測る。淡小豆色を呈す。他にKS27区3層(灰色粘板岩製)とKQ18区(灰色硬質砂岩製)からも出土している。



33図 基石 実測図





34图 石製碗実測図

その他の石製品 (図版64)

その他に、明らかに前代の弥生時代に属する石製品が数例出土している。

K S 21区 4層出土の硬質粘板岩製の破片は、上辺部を擦り切り技法で截断し、下辺に刃部を施す。石包丁と思われる。K P 26区 4層出土の完形例は、柱状片刃石斧で砂岩製。

註①. 『大宰府史跡——第9・10・11次発掘調査概要』 1971年 福岡県教育委員会

註②. 『秋根遺跡』 1977年 下関市教育委員会編 下関市郷土の文化財を守る会

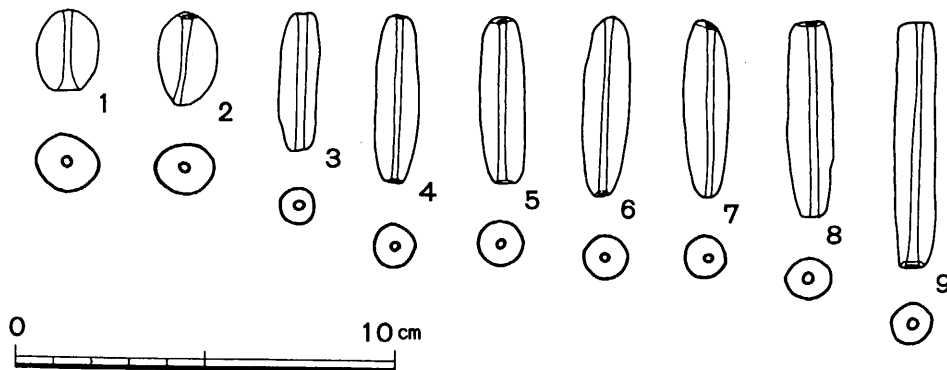
11. 土製品 (35・36図, 図版30)

土 錘 (35図, 図版30-1, 表11)

残欠を含めて20例が出土した。第11表①~⑮に示すとおり、大きく2つのグループがある。前者は①・②で重さ5.25g・全長2.5cm・径1.5cmを前後し、後者は①~⑮で同様に7.3g・5.1cm・1.2cmを前後する。いずれも砂粒をあまり含まぬ胎土で、焼成は普通、全体的に淡褐色を呈するものが多い。

番号	出土地点		重さg	全長cm	径cm	挿図番号	図版番号	備 考
	地区	層位						
①	K R 19	3層	5.0	2.1	1.55	35-1	30	
②	K 東半	4層上面	5.5	2.5	1.45	35-2	30	
	①・②平均		5.25	2.3	1.5			
③	K Q 27	3層	3.5	3.65	1.0	35-3	30	
④	K O 20		6.5	4.7	1.15	35-7	30	
⑤	K O 20		6.5	4.45	1.15	35-4	30	
⑥	K S 21	3層	7.0	5.2	1.3	35-8	30	
⑦	K O 26	4層	7.0	5.0	1.2		30	
⑧	K N 20		7.0	4.75	1.2	35-6	30	
⑨	K O 21		7.0	4.45	1.2		30	
⑩	K R S D 103溝	4層	7.5	5.1	1.2		30	
⑪	K N 20		7.5	4.45	1.2	35-5	30	
⑫	K S 25	4層	8.5	7.5	1.1	35-9	30	
⑬	K Q 22	4層	8.5	5.4	1.25		30	
	④~⑬平均		7.3	5.1	1.2			
⑭	K N 21		7.5+?	5.0+?	1.3			一部欠失
⑮	K S 26	4層	7.5+?	5.35+?	1.25			

11表 土 錘 計 測 表



35図 土 錘 実 測 図

カワラ玉類 (36・101図, 図版30—2, 12表)

2次(L区)出土例もここで述べることにする。1次(K区)で29例(滑石製1・瓦製20・土製3・土器製5)2次で21例(瓦製19・土製2)の計50例が出土し, その中で48例を第12表に示した。

ところで, その用途については確定するに至っていないので, ここでは第12表に示した計測値を中心に説明を加えるが, ①~④の表記順に際しては, 次の点に留意した。

①滑石製は, 石鍋を再利用, 再加工したもので, 当遺跡では, 多くの滑石製石鍋破片を利用して多種にわたる再加工品が製作されており(28~32図他), その加工の容易な点からしていま少しの出土をみてもいいと思われるが, 1例の出土にとどまっている。

②瓦製は, この種の玉類が「カワラ玉」として呼称されているとおりに, その出土例が一番多く, 一見して瓦の再加工によるものであることが多く, 縄, 布目痕や格子目痕を残す例が多く認められる。

③また瓦製は, 瓦原形に厚さが径よりも大きいものと小さいものの二者が存在する。

④次にその二者にあっては, 粗割面をそのまま残すものと, 研磨されたものが存在する。

⑤瓦製の今1つの特徴として, 径と厚さがほぼ等しく, 「玉」として, その原瓦器表面を残さぬまでに研磨されたものも存在する。

⑥土製は, 砂粒を含まぬ精製胎土を使用した例がほとんどで, 当初から「玉」を意識して製作されたと考えられる。

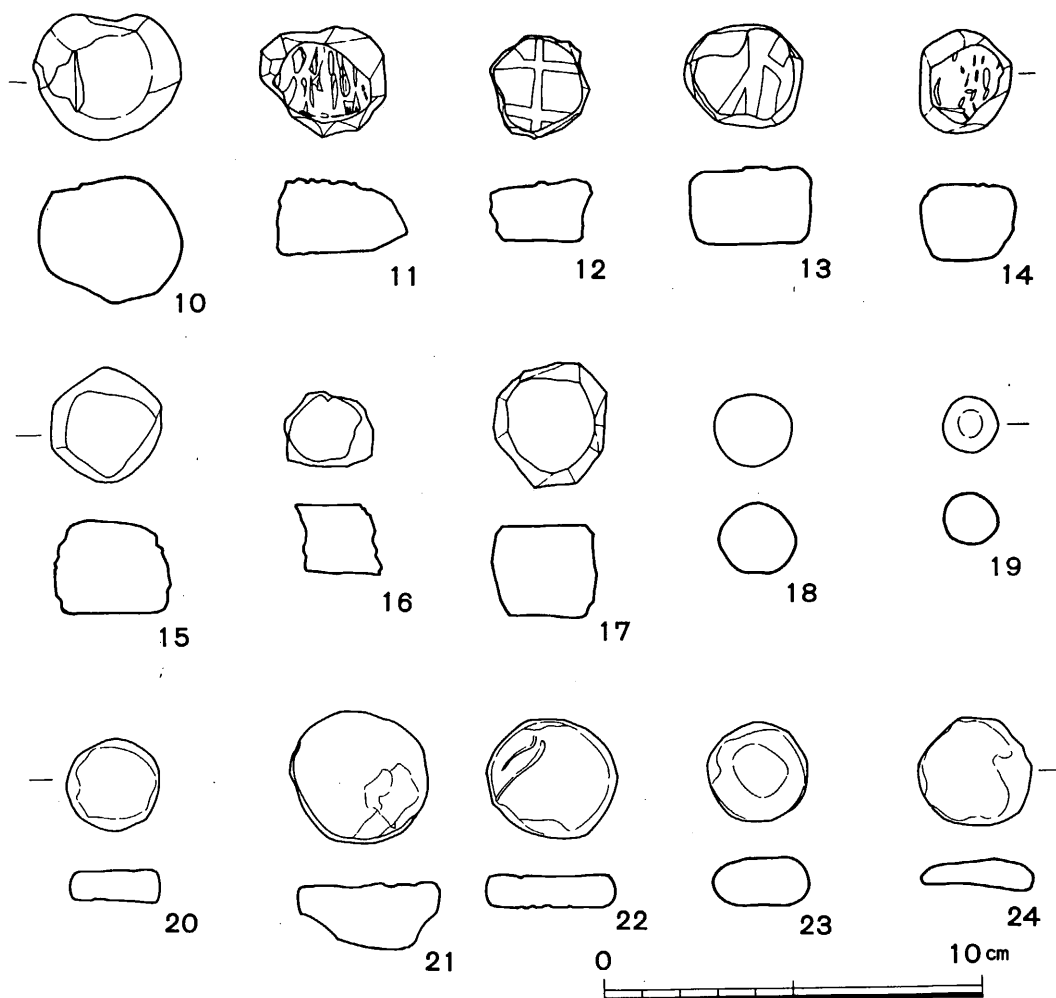
⑦土器製は, 土器片を再利用加工したもので, より入手可能な材であるが, いま少しその例が少なく, また土器原形における器壁の厚さの制限から来る「玉」としての形態的制約からして「土器製円板」と呼称する方がよいと考えられる。

①~⑦からして, 一応その材質・外形・加工度・重さ等の差異によって計測表を作成し, 次のⅠ~Ⅴ類を得た。(12表参照)

Ⅰ類……①で示される。滑石製石鍋再加工で, 粗割の面をそのまま残す1例のみである。より「玉」として研磨されたものの存在の有無は不明である。

Ⅱ類……瓦の再利用加工で, 原瓦器表面を残し, その径が断面径よりも大きい形状のもの。Ⅱa類は, 粗割面をそのまま残すもので, ②~⑩の平均は, 重さ23.5g・径3.1cm・厚さ2.1cm, Ⅱb類は, 粗割面を研磨して36図4・5に示すごとく全体的に丸く仕上げるものと, 粗割面を研磨したままの36図5・6に示したものの両者がある。⑪~⑲の平均は, 重さ19.3g・径3.0cm・厚さ2.1cm。

Ⅲ類……瓦の再利用加工で, 原瓦器表面を残す点はⅡ類と同様であるが, その図上での平面形の径が, 断面の厚さよりも小さい形状のもの。Ⅲa類は, 36図17に示すごとく, 粗割面をそのまま残すもので, ⑳~㉓の平均は, 重さ17.1g・径2.4cm・厚さ2.1cm。Ⅲb類は, 粗割面を



36図 カワラ玉類実測図

研磨して丸く仕上げるもので、⑳～㉓の平均は重さ16.3g・径2.6cm・厚さ2.2cm。

**IV類**……瓦の再利用加工ではあるが、原瓦器表面を全く残さぬまでに「玉」に仕上げる。㉔～㉗の平均は、重さ11.9g・径2.5cm・厚さ2.1cm。

**V類**……36図19に示す㉙のごとく、重さ3.5g・径1.4cm・厚さ1.5cmの小形例と、図に示す㉚のごとく、重さ11.5g・径2.45cm・厚さ2.1cmのIV類と同様の例がある。㉛～㉞の平均は、重さ8.5g・径2.0cm・厚さ2.0cm。

**VI類**……土器片再利用加工で「土器製円板」として別項に属するものであるが、ここで一括してとりあげる。㉟～㉜の平均は、重さ5.5g・径3.1cm・厚さ1.1cm。

番号	出土地点		材 質				製作段階			重さ g	径 cm	厚さ cm	挿図 番号	図版 番号	備 考
	地区	層位	滑石製	瓦製	土製	土器製	粗割	研磨	完成						
①	K区		○				○			58.1	3.8	3.5	36-2		石鍋鏝部
②	L X 40	No 1 土城内		○			○			15.5	3.2	1.6		65	布目痕
③	K R 25	2層		○			○			16.0	2.7	1.6	36-4	30	格子・布目痕
④	K R 26	落ち込み土中		○			○			18.0	2.8	2.2			
⑤	K			○			○			18.5	3.5	2.0	36-3	30	縄・布目痕
⑥	L W 42	4層		○			○			22.5	3.0	2.3		65	
⑦	K R 25	2層		○			○			23.0	3.2	2.55		30	格子目痕
⑧	K U 21	3層		○			○			24.5	3.2	1.9		30	
⑨	L R 37	4層		○			○			28.5	3.1	2.2	104-3	65	布目痕
⑩	L U 38	大溝上部		○			○			30.0	3.2	2.15	104-2	65	布目痕
⑪	L S 39	4層		○			○			39.0	2.8	2.6	104-1	65	
⑫~⑪平均										23.5	3.1	2.1			
⑫	K W 22	4層		○			○			12.5	2.65	1.7			
⑬	K W 22	4層		○			○			15.5	2.6	2.1			
⑭	K	SE110号井戸		○			○			16.5	2.55	2.05	36-6	30	縄目痕
⑮	L X 40	No 1 土城内		○			○			17.0	2.9	2.0	104-5	65	
⑯	L R 37	4層		○			○			18.0	3.1	1.9	104-6	65	
⑰	K	4層		○			○			19.0	3.3	2.15	36-5	30	格子・布目痕
⑱	L L 40	4層		○			○			19.0	3.2	1.9	104-4	65	
⑲	L U 42	No 4 土城内		○			○			19.0	2.9	1.9		65	
⑳	L V 39	方形土城内		○			○			20.0	3.0	1.9		65	
㉑	K S 26~29	4層		○			○			26.5	3.1	2.5	36-7	30	
㉒	K	表探		○			○			29.0	3.2	2.45		30	
㉓~㉒平均										19.3	3.0	2.1			
㉔	L			○			○			10.5	2.0	1.7	104-7	65	斜格子・布目痕
㉕	K U 26			○			○			11.0	2.0	1.85	36-8	30	
㉖	K Q 25	4層		○			○			13.0	2.35	2.2			
㉗	K T 22	3層		○			○			19.5	2.9	2.35		30	
㉘	K L 25	4層		○			○			32.0	2.7	2.5	36-9	30	布目痕
㉙~㉘平均										17.1	2.4	2.1			
㉚	K X 22	4層		○			○			14.5	2.6	2.2		30	
㉛	K X 22	4層		○			○			15.0	2.5	2.2			
㉜	L R 38	4層		○			○			16.5	2.8	2.0		65	
㉝	L V 38	方形土城内		○			○			16.5	2.6	2.25		65	
㉞	L T 35	8号井戸内		○			○			17.0	2.4	2.2	104-8	65	
㉟	K R 22	4層		○			○			18.5	2.65	2.3			
㊱~㉟平均										16.3	2.6	2.2			
㊲	L V 35	土城内		○			○			6.0	2.2	1.6		65	
㊳	K W 22	4層		○			○			9.0	2.3	2.0		30	
㊴	L Q・R 34	長方形土城内		○			○			14.5	2.65	2.4	104-9	65	
㊵	L P 38	3層上面		○			○			14.5	2.65	2.0		65	
㊶	L			○			○			15.5	2.7	2.4		65	
㊷~㊶平均										11.9	2.5	2.1			
㊸	K SE102号井戸付近			○			○			3.5	1.4	1.5	36-11	30	砂粒をほとんど含まない胎土
㊹	L T 40	方形焼土落込		○			○			7.5	2.0	1.75		65	砂粒を若干含む胎土
㊺	K O 19			○			○			8.0	1.9	2.1	36-10	30	砂粒をほとんど含まない精製胎土
㊻	L T・U 40	焼土落込土城内		○			○			11.5	2.45	2.1	104-10	65	砂粒をほとんど含まない胎土
㊼	K S 27			○			○			12.0	2.35	2.4		30	砂粒をほとんど含まない胎土
㊽~㊼平均										8.5	2.0	2.0			
㊾	K X 19~22	4層					○			5.5	2.4	0.8	36-12	30	精製胎土
㊿	K	3層					○			7.0	3.0	0.8	36-16	30	精製胎土、内面へら削り
①	K						○			9.5	3.5	0.85	36-14	30	砂粒を含む胎土、ハケ目
②	K X 19~22	4層					○			10.5	2.6	1.3	36-15		砂粒を若干含む
③	K O	4層					○			20.5	3.8	1.8	36-13	30	砂粒を含む
④~③平均										10.6	3.1	1.1			

12表 1・2次調査出土カワラ玉類計測表

このようにⅠ～Ⅵ類に大別したが、この6類分類によってその機能、用途を確保するまでには至らなかった。しかし以上の留意点からして2、3の点を指摘しておきたい。

(1)材質について……4種類の例が認められるが、「玉」を意図とする場合、Ⅵ類はその範疇に入らず、別の機能、用途を考える必要があり、Ⅴ類はⅢ類とは異質であり、また別途の用を指摘すべき可能性がある。

(2)製作段階について……Ⅱ類にあつてはa類の径平均は3.1cmで、b類のそれは3.0cmでほぼ等しく、Ⅲ類にあつても、径平均はa類2.4cm、b類2.6cmと同様の計測値を示すとおり、粗割から研磨へと考えたが、さらにⅢb類がⅣ類への仕上げ途中のものである可能性は強い。しかし、Ⅱb類からⅣ類へもその工程の移行を考えることは、Ⅲa類の存在からして、ここでは機能的に「玉」の意図が当初から存在していたとは言えず、用途もまた別なものとも言えよう。

(3)重さについて……衡としての分銅の具としての指摘は6.0gからgまでと多様性があり、漁撈用の錘としての指摘は穿孔や溝等が存在しない点から共に弱い。

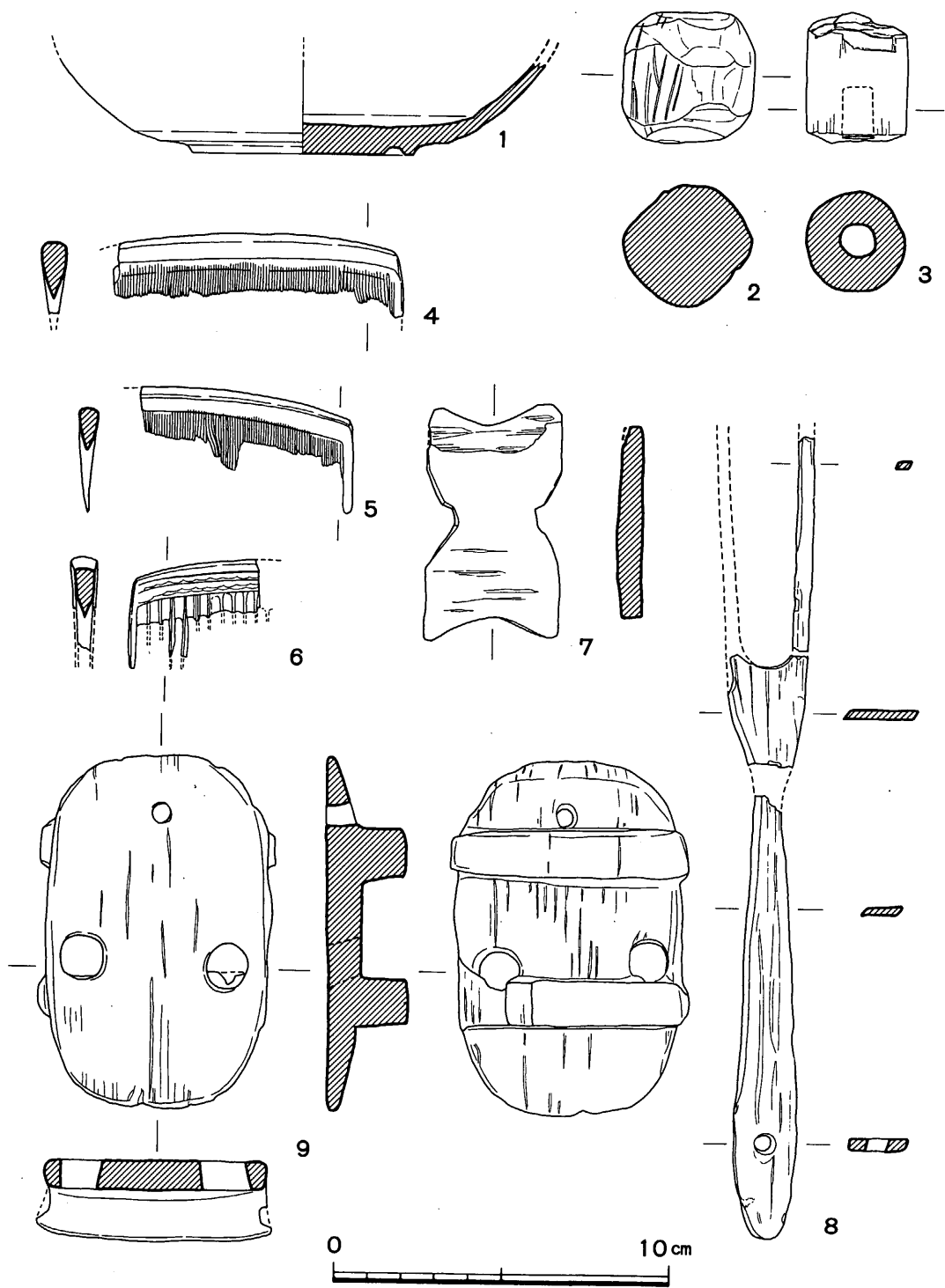
(4)形態について……Ⅰ類は他に比して大きく1例のみの出土であるが、b類としての研磨された段階の存在の有無の問題があり、32図21・22等の小形容器の製作途中のものであることも考慮され、「玉」とするには、いま少しの類例の出土を待たねばなるまい。その大きさからすれば37図2に示した毬打等に使用する玉も考えることもできるが、材質からして多少無理が生じよう。また、Ⅱ類も、その製作段階の項でも述べたとおり、Ⅲ・Ⅳ類と同じ「カワラ玉」として呼称するよりも、資料の増加を待って項を別にすべきであると考え。Ⅵ類に関しては、(1)で述べたとおり、「玉」の類に入らない。

以上のとおり、この項では「カワラ玉」類として一括して述べてきたが、材質、形態等において多種多様性が指摘され、その機能、用途の確定には最後まで至らなかった。その多種多様性からして、有方形孔円板の項でも述べたとおり、祭祀供献の儀仗食物類として一括することも若干考えてはいるが、今後の資材の増加を待つまでは、Ⅳ類を「瓦製丸玉」とし、Ⅲ類を「瓦製扁平丸玉」、Ⅴ類を「土製丸玉」、Ⅵ類を「土器製小円板」として区別し、それぞれにその用途を考慮すべきであろう。

## 12. 木製品 (37～41図, 図版31～34)

1次の調査では発掘区が氾濫原に近く、低湿地になるため木製品の遺存状態が良く、各種のものが多数出土している。漆器椀、箸、櫛、工具、下駄など衣・食・住の全般にわたっているが、住に関する建築用部材などの出土はみない。また用途不明のものも多数あり、杭列に使われていた杭は300本以上にもものぼる。

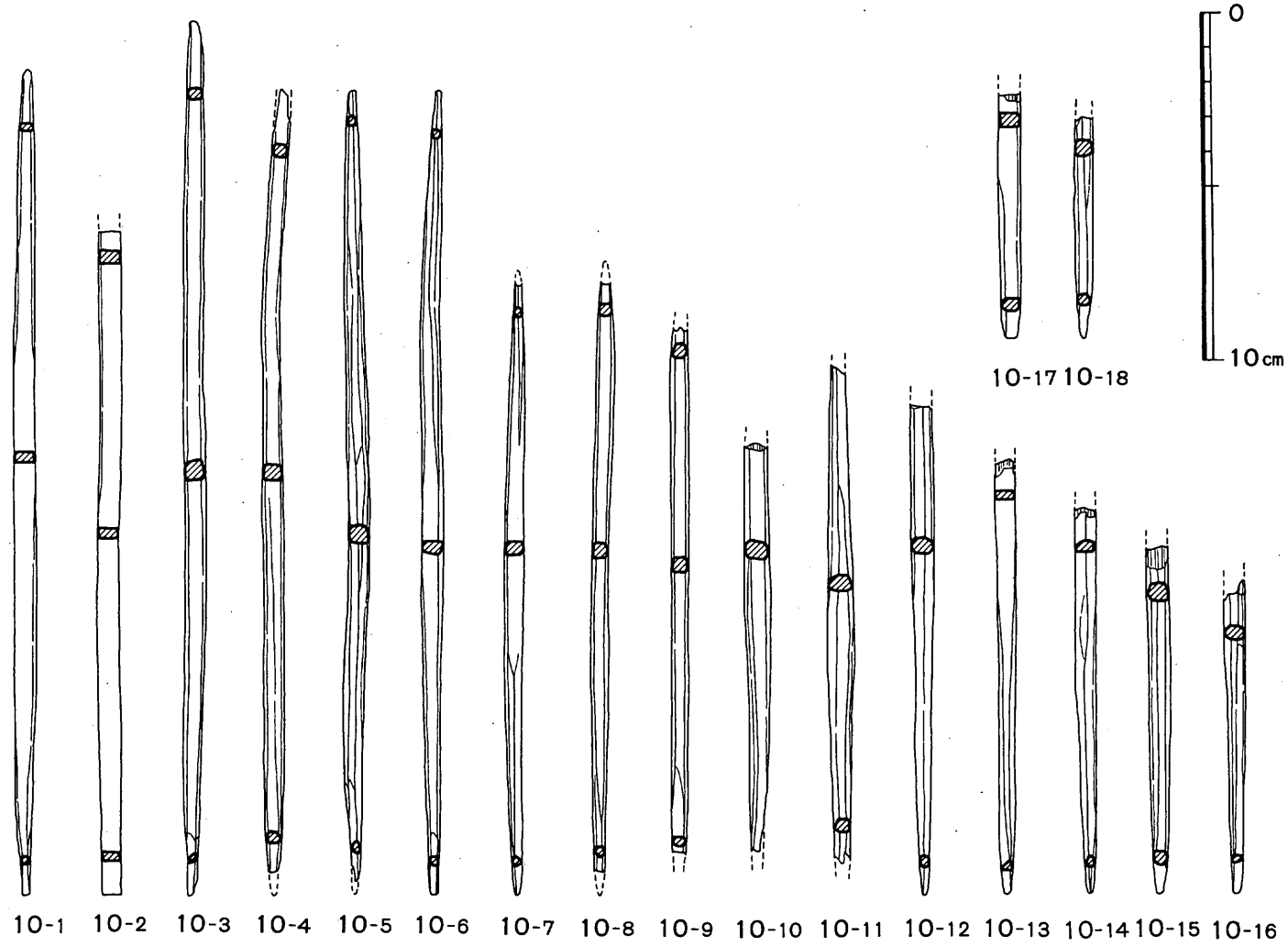
1は椀で、上半部を欠損するが比較的大きなものである。底部には両側から削り出した逆台形状の高台がみられる。5層上面出土。2はこけしの頭部に似た球状をなし、丸木の両端は丁



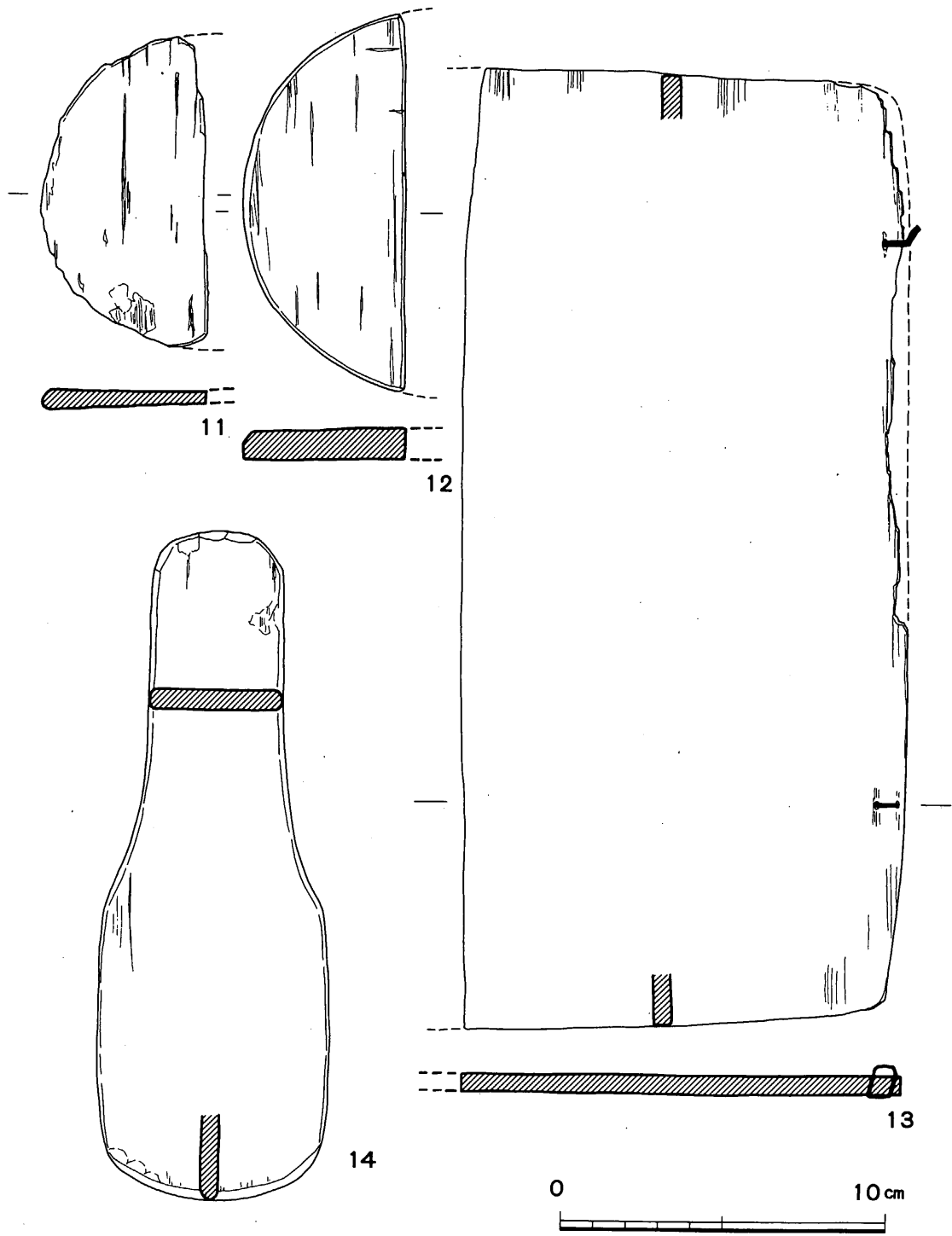
37图 木製品実測图 1

寧に仕上げられている。毬打の毬であろうか。SD103 溝出土。他にも小形のものが1点出土している。3も2に似るが、円筒形のもので、両端は荒い削りが残されたままである。一端より孔があけられているが貫通していない。KR27V字溝出土。4～6は横櫛で、いずれも半折している。4は歯の下半部を欠損し、1cmあたり13本の歯を有する。5層出土。5は1cmあたり14本の歯を有し、背はゆるやかな弧を描く。5層出土。6は2～3mmの間隙で歯を有するあらい櫛で、4・5が梳櫛とすればこれは解櫛であろう。黒の漆が塗られていて、歯の上部は表裏2面とも2本の線刻と、その間に3本の波状線刻を印して文様としている。5層出土。これら櫛の材質はわからないが、5次調査出土の櫛はイスノキが使われていることが判明している。7は4×7cmの長方形薄板の四辺中央をそれぞれV字状に大きく抉り込んだものである。糸巻きとして使える可能性もある。8は木製のフォーク状を呈し、先端が二又となるもので扇骨と考えられる。全長約25cm前後で遺存状態は好ましくなく、出土状態の写真によりその形状がわかる。使用材は軟質のものを用い、これを加工したものである。基部で厚さ5mm、先端部の方は薄く3mm程度の厚さである。基部にある孔には長さ1.6cmの木茎が残っており、4枚が重なっていた。木茎の一方は欠損しており、本来扇骨は4枚以上であったと考えられる。基部にある孔は5.5mm前後で、全て斜めに穿たれており、骨は断面でわかるように長形の菱形となっている。これは使用材の関係で骨が厚くなり、開きを滑めらかにするために考えられたものであろう。先端の二又に分かれる部分の長さは遺存状態からして7mm以上はあったと考えられ、この部分には紙あるいは絹等の薄い布が張られたものと考えられる。KR18区、5層出土。9は小児用の連歯下駄で、台長10.6cm、台幅6.8cm、高さ2.5cmをはかり、今までの出土例のうちでは最も小さい。楕円形の台に、径5mmの前鼻緒孔が垂直にあげられ、後の孔は径1.3cm前後で斜めに穿孔されている。歯は台形状で台部とのつけ根には歯をつくり出す際の刃跡が残されている。SE110 井戸掘り方内出土。他にもSD103 溝より連歯下駄と差歯下駄片が出土している。10は各地区から出土した箸で、とくにKN19区の木器溜りから多数出土している。長さに大小の2種があり、23cm前後のもの18cm前後のものに分かれ、両端を尖らせ多面の荒い削りが残されたままである。材質はわからないが、5次調査時出土のものはスギで作られていることが判明している。11は曲物容器の底板で、周縁は腐蝕しているが復元径約10cmをはかる。SE105 井戸内出土。12もやはり容器の底か蓋になるものと思われるが、厚さは1cmと厚く、桶に使われたものであろうか。片面に細かい刃物痕が残されている。復元径約12cmをはかる。13は半折した折敷の底板で一辺の長さは29.6cmをはかり、角は隅丸となる。2ヶ所に縫い合わせのための桜樹皮がみられる。SE103 井戸出土。14は杓子で、全長20.6cm、最大幅7.2cm、柄幅4.2cmをはかる。柄となる部分は少し分厚く、表裏の区別はない。SE101 井戸掘り方内出土。15は切り出し状の形をしたもので、先端部切り出しは刃部をつくらない。断面は扁平で、柄になると思われる部分は折損し全容はわからない。現存長9.8cmをはかる。16～18は籠状木製品で、16

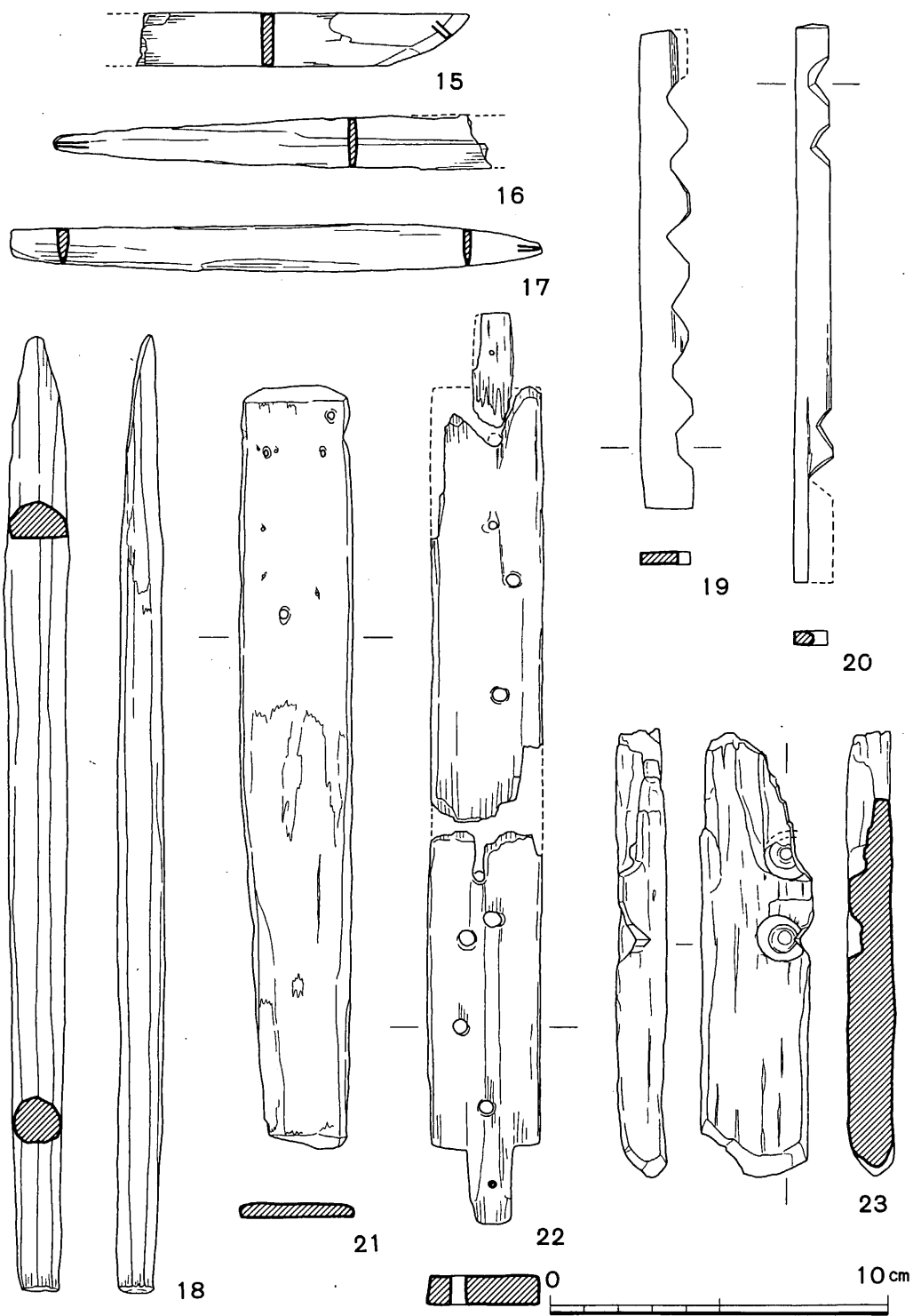




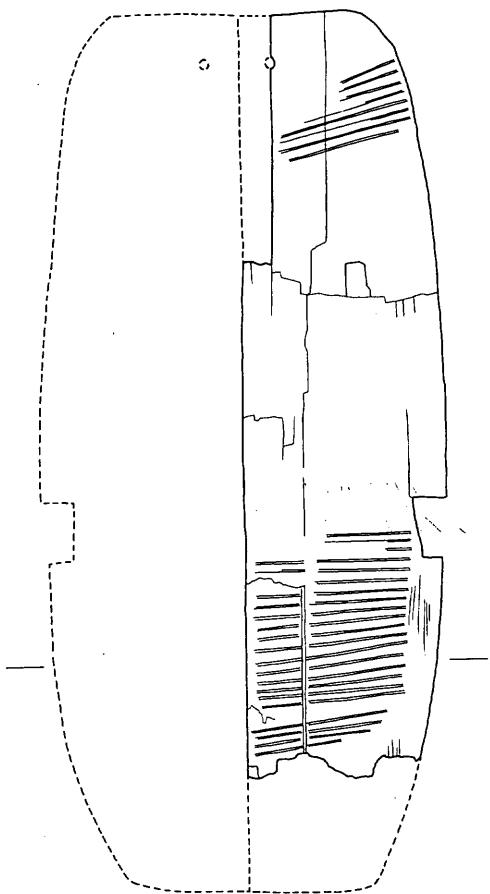
38图 木製品実測图 2



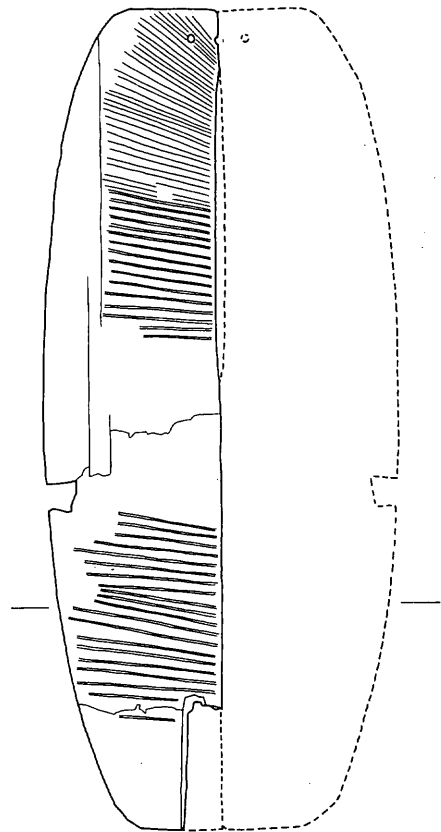
39圖 木製品実測図3



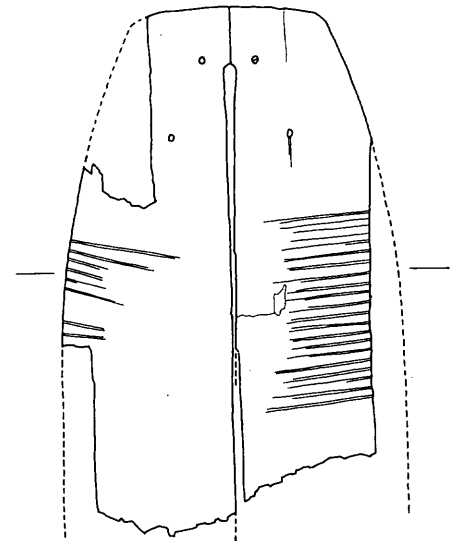
40图 木製品実測图 4



24



25



26

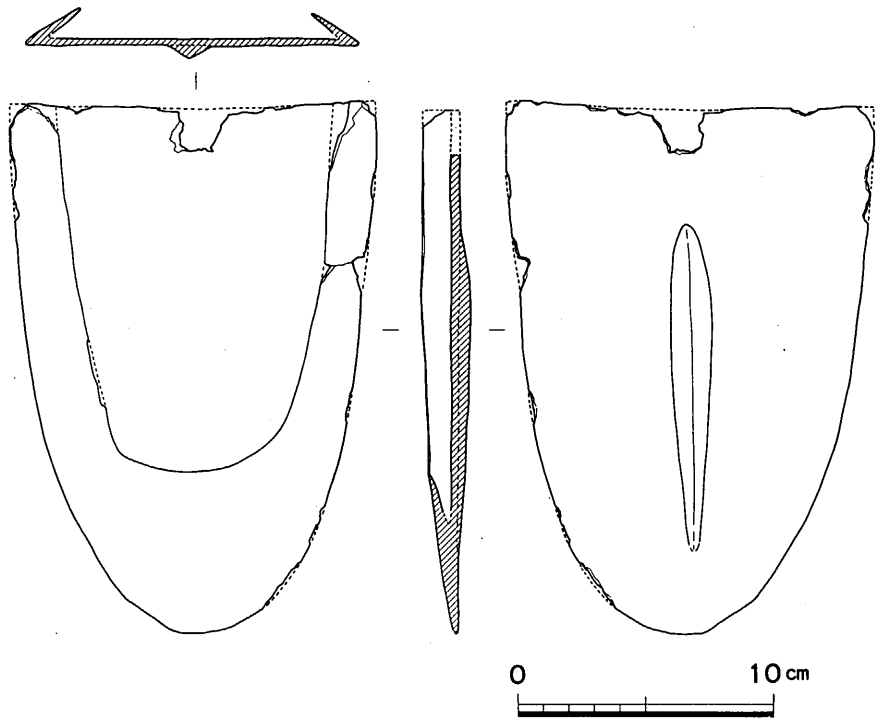


41图 木製品実測図 5

は先端部を欠損し、現存するのは柄の部分と思われる。断面は扁平であるが中位ではやや膨らむ。17は完形品で全長15.8cmをはかり、先端は剣状に尖っている。断面はV字形をなし下端は刃部状に削り出されている。5層出土。18は全長28.3cmをはかる完形品で、先端部がカマボコ型、柄部は多面体の台形をなす。S D 103 溝内出土。19・20は断面長方形の細長い板に片側からV字形の抉りを入れたもので、19は全長14.2cm、断面1.5×0.4cmの板に6ヶ所ほぼ等間隙に抉りを入れている。20は全長16.5cm、断面1.0×0.4cmの板に上下2ヶ所づつ抉りを入れている。調度具などの部材であろうか。ともにKN19区の木器溜りより出土。21は全長22.8cm、最大幅3.4cmをはかり、断面は0.4cmの扁平な板で表裏ともに丁寧に仕上げられている。上端近くの両側がわずかに抉り込まれ、径2～3mmのもの1mmほどの2種類の孔があいている。釘あるいは木栓の抜き跡であろうか。墨書の痕跡などはみられない。5層出土。22は扁平な板材の両端に長さ2cmほどの柄をつくり出し、そこに固定のための小孔が穿たれ、下端のものは木栓が挿入されている。復元長約27cm、最大幅3.3cm、厚さ0.9cmをはかる。中央部にも0.4mmほどの孔が9ヶ所穿たれている。5層出土。23は火鑕臼で、両端を欠損し現存長13.2cm、幅3.3cm、厚さ2.3cmをはかり、切り込みは細長い板材の側面に約1cmの間隙で2ヶ所にみられる。臼部は径1.4cm、深さ0.4cmで周囲は黒く焼き焦げている。臼部の断面は逆台形で底面には径3mm、高さ1.5mmほどの一段高い平坦面がみられる。このことは発火棒である火鑕杵の下端部が尖ったものではなく、円筒形をなすもの、例えば竹のようなものであったことが想像される。なお火鑕法による発火には発火棒を両手でもむ様鑕法と、火鑕杵に横木あるいは弓を紐で結びつけその上下運動による回転で発火させる舞鑕法があるが、その回転運動を助ける分銅にかなうものが当遺跡で多数出土している滑石製の有孔円盤である可能性が強い。S D 103 溝内出土。24～26は草履状木製品で、いずれも一部欠損している。第5次の調査でも多数出土しており、当遺跡のほかに広島県の草戸千軒町遺跡や尾道市の地下遺跡からも出土していて類例もふえているが、草戸千軒町遺跡では草履状の履物ではないかと考えられている。24は復元長約23cmで、弧状外縁中央よりやや下位にコの字状の切り込みをつくっている。S E 104 井戸内出土。25もS E 104 井戸内よりの出土であるが24に比し全長21.6cmとやや短く、切り込みも小さい。26は左右一対で出土しているが、ともに下半を欠損している。上端短辺側に孔が穿たれ、普通2孔で一対をなすものであるが、これは2ヶ所づつ計4ヶ所に孔がみられる。S E 107 井戸内出土。

### 13. 鉄製品 (42図, 図版35)

鉄製品は犁鏡の1点が出土したのみである。犁鏡は周縁の一部が若干欠損するのみで、ほぼ完形品である。平面形は二等辺三角形を呈し、先端はやや尖鋭である。肩幅は14.3cm、長さ約20cmで、身の厚さは0.3cm前後である。表のほぼ中央に舟形の隆条(長さ12.8cm、最大幅1.6cm、最大幅0.5cm)がある。裏面の周縁には犁床を嵌装するための溝がある。舟形の隆条は土を



42図 鉄製犁鏡 実測図

分け土くれを小さく砕くか、土ばなれをよくするための機能をもつものであろう。犁鏡は鑄鉄製であるが、器面は確認できる範囲では滑らかであり、使用痕は認められない。第3層出土のものである。伴出する土師器から鎌倉時代のものであり、犁鏡の出土から当時における畜力を利用した耕作のあったことが考えられる。

なお、類例品の出土は広島県草戸千軒遺跡（1例）を古くは島根県匹見町広瀬出土（2例）があり、草戸千軒遺跡のものは室町時代後半の時期に所属するものであり、広瀬出土のものについては、草戸千軒遺跡のものとはほぼ同時期と考えられている（註1）。これら3例は当遺跡出土のものに比べ大形である。

この犁鏡については註1に掲げる木下忠氏の論文に詳しく述べられている。

註1. 木下忠「島根県匹見町広瀬出土の犁鏡の再検討」『考古論集—慶祝松崎寿和先生63歳論文集—』松崎寿和先生退官記念事業会編所収 1977年3月

## 14. 銅 銭 (43図, 図版36, 32表)

第1次調査では計37枚の銅銭が出土し、そのうち判読可能なものは2点を除く17種35枚を数える。7・15・31は文字の一部を欠損するが、7は熙寧元寶、15は宣和通寶もしくは宣和通寶、31は開元通寶があてられよう。また、1と2および25と26はそれぞれ銹着して出土している。銭種別で最も多いのは熙寧元寶で6枚、つづいて皇宋通寶の5枚、天聖通寶・開元通寶の各3枚の順となる。11世紀前半から12世紀初頭の北宋銭が主体を点めるのは過去の調査例でも同様であるが、特に今回は南宋の淳熙元寶・開禧通寶および李氏朝鮮の朝鮮通寶が初めて出土している。層位的にみれば2層からの出土が最も多く15枚出土し、年代的には11世紀後半のものが多く、開禧通寶(1205年)が下限である。3層では11世紀前半のものが多く、宣和通寶(1119年)が下限である。4層からの出土は2層につき多く、これも11世紀後半のものが主で、下限は元豐通寶(1078年)であって、層序と銅銭の年代は一致しない。ただし4層のSX103 杭列付近にて出土した銅銭は腐蝕が著しく、文字面は不鮮明ではあるが「朝鮮通寶」と判読でき、その初鑄年は1423年で15世紀前半となり、確実に4層に伴りものとすれば当遺跡の土師器の編年観も再検討が必要となるであろう。

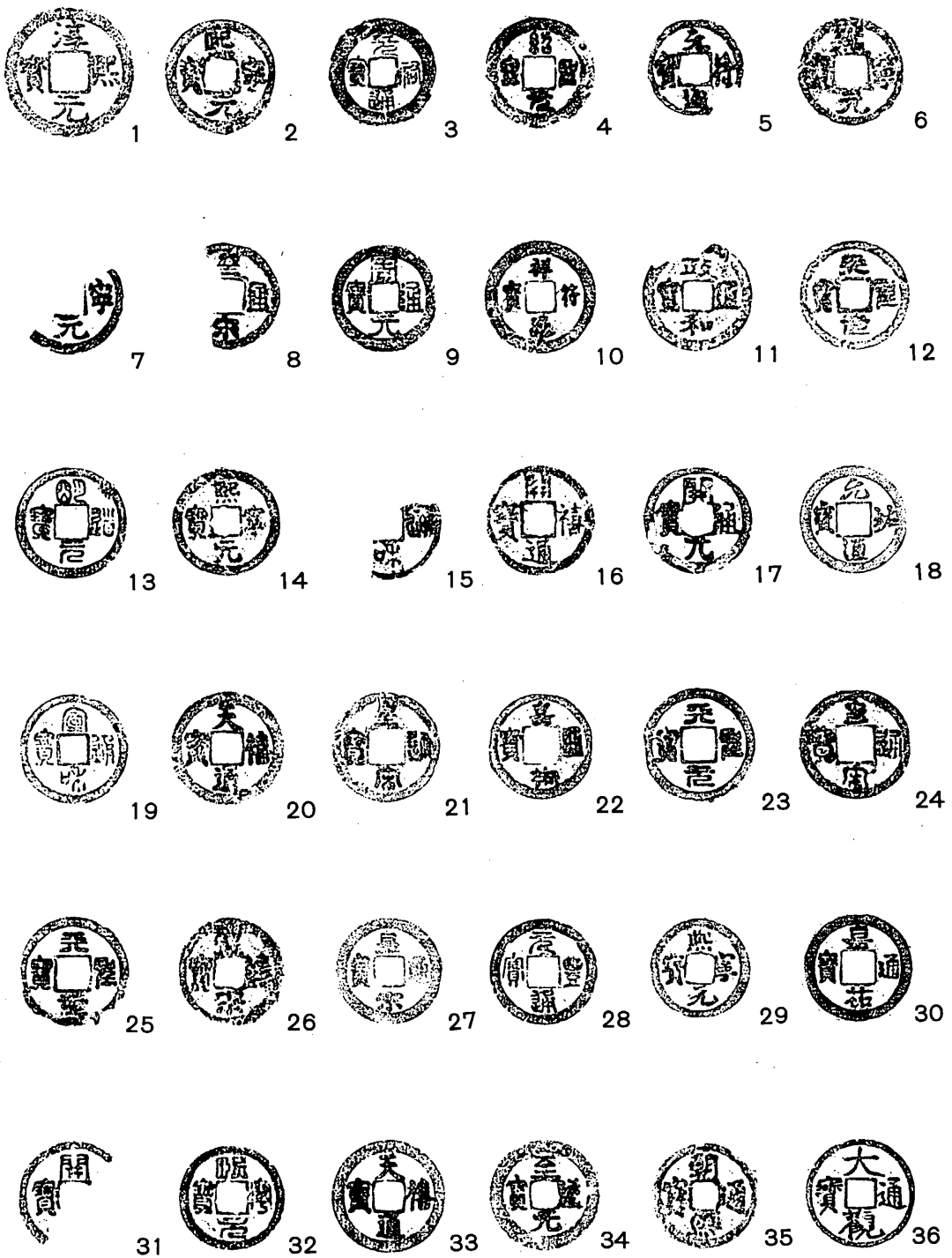
図版 番号	銭貨名	外 径		外縁 厚さ	出土地点		初 鑄 年	備 考
		水平	垂直		地区	層位		
1	淳熙元寶	29.45	29.40	2.200			南宋孝宗 1174	背面に「ㄣ」「・」の鑄印あり } 銹着
2	熙寧元寶	26.50	26.00	1.45			宋 神宗 1068	
3	元祐通寶	24.60	25.10	1.45			〃 啓宗 1086	
4	紹聖元寶	25.05	25.00	1.85	KS 29	2層	〃 〃 1094	
5	元符通寶	21.80	22.00	1.20	KS 18	〃	〃 〃 1098	
6	熙寧元寶	24.23	24.65	1.45		〃	〃 神宗 1068	
7	□寧元□			1.20	KU 25	〃	〃 〃 〃	熙寧元寶
8	皇宋通□		28.80	1.30	KR 27	〃	宋 仁宗 1039	皇宋通寶
9	開元通寶	23.85	24.25	1.55	KP 15	〃	唐 高祖 621	
10	祥符通寶	25.45	25.50	1.60	KS 28	〃	宋 真宗 1008	
11	政和通寶	24.80		1.20	KS 29	〃	〃 徽宗 1111	
12	天聖元寶	24.80	24.80	1.50	KS 28	〃	〃 仁宗 1023	
13	明道元寶	25.10	25.05	1.15	KP 28	〃	〃 〃 1032	
14	熙寧元寶	25.00	24.30	1.75	KS 28	〃	〃 神宗 1068	
15	□和通□			1.20	KS 28	〃		宣和通寶 政和通寶
16	開禧通寶	24.75	25.00	1.75	KS 28	〃	南宋寧宗 1205	
17	開元通寶	24.40	24.00	1.15	22列	〃	唐 高祖 621	背面上方に仰月「ㄣ」の鑄印あり
18	元祐通寶	24.55	24.35	1.85	KR 27	〃	宋 哲宗 1086	
19	宣和通	24.90	25.00	1.50	KR 28	3層	〃 徽宗 1119	
20	天禧通寶	25.85	25.80	1.65	KR 27	〃	〃 真宗 1017	
21	皇宋通寶	24.75	24.80	1.30	KR 28	〃	〃 仁宗 1039	
22	嘉祐通寶		24.00	1.40	KP 29	〃	〃 〃 1056	
23	天聖元寶		25.05	1.35	KQ 29	〃	〃 〃 1023	

図版 番号	錢貨名	外 径		外縁 厚さ	出土地点		初 鑄 年	備 考
		水平	垂直		地区	層位		
24	皇宋通寶	25.00	24.55	1.45	KP 21	4層上面	宋 仁宗 1039	
25	天聖元寶	25.20	25.35	1.25	KP 21	〃	〃 〃 1023	} 銹 着
26	皇宋通寶	24.05	24.55	1.50	KP 21	〃	〃 〃 1039	
27	皇宋通寶	24.30	24.35	1.25	KT 25	4層	〃 〃 〃	
28	元豐通寶	24.05	24.10	1.80	KT 22	4層	宋 神宗 1078	
29	熙寧元寶	22.60	22.30	1.45	KU 22	〃	〃 〃 1068	
30	嘉祐通寶	24.25	24.30	1.10	KM 26	〃	〃 仁宗 1056	
31	開□□寶			1.45	KO 19	〃	唐 高祖 621	開元通寶
32	熙寧元寶	23.95	23.85	1.30	KT 21	〃	宋 神宗 1068	
33	天禧通寶	25.50	25.55	1.30	KS 29	〃	〃 真宗 1017	
34	至道元寶	25.00	24.80	1.45	KT 26	〃	〃 太宗 995	
35	朝鮮通寶	23.60	23.65	2.00	SX103	4層杭付近	朝鮮 世宗1423	
36	大觀通寶	24.55	24.45	1.60	SE102	井戸	宋 徽宗 1107	
					KP21	4層上面		

32表 銅錢計測一覽表

(單位 mm)

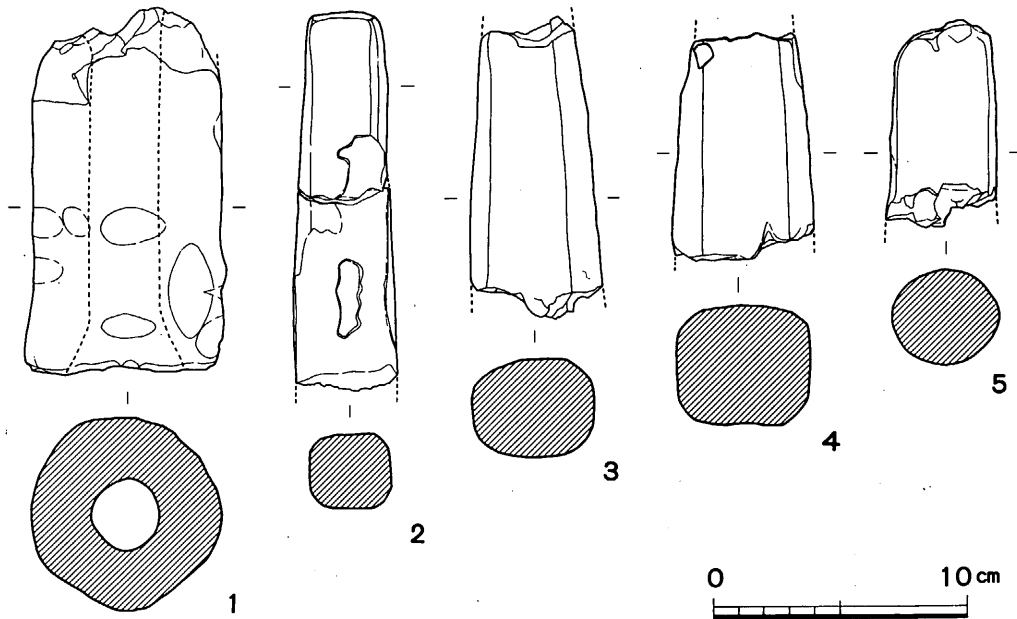




43图 銅錢拓影

## 15. 鋳物関係遺物 (45図)

第1次調査で出土した鋳物関係遺物は5点である。鞆羽口1点と支脚状土製品である。1は鞆羽口である。全体に二次加熱を受けており、先端方がより強く熱を受けてもろくなって欠損している。中央の円形孔は径2.7cmで基部は径4.7cmとラッパ状に開いている。胎土は粗く、多量の砂粒子を含む。2～5は支脚状土製品である。2は方形柱状のもので、一方が幅広となるもので、欠損している。端部は平坦である。二次加熱を受けており器面の一部が剥落している。胎土は粗く石英粒を多く含む。3は両端を欠くものである。やはり二次加熱を受けており器面の剥落が全面にわたっている。胎土は石英粒を多く含み粗い。4はやや大形のものである。両端を欠損し、二次加熱を一面にのみ受けている。胎土は少量の石英粒を含むがよく精製されたもので硬く焼上がり、器面の剥落はない。5は断面は円形状を呈するものである。胎土はよく精製したものを使用し、硬く焼上がっている。端部は平端ではない。



45図 鋳物関係遺物実測図

## Ⅲ．第 2 次 調 査

### 一、調 査 経 過

第2次調査は6AYECL区で実施した。当調査区は第1次調査の6AYECK区の南に西日本鉄道太宰府線をはさんで隣接する。標高約34mの水田地であり、大宰府政庁との関係では、政庁中軸線より東へ約635m、観世音寺より南へ約495mの地点にあたる。地番は太宰府町字平野2700—1番地である。

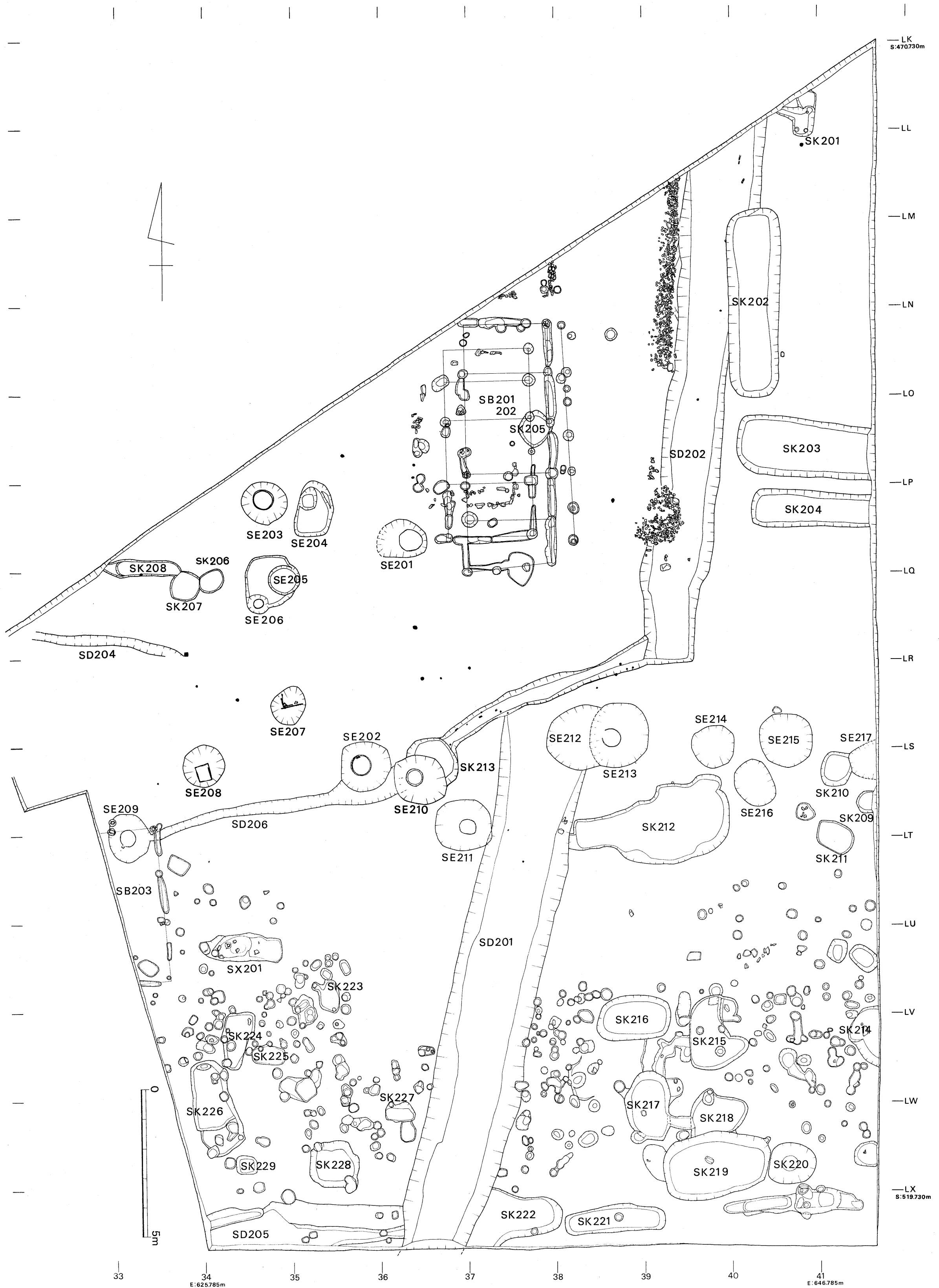
調査は調査区全域に一辺3mのグリッドを設定し、第1次調査で得た調査方法の経験を生かし、全面にわたって上層から掘り下げる調査方法を取った。

調査は6AYECK区の調査と一部併行して始め、昭和47年9月13日から昭和48年3月17日までの間に実施した。

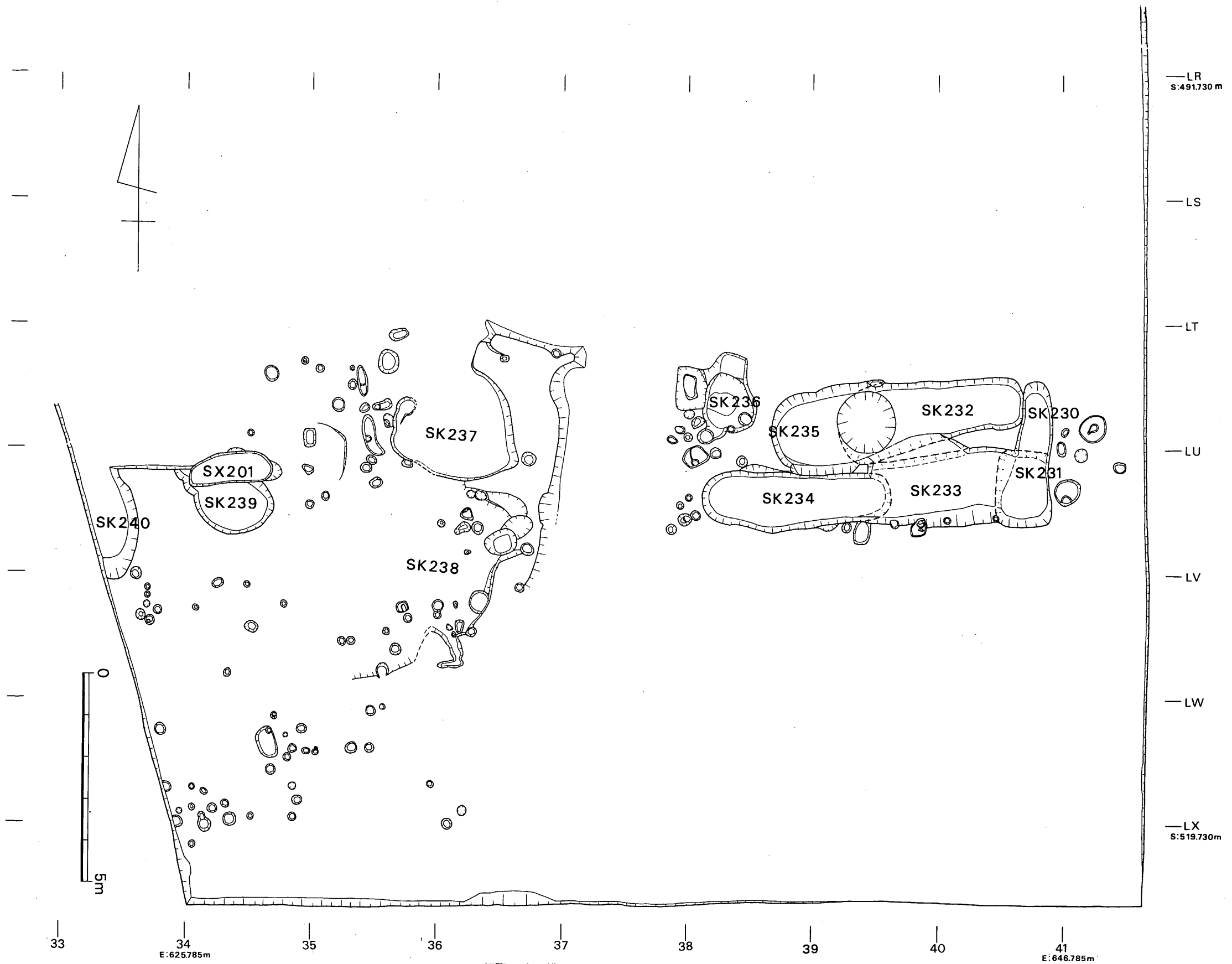
### 二、層 位

6AYECL区は地表面ではほぼ水平であるが、調査の結果地山面は南側に高くなっており、地表下約30cmで地山の黄色粘土層に達し、調査のほぼ中央部でこの地山は消失し、これより北は6AYECK区と同様に地表下約1mで青色粘土層に達するゆるやかな傾斜のある地区である。しかしながら土層はほぼ水平の堆積状況を示している。これは後述する第4層が整地層で、この層がほぼ水平に整地されていることも一因と考えられる。

**第1層**は耕作土で約10cmの厚さである。近世の染付陶器等が出土している。**第2層**は黄褐色の床土が約10~15cmの厚さで堆積し、**第3層**に茶褐色土層が北側に厚く堆積し、南側では一部にこの土層のない部分がある。この第3層からは糸切り底土師器、磁器、陶器、石製品、土製品、瓦、鉾滓等の多量の遺物が出土している。**第4層**は黒褐色土茶褐色土の混合土層で整地層で、調査区中央部(LV列)から北側にのみにある土層である。この第4層を遺構面とする上面の遺構群があり南側に密集する。この第4層からは糸切り底土師器を主とする遺物が出土している。**第5層**は黒褐色粘質土層で約30cmの厚さである。糸切り底土師器、瓦器、磁器、陶器、石製品、土製品、木製品、鋳物関係遺物や呪術関係遺物等が出土している。**第6層**は青色粘土



46図 遺構配置図 1



47図 遺構配置図 2

層で下面の遺構面となっている。50～60cmの厚さで堆積し、この下の層は砂層、砂礫層となり6AYECK区と同じである。

遺物は第3層と第5層に多くの遺物を出土するが、時期的には大差はない。第2層、第3層を上層とし、第4層は中層ともいうべきであるが、第5層、第6層と共に下層として取り扱った。

### 三、遺 構

第2次調査では上、下の二面において遺構が検出された。出土した土師器から時期的には大差はないが、便宜上、上面遺構と下面遺構とに分けた。上面では2条の溝と建物2棟および柱穴群と土壇、窯跡を、下面では溝1条と井戸、土壇、柱穴がある。

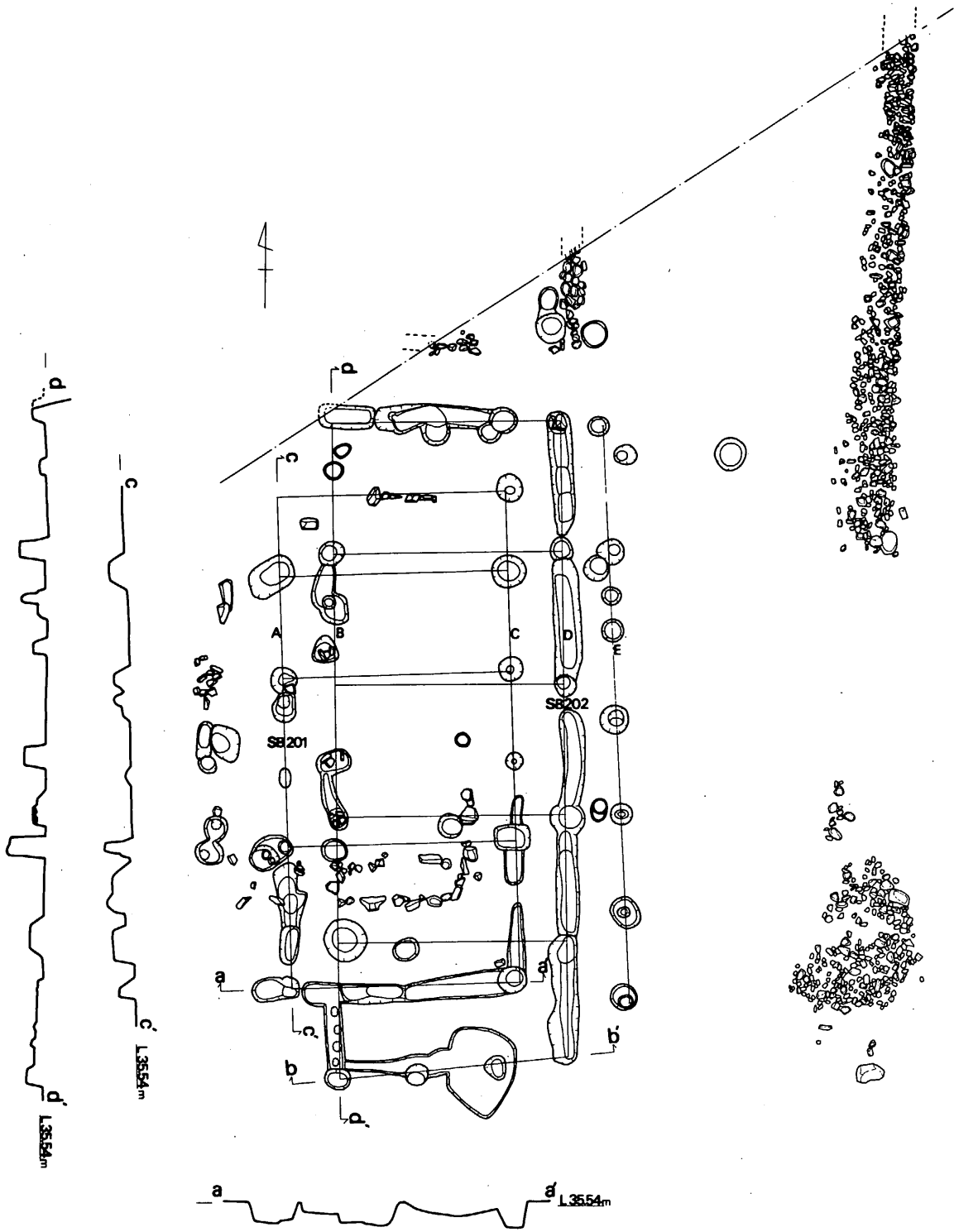
#### 1. 建物・柱穴

柱穴は径10～20cmのものが多数検出された。これらは調査区南半部に密集し、北半部は非常に少ない。これらの柱穴は建物としてまとまるものは南半部に全くなく、反面柱穴の少ない北半部（整地層上面）に3棟の建物が確認された。このうち2棟は重複するもので調査区中央の北例に、他の1棟は調査区西側で検出された。

SB201・202建物（48図、図版40・41）は重複するもので当初は1棟の建物と考えられていたが、後述するように2棟の建物が考えられる。これらの建物の主軸とほぼ平行して延びる石列がある。この石列河砂利をやや高く積み上げたものであるが、これが建物といかなる関連があるのかは不明である。

建物の規模・構造については、ほぼ南北に並ぶ柱列が5列あり、これを西からA～E列と呼称しておく。このうちE列はその位置と対称となる柱列がないことから柵状の柱の穴と考えられ、A～D列間の柱穴群をもって一棟の建物と考えていたが、A・B列間とC・D列間の間隔が非常にせまく、かつ東西方向の柱の通りが極めて不規則であり、構造上あり得ないものと考えられた。よってA・C列とB・D列が対称となる二つの建物が遺存するものと考えられ、前者をSB201とし、後者をSB202建物とした。

SB201建物は長辺3間、短辺1間の南北に長軸を置き、長辺の支柱間に間柱を配している。柱穴間の一部には溝を掘っており、このことから南辺と東・西辺の一部は土壁で、他面は建具等による構造の建物と考えられる。



48图 S B 201 · 202 建物实测图

S B 202 建物は長辺 5 間、短辺 1 間の南北に長軸を置き、S B 201 より長大な建物である。南・北、東の各辺の柱穴間は溝が掘られており、このことからこの間は土壁と考えられ、西辺も一部が土壁であるほかは、建具等からなる構造のものであろう。

この二つの建物は柱間が一定せず、いずれも南辺の柱列が直交する線上にはないが、柱の曲っていたことも考えられ（中世代の建物に類例がある）、しかも桁間である程度調整することも可能であったろうから、柱穴の位置などはそれほど問題とはならなかったであろうし、この建物が平面プランからして作業小屋的な性格をもつものと考えられ、住家とは違ってある程度は融通性をもって建てられたものと思う。

これら二つの建物の新旧関係については、柱穴あるいは溝の切り合いでは確認できず、柱穴群中の南側に遺存する長形状に角礫を配する遺構によって把めそうである。すなわち配石遺構はその上・下部になんの施設も遺っていない用途不明のものであるが、その西辺はS B 202 建物の両側壁とほぼ重複する位置にあり、S B 202 建物の付属施設としては西壁に寄りすぎ、S B 201 建物の付属施設として考えたほうがより妥当な位置にある。よってこの配石遺構の遺存状態からしてS B 201 が新しいものと考えられ、しかも極めて短期間のうちに新・再建されたものと想定される。

S B 203 建物は竈跡（S X 201）の西側において検出されたが、建物の大半が調査区外にあり、正確な規模、構造は不明であるが、S B 201 と同じように基礎部に溝を掘っている。

## 2. 溝

上面では調査区の南半で、南北に延びるS D 201 溝とその南側で接するS D 205 の溝が検出された。いずれも黄色の地山を掘り下げたものである。

S D 201 溝は南北方向よりやや東へ片寄って掘られた大溝である。最大幅2.4m、最小幅2mである。溝底は細かい砂層となり湧水が著しく、南と北での高低は大差はない。遺物は糸切り底土師器、磁器、陶器、常滑陶器、片口、土鍋、石鍋、瓦等が出土している。

S D 205 はほぼ東西に延びる溝である。溝幅は南側が調査区外であるため不明である。溝は東側すなわちS D 201 に接する方が幅もせまく、溝底は浅くなっており、西に徐々に深くなっている。遺物は糸切り底土師器等が出土している。

下面では調査区の北半でS D 202～204・206の4条の溝が検出された。いずれも青色粘土層に掘り込まれたものである。S D 202 は南北方向よりやや東へ片寄っている大溝で調査区の中ほどから北へ延びている。南端ではS K 214 から延びるS D 203 が接続し、この部分の溝幅はやや狭く約1.7mであるが、最大幅は約2.5mを測る。溝底は砂層までに達しており、深さ30～40cmを測り、北にやや深くなっている。この溝の上面において、西側肩部に一部かかるようにS B 201 の東側に並行して延びていた石列が重複する。溝内には黒褐色の腐食土が堆積し、これに



糸切り底土師器（Ⅱ—4類）、磁器、陶器、瓦器、常滑陶器、石製品、鋳型、木製品（箸が多い）等の遺物が出土している。

**S D 203** は S K 214 土壇と S D 202 溝を接続する小溝である。最大幅80cmで、溝底までの深さはほぼ20cmであり、東側の S D 202 溝に向かって若干低くなっている。この溝は S K 214 土壇から発しているが、S K 214 は S E 210 井戸に接しており、本来この S E 201 井戸と係わりのある付属施設と考えられる。遺物は糸切り底土師器、磁器、瓦、鋳型等が出土している。

**S D 204** は調査区の北東隅付近で検出された。ほぼ東西方向に延びるもので、東端はやや南に方向を変えさらに延びるものと考えられるが検出は困難であり不詳である。幅は40cm前後で、深さ7cm前後の小溝である。糸切り底土師器、磁器が出土している。

**S D 206** は S E 209 井戸から発するもので、S E 210 井戸に続くものである。これがさらに S D 203 溝に続くものかは確認できなかった。溝は基部付近で幅20cmで、先端部（東側）は40cmと広がり、深さにおいても先端方向が深くなっている。この S D 206 溝も S D 203 溝と同様に井戸と関係のあるもので排水に用すべく設けられたものと考えられる。

### 3. 土 壇

土壇は上、下面で40基が確認されたが、このほかにも土壇と考えられる落ち込みが二、三ある。上面のものは調査区の南半に集中し、下面のものはほぼ全域にみられる。上面は S K 214 ~ S K 229 土壇で、下面は S K 201 ~ S K 213, S K 230 ~ S K 240 土壇である。これらの土は形態、規模等に差異があり、形態的には円形、方形、長方形、不整形に大別される。

円形土壇は **S K 205~209, S K 220** がある。なかでも S K 220 は摺鉢状の深いものであるが、他は深さ10~20cmの浅い壇である。S K 220 からは土師器、磁器、陶器、土鍋、曲物、箸等の多数の遺物が出土している。

方形土壇は **S K 201, S K 210, S K 228** がある。いずれも小規模のもので、壇底は浅い。S K 201 は黒褐色粘質土が堆積し、土師器、磁器、陶器、石製品、板材片等が多数出土している。S K 228 内は茶褐色土が堆積し、壇内からは鋳物関係遺物が出土している。

長方形土壇は **S K 202** のように短辺に対し長辺の長いものと、**S K 216** のように短辺の広いものがある。この長方形土壇は他のものに比べ壇底が深いものである。また、これらは S K 201 の長軸方向が南北方向であるほかは、ほぼ東西方向に長軸線を置く特性があり、なんらかの規則性があるように想定される。

**202, S K 203, S K 204** 内はいずれも S D 202 と同じく黒褐色粘質土が堆積し、壇底は砂層に達している。いずれも多数の遺物を出土し、とくに S K 202 は漆器が出土した。

**S K 221** は細長い土壇で、壇底中央に深さ30cmの小ピットが掘られている。土師器、須恵器等が出土している。

SK232~234 も細長い長方形プランを呈するものと考えられるが、SK231~233の上部は焼土で覆われ、SK233は坑内にまで焼土が混入している。これらの土坑内からは鋳物関係遺物が多数出土している。

不整形土坑はSK212、SK215 等のように平面形を把握できるものと、SK237・238 のように平面形の明瞭でないものがある。いずれも坑底は浅い。SK212 は焼土が坑内に堆積し、SK215 と共に土器類のほか鉄釘、鋳滓などが出土している。SK238 においても坑内から土器類のほか鋳型、鑄羽口が出土している。

以上のように土坑は分類できるが、出土遺物の内容を見ると、全般に土師器、磁器が非常に多く、特徴的な状況としては北側の低湿地に所在する坑内には木製品が多く含まれ、南側のやや高い位置にある坑内からは焼土や鋳物関係遺物、鋳滓などが出土していることである。

土坑のあるものはその形態からして埋葬遺構と考えられるものがあるが、遺物の内容や出土状況からして、埋葬遺構とは考えられず、後述するSX201 窯跡のような遺構の存在も考えると、これらの土坑は鋳物製作においてなんらかの係わりのある遺構と考えられる。

14表 土 坑 一 覧 表

遺構番号	地 区	旧 番 号	平面形態	規 模			出 土 遺 物
				長径	短径	深さ	
SK201	LL41	土 坑	方 形	0.95×0.7 ×			土師器Ⅱ-3類, 磁器7C類, 陶器1・8・11類, 片口, 砥石, 板材片, 炭
◇ 202	LN・LO41	長方形土坑	長 方 形	2.4 ×1.8 ×0.5			土師器Ⅱ-1~2類, 磁器7・7b・7C・9類, 石鍋, 土鍋, 片口, 砥石, 有孔滑石板, 漆器
◇ 203	LP41・42	長方形土坑	長 方 形	2 ×0.4			土師器, 須恵器, 磁器6類, 陶器(叩き褐緑釉), 片口, 土鍋
◇ 204	LQ41・42	長方形土坑	長 方 形	1.3 ×0.23			土師器, 磁器7A・7C類, 陶器3・10類, 片口, 瓦質椀, 砥石
◇ 205	LP38	円形竪穴5号	円 形	1.13×1.05×0.1			瓦質椀
◇ 206	LR35	円形竪穴2号	円 形	0.94×0.71×0.2			土師器, 須恵器, 磁器9類, 陶器3類, 石鍋, 土鍋, 瓦
◇ 207	LR34	円形竪穴1号	円 形	1 ×1.04×0.1			須恵器(甕), 土鍋, 片口, 瓦
◇ 208	LQ34	長方形坑	長 方 形	2.3 ×0.51×0.17			土師器, 須恵器, 磁器7・7A・7B・9類, 土鍋, 砥石, 瓦玉, 鋳滓, 瓦
◇ 209	LT42	円形竪穴3号	円 形	0.75×0.2			須恵器, 磁器7・7B・7C類, 陶器10・11類, 内黒土器, 瓦
◇ 210	LT42	円形竪穴4号	方 形	1.2 ×1.05×0.2			土師器, 磁器7C類, 陶器1・3類, 瓦
◇ 211	LT・LU42	No 4 土坑	長 方 形	1.21×0.96×0.1			土師器Ⅱ-1~2類, 磁器7A・7B・8・9類, 陶器7・11類, (青白磁瓶把手), 瓦玉, 瓦
◇ 212	LT・LU 39・40	焼土落込み土坑	不 整 形	5.35×2.65×0.3			土師器Ⅱ-2類, 須恵器, 磁器1・6・7A・7B・7C類, 陶器7・11類, 片口, 瓦質甕, 石鍋, 硯, 鉄釘, 鋳滓
◇ 213	LS・LT37		円 形	1.93 ×0.3			
◇ 214	LW42		円 形	2 ×0.15			

SK215	LV・LW40	No 5 土 塚	不 整 形	2.5 × 2.1 × 0.25	土師器, 土鍋, 瓦質甕, 瓦, 鉄釘, 焼土
◇ 216	LV・LW 39・40	方 形 土 塚	長 方 形	2.48×1.52×0.4	土師器, 須惠器, 片口, 瓦玉, 鉄釘, 刀子, 焼土, 炭
◇ 217	LW・LX 39・40	土 塚	不整長方形	2.33×1.56×0.3	
◇ 218	L X40		不 整 形	1.9 × 0.2	
◇ 219	L X40・41	No 1 方形土塚	長 方 形	3.1 × 2.2 × 0.3	土師器Ⅱ-2~3類, 須惠器, 磁器1・6b・7・7A・7B・9類, 陶器7類, 瓦質椀, 石鍋, 鑄冶関係
◇ 220	L X41	円形土塚	円 形	1.55×1.4 × 0.6	土師器Ⅱ-2~3類, 須惠器, 磁器3・5・7・7A・7B・7C類, 陶器3・7類, 土鍋, 片口, 曲物, 箸
◇ 221	L Y39・40	土 塚	長 方 形	3.45×0.95×0.15	土師器, 須惠器, 磁器4・7・11類, 片口
◇ 222	L Y38	土 塚	不 整 形	1.25×0.3	土師器, 須惠器, 磁器7・12類
◇ 223	L V36	土 塚	不 整 形	1.05×0.7 × 0.06	土師器, 瓦, 鑄型
◇ 224	L W35		不 整 形	1.91×1.0 × 0.1	
◇ 225	L W35		長 方 形	1.15×1.1 × 0.1	
◇ 226	LW・LX 34・35		長 方 形	2.33×1.4 × 0.2	
◇ 227	L X37		長 方 形	1.05×0.65×0.3	
◇ 228	L X36	No 6 土 塚	方 形	1.65×1.55×0.2	土師器, 須惠器, 磁器9類, 陶器3類, 石鍋, 砥石, とりべ
◇ 229	L X35		方 形	0.7 × 0.61×0.2	
◇ 230	L U41	長方形土塚	長 方 形	0.7 × 0.3	土師器Ⅱ-2新類, 須惠器, 磁器7類, 陶器10類, 片口
◇ 231	L V41	方形土塚	長 方 形	(1.8)×(1.25)×0.35	土師器Ⅱ-2類, 須惠器, 磁器7A, 陶器3・7・8・11類, 片口, 瓦, 硯, 焼土
◇ 232	L U40・41	長方形土塚	長 方 形	(4.5)× 1.25 × 0.4	土師器Ⅱ-2類, 須惠器, 磁器6b・7B・7C・9・11類, 陶器10・11類, 瓦質椀, 片口, 石鍋, 鑄型
◇ 233	V41焼土落込中 L V40・41	長方形土塚	長 方 形	(4)× 1.82 × 0.45	土師器, 磁器3・7A・7B・7C・9b類, 陶器1・3・8・11類, 片口, 土鍋, 瓦質椀, 支脚, 鉈滓
◇ 234	L V39・40	長方形土塚	長 方 形	(4.7)× 1.4 × 0.3	土師器, 須惠器, 磁器7・7B・7C・9類, 陶器3・8・10類, 常滑, 片口, 支脚, とりべ, 瓦
◇ 235	L U39・40	隅丸長方形土塚	長 方 形	2.1 × 0.4	土師器, 須惠器, 磁器3・7A・7B・9類, 陶器3・8・10類, 片口, 瓦質甕, 椀
◇ 236	L U39	円形ピット	不整円形	1.4 × 1.3 × 0.5	土師器, 磁器7B類, 瓦質甕, 片口, 瓦
◇ 237	LU・LV 36・37	隅丸方形土塚	不 整 形	2.9 × 0.2	土師器, 須惠器, 磁器4・7・9類, 瓦質椀, 黑色土器, 土鍋瓦
◇ 238	L V・LW 36・37	円形土塚	不 整 形	0.2	土師器Ⅱ-3類, 須惠器甕, 磁器6・7・9類, 陶器1・3類, 瓦質椀, フイゴ羽口, 鑄型, 石鍋, 土鍋, 片口
◇ 239	L V35	土 塚	円 形	1.9 × 0.2	土師器Ⅱ-4類, 須惠器甕, 磁器6・7・8類, 陶器1・3・7・10類, 猿投(?), 瓦玉, 土鍋
◇ 240	L V34	土 塚	不 整 形	0.3	土師器, 須惠器甕, 磁器9・10類, 土鍋, 樽

(単位 m)

## 4. 井戸

2次の調査では17基の井戸が検出され、すべて上層からのものだけである。井戸側の組み合わせ別では、曲物だけのもの1、方形枠縦板組の井戸1、桶+桶の井戸6、方形枠縦板組+桶+桶のもの1、抜き跡8である。分布状況についてみると、調査区の北半に集中しているのは南半が粘質土の地山で湧水層が深く、北半が御笠川の氾濫原に一部かかるため必然的に北半に集中したものであろう。

以下各井戸についてみると、

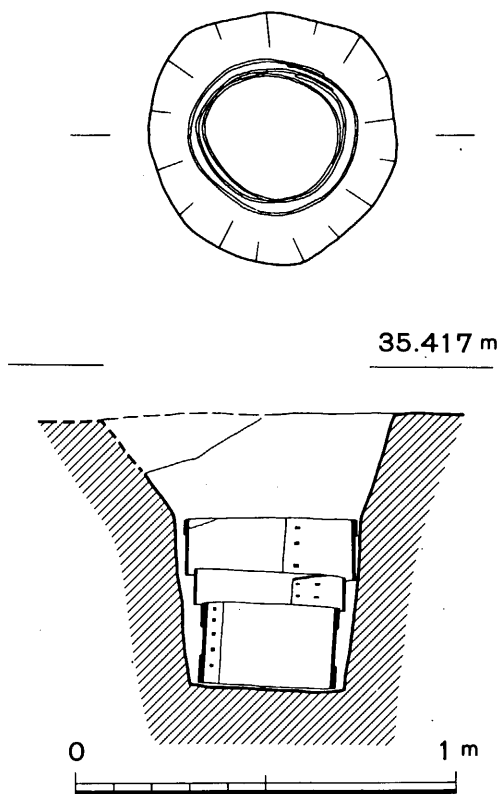
**S E 206** (49図, 図版47-2)

掘り方平面は円形で径0.66m、深さは0.73mをはかる小形の井戸である。井戸側は曲物を3段に積んだもので、下段のものは高さ21cm、内径34cmで、上下端は外側から6cmの幅で二重に巻かれている。中段のものは高さ10cm、内径39cm、上段のものは高さ16cm、内径53cmをはかり上端は4cmの幅で外側から二重に巻かれている。掘り方上面と曲物上段とは約30cmほどの空間があり、曲物の上に別の井戸側が構築された可能性もあるが板材などは検出されておらず不明である。ただ、一次の調査でも曲物みの井戸S E 109 が検出されていて、S E 206 井戸と同様な構造を

なすがこれも上部の構造については不明である。井戸内からの出土遺物は土師器Ⅱ-3~4 or 5類、瓦が出土している。

**S E 208** (50図, 図版49)

掘り方平面は楕円形をなし長径1.5m、短径1.4m、深さは0.76mをはかる。井戸側は方形枠縦板組1段だけのもので、まず上下2ヶ所づつ4個の柄穴を穿ち、下端を尖らせた角杭を四隅に立てて隅柱とし、柄穴に丸杭を差し込んで上下2段の横棧として一辺48cm×43cmの枠組みをつくり、それに外側から長さ70cm、幅20cmほどの薄板を5~6枚ほどあてて側板としたもので



49図 S E 206井戸実測図

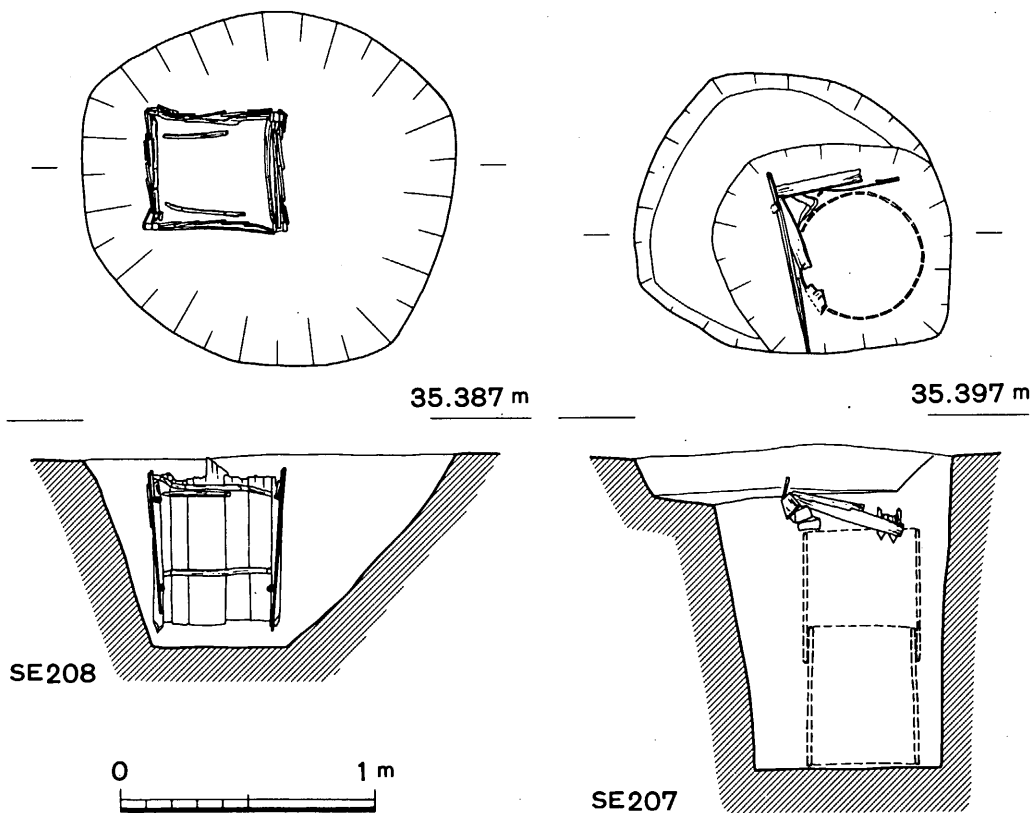
ある。また東側側板では更に外側から幅3cmの板を横に構架して添え木とし、側板の補強としている。井戸内からは土師器Ⅱ-1~3類、青磁、陶器、瓦玉、ふいご羽口などが出土している。

**SE207** (50図, 図版48)

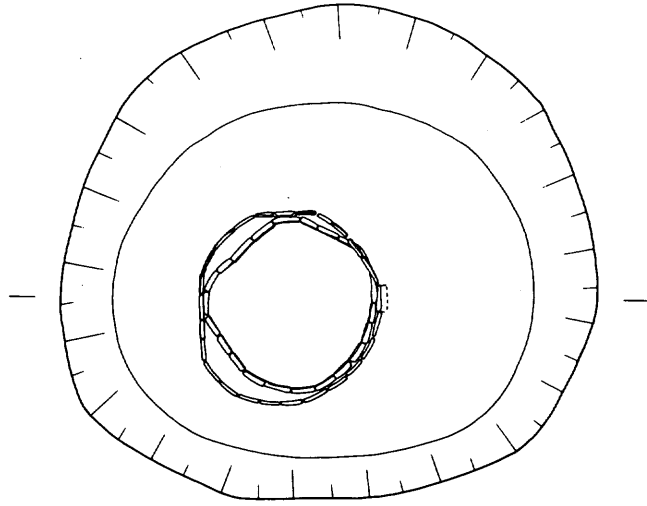
隅丸方形に近い掘り方を有し、長径0.95m、短径0.83m、深さ1.24mをはかる。井戸側はほとんどが抜かれていて上段に方形枠横板組の西と南の側板を残すのみである。四隅の隅柱はみられず、コーナー部には角礫が裾えてあり、縦板を打ち込んで横に構架した側板をささえている。中・下段も井戸側が抜かれているが、痕跡から桶の使用が考えられる。井戸内からは土師器Ⅱ-3類、青磁、石鍋、土鍋、片口などが出土している。

**SE201** (51図, 図版46-1)

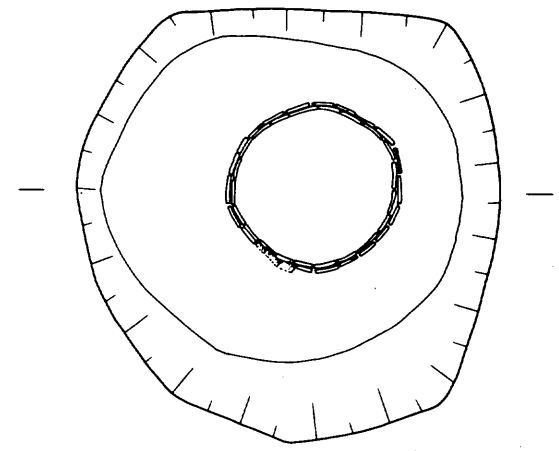
長径2.12m、短径1.95mの平面楕円形を呈し、深さは1.95mをはかる大きな掘り方を有する。井戸側は掘り方中央に桶を2段に裾えたもので、上段のものは現存長67cm、下端内径76cmで、分厚い25枚の桶板を下半部で1ヶ所タガにより緊縛している。8枚の桶板には方形孔が穿たれている。下段の桶は高さ95cm、内径65cmをはかり、22枚の桶枚が使われているがうち10枚は方形孔が穿たれている。上中下の3ヶ所タガによる緊縛がみられる。上段桶と下段桶の接合部隙



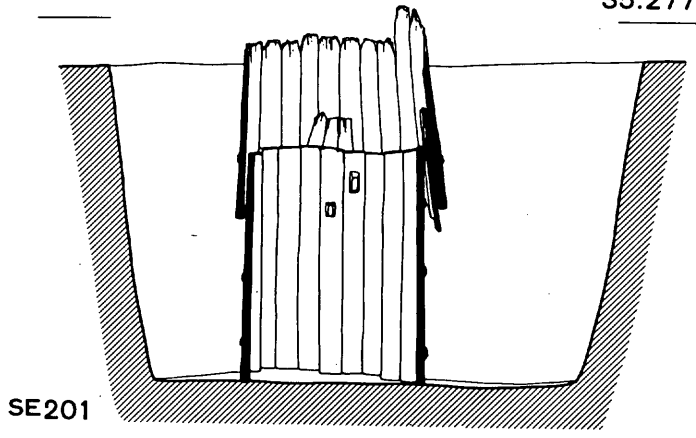
50図 S E207・208井戸実測図



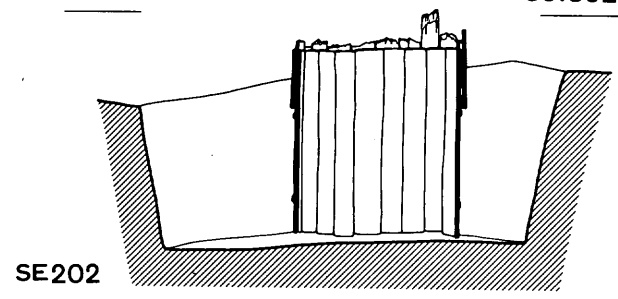
35.277 m



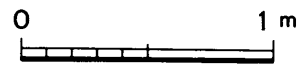
35.302 m



SE201



SE202



51 図 S E201・202井戸実測図

間には別の桶板を数枚挿入して固定している。井戸内からは土師器、須恵器甕口縁、青磁、白磁、常滑陶器、滑石製品などが出土している。

**S E 202** (51図, 図版46-2)

掘り方は長径1.7m, 短径1.65mの不整円形をなし、深さは0.68mと比較的浅い井戸である。井戸側は掘り方の中央に桶が2段裾えられたもので、上段の桶は現存長40cm, 内径66cmをはかり、21枚の桶板がタガにより下半で緊縛されている。下段の桶は高さ74cm, 内径62cmで23枚の桶板が使われ、中と下半の2ヶ所タガで締められている。またS E 201 井戸と同様に下段桶との隙間に板材が挿入されている。掘り方内より漆器椀が、井戸内より土師器Ⅱ-2~4類、青磁、陶器、砥石、支脚、華瓶鋳型、曲物片などが出土している。

**S E 203** (52図, 図版47-1)

長径1.55m, 短径1.5mの不整円形の掘り方を有し、1.26mの深さをはかるが、一部東側は2段掘りとなっている。井戸側は桶を2段に裾えたもので、上段の桶は現存長32cm, 内径75cmをはかり22枚の桶枚がタガにより緊縛されている。下段の桶は高さ1m, 内径64cmで、20枚の桶枚が使われ、うち7枚は下端に方形孔を有する。タガは上部に1ヶ所みられるだけである。上桶と下桶との接合部隙間には小礫や瓦を詰め込んでいる。井戸内より土師器Ⅱ-3~4類、青磁、土鍋などが出土している。

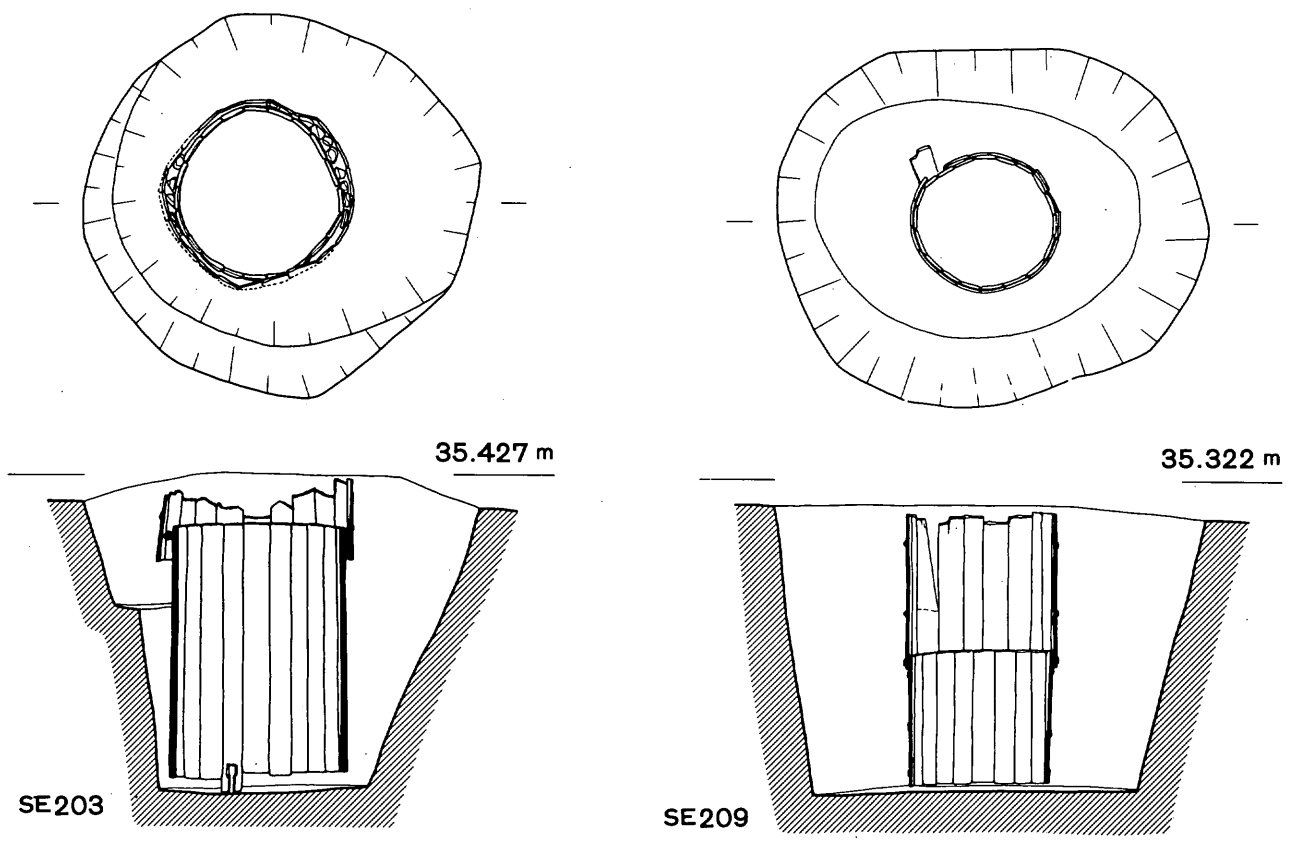
**S E 209** (52図, 図版50-1)

調査区の最も西側にて検出された井戸で、掘り方平面は不整円形をなし、長径1.65m, 短径1.55m, 深さ1.19mをはかる。掘り方の東肩からはS D 206 の浅い溝が東へ延びていて、これはS E 202 井戸、及びS E 210 井戸を経由してS D 203 溝へと続き、S D 202 大溝へと流れ込んでいる。井戸の排水路とも考えられる。井戸側は桶を2段に裾えたもので、上段の桶は高さ62cm, 内径57cmをはかり、18枚の桶板が上中下の3ヶ所でタガにより緊縛されている。下桶は高さ53cm, 内径54cmをはかり、19枚の桶板が3ヶ所タガにより緊縛されている。井戸内より土師器Ⅱ-1~2類、青磁、土鍋、石鍋、鋳型、墨書陶器などが出土している。

**S E 211** (53図, 図版50-2)

S D 201 溝の西肩付近にて検出され、掘り方は長径1.97m, 短径1.64mと大きなもので、深さは0.83mをはかる。井戸側は中央よりやや東寄りに小型の桶が2段に裾えられている。上段の桶は現存長42cm, 内径54cmをはかり下端に1ヶ所タガによる緊縛がなされている。下段桶は高さ48cm, 内径50cmで下半部に3ヶ所タガによる緊縛がなされている。井戸内より、土師器Ⅱ-3類、弥生式土器、青磁、白磁、フイゴ羽口などが出土しているが、S E 110 井戸掘り方から出土した土師器壺と同一個体のものが当井戸の掘り方からも出土しており、両者はほぼ同時期頃のものと考えられよう。

**S E 213** (53図, 図版51)



35.427 m

35.322 m

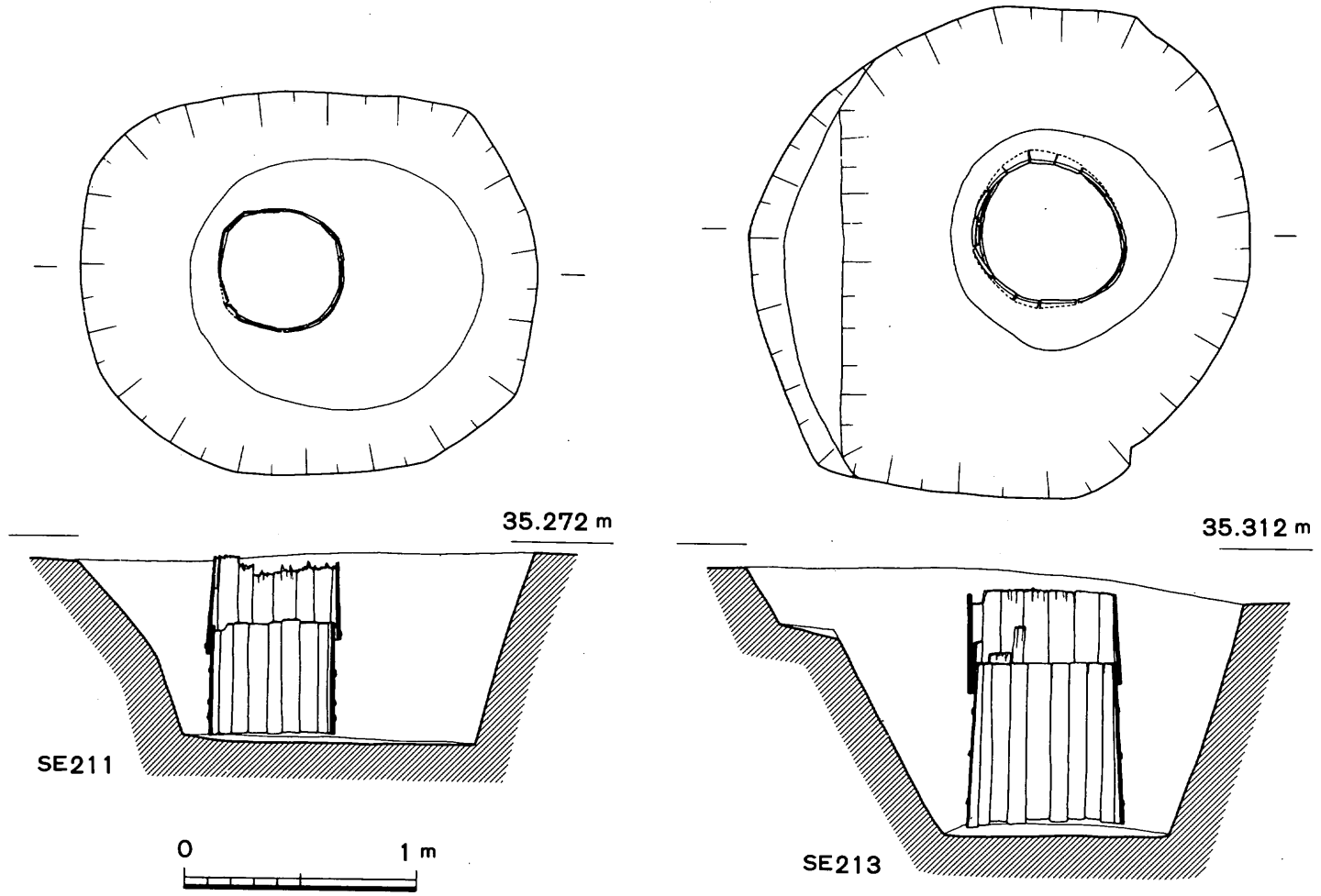
SE203

SE209



52图 SE203・209井戸実測図





53图 S E211 · 213井戸実測図

S D 201 溝の北端付近にて検出され、S E 212 井戸を切って使られている。掘り方は長径2.15m、短径2.11mで楕円形を呈し、東側は2段掘りで深さは1.08mをはかる。井戸側として桶が2段に据えられ、上桶は現存高53cm、内径60cmをはかり、16枚の桶板が中下2ヶ所タガにより緊縛されている。下桶は高さ70cm、上端内径59cm、下端内径66cmで下端の方が拡がり、下端は不ぞろいである。22枚の桶板が使われ、3ヶ所にタガによるがみられる。出土遺物としては土師器Ⅱ-2～3類、白磁、常滑陶器、片口などがある。

S E 204・S E 205・S E 210・S E 212・S E 214・S E 215・S E 216・S E 217はいずれも井戸側の抜かれた抜き跡であるが、そのうちS E 214、S E 216は桶が据えられていたことが予想される。

15表 井戸一覧表

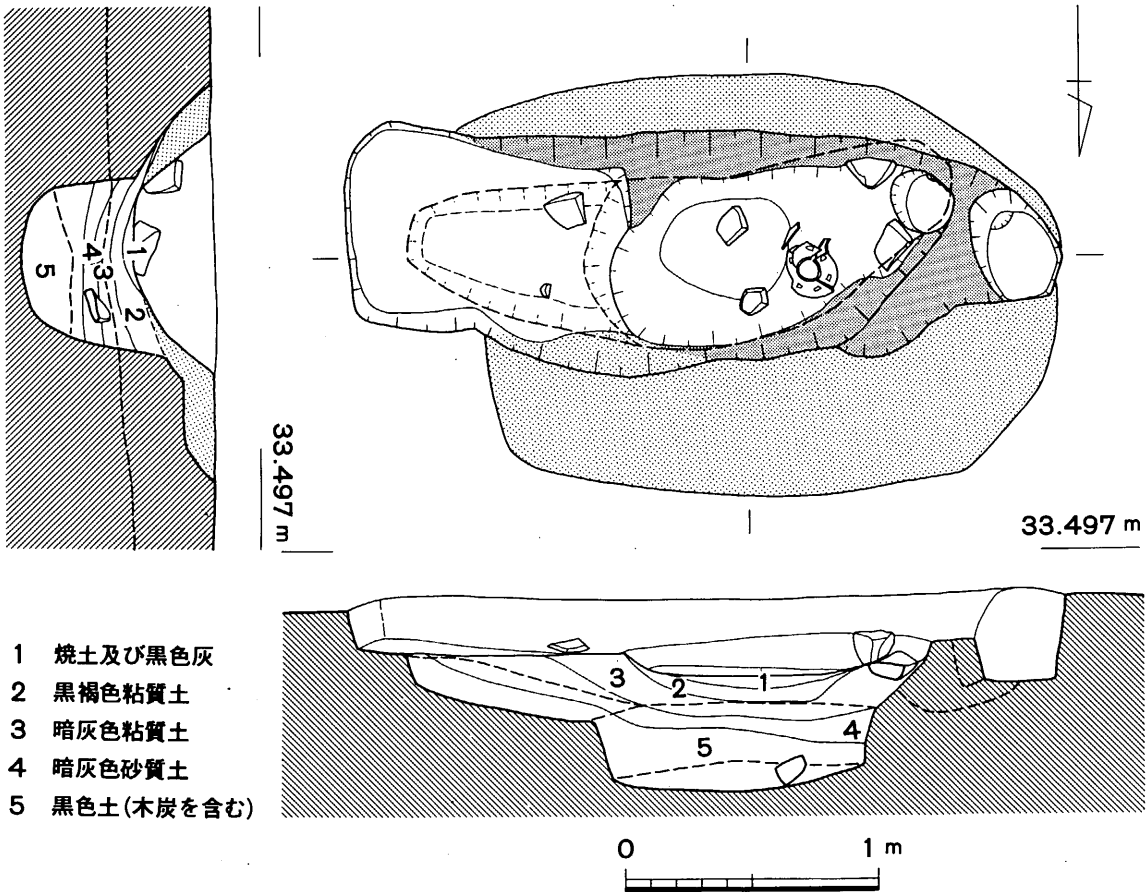
井戸番号	掘方規模		井戸側組み合わせ			出土遺物	備考
	平面	深さ	上段	中段	下段		
S E 201	212×195	125	桶		桶	土師器Ⅱ-2・4類、須恵器大甕、青磁7類、白磁6類、常滑陶器、黒色土器、石鍋、滑石製品、瓦器	
◇ 202	170×165	68	桶		桶	土師器、青磁7類、陶器1～3類、砥石、曲物片、支脚、水瓶鑄型、土鍋	
◇ 203	155×150	126	桶		桶	土師器Ⅱ-3～4類、須恵器、陶器7類、瓦、土鍋	
◇ 204	185×	114				土師器、須恵器、青磁7・9類、白磁5類陶器11類、瓦、土鍋	抜き跡
◇ 205	108×109	94				土師器Ⅱ-2～3類、須恵器、瓦	抜き跡
◇ 206	66×65	73	曲物3段			土師器Ⅱ-3～4 or 5類、瓦	
◇ 207	95×83	124	方形 枠組	桶	桶	土師器Ⅱ-3類、須恵器、青磁7類、瓦、石鍋、土鍋、灰釉、片口	
◇ 208	150×140	76	方形縦板組			土師器Ⅱ-1～3類、青磁7類、陶器3類、片口、瓦玉、フイゴ羽口	
◇ 209	165×155	113	桶		桶	土師器Ⅱ-1～2類、須恵器、青磁7・9類、瓦、土鍋、片口、石鍋、鑄型、墨書陶器	
◇ 210	91×87	40				土師器Ⅱ-1類、土師器壺、青磁7・8類、白磁3・6類、合子、陶器1・10類、片口、ガラス玉	抜き跡
◇ 211	197×164	83	桶		桶	土師器Ⅱ-3類、弥生式土器、土師器壺、青磁7・9類、白磁3・6類、陶器1・3類、フイゴ羽口、須恵器高坏	
◇ 212	107×	94				土師器Ⅱ-2 or 3類、須恵器、青磁7類、陶器10・11類、瓦器、灰釉、片口	抜き跡
◇ 213	215×211	108	桶		桶	土師器Ⅱ-2 or 3類、常滑陶器、白磁6類、須恵器、瓦、片口	
◇ 214	74×70	93				土師器Ⅱ-2～3類、須恵器、青磁7・9類陶器3・10類	抜き跡(桶)

◇	215	90×90	97				◇
◇	216	80×63	96			土師器Ⅱ-2類, 須恵器, 青磁9類, 陶器6・8・11類, 骨	◇ (桶)
◇	217		115				◇

(単位cm)

## 5. 窯 跡 (54図, 図版53)

調査区西側の整地層面において検出されたSX201窯跡は、整地層に長さ2.25m、幅1.62mの楕円形状の浅い坑を掘り、さらに長さ2.1m、幅0.7mの不整な長方形坑を掘り、この窯体と考



54図 SX201窯跡実測図

えられる長方形坑は地山に大半が掘り込まれたものである。楕円形状の浅い坑には赤褐色粘土をつきかためたものであり、南側では赤褐色粘土と埋土の間に木炭が敷きつめられたような状態で確認された。窯体は中央より西側が30cmほど一段と深くなっており、壁上面は焼けており、壁に沿って焼土がみられた。窯体の西側に隣接する小ピットを掘ったところ、これが窯体にまで達し、煙道かと考えられるがあまり焼けていない。

窯体内に堆積する土層の状態を観察すると不明確な点がある。全体に赤褐色土層で検出された落ち込み内には茶褐色土厚く堆積し、この下に焼土と黒色の灰が薄く堆積する（第1層）。さらに異色の粘質土層がほぼ同じ厚さで3枚あり、最下層に木炭を含む黒色土が厚く堆積する。第2層上面において使用されたような痕跡があるが、この面が築造計画当初から考えられた使用面であるのかは不詳である。

この窯体中からは、土師器、磁器、石鍋、土鍋等の破片が出土し、窯内上部からは青磁四耳壺の破砕されたものが出土しているが、これらの遺物は窯の用途廃棄後に投げ込まれた可能性が強く、出土遺物の中には窯に関する遺物の検出はなく、窯体もそれほど加熱は受けておらず、使用目的は不詳である。

出土した土師器はⅡ-4類に属するものであり、窯の時期は13世紀前半から中頃を上限とするものである。

## 四、遺物

### I. 土師器・Ⅱ類

今回の調査では、ヘラ切り底のものは、S42区5層などに少量みられる程度で、明確な遺構や層位はなく、遺構や5層およびそれより上部は、すべて糸切り底の土師器である。ここでは糸切り底の土師器をⅡ類とし、分類は従来通りである。

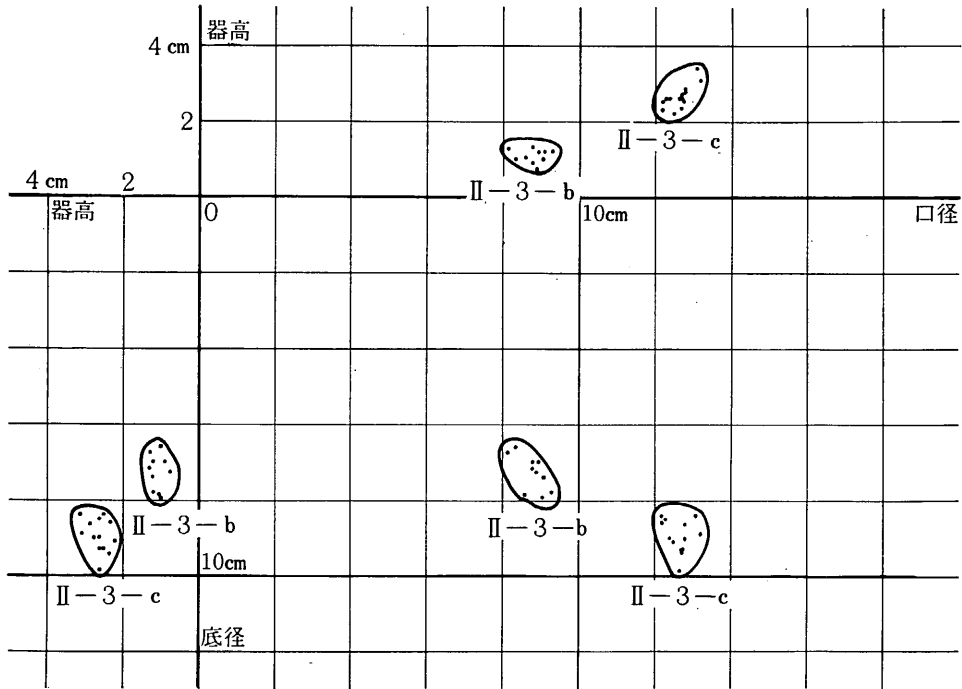
S K 201土坑 (55図, 16・17表)

b. 小皿 (1806~1815) 口径8.15~9.3cm・底径6.65~7.8cm・器高0.75~1.2cmである。黄灰色を呈し、胎土および焼成良好である。器面には回転による横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

c. 杯 (1816~1834) 口径12.0~13.2cm・底径8.4~9.85cm・器高2.3~3.4cmである。灰白色ないし黄灰色を呈し、胎土、焼成良好である。器面には回転による横ナデが、内底には渦文とナデが施してあり、底面には糸切り痕と板目がみられる。

以上、S K 201 土坑出土の土師器は、Ⅲ-3類に属するが、一部Ⅱ-2類のものを含むこと

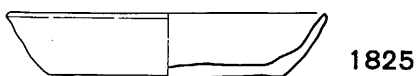
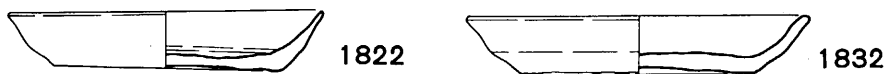
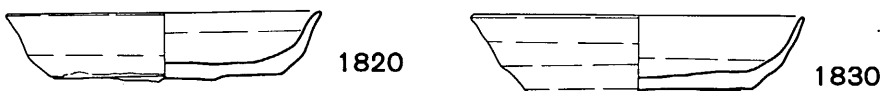
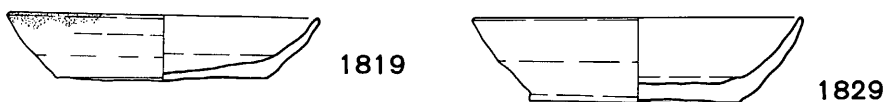
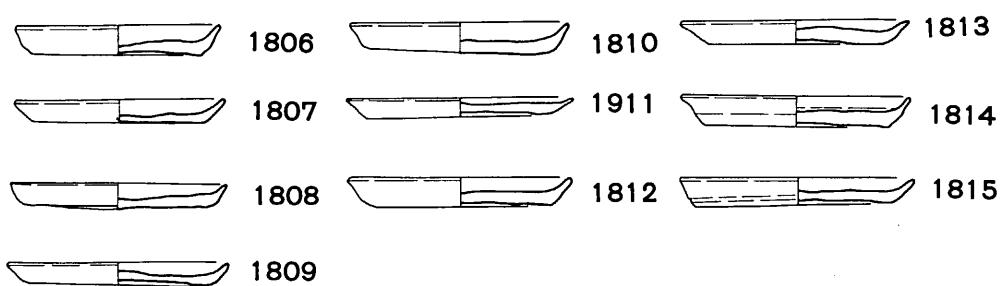
から、Ⅱ-3類の中でも古い方に属するものであろう。



16表 S K 201土坑出土土師器の法量

小 皿				杯				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	8.15	6.75	1.25	1	12.0	(8.5)	2.45	11	12.75	9.3	2.5
2	8.35	6.6	1.0	2	12.2	8.6	2.3	12	12.8	8.65	2.85
3	8.6	7.85	1.05	3	12.2	8.4	2.5	13	12.8	9.0	2.75
4	8.8	7.15	1.3	4	12.3	8.5	2.6	14	13.1	8.4	3.4
5	8.8	7.0	0.9	5	12.4	9.0	2.6	15	13.2	8.9	3.05
6	8.9	7.25	0.75	6	(12.5)	9.0	2.5	16	(13.35)	(8.1)	2.75
7	8.95	7.0	1.2	7	12.5	9.1	2.2	17	(13.7)	9.2	2.3
8	9.05	7.95	1.0	8	12.65	9.85	2.6	18	(14.7)	9.0	2.55
9	9.1	7.4	1.2	9	12.7	9.4	2.35	19	(15.3)	10.6	2.75
10	9.3	7.8	1.2	10	12.7	9.3	2.6				

17表 S K 201土坑出土土師器計測表



55图 土師器実測図1 (S K 201土坑出土)

S K 211土坑 (56図・18表)

- b. 小皿 (1835~1848) 口径 8.3~9.7 cm, 底径 6.8~7.65cm, 器高0.95~1.5 cmである。色調は、浅黄橙色で、胎土には砂粒を少量含む。器面には、横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目が残っている。
- c. 杯 (1849~1852) 口径約14.7~15.4cm, 底径約10.0~10.9cm, 器高約 2.7~3.05cmである。色調は灰白色で、胎土に砂粒を少量含む。器面には、横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

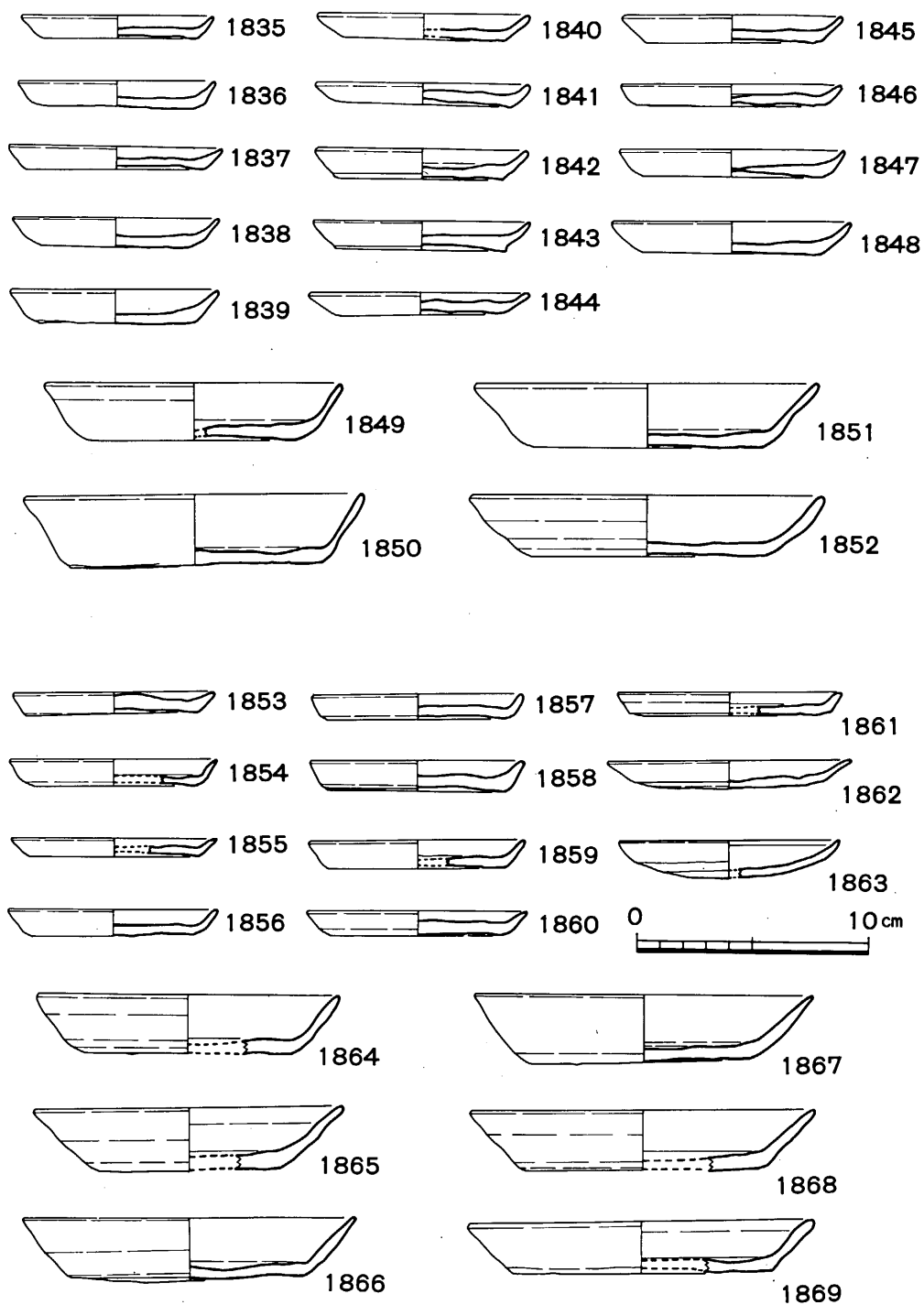
以上、S K 211土坑出土の土師器は、Ⅱ-1類に相当するが、口径13cmでⅡ-3類の杯に含まれるものもある。

S K 212土坑 (56図・18表)

- b. 小皿 (Ⅱ-2-b) (1853~1862) 口径 8.6~10.4cm, 底径 6.9~8.2 cm, 器高0.8~

S K 211土坑											
小 皿				小 皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	8.3	6.8	1.0	8	9.2	7.1	1.2	1	(12.95)	(8.9)	2.5
2	8.55	6.9	1.1	9	9.5	7.5	1.3	2	14.7	10.9	3.05
3	9.0	7.65	1.05	10	9.6	6.9	1.2	3	(14.9)	10.0	2.8
4	9.0	6.4	1.3	11	9.6	7.25	1.2	4	15.4	(10.0)	2.7
5	(9.0)	6.85	1.5	12	(9.6)	(7.2)	0.95				
6	(9.1)	(6.9)	1.1	13	9.7	7.6	1.2				
7	9.1	7.2	0.95	14	(10.4)	7.6	1.35				
S K 212土坑											
小 皿				小 皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	(8.6)	(7.4)	0.95	7	(9.2)	(7.6)	1.2	1	(13.0)	(8.9)	2.55
2	(8.9)	6.9	1.15	8	(9.4)	(7.4)	1.1	2	(13.3)	(7.8)	2.7
3	(8.9)	7.3	0.8	9	(9.6)	7.4	1.1	3	14.3	10.1	2.75
4	9.0	7.1	1.1	10	9.5		1.6	4	14.6	9.4	2.9
5	(9.0)	7.8	1.1	11	(10.4)	(8.2)	1.2	5	(14.8)	10.0	2.6
6	(9.1)	(7.6)						6	(14.8)	11.2	2.2

18表 S K 211・S K 212土坑出土土師器計測表



56図 土師器実測図2 (SK211・SK212土坑出土)



1.2 cmである。色調は、灰褐色で、胎土には砂粒を含む。器面には横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目が残っている。1863は、ヘラ切り底の土師器である。

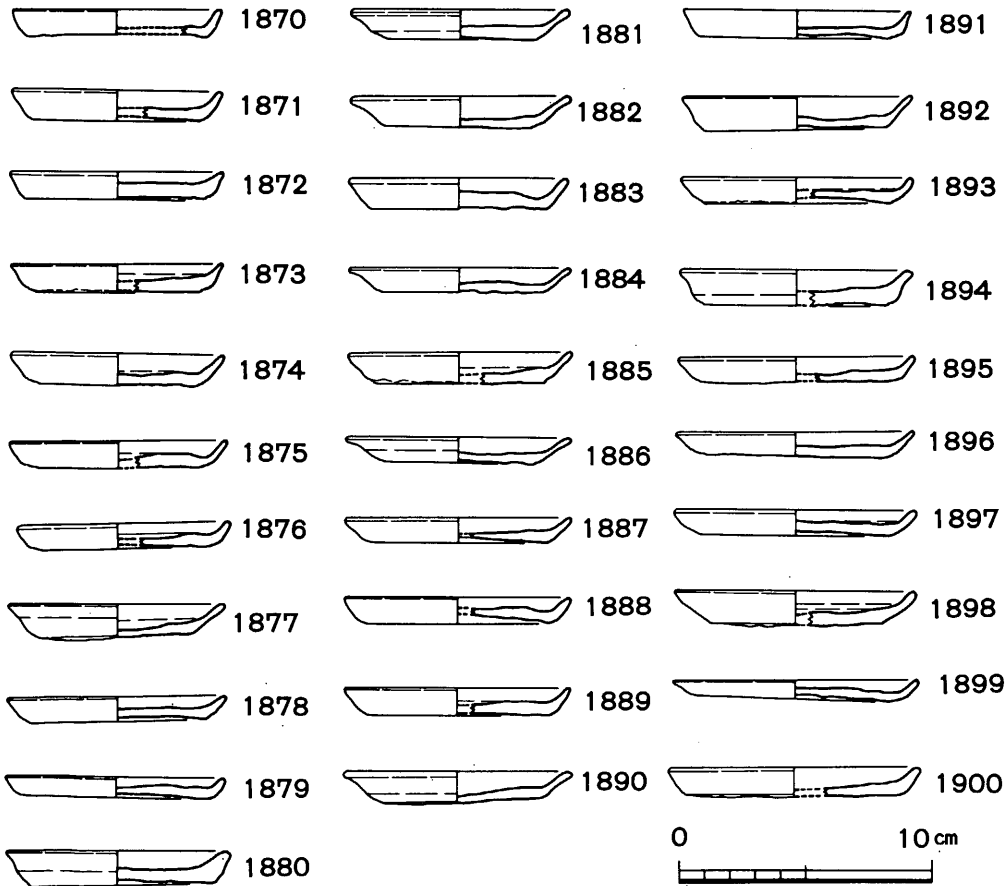
c. 杯 (II-2-C) (1864~1869) 口径13.0~14.8cm, 底径 7.8~11.2cm, 器高 2.2~2.75cmである。色調は黄灰色で、胎土には少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが、内底にはナデがみとめられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

S K219土坑 (57・58図, 19表)

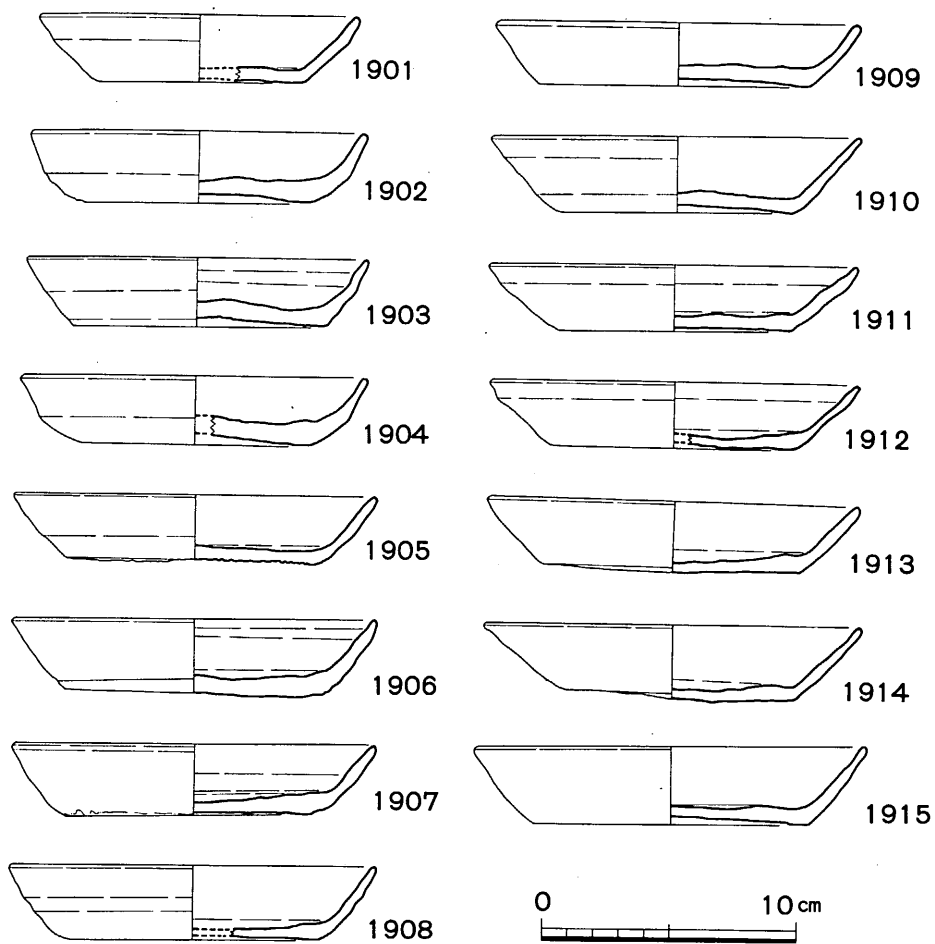
b. 小皿 (II-2-b) (1870~1900) 口径 8.2~9.9 cm, 底径 5.8~7.5 cm, 器高 0.8~1.4 cmである。浅黄橙色を呈し、砂粒をほとんど含まず、焼成良好である。器面には横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

c. 杯 (II-2-c) (1901~1915) 口径12.6~15.4cm, 底径8.3~10.4cm, 器高2.5~3.1 cmである。灰白色ないし浅黄橙色を呈し、砂粒をほとんど含まず、焼成良好である。器面には、横ナデが、内底には渦文とナデがみられ、底面には糸切り痕と板目がついている。

なお、II-2類が主体であるが、一部II-3類のものもみられる。



57図 土師器実測図3 (S K219土坑出土1)



58図 土師器実測図4 (S K 219土坑出土2)

小 皿				小 皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	(8.2)	(7.1)	1.2	9	8.6	6.8	1.0	1	(12.6)	( 8.3)	2.7
2	(8.3)	(6.5)	1.2	10	8.7	7.0	0.8	2	13.3	9.2	2.9
3	8.4	7.1	1.1	11	8.7	7.3	1.45	3	13.6	10.1	2.75
4	(8.4)	(6.5)	1.15	12	8.7	5.95	1.1	4	(13.8)	( 8.9)	2.75
5	(8.4)	(6.1)	1.3	13	8.7	5.8	1.3	5	14.3	9.9	2.7
6	(8.5)	(6.3)	1.1	14	(8.7)	(7.1)	1.2	6	14.4	10.1	2.95
7	(8.5)	(6.4)	1.1	15	8.8	6.2	1.0	7	14.4	9.65	2.95
8	8.6	6.2	1.3	16	(8.8)	(6.5)	1.2	8	(14.5)	( 9.9)	2.95

19表 S K 219土坑出土土師器計測表

17	8.85	6.0	1.1	25	(9.25)	(7.2)	1.45	9	14.5	10.2	2.5
18	(8.9)	(7.0)	1.0	26	(9.4)	(7.5)	1.0	10	(14.6)	8.9	3.0
19	(8.9)	(7.1)	1.1	27	9.5	7.0	1.1	11	(14.6)	9.3	2.65
20	(8.9)	(7.2)	1.1	28	(9.55)	(7.5)	1.1	12	(14.6)	(9.8)	2.6
21	9.0	6.3	1.3	29	(9.55)	(6.7)	1.4	13	14.7	10.4	2.8
22	(9.0)	(7.5)	1.1	30	9.75	7.1	0.85	14	14.8	9.2	2.95
23	9.1	7.2	1.2	31	(9.9)	(8.6)	1.2	15	(15.4)	(10.6)	3.1
24	(9.2)	(7.2)	0.9								

19表 SK219土坑出土土師器計測表

各土坑出土土師器 (59図, 20表)

SK202土坑

b. 小皿 (1916・1917) 口径8.6~9.4cm, 底径6.1~7.8cm, 器高 1.0~1.15cmで, II-1~II-2類に相当する。

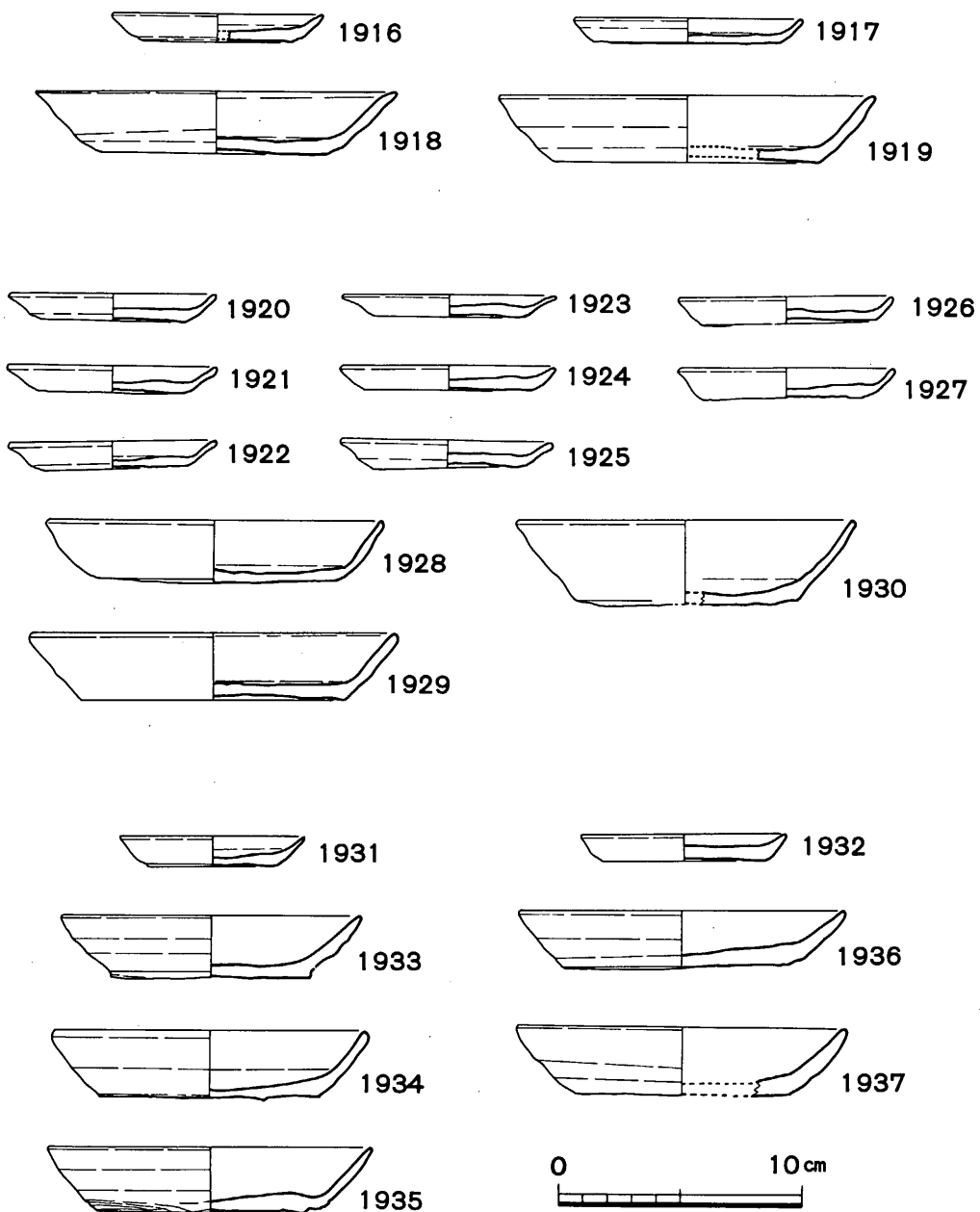
c. 杯 (1918・1919) 口径14.9~15.4cm, 底径 9.3~10.8cm, 器高 2.6~2.75cmである。II-1類に相当する。

SK220土坑

b. 小皿 (II-2-b) (1920~1927) 口径 8.5~8.9 cm, 底径 6.0~7.2 cm, 器高0.9~1.2 cmである。

SK202土坑				2	8.6	6.1	1.1	SK238土坑			
小 皿				3	8.6	6.0	1.15	小 皿			
No	口径	底径	器高	4	(8.9)	(6.2)	0.9	No	口径	底径	器高
1	(8.6)	6.1	1.15	5	8.8	6.8	1.1	1	7.6	5.4	1.25
2	(9.4)	(7.8)	1.05	6	8.8	6.2	1.1	2	8.5	6.75	1.1
杯				7	8.9	7.2	1.1	杯			
No	口径	底径	器高	8	8.9	7.1	1.2	No	口径	底径	器高
1	14.9	9.3	2.6	杯				1	(12.4)	(8.3)	2.6
2	(15.4)	(10.8)	2.75	No	口径	底径	器高	2	(13.0)	(9.1)	2.9
SK220土坑				1	14.0	9.9	2.6	3	13.4	8.55	2.75
小 皿				2	(15.1)	(10.6)	2.8	4	13.45	8.9	2.45
No	口径	底径	器高	3	(14.0)	9.1	3.5	5	(13.65)	(8.9)	2.8
1	8.5	6.0	1.15								

20表 SK202・SK220・SK238土坑出土土師器計測表



59図 土師器実測図5 (S K 202・220・238土坑出土)

c. 杯 (Ⅱ-2-c) (1928~1930) 口径14.0~15.1cm, 底径 9.1~10.6cm, 器高2.6~3.0 cmである。

S K 238土坑

b. 小皿 (Ⅱ-3-b) (1931・1932) 口径 7.6~8.5 cm, 底径 5.4~6.75cm, 器高 1.1~1.25cmである。

c. 杯 (Ⅱ-3-c) (1933~1937) 口径12.4~13.65 cm, 底径 8.3~9.1 cm, 器高 2.6~2.8 cmである。

S K 231土坑 (60図, 21・22表)

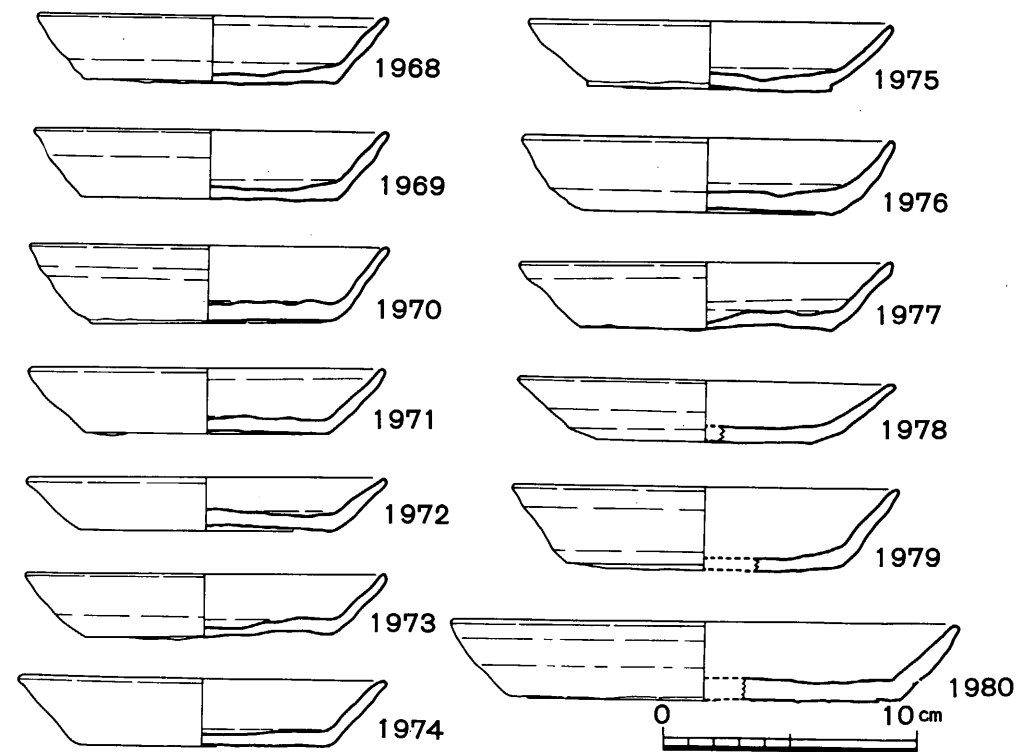
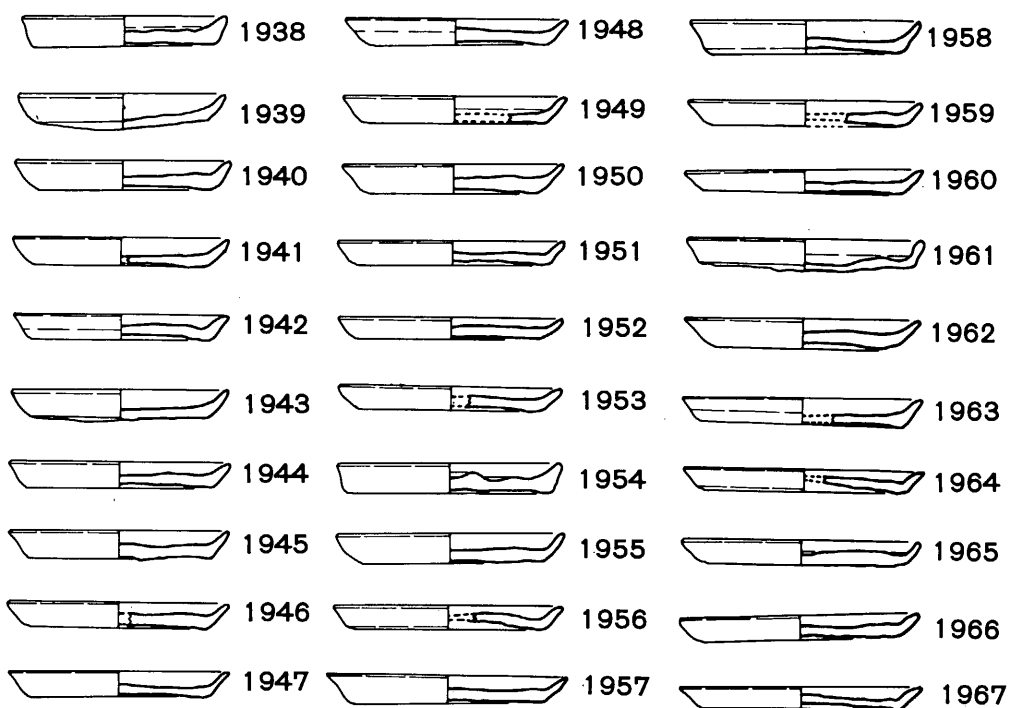
b. 小皿 (Ⅱ-2-b) (1938~1967) 口径 8.1~9.5 cm, 底径 6.8~8.2 cm, 器高0.85~1.35cmである。色調は、黄橙色や灰白色を呈し、胎土には砂粒をあまり含まず、焼成は良好である。器面には、横ナデが、内底にはナデが施され、底面には糸切り痕と板目がみられる。

c. 杯 (Ⅱ-2-c) (1968~1979) 口径13.8~15.1cm, 底径9.5~10.8cm, 器高2.15~3.3 cmである。淡黄色や灰白色を呈し、砂粒を、ほとんど含まない。器面には、横ナデが、内底には渦文がみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

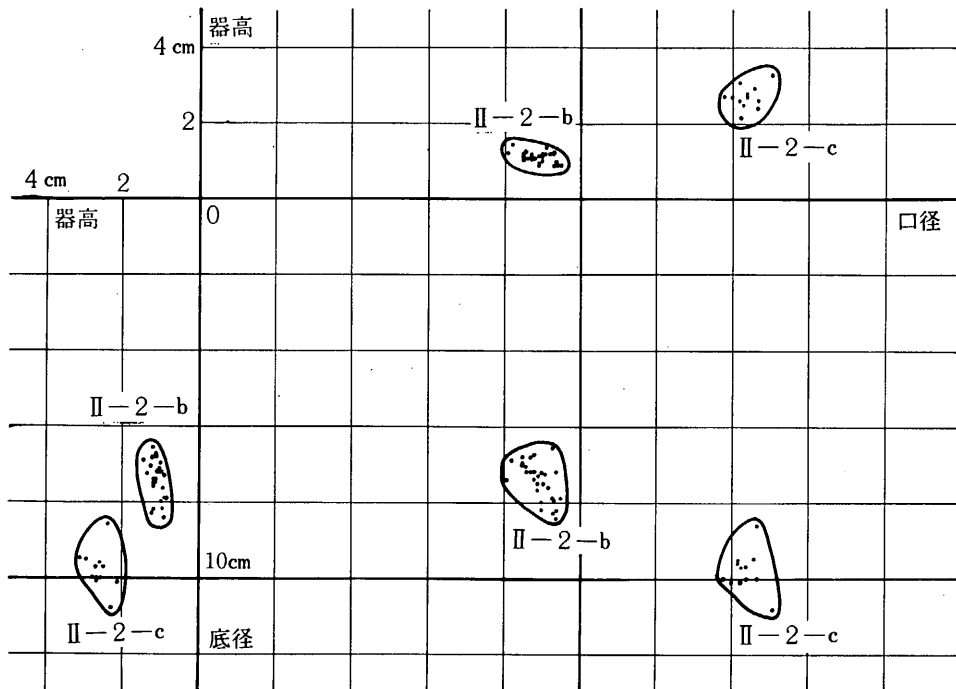
e. 特大杯 (1980) 口径19.7cm, 底径15.5cm, 器高 3.1cmで、黒褐色を呈し焼成は良好である。

小 皿				小 皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	8.1	7.4	1.2	16	(8.9)	(7.5)	1.15	1	13.8	10.0	2.7
2	8.2	6.9	1.45	17	9.0	8.2	1.2	2	14.0	10.1	2.7
3	8.5	6.8	1.2	18	9.0	7.2	1.15	3	14.2	9.5	3.1
4	(8.5)	(6.8)	1.1	19	(9.0)	(8.0)	1.0	4	14.2	9.6	2.6
5	(8.5)	7.0	1.0	20	9.05	7.5	1.2	5	(14.25)	(10.1)	2.15
6	8.55	7.05	1.25	21	9.1	7.25	1.35	6	14.3	9.7	2.5
7	8.6	7.2	1.05	22	(9.2)	(7.6)	1.2	7	(14.4)	10.0	2.8
8	8.7	7.2	1.1	23	9.3	7.9	0.85	8	(14.4)	(9.65)	2.7
9	(8.7)	(6.8)	1.1	24	9.3	8.3	1.25	9	(14.6)	9.5	2.95
10	8.7	7.2	1.0	25	9.3	6.55	1.2	10	14.7	10.0	2.6
11	8.8	7.2	1.05	26	(9.35)	7.95	1.0	11	(14.7)	(8.6)	2.4
12	(8.8)	(7.4)	1.1	27	(9.4)	(8.4)	0.9	12	(15.1)	(10.8)	3.3
13	(8.8)	(6.7)	1.2	28	(9.4)	(7.2)	1.0	特 大 杯			
14	8.9	7.65	0.95	29	(9.4)	(8.2)	0.95	No	口径	底径	器高
15	8.9	7.3	0.9	30	9.5	7.9	0.9	1	(19.7)	(15.5)	3.1

21表 S K 231土坑出土土師器計測表



60图 土師器実測図6 (S K 231土坑出土)



22表 S K 231土坑出土土師器の法量

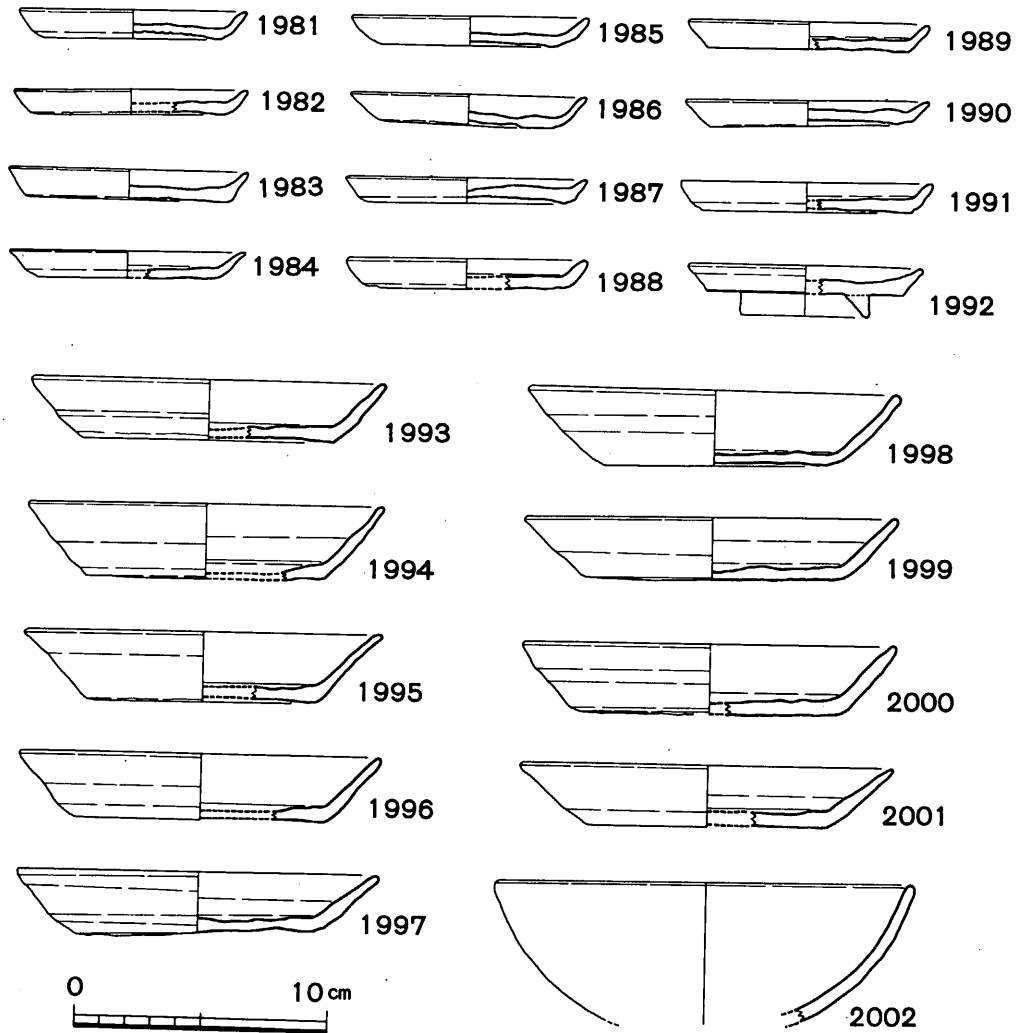
S K 232土坑 (61図, 23表)

b. 小皿 (II-2-b) (1981~1988) 口径 9.0~9.7 cm, 底径 7.0~8.2 cm, 器高 1.0~1.25cmである。黄褐色を呈し, 胎土には砂粒を含む。器面には横ナデが, 内底にはナデがみられ, 底面には糸切り痕と板目が残っている。

c. 杯 (II-2-c) (1993~2001) 口径14.0~14.8cm, 底径 8.8~10.4cm, 器高2.4~3.1cm

小皿				小皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	(9.0)	7.0	1.15	10	9.7	8.1	1.0	3	(14.2)	(9.1)	2.7
2	(9.2)	(7.4)	1.0	11	(10.0)	(8.2)	1.2	4	(14.3)	(9.8)	2.6
3	9.4	7.9	1.2	高台付小皿				5	14.35	9.45	2.6
4	(9.4)	(7.0)	1.13	No	口径	高台径	器高	6	(14.7)	(8.8)	3.1
5	9.4	7.0	1.15	1	(9.2)	(5.1)	2.0	7	14.8	10.1	2.55
6	(9.4)	(6.6)	(1.2)	杯				8	(14.8)	(10.4)	2.8
7	(9.5)	(7.8)	1.0	No	口径	底径	器高	9	(14.8)	(9.6)	2.45
8	(9.55)	(7.8)	1.25	1	(14.0)	(9.9)	2.4				
9	(9.6)	(8.0)	1.15	2	(14.1)	(9.9)	3.0				

23表 S K 232 土坑出土土師器計測表



61図 土師器実測図7 (S K 232土坑出土)

である。灰褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含み、焼成はあまりよくない。器面には、横ナデが、内底には渦文とナデがみられ、底面には、糸切り痕と板目がみとめられる。

f. 高台付小皿(Ⅱ-2-f) (1992) 口径 9.2cm, 高台径 5.1cm, 器高 2.0cmで、底面には、横ナデが、内底にはナデがみられ、高台内の底面には糸切りのあとがみられる。淡赤褐色を呈し、少量の砂粒を含む。

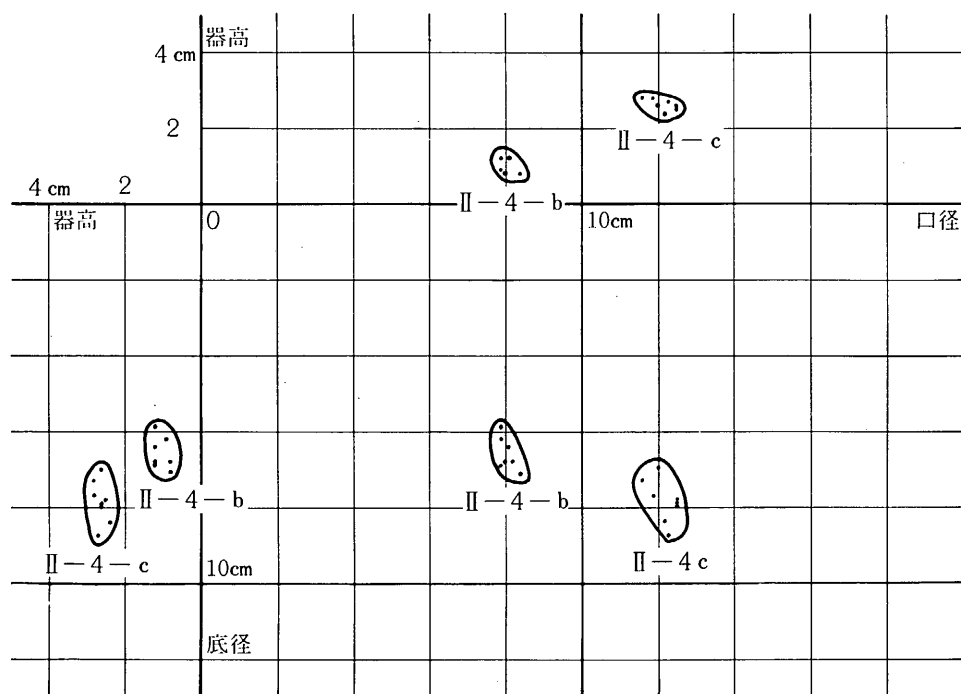
瓦器椀 (2002) 口径16.3cmで灰褐色を呈している。



S K 239土坑 (62図, 24・25表)

b. 小皿(Ⅱ-4-b) (2003~2009) 口径 7.9~8.4 cm, 底径 5.9~7.1 cm, 器高 0.8~1.2 cmである。黄灰色を呈し, 胎土には砂粒を含む。器面には, 糸切り痕と板目がみられる。

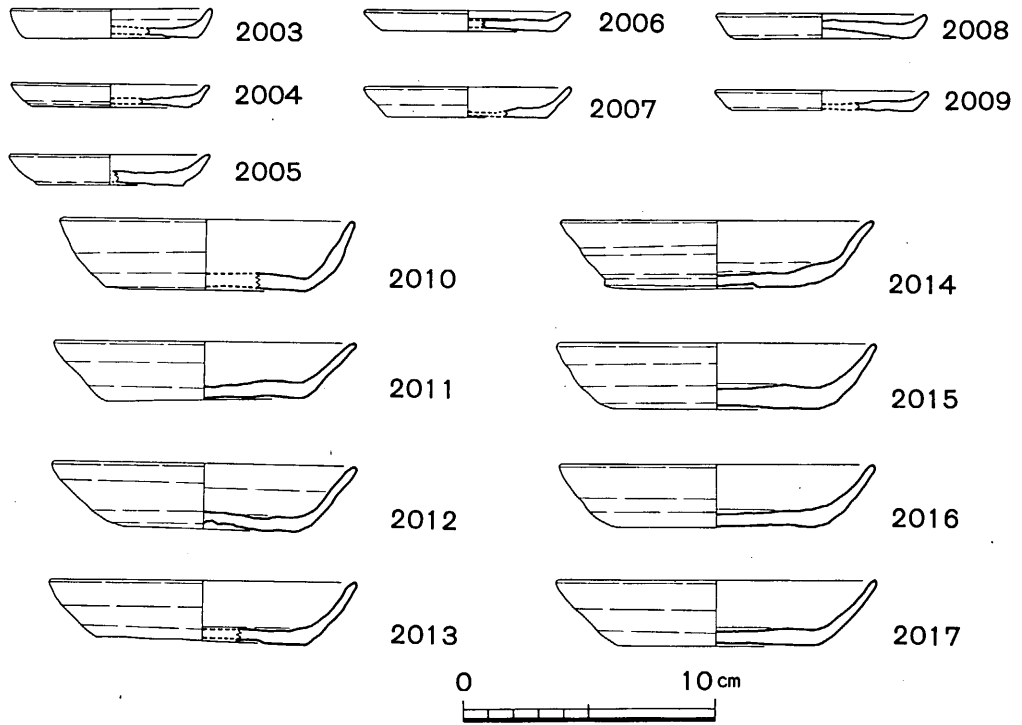
c. 杯(Ⅱ-4-c) (2010~2017) 口径11.6~12.5cm, 底径 5.9~7.1 cm, 器高2.4~2.8 cmで, 灰褐色を呈し, 胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが, 内底にはナデがみられる。底面には, 糸切り痕と板目がついている。



24表 S K 239土坑出土土師器の法量

小皿				小皿				杯			
No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高	No	口径	底径	器高
1	7.9	6.9	1.2	7	(8.4)	(7.1)	0.8	4	(12.2)	(8.4)	2.4
2	(7.9)	(6.2)	0.9	杯 3				5	12.3	8.75	2.7
3	(7.9)	(5.9)	1.2	No	口径	底径	器高	6	12.5	8.0	2.6
4	(8.0)	(6.8)	0.8	1	(11.6)	(7.0)	2.8	7	(12.5)	7.8	2.5
5	(8.1)	(6.4)	1.2	2	11.9	7.7	2.8	8	(12.5)	7.9	2.6
6	(8.2)	(6.8)	1.2	3	12.0	7.0	2.6				

25表 S K 239 土坑出土土師器計測表



62図 土師器実測図8 (S K 239土城出土)

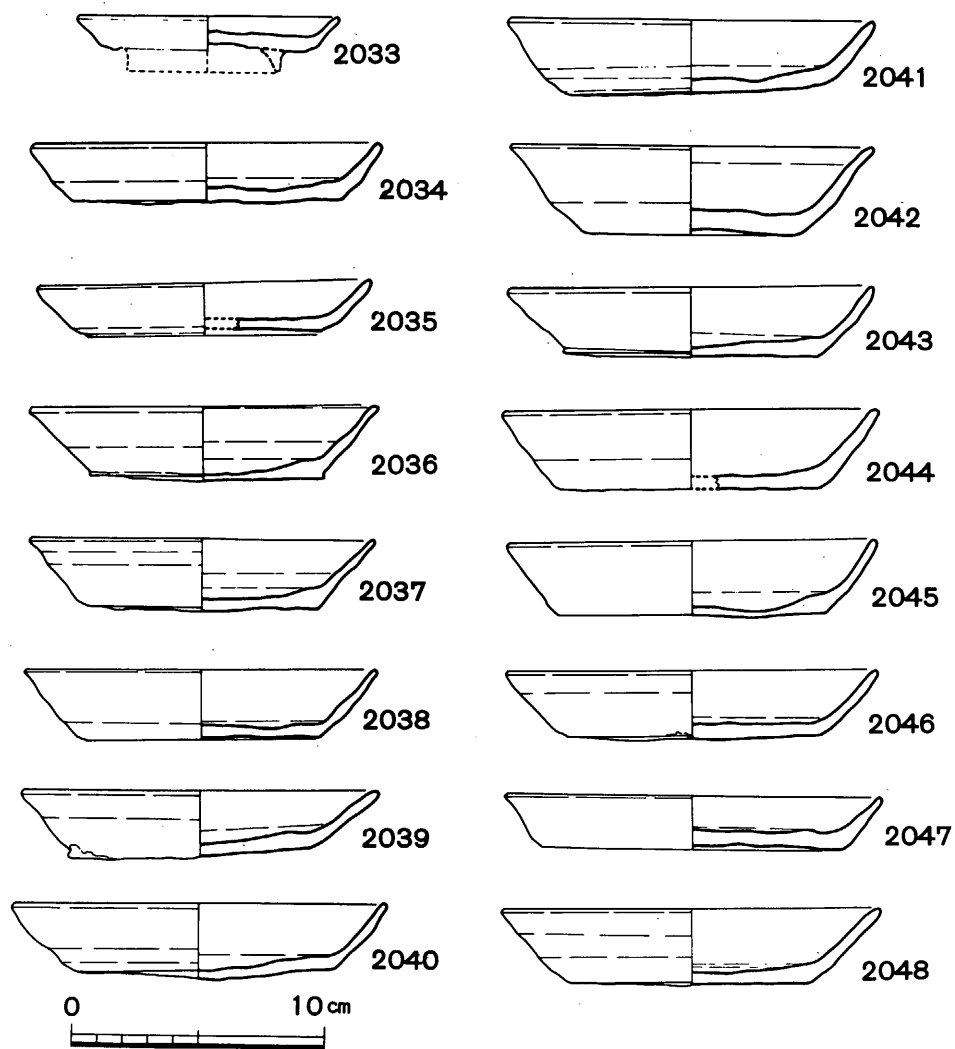
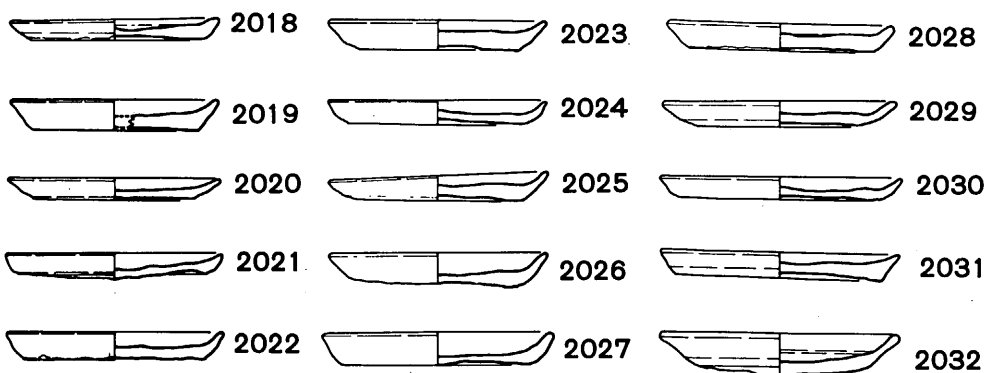
S D202溝 (63・64図, 26・27表)

b. 小皿 (2018~2031) 口径 8.2~9.4 cm, 底径 6.2~8.2 cm, 器高0.85~1.4 cmで, やや薄手の小皿である。色調は, ほとんどが黄灰色と灰白色で, 胎土には少量の砂粒を含み, 焼成は良好である。器面には, 横ナデが, 内底には渦文とナデがみとめられる。底面には, 糸切り痕と板目がついていて, 底面中央がふくらむものもある。なお, 2032はヘラ切り底を有する土師器で, 口径9.55cm, 底径6.65cm, 器高 1.7cmである。色調は, 黄灰色で, 内底にはナデがみられ, 底面には板目がついている。

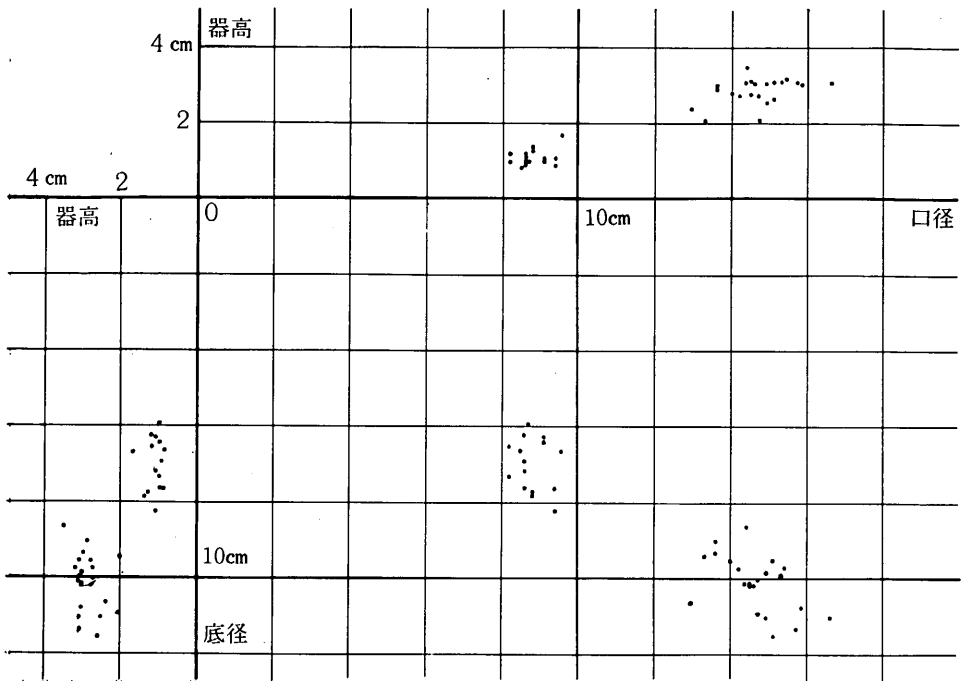
c. 杯 (2034~2056) 口径12.95~16.6cm, 底径9.0~11.9cm, 器高2.05~3.1 cmである。色調は黄灰色ないし灰白色で少量の砂粒を含んでいる。器面には横ナデが, 内底には渦文とナデがみられ, 底面には糸切り痕と板目がみられる。

f. 高台付小皿 (2023) 口径10.4cm, 高台径 6.2cm, 高台高 2.2cmで, 小皿よりもやや大きめである。灰白色を呈し, 胎土に少量の砂粒を含む。

j. 高台付椀 (2057) 高台径 7.2cmである。



63図 土師器実測図9 (S D 202溝出土)

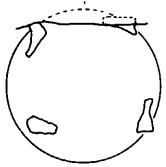
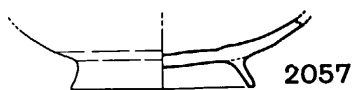
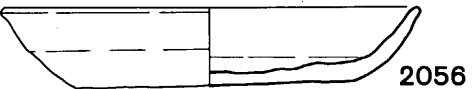
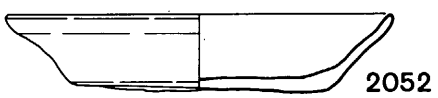
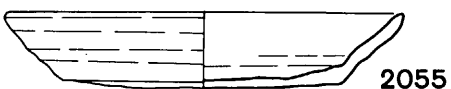
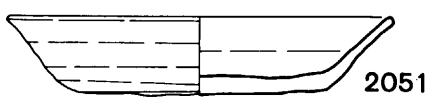
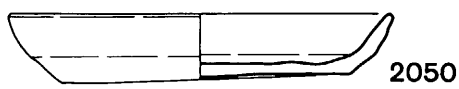
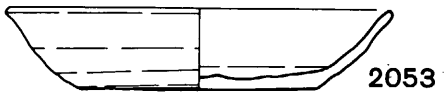
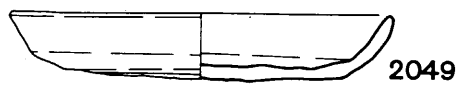


26表 S D 202溝出土土師器の法量

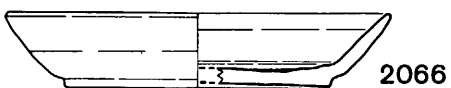
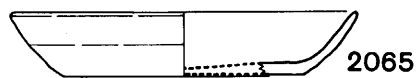
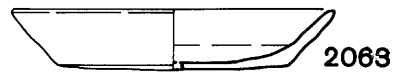
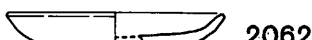
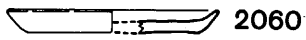
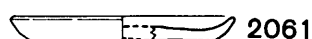
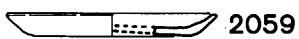
小 皿				杯				杯			
No	口 径	底 径	器 高	No	口 径	底 径	器 高	No	口 径	底 径	器 高
1	8.2	7.3	1.0	1	(12.95)	10.6	2.4	16	14.9	11.0	2.55
2	8.2	6.5	1.2	2	(13.3)	( 9.4)	2.05	17	15.1	11.5	2.65
3	( 8.5)	( 6.6)	0.85	3	(13.6)	( 9.3)	3.0	18	15.1	9.5	3.1
4	8.6	7.6	1.0	4	(13.6)	9.0	2.9	19	15.3	9.9	3.1
5	8.6	7.15	1.1	5	14.	9.5	2.8	20	15.4	9.7	3.2
6	( 8.6)	6.2	1.2	6	14.2	9.7	2.75	21	15.7	11.3	3.1
7	( 8.6)	6.9	0.95	7	14.9		2.95	22	15.85	10.75	3.05
8	8.7	6.9	1.0	8	14.35	10.1	3.05	23	16.6	11.0	3.1
9	8.8	7.8	1.4	9	(14.4)	8.6	3.5	高台付小皿			
10	( 8.8)	( 7.7)	1.3	10	14.5	10.15	2.8	No	口 径	底 径	器 高
11	9.1	6.25	1.1	11	(14.5)	10.1	3.15	1	(12.95)	10.6	2.4
12	( 9.1)	( 6.4)	1.0	12	14.6	10.15	3.05				
13	9.4	8.2	1.1	13	14.7	10.0	2.75				
14	( 9.4)	7.6	0.9	14	14.7	11.9	2.1				
15	9.55	6.65	1.7	15	14.9	9.8	3.05				

27表 S D 202 溝出土土師器計測表

SD202溝



SD201溝



64図 土師器実測図10 (SD201・SD202溝出土)

青磁 (64図, 2058) 磁器 7c 類で、外面に蓮弁文が削り出され、胎土は灰色で、釉は灰緑色である。見込みに4ヶ所目あとが付き、高台内に焼成台のあとが残っている。

以上、SD 202溝は、II-2類の土師器が主体であるが、II-1類の土師器もかなり残っている。このことから、この時期の土師器は、II-1類からII-2類への過渡期もしくは、II-2類の古い時期に属すると考えたい。

#### SD201構 (64図)

b. 小皿 (2059~2062) 口径 8.2~8.7 cm, 底径 6.1~7.2 cm, 器高 0.9~1.25cmである。色調は、灰白色を呈し、砂粒をほとんど含まない。器面には、横ナデが、底面には、糸切り痕と板目がみられる。

c. 杯 (2063~2066) 口径12.8~15.2cm, 底径 9.0~10.6cm, 器高 2.3~2.95cmである。灰白色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。器面には、横ナデが施され、底面には糸切り痕と板目がみられる。

以上、SD 201溝出土土師器は、II-3類に属すると考えたい。なお、2066は、II-1類に入れた。

#### 溝かぶり土 (65図, 28表)

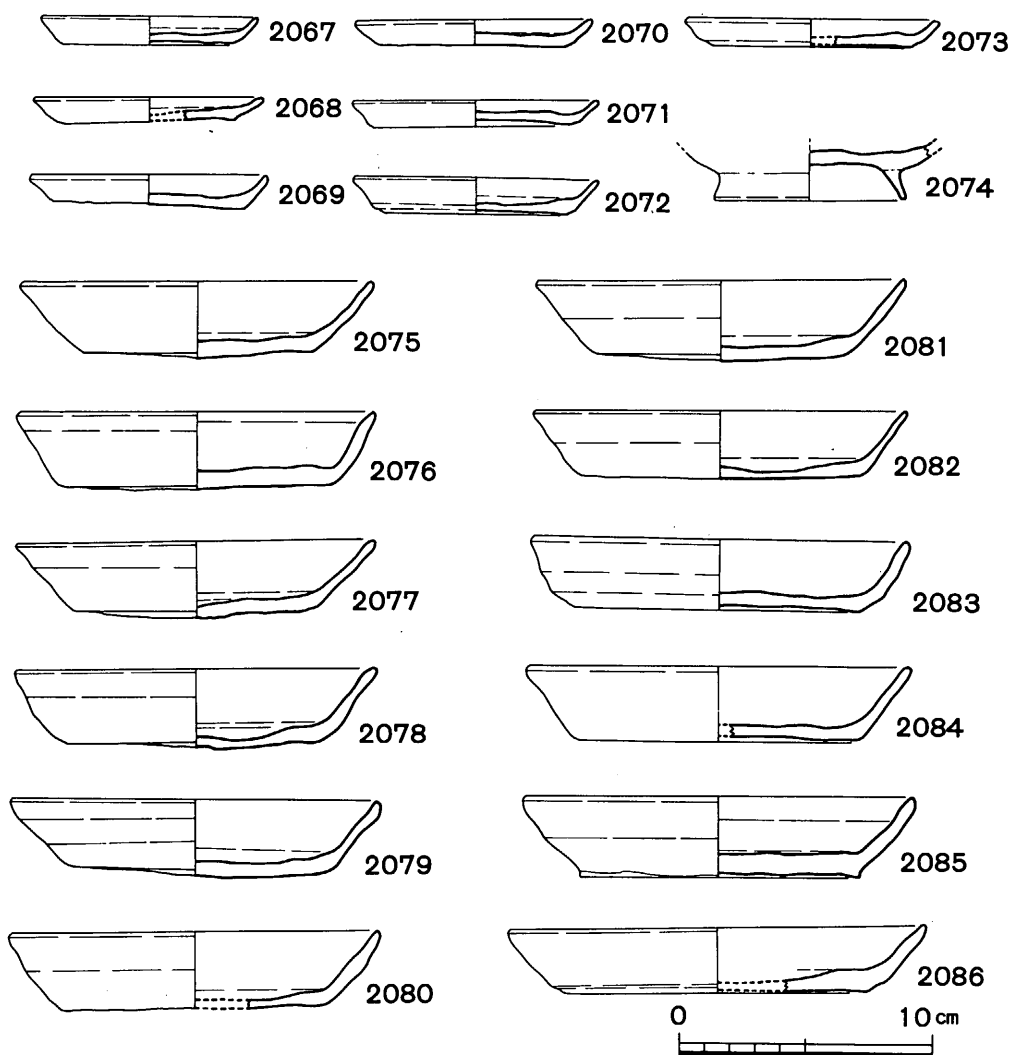
b. 小皿 (2067~2073) 口径 8.6~10.0cm, 底径 6.9~8.05cm, 器高 1.0~1.4 cmである。灰黄褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。器面には、横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目のあとがある。

c. 杯 (2075~2086) 口径14.1~16.5cm, 底径 9.2~11.7cm, 器高 2.6~3.1 cmである。灰黄褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。器面には横ナデが、内底にはナデが施され、底面には糸切り痕と板目がみられる。

以上、SD 202溝かぶり土は、口径14.1~14.75cmまでのII-2類に相当するものが主体で、復元口径15cmを越えるものをII-1類にわけた。このことより、SD 202溝かぶり土土師器群

小 皿				杯				杯			
No	口 径	底 径	器 高	No	口 径	底 径	器 高	No	口 径	底 径	器 高
1	( 8.6)	( 6.9)	1.1	1	(14.1)	( 9.2)	3.05	8	(14.8)	(11.05)	2.7
2	( 9.2)	( 7.05)	( 1.0)	2	14.25	10.75	3.1	9	(15.0)	(10.2)	2.8
3	9.45	7.8	1.35	3	14.3	9.35	3.1	10	(15.2)	(10.5)	2.95
4	9.45	8.05	1.1	4	14.4	9.8	3.1	11	(15.6)	11.0	3.2
5	9.6	7.65	1.05	5	14.65	10.05	3.1	12	(16.5)	(11.7)	2.6
6	( 9.7)	7.2	1.4	6	(14.7)	(10.05)	( 3.1)				
7	(10.0)	( 7.9)	1.1	7	14.75	9.6	3.2				

28表 SD 202溝カブリ土出土土師器計測表

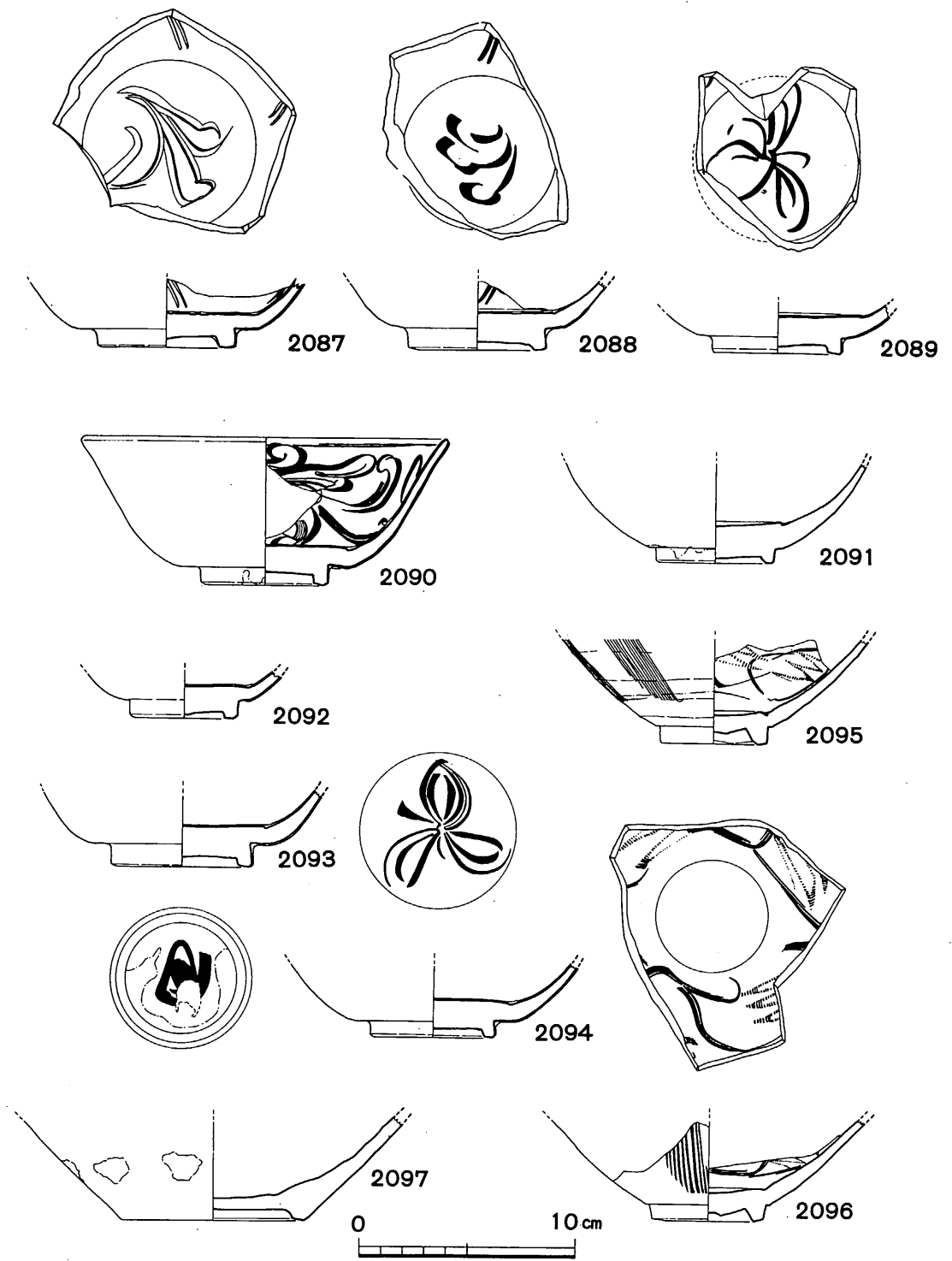


65図 土師器実測図11 (S D 202溝カブリ土出土)

は、Ⅱ-2類が主体で、Ⅱ-1類も含むことより、Ⅱ-2類の古い方に属すると推測される。

S D 202溝から出土する土師器はⅡ-1類からⅡ-2類にかけてのものであり、Ⅱ-3類のものはすこししかない。

つぎにこの時期の磁器類をみると、白磁は少量で青磁が大部分を占めている。その中でも7類は全体の64.4%を占め、とくに7A類、7B類が多く、明らかに7A・7B類とわかるも



66図 陶磁器実測図 (S D 202溝カブリ土出土)



のは32%で、7C類は全体の3.4%すなわち7類の5.2%を占めるにすぎない。9類は28.8%で7類に次いで多く、6類、8類はない。この溝を覆うSD 202溝かぶり土出土の土師器もⅡ-2類を主体とするもので、ここの磁器は15点ほどであるが、7類は60%であるが、7C類は1点もみられない。9類は26.6%で、SD 202溝とあまりかわりなく、6・8類はない。このSD 202溝より新しいⅡ-3類のSD 201溝では7類は61.9%であり変化はないが、7C類は23.8%で7類の中の38%を占めている。明らかに7A・7B類とわかるものは全体の8%にすぎない。9類は15.8%とその割合が小さくなり、そのかわりに6類11.1%、8類4.8%出現してくる。

		7 類						9類	8類	6類	その他	計
		全体	その他	7A	7B	7C	7D					
SD 202	数	38	17	8	11	2		17	0		4	59
	%	64.4	28.8	13.5	18.6	3.4		28.8			6.8	
かぶり土	数	9		3	4		2	4	0		2	15
	%	60.0		20.0	26.7	0	13.3	26.6			13.3	
SD 201	数	39	19	2	3	15		10	3	7	4	63
	%	61.9	30.2	3.2	4.8	23.8		15.8	4.8	11.1	6.3	

以上のようにSD 202溝およびSD 202溝かぶり土出土の磁器の器種に特徴があるので、ここではSD 202溝かぶり土出土の陶磁器に例をとって紹介したい。2087~2088は7A類で2087は高台内に円柱状の焼成台跡があり、胎土は明灰色、釉は灰青色である。2088も高台内に焼成台跡があり、胎土は明灰色、釉は灰緑色で貫入がみられる。2089・2090・2094は7B類で見込みに花文が描かれている。2089の胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。2090は高台内に焼成台跡が残り、胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。2094は高台内に径3.5cmの焼成台跡があり、胎土は明灰色で、釉は緑色である。2091~2093は7D類で2091の胎土は灰色で、釉は黄味灰緑色ないし緑味灰黄色である。2092は高台床付部に目跡が3箇所残り、胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色である。2093は高台内に花押様の墨書があり、胎土は灰白色で、釉は灰オリーブ色である。2095~2096は9類の椀で、2095の胎土は灰白色ないし褐灰色で、釉は不透明な青白色である。2096の胎土は明灰色で、釉は明灰緑色である。2097は雑器1類の底部で、外面の底部近くに目跡が残っている。胎土は灰褐色で、釉は薄く灰緑色である。

#### 5層出土土師器 (67~70図, 29・30表)

5層出土土師器は、L41区・L42区・M42区・N40区・Q40区・R34区の6区の土師器を一括して取扱った。

b. 小皿 (2098~2136・2183・2184・2191~2199) 口径7.6~10.3cm, 底径5.6~8.9cm, 器高0.8~1.3cmである。色調は、灰白色ないし黄灰色を呈し、胎土には砂粒をほとんど含ま

ず、焼成は良好である。器面には、横ナデが、内底にはナデがみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。なお、2126・2131・2135・2136は、ヘラ切り底を有する土師器で、口径 9.3～10.3cm、底径 7.6～7.8 cm、器高 1.1～1.3 cmである。灰白色を呈し、胎土に細い砂粒を少量含み、焼成は良好である。

蓋 (2137～2139) 口径 9.8～10.3cm、器高0.75～1.1 cmである。灰白色を呈し、胎土に少量の砂粒を含んでいる。天井部には、ヘラナデが施され、すべすべとしているもの (2139) と、天井部に板目のあとがみられるもの (2137・2138) とがある。

c. 杯 (2145～2181・2185～2190・2200～2003) 口径12.3～15.3cm、底径 7.4～11.4cm、器高 1.9～3.3 cmである。黄灰色や、にぶい黄橙を呈し、胎土に少量の砂粒を含むものが多い。器面には、横ナデが、内底にはナデと渦文がみられ、底面には糸切り痕と板目がみられる。

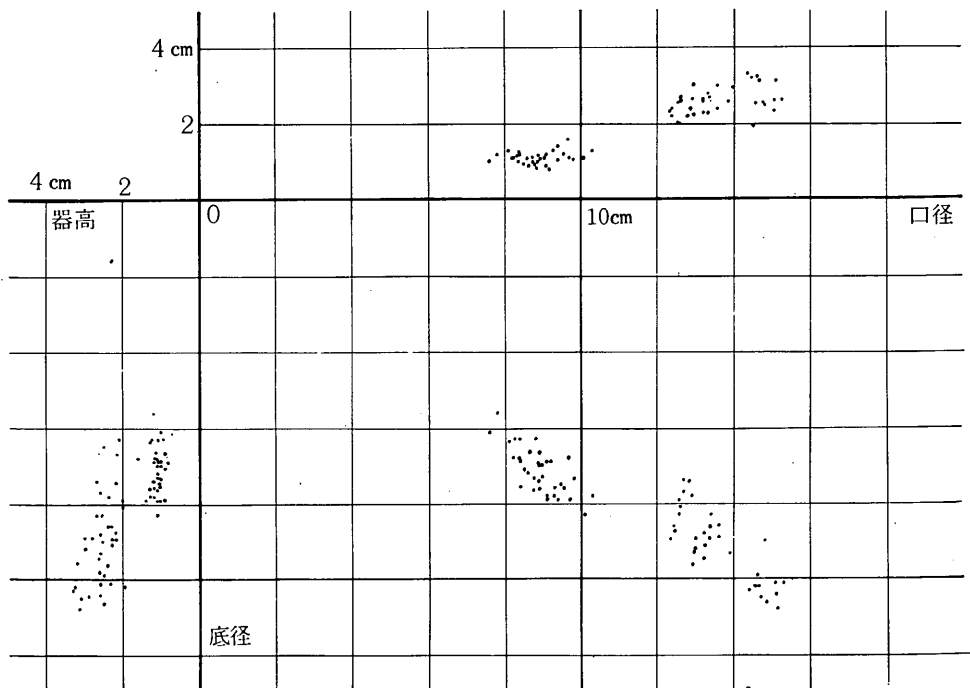
f. 高台付小皿 (2140～2142) 口径 8.5～10.75cm、高台径 6.3～6.7cm、高台高 2.1～2.5 cmである。灰白色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

盤 (2182) 口径23.05cm、底径16.7cmの盤である。褐灰色を呈している。

j. 高台付椀 (2143・2144) 底部のみである。

5層出土土師器を、各区ごとに法量分析をしてみると以下のとおりである。

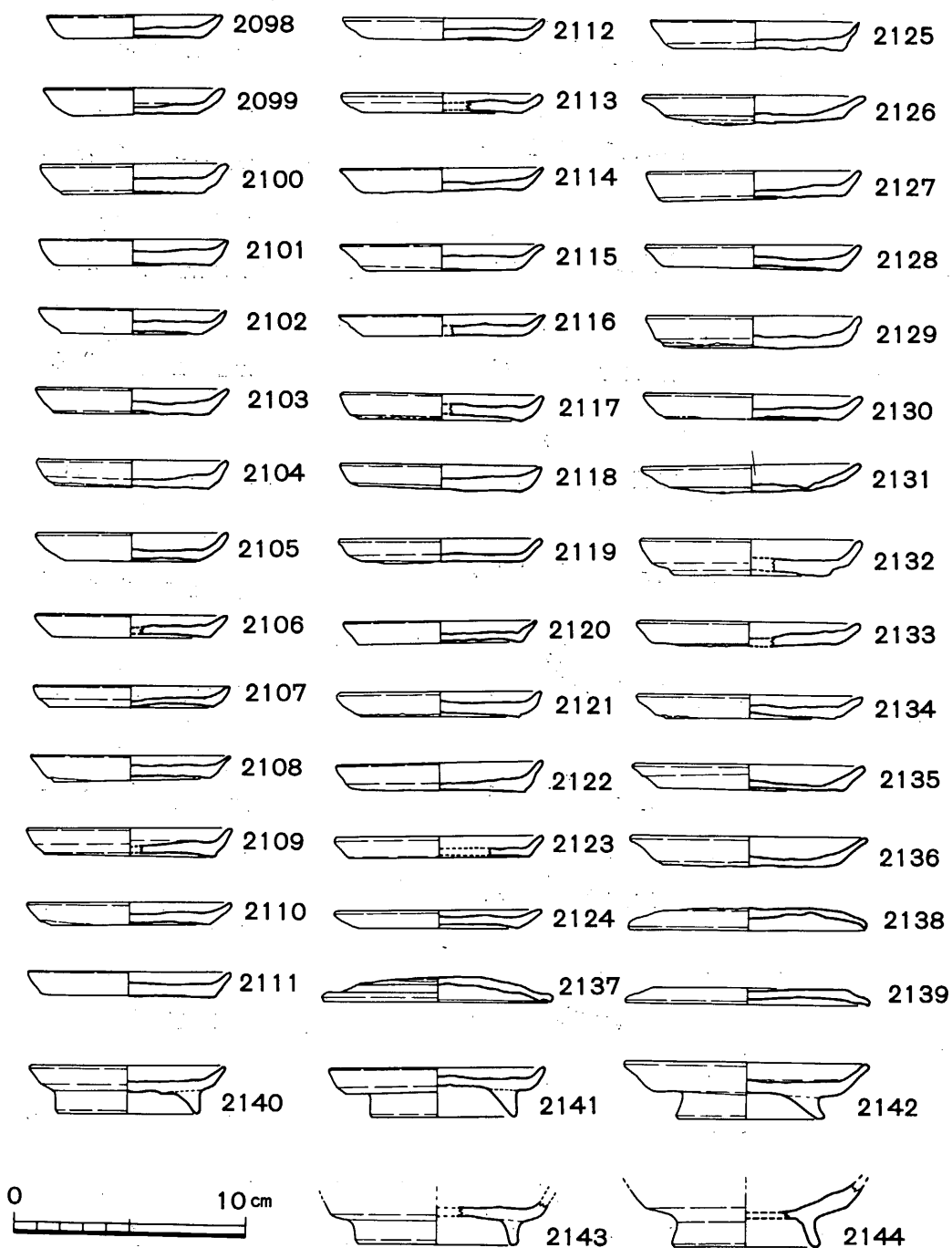
①L42区：口径14.7～15.4cm、底径10.1～10.6cm、器高 2.3～3.1 cmで、その土師器群の範囲



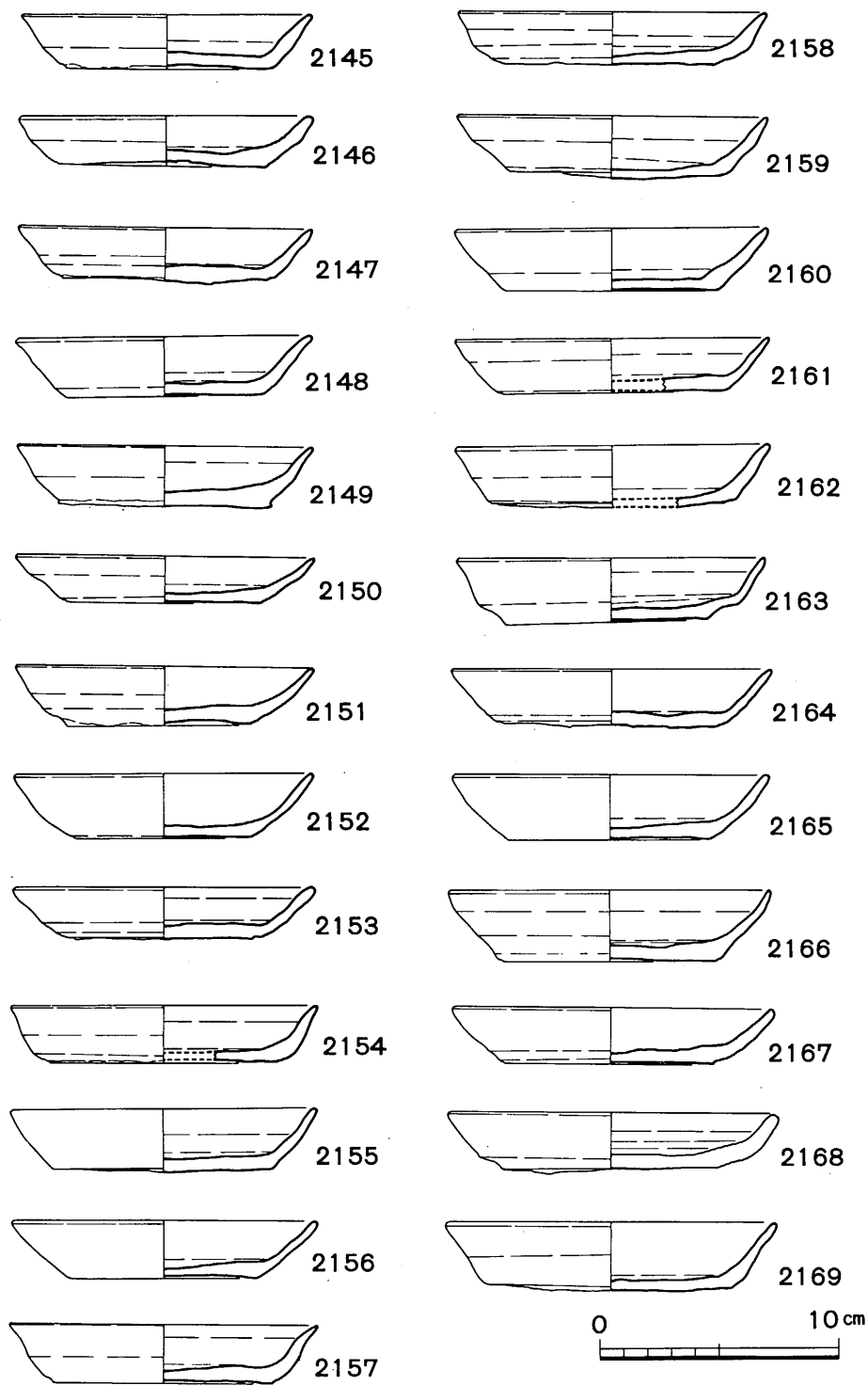
29表 5層出土土師器の法量

小 皿				小 皿				杯			
No	口 徑	底 徑	器 高	No	口 徑	底 徑	器 高	No	口 徑	底 徑	器 高
1	7.6	6.1	1.0	32	9.45	7.5	1.05	12	(12.9)	7.8	2.4
2	7.8	5.6	1.2	33	9.4	7.9	1.4	13	(13.0)	9.2	3.0
3	8.1	6.35	1.3	34	9.55	7.6	1.2	14	(13.0)	( 8.95)	2.2
4	8.2	6.8	1.1	35	( 9.65)	6.8	1.6	15	13.2	9.45	2.65
5	8.25	6.3	1.1	36	( 9.7)	7.9	1.1	16	(13.2)	( 8.8)	2.6
6	( 8.35)	( 6.8)	1.15	37	( 9.8)	7.35	1.05	17	(13.25)	( 9.1)	2.3
7	8.4	6.3	1.25	38	10.1	8.3	1.1	18	(13.25)	(10.0)	2.65
8	8.4	6.9	1.2	39	10.3	7.5	1.3	19	13.35	8.9	2.8
9	( 8.4)	( 6.85)	1.0	蓋				20	(13.35)	8.6	2.3
10	( 8.5)	( 7.1)	0.95	No	口 徑		器 高	21	(13.4)	8.3	2.7
11	8.6	7.2	1.1	1	10.3		0.9	22	(13.6)	8.9	3.0
12	( 8.65)	( 6.65)	0.9	2	9.8		1.1	23	(13.6)	8.6	2.4
13	8.75	7.35	1.0	3	10.2		0.75	24	13.9	9.3	2.6
14	8.75	7.65	1.1	高台付小皿				25	14.0	10.45	2.95
15	8.8	6.3	0.95	No	口 徑	高台徑	高台高	26	14.4	10.3	3.3
16	8.85	6.95	0.85	1	8.5	6.3	2.1	27	14.5	9.55	3.2
17	8.9	7.0	1.0	2	9.4	6.7	2.15	28	(14.55)	(10.2)	1.9
18	8.9	( 6.65)	1.15	3	10.75	6.5	2.5	29	(14.6)	9.9	2.5
19	( 8.9)	7.4	1.2	杯				30	(14.65)	10.2	3.25
20	( 8.9)	7.6	1.1	No	口 徑	底 徑	器 高	31	14.7	10.5	3.1
21	8.95	7.0	1.1	1	12.35	8.95	2.3	32	14.8	9.0	2.55
22	8.95	7.3	1.1	2	12.4	8.75	2.2	33	(14.85)	(10.6)	2.5
23	8.4	7.55	1.0	3	12.4	8.6	2.4	34	15.1	10.4	2.6
24	( 9.05)	6.9	1.1	4	(12.55)	( 8.3)	2.55	35	(15.1)	(10.1)	2.35
25	9.1	7.8	1.2	5	(12.55)	( 7.9)	2.0	36	(15.15)	10.8	3.15
26	( 9.1)	( 7.9)	0.9	6	12.6	8.1	2.0	37	(15.3)	10.1	2.6
27	9.2	6.9	0.8	7	12.65	7.7	2.6	盤			
28	9.1	7.4	1.2	8	(12.65)	7.4	2.7	No	口 徑	底 徑	器 高
29	9.3	7.8	1.3	9	(12.8)	( 7.45)	2.2	1	23.05	16.7	2.5
30	( 9.3)	( 7.6)	1.3	10	(12.9)	( 9.6)	2.4				
31	9.4	7.9	1.05	11	(12.95)	9.3	2.65				

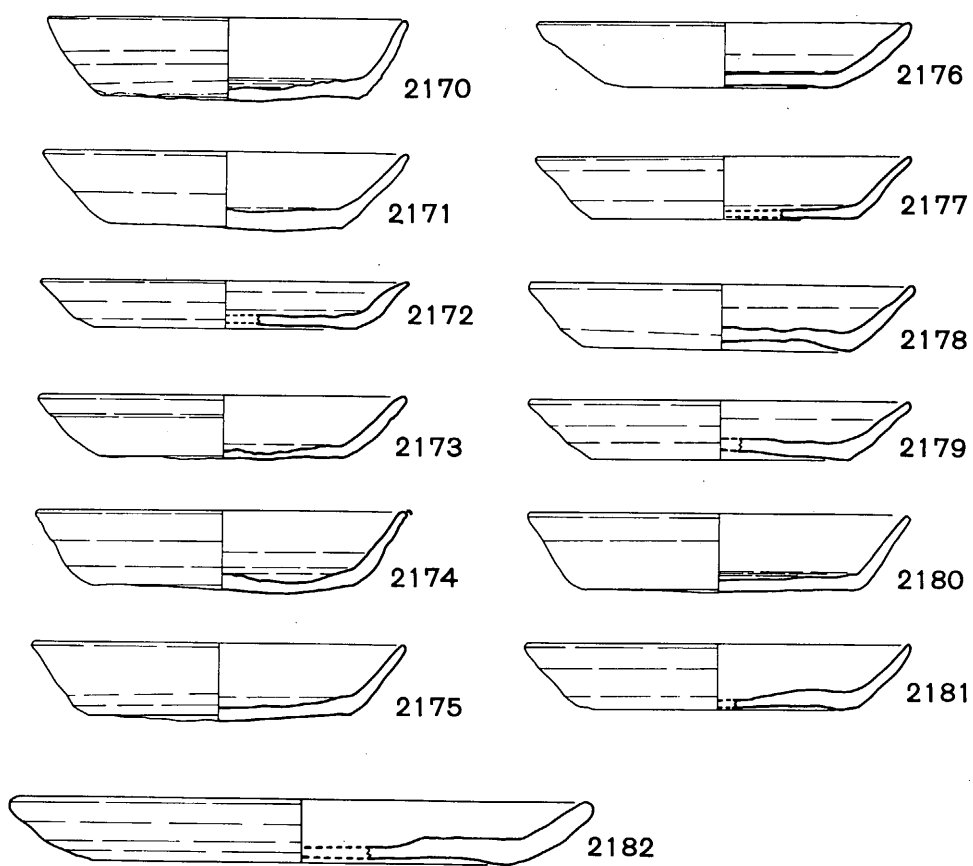
30表 5層出土土師器計測表



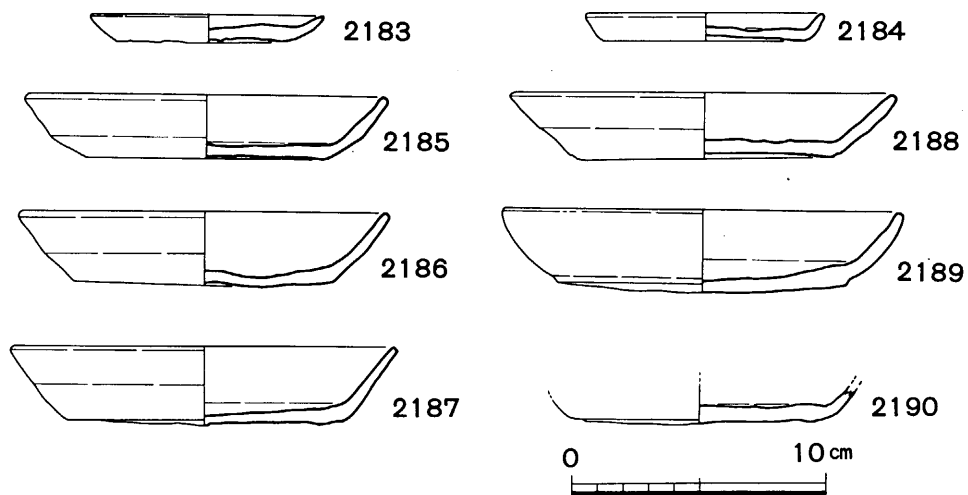
67图 土師器実測図12 (5層出土1)



68図 土師器実測図13(5層出土2)



N40区5層



69図 土師器実測図14 (5層出土3)

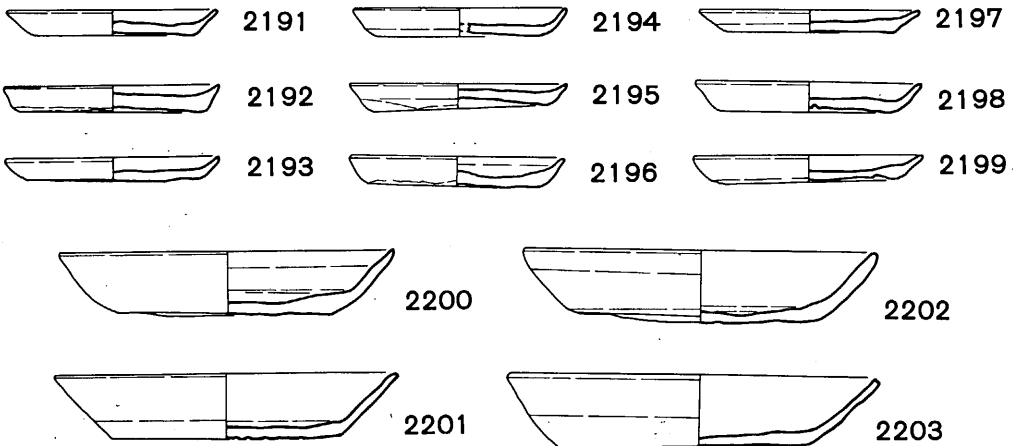
は、Ⅱ-1類とⅡ-2類との間に相当する。そのために、Ⅱ-1類の終末からⅡ-2類前半への過渡期と推定される。

②M42区：口径13.9～14.4cm，底径 9.3～10.8cm，器高 2.6～3.3 cmである。Ⅱ-2類が主体ではあるが，Ⅱ-3類の小皿もみられることから，Ⅱ-2類でも新しい方と考えた。

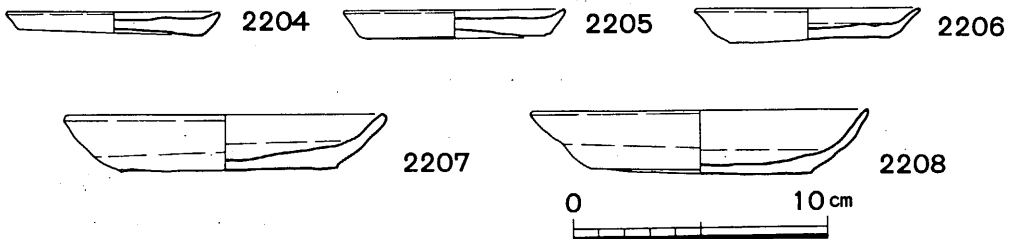
③L41区：口径12.4～13.4cm，底径 7.4～9.6 cm，器高 2.0～2.9 cmと，Ⅱ-3類の中でもやや大きめのものが数多くみられる。Ⅱ-2類に属するものもあるが，Ⅱ-3類の中でも，Ⅱ-3類の前半に集中するようである。

④N40区：口径14.6～15.8cm，底径9.45～11.4cm，器高 2.5～3.3 cmで，数点しかないが，底径に大小の差が大きく，大きいものではⅡ-1類の後半に，小さいものは，Ⅱ-2類の前半にまたがっている。

**R34区5層**



**SX201 窯跡**



70図 土師器実測図15 (S X 201・R 34—5層出土)

⑤Q40区：口径12.4～14.6cm，底径 7.4～10.4cm，器高 2.6～3.3 cmで，Ⅱ-2類からⅡ-4類のものまでふくまれる。Ⅱ-3類のものが主体であるが，その中でもⅡ-4類に移行しようとする傾向が強い。そのために，この一群は，Ⅱ-3類の後半に集中するようである。

⑥R34区：典型的なⅡ-3類の一群であるが，Ⅱ-2類のものもある。

以上，5層出土土師器群を各区ごとに，法量分析し，これらを総合した結果，特に口径と底径の関係より大きく3つの群に分かれる。すなわち，Ⅱ-1類の終末からⅡ-2類の前半までの一群と，Ⅱ-3類の前半と後半とに集中してみられる。つまりⅡ-3類が，前半と後半に分かれているということである。このことは，Ⅱ-1類からⅡ-2類へ移行する一群の存在が，はじめて確められ，また，Ⅱ-3類土師器が前半と後半とに分かれて出現することもあるという，おもしろい結果が得られた。

5層出土土師器群は，Ⅱ-1類の終末から，Ⅱ-2類の前半と，Ⅱ-3類前後半に相当すると推測される。なお，Ⅱ-2類に入るものは，非常に少ない。

S X 201窯跡(70図，31表)

b. 小皿 (2204～2206) 口径8.35～8.9 cm，底径 6.2～7.35cm，器高 0.9～1.4 cmである。黄橙色を呈し，器面にはナデがみられ，底面には糸切り痕がみられる。

c. 杯 (2207・2208) 口径12.75～13.3cm，底径 8.6～8.7 cm，器高 2.2～2.6cmである。淡橙色を呈し，胎土に砂粒をほとんど含まず，焼成は良い。器面には，ナデがみられ，底面には，糸切り痕と板目がのこっている。Ⅱ-3類に相当する。

N40区 5層				R34区 5層				No	口 径	底 径	器 高
小 皿				小 皿				2	(13.4)	8.9	2.6
No	口 径	底 径	器 高	No	口 径	底 径	器 高	3	13.8	9.4	2.8
1	9.15	6.65	1.1	1	8.1	6.2	1.05	4	14.35	9.75	2.95
2	(9.4)	(8.9)	1.1	2	8.4	7.8	1.1	S X 201 窯跡			
杯				3	(8.4)	(6.6)	1.0	小 皿			
No	口 径	底 径	器 高	4	(8.4)	(6.5)	1.1	No	口 径	底 径	器 高
1	(14.3)	9.45	2.55	5	8.5	7.6	1.1	1	8.35	7.35	0.9
2	(14.6)	10.2	2.95	6	9.0	7.0	1.1	2	8.8	7.0	1.1
3	15.0	10.8	3.15	7	(8.65)	(6.65)	0.9	3	8.9	6.2	1.4
4	15.3	10.4	2.6	8	8.8	6.7	1.2	杯			
5	(15.8)	(11.4)	3.3	9	9.0	7.0	1.1	No	口 径	底 径	器 高
6		9.4		杯				1	12.75	8.6	2.2
				No	口 径	底 径	器 高	2	13.3	8.7	2.6
				1	13.1	8.55	2.6				

31表 5層・S X 201窯跡出土土師器計測表



## 2. 須恵質および瓦質土器 (71・72・73・74図, 図版56)

### 鍋 (74図)

**2221**はL U区3層出土。体部内面から水平な鏝部までヨコナデを施す。器周残 $\frac{1}{6}$ からの復原口径20.6cmを測る。砂粒をやや含み、焼成は普通で、器内灰白色・器外暗灰色を呈し、瓦器質。**2222**はL S 35区5層出土。同様のつくりで、鏝部下に煤の付着を認める。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復原口径22.6cmを測る。砂粒をあまり含まず、焼成は良く、暗灰色を呈し、瓦器質。

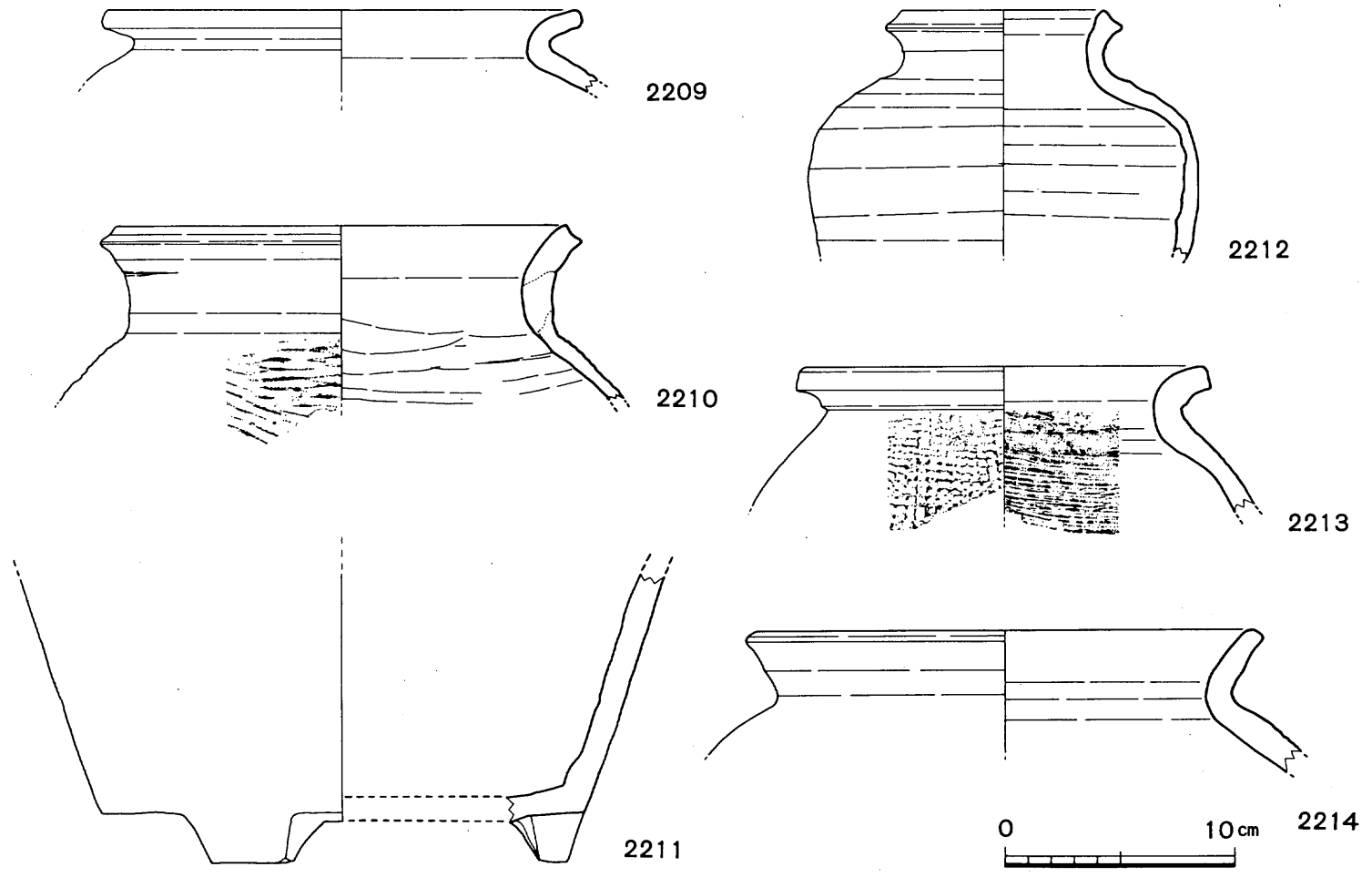
### 甕 (71・75図, 図版56-1)

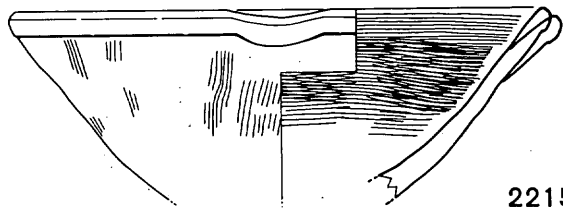
**2209**はL Q 38区4層出土。肩部外面にタタキ目痕を一部認めるが、焼成が悪く磨滅が著しい。砂粒をあまり含まず、灰白色を呈し、須恵質。**2210**はL T 36区5層出土。口縁部をヨコナデで仕上げるが、胎土の接合痕を残し、肩部内面は横方向にナデを施し、外面斜方向タタキ目痕を残す。焼成は良く、青灰色を呈し、瓦質。**2212**はL S 40区5層出土。器内外共にヨコナデで仕上げる。胎土の砂粒は小さいが、焼成が悪く、暗赤橙色を呈す。口唇部のヨコナデは**2210**に通じるものが認められるが、須恵質よりもむしろ在来陶器の焼成に近い。**2213**はL D 40区4層出土。口縁部をヨコナデで仕上げ、肩部内面に横方向ハケ目痕、外面にタタキ目痕をどちらもシャープに残す。砂粒をあまり含まず、焼成は良く、青灰色を呈し、須恵質。口縁部に薄い自然釉を認める。**2214**はL M 41区4層出土。**2213**と同様のタタキ目痕を残すが、内面はヨコナデで仕上げる。砂粒をあまり含まず、焼成は良く、青灰色を呈し、須恵質。**2231**はL O 41区5層出土。内面から口縁部にかけてはヨコナデを施し、口縁部はシャープに仕上げる。外面は頸部で斜方向、肩部で横方向にそれぞれタタキ目痕を残す。器周残 $\frac{1}{8}$ からの復原口径47.8cmを測る。砂粒をあまり含まず、焼成は普通で、灰色を呈し、瓦質。

### 片口 (72図, 図版56-1)

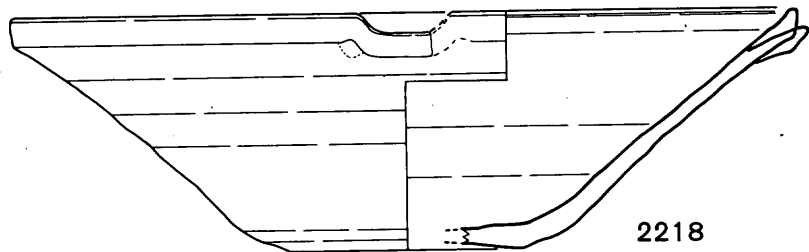
**2215**はL R 37・L S 37区4層出土。体部内面に横方向ハケ目を施すが、中位は特に密である。口縁部が若干肥厚し、体部外面とは段をなす。口径21.5cmとやや小さく、灰色～淡灰褐色を呈し、瓦器質。**2216**はL V 34区3層出土。体部内面は使用による磨滅が認められる。口径27.1cmを測り、口縁部は灰黒色・体部は灰色を呈し、須恵質。**2217**はL R区5層出土。体部内面の下半部は横方向ハケ目を短間隔で施し、上半部は下から上にやや長めの縦方向ハケ目を施す。体部外面は縦方向に最下部から雑にハケ目を施す。片口部を欠くが、口径26.6cm、器高10.5cmを測り、淡橙色～淡灰色を呈し、瓦器質。**2218**はL X 40区SK**219**出土。内外面共にヨコナデで仕上げる。口径31.1cm、器高9.3cmを測り、口縁外部のみ暗灰色、他は灰色を呈し、須恵質。**2219**はL S 36区5層出土。体部内面は下から斜方向にハケ目を施すが、外面は磨滅により不明。口径28.8cmを測り、暗灰色を呈し、瓦質。**2220**はL R 41区5層出土。内外面共に丁寧なハケ目を施し、口縁部のヨコナデも丁寧である。口径28.7cm、器高11.5cmを測り、焼成は良く、灰色

71図 須恵質および瓦質土器実測図

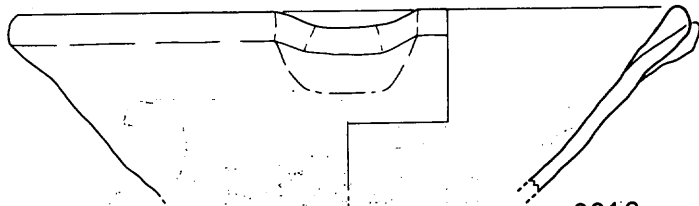




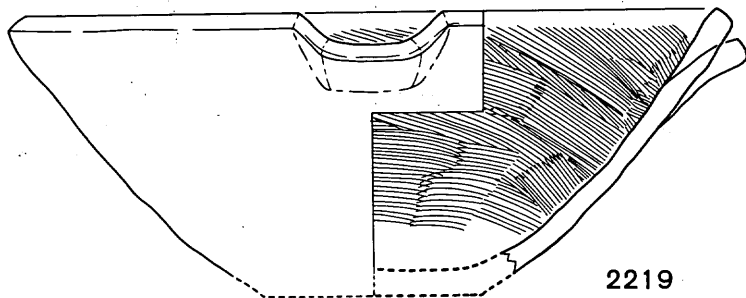
2215



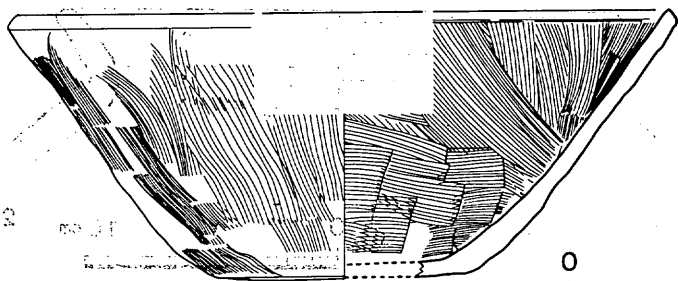
2218



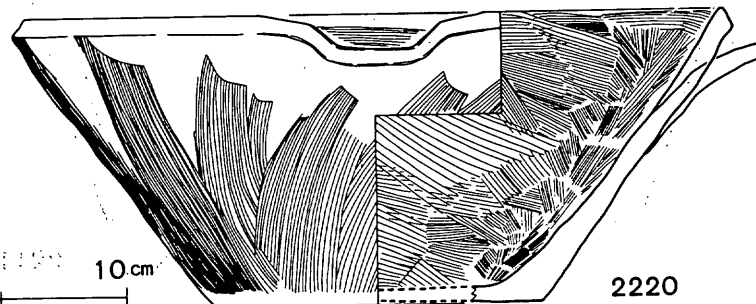
2216



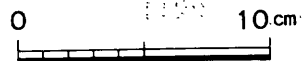
2219



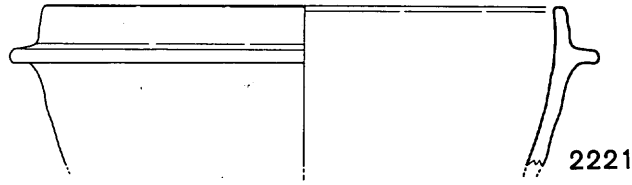
2217



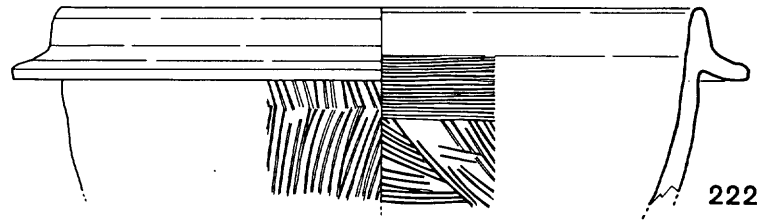
2220



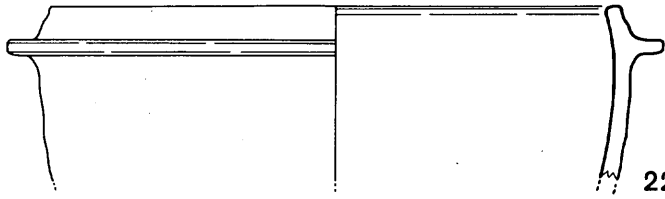
72图 片口美测图



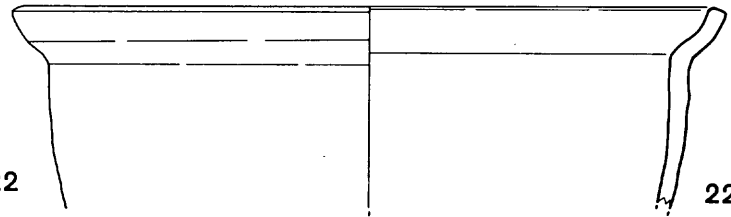
2221



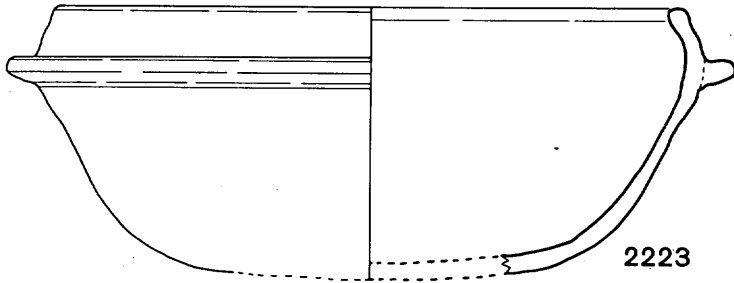
2224



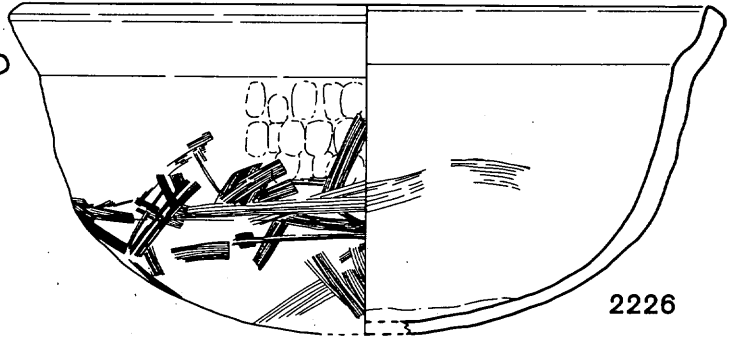
2222



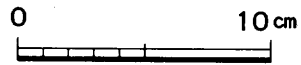
2225



2223



2226



73图 土 鍋 実 測 图

を呈し、瓦器質。

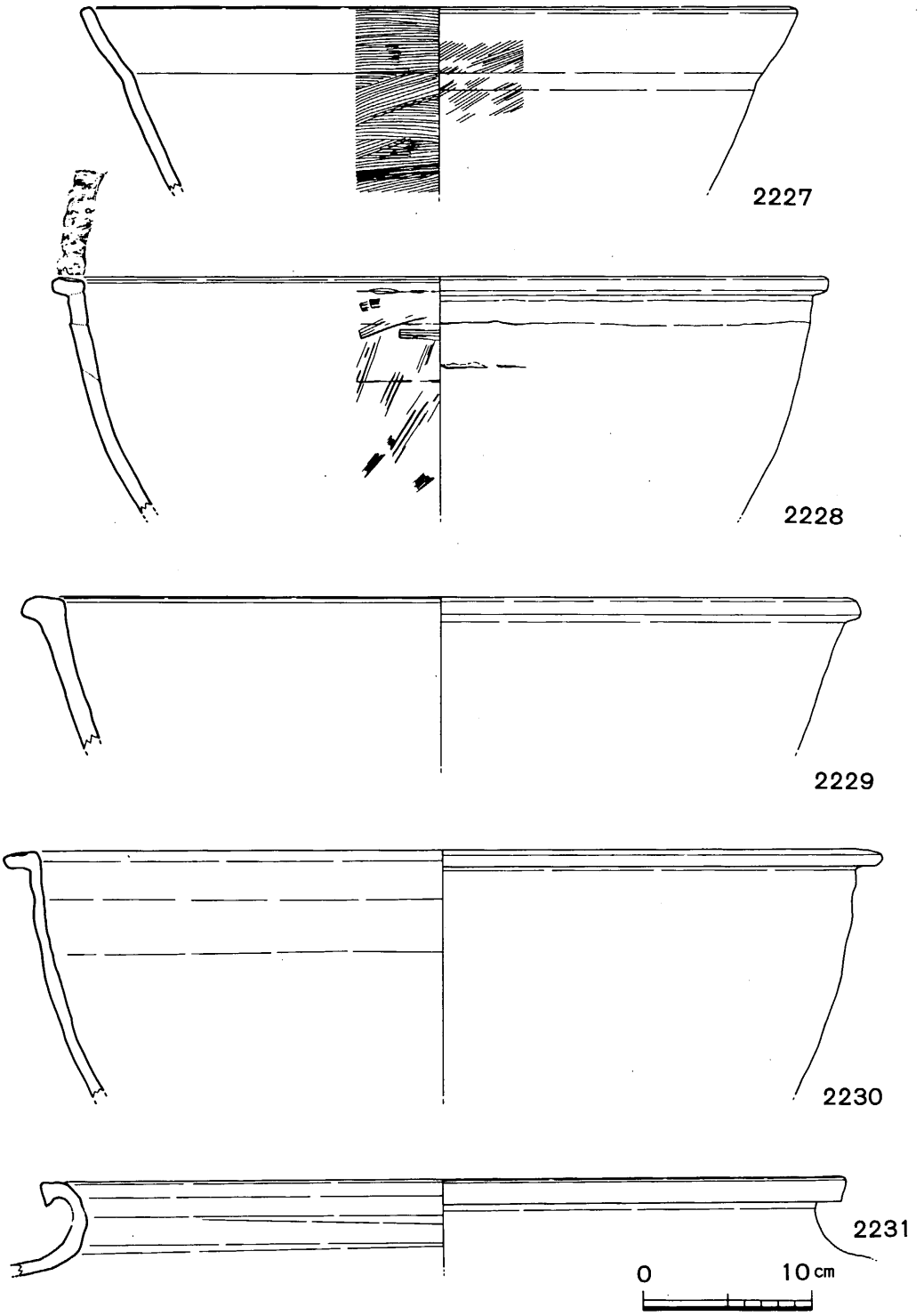
### 火 舎 (71図)

2211はL V 41区 S K 231 出土。体部内面は下半部をヨコナデで仕上げ、上半部にナデを施す。外面はヨコナデ後、縦方向にヘラ研磨を施し器表を平滑に仕上げる。脚部はシャープなつくりであるが、破片のためその数は不明。砂粒を若干含み、焼成は良く、器内暗青灰色、器外白灰褐色を呈し、瓦質。

## 3. その他の土師器 (73・74図, 図版56)

### 鍋 (73・74図, 図版56—2)

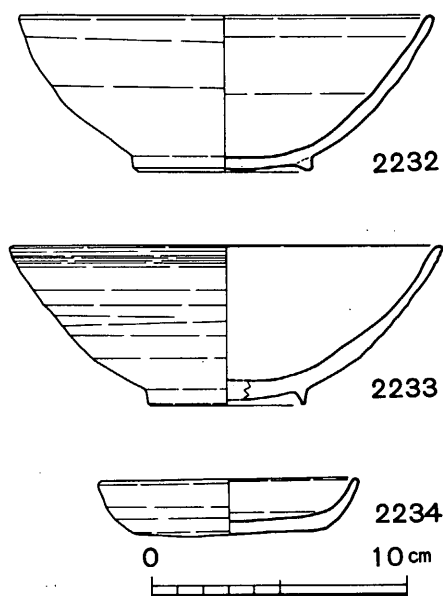
2223はL R 35区 5層出土。口縁部を内弯させ、体部は雑なヨコナデを施す。外面は鋳下半から底部にかけて全面煤に覆われている。器周残 $\frac{1}{3}$ からの復原口径25.0cm, 器高約10.8cmを測る。砂粒を含み、焼成は良く、暗茶褐色を呈す。2224はL U 39区 5層出土。口縁内面から下向きの鋳部までヨコナデ、他は粗いハケ目を施す。外面煤の付着をみる。器周残 $\frac{1}{6}$ からの復原口径25.4cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は良く、淡茶褐色を呈す。2225はL区 4層出土。体部から大きく屈折する口縁部は内弯し、ヨコナデを施す。器周残 $\frac{1}{6}$ からの復原口径28.4cmを測る。砂粒を多く含み、淡橙色を呈す。2226はL T・L U 35区 3層出土。体部内面は丁寧なナデであり、ハケ目は一部に認める。口縁部はヨコナデを丁寧に施す。体部外面の上半部は指先による成形痕を残し、下半部は密にハケ目を残す。多くの破片となって出土したが、完形に接合でき、口径28.6cm, 器高13.0cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は良く、器内褐色、器外暗褐色を呈す。2227はL P 40区 5層出土。内面は密に横方向のハケ目を全面に残すが、外面は一部に斜方向のハケ目の後でナデを丁寧に施す。外面煤の付着をみる。器周残 $\frac{1}{6}$ からの復原口径42.6cmを測る。小さい砂粒を含み、焼成は良く、暗褐色を呈す。2228はL Q 34区 5層出土。体部の内面はヘラによるナデを施し、外面は丁寧に横方向にナデるが、内外共に胎土の接合痕を残し、粃穀の圧痕を認める。口縁平坦部は、草本類の圧痕文を全周させる。外面は煤の付着をみる。器周残 $\frac{1}{8}$ からの復原口径46.0cmを測る。大きめの砂粒を含み、焼成は良く、淡灰褐色を呈す。2229はL S 32区 5層出土。内外面共に丁寧なナデを施し、口縁平坦面に2228同様の圧痕文を認める。器周残 $\frac{1}{6}$ からの復原口径49.8cmを測る。大きい砂粒を多く含み、焼成は良く、暗褐色を呈す。2230はL Q・L R 34区 S K 208 出土。器周面および口縁平坦面までを横方向のハケ目で仕上げ、外面は丁寧にナデを施す。口縁平坦面には2228同様の圧痕文を残す。外面の煤の付着が著しい。器周残 $\frac{1}{8}$ からの復原口径52.2cmを測る。大きめの砂粒を含み、焼成は良く、暗褐色を呈す。



74図 土鍋・瓦質甕実測図

## 4. 瓦器 (75図)

**2232**は体部下半に指圧痕があり、底面に板目痕があり、その上から高台がつけられている。内面は灰白色で、外面は暗灰白色であり、両面とも研磨されている。S K 232 土坑出土。**2233**は器面に横ナデが施され、内面は研磨されている。高台は薄く先端は尖っている。焼成は悪く、内面は黒灰色で、外面は赤褐色ないし暗褐色である。5層出土。**2234**は皿形のもので、底面は糸切り痕と板目痕が残り、その上を軽く研磨している。器面は両面とも研磨されている。器面は灰白色で、口縁の一部は黒色で、焼成は良好である。5層出土。

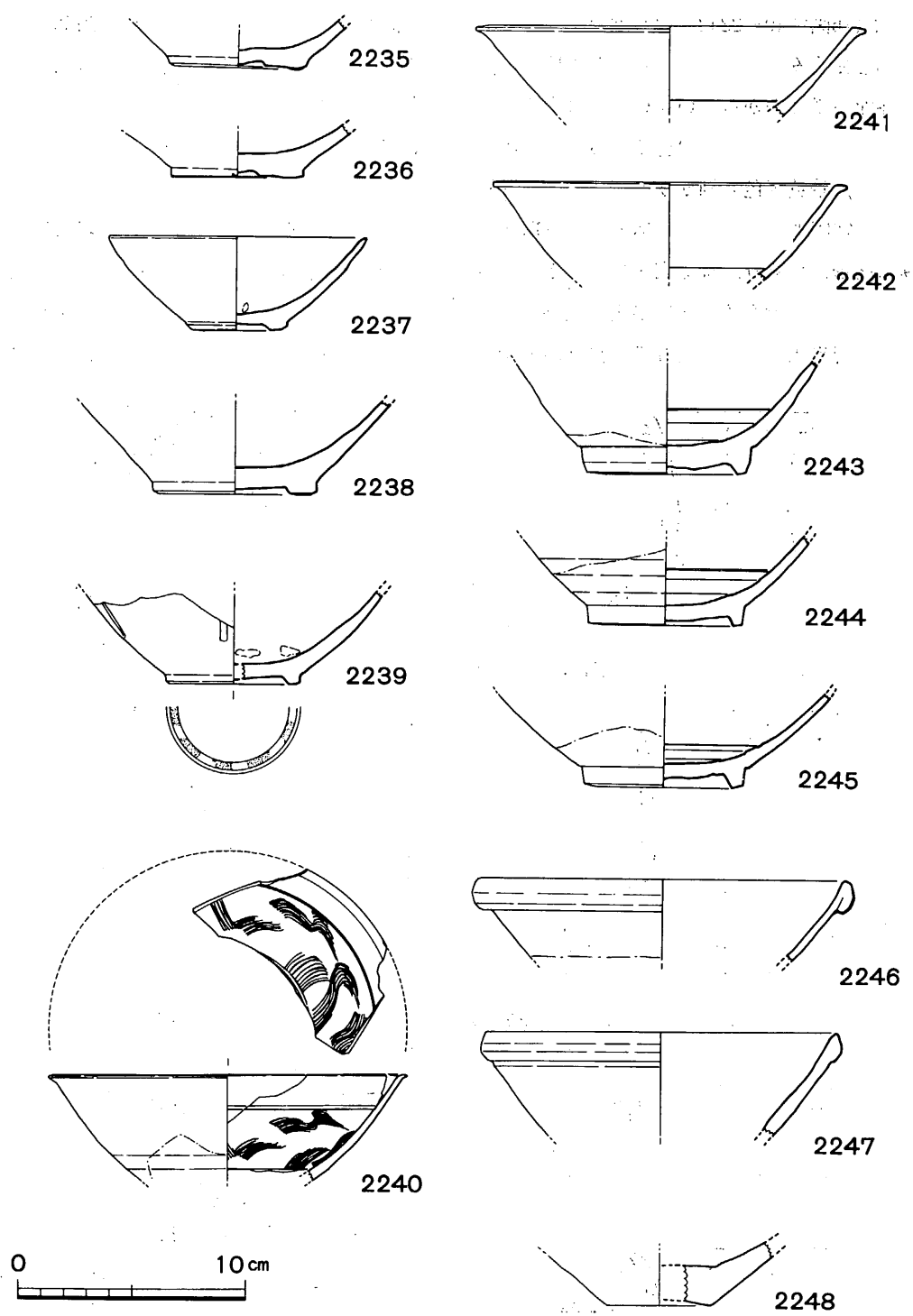


75図 瓦器実測図

## 5. 磁器 (76~89図)

第2次の調査においても磁器類は多量に出土しているが、土師器についてもいえるように、やや時期的に新しいものが主体を占めるため、古手の白磁の量は少ない。そのかわり白磁である6類や、青磁の7・8・9類は量も多く、完形に近い器形のものも多い。なおここでは破片は小さくとも器形的に重要なものは、復元して載せることにした。なお分類は従来そのままとするが、分類にない磁器もかなり出現してきた。

**1類** (76図2235~2239) いわゆる越州窯系の青磁で、**2235・2236**の高台は床付部が幅広く蛇目高台といわれているもので、**2235**は床付部に重ね土の跡がついている。胎土は灰白色で、灰オリーブ色の釉がかけられている。S K 233 土坑出土。**2236**は床付部の外面近くは釉かけ後釉をかきとり、そこに重ね土をおいた目跡がついている。胎土は灰白色で、明オリーブ灰色の釉がかかっている。S E 209 井戸掘方出土。**2237**は小形の椀で底部は釉がかけられていない。床付部と見込みに目跡が残っている。胎土は淡褐色で釉は灰褐色である。4層出土。**2238**は床付部に目跡が残り、胎土は灰褐色で、釉は灰黄色である。出土層位不明。**2239**は見込みに重ね土の目跡が残り、床付部は釉が削りとられ、目跡以外は茶褐色になっている。体部外面には5箇所沈線状のくぼみがみられる。S X 201 窯南側土坑内出土。

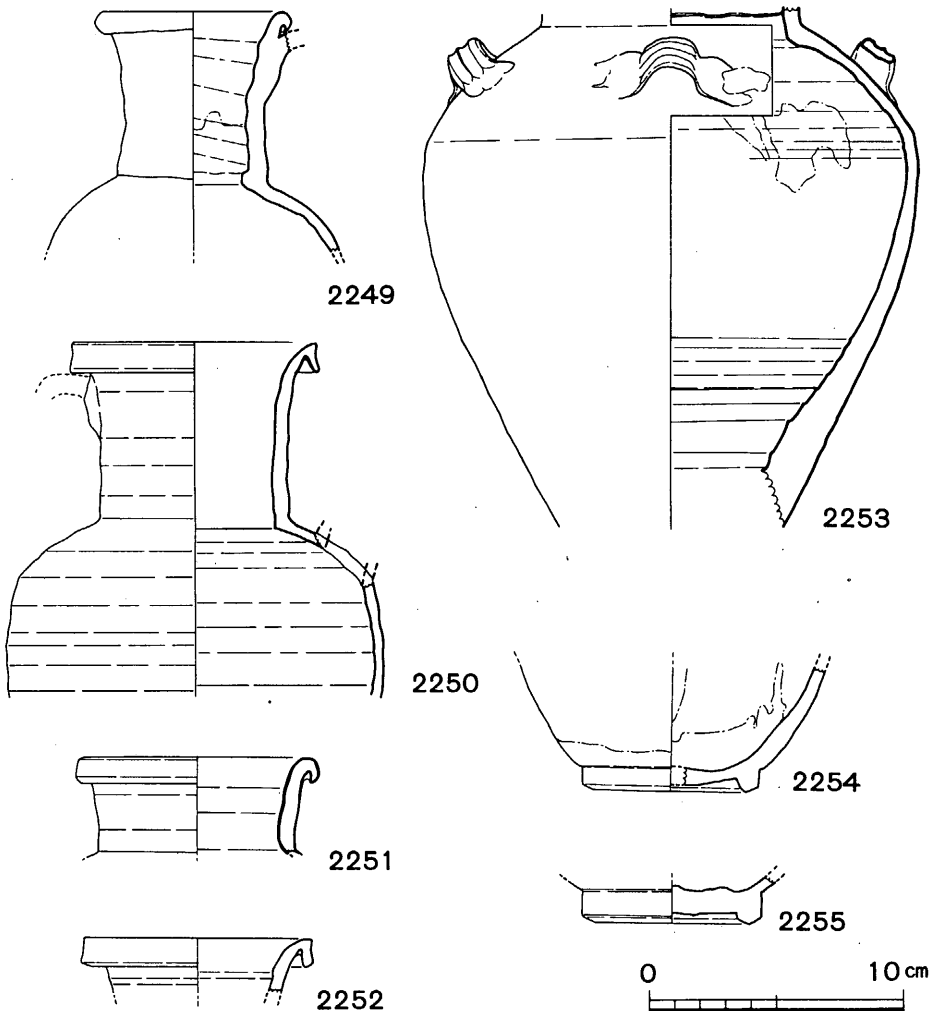


76图 磁器实测图 1



**3類** (76図2240~2242) 口唇部が平坦で、外にやや張り出る白磁で、高台は高い。2240は内面上部と見込みに沈線がめぐり、その間に櫛歯文が描かれている。胎土は灰白色で、黄灰色の釉は外面下半はかかっている。5層出土。2241は見込みに沈線がめぐり、胎土は白色で、細かな黒斑があり、釉は灰白色である。5層出土。2242は同様に見込みに沈線がめぐり、胎土は灰白色で、暗黄灰色の釉がかかっている。5層出土。

**4類** (76図2243~2245) 見込み部分を環状に釉をかきとった白磁で、高台は低い。2243は見込みに沈線がめぐり、釉は底部にはかかっている。高台内に判読できない墨書がある。胎土・釉とも灰白色である。5層出土。2244はほぼ同様で胎土は灰白色を、釉は淡黄灰色を呈している。5層出土。2245も同様で、見込みの環状に釉をかきとった部分と床付部に薄い白土を塗



77図 磁器実測図 2 (C類)

り、重ね焼きの時に付着するのを防いでいる。胎土は灰味白色で、釉は灰白色を呈している。5層出土。

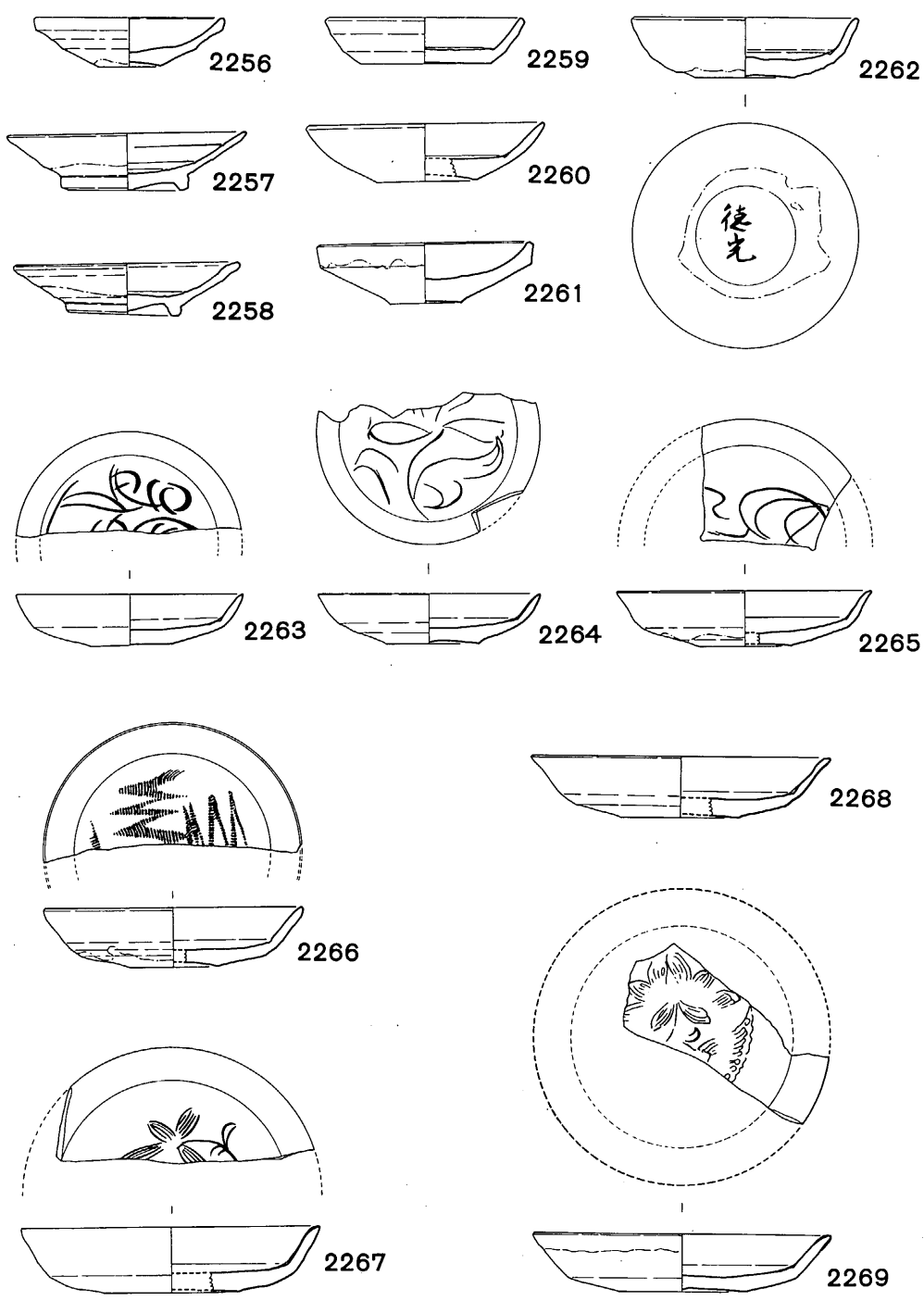
**5類**(76図2246・2247)口縁部が玉縁状になるもので、**2246**は折り曲げて口縁をつくり、釉は外面下半部にはかかっている。胎土は灰白色で、釉は明灰色である。5層出土。**2247**も同様に口縁を折り曲げ、胎土は灰白色で、釉はやや黄味を帯びた灰白色である。5層出土。**2248**はどの類にもはまらない。特異な土器で、壺などの底部ではない。釉は内外面ともにかかり、底面のみ釉をかきとっている。胎土は灰白色で明緑灰色の釉がかかっている。X43区の落込みからの出土である。

**a** (78図2256) 削り出しで、玉縁状の口縁をつくった白磁小皿で、底部には釉がない。胎土は灰色で釉は暗灰色を呈し、底部の釉のかからない部分は灰紫色で焼成は悪い。3層出土。

**b** (78図2263～2269) 口縁と底部との境に弱い屈折部をもったもので、ここではおよそ3群にわかれる。1群(2263・2264)は径9.7cmのもので、見込みにヘラによる花文が描かれ、口縁端は尖り、底部は釉が削りとられている。**2263**は胎土灰白色で、釉は明灰色である。出土層位不明。**2264**は胎土は灰白色で、釉は黄味灰白色である。5層出土。2群(2265・2266)は口径約11cmで、体部の屈折は丸味をおび、見込みに櫛歯文やヘラによる花文が描かれ、底部には釉がかかっている。ともに胎土は灰白色で、釉は黄味白色で5層からの出土である。3群(2267～2269)は口径約12.5～13cmで、口縁端が尖り、見込みに印花文がみられる。底面の釉はかきとられている。**2267**は胎土は灰白色、釉は明灰色である。S K 219 土壇出土。**2268**は胎土は灰黄色で、釉は淡黄灰色で焼成は悪く、細かな貫入がみられる。5層出土。**2269**の胎土は灰白色で、釉は明灰色を呈している。3層出土。

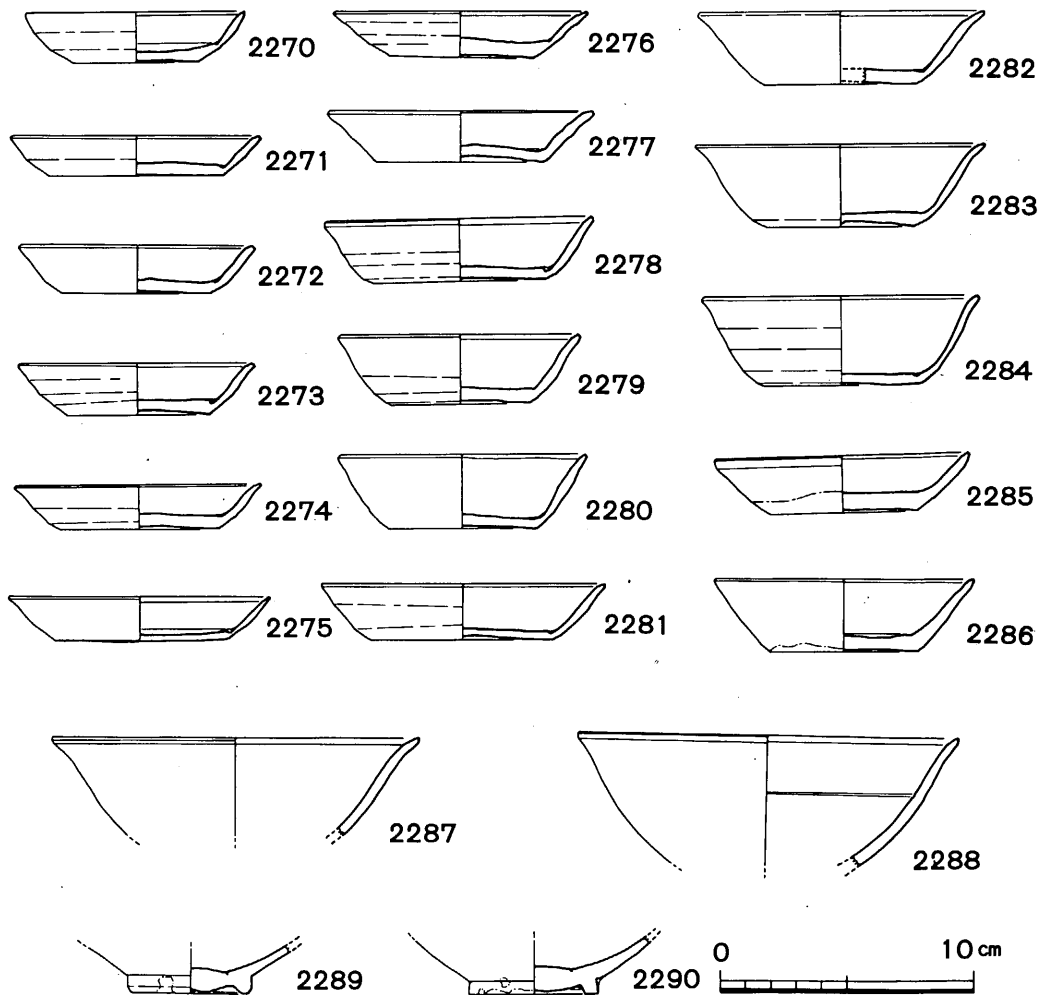
**c** (77図2249～2255) 四耳壺形ないし水差形の白磁で、**2249**は水差と思われるもので、把手の部分が欠損している。折り曲げて丸味をおびた口縁をつくり、内側は頸部の中位以下には釉は薄くかかっている。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色である。出土層位不明。**2250**も水差で、口縁は折り曲げてつくられ、把手と注口部が欠損している。胎土は明灰色、釉は灰白色で、内面にもかけられている。5層出土。**2251**は折り曲げ口縁で、胎土は白色を、釉は青味をおびた白色を呈している。S K 237 土壇出土。**2252**は同じく折り曲げ口縁で、胎土は黄灰色、釉は明灰色である。5層出土。**2253**はS X 201 窯跡出土のもので、頸部と底部を欠損しているが、胴部はほぼその形を残している。肩部に4箇所耳をつけた四耳壺で、底部近くは厚くなっている。胎土は白灰色で、釉は明緑灰色を呈している。**2254**は釉は高台のついた底部にはかからず、内面も内底面近くのみ釉がかかっている。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色である。5層出土。**2255**は把手のついた水差の底部で、釉はかかっているが、内面には薄くかけられている。胎土は明灰色で、釉は明緑灰色である。5層出土。

**6類**(79図2270～2290) 口縁部の釉をかきとった、いわゆる口禿げの白磁で、器形には杯ない



78图 磁器实测图 3

し皿形のものと同台がついた椀形のものがあり、そのほかここではみられないが、高台のついた杯形ないし皿形のものもある。杯ないし皿形のものでは底部にも薄く釉がかかったもの(2270~2284)と、底部に釉のかからないもの(2285・2286)とがあり、椀形のものでは、底部の見込み部分大きいものと、深目で小さいものとがみられる。2270は小形のもので、胎土は白灰色で釉は明緑灰色である。3層出土。2271は胎土は白色で、釉は明緑灰色を呈す。4層出土。2272は内外面とも貫入がみられ、2272、2273は胎土は白色で、釉は明緑灰色を呈している。3層出土。2274の胎土は白色で、釉は明緑灰色である。出土層位不明。2275は内外面に貫入があり、胎土は灰色で緑味淡灰色の釉がかけられている。5層出土。2276は外面の釉は底部に向かって流れているが、これは釉かけ時にそうなったものかどうかは不明である。胎土は白色で、釉は明緑灰色である。3層出土。2277は焼成はあまり良くなく、胎土は淡灰色を呈し、釉は同様



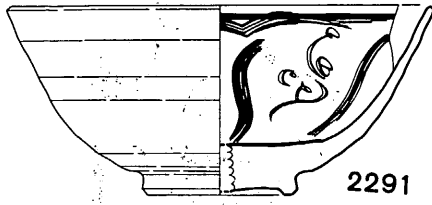
79図 磁器実測図4(6類)

に淡灰色で、底部にもやや厚くかかっている。5層出土。**2278**は内面全体および外面上半は横ナデが施され、その下はヘラ削りのままで、胎土は白色で、釉は淡青白色を呈し、青白磁に似ている。3層出土。**2279**は口唇部の口禿げの部分に黒褐色の付着物がついている。胎土は灰白色で、釉は緑味灰白色を呈す。S K 239 土坑出土。**2280**の胎土は白色で、釉は灰白色である。5層出土。**2281**の胎土は白色で釉は明緑灰色である。5層出土。**2282**も胎土は白色で、灰白色の釉がかかっている。5層出土。**2283**は灰白色で、釉は明緑灰色である。5層出土。**2284**の胎土は灰白色で釉は明緑灰色である。S X 202 窯埋土出土。**2285**は内外面とも貫入があり、底部には釉はかかっていない。胎土は灰白色で、釉は青緑灰色である。4層出土。**2286**は外面に貫入があり、底部には釉はかかっていない。底面に径 5.2cm、幅 4mmの胎土と同じ環状の重ね焼きのあとが残っているが、径が小さいため小皿のような容器ではなく、焼成台のように思われる。4層出土。**2287**～**2290**は高台付椀である。**2287**は内外面に貫入が認められ、胎土・釉とも灰白色を呈している。5層出土。**2288**は内面に沈線がめぐり、胎土は灰白色で釉は青味をおびた灰白色である。5層出土。**2289**・**2290**は底部で、見込みの部分が小さく、底部にも薄く釉がかかっている。胎土は白色で、釉は青味をおびた灰白色である。ともに5層出土。

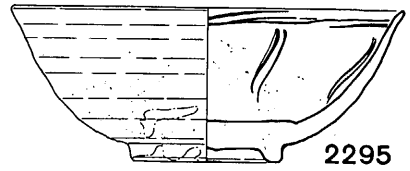
その他の白磁(78図)としては、2257・2258のように見込みに環状の釉をがきとったあとのある高台付小皿がある。底部には釉はかけられていない。胎土は灰白色で釉は淡灰色である。**2257**はS K 237 土坑出土。**2258**はS K 221 土坑出土。**2259**は器形は6類の杯に似るが、口唇部の釉かきとりはなく、底面の中央には釉がかからず、一部かきとられている。胎土は灰白色を呈するが、底面近くは淡褐色である。釉は明緑灰色で細かな貫入がみられる。焼成はあまり良くない。出土層位不明。**2260**の胎土は白色で、釉は青味白色であり、底面は釉がかきとられている。Q 35区石組付近出土。**2261**は口縁部と内面に釉がかけられ、口唇部は釉がかきとられている。胎土は明灰色で釉は灰白色である。3層出土。**2262**は底部には釉はかからず、底面に「徳光」の墨書銘がある。なお釉の面に施釉直後右手で裏がえしにつかんだ痕跡が認められる。器面には一部貫入があり、胎土は灰白色で、明緑灰色の釉がかけられている。ロクロは左回転である。5層出土。

**7類**(80～83図2291～2329)低い高台を有し、胴部はやや丸味をおびた青磁で、文様により数種に分けられるが、底部および器形ではあまり差はない。高台内の底面は平坦で釉はかけられていない。

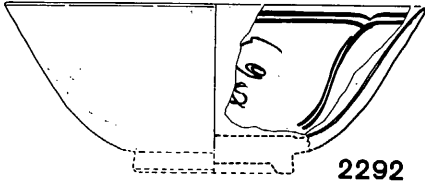
**A**(2291～2297)外側は無文で、内側に線で区切られた空間に飛雲状文が描かれたものである。**2291**は胎土は灰色で、釉はオリーブ灰色である。見込みにワラビ状の草花文が描かれている。出土層位不明。**2292**の胎土は灰色で、釉は灰緑色で貫入がみられる。5層出土。**2293**は内面を5区割に分けその中に飛雲状文を配し、見込みにワラビ状の草花文が描かれていて、高台内に円柱状の焼成台が付着している。胎土は明灰色で釉はオリーブ灰色を呈している。5層出土。



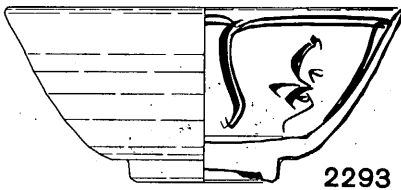
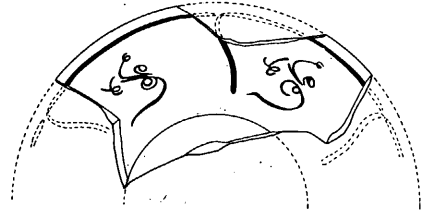
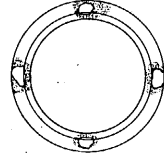
2291



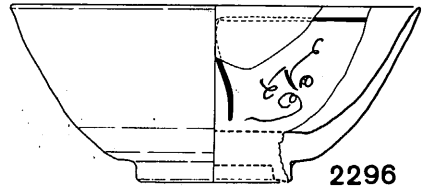
2295



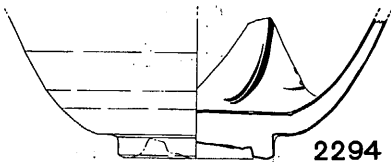
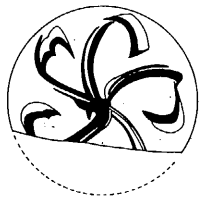
2292



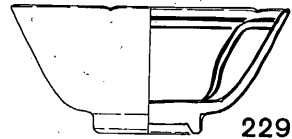
2293



2296



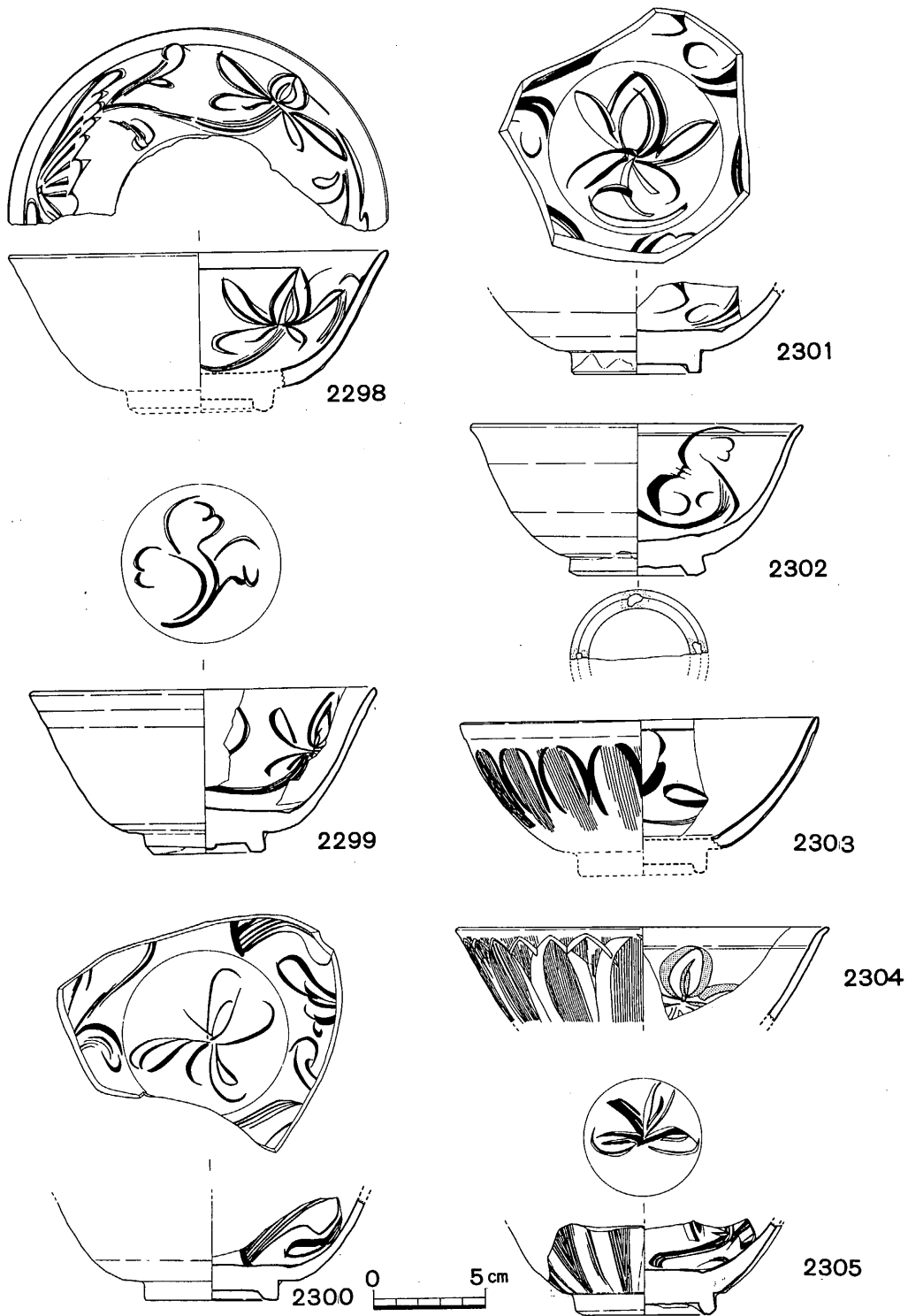
2294



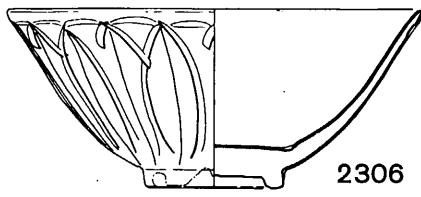
2297



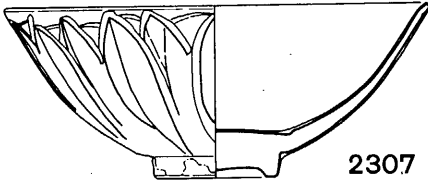
80图 磁器实测图 5 (7A类)



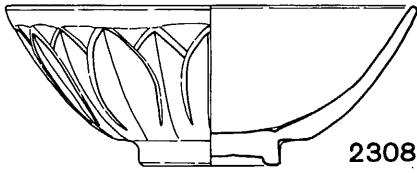
81圖 磁器實測圖 6 (7B類)



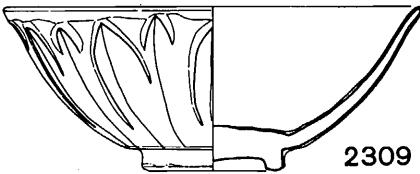
2306



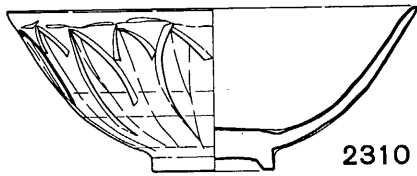
2307



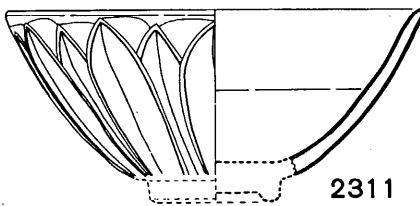
2308



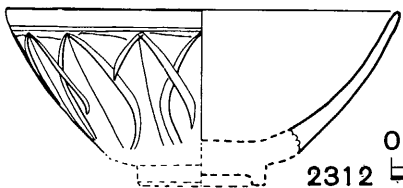
2309



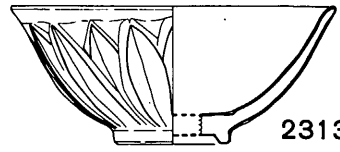
2310



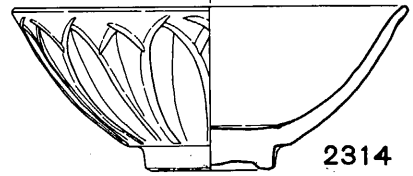
2311



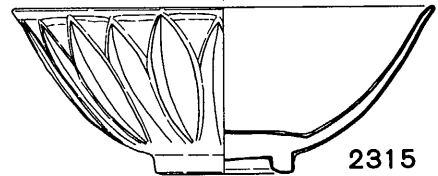
2312



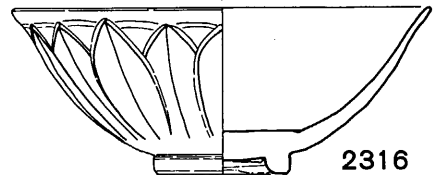
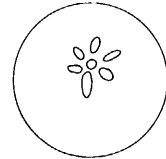
2313



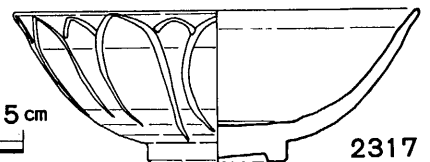
2314



2315



2316



2317

0 5 cm

82图 磁器实测图 7 (7C类)

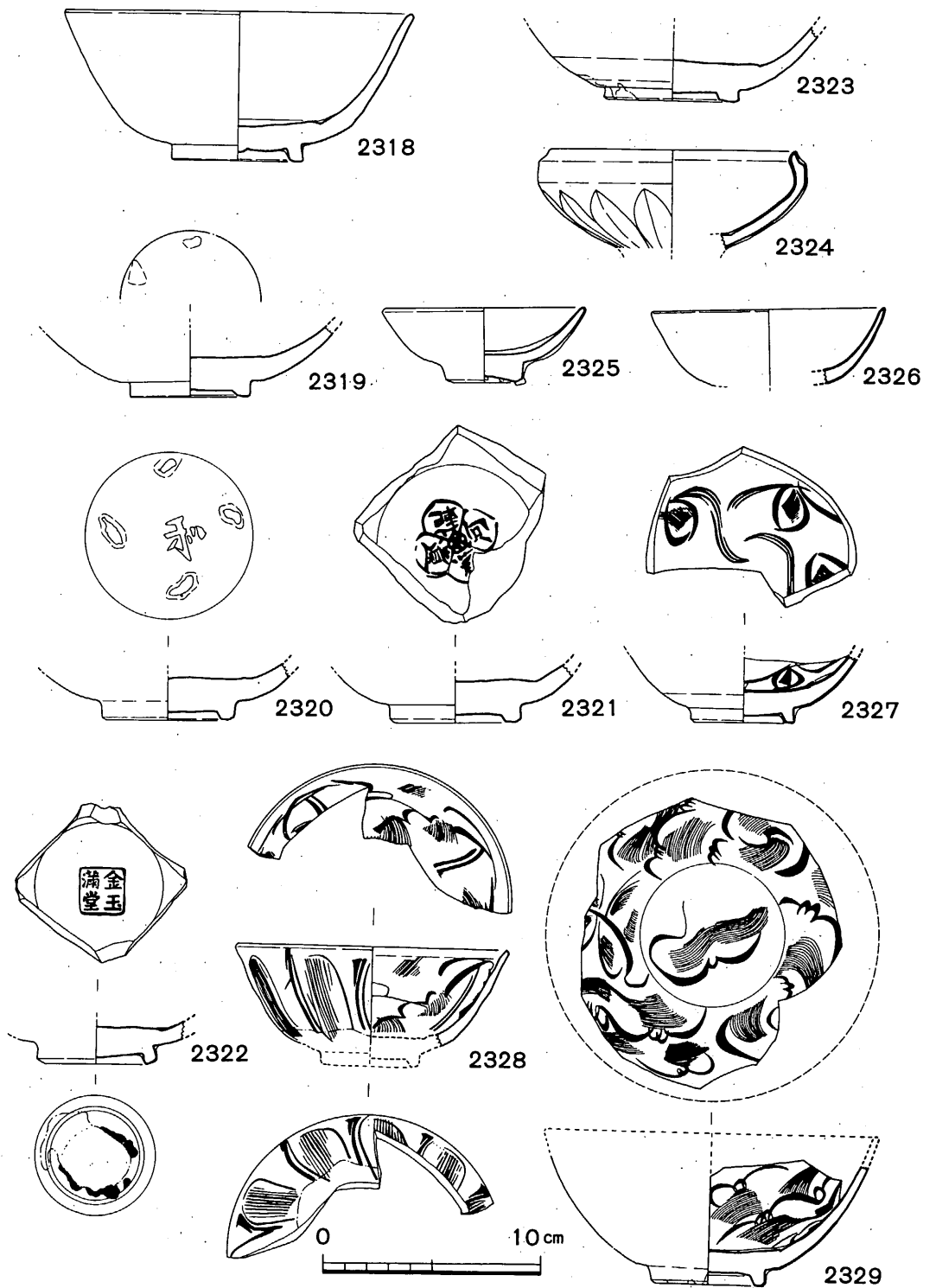


**2294**は見込みに花文が描かれ、高台内に径3cmの円形の焼成台の跡が残る。胎土は明灰色で、釉はオリーブ灰色を呈す。5層出土。**2295**は釉も薄く粗雑な作りで、飛雲状文と見込みの文様は省略されている。高台の床付部に4箇所目跡がついていて、他のものと窯詰めの方に相違がある。胎土は明灰色で、釉は灰緑色であるが、かなり風化している。5層出土。**2296**は復元によれば内面を6区割に分けている。胎土は灰色で釉はオリーブ灰色を呈している。S K 232 土坑出土。**2297**は5区割に分けられ、輪花があるが、飛雲状文はない。胎土は灰色で、薄緑青色の釉がかけられている。高台内に径2.3cmの焼成台の一部が付着している。5層出土。

**B** (2298~2302) 内面にヘラによる蓮の花文が描かれ、見込みにも花文が描かれている。**2298**の胎土は明灰色で、釉は灰緑色を呈する。3層出土。**2299**は見込みにワラビ状の草花文が描かれているもので、胎土は灰白色で、褐味灰緑色の釉がかけられている。S K 237 土坑出土。**2306**は高台内に径2.7cmの円形の焼成台痕がついている。胎土は灰色で、釉は灰緑色である。5層出土。**2301**の胎土は灰白色で釉はオリーブ灰色である。5層出土。**2302**は2295とよく似て胎土は黄灰色で、灰黄色の釉が薄くかかり、風化が進んでいる。高台および高台内に釉はかからず、高台床付部に目跡が4箇所にみられる。S K 232 土坑出土。

そのほかに外面に櫛目を入れた蓮弁がつくものがあるが、内面文様はB類とあまり変わらないものがある。**2203**は鎬はなく胎土は灰白色で、釉は淡緑色である。5層出土。**2304**は鎬蓮弁の上に櫛目を入れている。胎土は灰白色を、釉は暗灰緑色を呈している。5層出土。**2305**も鎬蓮弁の上に櫛目を入れたもので、見込みに花文が描かれている。高台内に焼成台が一部付着している。胎土は白灰色で、釉はオリーブ黄色である。S K 233 土坑出土。

**C** (2306~2317) 外面に蓮弁文をもつもので、削り出されて鎬蓮弁になっているものと、沈線によって蓮弁が描かれたものがある。内面は無文で、見込みに印文がつくものがある。2306の胎土は灰白色で、釉は灰緑色である。部分的に大きな貫入がみられる。3層出土。**2307**の胎土は明灰色で、暗緑色の釉がかけられている。高台内に焼成台跡が残る。4層上面出土。**2308**は焼成は悪く胎土は灰黄色で、釉はオリーブ黄色を呈し、細かな貫入がみられる。高台内に焼成台の跡が残る。3層出土。**2309**は見込みに牡丹の花の印文がみられる。高台内に径2.7cmの焼成台の跡が残る。胎土は灰白色で、釉は明灰緑色である。5層出土。**2310**の胎土は灰白色で釉はオリーブ灰色を呈し、高台内に焼成台の跡が残っている。5層上面出土。**2311**の胎土は灰白色で、釉は明青緑色である。4層出土。**2312**の胎土は黄味灰色で、釉は褐灰色を呈している。5層出土。**2313**は小形の椀で、胎土は灰白色、釉は薄青色である。5層出土。**2314**は見込みに花の印文があるもので、高台内に焼成台の跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰味黄緑色である。Q 35区石組付近出土。**2315**は見込みに渦文を組合わせた印文があり、高台内に径3cmの焼成台の跡が残る。胎土は明灰色で、釉は明緑色を呈し、厚くかかっている。4層出土。**2316**は見込みに押印による小さな花の浮文があるもので、高台内にも薄く釉がかかり、焼成台が



83图 磁器实测图 8 (7类)

付着している。胎土は明灰色で、釉はオリーブ灰色を呈し、かなり風化している。3層出土。**2317**は見込みに押印による「吉」の字の浮文があり、外面は沈線によって蓮弁が描かれている。胎土は褐味灰色で釉は灰緑色である。出土層位不明。

D (2318~2323) 器形は同じで、内外面とも無文であるが、見込みに印文をもつものもある。**2318**は高台内に焼成台の跡が残り、胎土は黄白色で、釉は灰黄色である。5層出土。**2319**は見込みに4箇所と高台内側に目跡が残っているもので、胎土は灰色で釉は緑灰色である。5層出土。**2320**は見込みに4箇所目跡が残り、「和」の字の浮文が押されている。胎土は桃灰色で、釉は灰褐色で風化が進んでいる。SD201 溝下部出土。**2321**は見込みに「河浜遺範」の印文があり、高台床付部3箇所に目跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。5層出土。**2322**は見込みに「金玉満堂」印文があり、高台内に径3.4cmの円柱状焼成台の跡が残っている。胎土は明灰色で、灰青色の釉がかけられている。V34区柱穴内出土。**2323**は見込みに4箇所と、高台床付部に目跡が残っている。胎土は灰色で釉は暗灰緑色である。4層出土。

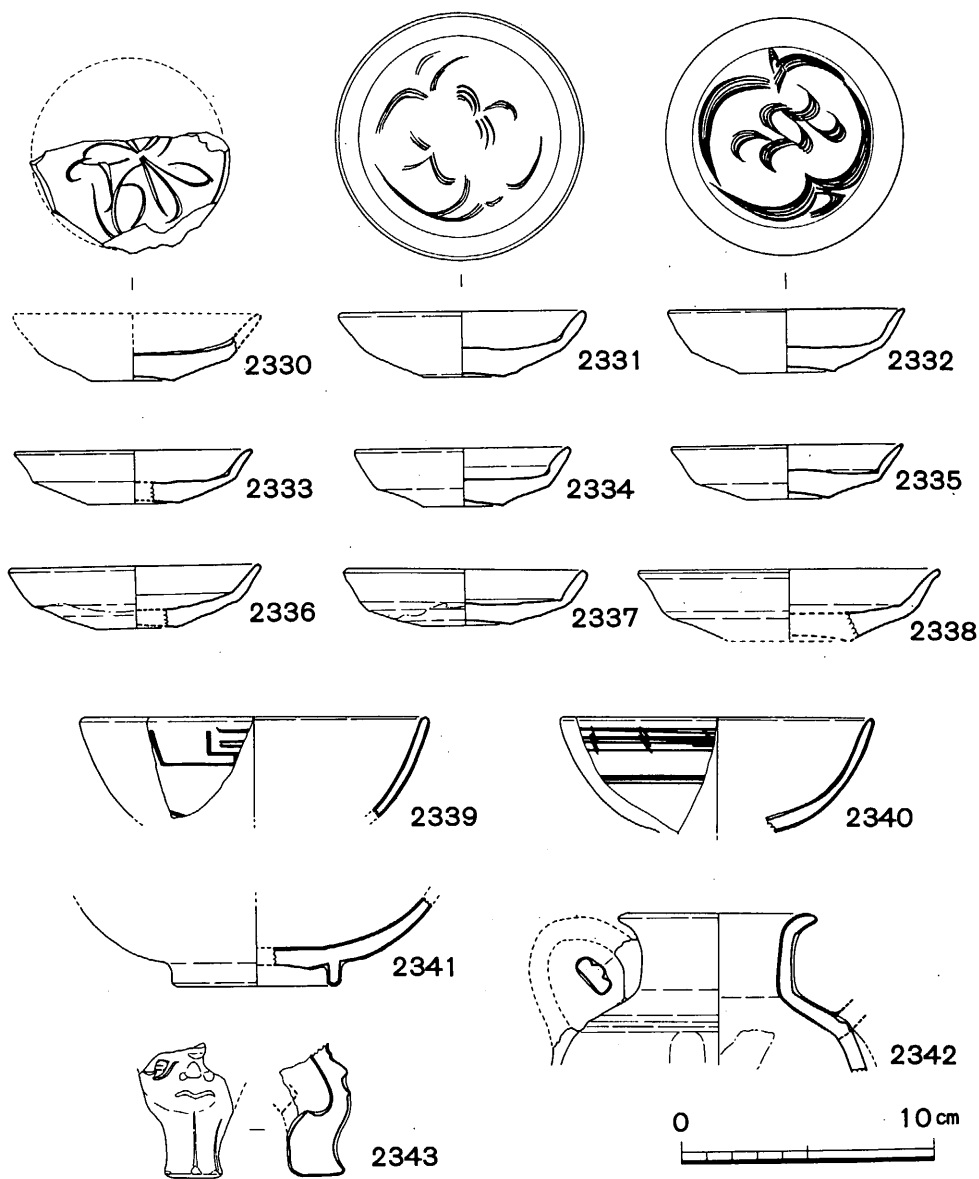
そのほかこの7類に類似するものとしては以下のものがある。**2324**は口縁が内弯し、体部外面に蓮弁が削り出されている。胎土は明灰色で釉は緑灰色を呈し、貫入がみられる。5層出土。**2325**は小椀で底部はくぼむ程度で、高台にはなっていない。床付部には焼成台のあとがついている。胎土は灰白色で、釉は緑色で内底部と底部付近に厚くたまわっていて、貫入がみられる。出土層位不明。**2326**も小椀で、胎土は灰白色で、釉は明青色である。小さな高台がつくものと考えられる。5層出土。**2328**は外面にヘラで蓮弁を描き、その中に櫛歯による条線が入れている。内面はヘラと櫛歯による文様が描かれている。胎土は明灰色で釉は灰オリーブ色である。3層出土。

2328と関連のあるもので2次調査区以外から出土したものを2点紹介したい。**2327**も小椀で内面にヘラと櫛歯による文様が描かれている。高台内に焼成台の跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。1次(6AYECK区)の4層出土。**2329**は内面と見込みに細かな櫛歯文とヘラによる沈線とで文様が描かれたもので、高台内に焼成台の跡が残っている。胎土は淡灰色で、釉は褐黄灰色で気泡と貫入が認められる。6次(6AYEBM区)の3層出土。

なお7類に伴う小皿としては、次のようなものが考えられる(84図)。

d (2330) やや厚手の底部から、口縁がやや開きながらまっすぐのび、底面はややあげ底で、焼成前に釉をかきとっている。見込みにヘラによる花文があり、Bと同じである。**2330**は明灰色で、釉は薄緑色を呈し、貫入がみられる。出土層位不明。

e (2331・2332) 器形などは前者とほぼ同じであるが、見込みに櫛歯による曲線文が描かれている。**2331**は胎土は灰白色で褐灰色の釉がかけられ、貫入がみられる。底面はていねいに釉をかきとっている。5層出土。**2332**は底面の一部にも薄く釉がかけられ、焼成台が付着している。胎土は淡灰色で、釉はオリーブ灰色である。5層出土。

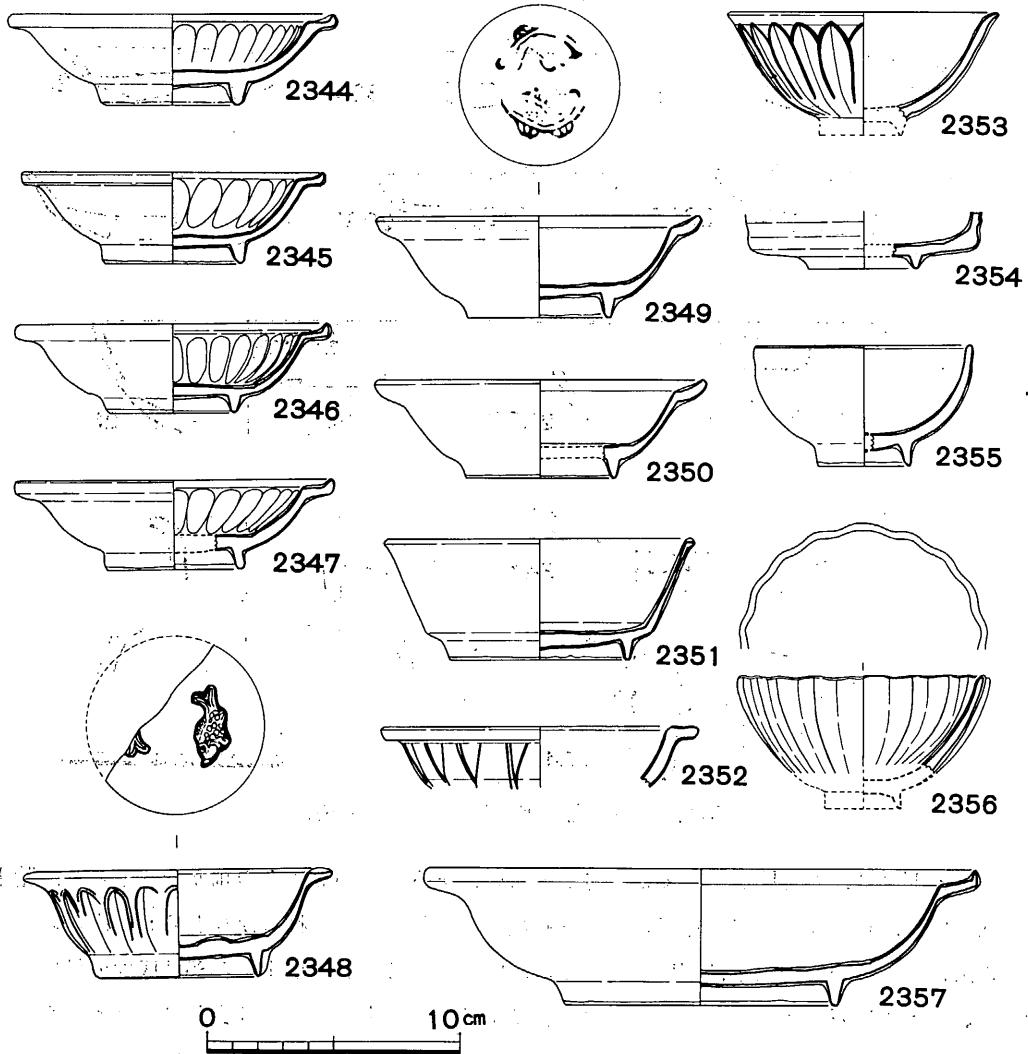


84図 磁器実測図 9 (青磁)

次に器形は **d**, **e** と同じであるが、無文のものがある。**2333**は底面の釉がかきとられ、胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色である。5層出土。**2334**は底面の釉はかきとられ、円形の焼成台の跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。5層出土。**2335**は底面の釉はかきとられ、胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色である。5層出土。**2336**は底部に釉はかけられていない。胎土は灰白色で、釉は明青灰色を呈している。あるいは白磁の類にはいるかもしれない

い。3層出土。2337も底部に釉はかからず、胎土は灰黄色で、釉は緑味灰白色を呈し、貫入がみられる。3層出土。2338は胎土・釉とも灰白色で、焼成はあまり良くない。白磁の類に入るものかもしれない。出土層位不明。

このほかいまままで報告しなかったものに次のようなものがある。2239は器形は丸味を帯び、胎土は灰白色で、釉は緑色である。S D 202 溝出土。あるいは混入かもしれない。2340も同様な器形で、胎土は灰白色で釉は薄緑色である。S K 233 土坑出土。2341は見込みにへらによる文様が描かれ、明緑色の釉が高台にまでかかり、高台内の釉がかきとられている。胎土は明灰色である。5層出土。これら2339~2341はやや時代の新しい青磁と思われる。2242は水差で、把手と注口部が欠損している。肩部に2本の沈線があり、その下には縦の大きなくぼみながら

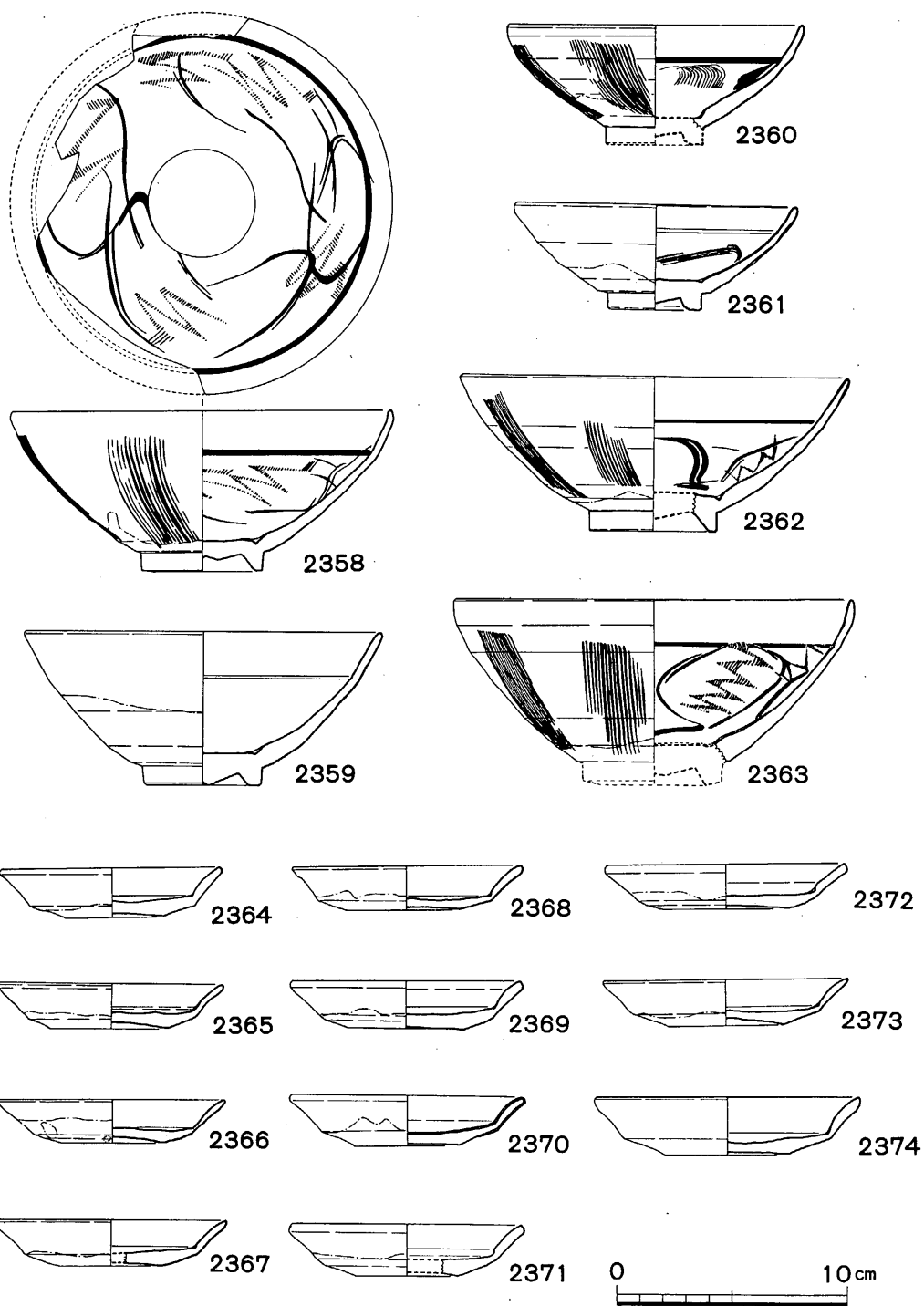


85図 磁器実測図 10 (8類)

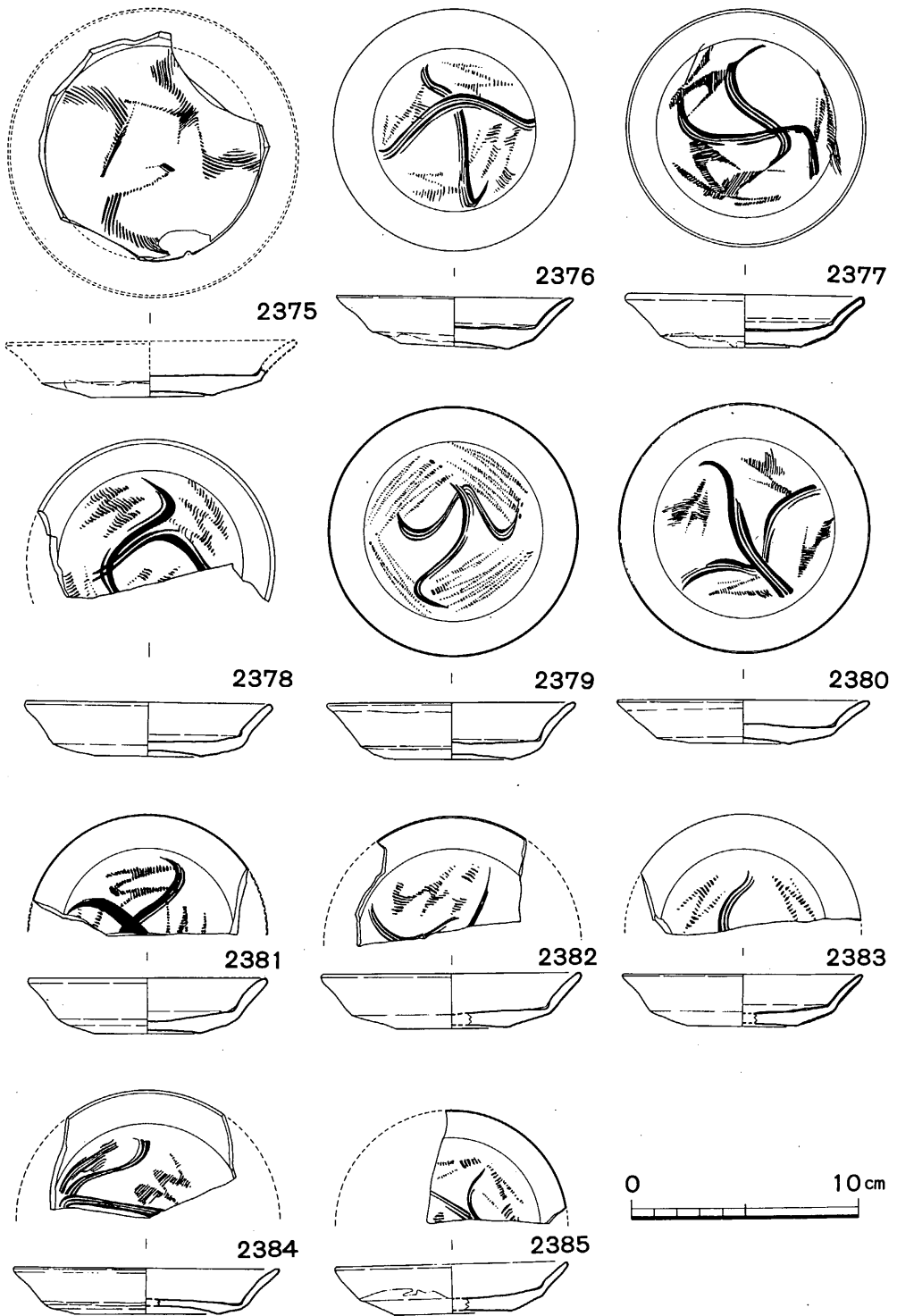
んでいる。胎土は灰味白色で、緑色の釉が厚くかかっている。出土層位不明。2343は獣脚の一部で、顔面が型に入れてつくられている。内部は空洞で、内側に穴があいていて、釉がかかっている。胎土は灰白色で、暗緑色の釉が厚くかかっている。出土層位不明。

**8類** (85図2344~2357) 全体に厚く釉がかかり、高台は薄く、床付部は釉がかきとられているためやや尖り、褐色を呈している。2344は胎土が灰白色で、釉は緑灰色である。出土層位不明。2345の胎土は灰白色で、釉は緑灰色である。5層出土。2346の胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。5層出土。2347は焼成が悪く、胎土は明灰色で、釉は緑味灰色で不透明である。5層出土。2348は見込みに双葉文が貼付けられたもので、外面に蓮弁がつくられている。胎土は灰白色で、緑色の釉が高台部に厚くたまっている。5層出土。2349は見込みに印文をもつもので、胎土は白灰色を呈し、釉は明緑灰色を呈している。4層出土。2350の胎土は灰味白色で、釉は緑色で気泡を多く含む。L35区石組付近出土。2351の体部は直線的で、口唇部に溝がつけられ釉がたまっている。胎土は灰白色で、釉は青味緑色で、貫入がみられる。出土層位不明。2352は外面に沈線で蓮弁状の文様をつけたもので、胎土は白灰色を、釉は明緑灰色を呈している。3層出土。2353は鍋蓮弁をもつ小椀で、蓮弁の周辺は沈線状になっている。胎土は灰白色で、明緑灰色の釉が厚くかかっている。3層出土。2354は器形がやや特異である。胎土は淡灰色で釉は薄緑色である。3層出土。2355は口唇部の釉もかきとられているもので、器形は丸味もち、無文である。胎土は淡黄色で、釉は黄灰色である。5層出土。2356の胎土は灰白色で、釉は青緑色である。5層出土。2357は大形のもので、胎土は灰味白色を、釉は暗黄味緑色を呈し、貫入がみられる。5層出土。

**9類** (86~88図2358~2387) いわゆる珠光青磁とよばれるもので、中国の同安窯の系統のものと考えられる。ここでは椀と皿と高台付皿が出土している。2358は外面5箇所にも櫛歯による条線が描かれ、内面には口縁内側に沈線がめぐり、その下に沈線と櫛歯による文様が描かれている。胎土は淡灰色で、黄灰色の釉が底部を除いてかけられている。3層出土。2359は口縁内側の沈線のみで、内外面無文である。底部に釉はない。胎土は明灰色で、釉は灰黄色である。5層出土。2360は小形の椀で、外面に櫛歯による条線がつけられ、内面沈線下にも櫛歯による文様がつけられている。胎土は灰白色を、釉はオリーブ灰色を呈している。3層出土。2361も小形の椀で、外面は無文で内面沈線下に山形の櫛歯文が3箇所に描かれている。底面に釉はない。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色を呈し、貫入がみられる。3層出土。2362の胎土は灰色ないし灰白色で、釉はオリーブ灰色を呈す。3層出土。2363の胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色を呈している。5層出土。2364~2371は無文の小皿で、釉が底部にかからないもの(2364~2373)と底面の釉をかきとったもの(2374)とがある。2364の胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色である。出土層位不明。2365は完形品で胎土は灰色で、釉は灰緑色である。4層出土。2366の胎土は灰白色で、釉は緑味灰白色を呈している。5層出土。2367の胎土は灰黒色を、釉は淡緑灰



86図 磁器実測図 11 (9類の1)



87図 磁器実測図 12 (9類の2)

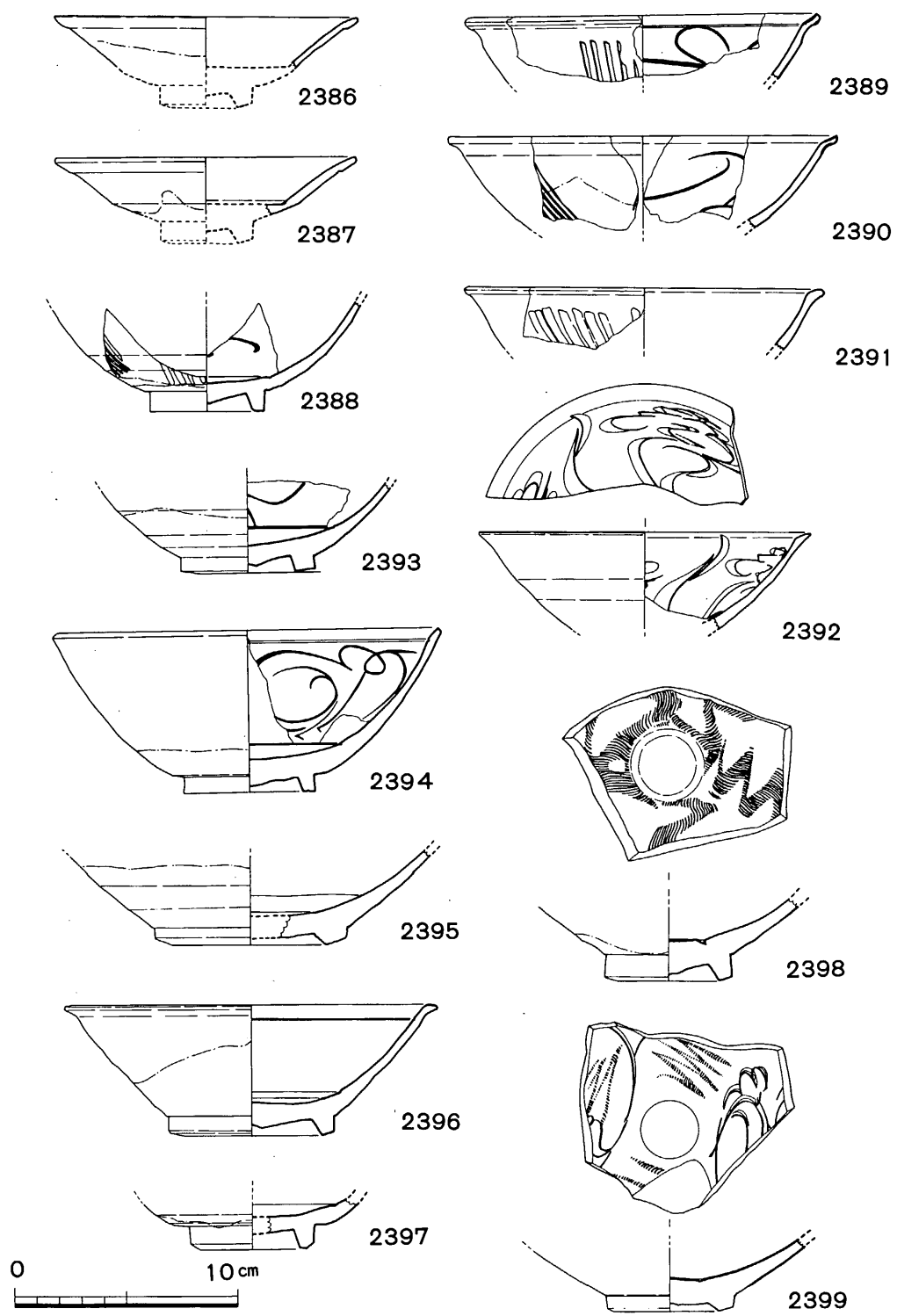


色を呈す。5層出土。**2368**の胎土は灰黒色、釉は緑灰色である。5層出土。**2369**は焼成が悪く、胎土は淡黄色で、釉は浅黄色である。3層出土。**2370**は完形品で胎土は黄灰色で、釉は透明に近い淡黄緑灰色で、貫入がみられる。3層出土。**2371**の胎土は灰白色を、釉は明緑灰色を呈す。S K 238 土坑出土。**2372**の胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色である。4層出土。**2373**の胎土は灰色で、釉は淡緑灰色で貫入がみられる。5層出土。**2374**の底面は釉をかきとられていて、胎土は黄白色で、釉は緑灰色を呈し貫入がみられる。5層出土。2375～2385は見込みにヘラや櫛歯による文様が描かれたもので、底部に釉のかからないものと、底面の釉がかきとられたものがある。**2375**はやや大形のもので、見込みに櫛歯文だけがあり、底部に釉はない。胎土は灰白色で、釉は青緑色である。S K 220 土坑出土。**2376**の胎土は灰色で、釉は明緑色である。底部に施釉はない。5層出土。**2377**は完形品で胎土は灰色で、釉は灰緑色である。底部に施釉はない。出土層位不明。**2378**の胎土は明灰色で、釉は緑灰色を呈し、底面の釉はかきとられている。5層出土。**2379**は細かな櫛目文がつけられたもので、底面の釉はかきとられている。胎土は灰白色で、釉は淡緑色である。5層出土。**2380**の胎土は灰白色、釉は淡緑灰色で、底面の釉はかきとられている。5層出土。**2381**の胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色で、底面の釉はかきとられている。3層出土。**2382**の胎土は明灰色で、釉は淡緑色である。底面の釉はかきとられている。5層出土。**2383**の胎土は灰色、釉は灰黄色で、底面の釉はかきとられている。5層出土。**2384**の胎土は灰色で、釉は淡緑色である。底面の釉はかきとられている。5層出土。**2385**の胎土は灰白色で、釉は淡緑色を呈し、底部に釉はかかっていない。5層出土。

今回初めて出土した9類にはいる高台付皿とでもよぶべきものがある(2386・2387)。小皿にくらべ体部が長く、径は約13.7cmである。見込みに小皿と同様な櫛歯とヘラによる文様が描かれている。釉は体部下半にはかけられていない。山口県下関市秋根遺跡出土例では、高台が付いている。**2386**の胎土は明灰色で、釉は緑味灰色である。5層出土。**2387**は見込みに櫛歯文の一部がみられ、胎土は明灰色で、釉は黄味灰色を呈し、貫入がある。5層出土。

**2388**は9類の椀形の中に入れてもよいかもしれないが、外面の櫛歯はかなり太い。内面にもヘラによる文様が描かれる。見込み部の径は5.7cmである。胎土は体部では灰白色、底部では黄白色である。釉は淡灰色を呈す。S D 202 溝出土。2389～2391は外面に櫛歯による太い条線がつくもので、2389・2390は口縁端が開きながらやや内弯気味になり、内面にヘラによる文様が描かれ、胎土に白い粒子を含む。**2389**の胎土は灰白色で、釉は淡緑灰色である。5層出土。**2390**の胎土は灰色で、釉は淡緑灰色である。5層出土。**2391**は口縁がやや外反するもので、胎土は明灰色で、釉は緑灰色である。5層出土。**2392**は同様な口縁をもつもので、外面に櫛歯による条線はなく、内面にヘラ描き文様がある。胎土は明灰色で、釉は緑味灰色である。3層出土。

2393・2394は新しい形式の青磁で、器形は7類にやや類似しているが、高台内は平坦でなく、



88图 磁器实测图 13

やや尖っている。釉は底部にはかからず、内面は口縁内側と見込みに沈線がめぐり、その間にヘラ描き文様がある。2393は細く深めの沈線で文様が描かれ、胎土は明灰色で、釉はオリーブ色である。3層出土。2394は焼成が悪く、胎土は黄白色で、釉は淡灰黄色で細かな貫入がみられる。5層およびSK212 土坑出土。

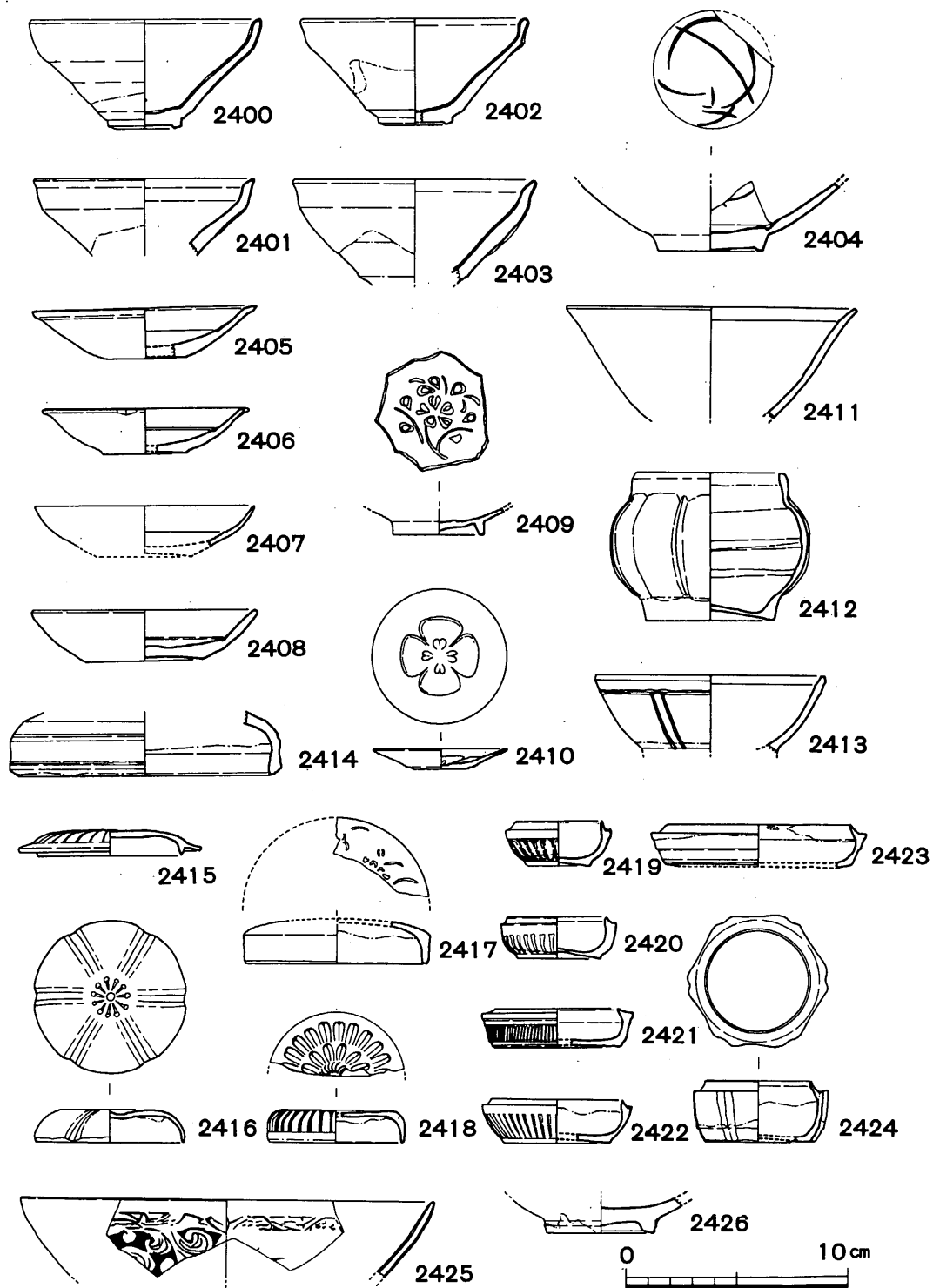
2395・2396は見込みに環状の釉かきとり部分があるもので、あるいは白磁の類のものかもしれない。2395はやや大形の底部で高台は低い。胎土は明灰色で、釉は灰色である。釉をかきとった部分は赤褐色である。5層出土。2396は口縁が外に張り出し、口唇部は平坦で、口縁内側に沈線がめぐらされている。外面では釉は上半にしかかけられていない。高台径は7.5cmでやや大きい。胎土は明灰色で、釉は透明に近い灰白色で、貫入がみられる。5層出土。

2397は特異な底部で、底部に釉はかけられていなく、見込みに沈線がめぐり、その中に櫛歯による曲線文が描かれている。胎土は灰白色で釉は黄味灰色である。3層出土。

2398・2399は見込みの部分が小さく、釉は底部にかからず、内面にヘラによる細かい沈線文や櫛歯文が描かれている。これらは白磁あるいは青白磁に含まれる可能性もある。2398は見込みの径3.3cmで、胎土は灰白色を、釉は透明に近い薄灰緑色を呈している。5層出土。2399は高台が低く、胎土は灰白色で、釉は緑白色を呈している。出土層位不明。

**10類** (89図2400～2403) いわゆる天目といわれるもので、底部を除いて釉が厚くかけられている。2400の胎土は上半は暗灰色で、下半は灰褐色で粒子は荒い。釉は紫味暗灰褐色で光沢はない。3層出土。2401の胎土は灰色で、釉は黒褐色で口唇部は褐色である。5層出土。2402の胎土は黒灰色であるが、釉のかからない部分の表面は灰黄色を呈している。釉は暗褐色の下釉の上に黒色の釉をかけているが、口唇部は明褐色である。5層出土。2403の焼成は悪く胎土は暗赤色で、釉は明灰褐色である。SK240 土坑出土。

**11類** (89図2404～2424) 青白磁といわれるもので、小皿や合子など小形のものが多い。2404は椀で内面と見込みに沈線文様が描かれている。底面は釉をかきとって小さな高台をつくっている。胎土は白色で、釉は透明に近い薄緑色である。5層出土。2405は小皿で2406と似ているため、あるいは輪花になるのかもしれない。口縁はやや外へ張り出し、見込みに小さな段がつき、底部は釉がかきとられている。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色である。4層出土。2406は器形は前者とほぼ同じで、輪花になっているがその数は不明である。胎土は白色で、釉は青白色であり貫入がみられる。釉をかきとられた底面には焼成台の跡が残っている。5層出土。2407は薄手の小皿で、口縁が尖り、見込みに段がある。胎土は白色で、釉は透明に近い青白色である。5層出土。2408は完形品で、あるいは白磁に入れるべきかもしれないが、釉は緑白色で、青白磁としてもさしつかえないであろう。胎土は白色で、底面は釉がかきとられ、径4.1cmの焼成台跡が残っている。4層上面出土。2409は底部で見込みに花の浮文が押されている。胎土は白色で、釉は薄青色で、底部全体にかけられているため、そのかわり口唇の釉はかきとられてい



89圖 磁器実測図 14 (10類~12類)

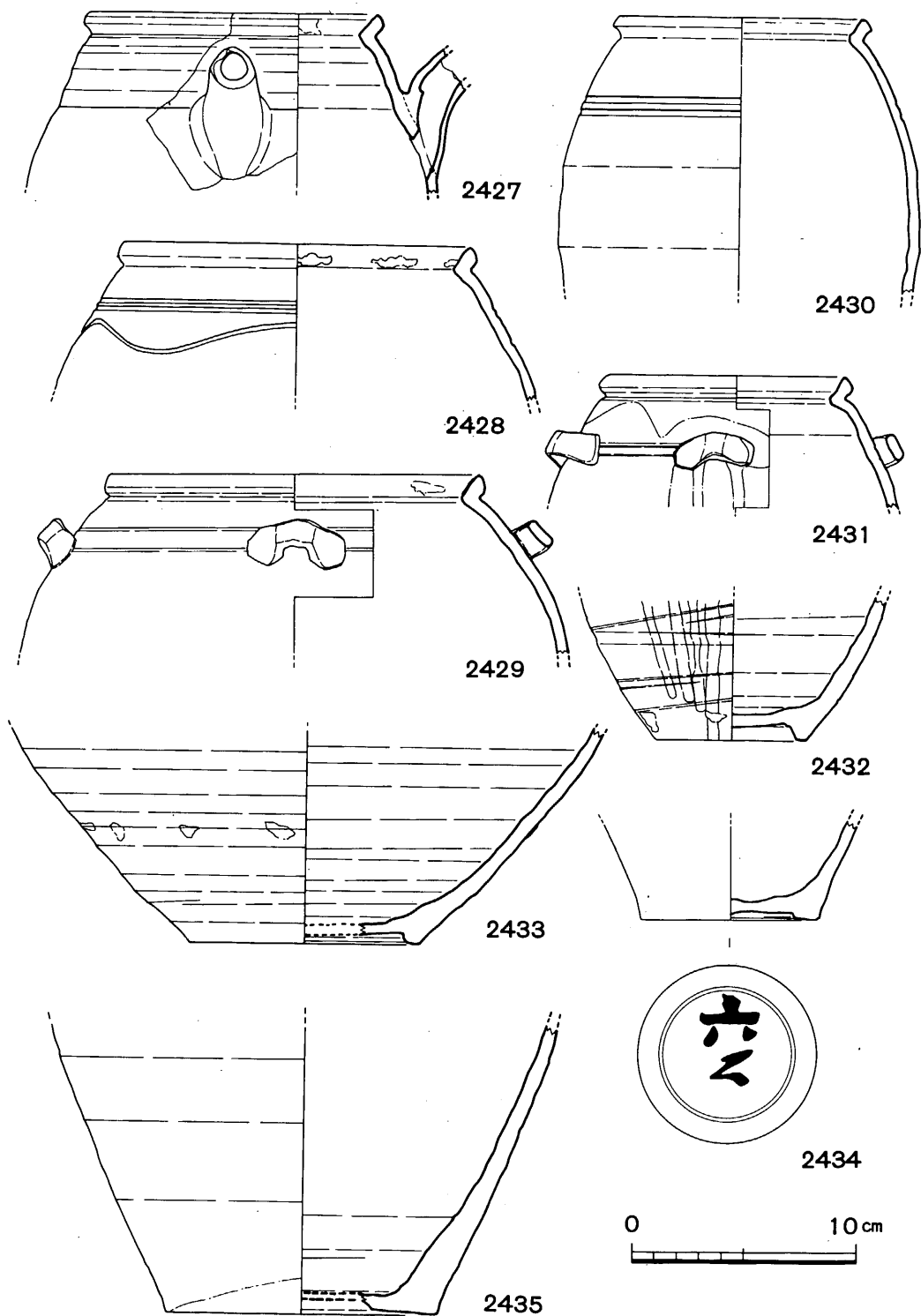
るものと思われる。S D 202 溝出土。**2410**は小さな皿で、内面型押しで四弁花をくぼませ、花心を浮き出させている。底面は釉がかきとられている。胎土は灰白色で、釉は緑味灰白色である。出土層位不明。**2411**は薄手の無文の椀で、型押しでつくられ、口唇部は釉をかきとっている。胎土は白色で、釉は青味灰白色である。5層出土。**2414**は型押しでつくられた小壺で、内面に継ぎあとがみられ、本来は蓋がつくものと考えられる。口唇部の釉はかきとられ、底部にも釉はかけられていない。胎土は白色で、釉は薄青色である。4層出土。**2413**は型押しでつくられた小椀で、外面に隆線が浮き出ている。口唇部の釉はかきとられ、胎土は白灰色で、釉は青味灰白色である。3層出土。**2414**はやや大きな蓋で、口唇部および口縁内面には釉はない。胎土は白灰色で、釉は青白色である。4層出土。**2415**は型押しでつくられた小壺の蓋で、外面中央に低いボタン状のものがはりつけられ、それから凹線が放射状にのびて、花文を形づくっている。胎土は白色で、釉は灰白色を呈し、白磁に近い。5層出土。**2416**は型押しでつくられた合子の蓋で、花卉が丸味をもってふくらみ、中央部はややくぼんで、花心が浮き出ている。口唇部の釉はかきとられて、胎土は白色で、釉は明緑灰色である。5層出土。**2417**は型押しでつくられ、外面に花の浮文がつけられた蓋で、口唇部の釉はかきとられ、内面は天井部のみ施釉されている。胎土は白色で、釉は青白色である。5層出土。**2418**は型押しによりつくられた合子の蓋で、口唇部の釉はかきとられ、内面は天井部のみ施釉されている。胎土は白色で、釉は淡緑灰色である。5層出土。2419～2424は型押しでつくられた合子の身で、蓋受部および底部に釉はない。**2419**は完形品で、胎土は灰白色を、釉は薄緑色を呈している。5層出土。**2420**の施釉なしの底部は褐色で、胎土は灰白色を、釉は明緑灰色を呈している。3層出土。**2421**の胎土は黄味白色で、釉は透明に近い黄灰色である。S X 201 窯出土。**2422**の胎土は白色で、釉は透明に近い淡青灰色である。S D 202 溝かぶり土出土。**2423**の胎土は灰白色で、釉は青白色である。5層出土。**2424**は体部に6面をもつもので、胎土は灰白色で、釉は明青白色である。5層出土。

**12類** (89図2425・2426) 高麗青磁といわれるもので、**2425**は内外面に白土の象眼が施されている(図の黒い部分)。ほかに沈線状に文様を彫った部分もある。胎土は灰色で、釉は灰味緑色である。S K 222 土壇出土。**2426**は内面に白土の象眼らしきものがあり、底部には釉はかけられていなく、赤褐色を呈している。胎土は褐色で、釉は不透明な明灰緑色で貫入がみられる。高台床付部に目跡が残っている。5層出土。

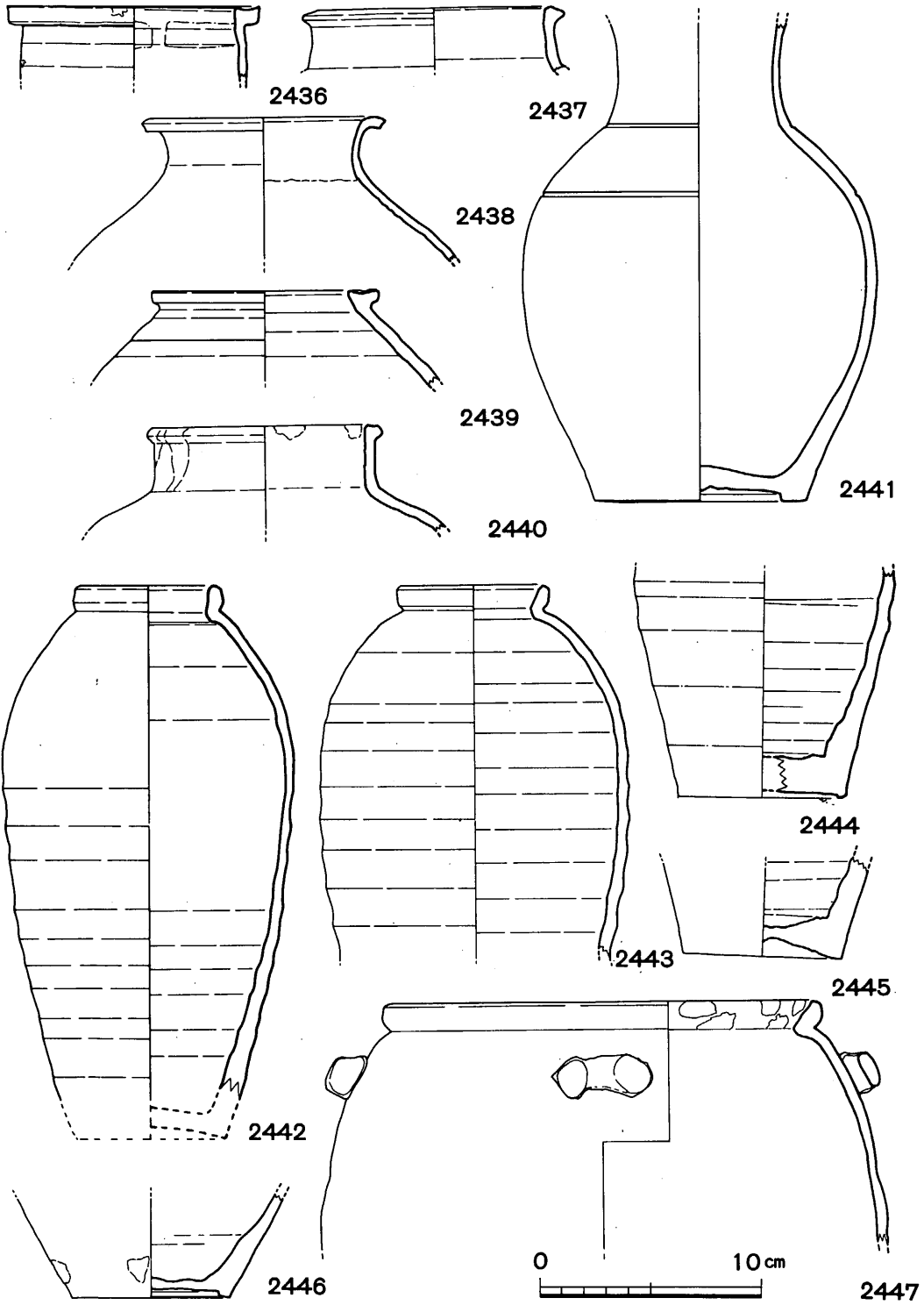
## 6. 雑 器 (90～96図)

第2次調査区からも多くの大陸製陶器類が出土している。なお分類は従来通りであるが、4類は11類に含めた。

**1類** (90図2427～2435) 短い口縁がやや開き肩部に沈線文をもつものが多く、4箇所には耳がつ



90圖 雜器 実測 図 1



91图 雜器実測图 2

けられた四耳壺となるものもある。**2427**は注口部のみで、他の部分は不明である。口縁内側に目跡が残り、胎土は灰橙色で、釉は褐色であるが、風化して黄白色を呈している。P39区柱穴内出土。**2428**は肩部の2本沈線の下に波状沈線が描かれたもので、4耳があるかどうかは不明である。胎土は明灰色で、釉は緑灰色である。S K 233 土壇出土。**2429**は耳が付いているため、四耳壺になるものと思われる。口縁内側に重ね土の目跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は緑灰色で**2428**に非常に似ていて同一個体かもしれない。S K 233 土壇上面出土。**2430**はあるいは4耳がつくかもしれないが、胎土は外面近くは灰色で、内面に近い方は明褐色である。釉は風化して灰白色を呈している。S X 201 窯出土。**2431・2432**は焼成が悪く胎土は灰味橙色で、釉は風化して灰白色を呈し、その上に黒褐色の釉を流している。2431と2432はあるいは同一個体かとも思える。2431は出土層位不明。2432はS X 202 窯埋土中出土。**2433**は底部で、底部近くに目跡が残っている。胎土は明灰橙色で、釉は緑味灰橙色で、全面にかけられている。3層出土。**2434**や**2435**のように幅広い高台をもつものも、釉や焼成が似ているので、1類に含めた。2434は底面に釉はなく、高台内に「六二」の墨書がある。胎土は灰色で、釉は緑灰色ないしオリブ灰色である。出土層位不明。2435は大きな底部で、胎土は明灰色で、底部は釉がなく、明橙色を呈している。釉は緑灰色で、内面にもかけられている。3層出土。

このほか胎土や釉が1類に似たもの(91図2436~2441)がある。**2436**は口縁が横に厚く張り出し、その上部はくぼみ、釉はかかっていなく、目跡が残っている。胎土は明灰色で、釉は灰緑色である。5層出土。**2437**は口縁がやや横に張り出すもので、胎土は橙色で、釉は風化して黄白色である。出土層位不明。**2438**は全体に薄手で、口縁は横に開き、胴部が大きく膨らむ壺形のもので、胎土は灰色で釉は暗オリブ色であるが、風化が進んでいる。5層出土。**2439**は2436と似て口縁上端がややくぼみ、目跡が残っている。胎土は桃味明灰色で、釉は暗オリブ色である。4層出土。**2440**は口縁が外側に肥厚し口縁上端がややくぼみ、目あとが残っている。頸部は直立し、胴部は張っている。胎土は灰褐色で、釉は褐灰色を呈するが、その上に黒褐色の釉を部分的に流している。あるいは2類に入れるべきかもしれない。5層出土。**2441**は頸部が長く、肩部に沈線がいれられている。底部は幅広い高台をもち、釉はかけられていない。注口をもつ水差と思われる。胎土は灰色で、釉は明灰緑色である。5層出土。

**3類**(91図2442~2447)短い口縁をもち、黒褐色を呈するもので、光沢はあまりない。**2442**は黒灰色ないし黒褐色を呈し、器面は黒褐色である。5層出土。**2443**は胎土は褐味灰色で、化粧土が内外面にかかり、暗灰色を呈している。S K 238 土壇出土。**2444**の胎土は灰色で、器面は暗灰褐色ないし暗灰色である。S K 238 土壇出土。**2445**は床付部に大きな目跡が残り、胎土は灰紫色で、器面は黒褐色である。3層出土。**2446**は小さな高台をもつもので、底部近くに目跡が残っている。胎土は暗褐色で、器面は黒褐色である。5層出土。**2447**はやや大形の四耳壺で、口縁内側に目跡が残っている。胎土は外面近くは灰色を、内面近くは暗褐色を呈し、外面は暗



褐色である。5層出土。

**6類** (92図2448・94図2451) 薄手で、暗青灰色を呈し、器面にタタキ目と、縞文様状のロクロ整形痕が残っている。**2448**は大形の壺で、底部が大きく、口縁はいわゆる二重口縁状になるものと思われる。胎土は灰褐色で、器面は灰黒色である。出土層位不明。**2451**の胎土は灰色で、器面は暗灰色である。5層出土。

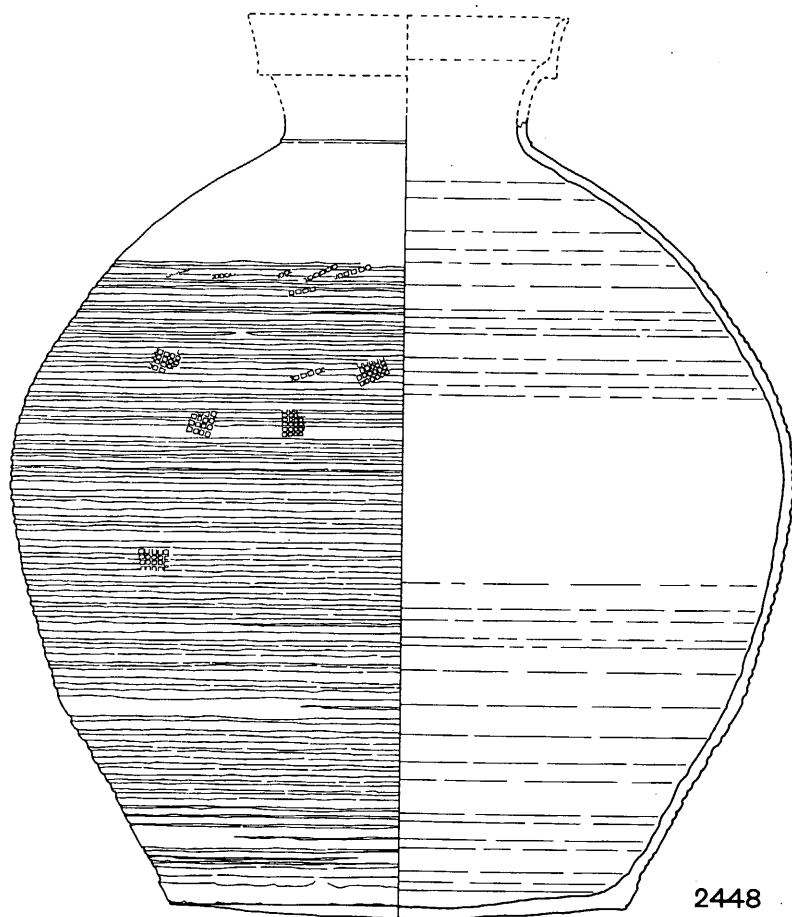
**7類** (93図2449～2450) 口縁が外に張り出し、底部が大きい鉢形のもので、内面に釉がかけられてあり、内面や見込みに褐色の釉で文様が描かれたものも多い。**2449**はほぼ完形に近く、短い口縁内外面には釉はかからず、外面上半と内面に緑灰色ないし灰黄色の釉がかけられ、口縁内側と胴下部に目跡が残っている。見込みには褐色の釉で文様が描かれている。胎土は灰色で粒子が荒く、外面の釉のかからない部分は赤褐色ないし褐灰色を呈している。4層出土。**2450**もほぼ2449と同じであるが、見込みのほか体部内面にも文様が描かれている。口縁上部に目跡が残り、釉は灰緑色で、胎土は灰色で粒子が荒く、外面の釉のない部分は灰褐色ないし灰色を呈している。3層出土。

**8類** (94図2452・2453) 口縁内側を厚くして沈線を入れたもので、厚手の鉢である。**2452**の胎土には白砂が多く含まれ、内面はアバタ状のくぼみが多くみられる。器面は明紫灰色を呈し、焼成は非常に良い。5層出土。**2453**は器形は前者に似るが、胎土は橙色で、細砂を少量含む程度で、器面に黒褐色の化粧土状のものがかけられている。焼成は良くない。5層出土。

**9類** (95図2456) 摺鉢で、内面に細かな櫛目がつけられている。口縁は非常に厚くつくられ、焼成は良く胎土は赤褐色で、砂粒を含み、外面は黒褐色ないし紫褐色を呈し、内面は赤褐色である。5層出土。

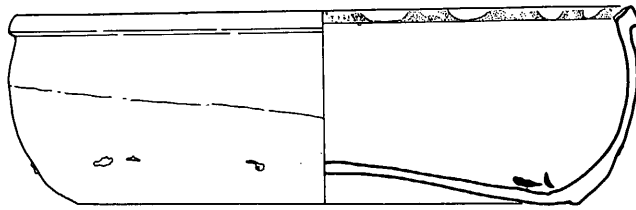
**10類** (94図2454・2455) 厚手の土器で、暗緑灰色ないし風化して明灰色の釉がかけられている。器形は大きな甕形のものが多く内面に叩き目が残るものもある。**2454**は従来8類に入れていたが、釉がかけられていることや胎土・焼成などから10類に入れるのが妥当であろう。口縁上部および外面上半に釉がかけられ、風化して明緑灰色を呈している。内面には釉はなく黒褐色で胎土は明褐色で砂粒を含んでいる。5層出土。**2455**は甕で内面に叩き目が残っている。内外面に暗灰緑色の釉がかけられ、胎土は紫灰色で砂粒を含んでいる。5層出土。

**11類** (95図2457～2464) いわゆる褐釉の陶器で、器種は多い。**2457**は灯台と思われ、上端と脚部を欠く。胎土は赤褐色で、釉は褐色を呈するが、濃淡がある。SK232 土壇出土。**2458**は水差で、注口部と把手と底部を欠損している。口縁の断面は三角形で、頸部と胴部との境に耳がついている。胎土は上半は褐味黒色で、下半の厚い部分は暗褐色で、底部を除いて暗褐色の釉がかけられている。5層出土。**2459**は底部で、胎土は暗灰褐色を、釉は暗褐色を呈し、底部には釉はなく、底面の周辺に5～6箇所の目跡が残っている。5層出土。**2460**の口縁は折り曲げてつくられ、胎土は灰褐色で、釉は暗褐色である。5層出土。**2461**は鉢形で、口縁上端に釉は

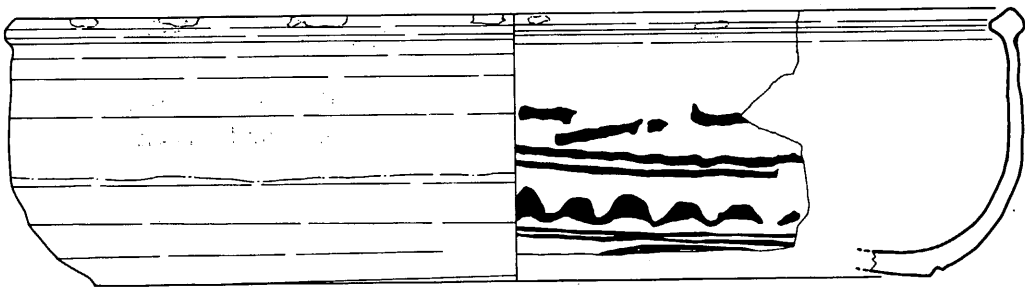


0 10 cm

92図 雑器実測図3(6類)



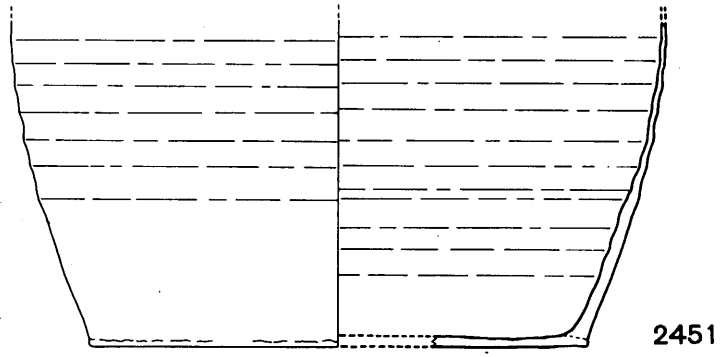
2449



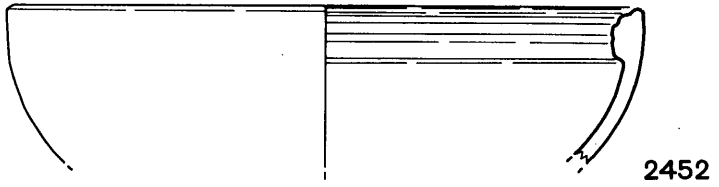
2450



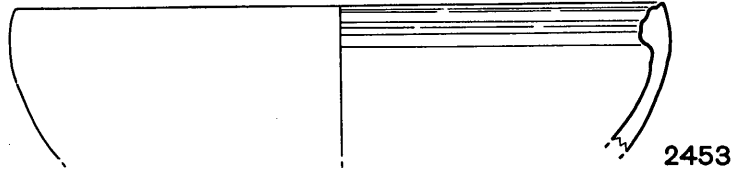
93図 雑器実測図 4 (7類)



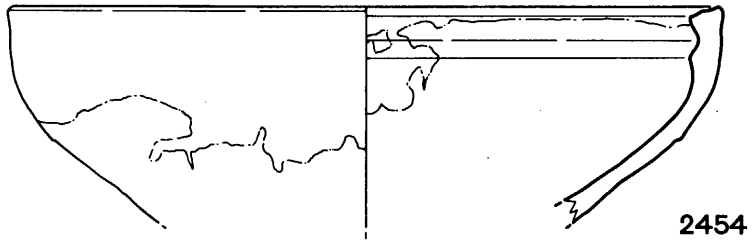
2451



2452



2453

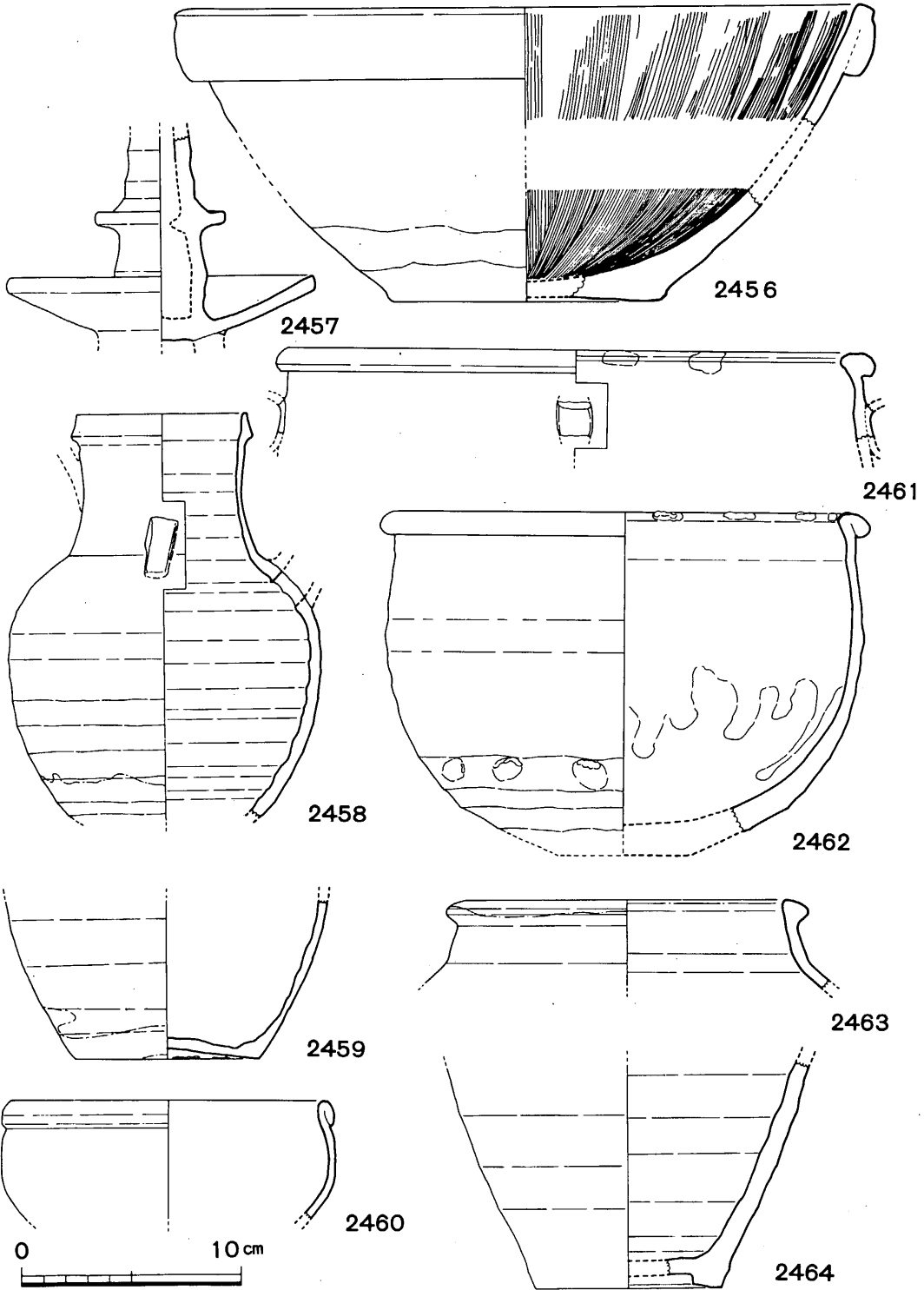


2454



2455

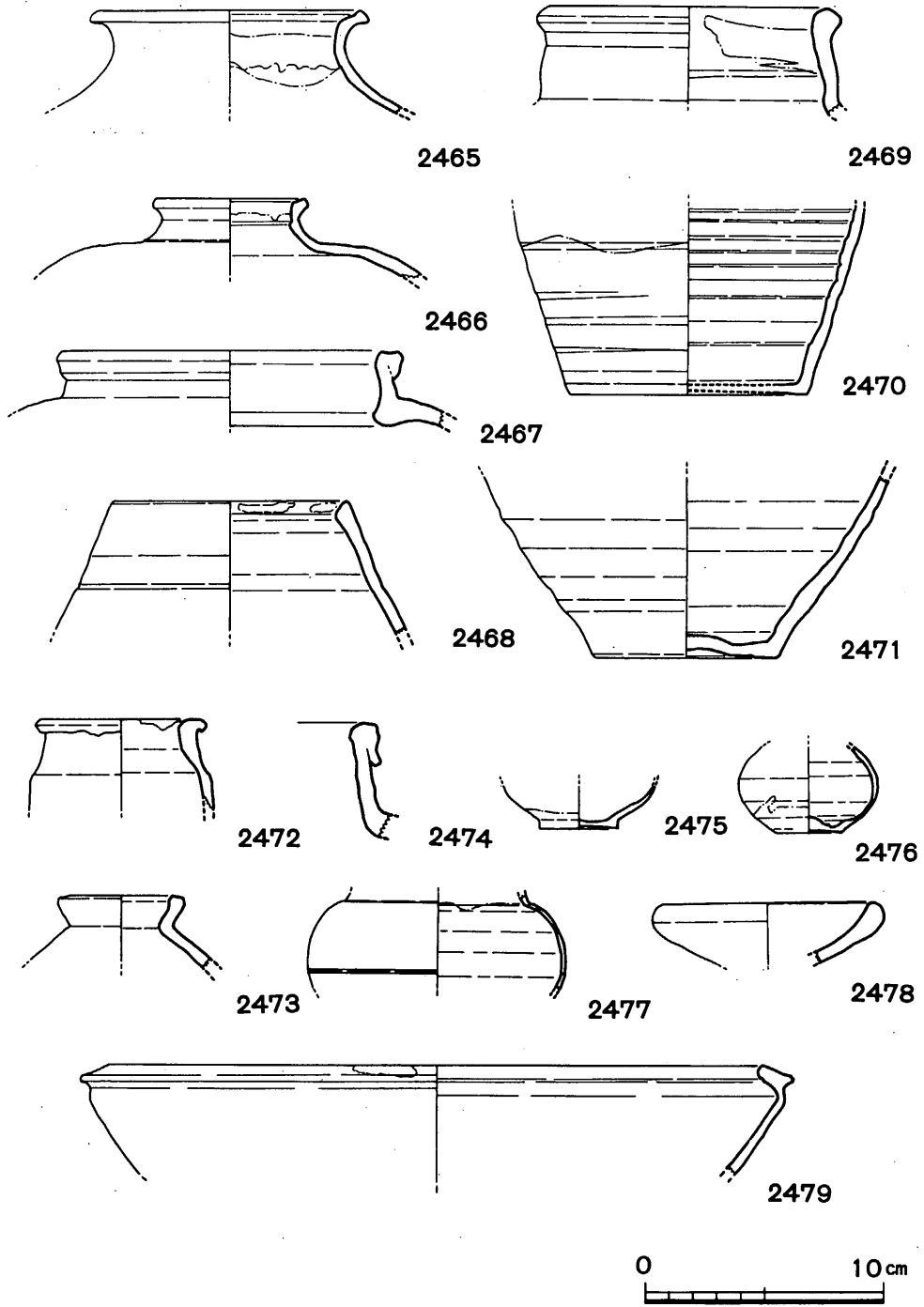
94図 雑器実測図 5



95図 雑器実測図 6

なく、口縁内側に目跡が残り、口縁下に耳の跡が残っている。胎土は暗赤褐色で、釉は暗褐色である。S E 216 井戸出土。**2462**は口縁と胴下部に目跡が残り、内面にも全面に釉がかけられ、釉の流れがみられる。胎土は灰赤色ないし紫灰色で、釉は暗褐色である。S K 233 土坑出土。**2463**は口縁上端に釉はなく、胎土は赤褐色で、釉は暗褐色である。3層出土。**2464**は外面の釉は風化して黄白色になり、底面および内面にもうすく釉がかけられている。胎土は暗赤褐色である。あるいは11類のものではないかもしれない。S E 210 井戸出土。

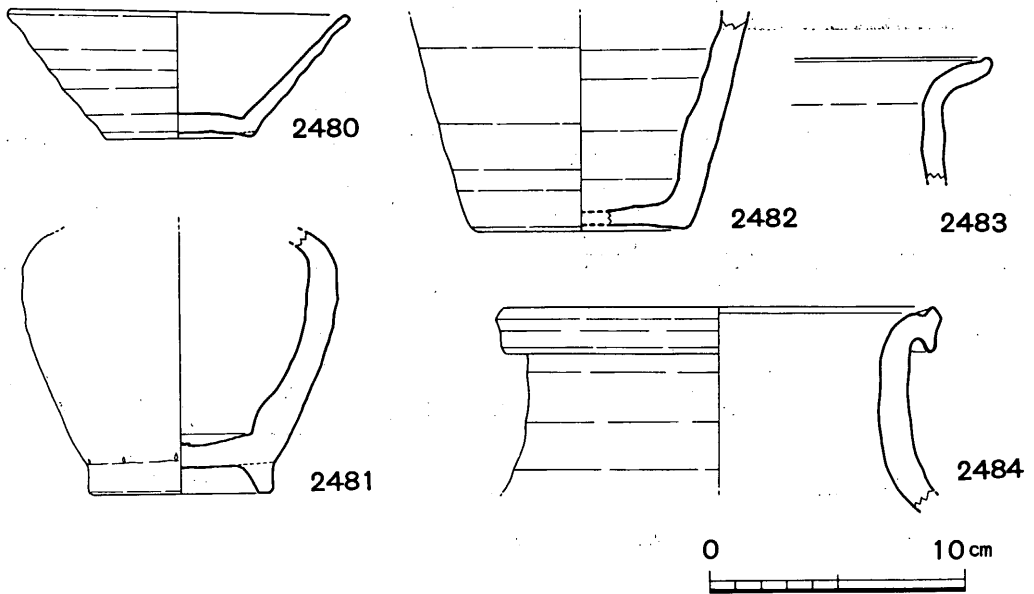
その他のもの(96図)として、**2465**は暗緑色の釉が薄くかけられたもので、胎土は明灰色である。輪積みの手法でつくられ、胴部の内面に叩目のある底部の大きな薄手の陶器の口縁かもしれない。4層出土。**2466**の釉は黒褐色であるが、風化して灰黄色を呈している。胎土は灰紫色で白い砂粒を多く含む。5層上部出土。**2467**は外面に薄く釉がみられるが、風化して灰黄色を呈している。胎土は橙白色で、内面は灰橙色を呈している。出土層位不明。**2468**の器面は黒褐色で、光沢はない。胎土は灰白色で、口縁内側に目跡が残る。3層出土。**2469**は7類に似て胎土は灰白色で粒子が荒く、外面に灰緑色ないし暗オリーブ色の釉がかけられ、胴部は大きくふくらみ、肩部に縦型の耳がついている。S K 233 土坑およびS K 212 土坑出土。**2470**は胴部上半に暗褐色の釉がかけられ、釉のない部分は明褐灰色を呈し、内面は明灰色である。胎土は灰白色ないし灰黄色を呈し、粒子はやや荒い。S K 233 土坑出土。**2471**の胎土は2469に似て粒子が粗く、黄灰色を呈し、釉はなく、外面は灰橙色ないし明灰色を呈し、内面は黄灰色で、底面の様子は7類とよく類似している。3層出土。**2472**は口縁上端に目跡が残り、胎土は灰紫色で、器面に暗灰褐色の化粧土状のものが薄くかけられ、光沢はない。あるいは3類に入れるべきかもしれないが、胎土がやや赤味を帯び、少量の砂粒を含む。5層出土。**2473**は口縁上端に目跡が残り、胎土は灰白色でややまざりものが多く磁器質であり、釉は緑味灰白色である。5層出土。**2474**はやや大きな甕の口縁であり、胴部破片の出土はかなりみられるが、口縁部の破片は少ない。口縁は折り曲げられ、胎土は明灰色で、黒褐色の化粧土状のものが薄くかかり、光沢はない。5層出土。2475~2477は小壺で、胎土は精製され器壁は薄い。**2475**は底面に糸切り痕をもち、胎土は紫褐色で、暗褐色の釉が内外面にかけられているが、底部にはない。5層出土。**2476**は内面に釉はなく、胴部に沈線が入れている。胎土は黄味灰色で、釉は暗褐色である。4層出土。**2477**は底面に糸切り痕が残り、胎土は灰色で、褐色の釉が外面上半にかけられている。5層出土。**2478**は5類に入れてもよいもので、胎土は紫灰色を、器面は暗褐色を呈しているが風化して黄味暗オリーブ色を呈する釉が薄くかかっている。口縁内側と外面体部中位に重ね焼きの跡がみられる。5層出土。**2479**は第5次調査時の263 とほぼ同じで、上端に目跡が残り、胎土は明橙色、釉は明橙灰色で薄い。5層出土。



96图 雜器実測图 7

## 7. 灰釉陶器・古瀬戸・常滑陶器 (97図)

2480は底面に糸切り痕をもち、低い高台が付けられたもので、内外面とも横ナデが施されている。胎土は明灰色で、口唇部に薄く灰釉がかかっている。猿投窯系の灰釉陶器と思われる。S K 239 土塚出土。2481は小形の壺ないし瓶で、高台をつけやすくするために刻まれた放射状の線の跡であろうか、高台の継ぎめに小孔状のものがみられる。外面の釉は大部分剥げ落ちているが、底部近くに薄く残っている釉は緑灰色を呈し、内底部にも淡緑色の釉がみられる。胎土は明灰色である。古瀬戸と思われるもので、5層からの出土である。2482は瓶の底部で、外面は底面まで灰緑色の釉がかけられ、貫入がみられる。内底には同心円状のカキ目がある。胎土は灰白色で、古瀬戸と思われる。出土層位不明。2483は口縁が上にややふくらむ程度で、釉はかけられていない。胎土は灰黄色で、器面は褐色を呈している。常滑陶器と思われる。S K 234 土塚出土。2484は外面にオリーブ色の釉がかけられ、内面は褐色で、胎土は灰色で粒子が粗い。常滑陶器でS D 201 溝出土。



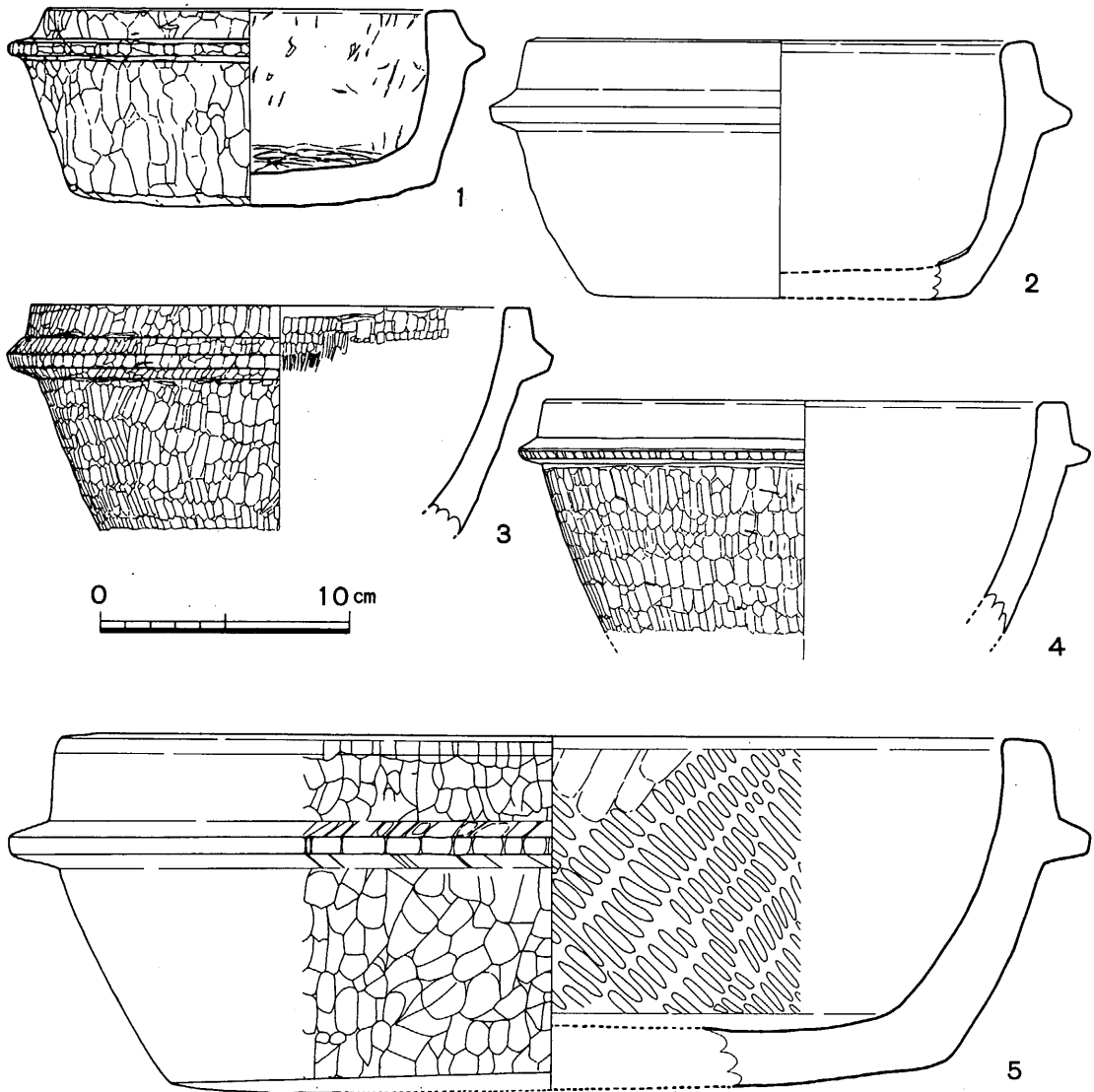
97図 灰釉陶器・古瀬戸・常滑陶器実測図

## 8. 滑石製品 (98~101図, 図版56, 63, 64)

石 鍋 (98図, 図版56-3)

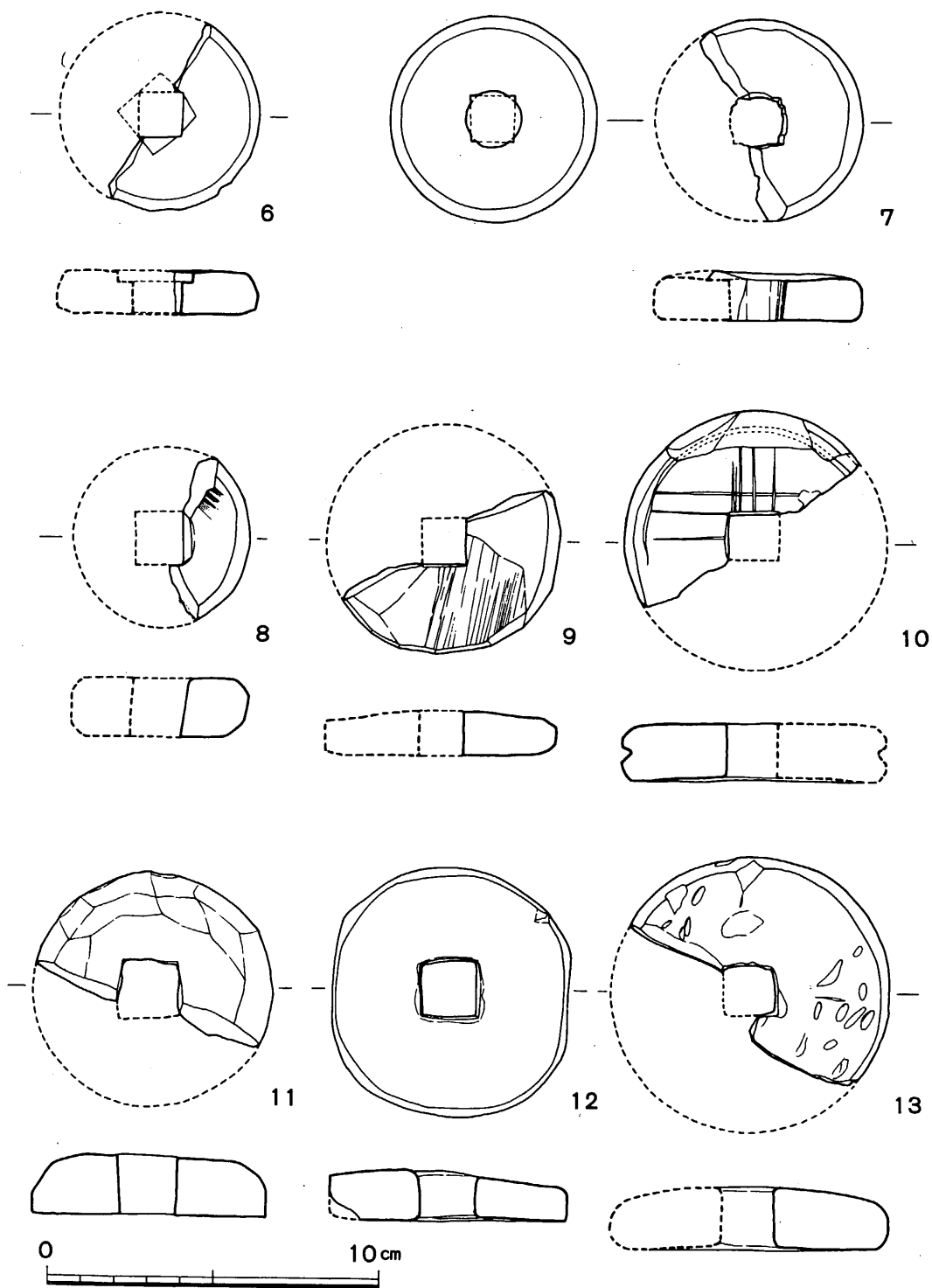
すべて滑石製で、その原材の色調はK区(1次調査)と同様に三者が認められ、その形態は(1)こぶ状把手付が1例、(2)鏝付が21例認められ、出土総量は30個体を越えている。





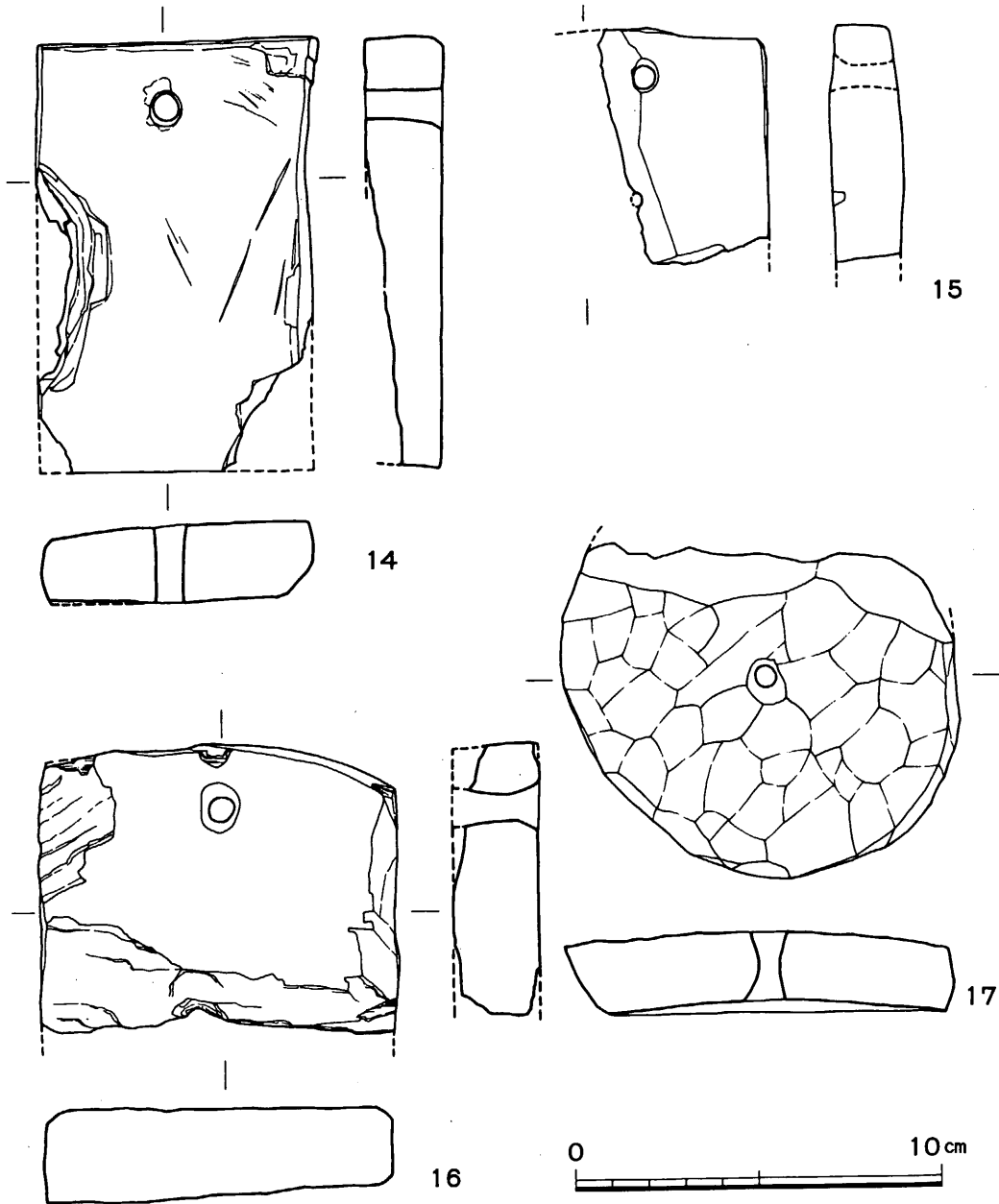
98図 石鍋実測図

1はLR36区5層上面出土。口縁径16.5cm・器高7.9cm・器壁厚1.5cm前後を測り、鋳部が小さく、また体部外面の削り痕は不整形な仕上げである。器外面は黒色を呈す。2はCL区SD202覆土出土。器周残約 $\frac{1}{4}$ からの復原口径20.4cm・器高10.5cm・器壁厚1.5cm前後を測る。器内面は丁寧な仕上げで、工具痕をほとんど認めないが、器外は煤その他の付着物で不明瞭である。3はLP区4層上面出土。器周残約 $\frac{1}{4}$ からの復原口径20.0cm・器壁厚1.2cm前後を測る。器内面から口唇部にかけては横方向に丁寧に研磨し、体部は外方向に開口する。



99图 滑石·瓦製有(方形)孔円板实测图

4はLV41区出土。器周残約 $\frac{1}{6}$ からの復原口径21.0cm, 器壁厚 1.3cm前後を測り, 鏝部が小さい。器内面の研磨は丁寧である。5は遺跡周辺の太宰府町筑紫工業高校裏山出土例で, 青磁・白磁・瓦器等が付近から採集されている(註1)。現在底部の一部を欠失するが完形に近い。口径40.0cm, 器高14.4cm, 器壁厚 2.5cm前後を測る。器内面は斜方向の工具痕を規則的に残す。



100図 滑石有(内形)孔円板・有(円形)孔製品実測図

有(方形)孔円板 (99図, 図版63—1, 9表)

1次調査(K区)で既述したとおり, 8例が出土し, その中で6例が滑石製, 2例が土製である。

有(円形)孔円板・方形板 (100図, 図版63—2)

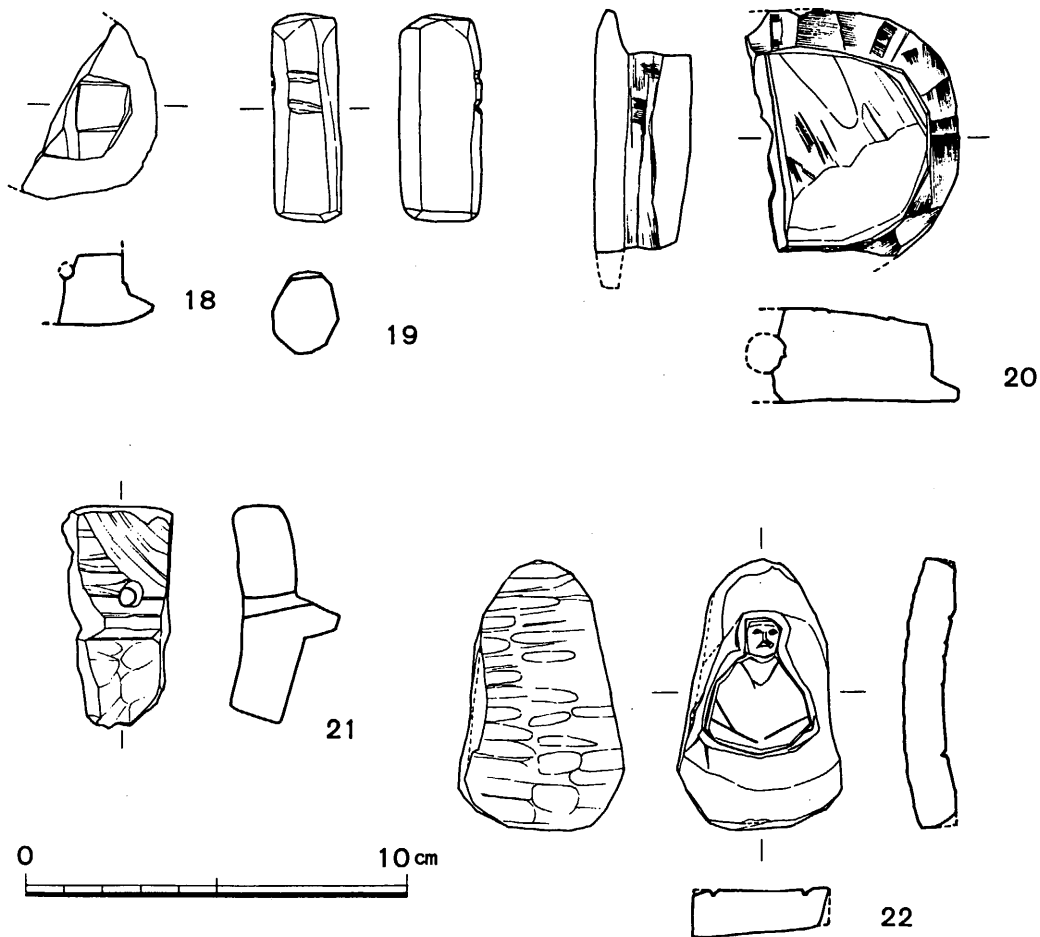
方形状と円形状の二者が認められ, 共に1孔を設せる。

14はL S32区5層出土。平面は平漏に, 横断面の両端は隅丸に, 縦断面の両端は鋭利な面にそれぞれ仕上げる。孔径0.75cm・長径11.9cm・短径7.7cm・厚さ2.1cm・重さ323.0gを測る。

15はL V42区出土。石鍋口縁部片を再加工したもので, 縦断面にそのカーブを残す。下半部にいま1つの小孔の痕跡を認める。孔径0.7cm・厚さ2.0cm・重さ98.5gを測る。

16はL N区S K202内上層出土。上側面と左側面に面取りが施され, それ以外は自然の剝離面を残し風化が観察される。孔径0.7cm・横径8.8cm・厚さ2.4cm・重さ341.5gを測る。

17はL P40区5層出土。石鍋片を再加工したもので, ほぼ中心に孔を穿つ。孔径0.6cm・長径11.4cm・短径10.5



101図 各種滑石製品実測図

cm・厚さ 1.9cm・重さ 341.5g を測る。他にL R 33区 3層から15類似の破片が出土している。

以上の中で、14・16は石鍋片の再加工品ではなく、形態が類似し、また火気を受けたらしく、特に上半部が黒変している。6次調査のME15区 3層からも同類で火気を受けたものが出土しており（註2）、その用途の一姿を示唆するものであろうか。また17は有（方形）孔円板の未製品の可能性も強い。

有孔鈕付製品（101図，図版64—1，10表）

1次調査（K区）で既述したとおり、18・20・21の3例が出土した。

その他の滑石製品（101図，図版64—1）

19はL P 36区 4層出土。断面隅丸方形の円柱状を呈し、2箇所刻みを認める。長径 5.5cm・断面径16.5×2.2cm・重さ42.15g を測る。22はL区出土。石鍋の残片を利用している。背面はその器外面をそのまま、表面は器内面のカーブを上・下の両端部のみ平坦に擦り上げる。側面の面取りも同様に擦り上げる。座像はそのカーブ面に描く。その外貌を0.15～0.2cmの深さに刻み込み、両眉・鼻および襟を極細線でシャープに描く。また両眼と口は彫り込み、両足は座を呈し、単なる戯作の域を出ており、仏身座像を表現したものか。

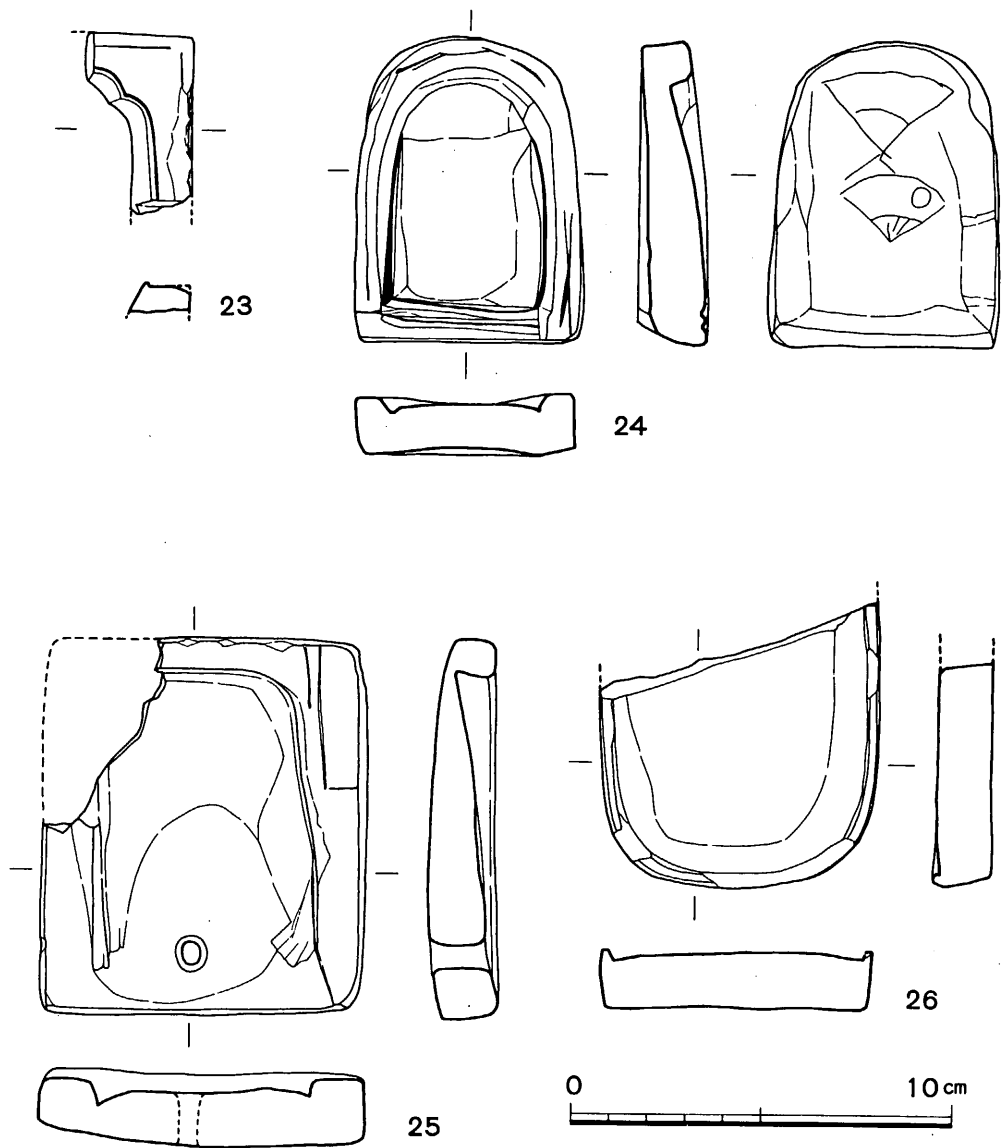
註1 「防長地方の中世土壟」『九州考古学15』1962年 九州考古学会——に小田富士雄氏によって本例が紹介されているが、今回の報告書作成に際して、所蔵者の安恒妙子氏から寄贈を受けたものである。

註2 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 第6集 1977年

## 9. その他の石製品（102・103図，図版64・65）

硯（102図，図版64—2・65—1）

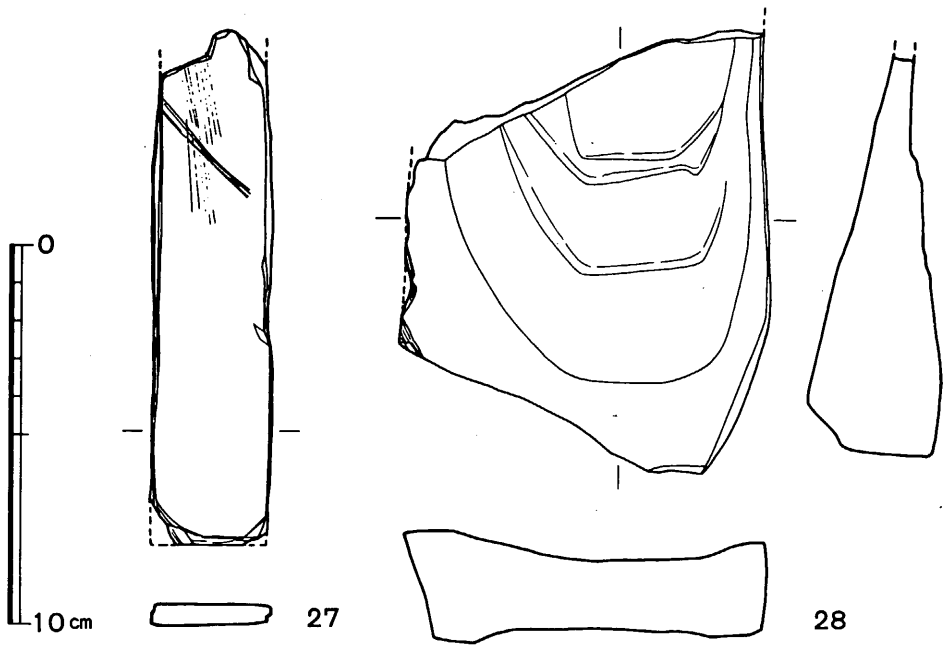
23はL V 41区 S K 231 出土。陸立ち上がり部の残片であるが、丁寧なつくりで、幅0.15cmの削り出し部を設ける。暗青灰色頁岩製。24はL Q 34区青色粘土上面出土。陸部およびその壁上面手元を、深さ0.15cmに彫り込み、その他の壁上面は沈線でその彫り込み割り付けを細線で配するにとどめる。裏面はシャープな刻線で、紙扉2枚を、開いた状態で描く。図上段のそれは親骨が要部外に若干突き出た様子までを写すが、子骨は略されている。下段のそれは、右上端部に○印様の線刻があり、彩絵紙扇を略して写したものか。骨は5本が認められ、より古い形態をとどめている。小形例ではあるが、裏面の床部も全体的に上げ底状に丁寧に仕上げ、長径 8.0cm・短径 6.0cm・厚さ1.85cmを測る。暗青灰色硬質砂岩製。25はL R 33区 5層出土。陸部の手元に1孔を穿ち、この部分に立ち上がり壁を設けず、傾斜をもちつつ海部に至る。底面は通有の上げ底状をなさずにカーブをなす。長径10.0cm・短径 8.6cm・厚さ 2.0cmを測る。灰色滑石製。26はL区 S D 201 上部出土。陸部残欠であるが、丁寧なつくりで、裏面は上げ底状をなす。暗灰色硬質砂岩製。他にL R 39区 5層から小豆色輝緑凝灰岩製の破片が出土している。



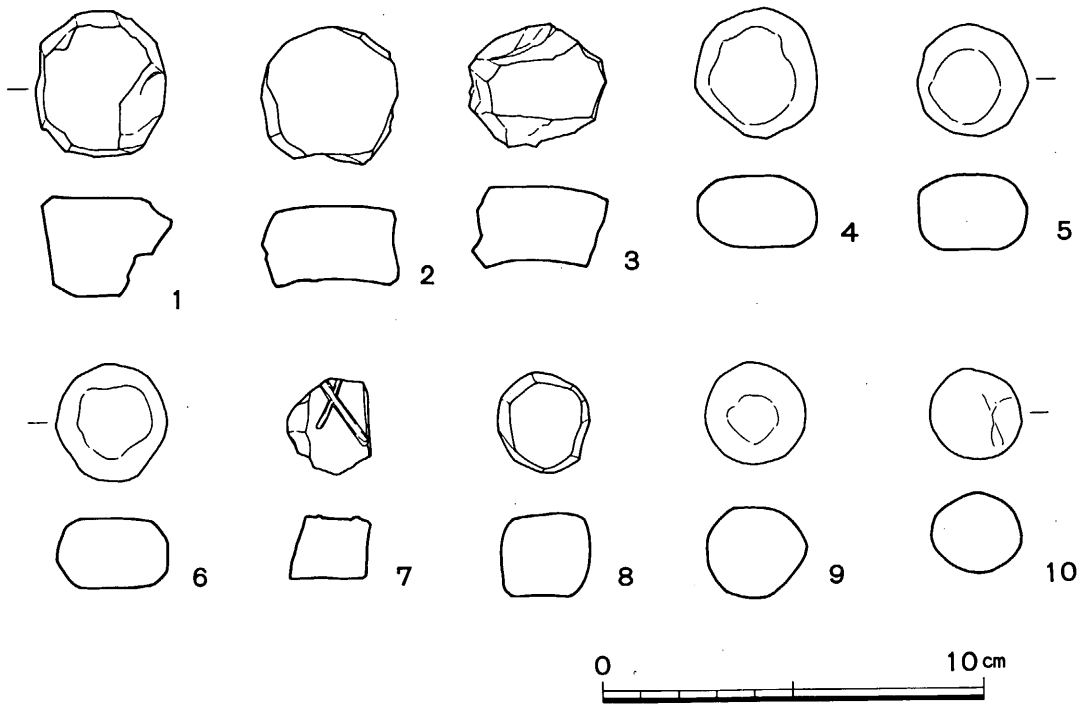
102図 石製碗実測図

砥石 (103図)

27はL V 41区3層出土。両面を使用するが、両長側面は擦り切り技法による切断面をそのまま残す。淡橙色粘板岩製。28はL Q 34区 S K 208 出土。両面および右側面を使用する。淡青灰色砂岩製。



103図 砥石実測図



104図 カワラ玉類実測図

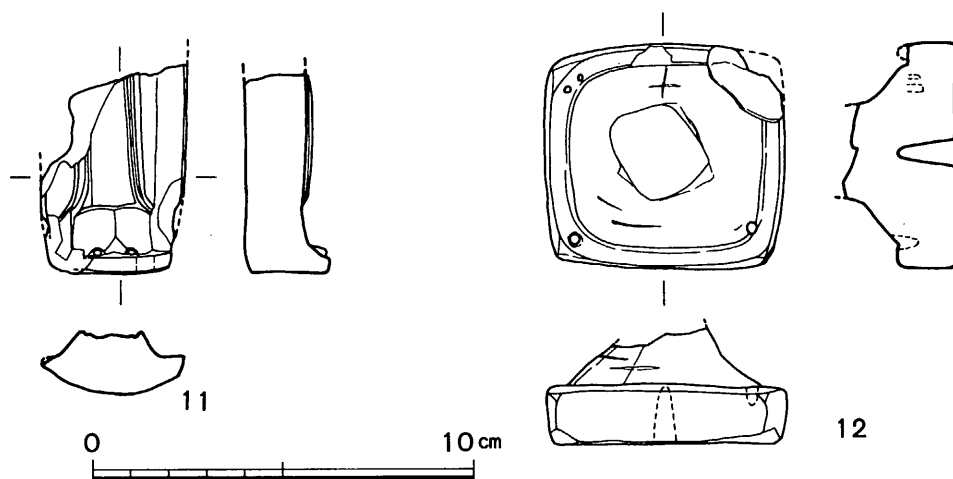
## 10. 土製品 (104・105図, 図版65)

カワラ玉類 (104図, 図版65—4, 12表)

1次調査 (K区) で既述したとおり, 瓦製が19例, 土製が2例出土した。

その他の土製品 (105図, 図版65—2・3)

11はLR37区5層出土。仏身立座を型押しで造ったもので, 胸部上半を欠失する。金雲母砂粒を含む胎土で, 焼成は良く, 暗褐色を呈す。12はLO38区4層上面出土。平面形は6.0×6.3cmの隅丸方形を呈し, 外縁から0.6cm内側に沈線を施し1周させる。径0.2~0.3cm・深さ0.5cm前後の小孔を3隅部に4個認めるが, 欠失部の隅部にも同様に存在したものであろう。また裏面にも, 径0.6cm・深さ1.5cmの孔を認める。胎土に若干の石英砂粒等を含み, 瓦様の焼成を示し, 灰色を呈す。遺構に伴ったものではないが, 宝珠または相輪形の鈕を欠失した土製宝塔を想起させる。

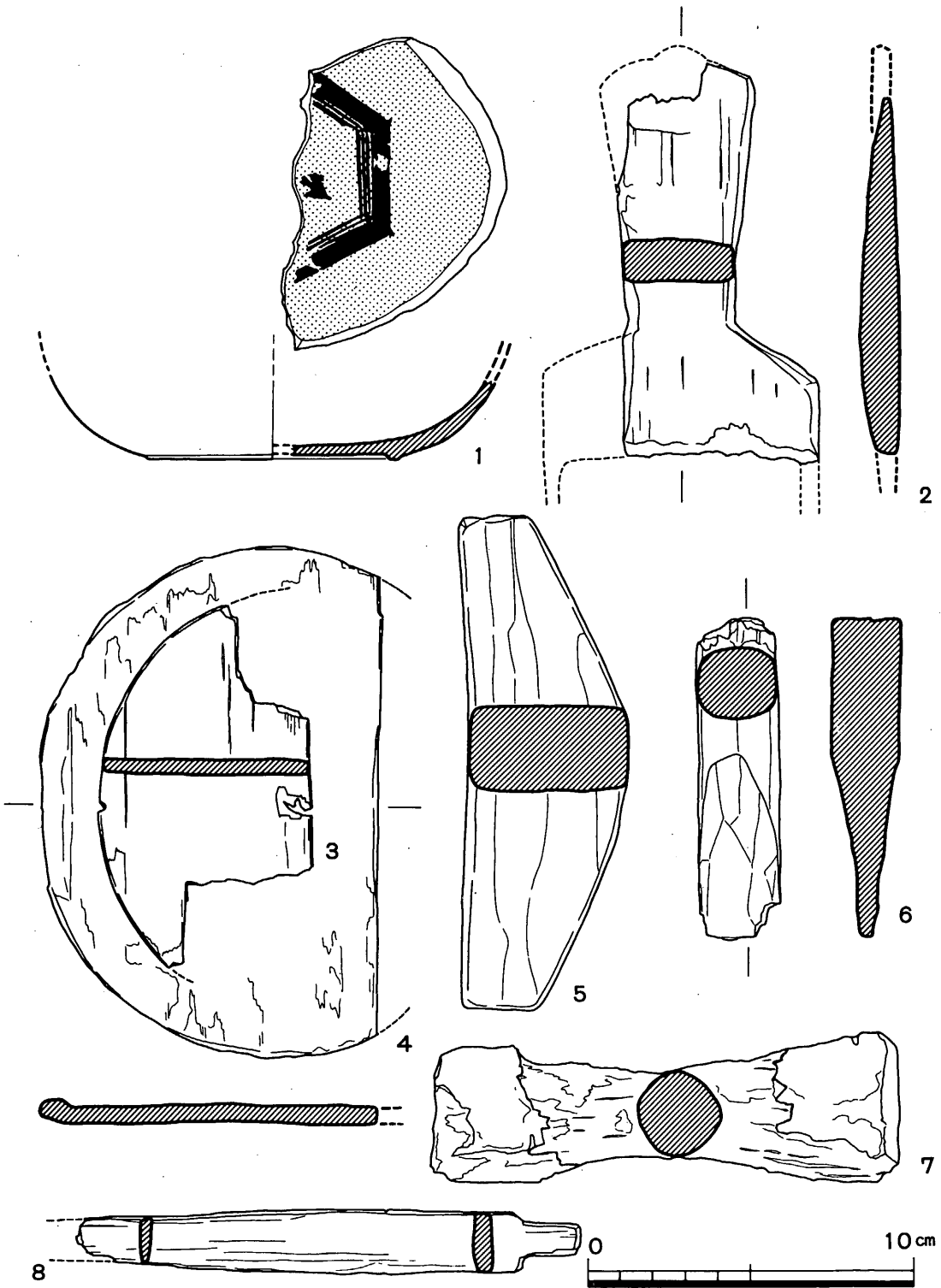


105図 土製品実測図

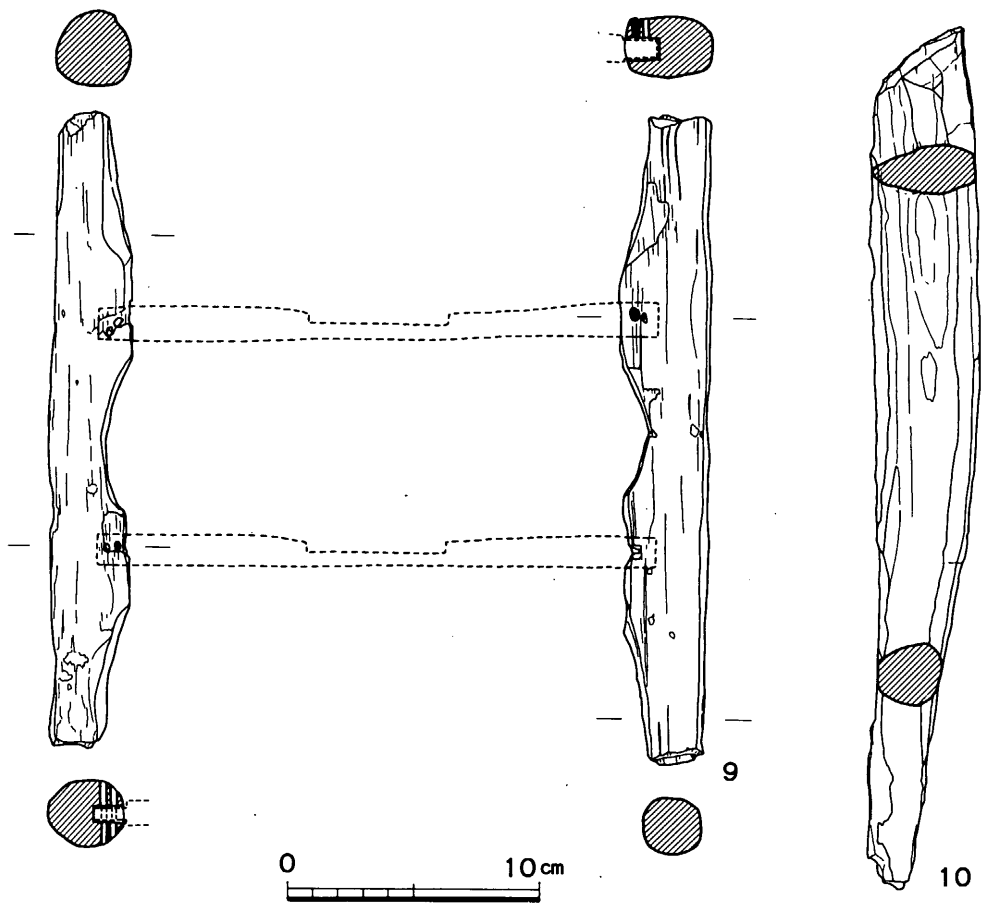
## 11. 木製品 (106~108図, 図版66・67—1)

1は漆器椀で, 底部を除く内外面に黒色漆が塗られている。遺存状態はあまり良くないが, 内面見込み部には朱で亀甲文様が描かれている。高台は削り出しによるもので, 底部は高台よりわずかに削り窪められている。LO42区4層出土。2は長手の柄がって縦櫛で, 頂部及び歯の部分を欠損する。6次調査でも同様な櫛が出土しており, それによると頂部は鶏頭状に仕上げられ櫛歯も疎いものであるが, これもそれとほぼ同様な形態をなすものと思われる。SE216井戸内出土。3・4は曲物容器の底板で, 3は復元径約14cm, 厚さ0.5cm, 4は径16cm, 厚さ



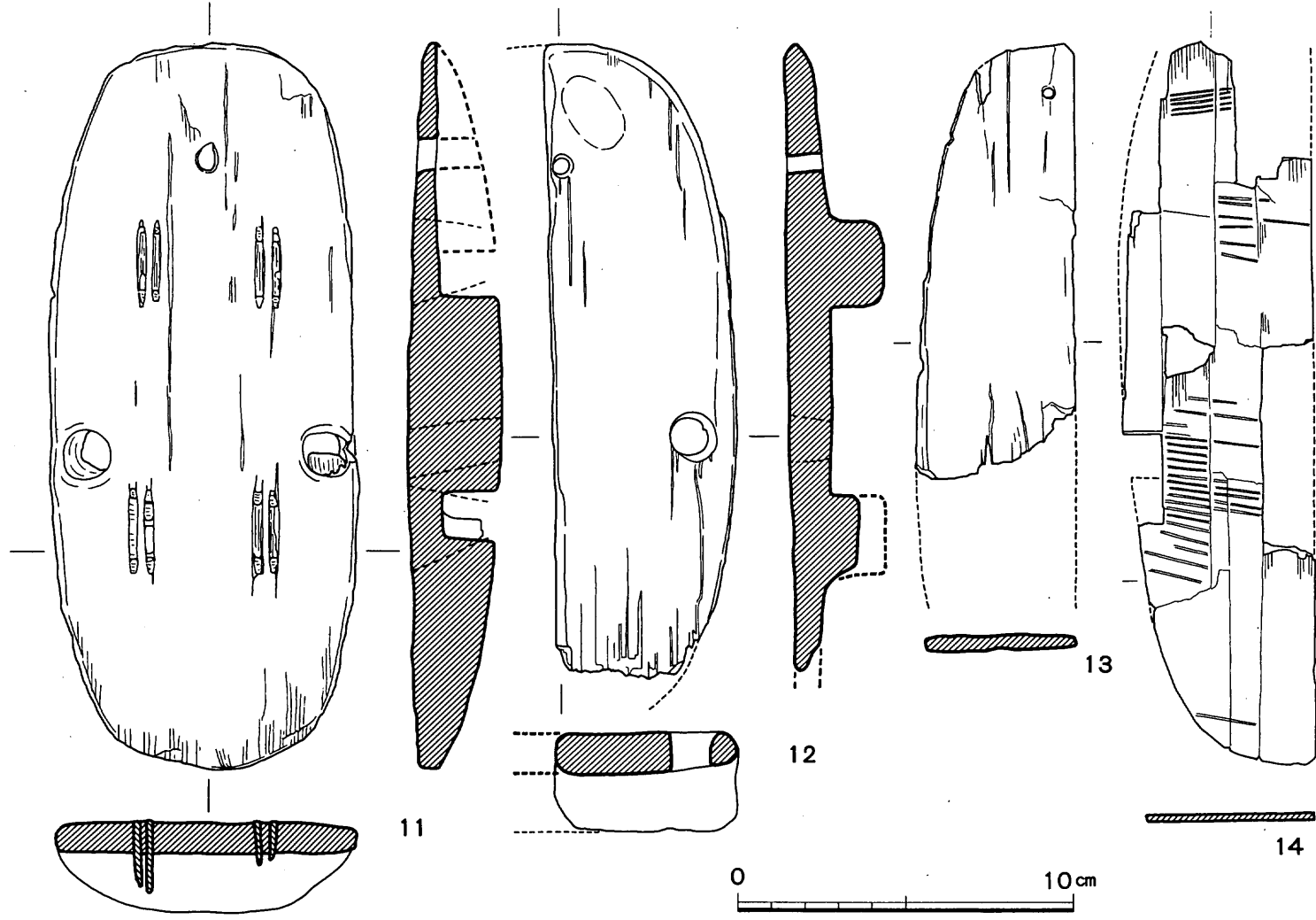


106图 木製品実測图 1



107図 木製品実測図 2

0.6cmをはかるがやや楕円形をなす。ともに縫い合わせの桜樹皮はみられない。3はSD202 溝内、4はSE211 井戸内出土。5は長辺の一辺を弧状に切り出し、半円形をなす木製品で、全長15.4cm、最大幅4.4cm、厚さ2.7cmをはかる。弧状をなす面は曲線ではなく、ゆるやかな稜を中央付近にて2ヶ所つくり、弦にあたる面もやや内弯する。用途不明。SK201土坑内出土。6は下端を楔状に尖らせたもので、上端面は荒い切断痕を残したものである。全長10cm、断面は2.5×2.3cmの短形に近い円形をなす。SK201土坑内出土。7は槌の子で、自然木を14.5cmの長さで切断し、中央部を削り込んで細くしたものである。最大径4.7cm、最小径2.6cmをはかる。LO42区4層出土。8は刀子状木製品で刀子に似た形状をなす。現存長15.5cmで先端の切先部を欠損する。先端に近い方は刃部をつくり、関節付近では扁平な断面となる。他端には1.8cmの長さの茎をつくるが、目釘穴はみられない。4層出土。9は杵(糸巻き)の外杵木で2本出土しているが本来はこの杵木4本が十字形に組まれて一組の杵となるものである。杵木はともに

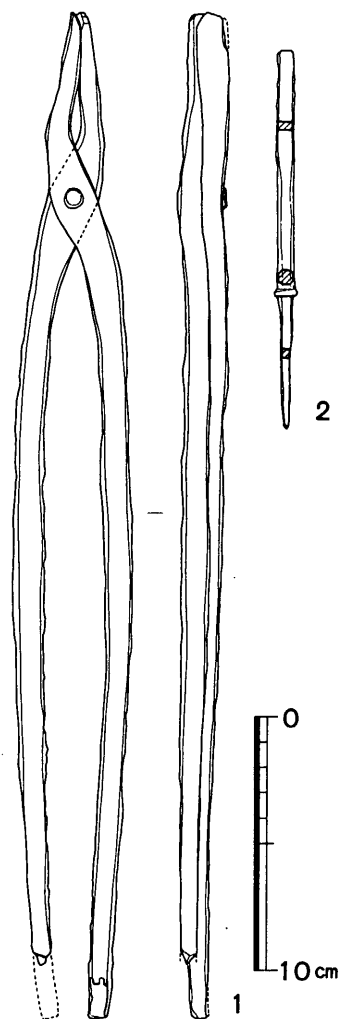


108图 木製品実測图 3

全長25.5cm, 最大幅3.5cm前後で, 断面は短形に近い円形をなし, やや扁平となる。長側面の片側を2ヶ所山形に残して切り込み, 山形頂部には横木を挿入する方形の柄穴を穿つ。さらにその側面からは目釘穴を2ヶ所づつあけ, 竹釘様のものを挿入して固定したものであろう。この杵木を受ける横木や軸棒は出土していないが, 大宰府史跡第38次の調査では完形品が出土している。LN40区黒色土層出土。10は木刀状木製品で, 全長34.3cmをはかり, 少々短かいが先端は完結している。半折したものを再加工したものらしい。先端部近くの断面は刃部をつくるが, 他端は丸木状で柄の部分になるものと思われる。ただ刀と柄が直線につくられ, 背は鋒より柄の部分が低く, つまり柄に対して刃が上下逆につくられていて不都合さを感じさせるが, 一応木刀と報告しておく。SD202 溝内出土。11は差歯下駄で, 歯の部分は欠落している。全長21.7cm, 台幅9.2cm, 台高2.8cmをはかる。歯は台部上面からあけられた細長の柄穴8ヶ所に楔を打ち込んで止めるもので, 後歯にはまる柄穴には楔がはまったままである。また鼻緒は楔できつく固定されていたらしく, 後鼻緒孔の一つには楔が残されている。LR37区4層出土。12は連歯下駄で, 復元長約21cm, 復元台幅10.5cm, 高さ3cmをはかり, 後歯は磨耗して低くなっている。LO42区黒色土出土。13・14は覆物状木製品で, とともに片方だけの出土である。14のものには暗文風の痕跡がみられる。13はSE207井戸掘方, 14はSE201井戸内出土。

## 12. 鉄製品 (109図)

第2次調査では鉄製品が二点出土している。1はヤットコである(図版68-1)。柄の片方先端を欠損するものであるが遺存状態は良好である。長さ約40cmのもので, 柄部は断面が隅丸方形を呈し, 挟み部の幅は1.3cm前後となっている。第3層出土のものである。当遺跡においては鋳物関係遺物の出土のあるところから, これらと関連のある遺物と考えられる。2は鉄鏃の完形品である。長さ15cmのもので断面形は基部と先端方が方形を呈し, 関あたりは円形となっている。先端は楔形を呈するものである。SK231 土坑内の焼土中より出土のものである。



109図 鉄製品実測図

### 13. 銅 銭 (110図, 図版69, 32表)

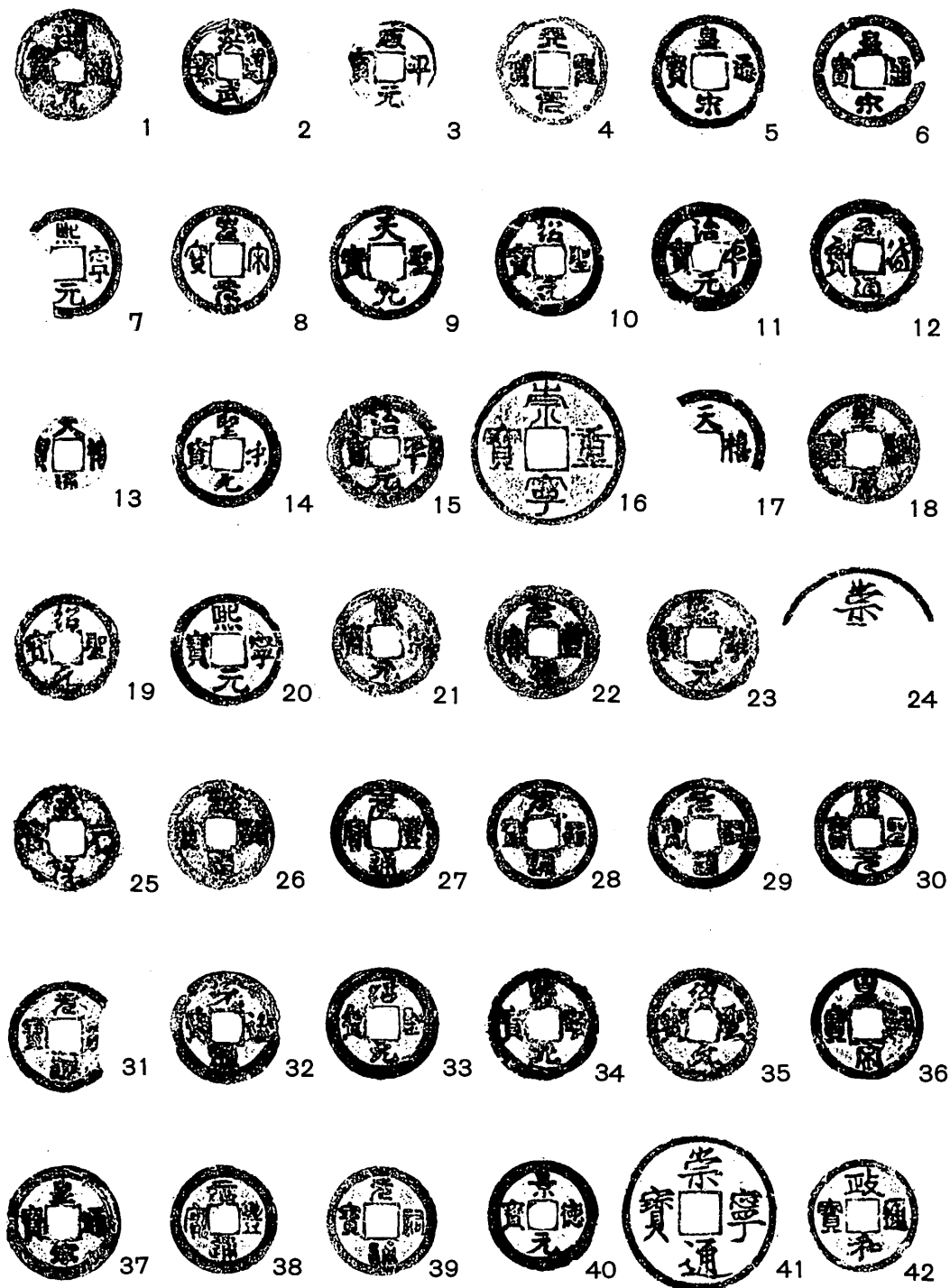
2次調査では68枚の銅銭が出土し、6次にわたる調査のうち最も多くの出土を見た。そのうち判読可能なもの22種65枚である。2の洪武通寶の背面右側には鑄印がみられるが判読できない。24は崇寧通寶, 25は咸元通寶あるいは慶元通寶であろうか。44は元豐通寶, 46は咸平元寶, 59は聖宋元寶, 60は熙寧重寶と読めよう。63の開禧通寶の背面上方には「三」の鑄印がみられる。銭種別では熙寧元寶が8枚で最も多く、つづいて紹聖元寶の7枚, 元祐通寶・皇宋通寶の6枚となる。唐の開元通寶, 南宋の開禧通寶・咸元通寶, 明の洪武通寶以外は全て北宋銭で11世紀前半から12世紀初頭のもの中している。4層からの出土が多く、とくにLP37区では13枚が「さし」の状態出土し, 皇宋通寶(1039年)から政和通寶(1111年)までのものが含まれている。2層では崇寧重寶(1102年), 3層では咸元元寶(1265年), 4層では大觀通寶(1107年)が下限のものである。遺構内からの出土も多いが, それらのうち最も年代的に下る開禧通寶(1205年)が出土したLW36区ピットなどは, 遺構のほぼ正確な年代を示しているのではないと思われる。

図版番号	銭貨名	外 径		外縁 厚さ	出 土 地 点		初 鑄 年	備 考
		水平	垂直		地区	層位		
1	開元通寶	24.00	24.10	1.50			唐 高祖 621	
2	洪武通寶	21.35	21.40	1.55	LL41	1層	明 太祖 1368	
3	咸平元寶	20.00		1.50	表 採		宋 真宗 998	
4	天聖元寶	25.15	25.00	1.45	上 げ 土		〃 仁宗 1023	
5	皇宋通寶	25.00	25.30	1.60	LV37	2層	〃 〃 1039	
6	〃	24.80	25.00	1.20	LU34	〃	〃 〃 〃	
7	熙寧元□		24.45	1.60	LV39	〃	〃 神宗 1068	熙寧元寶
8	聖宋元寶	24.30	24.25	1.30	LV39	〃	〃 徽宗 1101	
9	天聖元寶	25.10	25.10	1.40	LT36	〃	〃 仁宗 1023	
10	紹聖元寶	24.10	24.10	1.85	LV40	〃	〃 哲宗 1098	
11	治平元寶	24.55	24.45	1.60	LM40	〃	〃 仁宗 1064	
12	元符通寶	25.15	25.00	1.50	LT42	〃	〃 哲宗 1094	
13	天禧通寶			1.50	LU41	〃	〃 真宗 1017	
14	聖宋元寶	23.90	24.00	1.80	LT41	〃	〃 徽宗 1101	
15	治平元寶	25.50	25.10	2.00	LS40	〃	〃 仁宗 1064	
16	崇寧重寶	34.35	34.35	2.05	LV40	〃	〃 徽宗 1102	
17	天禧□□			1.45	LS39	〃	〃 真宗 1017	天禧通寶
18	皇宋通寶	24.85	24.65	1.70	LP37	3層上面	〃 仁宗 1039	
19	紹聖元寶	23.65	23.50	1.60	LP37	〃	〃 哲宗 1098	

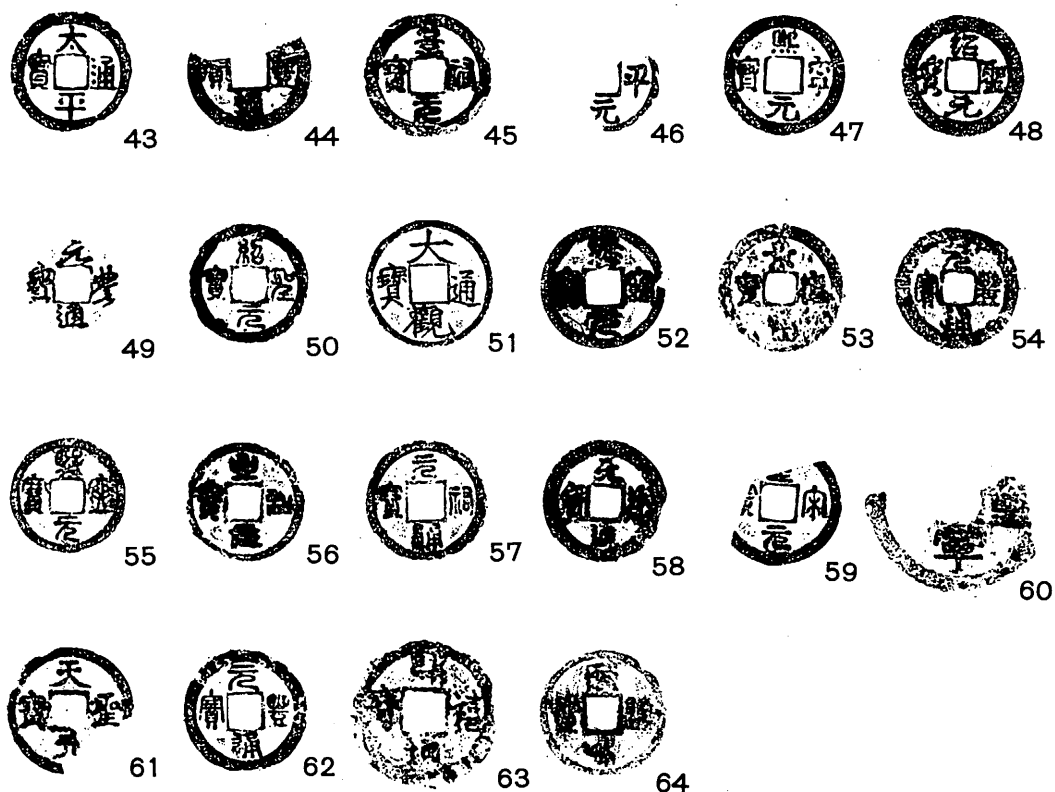
20	熙寧元寶	25.25	25.00	1.25	L P37 3層上面	宋 神宗 1068	
21	熙寧元寶	23.85	24.20	2.00	L P37	〃 〃 〃	
22	元豐通寶	25.40	25.45	1.50	L P37	〃 〃 1078	
23	熙寧元寶	24.75	24.35	1.80	L P37	〃 〃 1068	
24	崇〇〇〇			2.85	L R33 3層	〃 徽宗 1102	崇寧通寶
25	〇元〇寶	23.85	23.55	1.10	L R37	南宋 度宗 1265	咸元通寶 or 慶示通寶
26	元祐通寶	24.00	24.25	2.00	L P37	宗 哲宗 1086	
27	元豐通寶	24.00	24.05	1.90	L P37	〃 神宗 1078	
28	元祐通寶	24.30	24.35	1.50	L P37	〃 哲宗 1086	
29	元祐通寶	25.05	24.30	1.90	L P37	〃 哲宗 1086	
30	紹聖元寶	23.30	23.80	1.15	L Q34	〃 〃 1098	
31	元豐通寶		24.85	2.00	L M42	〃 神宗 1078	
32	元祐通寶	24.50	25.10	1.45	L P37	〃 哲宗 1086	
33	紹聖元寶	24.80	25.00	1.70	L P37	〃 〃 1098	
34	熙寧元寶	25.00	24.90	1.90	L P37	〃 神宗 1068	
35	紹聖元寶	24.90	25.10	1.85	L P37	〃 哲宗 1098	
36	皇宋通寶	24.70	24.90	1.95	L P37	〃 仁宗 1039	
37	皇宋通寶	25.45	25.25	1.60	L P37	〃 〃 〃	
38	元豐通寶	23.85	23.95	1.25	L P37	〃 神宗 1078	
39	元祐通寶	24.20	24.00	1.80	L P37	〃 哲宗 1086	
40	景德元寶	24.35	24.40	1.25	L N42	〃 仁宗 1034	
41	崇寧通寶	34.30	34.35	2.40	L M42	〃 徽宗 1102	
42	政和通寶	24.60	24.80	1.75	L P37	〃 〃 1111	
43	太平通寶	24.20	23.85	1.20	L S36	〃 太宗 976	
44	〇豐通寶	24.60		1.50	L Q34	〃 神宗 1078	元豐通寶
45	景祐通寶	25.25	25.30	1.35	L Q37	〃 仁宗 1034	
46	〇平元〇			1.25	L Q35	〃 真宗 998	咸平元寶
47	熙寧元寶	24.00	24.00	1.55	L V35	〃 神宗 1068	
48	紹聖元寶	24.35	24.10	1.25	L O40	〃 哲宗 1098	
49	元豐通寶			1.30	L S32 4層	〃 神宗 1078	
50	紹聖元寶	23.80	23.75	1.90	L S39	〃 哲宗 1098	
51	大觀通寶	25.25	25.20	1.25	L P35	〃 徽宗 1107	
52	熙寧元寶	24.80	24.70	1.20	L Q36	〃 神宗 1068	
53	景德元寶	25.00	25.20	2.15	L R36	〃 仁宗 1034	
54	元豐通寶	25.20	24.05	2.20	L R35	〃 神宗 1078	
55	熙寧元寶	23.00	23.00	1.60	L R40	〃 〃 1068	
56	至和元寶	23.30	22.90	1.50	L S36	〃 仁宗 1054~55	
57	元祐通寶	24.45	24.25	1.45	L S38	〃 哲宗 1086	
58	元符通寶	24.80	24.50	1.45	L N40 敷石上	〃 〃 1098	
59	〇宋元寶			1.50	L V35 土坑内	〃 徽宗 1101	聖宋元寶
60	〇寧重〇			2.85	L V35	〃 〃 1102	崇寧重寶
61	天聖元寶	25.10	25.10	2.00	L V40ピット内	〃 仁宗 1023	
62	元豐通寶	24.45	24.05	1.45	LV39方形土坑内	〃 神宗 1078	
63	開禧通寶	29.10	29.30	1.80	LW36ピット内	南宋 寧宗 1205	背面に「三」の鑄印あり
64	政和通寶	25.30	25.10	1.75	SE 205	宋 徽宗 1111	
	皇宋通寶	24.75	24.40	1.20	L P37 3層	〃 仁宗 1039	
	天禧通寶				L V40ピット内	〃 真宗 1017	
					L P37 3層上面		
					L U41 2層		

32表 銅錢計測一覧表

(単位mm)



110圖 銅錢拓影 1



110図 銅銭拓影 2

#### 14. 鋳物関係遺物

第2次調査において鋳物関係の遺物が多量に出土している。大宰府郭内における鋳物関係遺物の出土はあるが、当遺跡ほど多量に出土してはいない。遺物の内容は鋳型が非常に多く、鑄羽口、とりべ等がある。

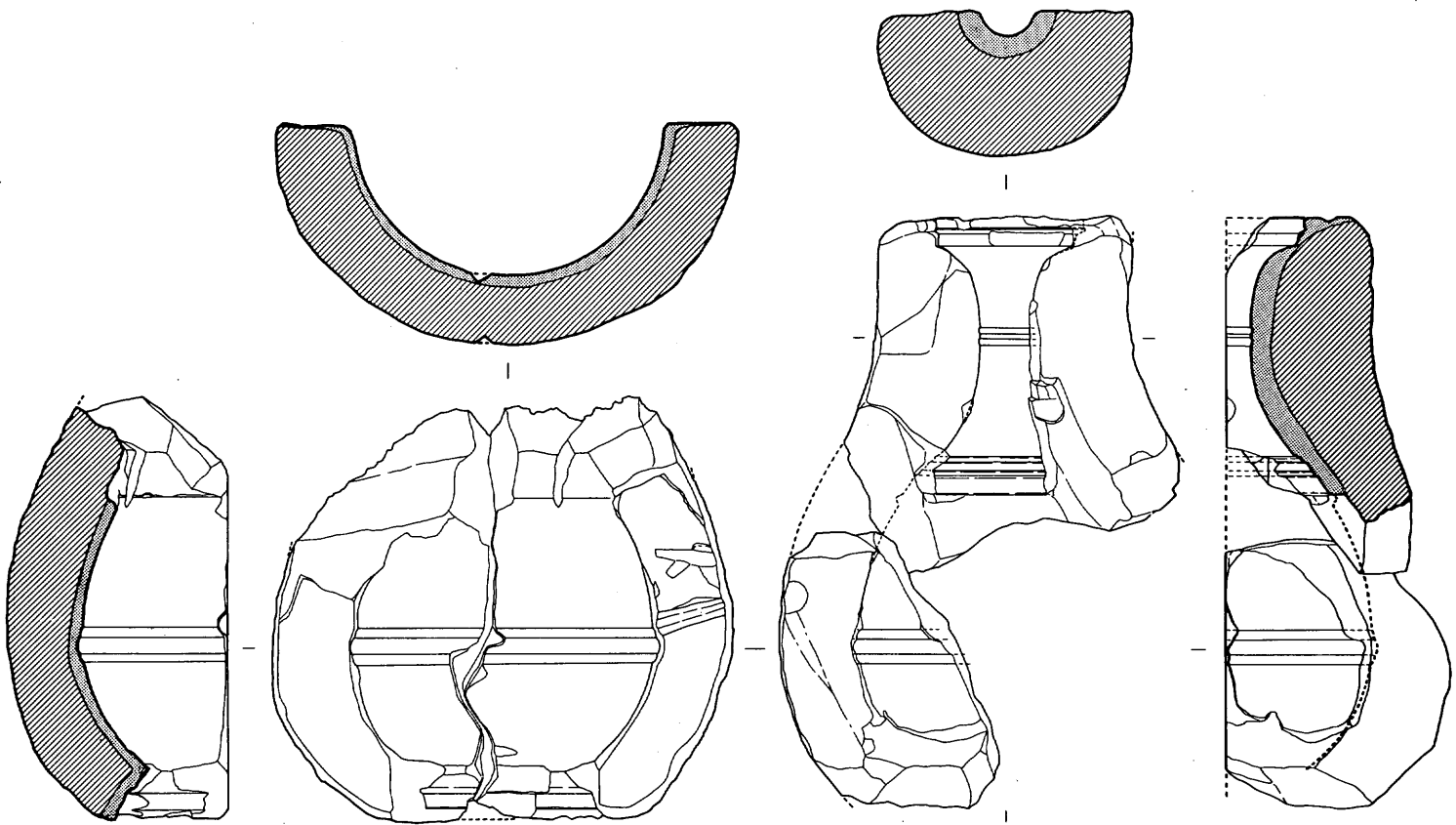
鋳型は華瓶と仏具関係のものがある。

華瓶鋳型は外型の破片である(111図, 図版70-1)。鋳型は卵球形のものを縦半に分割した外型であって、この鋳型の中子は出土していない。鋳型の厚さは3~5cmほどあって、華瓶の頸部となる部分が最も厚い。このうち粗真土、中真土が厚く、内面に仕上げ真土が0.5~1cmの厚さで施されている。粗真土、中真土は粘土と天然砂と混練したもので、粗真土には籾殻が混合されている。鋳型はレンガ状の硬いものではなく、真土型を乾燥後に一度焼成し、常温まで冷却して鋳込んだものと考えられ、惣型と呼ばれるものであろう。鋳型の造形にあたっては、この鋳型は合せ型であって、型の合せ面が平坦であり、粗真土の段階でもこの面が平坦であることから引き型により成型されたものと考えられる。型合せ面で華瓶胴部凸帯となる部分に斜位の貫通する溝があるが、これが型合せの見切りかどうか、相対する一方の鋳型にはそれと考えられる部分は見られない。

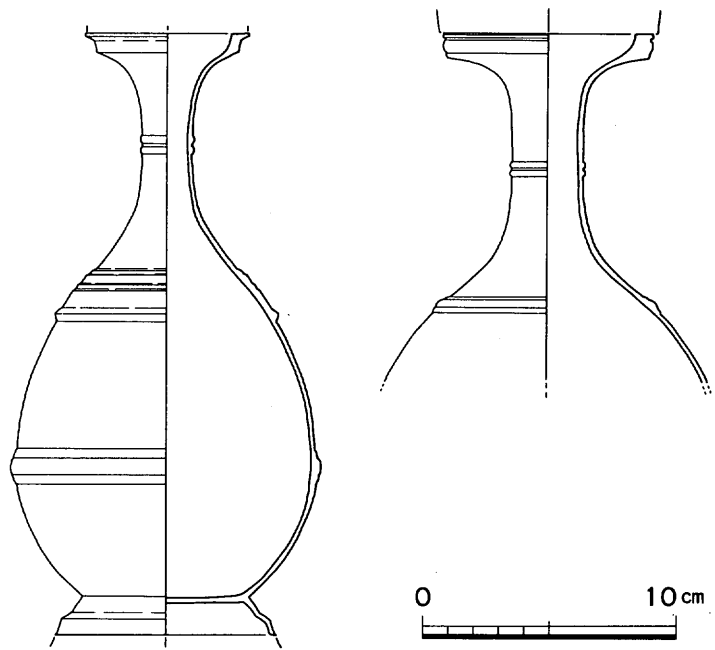
鋳型は完形品ではないが、113図1に図示するように華瓶の形態をおおむね復原できた。ただし、外型には中子巾木の受け部があり、この部分の長さがそれぞれ明確につかめないため口縁部、高台の延びが異なる可能性もある。華瓶は卵形の胴部に細頸が付き、口縁部は大きく外



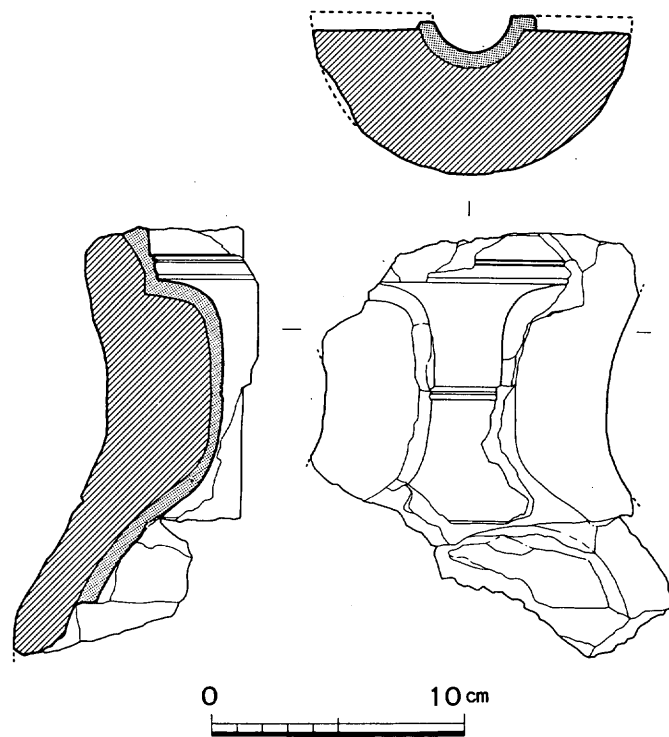
0 10cm



111图 華瓶鑄型実測图 1



113图 華瓶復原图

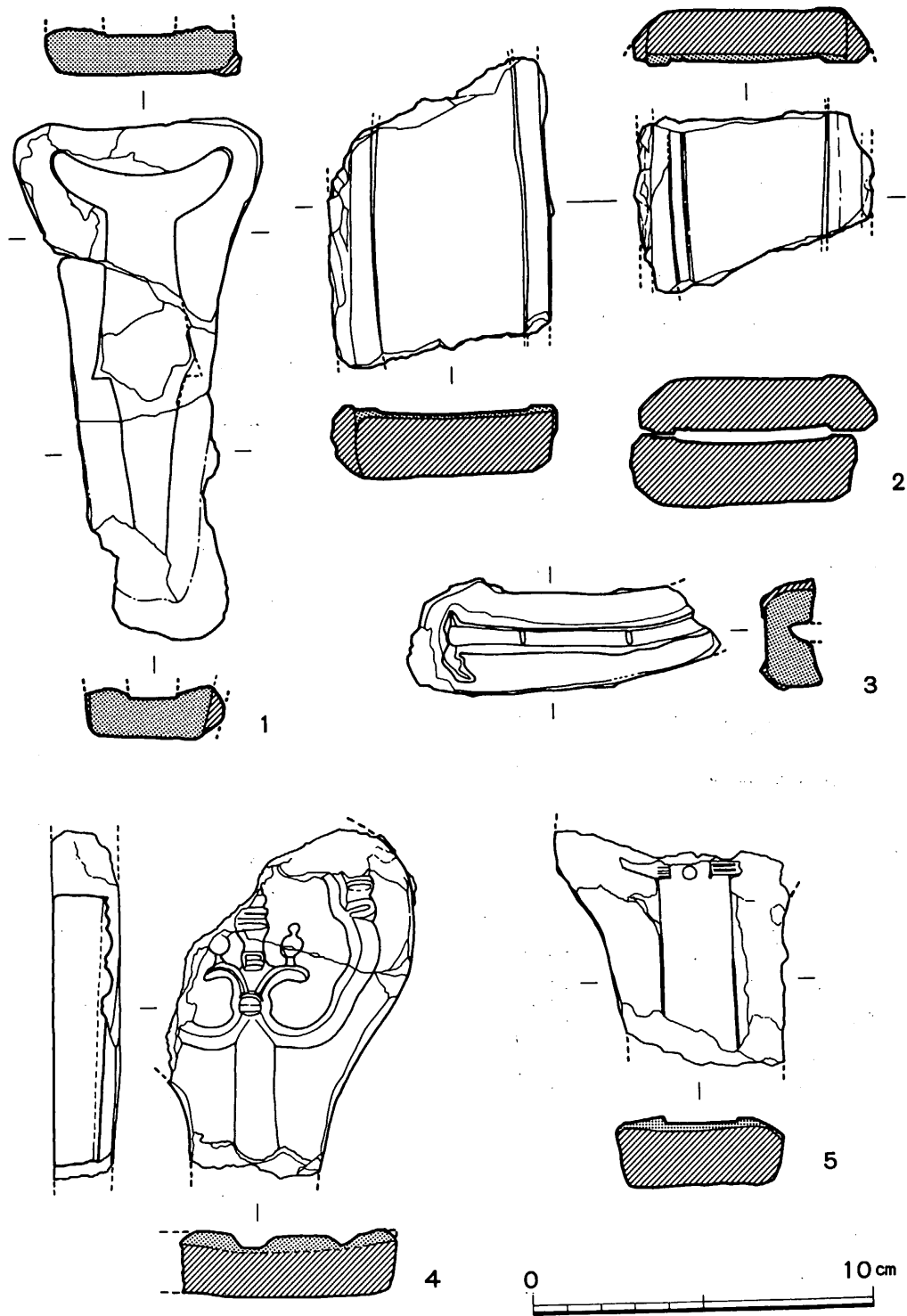


112图 華瓶鑄型实测图 2

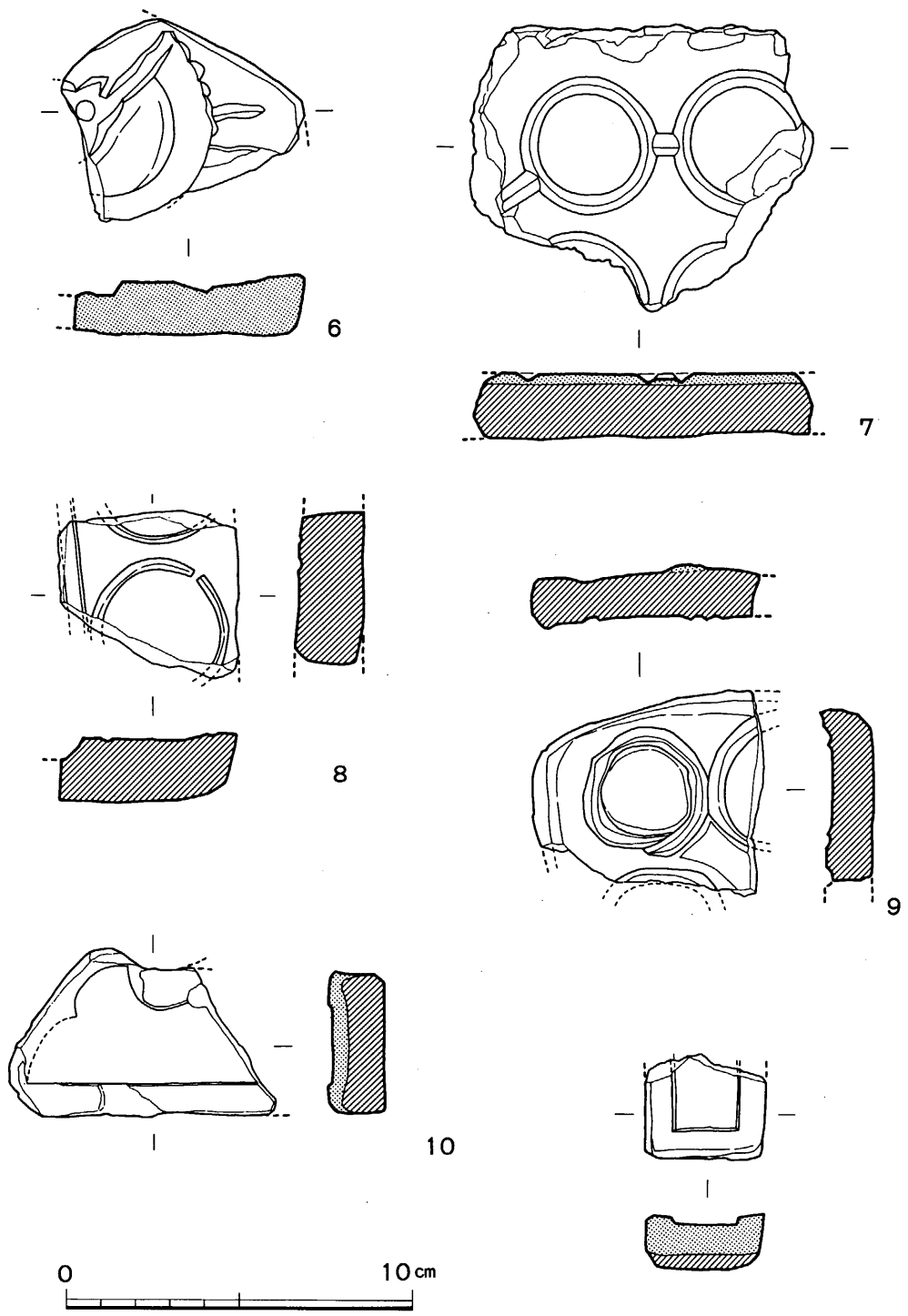
反するものである。口唇部の外側に凸帯を有し、頸部に断面半円形の凸帯を2条、肩部に断面三角形状の凸帯を1条を有し、さらに肩部は四つの段をつけている。胴部にも凸帯を有する。底部に高台を有する。

この華瓶鑄型に類似する鑄型が当遺跡6 A Y E B K区で発見されている(112図, 図版70—2)。鑄型の一部で華瓶の肩部から上部の形態を知ることができる。この鑄型は当遺跡出土のものと同様に成型は全く同じ手法であるが、肌真上が黒ずんでいる。これは鑄物の鑄肌を美しく仕上げる必要から塗型剤を型の表面(溶湯の接する面)に塗る墨味(黒鉛の粉末を粘土水でといたもの)と考えられる。華瓶の復原形態は113図の2に示すとおりである。1よりやや大形の華瓶で、変化に富んだ口縁部に細頸がつき、2条の断面半円形の凸帯があり、肩部に凸帯に凸帯を有する。

二つの華瓶も仏具の一種と考えられるが、このほかに小形仏具の鑄型がある(114・115図)。1は細砂を利用した鑄型である。おそらく粘土水と天然の細砂を混練して造型したものと考えられる。灰橙色を呈し、生砂型か乾燥型かは不明である。鑄型の表面は一部剥落している。鑄物は先端部と考える部分が浅いU字状に分かれ、その先は鑄型からして他の部分より厚味がある。U字状部よりやや広がる本体で両側に関状の袂りがあり、これより逆に細くなる平面形である。長さ11cm以上で、U字状部先端幅5.4cmである。厚さは数mmのものであろう。鑄型の外壁はヌサ入りの粘土が付着している。この粘土は鑄型を合せた後に合せ部の目張りりと全体を包むことを目的に使用されたものと考えられ、このことから鑄型は合せ型と考えられ、欠損部に湯口があるものと考えられる。2は別個体の鑄型であるが、合せ型として関連のあるもので、造られる鑄物は厚さ0.3cm、幅4.1cmの板状を呈し、横断面はやや弯曲する。両端に欠損するので長さは不明である。鑄型は靱殻入りの粘土に薄い肌真土を張りつけている。外壁には目張りおよび補強のためにヌサ入りの粗い粘土が付着している。3は一端が鈎手状になる鑄物で、おそらく帯鈎と考えられる物の鑄型である。厚さ0.5cmであるが、幅、長さは不明である。二個所に横断する浅いU字状の溝がある。この溝部が鑄物には竹の節状に表現されるのであろう。鑄型は細砂利用の真土型で、外壁には靱殻入りの粘土が薄く付着しており、このことから合せ型であると考えられる。4は錫杖の鑄型と考えられる。鑄型は完形ではないが錫杖の形はほぼつかめる。灰褐色を呈するもので、鑄型は靱殻混入の粗真土に0.4~0.5cmの仕上げ真土があり、鑄型の厚さはそれほどない。錫杖は径1cmほどの柄に雲形の環が付き、環内には双葉の中央に水煙と考えられる部分がある。5は同じく錫杖の鑄型の一部と考えられるものである。錫杖の柄部と考えられる部分で、幅約2cm、厚さ0.4cmの板状を呈するもので、中央上部に円形の凸起があり、この位置より環が付くものであろう。鑄型は厚さ約2cmの靱殻入りの粗真土に0.2~0.4cmの仕上げ真土より成っている。6は仏具の一種であろう。おそらく錫杖の一部と考えられるが断定できない。細砂利用の真土型である。7~9は錫杖の付属物である環の鑄型と



114図 鑄型関係遺物実測図 1

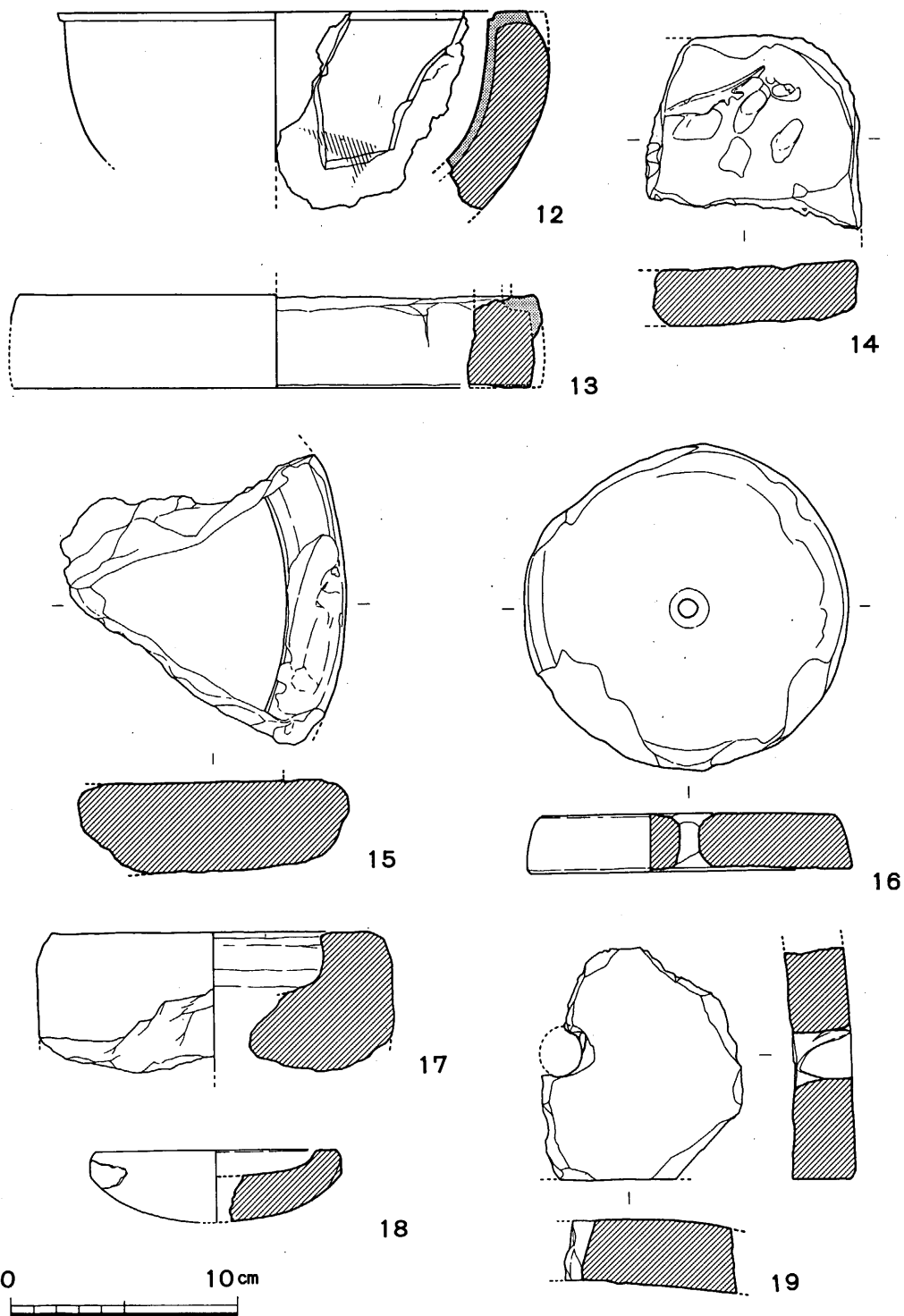


115図 鑄物関係遺物実測図 2

考えられる。7は鋳型の一部である。これより環径は3.5cmと3.7cmであり、円形の溝は断面三角形で、鋳物はその部分の断面が菱形をなすものと考えられる。円形溝を接続する浅いU字状溝は堰と考えられる。鋳型は厚さ1.5cm前後で粃殻を含む粗真土に細砂の仕上げ真土により成る真土型である。8は鋳型の一部である。溝は不整円形を呈し、環径は3cmと考えられる。肌真土は剥離しており、溝は浅く断面U字状に残り、堰は遺存していない。鋳型は砂をほとんど含まない精製粘土に肌真土を合せた真土型である。9は細身の環の鋳型である。円形溝は一周せず0.2cmほどの間隔をあけている。溝の断面形はにぶい三角形状を呈している。円形溝のそばには真線上に延びる深さ0.7cmの溝があり、これが堰であるか、あるいは見切りであるかはわからない。10は小形鋳物の鋳型で、その一端である。形状は雲形を呈し、0.2cmの深さで形づくられる板状のものである。おそらくこれも仏具の一種と考えられる。鋳型は粃殻混入の粗真土と仕上げ真土よりなる真土型である。11は鋳型の端部である。厚さ1.1cm以上のもので、細砂利用の真土型でこれに厚さ0.5cmの粗真土と考えられる粃殻混入の粘土が付いている。

明かに仏具の鋳型とわかるもののほかに、鋳物形態の不詳な鋳型がある(116図)。

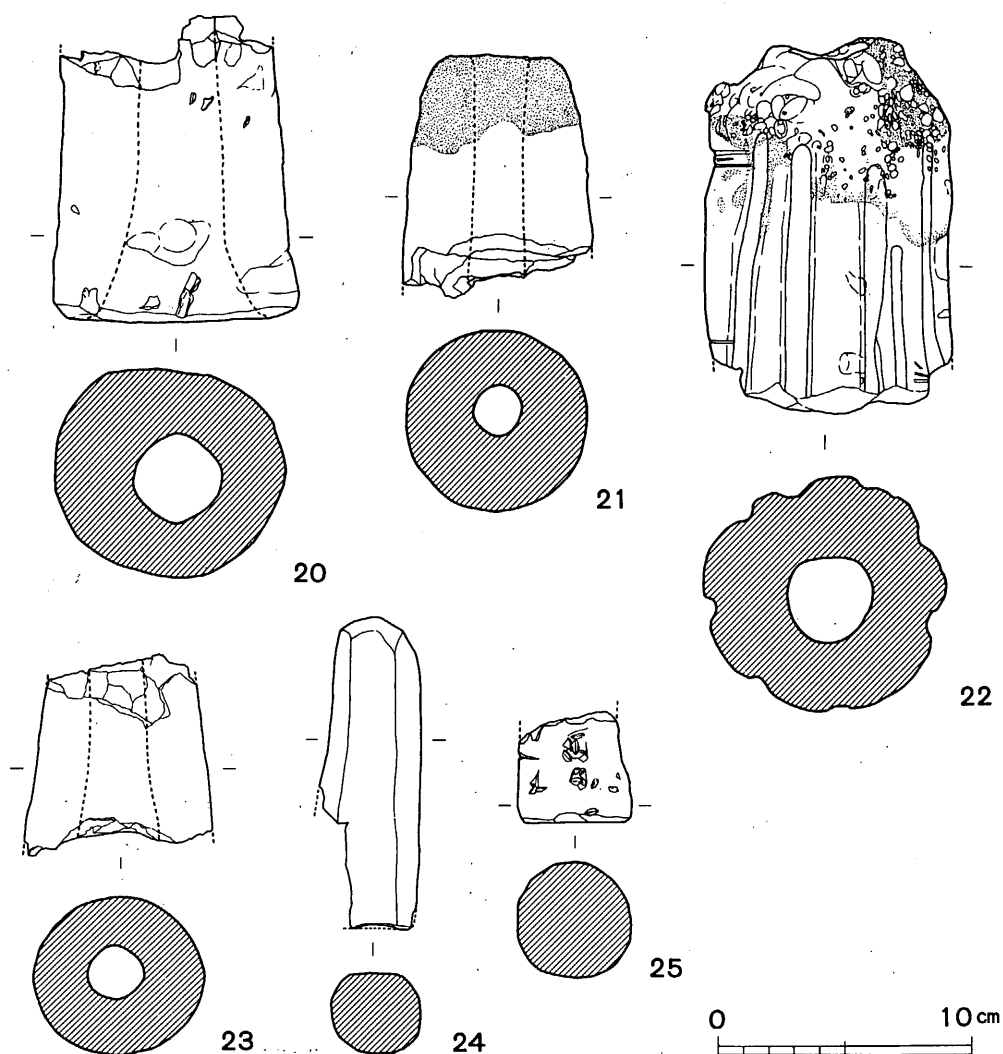
12は鋳型の一部であるが、鋳物は復原径約19.3cmの鉢状の物と考えられる。口縁部と考えられる部分の一段は巾木受け部とも考えられる。鋳型は粃殻混入の粗真土に0.5cmの厚さの仕上げ真土よりなっている。13は鋳物の形が不明な鋳型の一部である。鋳型の形からこれは中子と考えられ、仕上げ真土の剥離の状態から、内傾する平坦面から上部が鋳物の鋳肌に当る部分と考えられる。鋳型は粃殻混入の粗真土と仕上げ真土より成る。14は石英粒を多く、粃殻とスサを若干混入する粗真土で板状を呈する。仕上げ真土がないところから、これが鋳型であるかは不明であるが、加熱により乾燥されたものである。15は直径28.4cmの円形板状の鋳型の一部である。粃殻混入の粗真土、中真土および仕上げ真土よりなる鋳型で厚さ4cm前後である。鋳型は仕上げ真土成型の段階で引き型により径23cmの平坦面と、これより深さ0.2cm、幅2.5cmの縁部をつくり、乾燥後さらに縁部に仕上げ真土を0.3cmの厚さでのせている。このため鋳型として使用する部分は円形の平坦面を使用したものと考えられる。16は円形板状のもので、断面は台形状を呈する。上面径13cm、下面径14.4cmで、中央に径0.8cmの円形孔が貫通している。この孔は引き型に使用する孔と考えられる。鋳型は多量の石英粒と少量の粃殻を含む粗真土成型の段階のもので、各面は引き型によりなめらかな平坦面をつくっている。どのような鋳造品に使用するのかは不明である。17も鋳型の一部であって、粗真土部のみが遺っており、中真土と考えられるものが内面に一部遺っている程度のものである。形から外型と考えられるが、鋳造品の形態は円形の浅い皿状を呈するものと考えられる。この鋳型の粗真土も多量の石英粒と粃殻を混入する。18は断面が浅い皿状を呈する鋳物の鋳型である。細砂の仕上げ真土の内面に肌真土が、外面に粗真土が一部付着している。なお底面は鋳込みにより黒色に変化している。19は14と同種のものと考えられる。胎土は石英粒と粃殻を含むが硬く焼成されている。器の内外面と



116図 鋳物関係遺物実測図 3

もナデにより成形されている。下端は平坦となっており、下端より4.5cmの位置に径約2.5cmの円形孔が貫通している。立ち上がりはやや内傾するようであり、横断面もやや弧を描き、おそらく径40cm前後の円筒形をなすものの一部と考えられ、これには仕上げ真土等の遺存はなく、鑄型としてではなく鍛冶関係の遺品とも考えられる。

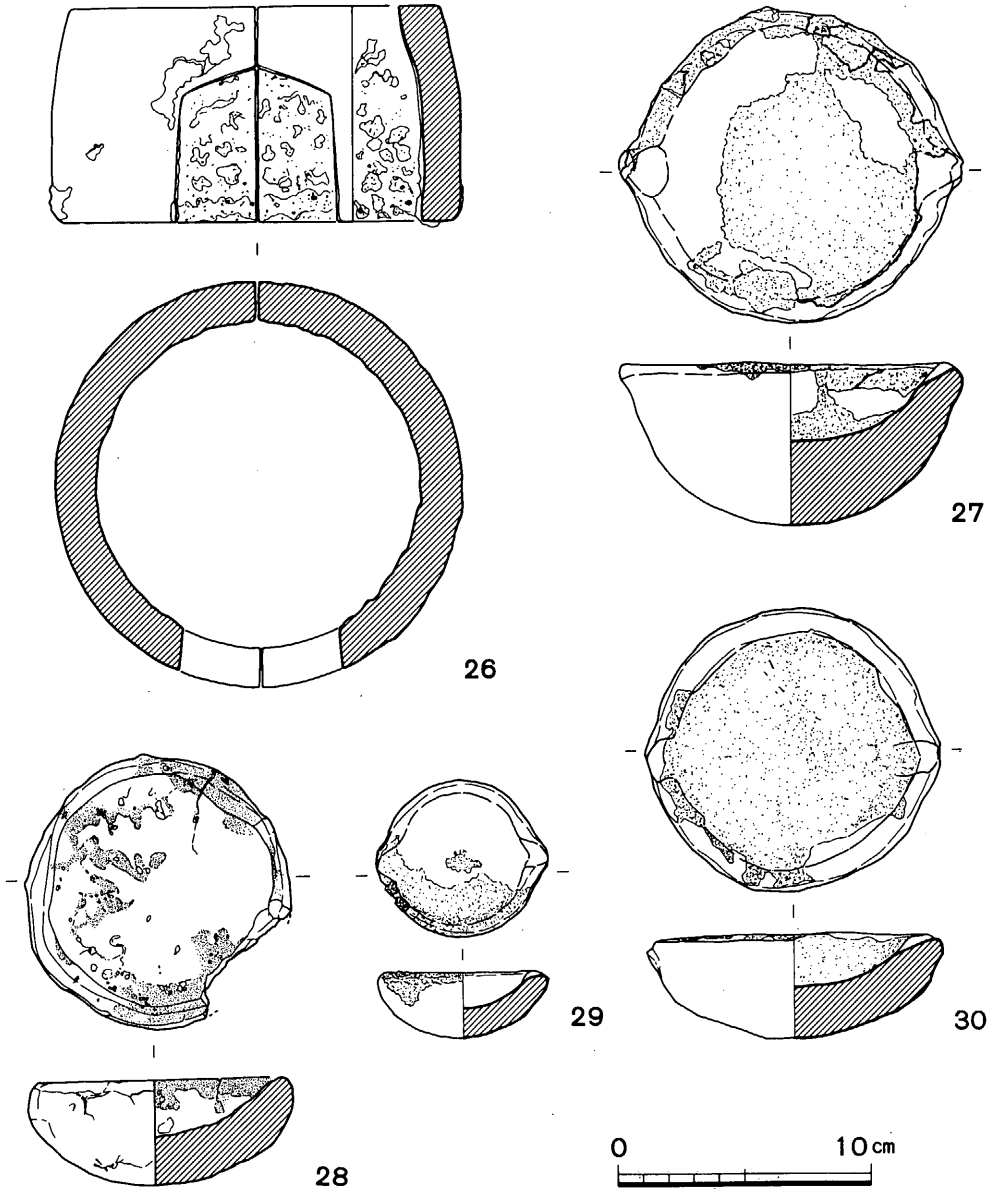
以上の鑄型のほかに銅地金の溶解、溶湯の鑄込みに使用されたと考えられる遺物が出土している（117・118図）。20は鞆羽口である。先端部を欠くもので、先端部分は二次加熱を強く受けて灰色に変色している。孔は基部側が太く、先端部方が細くなっている。胎土中には多くの砂粒子と共に若干の靱殻が混入している。21は鞆羽口の先端部である。二次加熱を受けて非常に硬くなっており、鉍滓が孔周囲に付着している。この羽口は内側に砂粒子を多く含む粘土を



117図 鑄物関係遺物実測図 4



使い、その周囲に細砂を含む精製した粘土により成っている。22は大形の羽口で基部を欠失するが、最大形のものである。これも21と同様に孔周辺とその外側では胎土は異なったものを使用している。外面器壁には縦位の沈線が幾本も入っているが、これはヘラによるものではなく、円形の棒状のものを押しあてた痕跡と考えられる。羽口先端部には多量の銹滓が付着しており、孔表面は加熱によりレンガ状に硬くなっている。23は先端部と基部を欠失する繻羽口である。

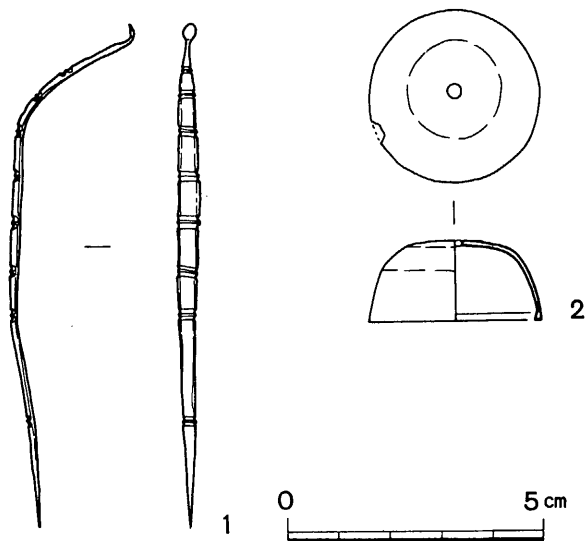


118図 鋳物関係遺物実測図 5

やはり二次加熱を受けているもので、スサを混入した粗い粘土を使用している。**24**は支脚状のもので一端を欠失する。全体に方柱状を呈すが、細い上部はやや丸味を呈す。浅黄橙色を呈し、胎土は良く精製したものを使用し、硬く焼成している。上端面は平坦ではない。**25**は円柱状のもので破損品である。胎土は鑄型使用の粗真土と同じで石英粒と粃殻を多く混練したものであって、二次加熱を受けている。端部は平坦である。

**25**は同種の破片から復原図化したものである。器はやや内傾する円筒形のを半截した形で、一方に袂りを施けている。使用するにはこの半円筒形状の器を筒形となるように合せ、図示するように袂り部が鈎鐘状を呈する孔となる。上・下端とも平坦となっている。器の内面全体と外面の下端部に銹滓が付着しており、器は内面から強い二次加熱を受けている。胎土は石英粒と粃殻を混入したものである。また器の外面には粃殻混入の粘土が器の全体を覆ったような状態で付着している。**27~30**は「とりべ」と称しているものである。**27**は径12cmほどのもので、対称となる2個所に注ぎ口がついている。器の内面および口縁部外側の一部に銅銹滓が付着し、注ぎ口を結ぶ線に直交する対称となる口縁部の2個所により多くの銹滓が付着している。器は底面が非常に厚くつくられている。**28**はやや楕円形を呈するものである。他のものと違ってこれには注ぎ口がない。内面と口縁部外側の一部に銅銹滓の付着がみられる。口縁部は丸味のあるものである。胎土は砂粒子、粃殻を多く含む粗いものである。**29**は小形のものである。径6cmで口縁部はやや平坦となっている。対称となる2個所に注ぎ口がある。これには銹滓が内面の一部に多く付着している。胎土は砂粒子、粃殻を含む。**30**は径11cmのもので、口縁部は平坦である。対称となる2個所に注ぎ口がある。内面に多くの銹滓が付着しているが、これも相対する部分により多くの銹滓が付着している。

これら鑄物関係遺物と関連するものとして、周辺から出土した銅鑄造品がある(119図)。1は曲っているが、本来は真直ぐなもので耳搔簪である。形状は現在使用されている耳搔に類似し、一方は鋭く尖っている。長さ約11cm、最大幅0.45cmで、8個所に2条の沈線を施し、竹の節を思わせる。断面はカマボコ状を呈する。赤味の強い色を呈しているところから銅の含有が多い製品である。6 A Y E B K区において発見されたもの



119図 御笠川南条坊遺跡出土銅製品

であり、伴出した土師器から13世紀中頃のものである。この頃は古代の結髪から垂髪の時代となっており、黒髪そのものが美しいのであって、髪飾りなどによって髪を飾ることを否定したような時代であって、飾櫛や簪はほとんどないと考えられる時期であって、この簪は貴重な遺物の一つといえる。2は6AYEBM区出土のものである。径3.4cm、高さ1.6cmの蓋状のもので、中央に径0.3cmの孔がある。器の厚さは0.1cmと非常に薄いものであって、どのように使用されたか不明である。このほかにも当遺跡の第3次・第6次調査において銅製品（帯鈎、飾り金具等）の出土がある。

当遺跡における鑄型類の出土は、鑄物業の存在していたことが当然考えられるが、出土した鑄型からして仏具を主体とした製品を生産していたものと考えられ、製品は郭内の各寺院や宗教活動者に供給されたものと考えられる。

鑄物業は、鑄物が仏具であることや銅滓の出土、第3次調査における銅地金と考えられる銅片の出土から銅鑄物を生産していたと考えられ、銅地金の入手方法としては、大分県宇佐市の宇佐神宮の神鏡を平安時代から鑄造したと伝えられる福岡県田川郡香春町の採銅所が入手先と考えられるが、11世紀中頃には観世音寺が仏具を造るために銅を寺家に請うており（註1）、このことから寺が集めた銅をもって鑄物師に仏具の鑄造を依頼したことも考えられる。

入手した銅地金の溶解、鑄込みについては専門家によってその工程が明らかとなっており、中国の最古の技術書として著名な「天工開物」によっても日本における鑄銭の様子を知ることができる（註2）。日本における鑄銅の技術は弥生時代後期における銅利器等の鑄型の出土から知られており、飛鳥・奈良時代の鑄佛像の存在から鑄造技術もかなり発達しており、鎌倉・室町期にあつては「天工開物」によって知られるような箱鞴と大形の溶解炉のあったことが考えられる。

ところで当遺跡の鑄型は前述のごとく小形仏具の鑄型が多く出土しており、同范鑄型もなく、このような小形仏具を鑄造する時、箱鞴と大形の炉を使用するほどの銅を溶解する必要はなく、別に必要量の銅を溶解する方法はないのかが考えられるのである。そこで鑄型以外の鑄物関係遺物を検討すると、これまで「とりべ」と称していたものに付着する銅滓の付着している位置が疑問となる。つまり先に個々の遺物の説明にも記したように対称となる口縁部の2個所に銅滓が他面より多く付着している点である。これが後述する溶解方法の論拠となるところであり、この付着位置が鞴羽口の接触部とこれに対称となる個所であると考えられる。また、118図26に示す遺物はこれまで発見された例はなく、この遺物が組合せ式のものと考えられ、内面に多量の銅滓が付着している点から銅地金の溶解になんらかの係りがないかと考えられる。つまりこの遺物と「とりべ」と称するものと鞴羽口の係りで模式図（120図）に示す組合せである。すなわち「とりべ」と称するものの上に半円筒形のものを組合せ、釣鐘形の孔に鞴羽口を挿入し、周囲をスサ混入の粘土で覆い、中に上から木炭等の熱材料と地金を交互に入れ溶解すると

いう方法である。この組合せ方法は溶解後に下端の「とりべ」に溜った溶湯を速やかに鑄込むために容易に分解できるように考えられ、上部構造を半円筒形のを組合せるといふ方法はこの点を強く意図するところであろう。

しかるに、この溶解方法で銅地金を溶解するに必要な温度（銅の溶解温度は1,300℃である）が得られるかという点に疑問が生じる。この疑問点の答えとして、半円筒形のもの（但しこの場合は挟りはなく組合せても孔のできないもの）をさらに積み上げ容量を大きくするとか、熱材

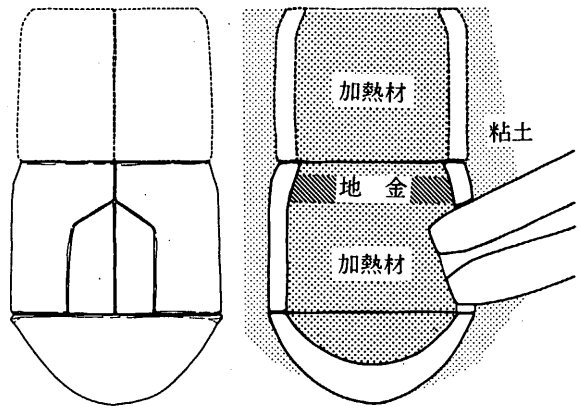
料を追加する考え方があるが、前者は可能性が十分あるけれども後者については、下から送られてくる風によって熱は熱源より上部により効力を発揮するのであって、下方に沈みつづめる銅地金の溶解は容易なものでないと考えられる。

さらに、鞆羽口は断面形が円形であるのに、半円筒形状の容器により形づくられる羽口挿入孔は円形ではなく、組合せとして基本的に疑問の生じるところがある。

ここに掲げた銅地金の溶解方法は、出土遺物の個々の観察から得られた考古学的な一つの試案であって、さらにこの方法では溶解が不可能であるとき別途その方法を考えねばならない。

この別の方法としては、中世代には箱鞆と炉があったと考えられ、これらと「とりべ」と称するものとの係りである。すなわち「とりべ」を「るつぼ」と考えるのであって、炉内に銅溶解に必要な熱カロリーを発生させ、この「るつぼ」に必要な量の銅地金を入れ、これを炉内に挿入し溶解する方法が考えられる。この方法の場合にも「とりべ」を「るつぼ」とした場合の二次加熱の受け方や銅滓の付着の状態に若干の疑問が生じる。

この二つの方法については、出土遺物の観察等から生まれたものであり、専門家の指導、批判を仰ぐ必要があり、今後の研究課題としたい。次に、これら鑄物関係遺物の出土は、鎌倉・室町期において太宰府郭内に鑄物師が存在していたことが当然考えられる。太宰府の鑄物師の存在は文献資料からある程度知られていたが、詳しい研究は今日までなされていない。文献資料には「阿蘇家文書」・「松木家文書」があり、「大宰府太宰府天満宮資料」中にも鑄物師の存在を知る一文がある（註3）。また、太宰府天満宮の仲秋の御神幸祭に奉納される「竹の曲」



120図 銅地金溶解方法想定模式図

は、氏子六座の人々によって奉納される古朴な田楽系の芸能であるが、この六座というのは、米屋座、鋳物屋座、鍛冶屋座、染物屋座、小間物屋座、アイ物（魚）屋座をさし、彼等に関する古文書や芸能に使用する伝来の締太鼓の胴の内側に「文禄元年修繕仕候者也」の墨書があることから、この時期以前に製作されたものであり、このことから併せ考えると鎌倉・室町期には鋳物師の存在したことが十分考えられる。このような関連資料により鋳物屋の座頭やその組織は解明できよう、現在「誰」が鋳物業を営んでいたかもほぼ把握しているが、これについては別稿において論じたい。

註1 竹内理三編「大宰府・太宰府天満宮史料」 太宰府天満宮発行

この資料は「大宰府と太宰府天満宮」に関する文献資料を集大成したもので、昭和40年以降発行され、現在までに巻1より巻10までがある。

註2 「天工開物」は明代末の1637（崇禎10）年に江西省の学者宋应星が著したもので、諸産業技術の実態が客観的に図示されており、往時の状況を知るに貴重な文献資料である。

註3 註1に同じで、11世紀中頃の資料として、観世音寺が寺家に銅を請うた文献が若干掲げられている。

## 15. 呪術関係遺物

御笠川南条遺跡の出土品の中で、鋳型と共に注目を引くものである。遺物の内容は符（呪符）が墨書きされた壺と木札である。これらは中世における庶民の宗教生活や習俗の一端を知ることのできる資料である。このような遺物は、広島県草戸千軒遺跡や静岡県伊場遺跡等で出土しており、大宰府郭内における出土は初例の遺物である。

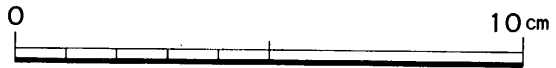
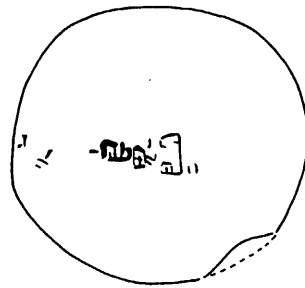
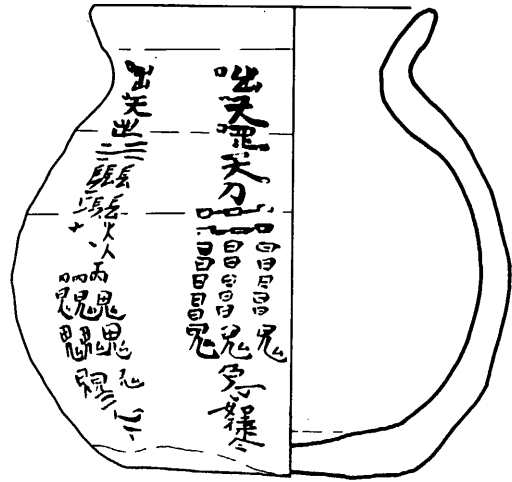
呪符の書かれた壺（121図、図版74—1・2）は、S34の第5層（青粘土）上面において、湧水により堆積した泥土の除去中に発見されたものであるが、これが何らかの遺構中に納められていたものではない。壺は土師器で高さ約9cm、胴部径10cmたらずの小形のものである。呪符は頸部から胴部に墨書きされ、ほぼ等間隔で8行あり（122図、図版75）、このうち1行は底部にまで達している。呪符は墨書きされたもので、墨が消えている行があり図のとおり判読でき、123図にその釈文を示した。呪符は「咄呖咤天刀」と「咄呖罌」の二種の文体によって始まり、文末は「急急如律令」によって統一されている。文中の呪字には「日・鬼」が多用され、このほかに「月・火・丙・長・門」などがあり、この部分が占事の内容によって変化するものと考えられる。墨書された呪符はその類例から修験道に関するもので、呪符は修験道者にとって秘事の一つであって、壺に書かれた呪符がどのような占事を意とするかは不明である。この呪符の書かれた壺は、I—3BからI—3C類に比定でき、平安時代末期に所属するものである。

同様の呪符の書かれたものに木札がある（124～126図、図版76・77）。これらの中には第3次調査（6AYEBM区）において発見された未発表のものもある。これらの木札は塔婆で

あり、頭部が山形のもの（A類）と、山形の下に二段の扶りを有するもの（B類）に分けることができ、A類には幅の広いものとそうでないものがある。これらはいずれも溝内より出土したもので、2・3・7～10はSD202溝（第2次調査）より出土し、II-2類の土師器を供伴し、1・4～6・11・12はSD302溝（第3次調査）より出土し、II-4類の土師器を供伴する。

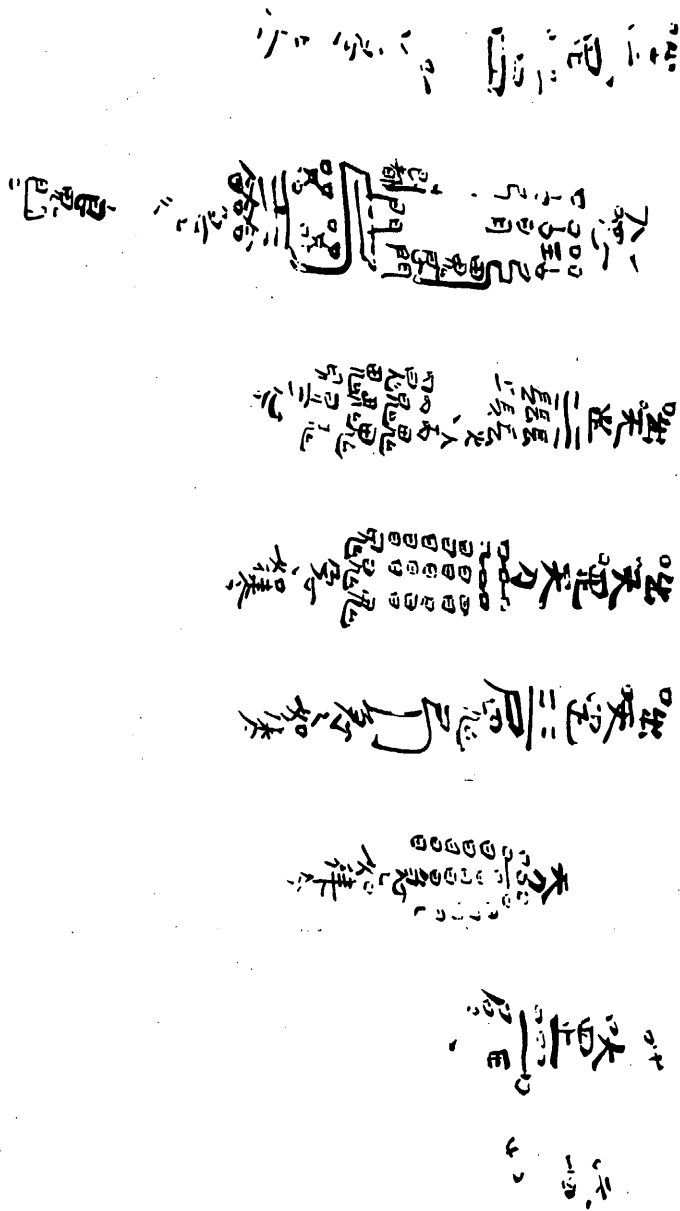
1は幅7cm、最大厚1cmのもので、上部に墨書の痕跡がみられる。墨は遺ってなく、墨書きたれた部分の板面は腐蝕せず凸線状になっており、墨書きされた呪符は読みとれる。2はA類の幅広のもので、幅6cm前後で厚さ0.5cmのものである。下部は欠失するが尖っているものである。

これも1と同じ状態で墨書の痕跡があり、これは発見当時明確に「急々」が読みとれた。



121図 呪符墨書壺実測図(2/3)

黒書の文体は呪符の一種と考えられる。3は幅3.7cm・長さ2.4cmのA類の細身のもので、表に呪符が裏に「束」と考えられる一字が墨書きされている。表は「律令」の字が発見当時確認できたが現在は消失している。この表の墨書きも呪符と考えられる。4はB類のもので、下部を欠失する。幅約4cm、厚さ0.8cm前後で、上部が厚くなっている。頭の下にはほぼ等間隔で二段の挟りがあり、段部にはそれぞれに浅い沈線が片面にのみ施されている。墨書はみられない。5は下部を欠失するが4と同じ形態である。幅4.5cm、厚さ0.5cm前のものであり、墨書痕はみられない。6は4・5と同形態のものであるが、これには沈線は施されていない。下部を欠失するもので、幅4.4cm、厚さ0.7cmを測り、中央部が厚くなっている。7はA類の完形品である。幅4cm、長さ28.6cm、厚さ0.8cmのものであり、上部に墨書がみられる。8～10は下部を欠失するがA類の小形のものである。8・9の幅は3.2cm、10の幅3.5cmで、いずれも0.5cmの厚さである。また墨書がみられ、8は表裏にみられる。

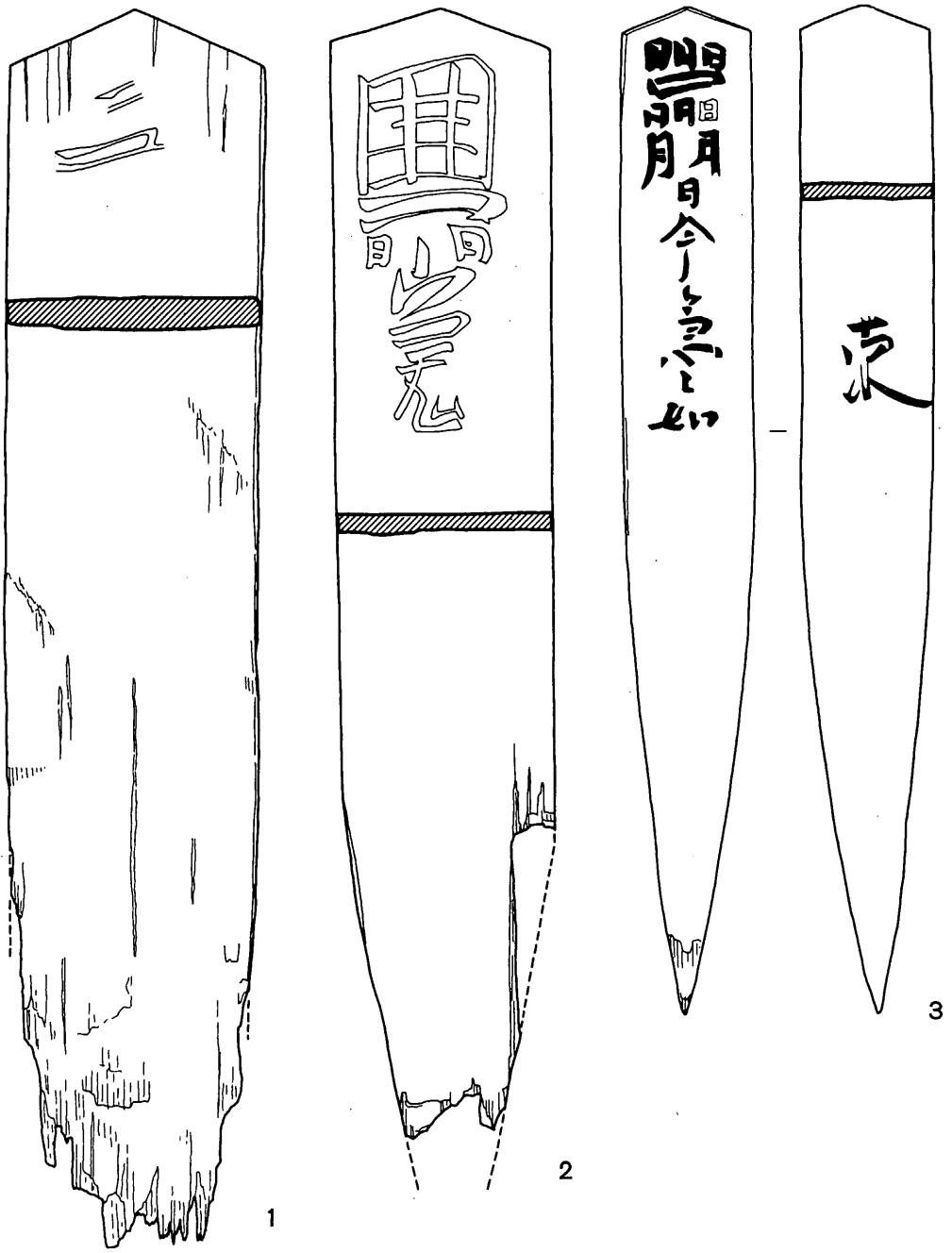


122 墨書呪符実測図(2/3)

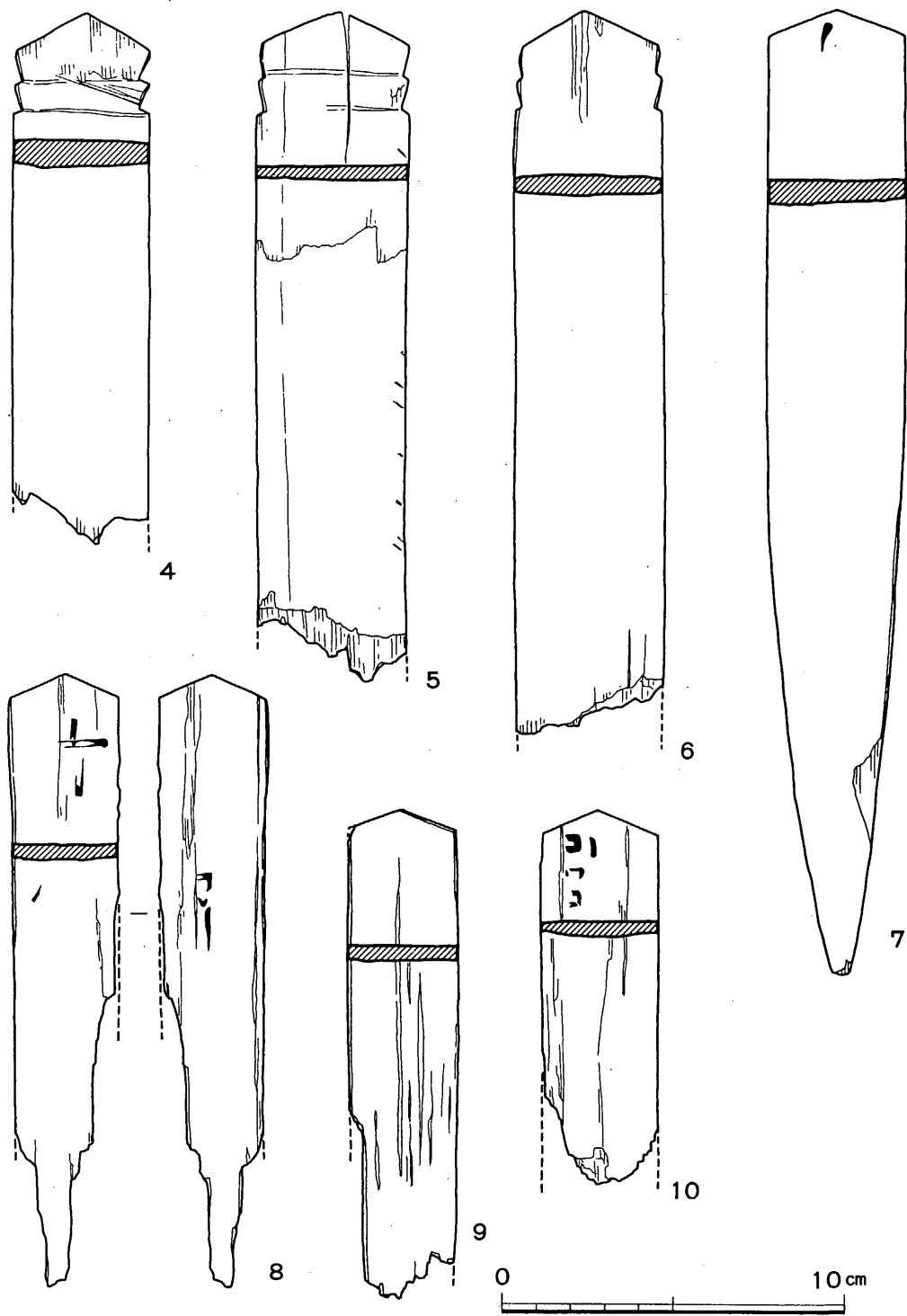
11はB類の完形品であり、段部に浅い沈線が片面にある。幅 4.1cm、長さ74cm、厚さ1cmのもので、中ほどに方形孔がある。この部分の裏面には、やや斜交する幅 3.9cmの板を合せた痕跡がみられ、これはおそらく横木に釘により打ちつけられていたものであろう。表裏に墨書があり、これは梵字（種子）と考えられるものであり、下部より逆位に書かれている。墨書は遺存状態は好ましくなく、種子の形が明瞭でないが、「ギャク・ラ・ラク・カ」と読めそうである。12は上部を欠失するが、11と同大のものもあろう。これも中央に方形孔があり、同じく裏面



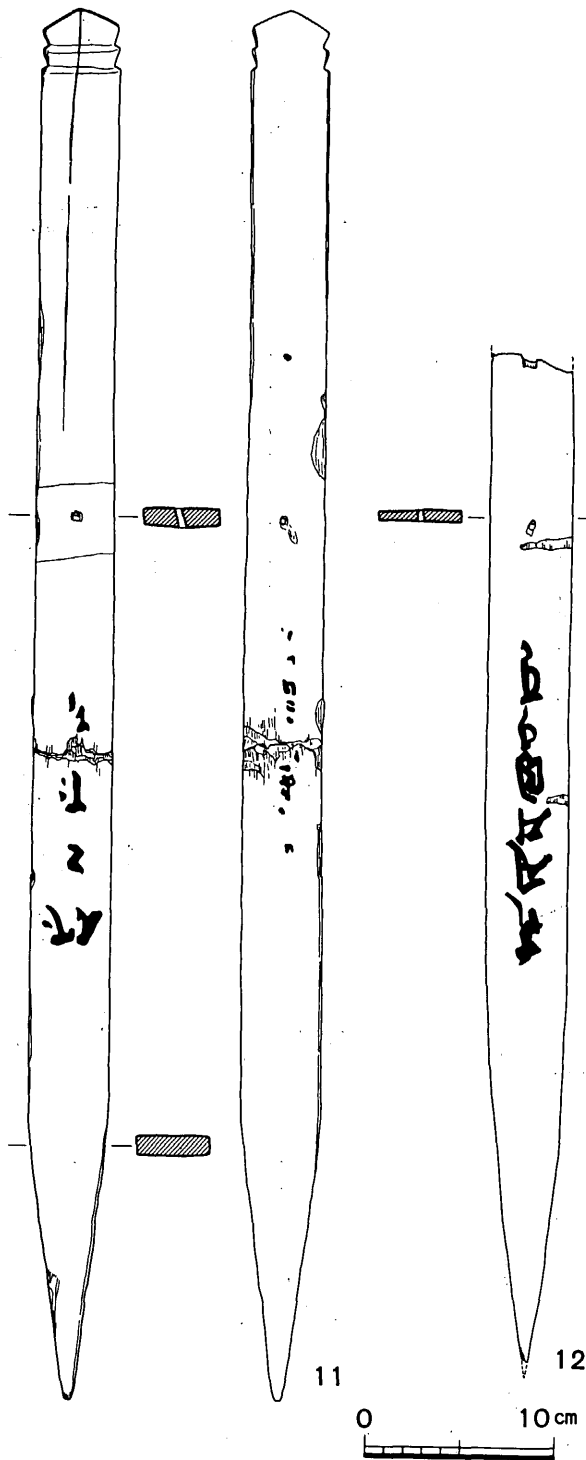




124图 塔婆实测图 1



125图 塔婆实测图 2



126図 塔婆実測図3

に交叉する板を合せた痕跡がある。11に比べやや幅ひろく4.4cmを測り、厚さ0.6cmのものである。表に種子の墨書がみられるが、これも下方より逆位に書かれている。この種子は五字の梵字で「バ・マー・マ・□・バー」と読める。このように11・12に遺る梵字は真言関係のものであり、かなりくずされた書き方をされており、このことから修験道の呪術に関係するものと考えられる。

これらの塔婆は、目の粗い軟質の板材を利用しており、遺存状態はあまり好ましくない。

これら呪術関係遺物は、11世紀中頃から13世紀後半の土師器を共伴し、平安時代末期から鎌倉時代における庶民の宗教生活・習俗を知ることができる。ここに掲げた壺・塔婆に遺る墨書が呪符である論拠は、福岡県豊前市に所在する求菩提山修験道遺跡に関する呪符が書き付けとして保存されており、この書き付けの中に類似する構成の呪字がみられる(註1)。これらの呪符は修験者の行う占事に用いるものであって、修験者の活路としていかに庶民生活の中に侵透してゆくかは、他の出家に持ち得えない秘事呪咀をもってしかなく、これにより通じた者が民衆に迎えられたであろうし、これが修験道

と民衆をつなぐ最大の要因であろう。ために占事の呪符には日常生活のあらゆる面に関することが多く、厄除・疾病・出産・男女関係・商売・勝負事等があり、同じ占事でも修験者間では呪符に若干の差異があったようである。呪符にある「急急如律令」の語句は「噫急如律令」とも書くが、この語句に関し井上薰氏著「永代大雑書万曆大成にみえる噫急如律令」（日本歴史第 321号・1975年）の論中に滝川政次郎氏著「律令の研究—付録第5」にある「急急如律令」の一篇を紹介しているが、これを要釈して紹介すると「この語句は漢代に国家の公文書にしばしば用いられたために、この語句が国家の絶体的権力をあらわす言葉のように考えられ、道教の盛んであった唐代においてこの語句に魔術的な力が与えられ、この語句が道家の説とともに日本にも伝わり、道家の流れをとる陰陽家が盛んにこの語句を呪符に用いた」とされている。しかしながら修験道者の行う加持祈祷の呪符にもこの語句が使われている点については明確でない。

大宰府郭内における修験道関係遺物の出土は大宰府の西に所在する宝満山（竈門山）修験道遺跡と密接な係りのあるものである。宝満山は古くから信仰の場として、あるいは大宰府の守護神でもあったが、中世期において彦山修験道との結合により、彦山の胎蔵界に対して金剛界の修験の行場として存在していたのであり、往時は多くの坊があったと伝えられており、本遺跡より出土した修験道関係の遺物は、宝満山を厳しい山岳修行の行場とする修験者の民衆に対してより接近しようとする活動の様子が彼等の行う加持祈祷により良く観察され、彼等にとってこれが唯一最良の行動であったのであろうことが知られる。

註1 重松敏美著「豊前求菩提山修験文化攻豊前市教育委員会発行 1969年12月

## Ⅳ．御笠川南条坊遺跡出土の 陶磁器破片の蛍光X線分析

### 一、はじめに

九州の古代、中世遺跡は考古学的調査によって次第にその実態が明らかになりつつある。ここには、いくらかの重要な特徴が認められるが、各時代を通して中国大陸及び朝鮮半島からの先進的陶磁技術の産物をほとんど連続的に受容してきている事実は疑いのないところである。さらに九州の近世陶磁産業もまた文録・慶長の役に端を発することも公知のことであろう。近年、佐賀県でも古窯跡の発掘調査が進行しつつあり、各種陶磁資料についての自然科学的方法による調査が要請されるに至りつつある。幸いにも今回福岡県の依頼をうけて太宰府町御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器破片（総数39点）に対し、蛍光X線分析法を適用する機会をえた。これまでに、当該研究グループは沖の島遺跡出土の三彩類（九州大学文学部岡崎敬教授の御依頼によった）、佐賀県伊万里市大川内所在の鍋島藩窯跡、西有田町原明古窯跡及び有田町柿右衛門古窯跡出土の陶磁器破片（各市町教育委員会の依頼による）について蛍光X線分析を実施した経験がある。しかしながら今回の試料ほど多様な試料に対する分析ははじめてであり、考古学的同定に対応してどのような自然科学的指標が有用であるかどうかについての検討をなすにはまことにえがたい好機であると考えている。

本報告のめざすところは次のようなことである。

1. 蛍光X線分析を軽元素及び重元素について行ない、これに基づき陶磁器試料の特徴となりうる指標を探索すること。
2. 上にえた指標によって文化科学的情報との関係を種極的に求めること。

このような調査は、究極的には陶磁器試料の産地同定につながることもとなろうが、同定の方法となるためには否定の方法でもなければならず、統一的な見地からの広範なデータの集積が必要であることはいうまでもない。

近年いくらかの学際的研究の方向が示唆されつつあるが、このような古文化財に対する自然科学関係者の認識は、特に我が国において、さらに特に九州において低調といわざるをえない。本報告のような小さな試みがこのような分野に対する自然科学的アプローチのきっかけにでもなればと願う次第である。

## 二、実験方法

### 1. 試料の調製

分析試料は一覧表として記され陶磁器破片の一部を割りとり、約1ヵ月脱イオン水により水洗の後、乾燥して用いる。ここに試料の一覧表(33表)は前川威洋氏(福岡県教育庁文化課)作製のものであり、この表の試料番号を本報告の試料番号として採用する。試料の蛍光X線分析は、まず釉がかぶったままの平坦表面について行ない、釉についての分析データとする。

次に、これを金剛砂により研磨し、素地の平坦平面を露出させて蛍光X線分析を行ない、素地についての分析データとする。参照試料として用いた佐賀県有田周辺の高窯跡出土試料についても同様である。

### 2. 蛍光X線分析装置

近畿大学九州工学部(福岡県飯塚市柏森)に設置されているKG-X型蛍光X線分析装置(理学電機社製)による。まず重元素に対しては分光結晶としてLiFを用い、ターゲットとしてタングステン(W)を用いた。電圧40KV、電流16mAをX線発生管にかけ、空気雰囲気中で測定を行なった。蛍光X線の検出はシンチレーション計数管により、計測フルスケール $4 \times 10^3$  cps、ゴニオメータ速度は毎分1度、時定数1秒、記録用紙送り速度毎分10mmであった。次に、軽元素に対しては分光結晶はd-酒石酸エチレンジアミン(EDDT)を用い、ターゲットとしてWを用いた。電圧40KV、電流30mAをX線発生管にかけ、真空中で測定を行なった。他の諸条件は重元素の場合と同じである。

重元素の特性X線 $2\theta$ 値は次の通りである。

ジルコニウム(Zr) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 22.6^\circ$ ,

$K\beta$ 線 $2\theta = 20.2^\circ$

ニオブ(Nb) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 21.2^\circ$

イットリウム(Y) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 23.8^\circ$

ストロンチウム(Sr) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 25.2^\circ$

ルビジウム(Rb) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 26.7^\circ$

鉛(Pb) :  $L\alpha$ 線 $2\theta = 34.0^\circ$

ガリウム(Ga) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 39.0^\circ$

亜鉛(Zn) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 41.9^\circ$

銅(Cu) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 45.1^\circ$ ,

$K\beta$ 線 $2\theta = 40.6^\circ$

ニッケル(Ni) :  $K\alpha$ 線 $2\theta = 48.8^\circ$

33表 御笠川南条坊遺跡出土陶磁器一覽表

No	出土地点	年月日	分類型式	通称名	釉	胎土	備考
1	6AYEBMR32 3層	730925	磁 1類	越州窯系碗	淡灰緑色	淡灰黄色	蛇の目高台。目あとなし
2	6AYECKR21 青色粘土	720830	磁 1類	越州窯系碗	淡濁灰緑色	黄味灰色	高台付。目あとあり
3	6AYEBM 2層	730215	磁 3類	白磁碗	淡灰黄色	白色	口唇部平坦。口縁内側に沈線あり。内側化粧土。
4	6AYEBMR35 暗茶褐色土	730918	磁 4類	白磁碗	淡灰色	黄白色	見込みに蛇の目状かきとりあり
5	6AYECLT42 3層	721104	磁 5類	白磁碗	白色	白色	玉縁。光沢あり。多孔あり。
6	6AYECLT38 3層	720926	磁 5類	白磁碗	淡灰黄色	淡灰白色	玉縁。光沢あり。多孔あり。口縁折りまげ。
7	6AYECLV40 3層	721005	磁 c類	白磁壺	淡青色	淡灰白色	莖胴部。青白磁に似る色が薄い。
8	6AYECLP36 3層	721001	磁 6類	白磁皿	淡青色	白色	口禿。底面にもうすく釉がかかる。
9	6AYECLR35 4層	721011	磁 6類	白磁碗	淡青色	白色	高台付。見込みに沈線あり。高台内底面に釉なし
10	6AYECLV36 3層	720728	磁 7A類	龍泉窯系碗	灰味緑色	灰色	気泡あり。見込みにワラビ状草花文
11	6AYECLV42 3層	721004	磁 7B類	龍泉窯系碗	深緑色	淡灰黄色	内面壁に花文。貫入あり。気泡あり。
12	6AYECLT40 3層	721004	磁 7C類	龍泉窯系碗	明緑色	淡灰色	外面に鎮蓮弁あり
13	6AYECLY39 3層	720927	磁 d類	龍泉窯系小皿	明緑色	明灰白色	見込に花文あり
14	6AYECLS42 3層	721010	磁 d類	龍泉窯系小皿	青緑色	灰白色	見込に花文あり
15	6AYECLQ36 4層	721012	磁 8類	龍泉窯系碗	緑色	灰白色	内面に蓮弁あり。口縁屈折
16	6AYECLV34 3層	720926	磁 8類	龍泉窯系碗	緑色	明灰白色	内外面無文。口縁屈折。やや大型
17	6AYECLV34 3層	721004	磁 9類	同安窯系碗	淡灰黄色	灰白色	胴部分。外面櫛歯条線。内面ヘラ。櫛歯文
18	6AYECLM41 4層	721012	磁 9類	同安窯系碗	淡灰黄色	灰白色	高台あり
19	6AYECLT36 3層	720928	磁 9類	同安窯系小皿	淡灰緑色	淡灰色	櫛歯連点文。ヘラ文あり
20	6AYECLV40 3層	721023	磁 11類	青白磁壺	淡青色	灰白色	櫛歯渦文
21	6AYECLV34 3層	720929	磁 11類	青白磁皿	淡青色	白色	口禿
22	6AYECLU42 5層	721219	磁 12類	高麗青磁	緑青色	淡灰色	浮文
23	6AYECLT38 5層	721219	磁 12類	高麗青磁	緑色	淡灰色	白黒象眼。唐草文。
24	6AYECLS41 3層	721004	磁 10類	天目碗	口縁一茶色 濃黒褐色	淡灰黄色	胎土は白味が強い。釉はあまり厚くない。口縁部
25	6AYECLR36 3層	721003	磁 10類	天目碗	黒色	淡灰色	釉。一部茶褐色。釉やや厚い。胴部
26	6AYECLS41		磁 10類	天目碗	黒色	濃灰色	薄手。口縁茶褐色。釉やや厚く外面多孔質。口縁部
27	6AYEBMP列 溝2	730207		緑釉皿	濃緑色	淡橙白色	胎土 土師質。日本製
28			陶 1類	四耳壺	緑灰色	淡灰色	四耳壺。肩部2本沈線。一部黒色の釉の流れあり。
29	6AYECKW22 3層	711106	陶 3類	褐釉陶器鉢	黒褐色	暗褐色	内面は暗茶褐色。
30	6AYEC	711202	陶 6類	壺	なし	褐色	薄手。表面暗灰色
31	6AYECK 2号井戸掘方	720117	陶 7類	黄釉鉢	黄褐色	灰黄色	内面と外面上半に釉
32	6AYECKR26 3層	711124	陶 7類	黄釉鉢	黄褐色	灰黄色	内面釉 口縁丸味をもつ
33	6AYECKS35 3層	721007	陶 7類	緑釉鉢	濃緑色	灰黄色	口縁丸味をもつ。全面緑釉。中国製
34	6AYECKR29 青色粘土	720823	陶 8類	鉢	なし	灰色	内面に2段あり。胎土に砂粒を含む。

No	出土地点	年月日	分類型式	通称名	釉	胎土	備考
35	6AYECKW19 20	711129		常滑陶器壺	暗緑色	灰色	灰釉あり。
36	6AYECKR 20 4層溝内	711123		常滑陶器壺	暗緑色	灰色	灰釉あり。
37	6AYEBM 33 3層	730307		古瀬戸瓶	灰黄色	灰白色	三本沈線あり。
38	6AYECK 8号 井戸南側周辺	711203	陶 11類	褐釉陶器鉢	暗褐色	黒褐色	胴部破片
39	6AYECKR 20	711104	陶 11類	褐釉瓶	褐色	赤褐色	口縁平坦

鉄 (Fe) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 57.6^\circ$ ,

$K\beta$  線  $2\theta = 51.8^\circ$

コバルト (Co) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 56.8^\circ$

マンガン (Mn) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 63.0^\circ$

軽元素の特性 X 線  $2\theta$  値は次の通りである。

チタン (Ti) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 36.6^\circ$

カルシウム (Ca) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 44.9^\circ$ ,

$K\beta$  線  $2\theta = 41.1^\circ$

カリウム (K) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 50.4^\circ$ ,  $K\beta$  線  $2\theta = 46.2^\circ$

ケイ素 (Si) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 108.1^\circ$

アルミニウム (Al) :  $K\alpha$  線  $2\theta = 142.8^\circ$

### 3. 分析方法

試料の蛍光 X 線分析によってえたデータから、前項末に記した各特性  $2\theta$  値に着目して、含有重及び軽元素を抜きだし、検討の結果、本報告で用いる指標として次のような蛍光 X 線強度比を採用する。

**重元素成分** : Zr ( $K\alpha$ ) 強度に対する Rb ( $K\alpha$ ) 強度 Sr ( $K\alpha$ ) 強度及び Y ( $K\alpha$ ) 強度それぞれの比、 $Rb(K\alpha) / Zr(K\alpha)$ ,  $Sr(K\alpha) / Zr(K\alpha)$ , 及び  $Y(K\alpha) / Zr(K\alpha)$  を定義する。ここに、たとえば  $Sr(K\alpha) / Zr(K\alpha)$  は Sr の  $K\alpha$  線の強度対 Zr の  $K\alpha$  線の強度という意味である。

**軽元素成分** : Sr ( $K\alpha$ ) 強度に対する K ( $K\alpha$ ) 強度 Ca ( $K\beta$ ) 強度及び Ti ( $K\alpha$ ) 強度それぞれの比、 $K(K\alpha) / Si(K\alpha)$ ,  $Ca(K\beta) / Si(K\alpha)$ , 及び  $Ti(K\alpha) / Si(K\alpha)$  を定義する。ここに、Ca についてのみ  $K\beta$  線強度を採用するのは、Ca 含量の多い試料の場合、Ca ( $K\alpha$ ) 強度がスケールアウトするためであり、つとめて同一測定条件の下で指標を算出することにし、Ca ( $K\beta$ ) 強度を採用した。



### 三、分析結果と考察

第一表に記載の各試料について、まず素地の $2\theta=19^\circ$ から $2\theta=28^\circ$ の範囲の蛍光X線スペクトルを127図に示し、釉についての同一範囲の蛍光X線スペクトルを128図に示す。それぞれの図中左上のスペクトルに示しているように $2\theta$ 値の小さい方からZr ( $K\beta$ ), Nb ( $K\alpha$ ), Zr ( $K\alpha$ ), Y ( $K\alpha$ ), Sr ( $K\alpha$ ), Rb ( $K\alpha$ ) のピークが認められる。

定性的にそれぞれのスペクトルが各試料の特徴を反映していることがうかがえる。127図の釉については一部の試料についてのみ記しているが、全体として第1図の素地に比して、Sr ( $K\alpha$ ) の強度が伸長していることがわかる。

また、試料番号27及び33の緑釉陶器片は鉛釉であり、このことを反映して釉からは顕著に、従って高次蛍光X線に至るまで釉が検出される。

素地についても鉛が $L\beta_{1,2}$ の線に至るまで検出され、このタイプの陶器が素焼を行なった後に釉を施す技法ではなく、焼成前から釉を施して焼成する技法によっていることが明らかであり、このために素地にまで深く鉛が浸透しているものと考えられる。ほぼ同様な現象は沖の島三彩陶片についてすでに経験していたところである。

これらに共通して素地は軟くもろい。また釉について、大部分の試料に鉛を $L\alpha$ 線 で検出しているが、これを各試料の特徴とすることはできない。

試料番号27及び33に共通して発色成分としては鉄及び銅の存在を指摘することができる。

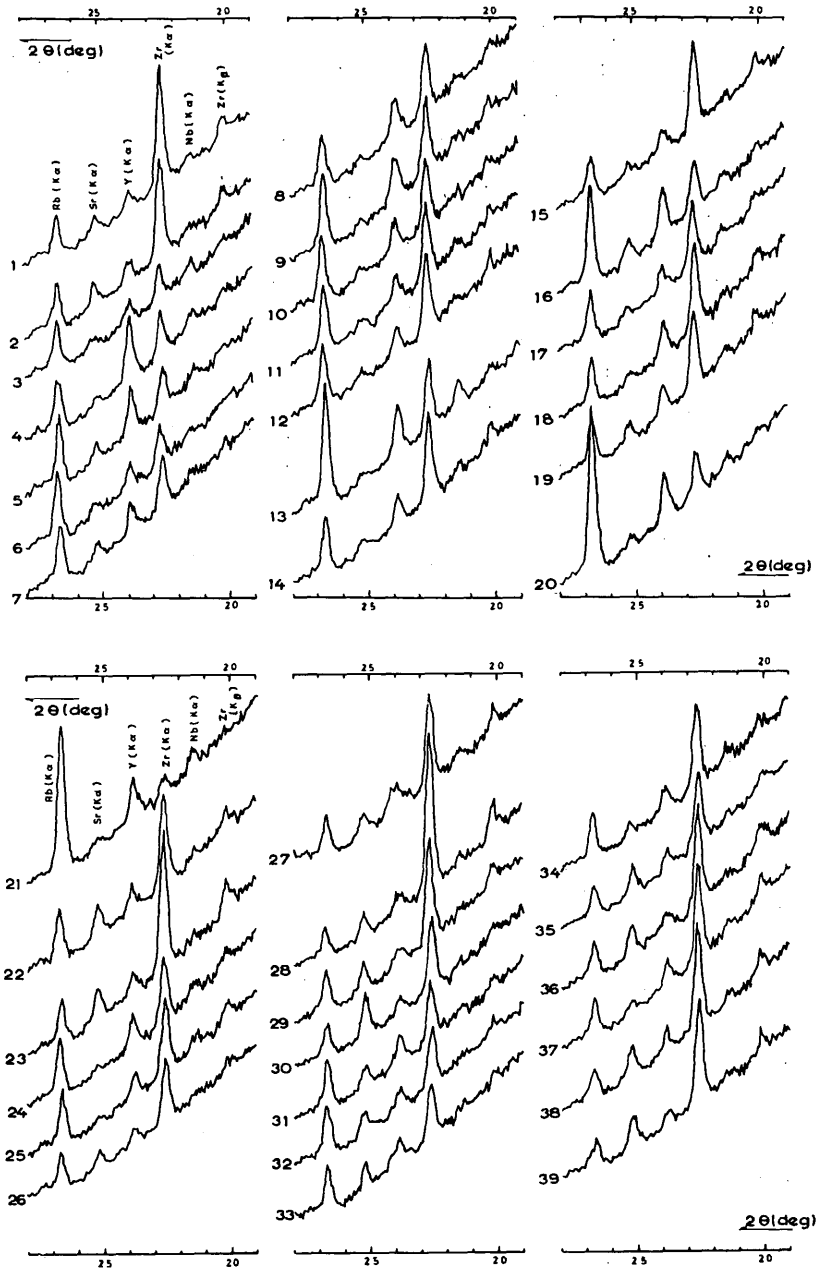
参照のために、佐賀県有田町周辺の陶磁器原料石及び古窯跡出土の陶磁器片の同じ $2\theta$ 域における蛍光X線スペクトルを129図に示す。

127図及び128図にまとめた試料の場合と同様に、ほぼ $2\theta=19^\circ$ から $2\theta=28^\circ$ の範囲をとって、陶磁器の生産地のいかにかわらず、それぞれの特徴を広く一般的にとらえる指標を提案できる可能性を指摘したいのである。

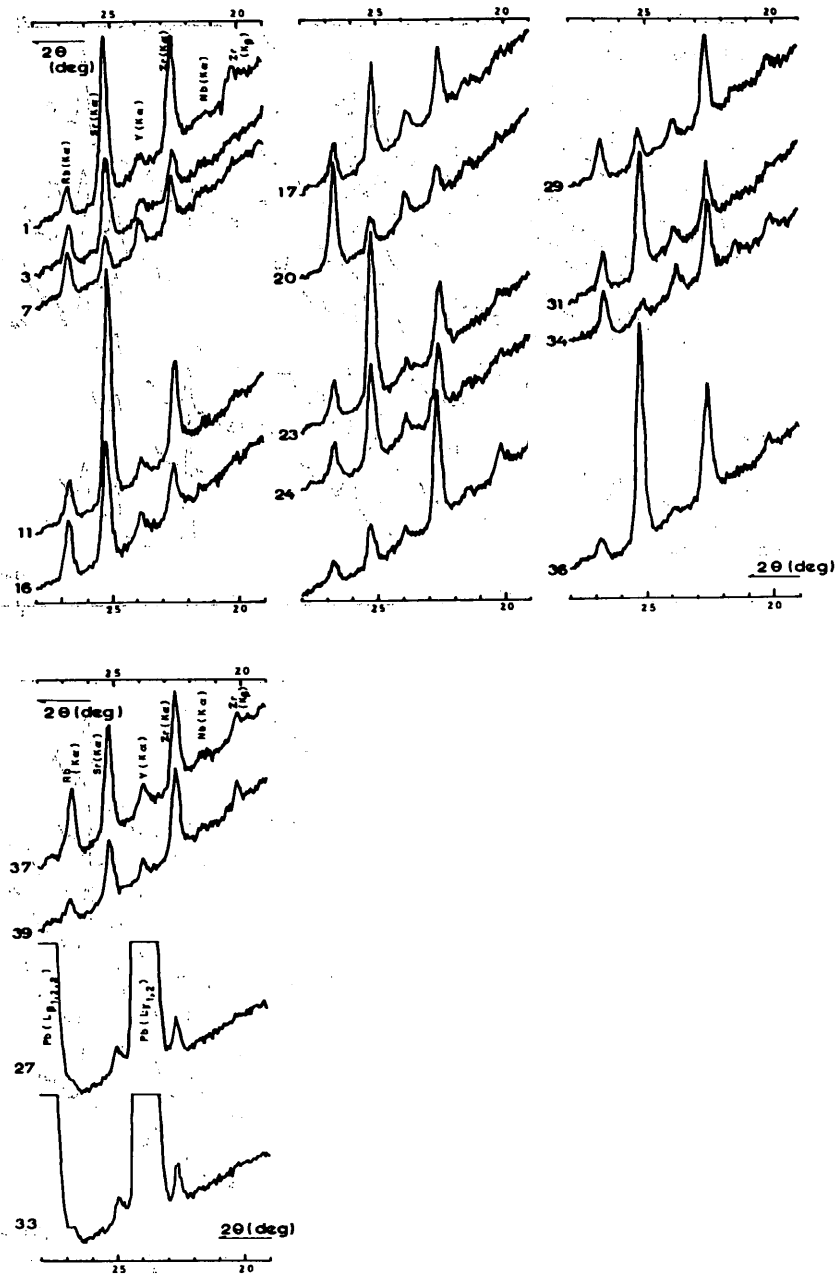
この目的のために、実験方法の3項に定義した蛍光X線強度比を採用する。第4図に全試料の素地及び釉についての蛍光X線強度比を、Zr ( $K\alpha$ ) に対するRb ( $K\alpha$ ), Sr ( $K\alpha$ ) 及びY ( $K\alpha$ ) の比でプロットし、素地については白丸を実線でつなぎ、釉については黒丸を点線でつないでまとめた。図中、試料番号27及び33の緑釉陶片は鉛の存在により釉についてはSr ( $K\alpha$ ) / Zr ( $K\alpha$ ) のみのプロットにとどまる。

また試料番号20及び21の青白磁片は共通して素地及び釉についてRb ( $K\alpha$ ) の強度が他に比して異常に高いことを認め、別のスケールで示した。

130図を第一表と順次比較検討することにより、次のような事実を指摘することができる。越州窯系の磁器片(試料番号1, 2)は、素地及び釉について、みごとに一致している。白磁片(試料番号3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)について、次の四つの組に類別することができる。



127図 陶磁器破片の素地についての重金属成分 ( $2\theta=19^\circ\sim 28^\circ$ 域) の蛍光X線スペクトル (各資料番号は分析試料一覧表の試料番号である)



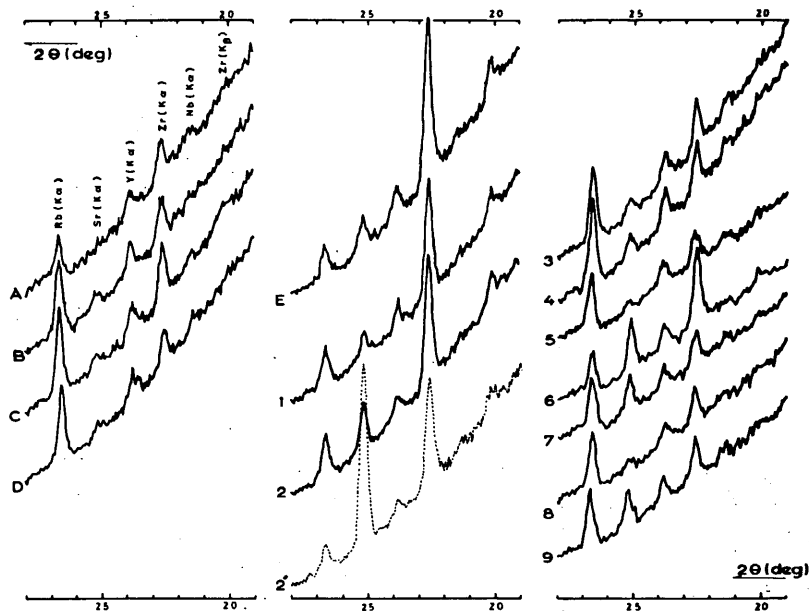
128図 陶磁器破片の釉についての重金属成分 ( $2\theta=19^\circ\sim 28^\circ$ 域)の蛍光X線スペクトル  
 (試料番号は33表に準ずる)

それぞれの組を〔 〕に入れて示すと、〔 3 〕,〔 4 〕〔 5,6 〕,〔 7,8,9 〕となる。なる。竜泉窯系の磁器片（試料番号10,11,12,13,14,15,16）については、ほぼ二つの組、〔 10,11,12,14,15 〕,〔 13,16 〕に類別されよう。

同安窯系は〔 17,18,19 〕と一組であろう。青白磁片は別に記したごとく〔 20,21 〕とまとまる。高麗青磁片については〔 22,23 〕とみごとに一致する。天目磁片は〔 24,25 〕,〔 26 〕と二組に分けてみたい。陶片の〔 28,29,30,34 〕は一組で、おそらく釉による特別な表面処理は行なっていない。

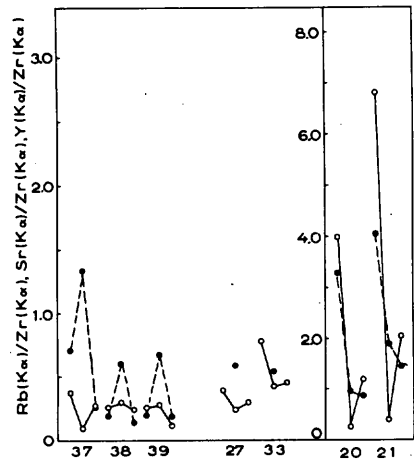
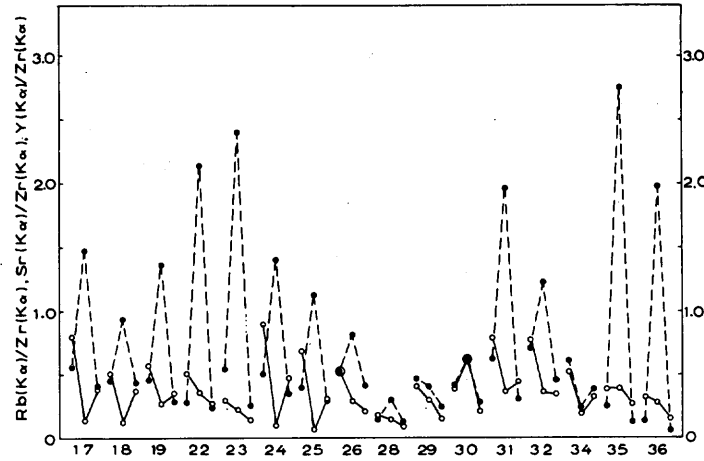
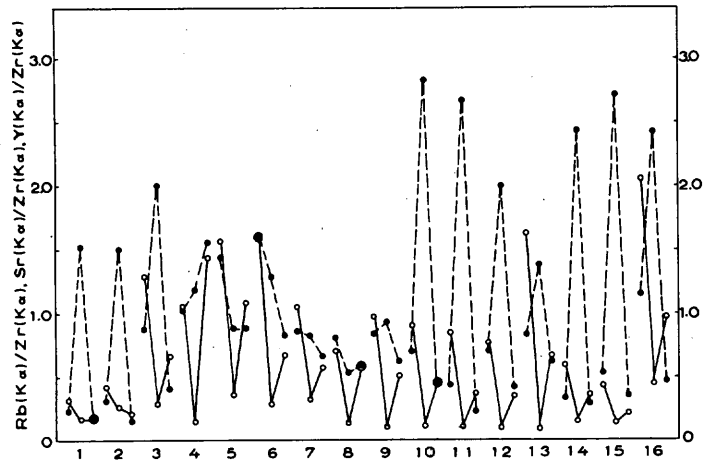
その他の陶片について、〔 31,32 〕,〔 35,36 〕,〔 37 〕,〔 38,39 〕の組分けが可能であり、ここに〔 35,36 〕の組は常滑陶片、〔 37 〕は古瀬戸陶片である。また、〔 27,33 〕は同種で素地及び釉について差異は認めがたい。

このように、陶磁片の素地及び釉についての重元素しかも $2\theta=22^\circ$ から $2\theta=27.5^\circ$ の狭い $2\theta$ 域でほとんど考古学的分類と合致して、それぞれの特徴を表現できることはおどろくべきことである。



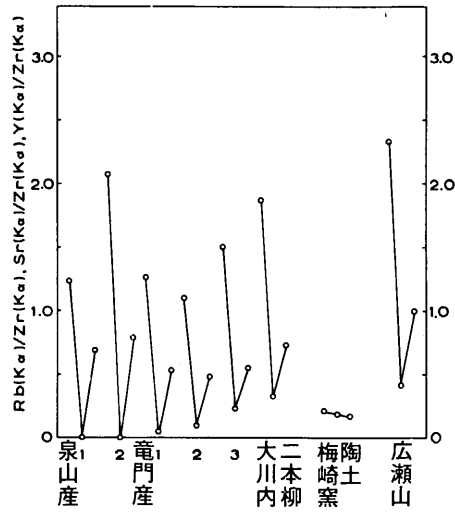
129図 佐賀県有田周辺の陶磁器原料石及び古窯跡出土の陶磁器破片についての重金属成分( $2\theta=19^\circ\sim 28^\circ$ 域)の蛍光X線スペクトル

ただし、Aは泉山石（試料番号1）、Bは伊万里大川内・二本柳産青磁原料石、Cは西有田、竜門産磁器原料石（試料番号3）、Dは西有田・広瀬山産釉薬用原料石、Eは西有田・梅崎窯の陶土。原明古窯跡出土試料：1は陶器素焼破片（試料番号2）、2は陶器素地（試料番号4）、2'は2の釉、3は染付磁器の素地（試料番号17）、4は青磁素地（試料番号18）。伊万里大川内鍋島藩窯跡出土試料：5は染付素地（試料番号2）、6は青磁素地（試料番号3）。有田柿右衛門古窯跡出土試料：7は青磁素地（試料番号3）、8は染付素地（試料番号6）、9は白磁素地（試料番号7）。ここに（ ）内に記した番号は当研究室の記録番号である。



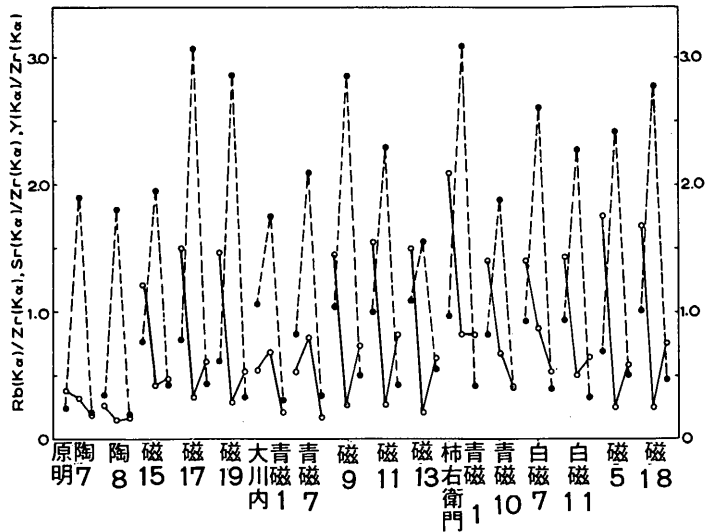
130図 陶磁器破片(太宰府町御笠川南条坊遺跡出土)の素地及び釉についての重金属成分(ルビジウム, ストロンチウム, イットリウム)のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット

ここに各試料について左から右へそれぞれRb (K $\alpha$ )/Zr (K $\alpha$ ), Sr (K $\alpha$ )/Zr (K $\alpha$ ), Y (K $\alpha$ )/Zr (K $\alpha$ )の比をプロットしている。白丸をつなぐ実線は素地についてのものであり, 黒丸をつなぐ点線は釉についてのものである。



131図 有田周辺の陶磁器原料石についての重金属成分（ルビジウム、ストロンチウム、イットリウム）のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット

ここに名試料について左から右へそれぞれRb (Kα)/Zr (Kα), Sr (Kα)/Zr (Kα), Y (Kα)/Zr (Kα)の比をプロットし、実線で結んでいる。



132図 有田周辺古窯跡出土の陶磁器破片についての重金属成分（ルビジウム、ストロンチウム、イットリウム）のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロット

ここに各試料について左から右へそれぞれRb(Kα)/Zr(Kα), Sr(Kα)/Zr (Kα), Y(Kα)/Zr(Kα)の比をプロットしている。白丸をつなぐ実線は素地についてのものであり、黒丸をつなぐ点線は釉についてのものである。

参照のために131図に佐賀県有田周辺の陶磁器原料石についての同じプロット，132図に有田周辺古窯跡出土の陶磁片についての同じプロットをまとめて示す。132図の原明陶片の素地は現に西有田町所在の梅崎窯で使用している陶土とほとんど合致する。また，原明，大川内，柿右衛門を通して呉須による染付に使用された素地はほとんど同一であるようにみえる。これを定量的に示すと，次のようになる。

原明染付素地（試料数11点）：

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 1.47 \pm 0.32$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.42 \pm 0.11$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.58 \pm 0.13$$

同上釉：

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.70 \pm 0.17$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 2.70 \pm 0.35$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.36 \pm 0.08$$

大川内鍋島藩窯染付素地（試料数16点）

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 1.68 \pm 0.31$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.23 \pm 0.11$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.70 \pm 0.14$$

同上釉：

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 1.03 \pm 0.18$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 2.25 \pm 0.43$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.47 \pm 0.09$$

柿右衛門古窯染付素地（試料数12点）

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 1.59 \pm 0.23$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.34 \pm 0.20$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.65 \pm 0.10$$

同上釉：

$$\text{Rb}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.84 \pm 0.17$$

$$\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 2.80 \pm 0.58$$

$$\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha) = 0.34 \pm 0.08$$

以上により，染付磁器に関する限り素地はほとんど同一に規格化されていること，釉については柿右衛門古窯と原明古窯とがほとんど一致するが，大川内鍋島藩窯は，これら二者に比して， $\text{Sr}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha)$ が比較的小さく，かつ $\text{Y}(K\alpha) / \text{Zr}(K\alpha)$ がやや大きいという特徴を認める。

このように，ある系統についての分析点数が集積すれば統計的な処理が可能となり，定量的

な科学的判別が可能となるであろう。

132図について、大川内鍋島青磁と柿右衛門青磁とは大いに異なり、柿右衛門青磁は柿右衛門白磁（いわゆるにごし手）とほとんど差異がない。また、ここで二、三の注意を述べておかねばならない。まず上に染付素地の均一性についてふれたが、131図の原料石についてのデータからこれらの素地がある特定の原料石のみでつくられているのではなく、むしろ積極的に諸原料石を混ぜ合せて均一性を保ったことを考慮に入れておくべきであろう。

次に原明陶片の素地はほとんど確実に現在西有田町梅崎窯で使用されている陶土と同質の陶土で焼成されているが、このことは129図にもどり問題の2θ域のスペクトルを相互に比較すること、すなわち129図Eと1及び2との比較検討により一層確かなこととなる。

しかしながら、一見して130図1及び2と第132図原明陶片7及び8と近似するからといって、これらが同質と速断することは許されない。確かに127図1及び2と129図E、1及び2とは近似するが、陶土で磁器は焼成できないのであり、ここで着目している蛍光X線スペクトルないしはそれからの強度比プロットは原料土にとっては微量不純物に焦点をしばっているのであり、主成分に関する情報は取り上げていないのである。このことからいえるように、この報告で提唱しようとしている強度比プロットが合致するから直ちに同質と速断することは許されず、陶磁器に関する文化科学的判別を経たのちに自然科学的判別が意味をもつ側面がある点を注意したいのである。

このことは微量不純物によって陶器となったり磁器となったりしているのではないという極めて簡明な事実に基づくのである。その他のデータについても全く同様であり、この点にまで論及するためには化学的に全組成分析を行なうこと以外に道はないであろう。

上述のような事情もあり、ここで軽元素についての蛍光X線分析データの検討に移ることにしたい。種々の検討の結果、第二節第3項に述べた指標を採用する。これは陶磁器類のガラス分の主体、ケイ素Si中にどの程度のアルカリ分K及びCaとともに不純物成分Tiが共存するかということに関する指標と考えられる。

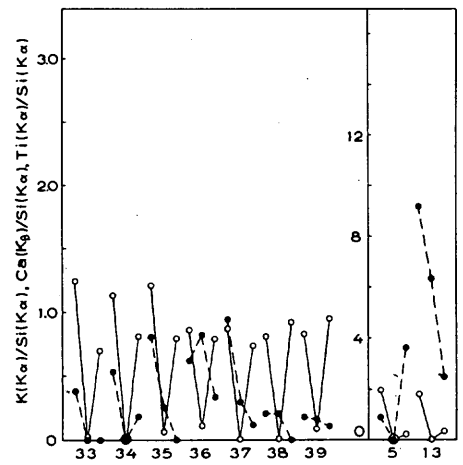
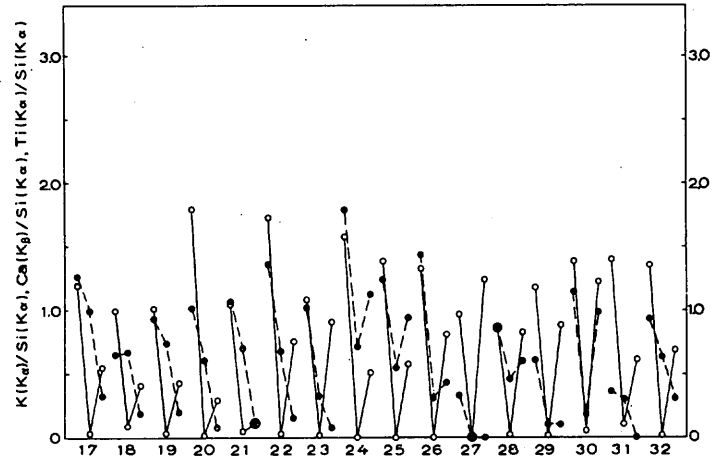
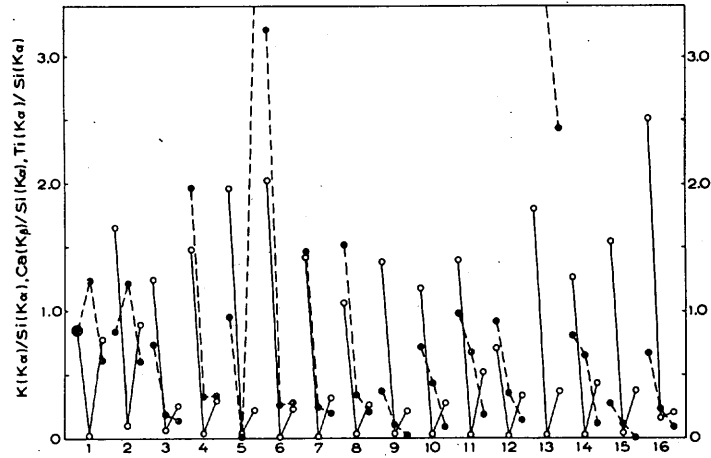
33表の試料番号と同順に同番号を用い、それぞれの試料について素地及び釉のSi(Kα)強度に対するK(Kα)、Ca(Kβ)及びTi(Kα)それぞれの強度比をこの順にプロットし、素地については白丸を実線でつなぎ、釉については黒丸を点線でつないで表現する。御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器片のデータを133図として示す。

素地及び釉についての組分けを{ }に入れて示すと、次のようになる。

ここでも越州窯系の磁器片はほとんど同一パターンを示して一致し、{1, 2}である。白磁片については、やや乱れるが、{3, 4, 7, 8, 9}は類似し、{5, 6}は釉は別にして素地は合致する。ここで{4, 7, 8}の類似性は高く、{3, 9}の類似性もよい。

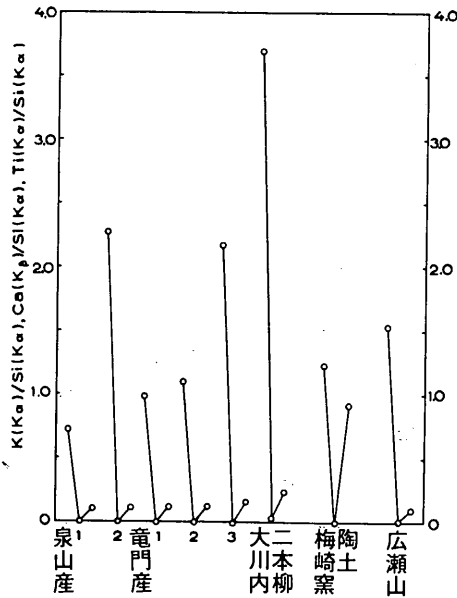
次に竜泉窯系のものについてであるが、試料番号13は強度比がいずれも高く、図中最後尾に縦軸をかえて試料番号5とともに示しているがこの13を除けば、{10, 11, 12, 14, 15, 16}は一組





133図 陶磁器破片(太宰府町御笠川南条坊遺跡出土)の素地及び釉についての軽金属成分(カリウム,カルシウム,チタン)のセイ素に対する蛍光X線強度比プロット

ここに各試料について左から右へそれぞれK(Kα)/Si(Kα), Ca(Kβ)/Si(Kα), Ti(Kα)/Si(Kα)の比をプロットしている。白丸をつなぐ実線は素村についてのものであり,黒丸をつなぐ点線は釉についてのものである。



134図 有田周辺の陶磁器原料石についての軽金属成分（カリウム、カルシウム、チタン）のケイ素に対する蛍光X線強度比プロット

ここに各試料について左から右へそれぞれ  
 $K(K\alpha)/Si(K\alpha)$   
 $Ca(K\beta)/Si(K\alpha)$   
 $Ti(K\alpha)/Si(K\alpha)$   
 の比をプロットしている。各試料は、131図の試料にそれぞれ対応する。

とみてよいであろう。しかしながら、これらのうち {9,15} はよく近似する。従って、次の三組に分けて考えるのがよいかもしれない。

まず {9,15}・{10,11,12,14,16}、次に {13} は特殊とする。

同安窯系は一組にまとめ、{17,18,19} である。

青白磁 {20,21} は一組となるが、前の同安窯系とよく類似している。高麗青磁 {22,23} は一組となる。

天目磁器はよく類似して、{24,25,26} と一組となる。

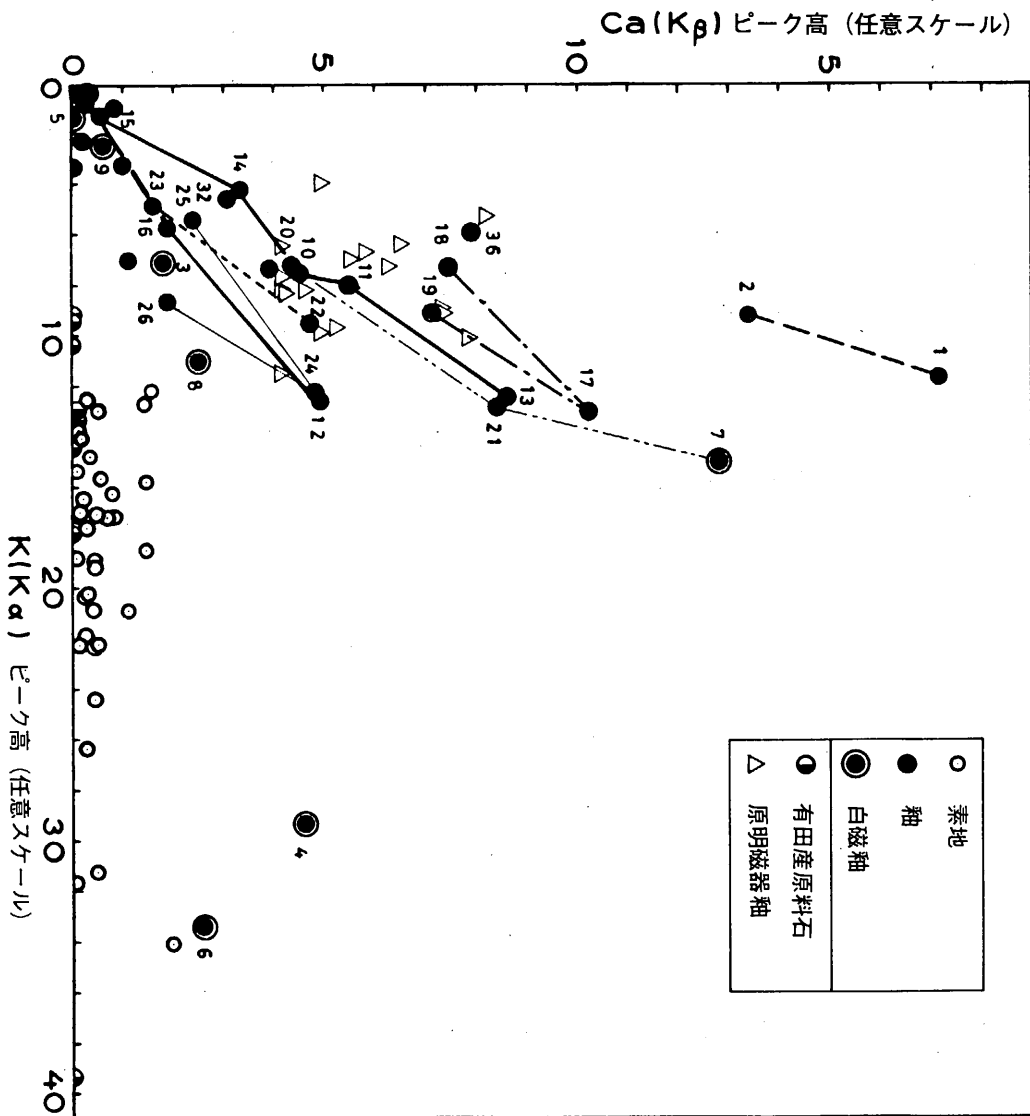
緑釉陶器器は類似して {27,33} と一組をつくる。

先に重元素による分析から {28,29,30,34} は無釉の疑いをかけたが、これらのうち軽元素の情報を含めて {30} のみは確実に釉を用いていないであろうが、他の {28,29,34} の組は、素地と同質の土に何らかの手を加えた後、表面に塗り焼成を行なったことを考えさせる。その加えた手だてとしては、素地の土を水に懸濁させて比較的きめの細かい泥をとり、表面に塗布してあるのではないかと推測される。これにより重元素類はほとんど変わらず、チタン化合物は重質分として沈降し、カリウム分は一部溶出したものと推論したい。

しかしながら、高度の水簸は考えられず、また釉としても認め難い。残りの陶器類のうち {38,39} の類似性は高いが、常滑陶器の一点と古瀬戸陶器の一点とが類似し、試料番号32の黄釉のものがこれらと類似し、{31,32,35,37} の組をなす。試料番号36の常滑陶器片のみ特殊となる。

ここに試料番号35,36のみかけではほとんど差異がなく、常滑陶器と比定することに異議を出す意図は全くない。むしろ常滑品の組成に、はげしいばらつきがあるのかもしれないのである。

いま、われわれの手もとに軽元素成分に関する有田陶磁器についての蛍光X線分析データはなく、参照資料を提示できないのは残念であるが、134図に有田周辺の陶磁器原料石について



135図 陶磁器破片（太宰府町御笠川南条坊遺跡出土）の素地及び釉についてのカルシウム（ $K\beta$ 線）蛍光X線強度とカリウム（ $K\alpha$ 線）蛍光X線強度との相関

ここに参照のために西有田町原明古窯跡出土の磁器釉についての対応するプロットとともに、有田周辺の陶磁器原料石についての対応するプロットをも示した。

図中、実測点間を直線でつないだものは、越州窯系、竜泉窯系、同安窯系、高麗青磁の系統を示すためである。また、青白磁もつないであり、白磁の一点のみがこの系統に属する可能性があることを示唆する。

のデータのみを示しておきたい。

ここで問題とした陶磁器の釉に用いたアルカリ分に関する情報を引出すために、各試料のCa (K $\beta$ )線のピーク高を同じ試料のK (K $\alpha$ )線のピーク高に対してプロットし、135図にまとめる。

カルシウムは石灰釉を疑い、カリウムは木灰釉を疑っているのである。135図から有田周辺の原料石にはカリウム分は含まれるが、カルシウム分は少ない。またこの報告で対象とした39点全試料について素地はカルシウム分が少なくおそらく素地に対する石灰の添加は、現在の技術と同様に行っていない。

これに対し、原明染付磁片をも含めて釉はカルシウム分を含み、石灰の添加を行なっている。図中、同系統のものに認められる正の相関関係を直線の種類を変えて示した。この相関は、同系統、おそらく同系統の窯場では同じ種類の石灰を用いた可能性を示唆している。これらのうち、白磁片の釉はただ一点の試料7を除き、カルシウム含量は低位に留まり試料番号4及び6の二点はカリウム分が多く含まれ、おそらく木灰を添加していることが考えられる。ただ一点の試料7は20, 21の青白磁の相関にのり、事実7のみについて33表の作製者も、「青白磁に似るが色がうすい」としており、上述のことによるのであろう。

34表 蛍光X線分析による組分けと考古学的組分けとの対比表

	重元素成分による組分け	軽元素成分による組分け	文化科学的組分け	産地	
磁器	[1, 2]	{1, 2}	越州窯系	中国大陸	
	[3], [4], [5, 6] [7, 8, 9]	{5, 6}, {3, 9} {4, 7, 8}	白磁		
	[10, 11, 12, 14, 15] [13, 16]	{10, 11, 12, 14, 16} {13}, {15}	竜泉窯系		
	[17, 18, 19]	{17, 18, 19}	同安窯系		
	[20, 21]	{20, 21}	青白磁		
	[22, 23]	{22, 23}	高麗青磁		朝鮮
	[24, 25], [26]	{24, 25, 26}	天目		中国大陸
[28, 29, 30, 34]	{28, 29, 34}, {30}	無釉, 29のみ褐釉			
[27, 33]	{27, 33}	緑釉			
[38, 39]	{38, 39}	褐釉			
[31, 32]	{31, 32, 35, 37} {36}	黄釉 (31, 32)			
[35, 36]		常滑	日本		
[37]		古瀬戸			

ここに組分け記号は本文中と同一である。

## 四、総括

先に当研究グループは、西有田町原明古窯跡出土の陶器片に対して、この報告同様の蛍光X線分析を行ない、「佐賀県西有田町周辺の陶磁器原料石及び原明古窯跡出土陶器片の理化学的分析」と題して、昭和49年度末（1975年）西有田町関係当局へ報告したのであるが、今日まで発表されていない。

従って本報告が当研究グループとしては最初の発表である。ここにおける整理の仕方は前と何ら変わっていません、一貫した仕方に従っている。

1). 陶磁器片の素地及び釉について、一定条件の下で重元素及び軽元素類に着目した蛍光X線分析を実施する。

2). 蛍光X線分析により検出された元素類の定量化という極めて困難な方向をとるよりも、本報告で提唱した仕方による指標を算出し、これを考古学的あるいは窯業技術学的判別と対比しつつ検討する方向をとる方が望ましい。

考古学的判別基準に含まれる見方には高次の情報が含まれ、自然科学的分析的手法を補う因子があることを、特に自然科学側に立つものは考慮に入れておくことが大切であろう。

3). 蛍光X線分析の結果を整理分類する指標として、重元素成分に着目した $Rb(K\alpha)/Zr(K\alpha)$ ,  $Sr(K\alpha)/Zr(K\alpha)$ ,  $Y(K\alpha)/Zr(K\alpha)$  のそれぞれの強度比を素地及び釉について採用すること、軽元素成分に着目した $K(K\alpha)/Si(K\alpha)$ ,  $Ca(K\beta)/Si(K\alpha)$ ,  $Ti(K\alpha)/Si(K\alpha)$  のそれぞれの強度比を素地及び釉について採用することが、総合的な蛍光X線分析による比較検討のための基準として有効であろう。

実際、本報告の39点の試料について比較検討を行なうと34表のようにまとまる。

そこにおいて、重元素成分による組分けと軽元素成分による組分けとが合致した場合には、ほとんど確実に窯場すなわち生産場所が同一であり、その製品に至るまでの技法が一致しているものとみなさざるをえないであろう。

一般に、軽元素成分による組分けには不確定要素が残り、特に陶器については組分けが困難な場合がある。全体として、重元素成分による組分けと考古学的観察による組分けとはよく合致している。褐釉陶器片29のみは素地表面が褐釉状を呈したものとみなされる。

断定はさげなければならないが、重元素成分による組分けは、生産場所などのようなかなり本質的な因子による差異を意味している可能性がある。

4). 上述のごとく、古文化財調査担当者らの非常な努力と相呼応して、自然科学側の責任として近代的機器分析の手法を適用することにより従来より一層の豊かな総合的情報が引出せることは疑いえないところであろう。ここは、学際的研究体制のみに留まらず、正しく国際的取

組みさえ要請されているのであり、たとえば産地同定を目指して中国との情報交流さえ望ましいことというべきであろう。

5)．最後に蛍光X線分析の試料に関する注意を付言しておきたい。まず、この方法は定量的検討を犠牲にするならば非破壊分析法である。しかしながら、最も望ましい試料は、 $2 \times 2$ cmの平坦な試料で、表面研磨が許されることである。

実際にX線照射を受ける面積は直径1.5cm程度の円内である。また、X線の試料による吸収を考慮に入れて分析の及ぶ表面からの層の深さは最大0.1mm程度であり、本報告で釉とした場合に素地の影響はほとんど認められないのである。

本報告を結ぶに際して、豊富な情報を有する貴重な陶磁器片39点と取組む機会を与えられた福岡県教育庁文化課に深く感謝いたしたい。

## V. おわりに

本遺跡は、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所が、国道3号線のバイパス建設工事の計画するに及び、同バイパスが大宰府郭内を西から東へ横断するルートが選定され、分布調査の結果、本遺跡が第6地点・御笠川南条坊遺跡として要発掘調査地としてあげられ、昭和46年度から昭和51年度までに6次にわたる事前の発掘調査を実施した。

本遺跡の調査は、福岡県・九州歴史資料館がこれまで10年間にわたって大宰府政庁等史跡指定および環境整備に関する発掘調査を行ってきたが、大宰府郭内における発掘調査はあまりなされておらずかつ小規模のものであって、本遺跡の発掘調査は、郭内条坊に関する最大規模のものであった。

本遺跡は面積的には広大なものであり、調査地区はバイパス路線内にとどまったが、調査の成果は郭内における庶民生活を知るにたる資料が得られ、多種多量の遺物が出土し、これらが与える問題も多い。

これまでに第3次から第6次までの調査成果の報告を順次発行してきたが、ここに第1次・第2次の調査成果を報告をもって本遺跡の最終報告とし、本遺跡の発掘調査成果と問題点について報告する計画であったが、紙面の都合上次の二説をこの章で掲げ、調査成果と問題点等については別途報告したい。

### 一、第1・2次調査出土の井戸について

本稿では第1・2次調査で検出されたものについてまとめてみた。1・2次の調査で計29基の井戸が検出され、井戸側の組み合わせにより大別してみると次のようになる。

曲物	2
桶	16
桶+曲物	1
方形枠縦板組	1
方形枠縦板組+桶	1
方形枠縦板組+桶+曲物	1
井戸側抜き跡	7

それによると桶だけを1段あるいは2段に据えて井戸側としたものが全体の55%、井戸側が抜き取られた抜き跡を除けば実に72%を占め、1・2次調査区における井戸は桶側によるもの

が主体をなしていたことがわかる。分布については、1次調査のCK区では発掘区の西半に、2次調査のCL区では北半に集中して設置されている。CK区はほとんどが御笠川の氾濫原にかかる場所で、他の遺構も西半に片寄っている。東半は杭を打った溝などが数本みられ、他の遺構も少なく、生活面としては空白の地区であったのかもしれない。CL区は南半が粘質土の地山にかかるため、必然的に湧水層の浅い北半に集中したと思われるが、1・2次の調査を通じてみると井戸の設置された場所は住居とそれから北を流れる御笠川との中間地点に多く集中しているといえる。ただ、すべての井戸が同時期に設置されたものではないので、さらに個別的な時期の色分けを行ない、それに住居との組み合わせがわかれば井戸と住居とのかわりあいが見えるであろう。

井戸の構造による変遷については、第6次調査の報告に際し大まかな流れについて述べておいた。すなわち方形枠組一段の井戸側で四隅に支柱をもたず、横棧だけで厚い側板を受けている型式の井戸が最も古く、次に井戸側として曲物を使ったものがつづき、桶側の使用は曲物より後出のものであり、同じ方形枠組の井戸でも四隅に支柱を有し、長手の薄板を側板とした型式の井戸は桶のあとに出現するもの、とした。今回の調査では、最も古い型式の方形枠組井戸は検出されていない。曲物単独の井戸側はSE109、206井戸で、SE109井戸からの出土遺物はないがSE206井戸振り方向からはヘラ切り底土師器（Ⅰ類）が出土していて、今まで曲物単独の時期は不明であったのが12世紀以前に遡ることが確実となった。もっとも、曲物は奈良時代の井戸にも使われていることが各地の調査で明らかにされており、第6次の報告で最も古い型式とした方形枠組井戸より先行する可能性が多分にあるが、当遺跡では未だ曲物初現の確実な年代はおさえられていない。ちなみに、方形枠組井戸は9世紀前半～中頃の時期（土師器分類Ⅰ－ⅠB類）に比定される。桶側の使用は現在のところ12世紀中頃～後半（Ⅱ－Ⅰ類）の時期にまで遡り、下限は13世紀後半～14世紀初頭（Ⅱ－Ⅳ類）の頃までみられる。新しい型式の方形枠組縦板組の井戸は、前回までの調査でSE613井戸にて12世紀末～13世紀前半（Ⅱ－Ⅱ類）の時期までおさえられていたが、今回の調査ではSE208井戸にみられ、掘り方内より破片ではあるがⅡ－Ⅰ～Ⅲ類の土師器が出土しており、SE613井戸とほぼ同時期頃のものと思われる。

中世の絵巻物に庶民の日常生活風景を描いたものが数多くあるが、鎌倉時代後期の作といわれる『直幹申文』に描かれている桶が絵巻物における初見とされており、つづいて室町時代初期の作になる『福富草紙』には竹タガのかかった桶がみられ、おそらく鎌倉時代には桶の使用が一般化してきたものと思われるが、当遺跡では平安時代の後期頃に桶の出現をみる。

以上大まかに曲物、方形枠組、桶といった井戸側の変遷について概観したが、各井戸側同士の組み合わせや井戸と住居との関係、それに井戸出土の櫛の例にみられるように井戸と民俗、及び祭祀など井戸をめぐる多くの問題点が今後に残されている。

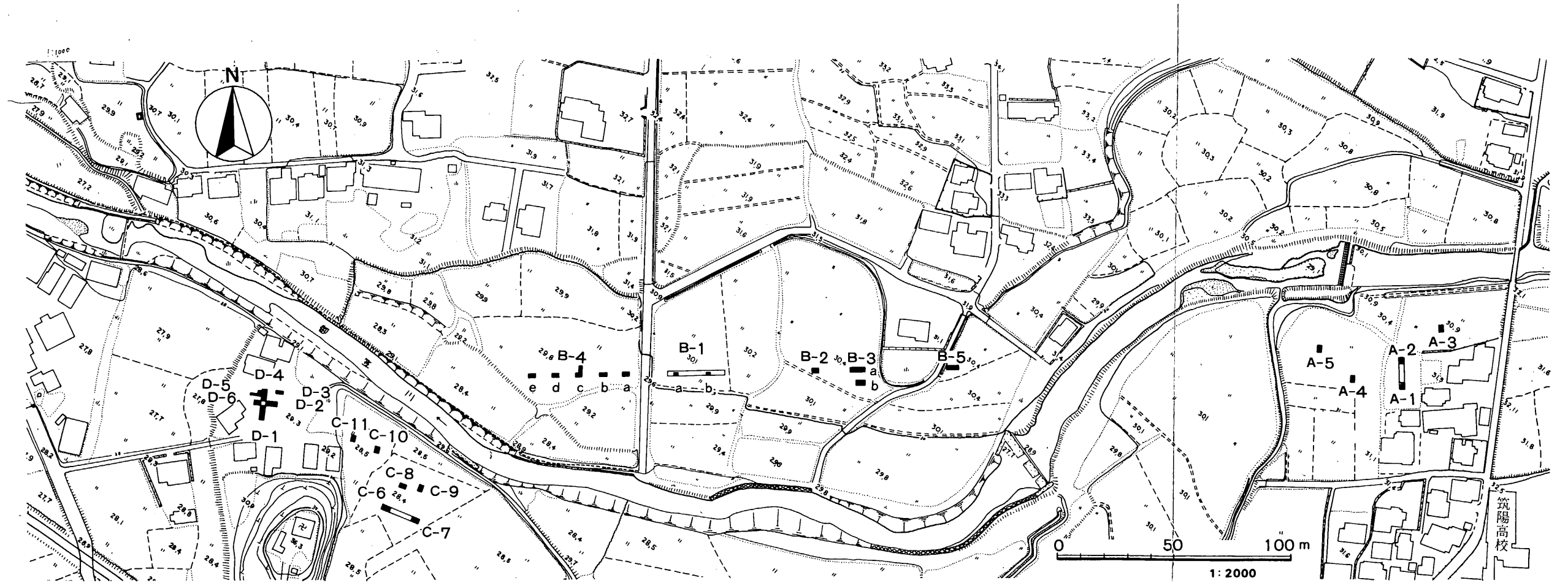


## 二、御笠川南条坊遺跡出土の陶磁器破片の 蛍光X線分析の結果について

今回はじめて陶磁器の蛍光X線分析を、佐賀大学理学部工業化学科竹山尚賢教授に依頼し、興味深い結果が得られたことはすでに報告の中で述べられている。これに対する見解はあるいは蛇足となるかもしれないが、考古学的にみて感じたことをすこし述べてみたい。

第130図の陶磁器の素地及び釉についての重金属成分のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロットについてであるが、131図でもわかるように、素地について、陶土は3重金属成分の強度比は小さく、あまり変化はない。このことだけで、陶器と磁器を分けることは報文中でも厳にいましめてあるが、ただそういう1つの傾向があることは、肉眼観察による胎土の色が黒いものほど変化がないという結果と一致することからもいえそうである。越州窯系の1・2は白磁や龍泉窯系のものと同く素地は陶器に近く、そのことは高麗青磁である22・23についてもいえる。第34表の分類は素地と釉とをあわせた総合的分類であるが、白磁の素地については3～7までと、8・9とではやや差があり、口禿げの白磁である8・9はかえって7類である10～12に似ている。7類である10～12と8類である15・16はともに龍泉窯系といわれているが、8類である15・16はばらつきが多い。次に天目である24～26は、胎土の肉眼観察でも磁器に近い白いものや、陶器に近い濃灰色のものまであり、分析結果でも同様な結果がでていて、一概に天目は磁器か陶器かという論議はできない。陶器では、雑器3類とした29は器面の色と胎土とで考えられたあるいは釉がかけてあるかとも考えられたが、肉眼では、釉らしきものがみられず、解決に苦しんでいたが、分析の結果では釉ではなく、化粧土のようなものの可能性があるとのことで、1つの解決をみている。雑器7類である31・32の素地は磁器質に近いものであろう。古瀬戸である37は常滑である35・36と同くやや磁器質であることがわかる。次に緑釉である27・33は、釉はよく似ているが、胎土は27は土師質であり、33は雑器7類とした31・32によく似ている。分類通りであるといえよう。青白磁である20・21の釉は白磁である5類と似た傾向をもっている。第133図の素地及び釉についての軽金属成分のケイ素に対する蛍光X線強度比プロットではやはり第130図と同様な結果が出ているが、重金属成分のジルコニウムに対する蛍光X線強度比プロットのように明確ではなく、両者を合わせて考えるべきであろう。また釉と素地との総合的判断での大分類も必要であるが、一方では素地だけとか釉だけの判断も重要性をもつと考えられる。今回は資料も少なく、あまり断定できるものがないが、今後分析の資料を増やすことによって諸問題が明確になることと思われる。

最後にこの分析を快く承諾していただき、佐賀県有田周辺の陶磁器原料石および有田周辺古窯跡出土の陶磁片についての分析結果をも加えて、興味深い考察を報告していただいた佐賀大学理工学部工業化学科竹山尚賢教授をはじめ、研究グループの方々に深く感謝いたします。



136図 都府楼前条坊遺跡（5地点A～D地区）全図

## VI. 都府楼前条坊遺跡の調査

### 一、はじめに

ここで報告する「都府楼前条坊遺跡」は、一般国道3号線福岡南バイパス関係埋蔵文化財発掘調査予定地内で、第5地点とされていた地域である。この地域は、太宰府町大字榎寺・観世・通古賀の3箇所にわたっており、A～Dの4地区に分けて1977年5月27日～11月12日にかけて行なった。

発掘調査関係者

庶務担当 福岡県教育庁管理部文化課主任主事 入江 智徳  
調査担当 同 主任技師 前川 威洋  
技師 馬田 弘稔

調査補助員 川村 博

整理補助員 田浦 郁子 大坪 安子 山本 祥子 宮崎 真理子

なお、発掘調査にあたっては、地元太宰府町・筑紫野市の方々の協力を得た。

### 二、調査の概要

4つの地区に分けて、それぞれ数箇所のトレンチを設けて発掘した。

#### A地区（太宰府町大字榎寺）

5箇所を調査し、138図1にA-3トレンチ東壁土層図を示す。A-1～5に1～4層はほぼ水平に認められたが、5・6層はA-1・3で南側に傾斜し、小さな流路が指摘される。10～12は、A-1～5共に水平で、12層は湧水を認め、現河床標高約29.00mにほぼ一致する。

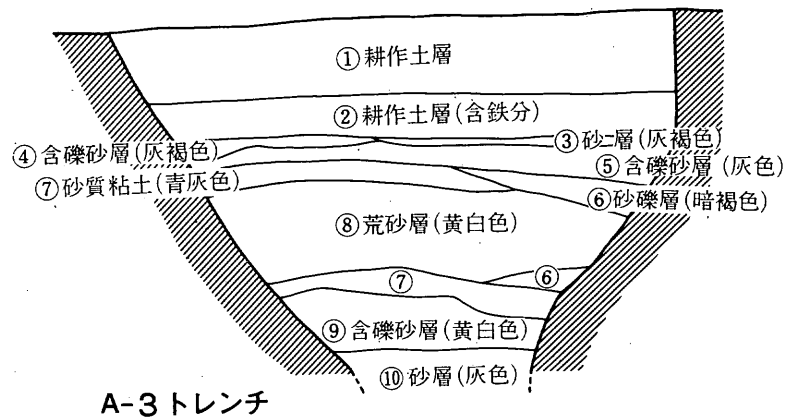
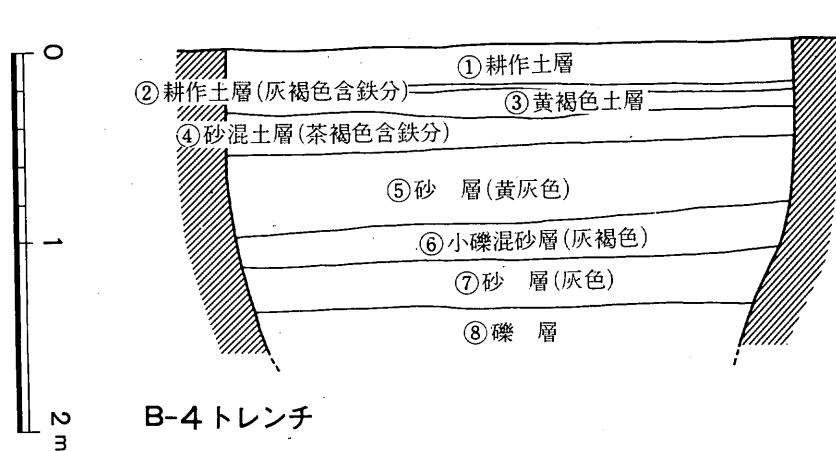
#### B地区（太宰府町大字観世）

B-1(a・b)、B-2・3、B-4(a～e)、B-5の5箇所を調査し、138図2にB-4トレンチ北壁土層図を示す。B-4はいづれの層位もほぼ水平で、B-4(b～e)では4層の下に砂質土層（灰褐色）が20cm前後存在する。B-4以外もほぼ同様の堆積であるが、B-3ではほぼ南北方向の溝状遺構が2条（幅1.5m・深さ0.3mと幅1.0m・深さ0.3m）が、5層から掘り込まれていた。しかし、溝内出土の遺物は土師器の細片が少量で、時期は不明である。

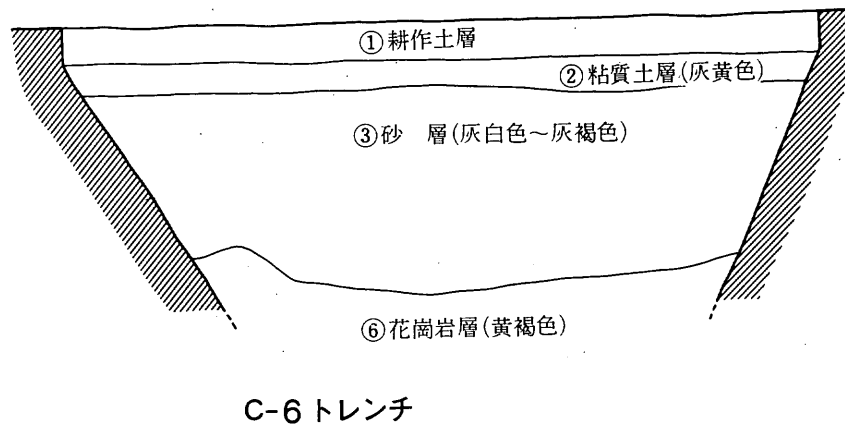
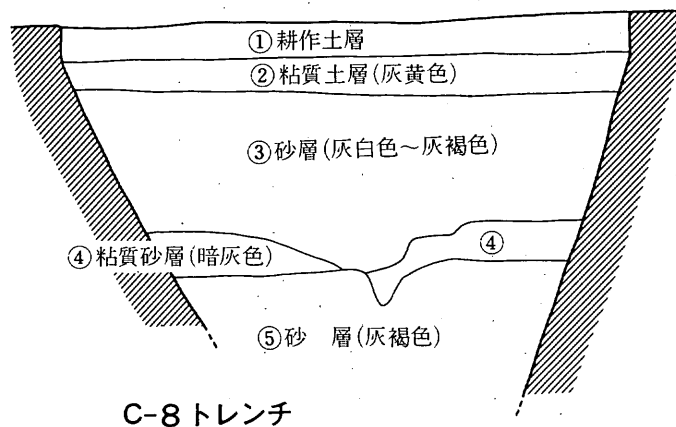
#### C地区（太宰府町大字通古賀）

6箇所を調査し、138図3にC-6・同4にC-8トレンチ北壁土層図を示す。C-6では3層の下は6層の黄褐色地山層（花崗岩バイラン土）になるが、C-8では3層の下に4・5層の堆積が

標高31.20 m



標高28.60 m



216図 A ~ C 地区土層図

あり、現地表下 2.0m 下まででは 6 層の地山は検出されなかった。他の 5 箇所についても C-8 と同様の層位を示した。

#### D 地区（太宰府町大字通古賀）

6 箇所を調査し、139 図に示す。御笠川南岸に近接して、標高 36.3m の花崗岩およびそのバイラン土からなる独立した低丘が存在し、頂部は納骨堂建設で整地されている。D 地区はその北方に舌状にのびる標高 29.3m の宅造地として削平された場所で、柱穴様小ピット 10 数個と、溝 1 条、不明土壇 1 が検出された。

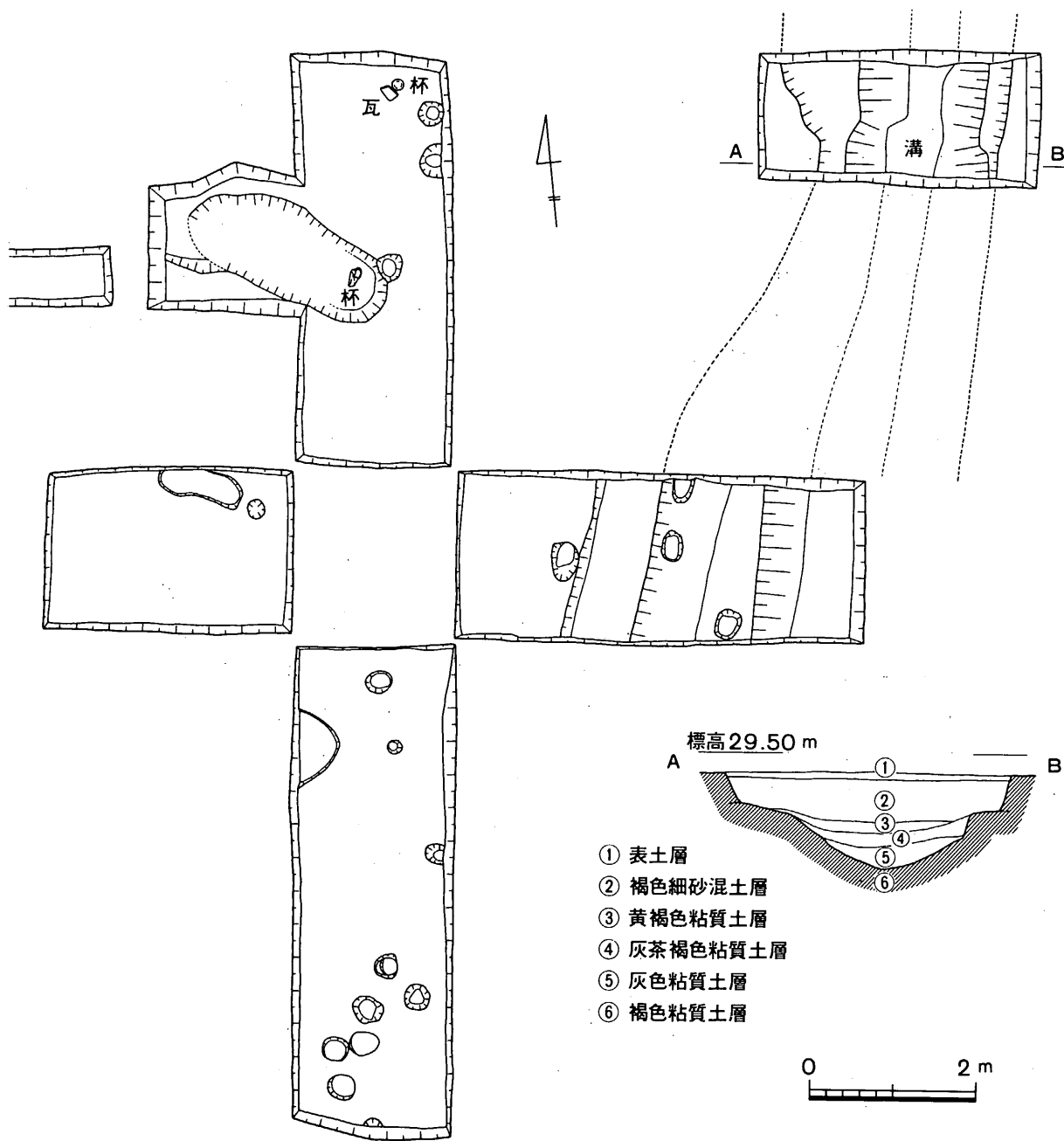
D-1 で 10 個のピットが検出されたが、建築物に関係する明確なものではない。D-2 で落ち込みが検出され、D-3 によって、N17°10'E の方向にのびる溝であることを確認した。南・北端の底面レベル差は 0.5m で北に向って低くなる。幅 2.1m・深さ 0.5m を測る。また D-2 で西寄りのピットから灰褐色埴の破片が出土した。D-4 では西に拡張を行った結果、長軸 2.1m・短軸 1.10m・深さ 0.3m を測る隅丸長方形土壇を検出した。土壇内の東寄りに、床面から 10cm 上で頭大の石と、ヘラ切り底の土師器杯が出土した。また、北端の 2 層（遺物包含層）からヘラ切り底の土師器杯と布目瓦を出土した。D-5 では東側で溝を検出していたので、西側での存在の有無を確認したが、漸次西に地山が傾斜して、存在しなかった。D 区全体としての土層は削平後の表土である 1 暗褐色砂質土が 5 cm 程で、2 褐色細砂混土層が遺物包含層で、土師器の小片が、須恵器の破片と共に出土し、6 粘質褐色土に至る。遺構はこの 6 層に掘り込まれており、埋土は粘質暗褐色土である。

### 三、ま と め

「都府楼前条坊遺跡」（第 5 地点）の調査は、国指定「大宰府史跡」の関連調査として、「御笠川南条坊遺跡」（第 6 地点）と共に重要視されていたものである。第 6 地点では、本報告書にも述べられているとおり、掘立柱建築物・井戸・土壇・溝などの遺構が多数出土し、御笠川南岸の低丘陵からその流域にかけての遺跡の存在が明らかにされている。第 5 地点では、その流域内に入っていたとは考えられるが、現水田面下の遺構の存在の有無を確認することを目的として、トレンチ調査を行ない、以下の出土遺物をみた。

A 地区では 9 層まで、B 地区では 8 層まで、C 地区では 5 層までがそれぞれ遺物包含層で、奈良時代の須恵器片や平安時代の磁器・土師器・瓦の各種破片が混在する。磁器はほとんどが白磁で、また土師器の杯はほとんどヘラ切り底のものである。また A 地区では 10 層が無遺物層であったが、現河床レベルと同レベルになって湧水が生じ、C-8 トレンチでも 5 層で湧水が生じ、共に安全対策上それ以上の掘り下げを中止した。

ところで、1977 年度の九州歴史資料館による筑陽高校グラウンド(136 図南東隅部) 内緊急発



138圖 D 地区遺構配置圖

掘調査で、柱穴様小ピットが検出されている。土師器細片が出土したのみで、時期決定にまでは至っていないが、褐色粘質土層に掘り込まれており、砂層の堆積は認められていない。このことからすれば、御笠川の氾濫原は筑陽高校までは至らず、A・B・C地区がその流域であったと考えられる。そしてC地区では第6トレンチで、花崗岩バイラン土層地山が検出され、その直上には3層の遺物包含砂層が厚く堆積しており、西に接する小独立丘までその氾濫は及んだものと考えられ、遺構は検出されなかった。しかし、D地区では、溝状遺構がヘラ切り底の丸底杯の破片を伴って認められ、また土塚からほぼ完形に近いヘラ切り底の杯が出土しており、後者は土塚墓の可能性も考えられる。このようにA～C地区を除いてD地区のみに、平安時代以降の若干の遺構が検出されたにとどまった。

# 圖 版

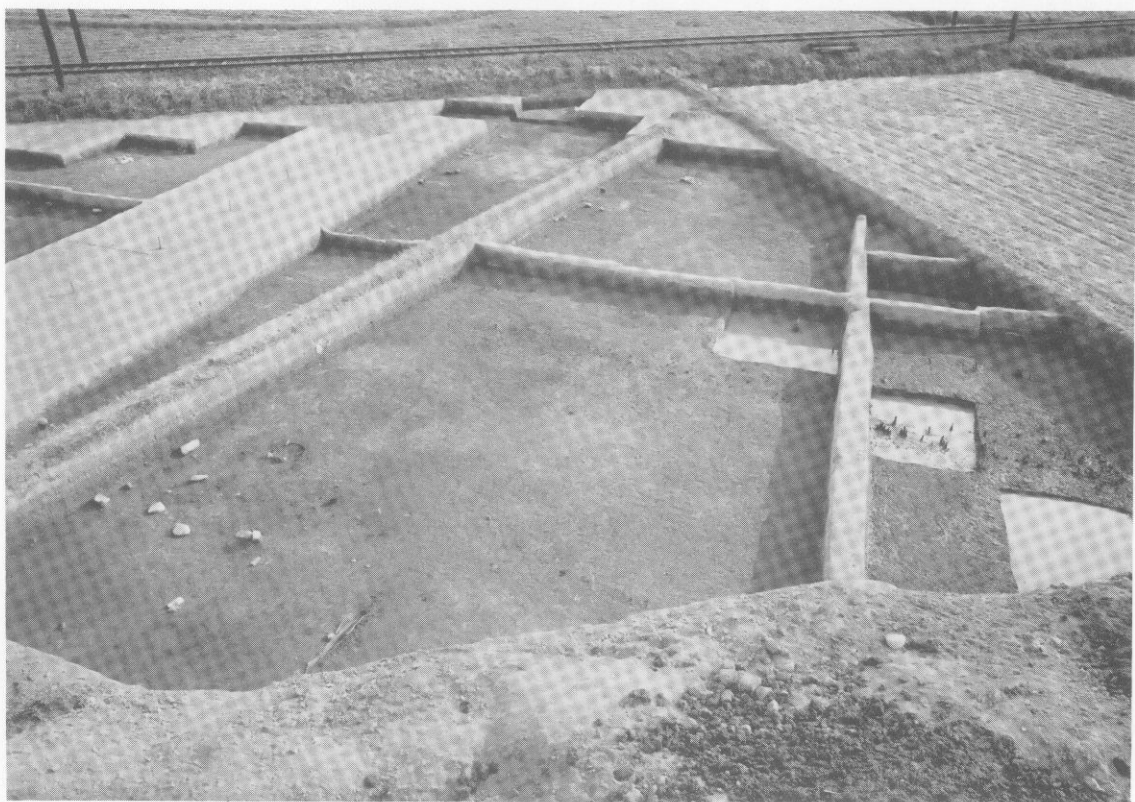




遺跡付近航空写真（北西から）



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区西側全景（北から）

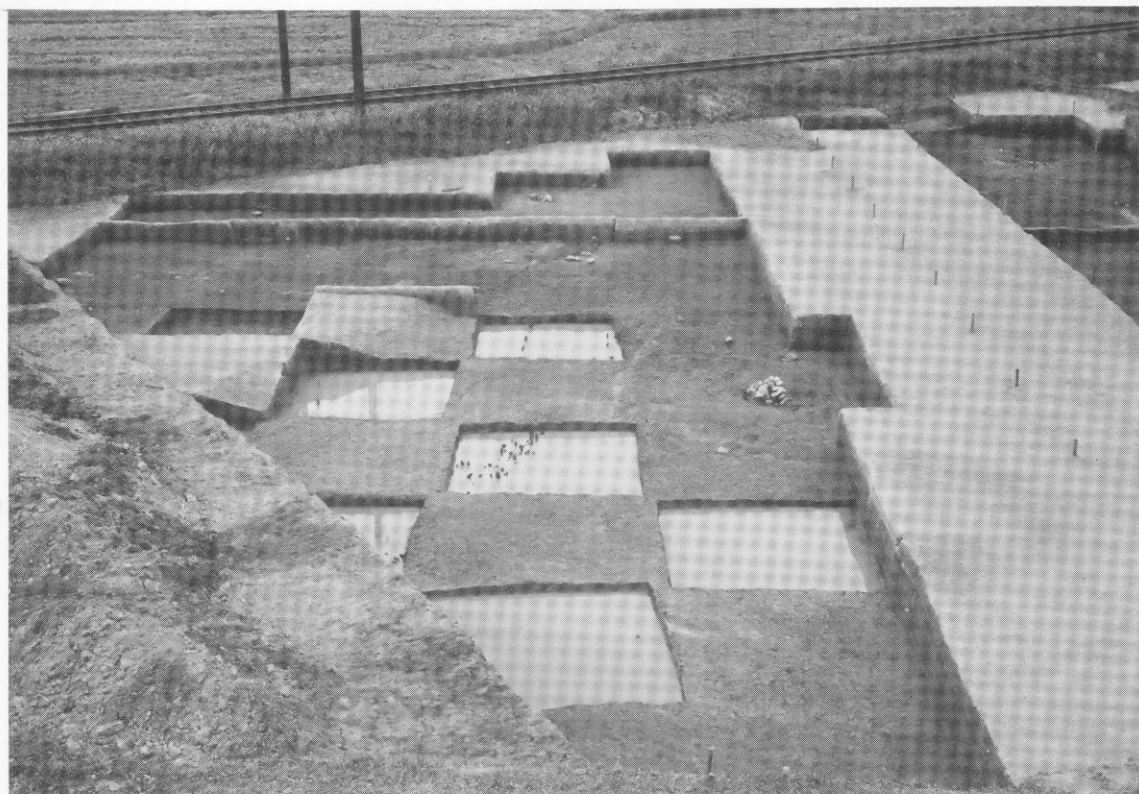




1. 調査区全景（東から）



2. 調査区西側遺構全景（北から）



1. 調査区東側調査状況 (北から)

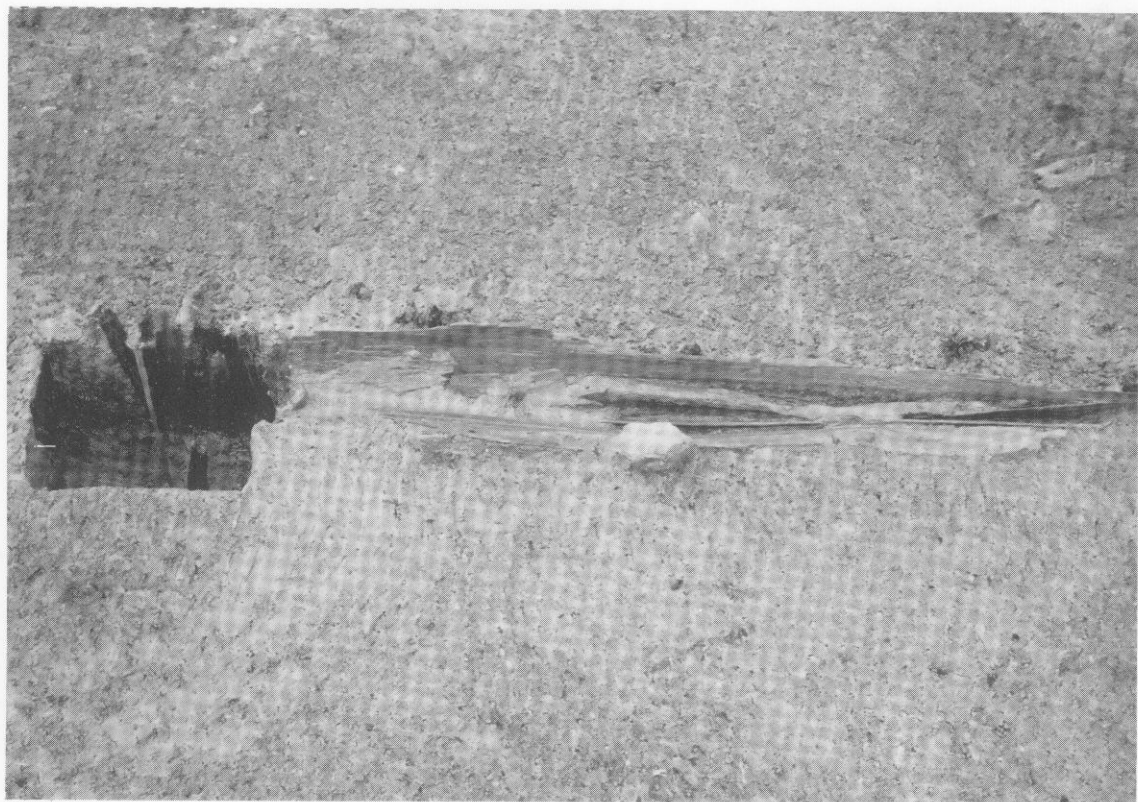


2. KR26の層位と杭列

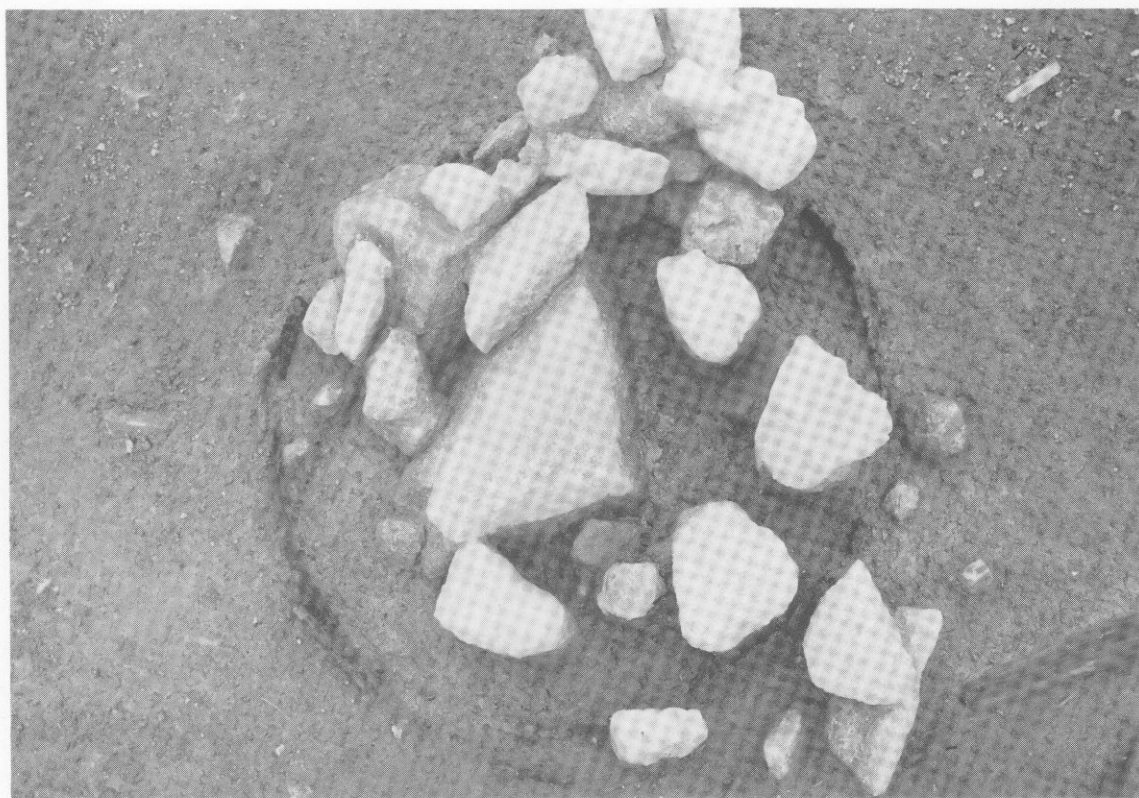




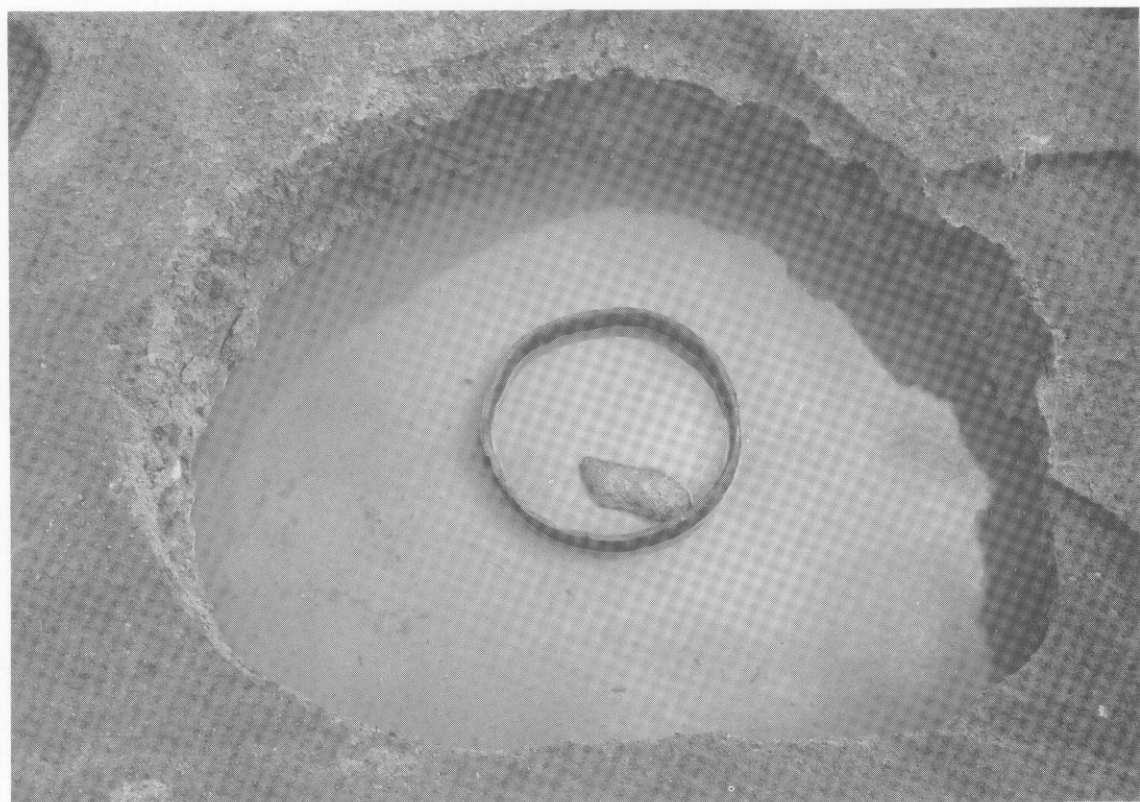
1. S X105木器等出土状態 (南から)



2. S X105木樋状遺構



1. SE101井戸

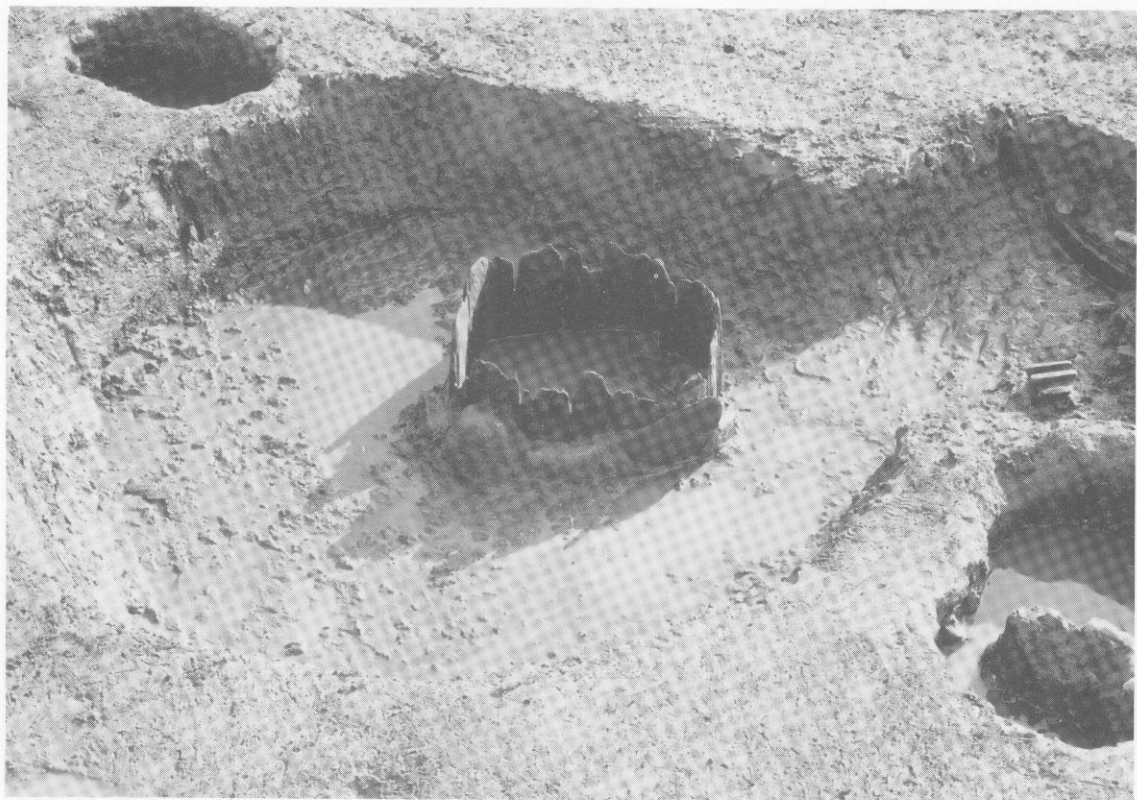


2. SE101井戸

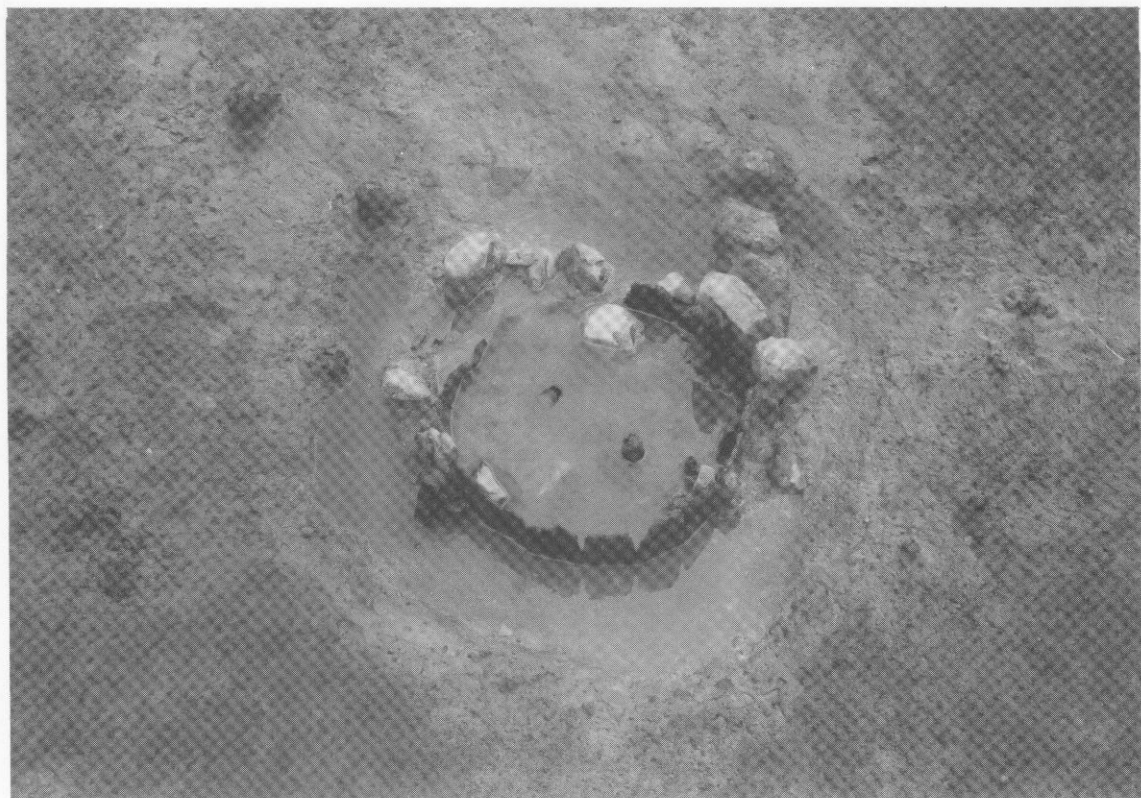




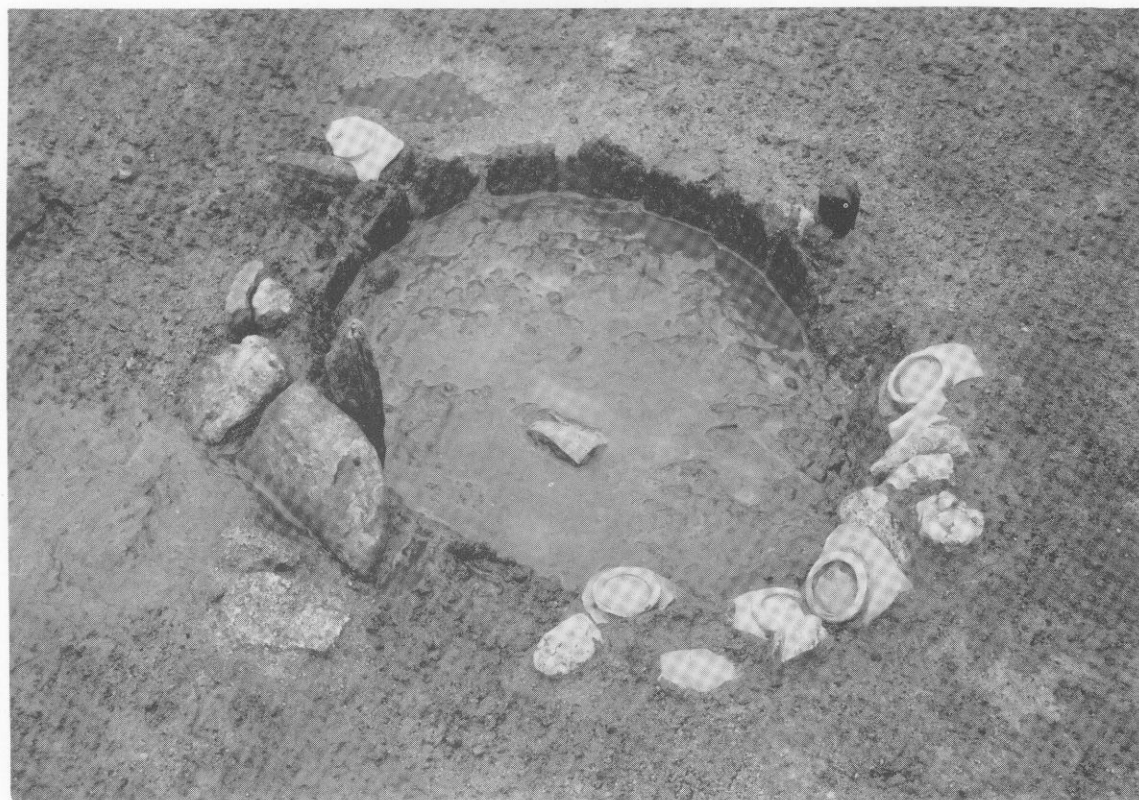
1. SE102井戸



2. SE102井戸



1. S E103井戸

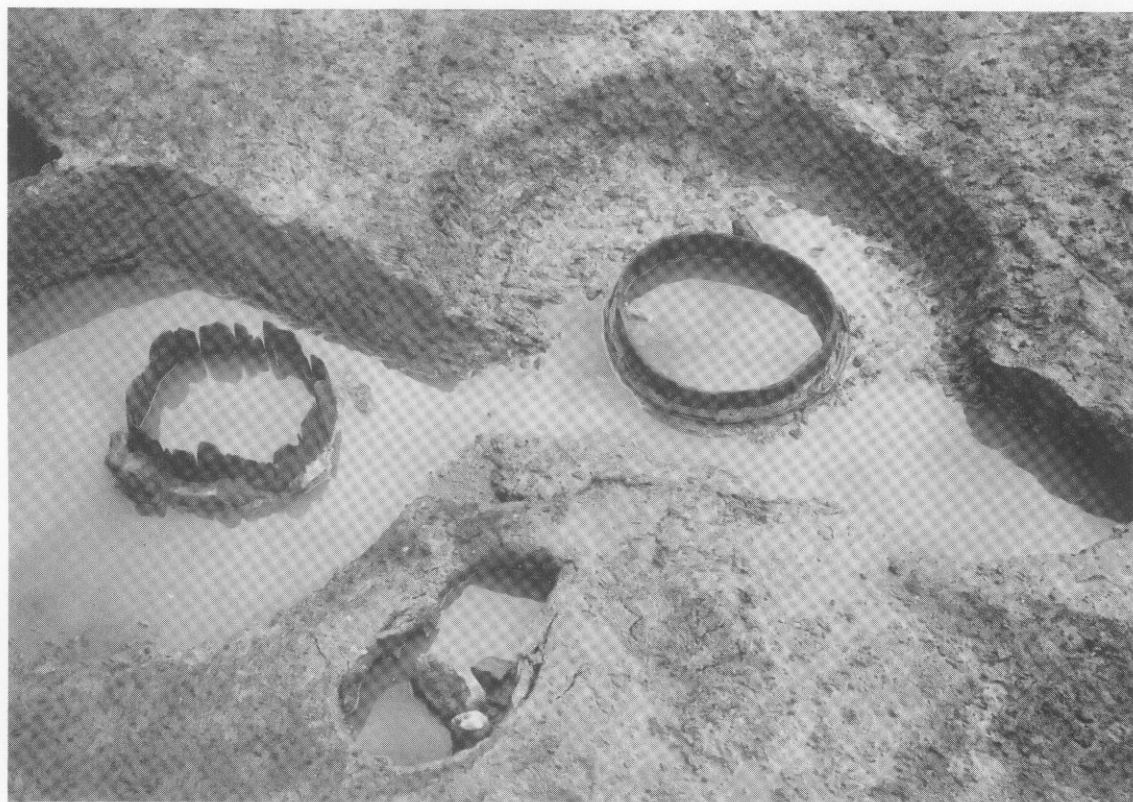


2. S E103井戸

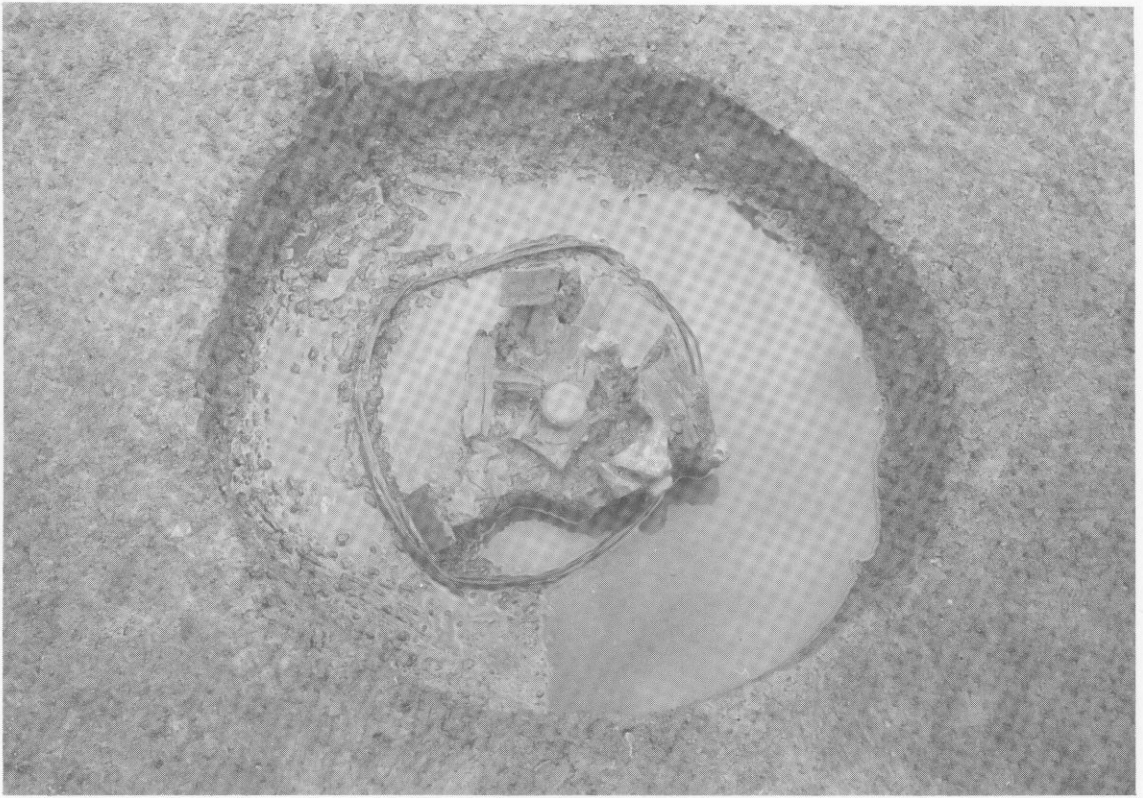




1. SE104井戸



2. SE102, SE110, SE104井戸 (左から)



1. SE105井戸

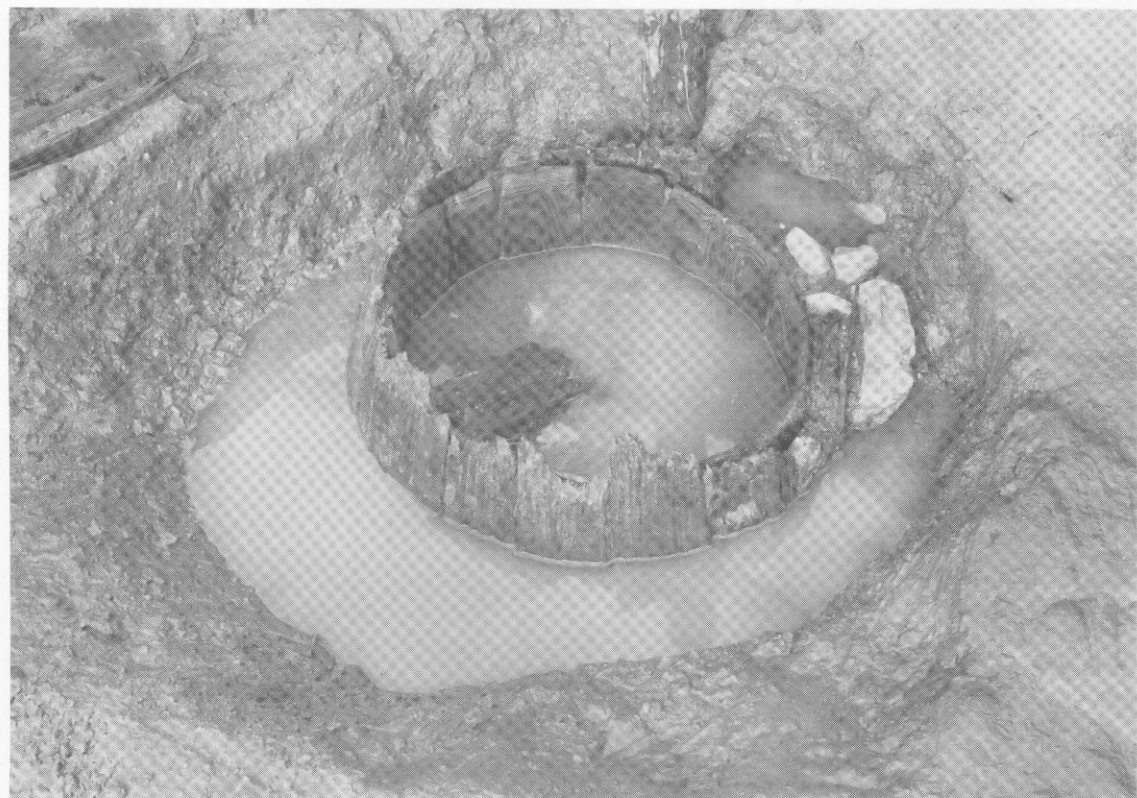


2. SE105井戸

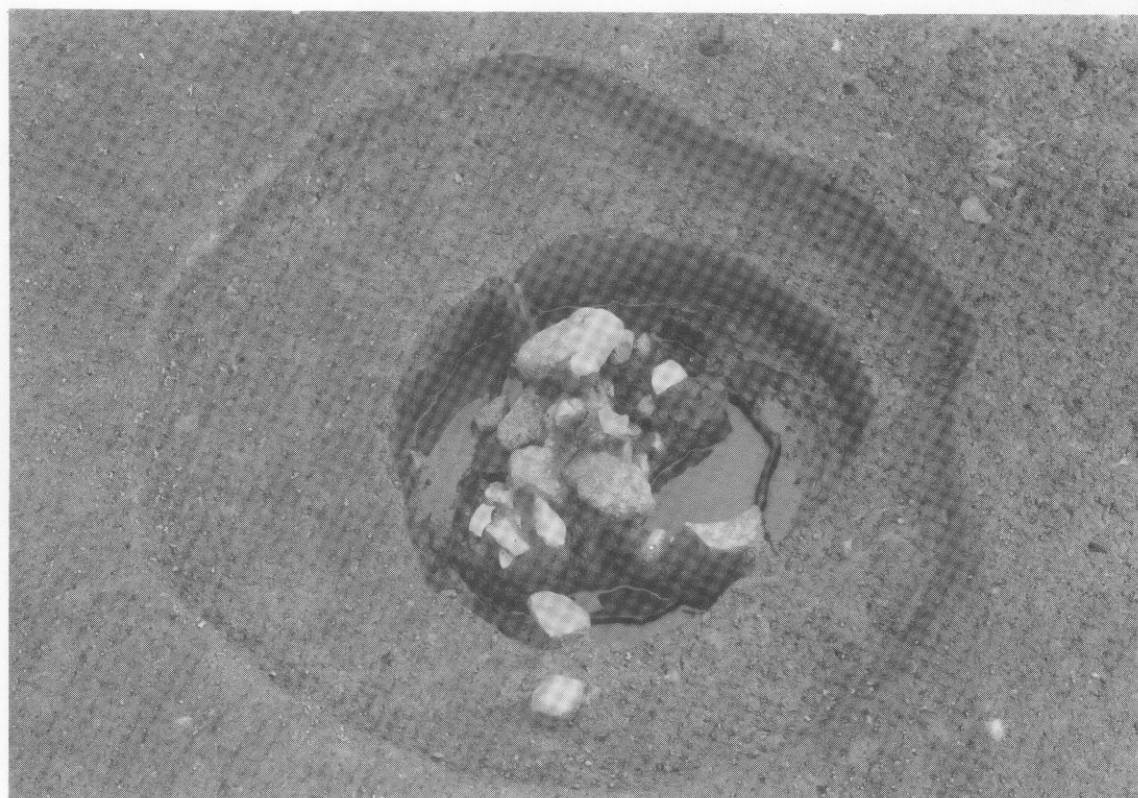




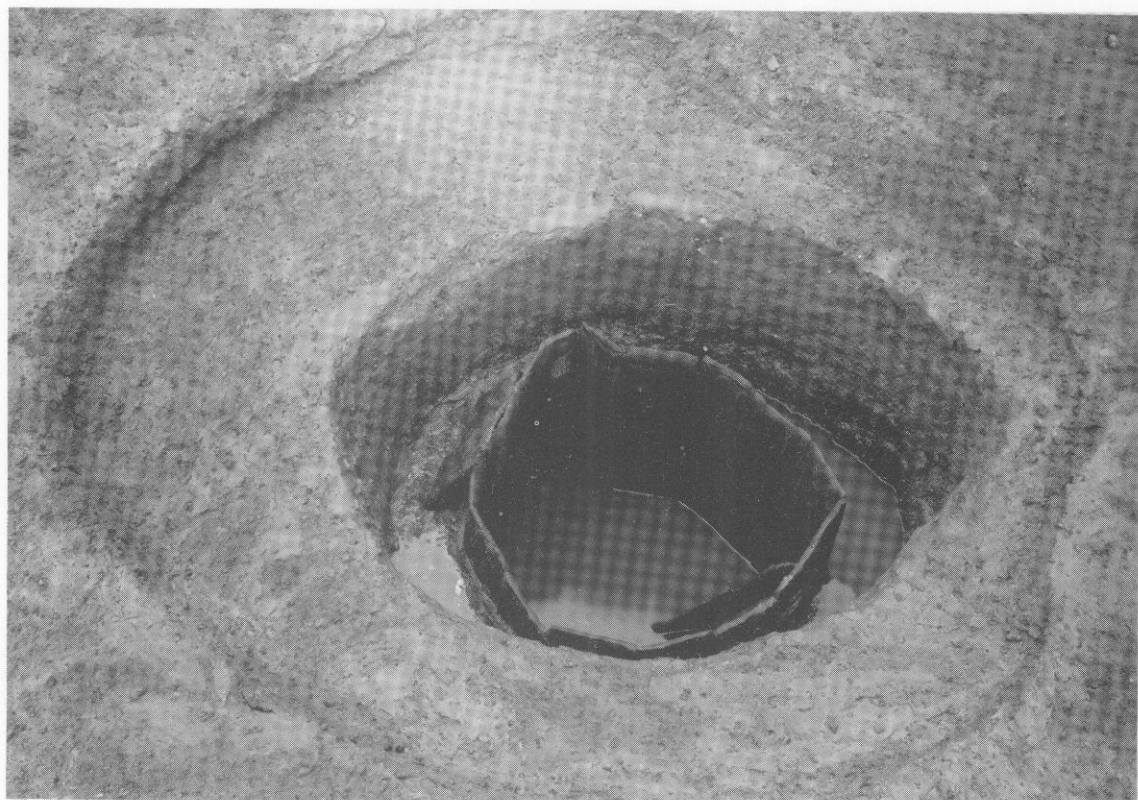
1. S E106井戸



2. S E106井戸

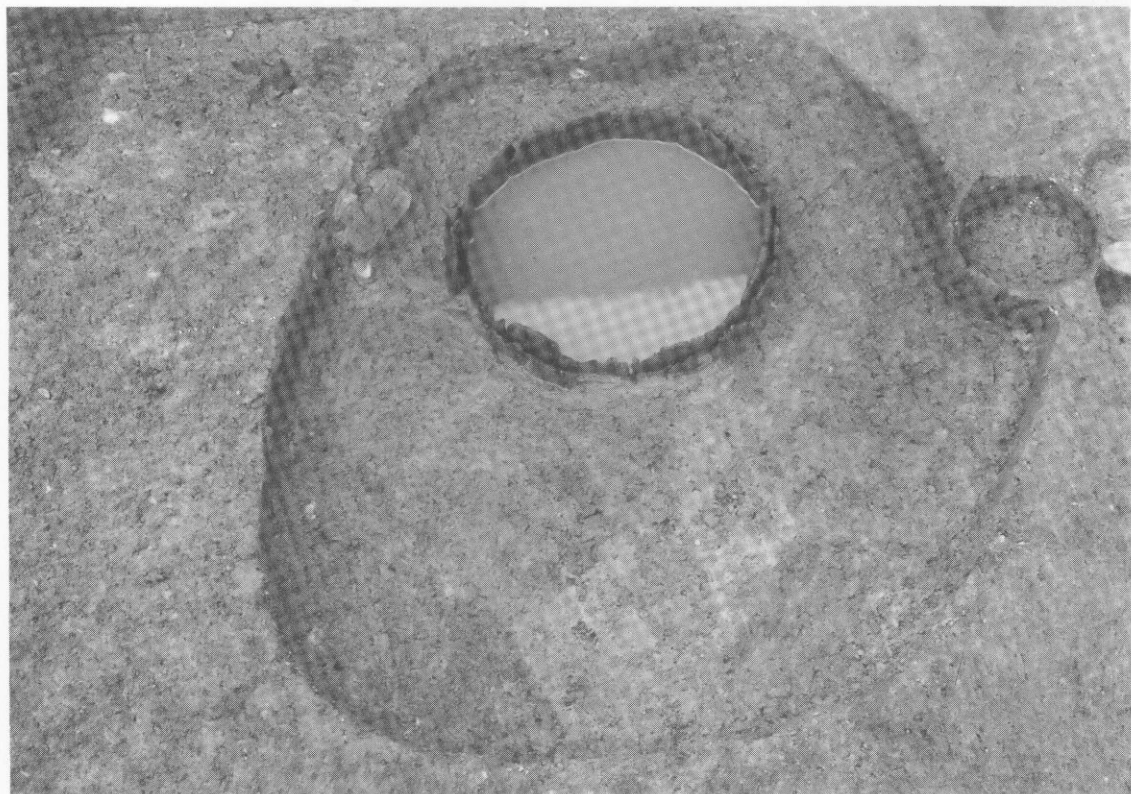


1. SE107井戸



2. SE107井戸

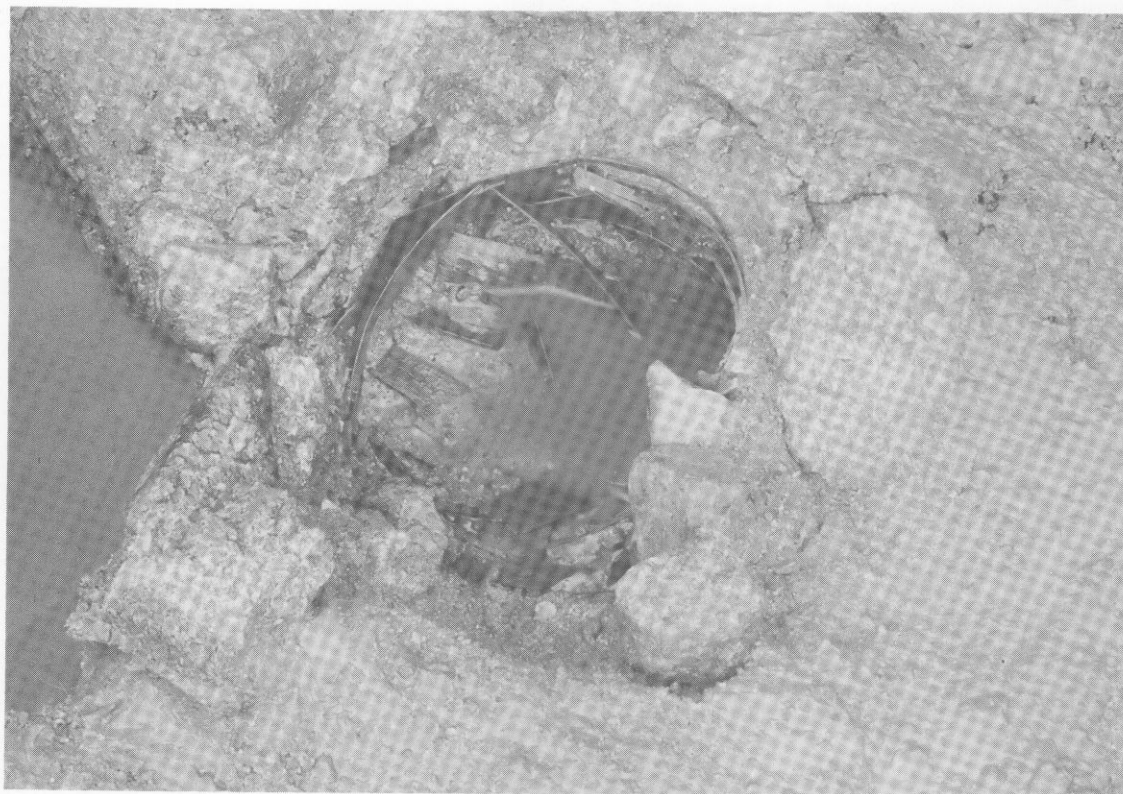




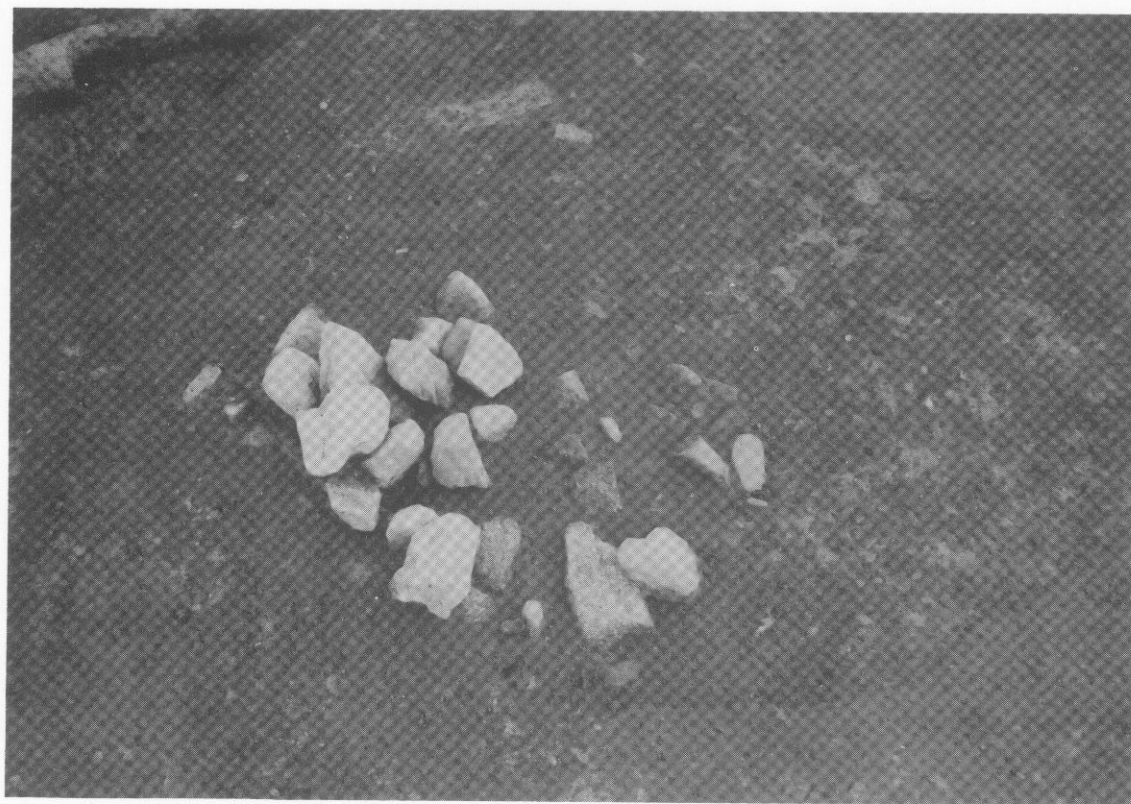
1. SE108井戸



2. SE108井戸



1. SE109井戸

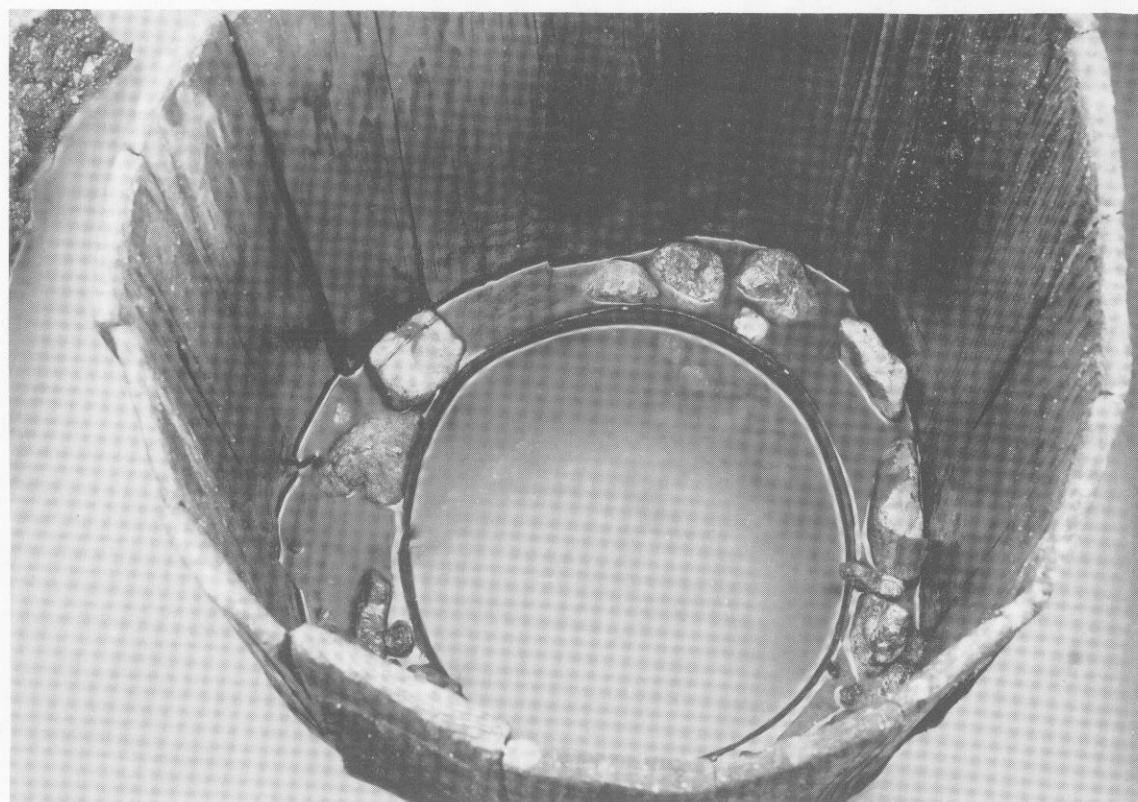


2. SE111井戸





1. SE110井戸



2. SE110井戸



1. SE112井戸

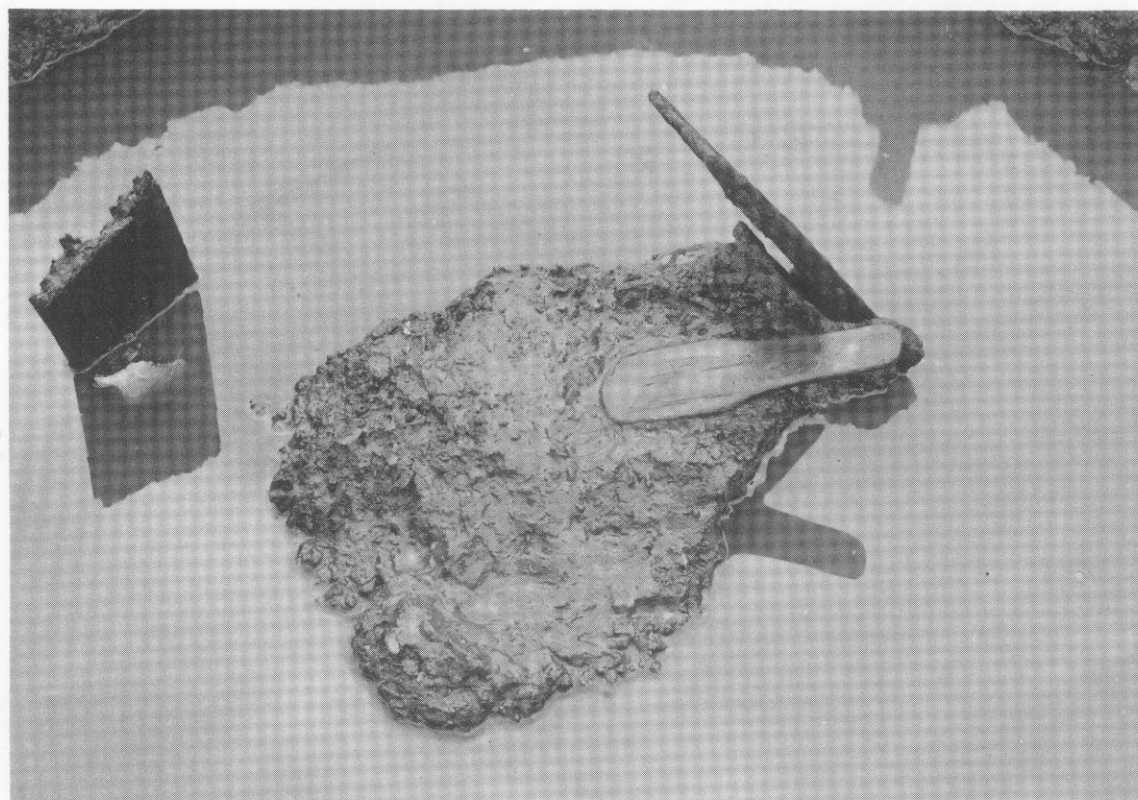


2. SE112井戸





1. SE103井戸遺物出土状態



2. SE105井戸遺物出土状態



1. 漆器出土状態



2. 漆塗り椀出土状態





1. 下駄出土状態



2. 下駄出土状態

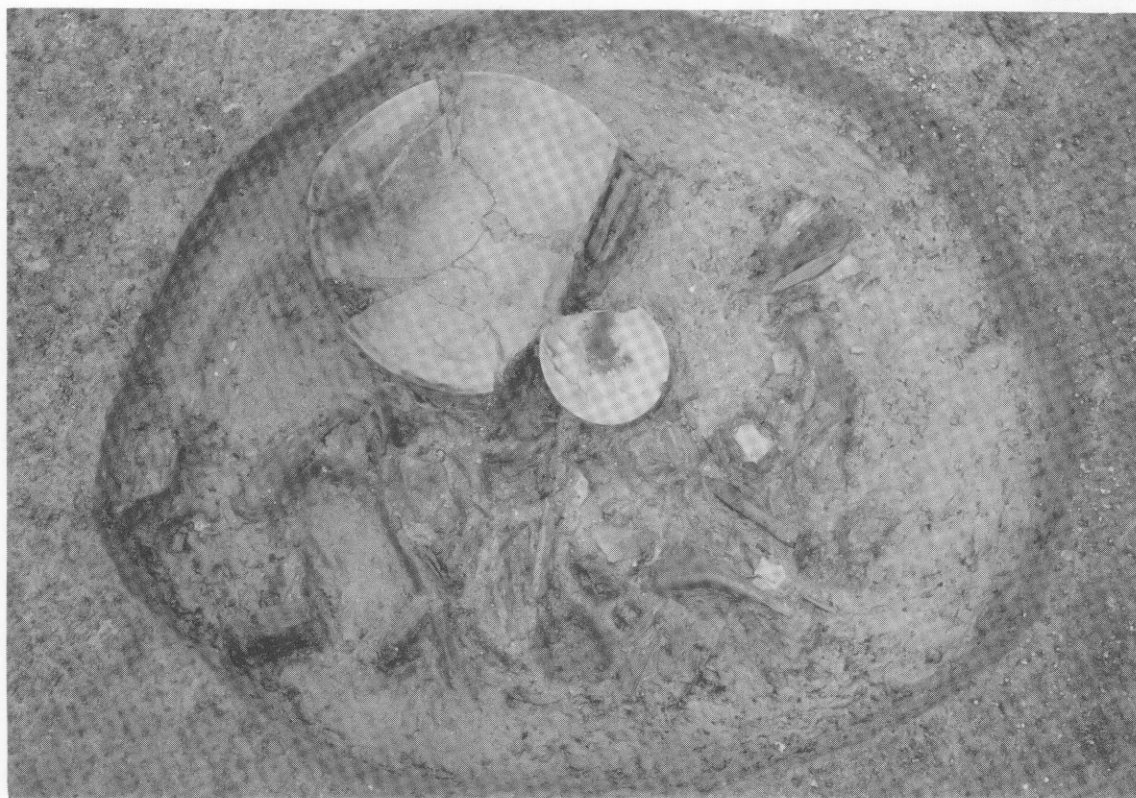


1. 扇骨·櫛等出土状态

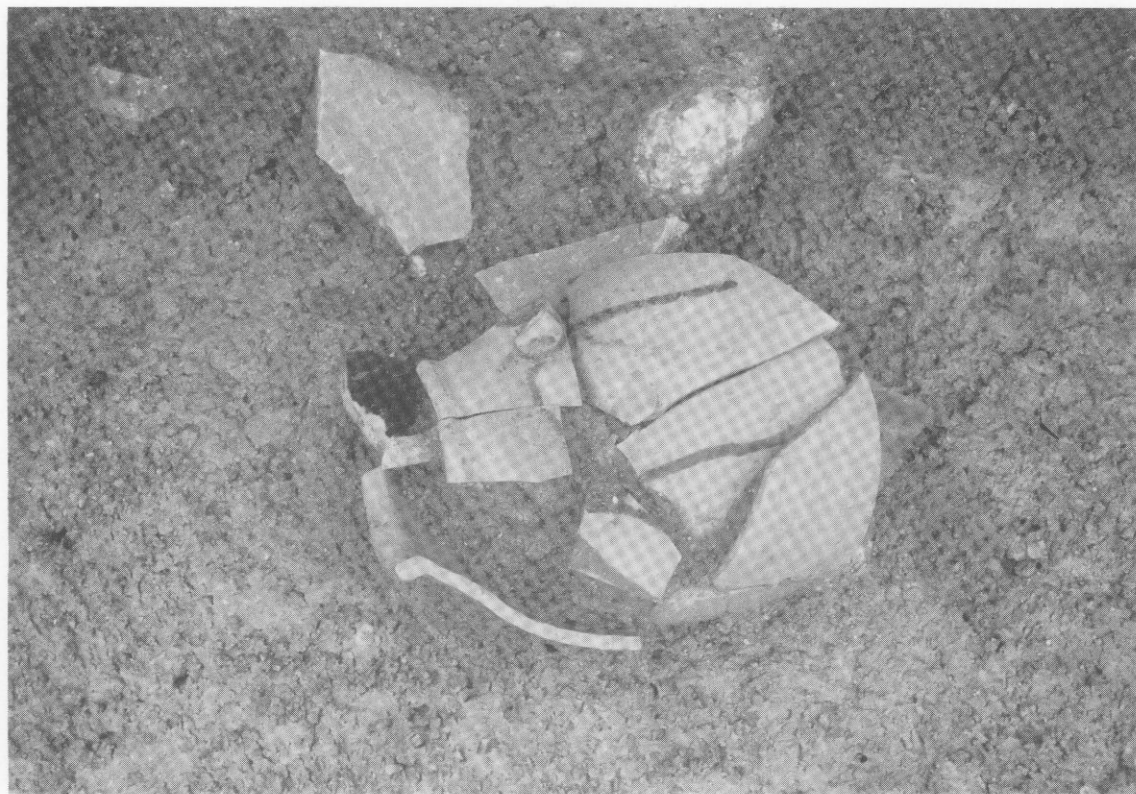


2. 扇骨·櫛等出土状态

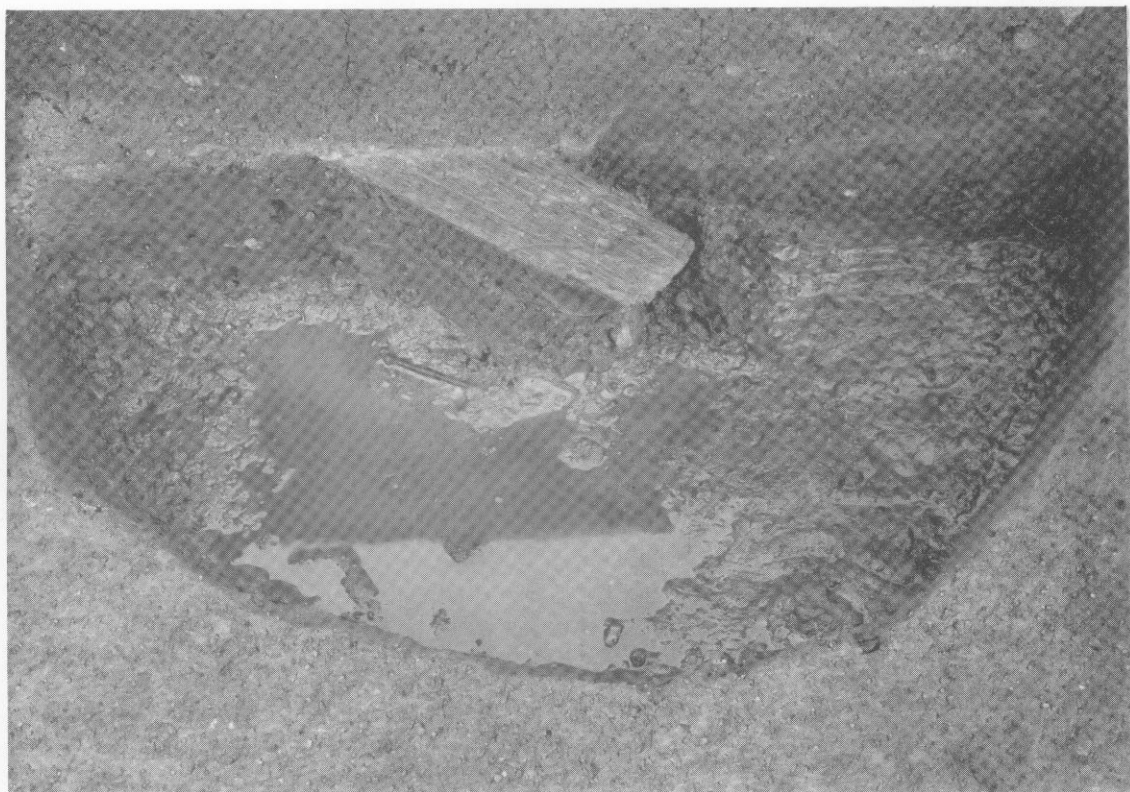




1. 土坛内遺物出土狀態



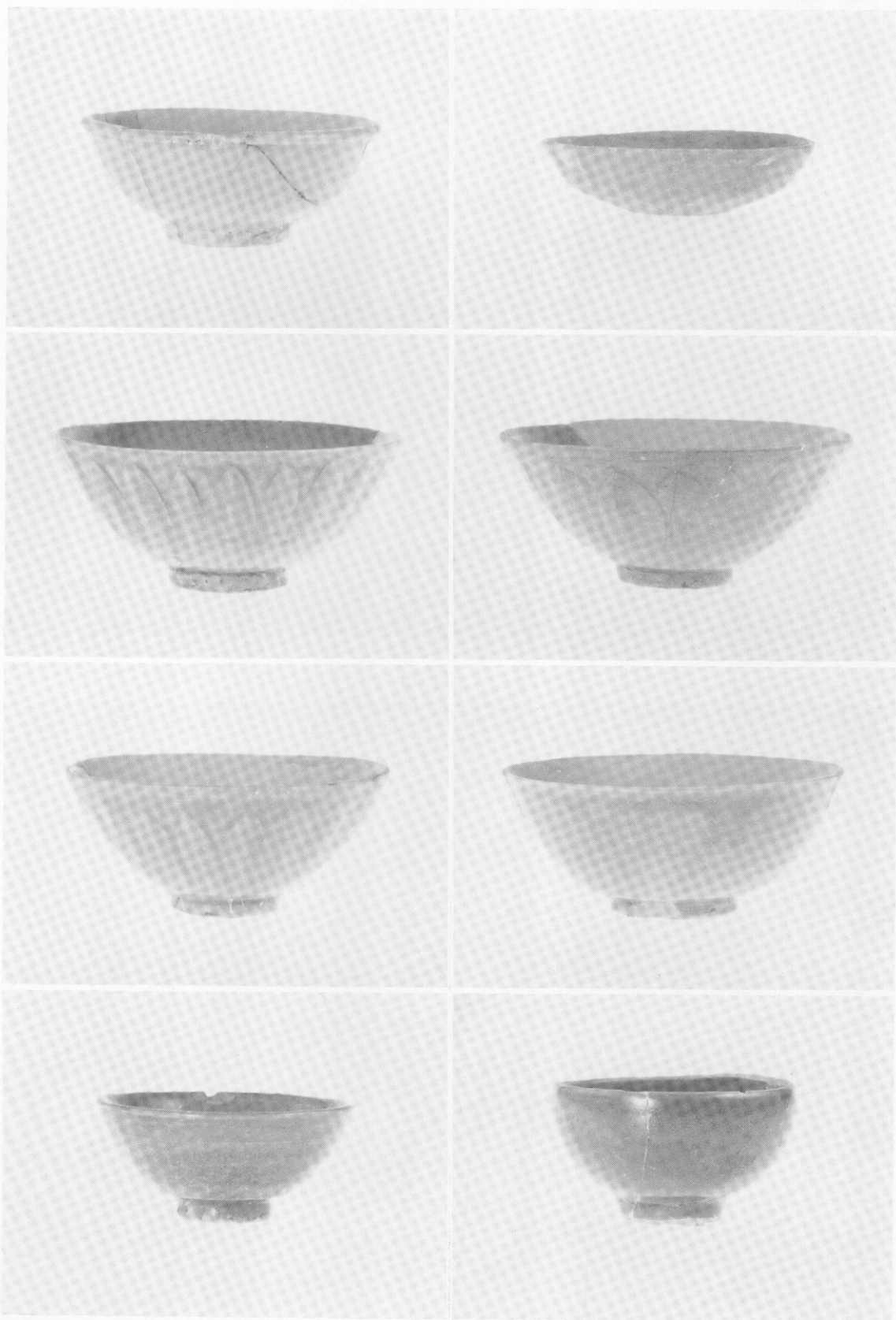
2. 四耳壺出土狀態



1. SK112土坑遺物出土状態

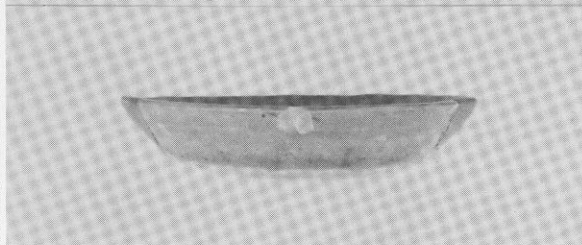
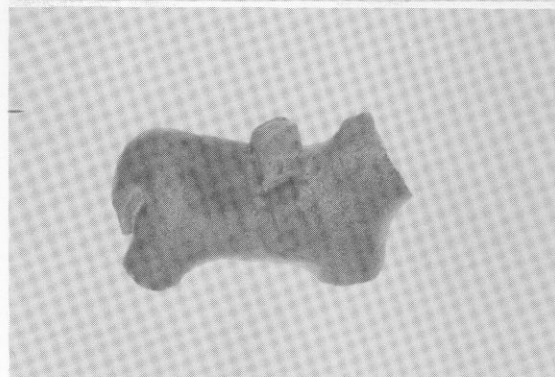


2. 犁鏡出土状態



磁器(1)



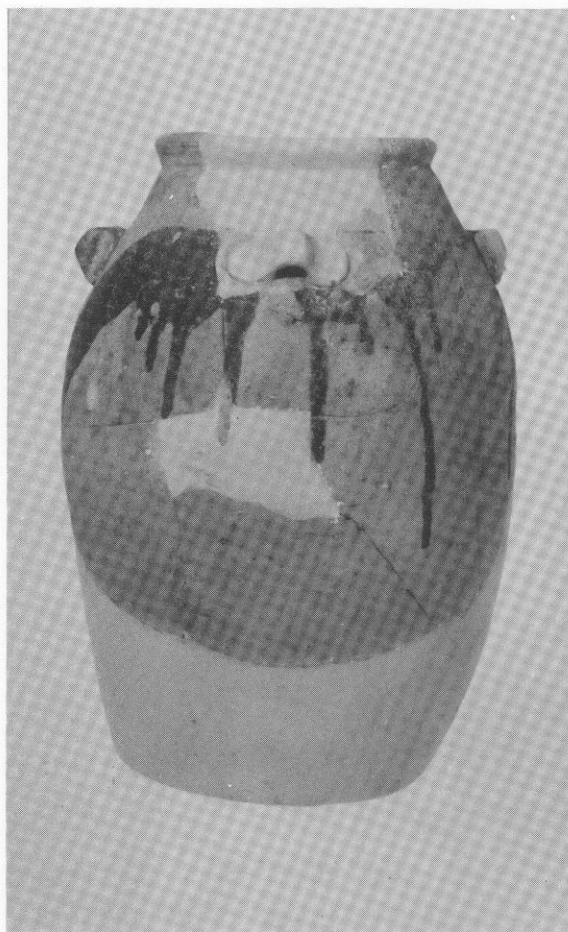


1. 磁器(2)

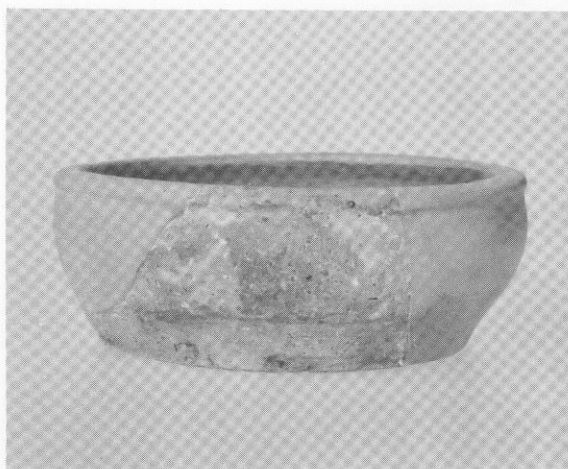


2. 合子





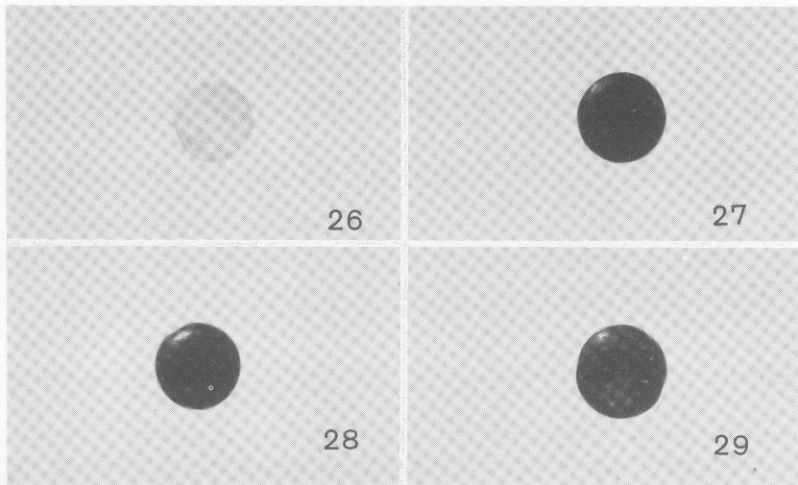
1. 雑器 1類



2. 雑器 7類



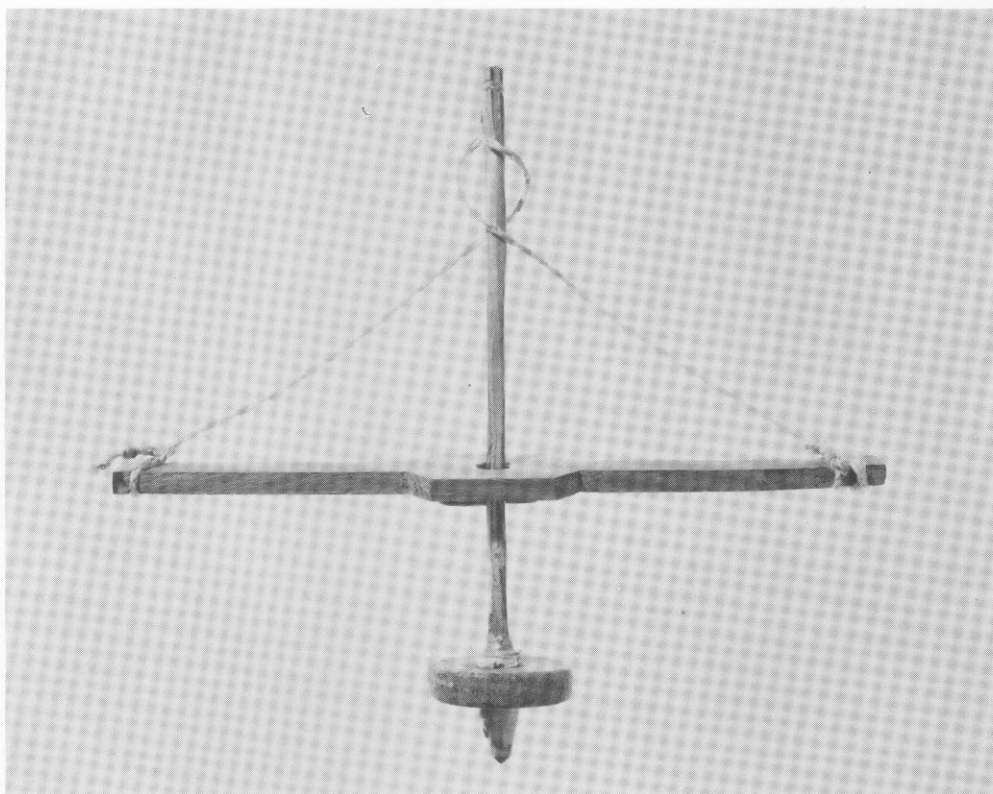
1. 石鍋 (27图1)



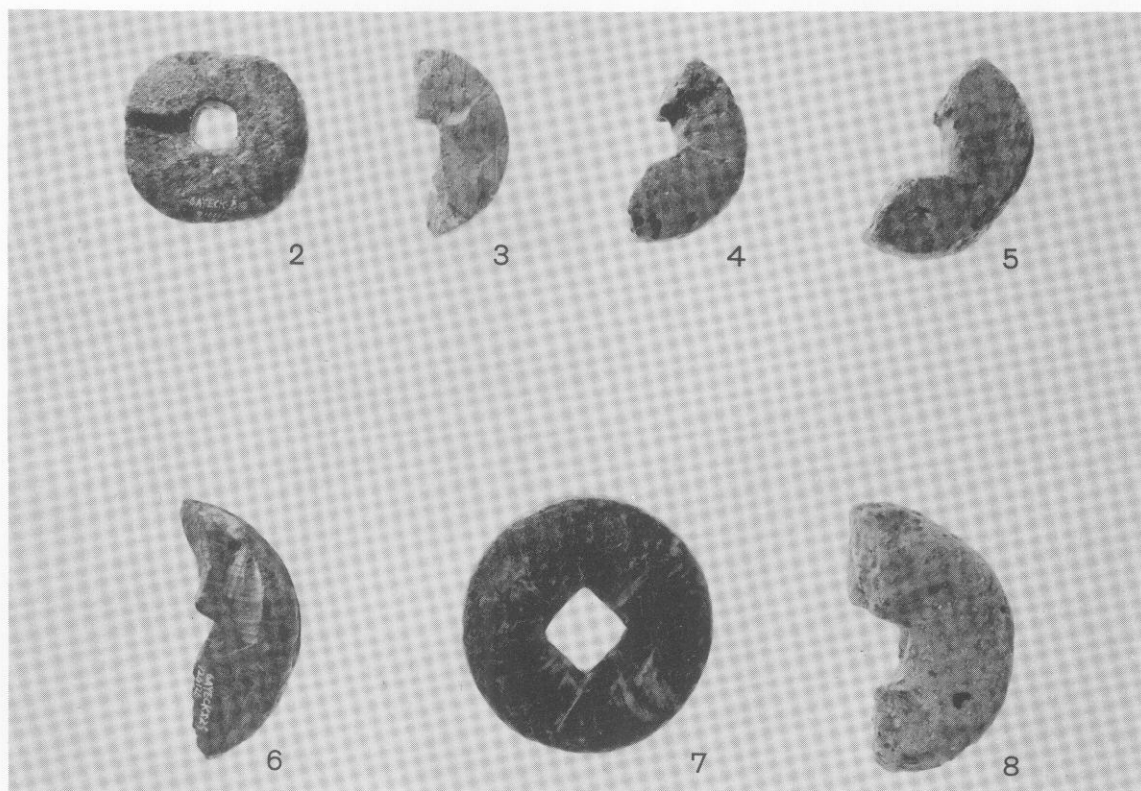
2. 碁石 (34图26~29)



3. 有孔鈕付菊花文印 (31图20)

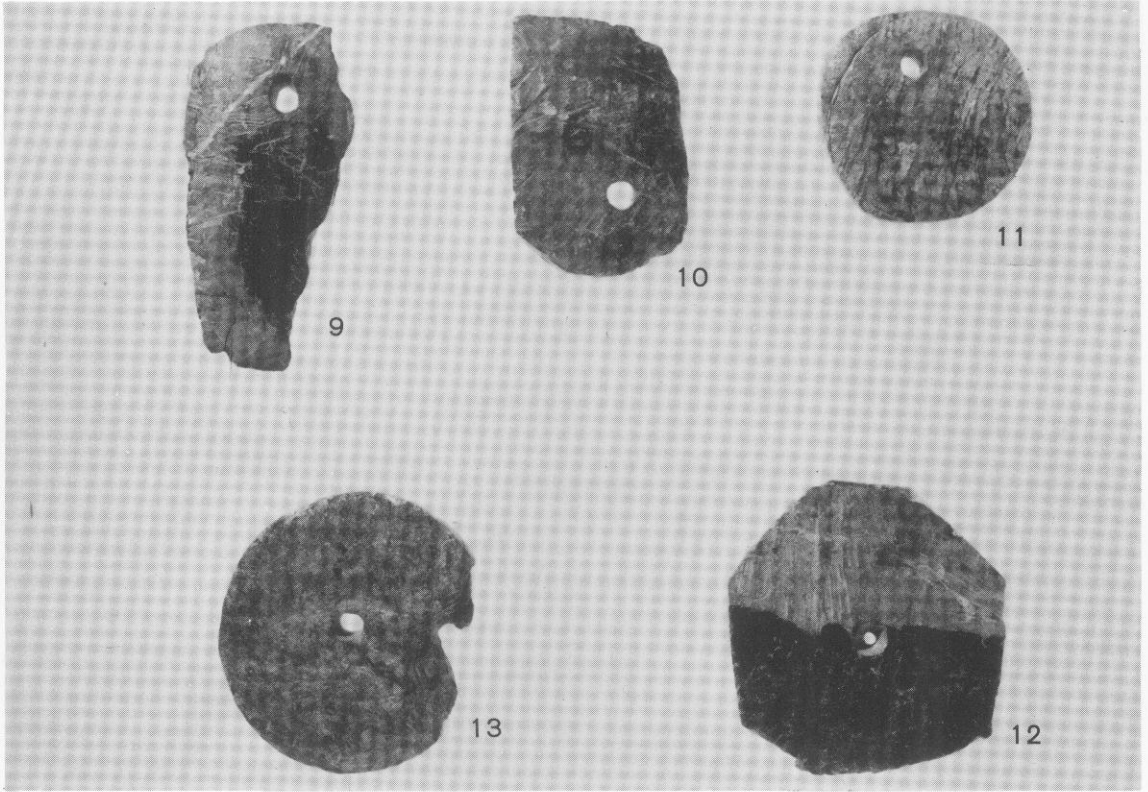


1. 滑石有(方形)孔円板使用方法想定例

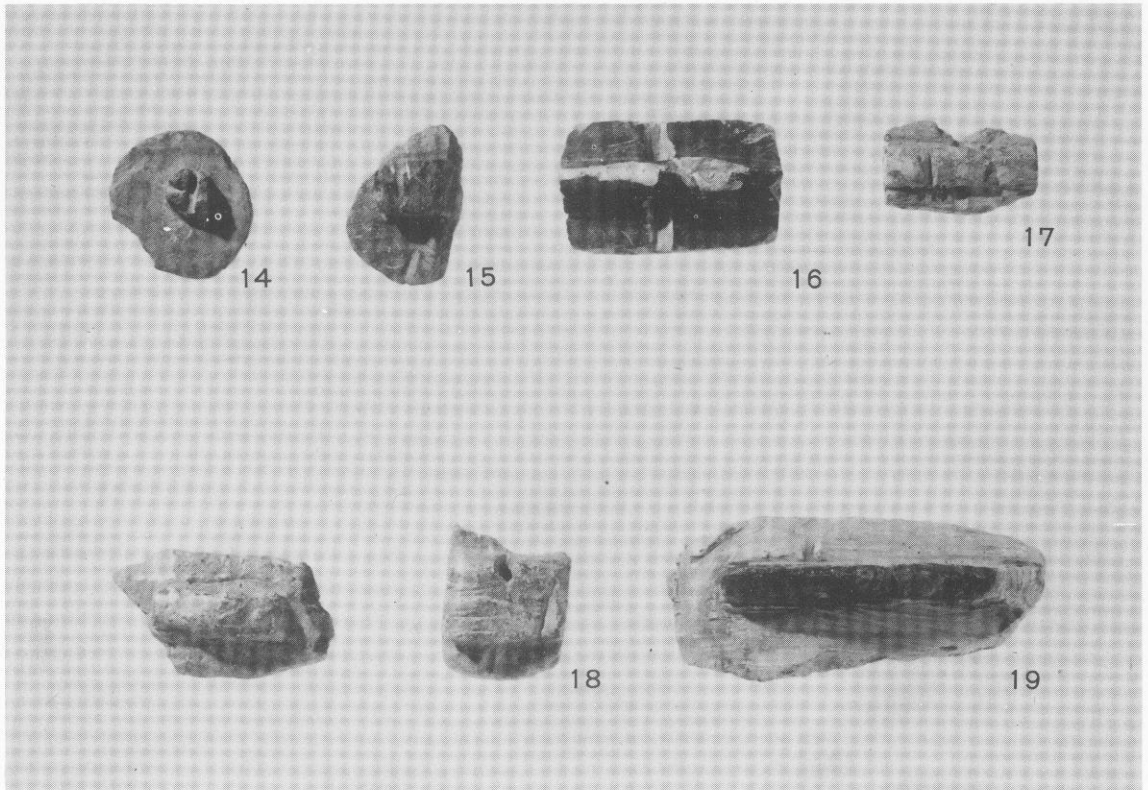


2. 滑石有(方形)孔円板 (28图 2~8)

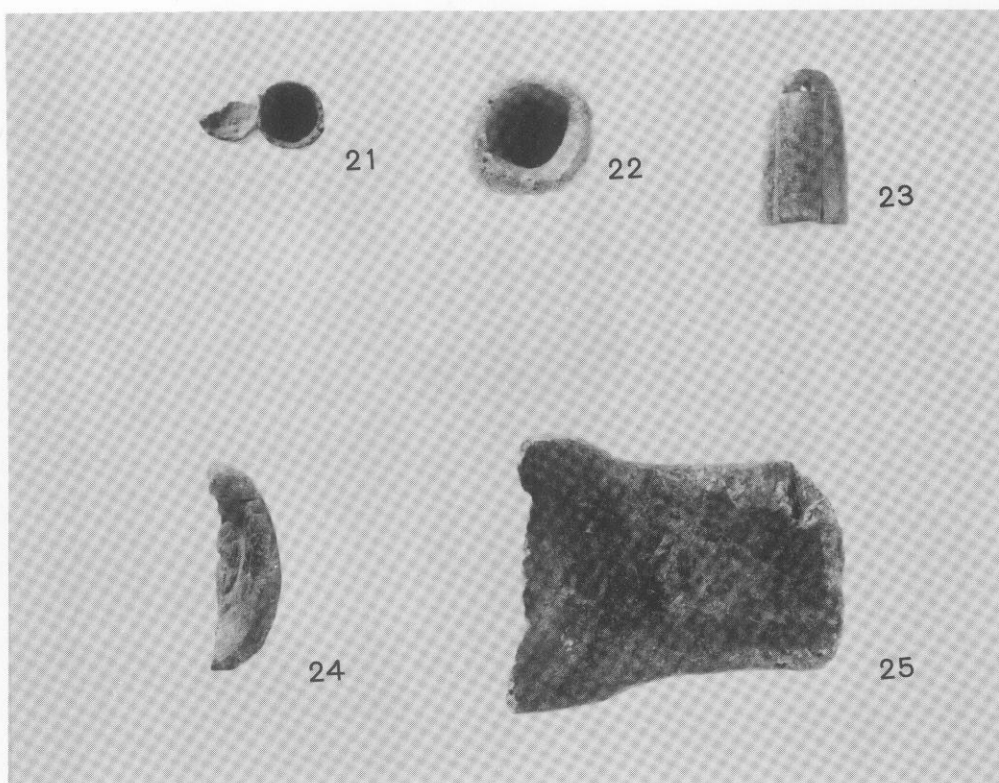




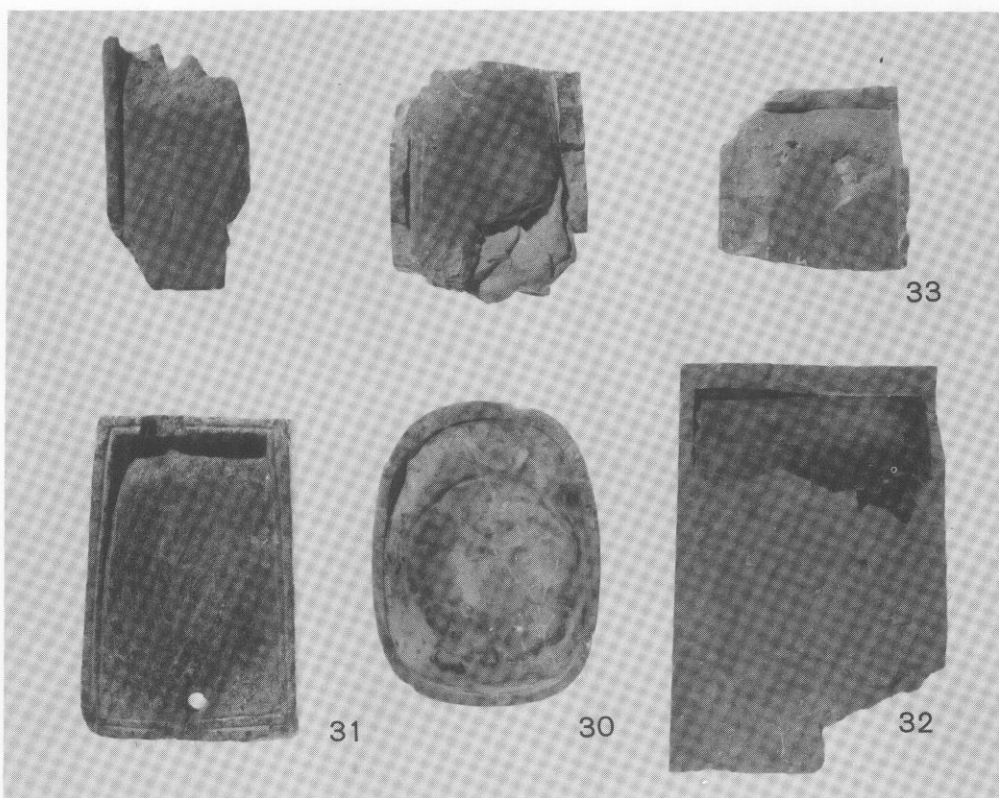
1. 滑石有(円形)孔円板・有(円形)孔製品 (29図9~12)



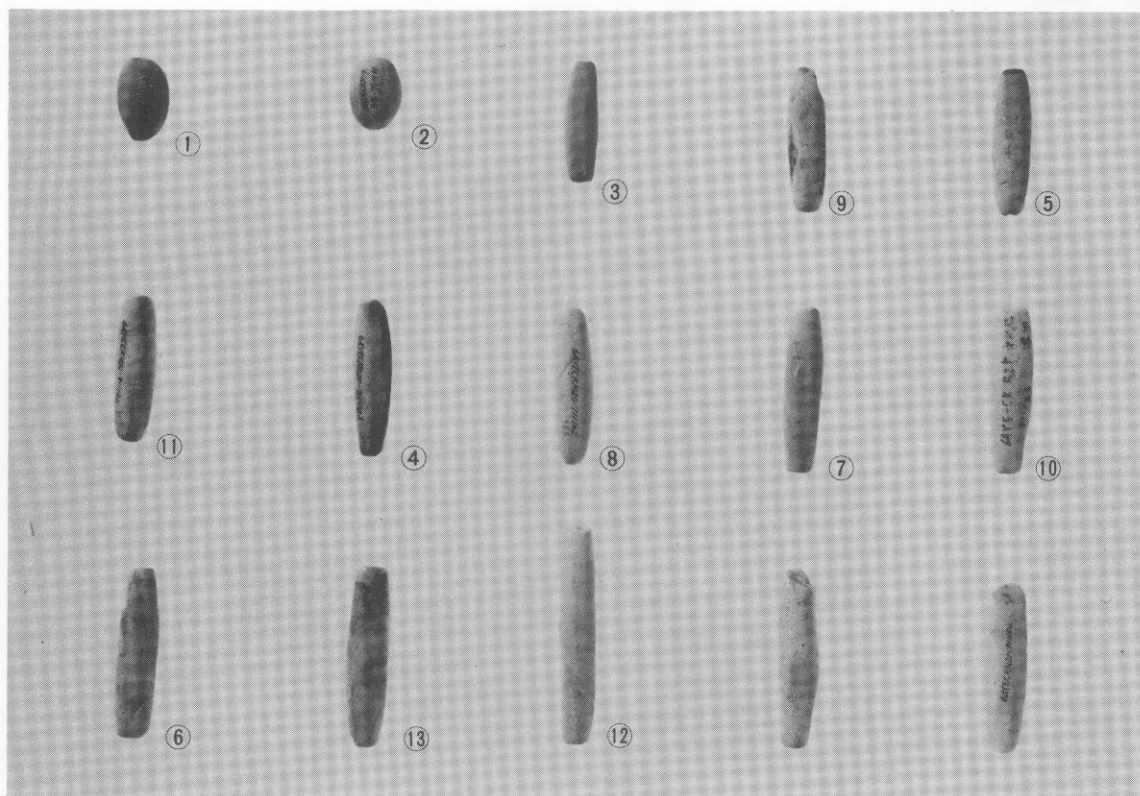
2. 滑石有孔鈕付製品 (30図14~19)



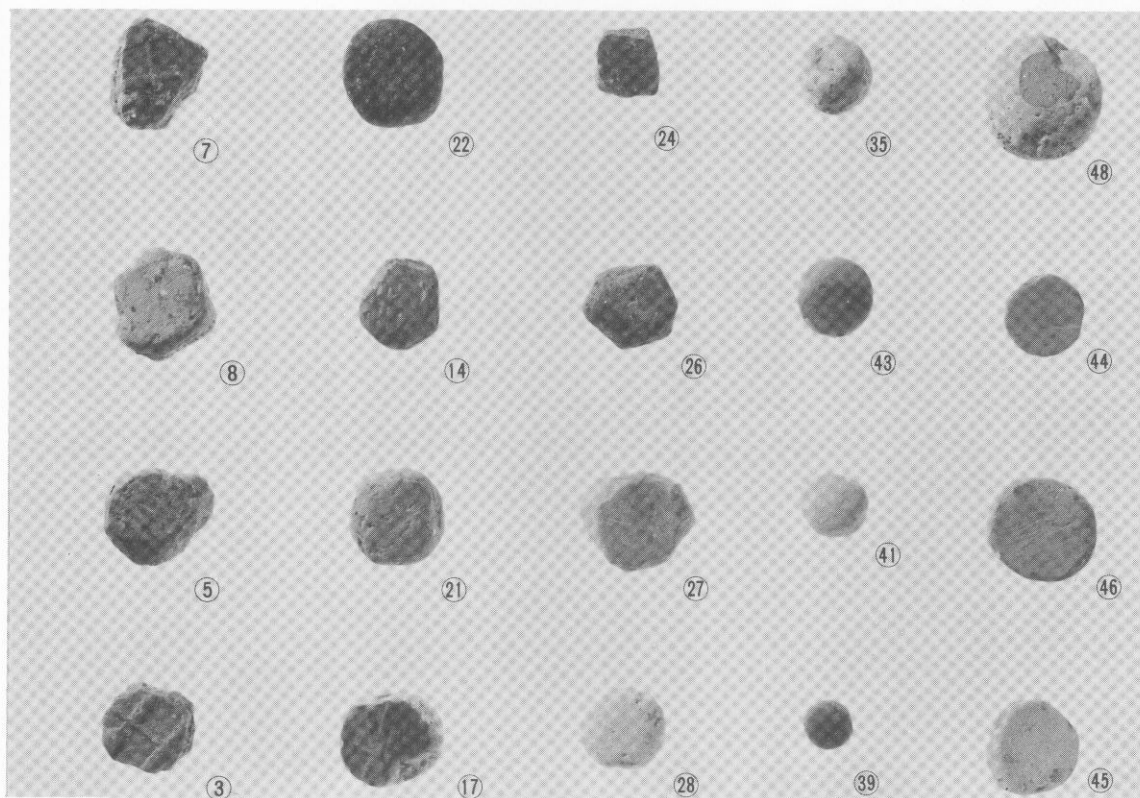
1. 滑石製品 (32図21~25)



2. 石製硯 (33図30~33)

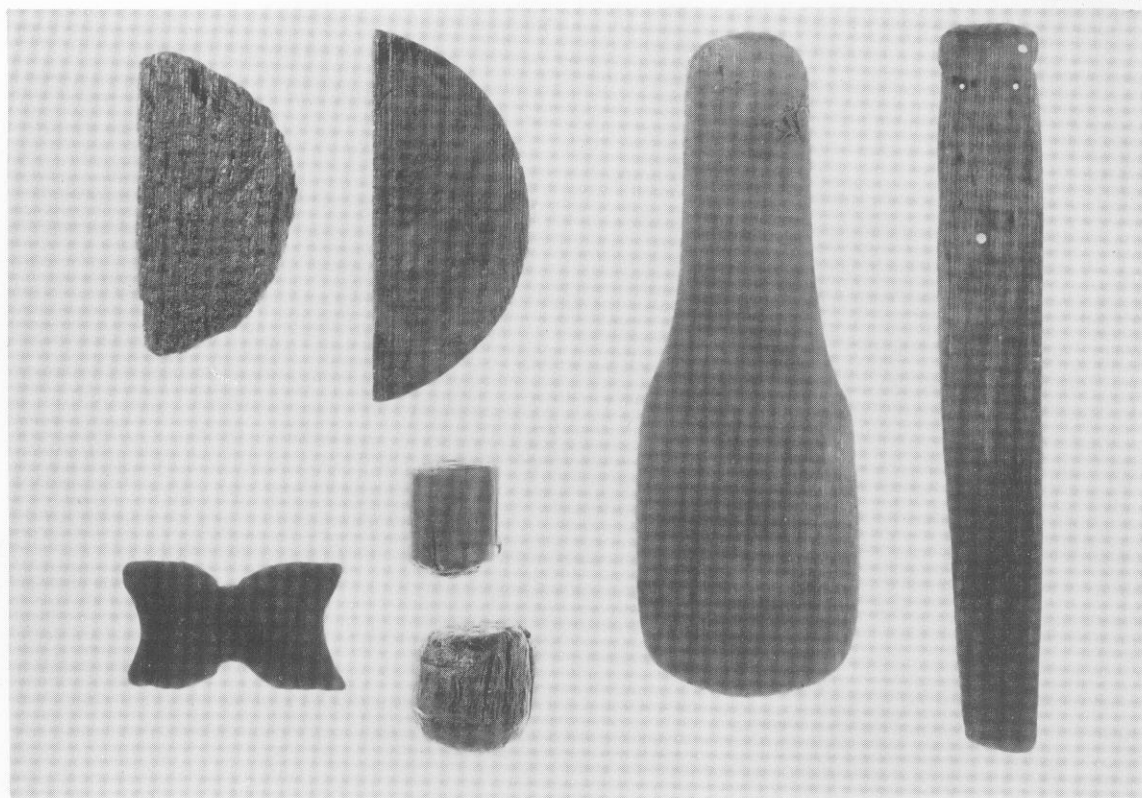


1. 土錘 (11表①~⑬)

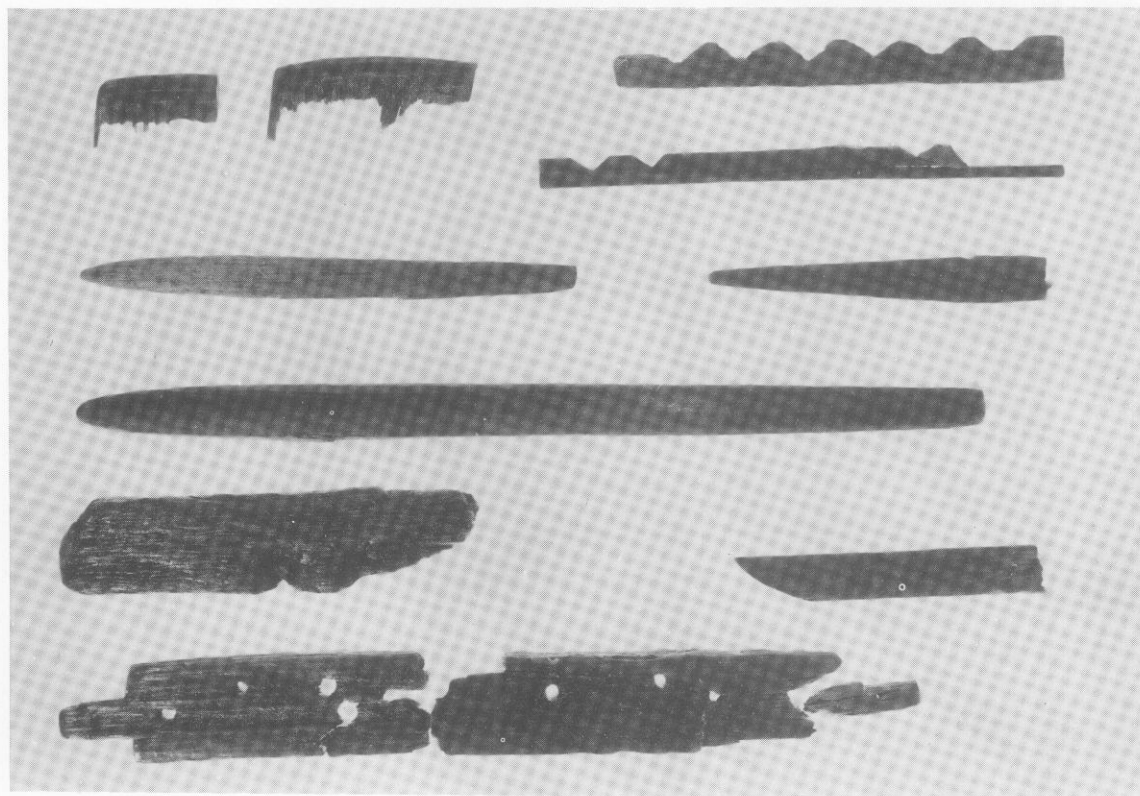


2. カワラ玉類 (12表③・⑤・⑦・⑧・⑭・⑰・⑳・㉒・㉔・㉖~㉘・㉚・㉜・㉞・㉟・㊳~㊵・㊸)

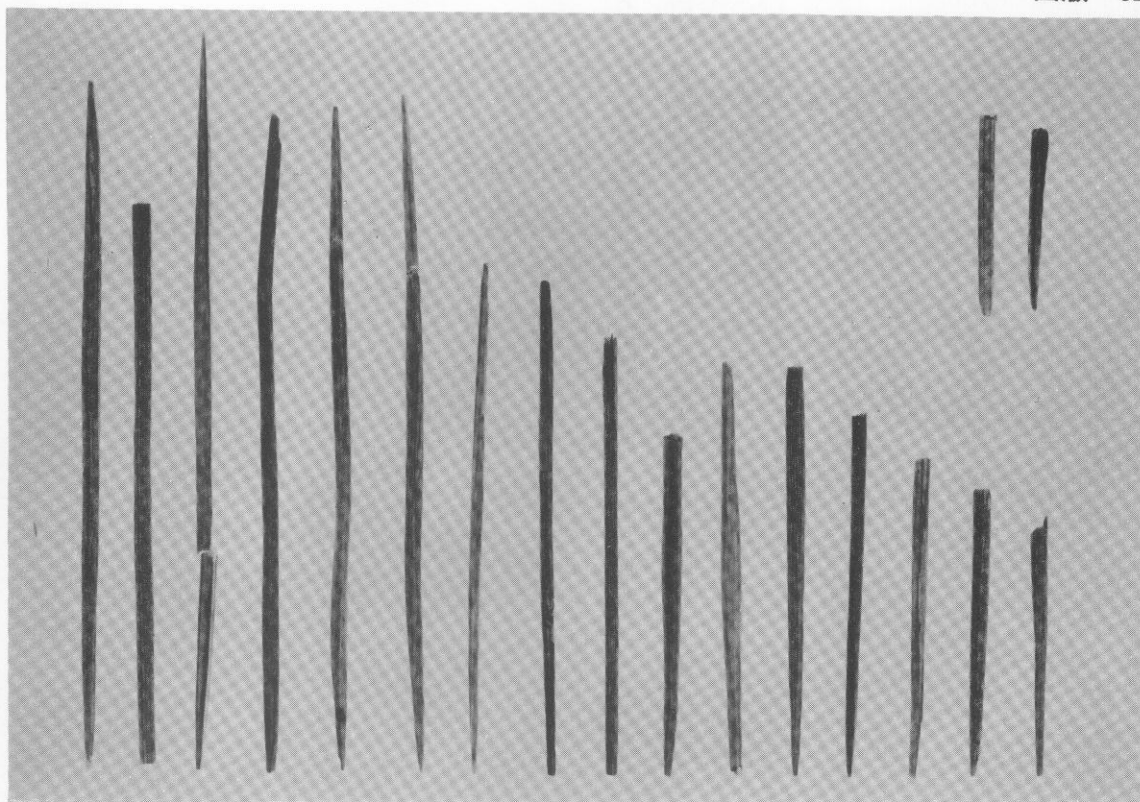




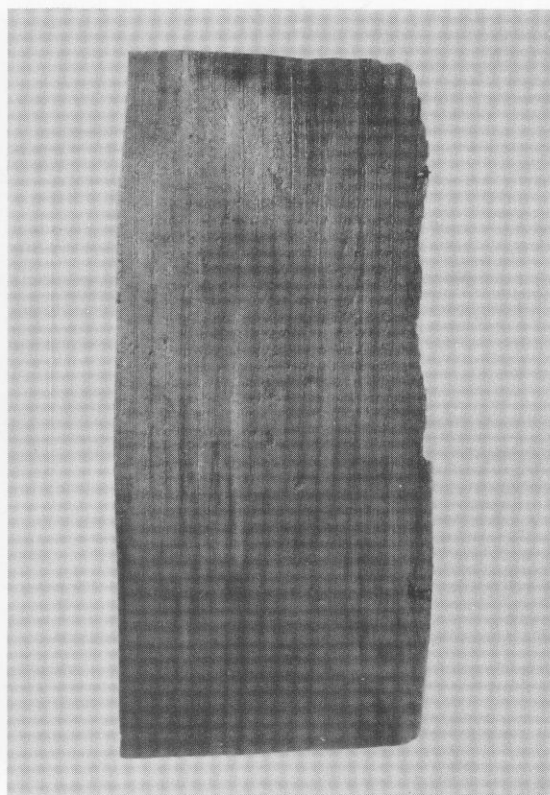
1. 木製品(1)



2. 木製品(2)



1. 木製品 (箸)

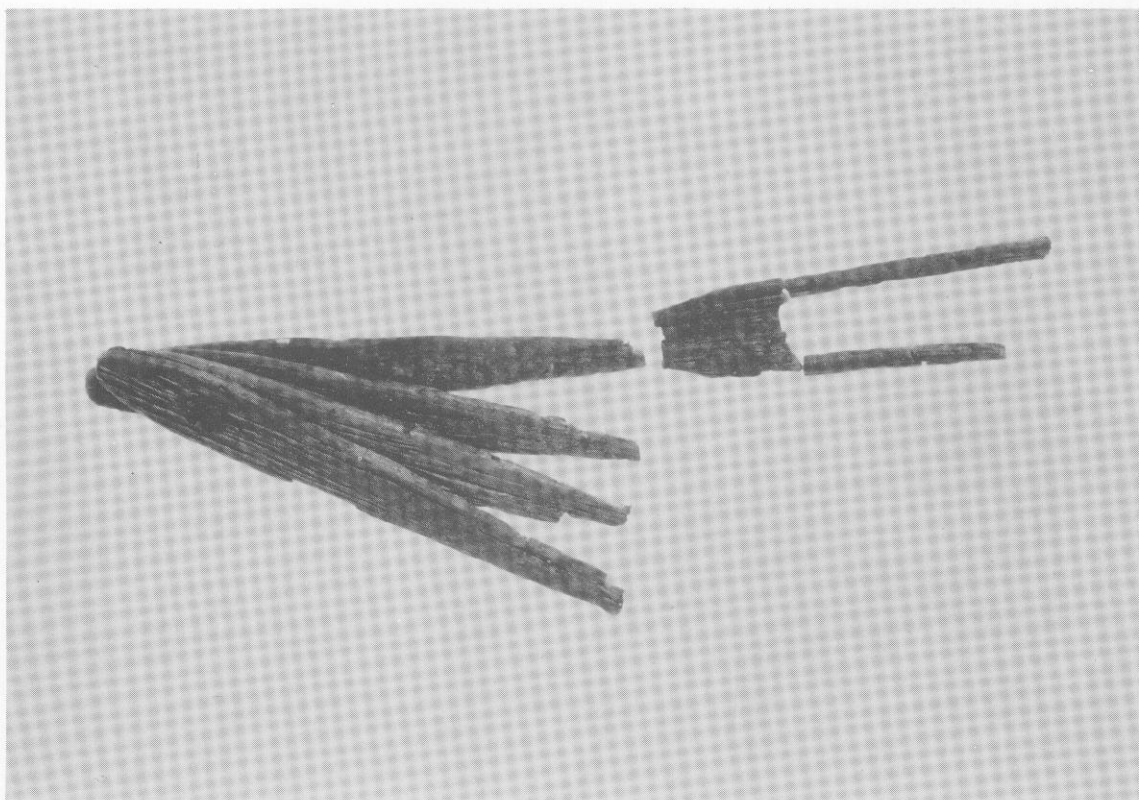


2. 木製品 (椀・折敷)

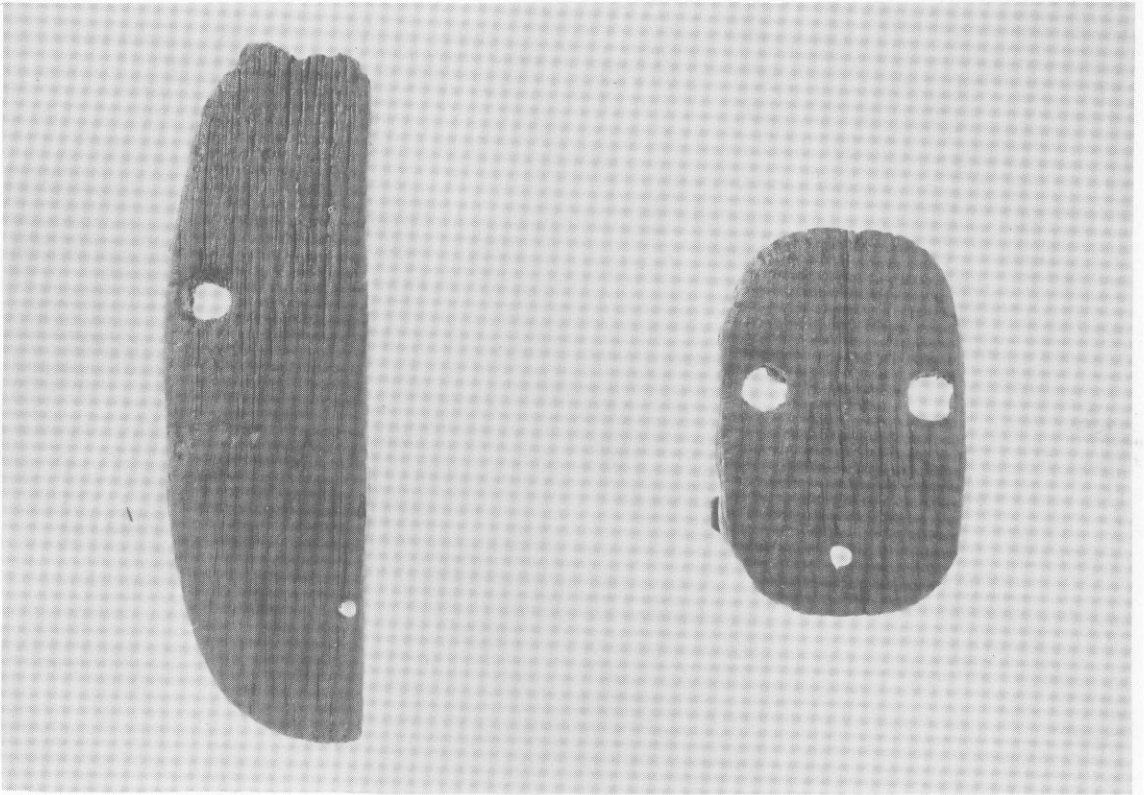




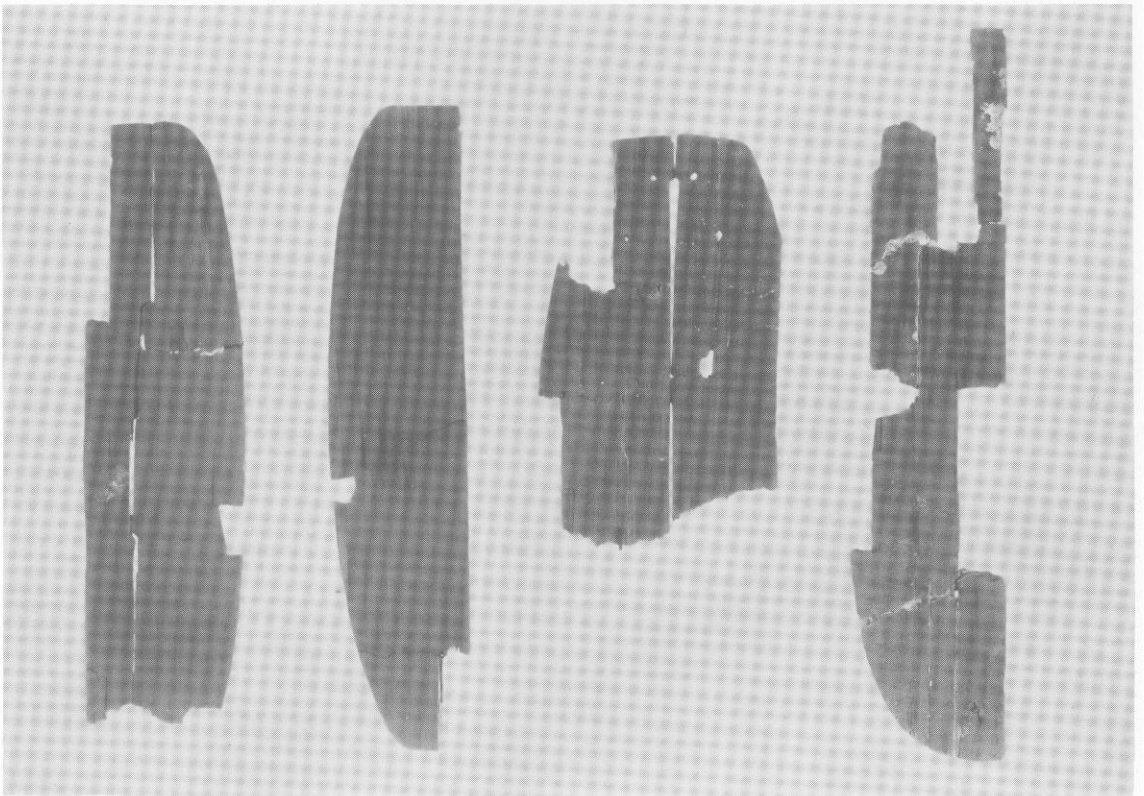
1 扇骨出土状态



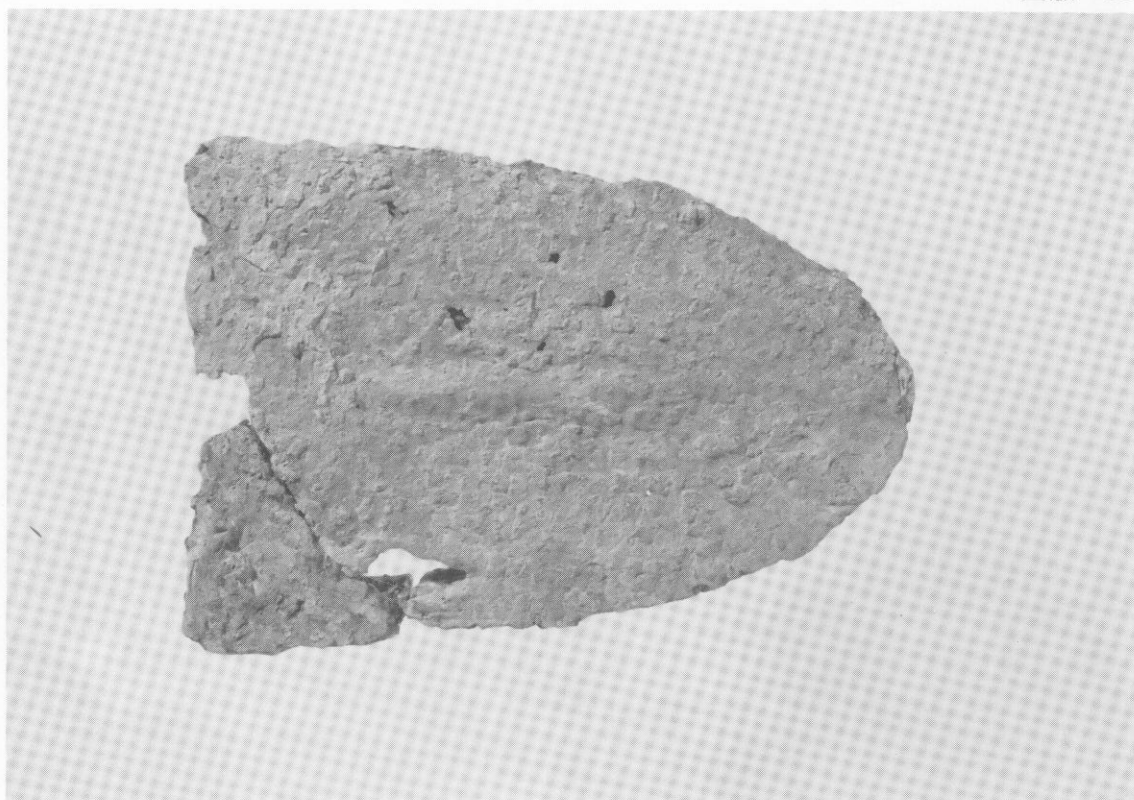
2. 扇骨



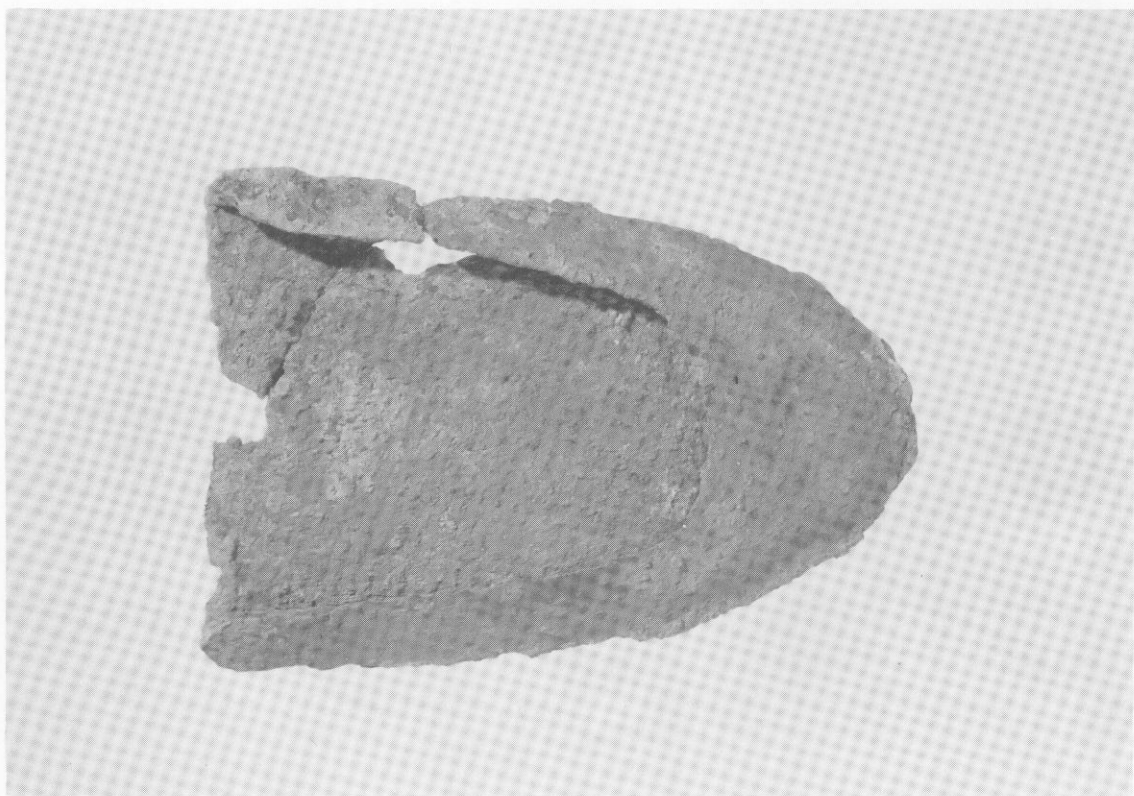
1. 下駄



2. 履物状木製品 (右端は6AYECL区出土)

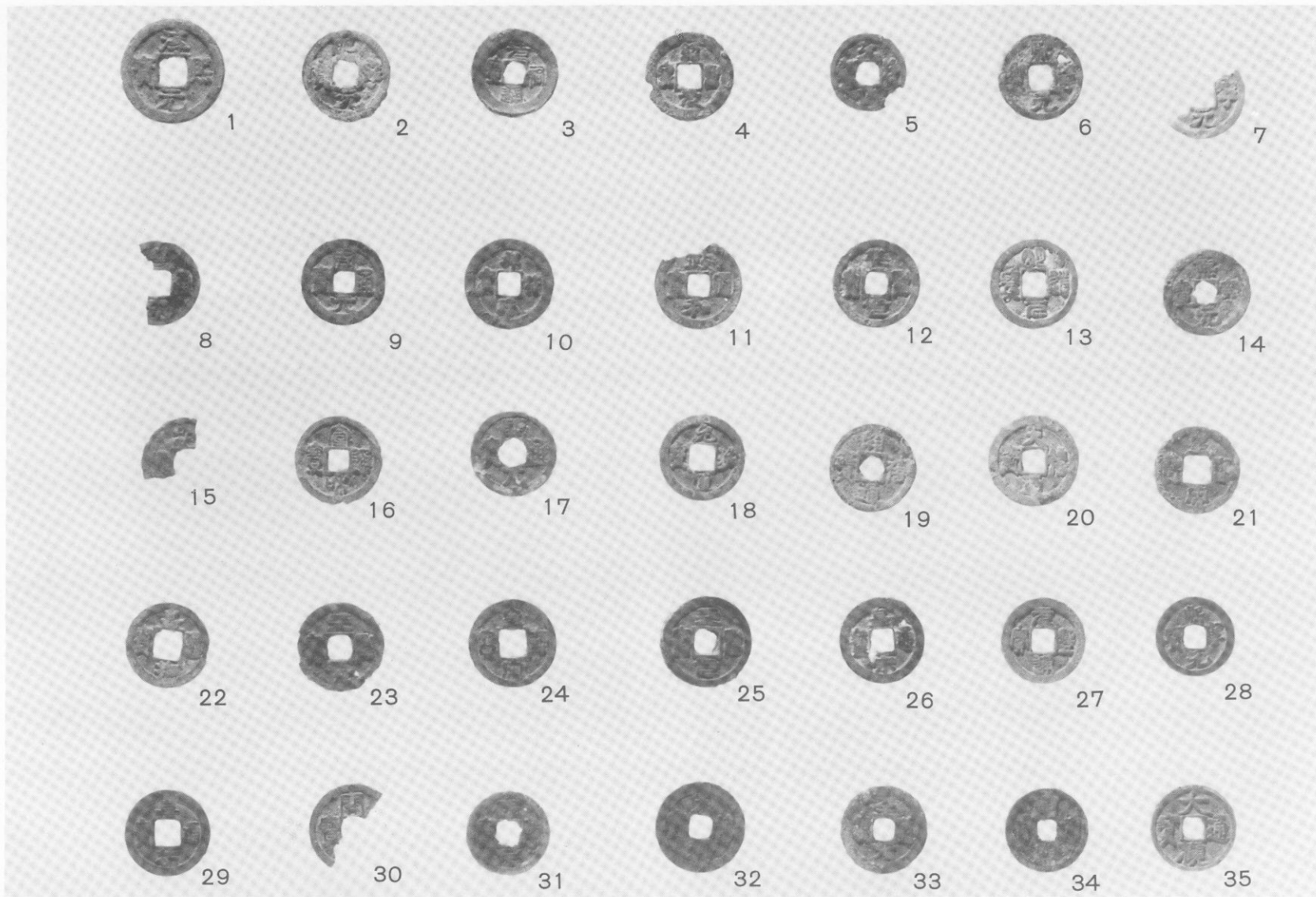


1. 犁鏡 (表)



2. 犁鏡 (裏)





銅 錢



1. 調査区全景（東から）



2. 上面遺構全景（西から）

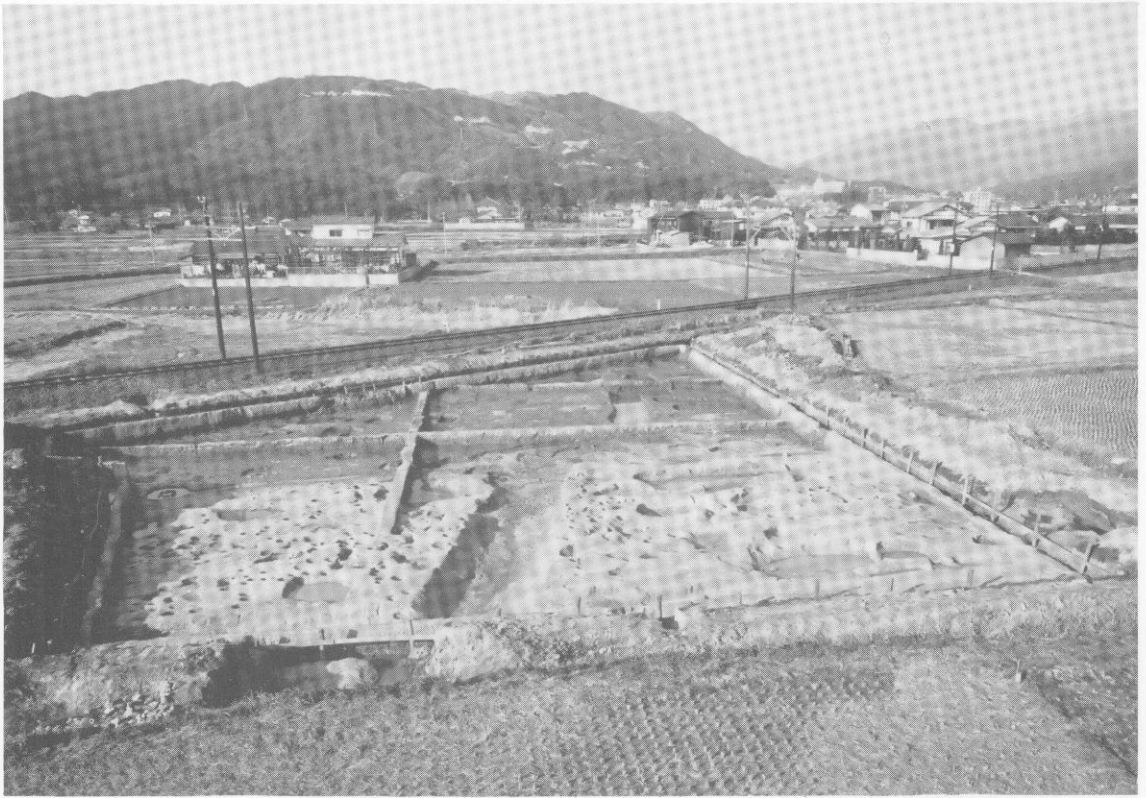




1. 上面遺構全景（整地層除去後・南から）



2. 上面遺構全景（整地層除去後・西から）

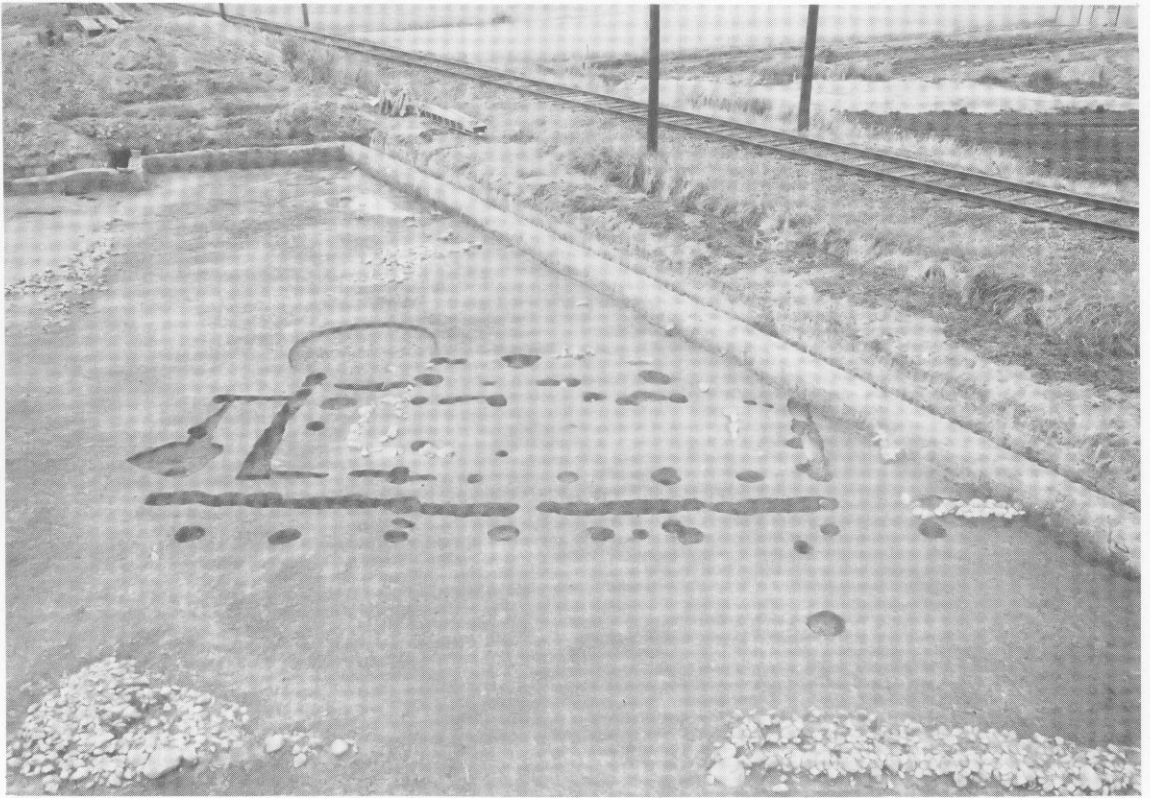


1. 下面遺構全景（南から）

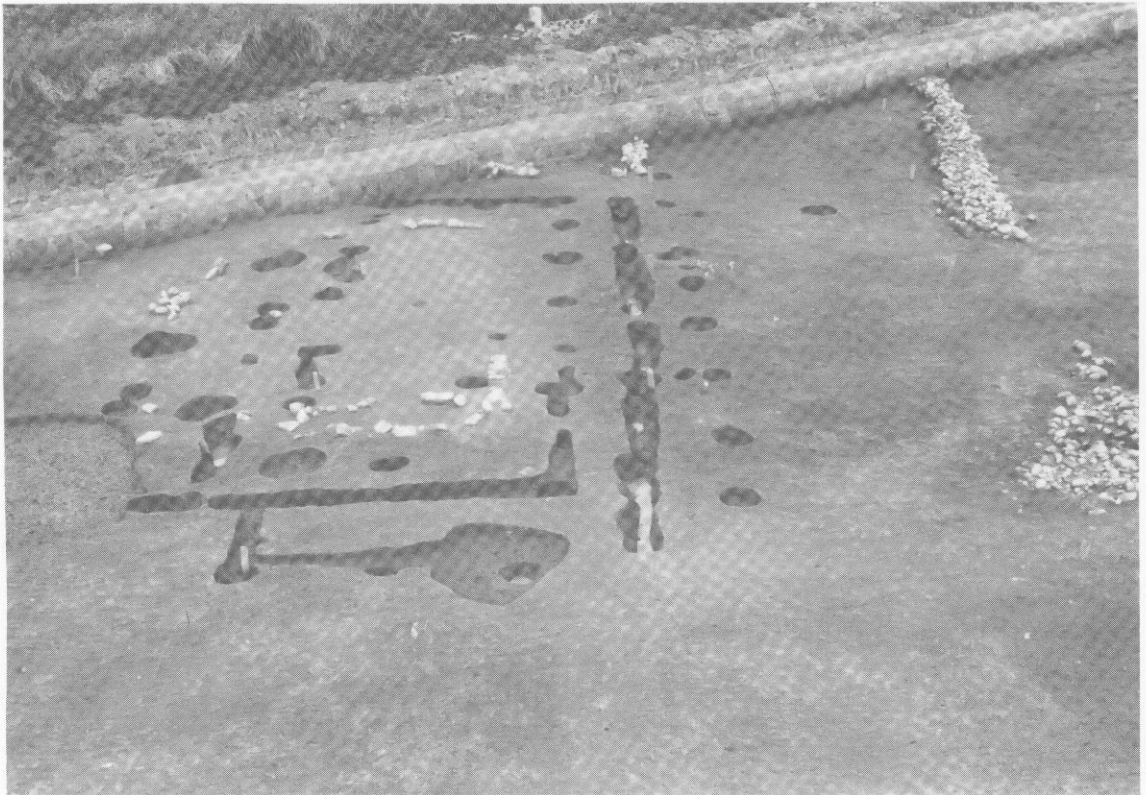


2. 下面遺構全景（西から）



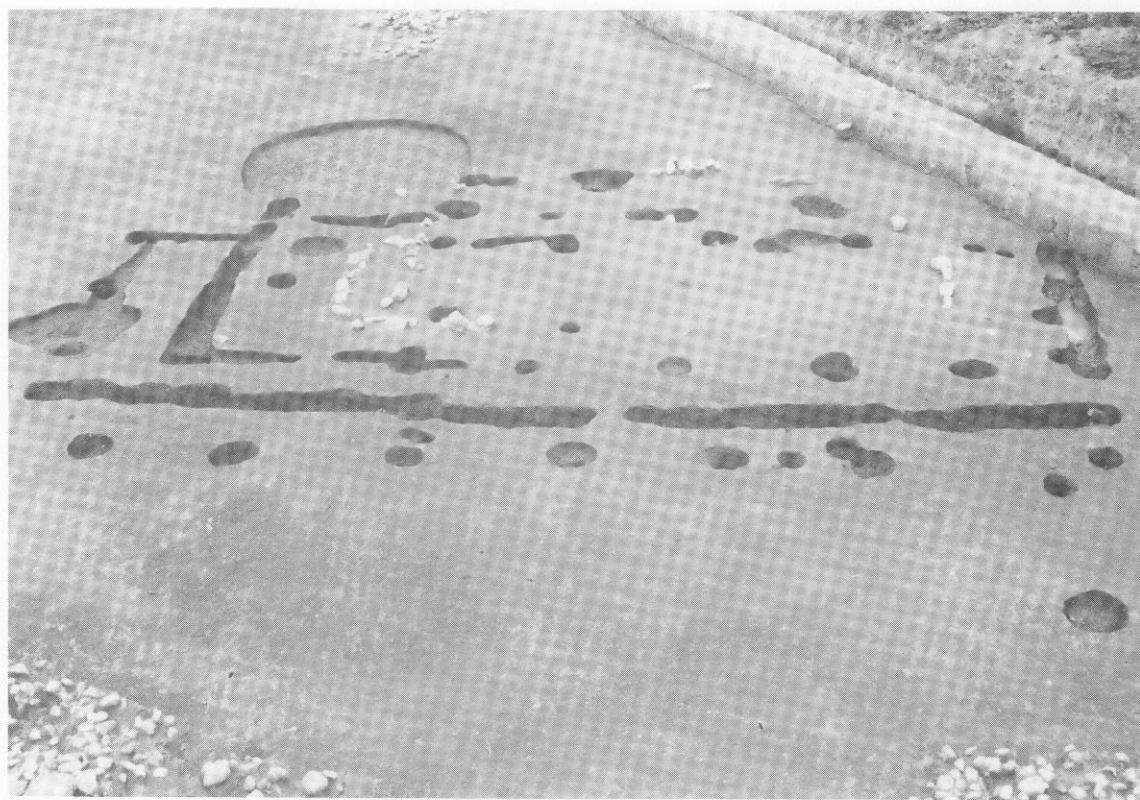


(1) S B201建物 (東から)



(2) S B201建物 (南から)





1. SB201建物近景 (東から)



2. SB201建物近景 (南から)



2. SD206溝, SE202・SE207~209井戸

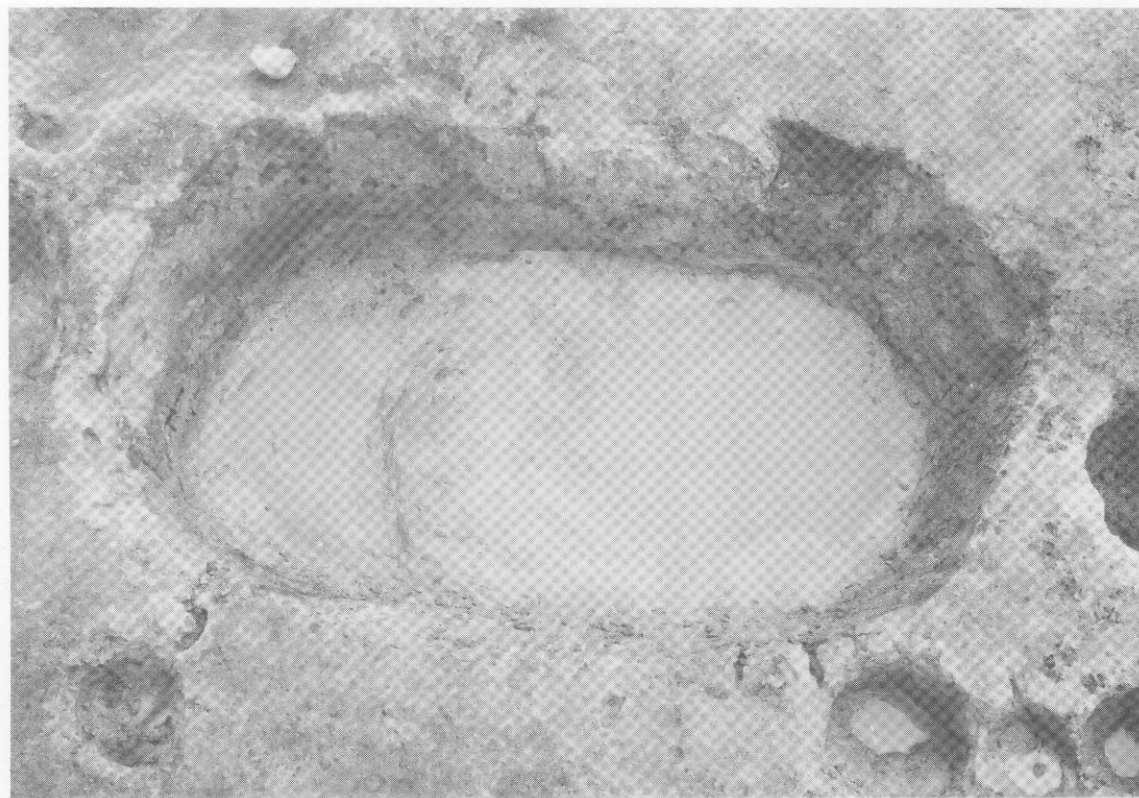


1. SD202溝, SK202~204土坑

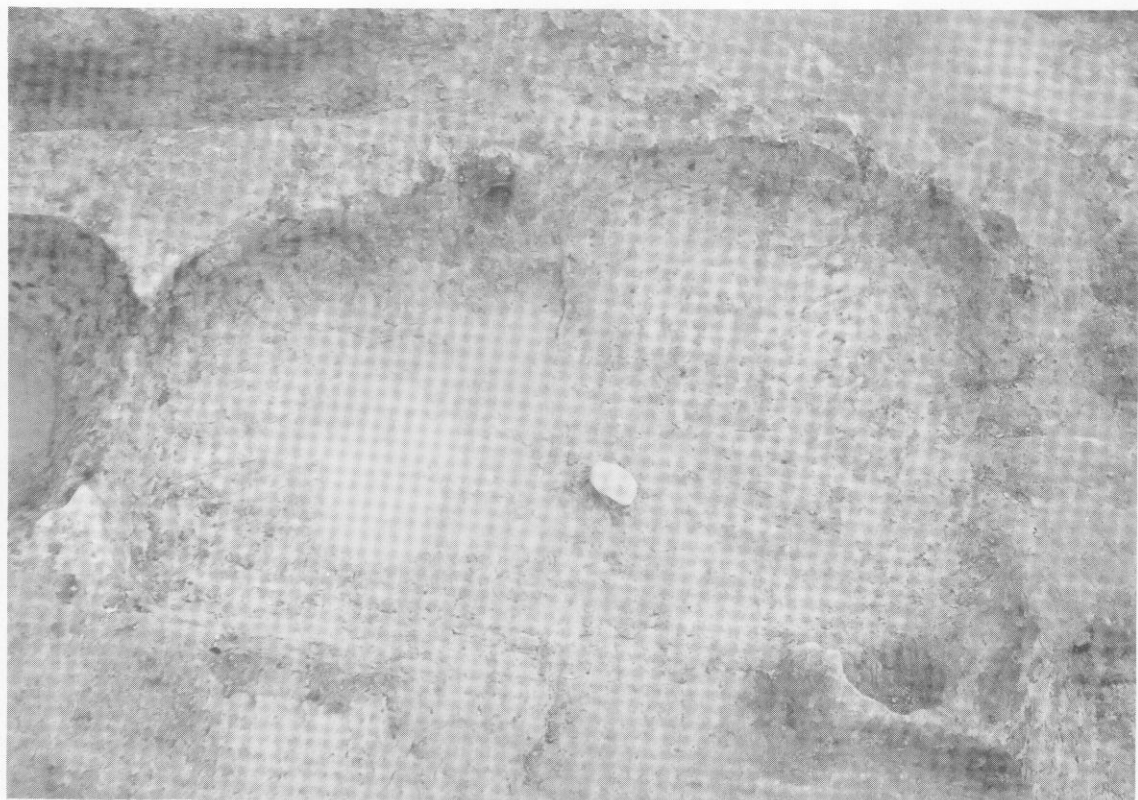




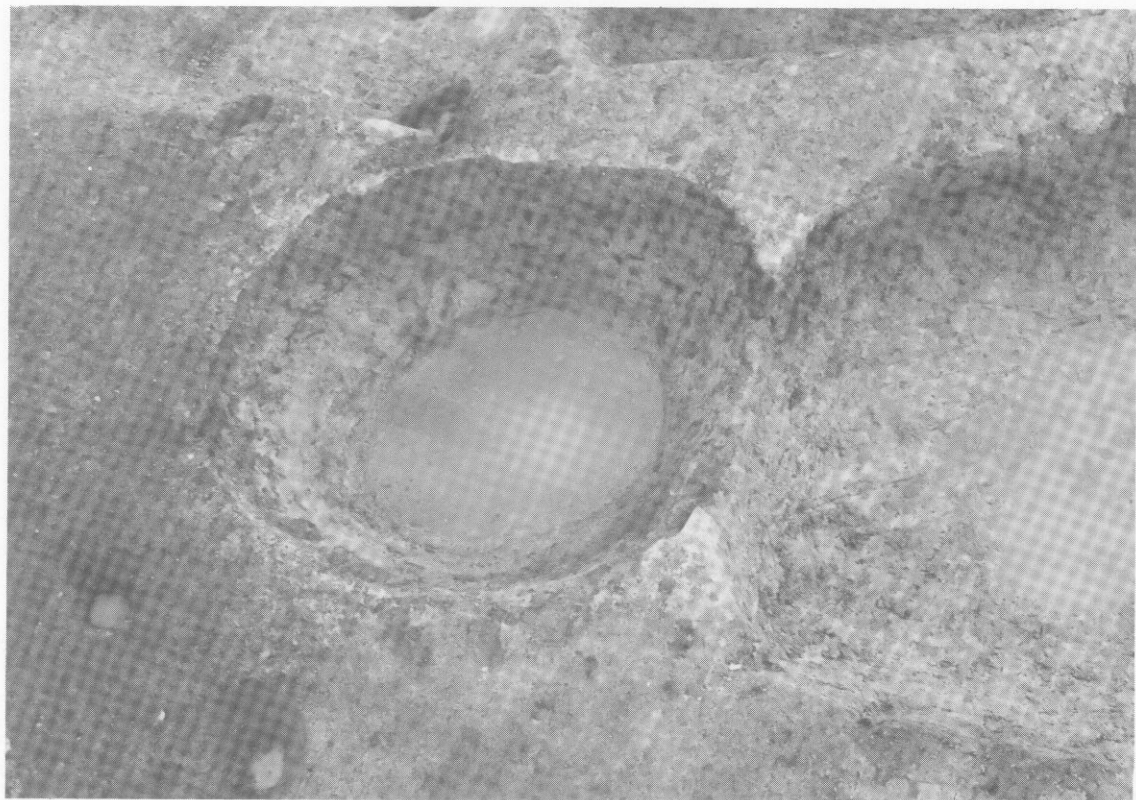
1. SK206·207土坑



1. SK216土坑



1. SK219土坑

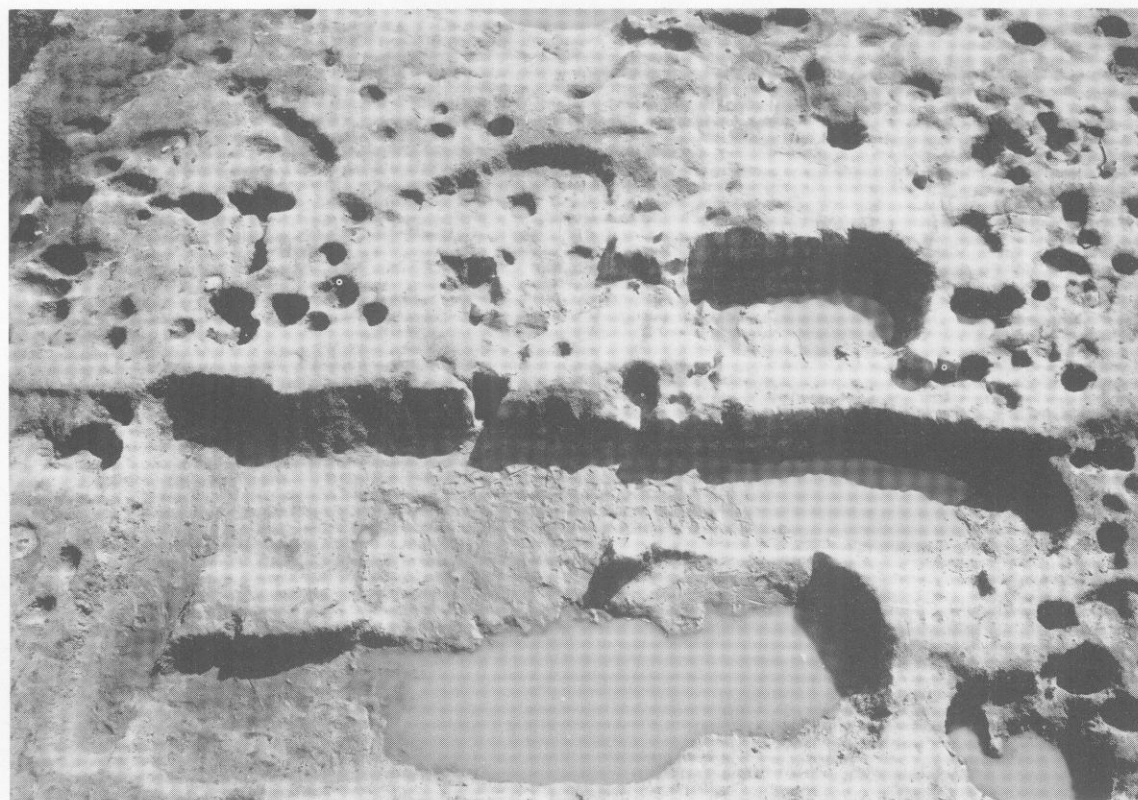


2. SK220土坑

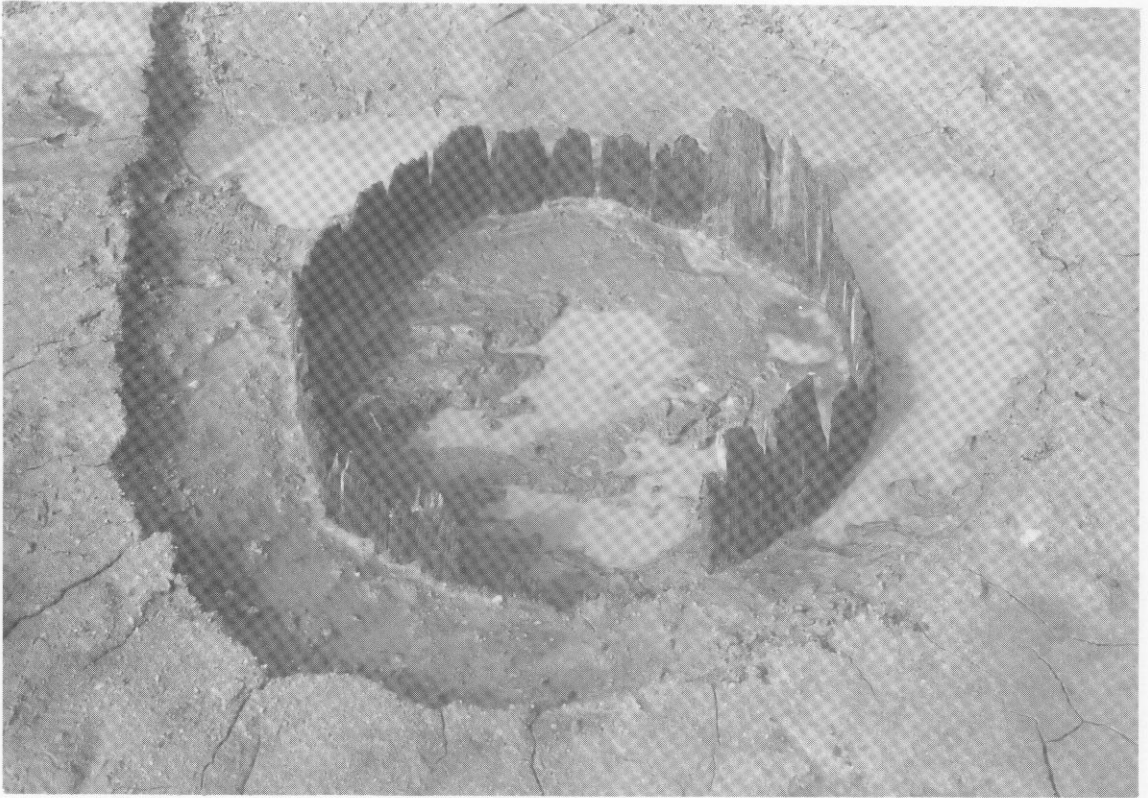




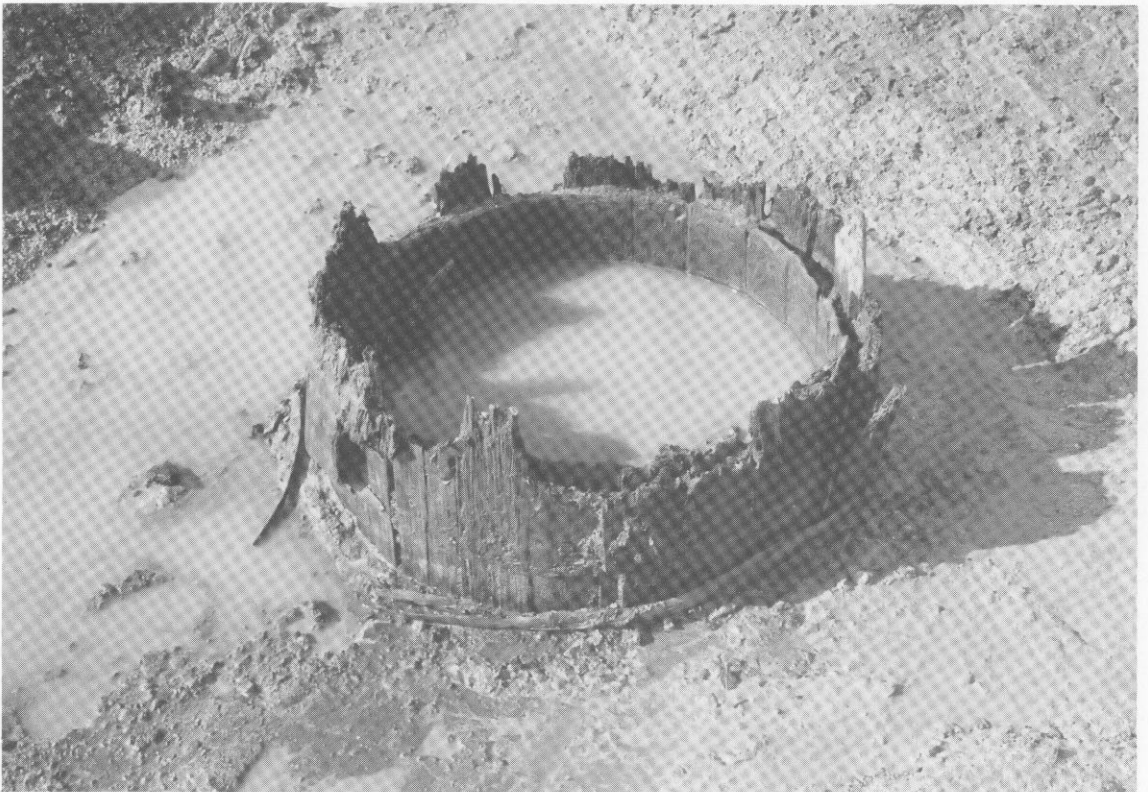
1. 下面遺構出土状態（西から）



2. S K 230~236土壇（北から）



1. SE201井戸

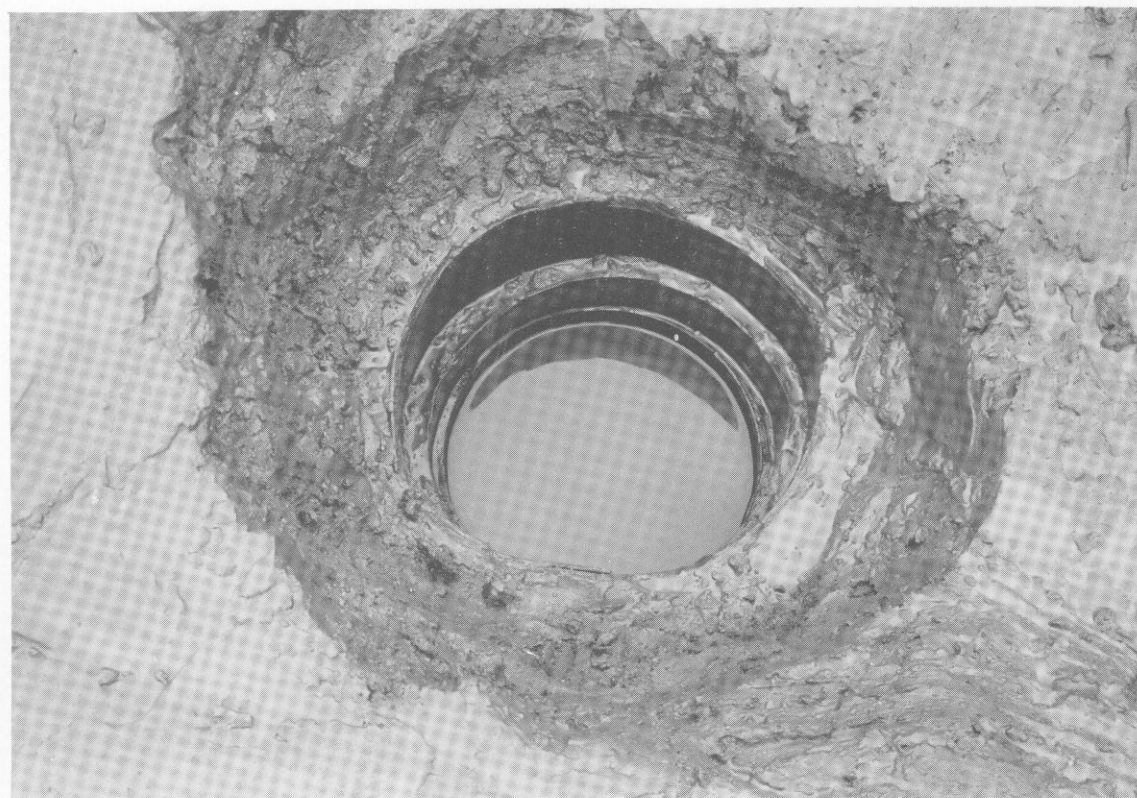


2. SE202井戸

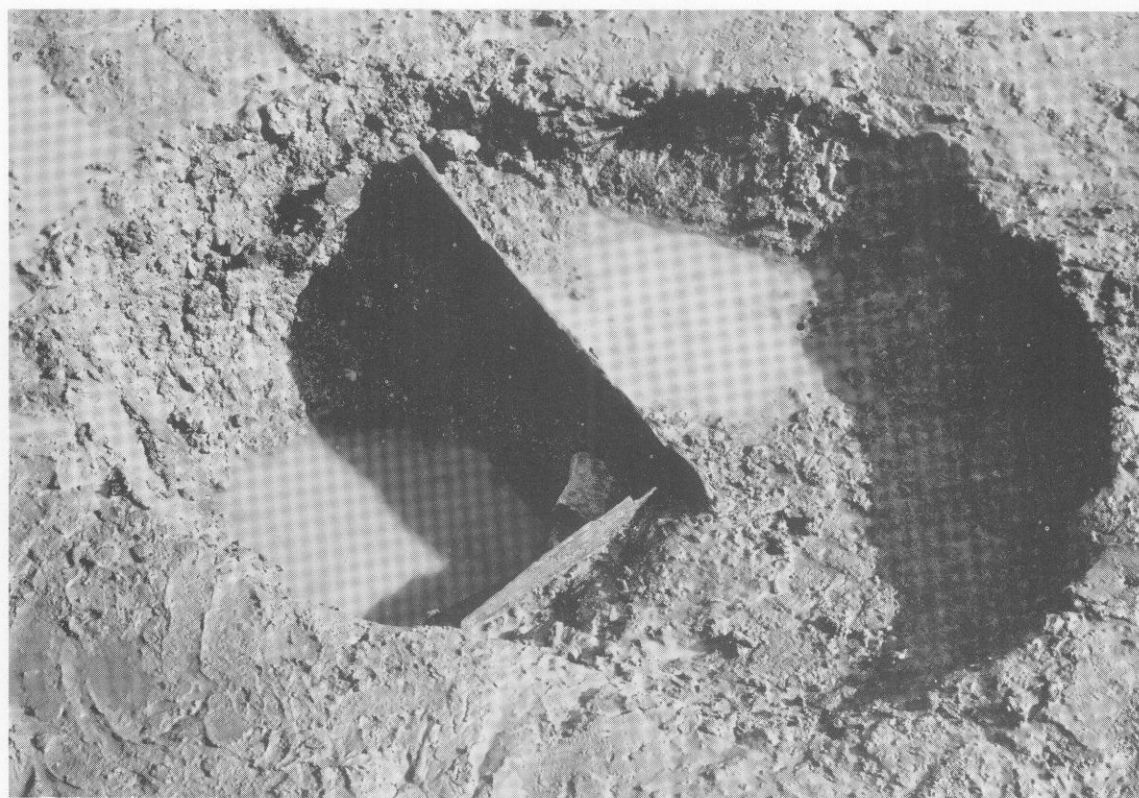




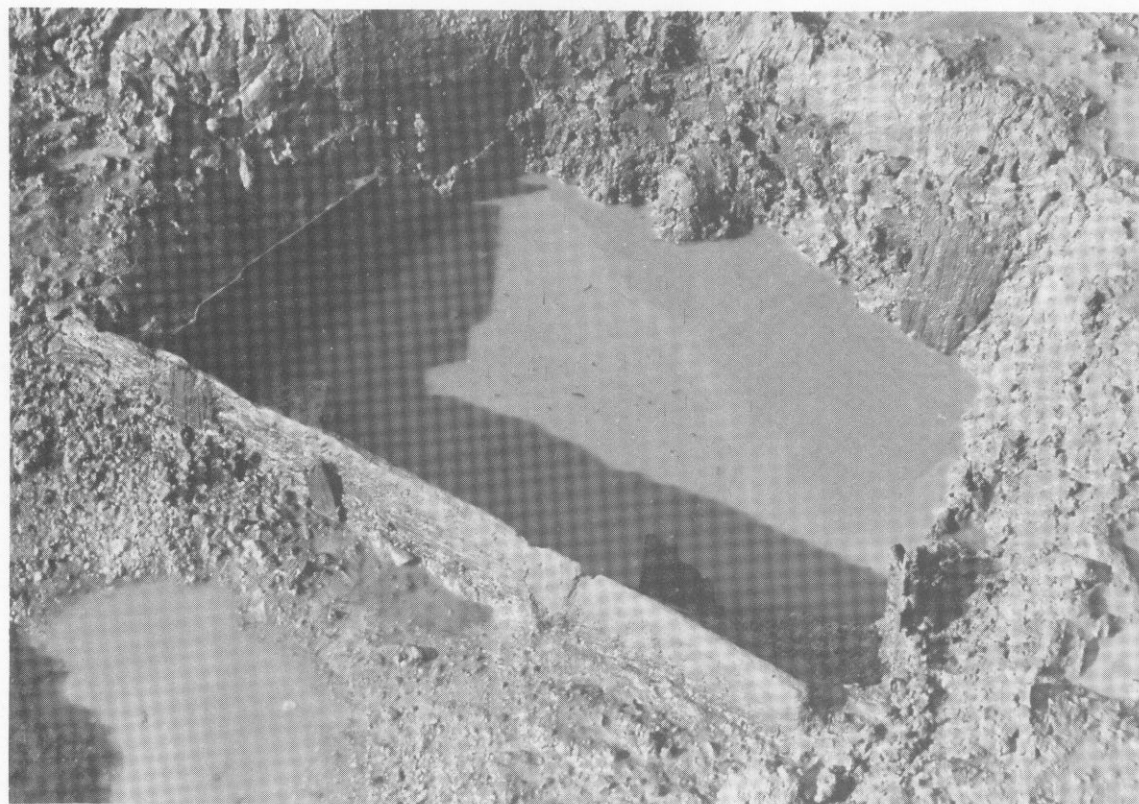
1. S E 203井戸



2. S E 206井戸

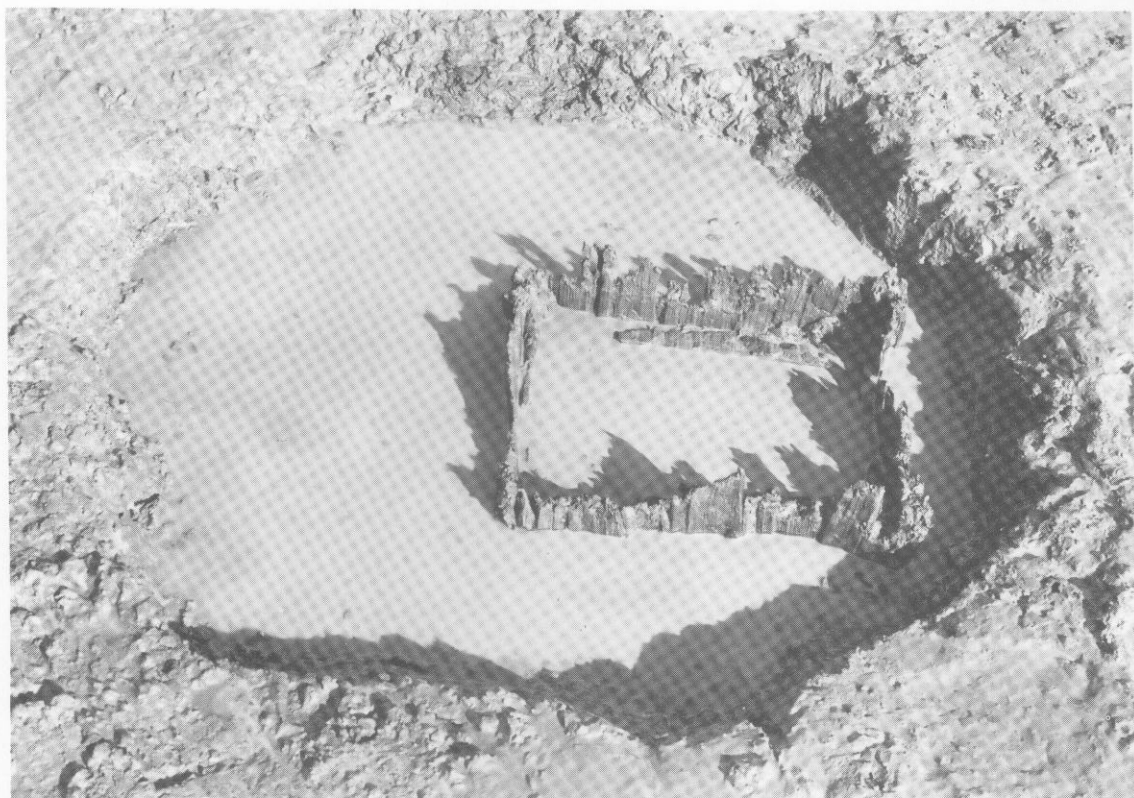


1. SE207井戸



2. SE207井戸部分





1. S E208井戸



2. S E208井戸部分

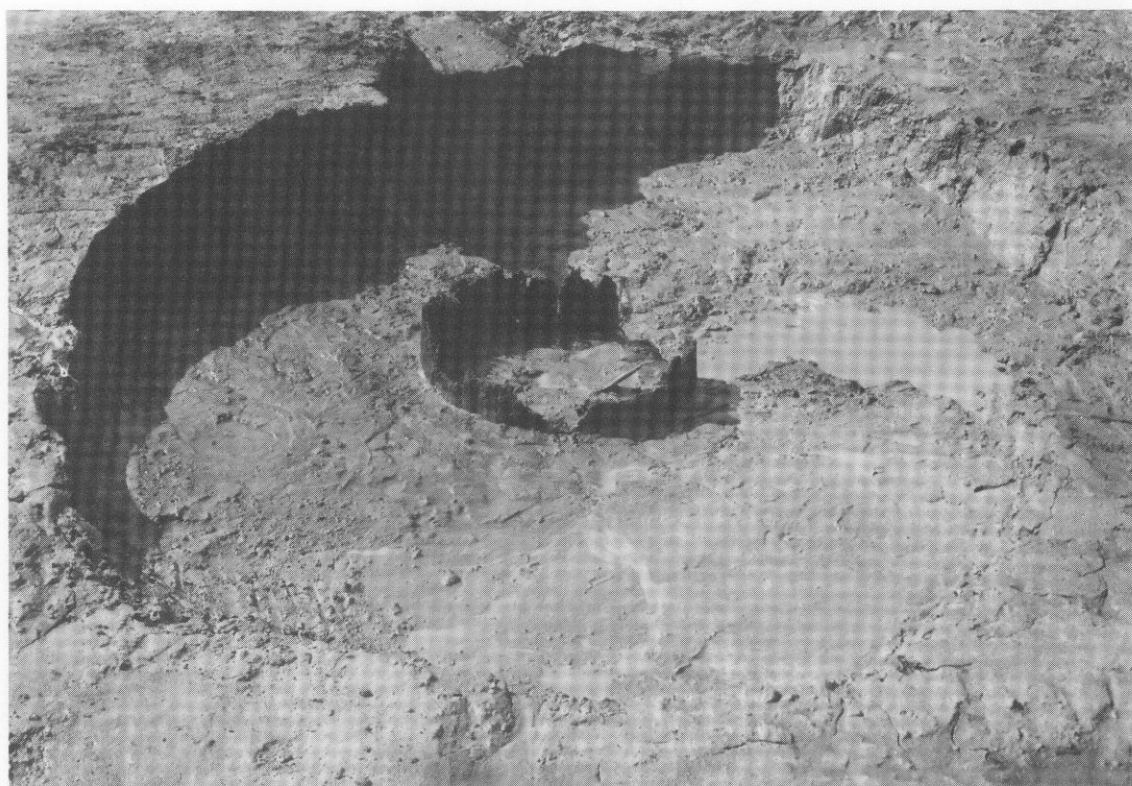


1. S E209井戸

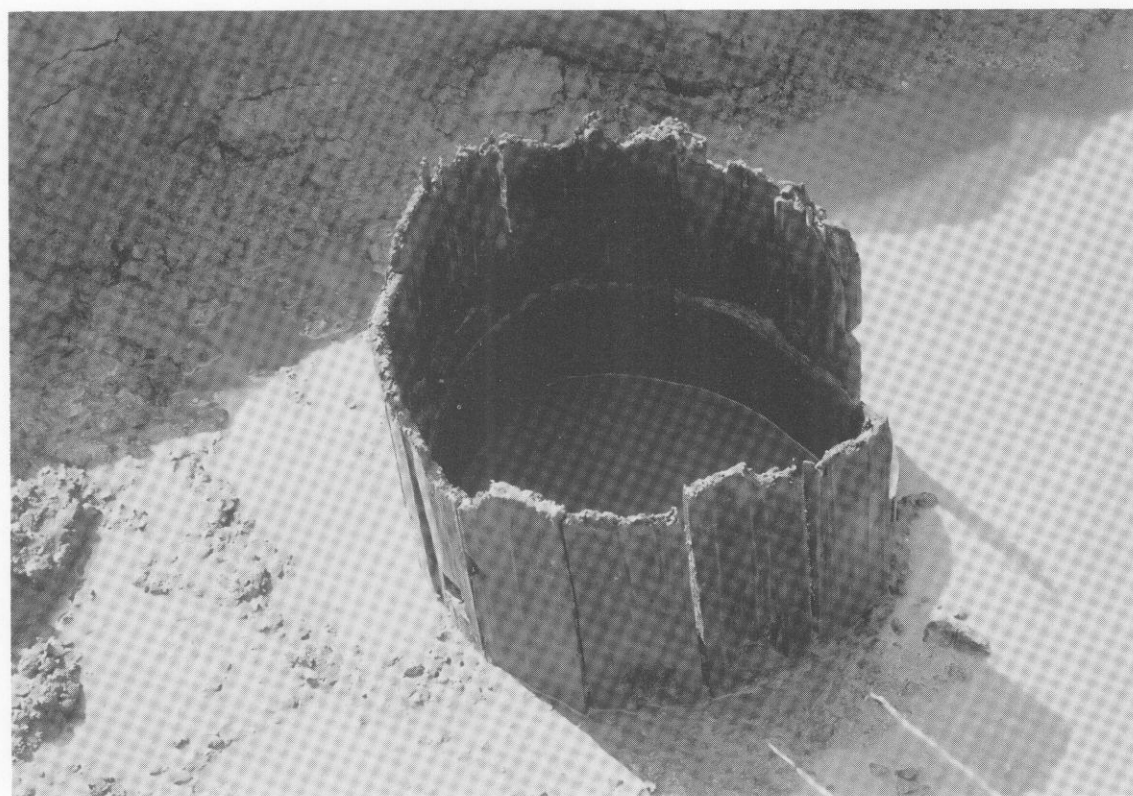


2. S E211井戸

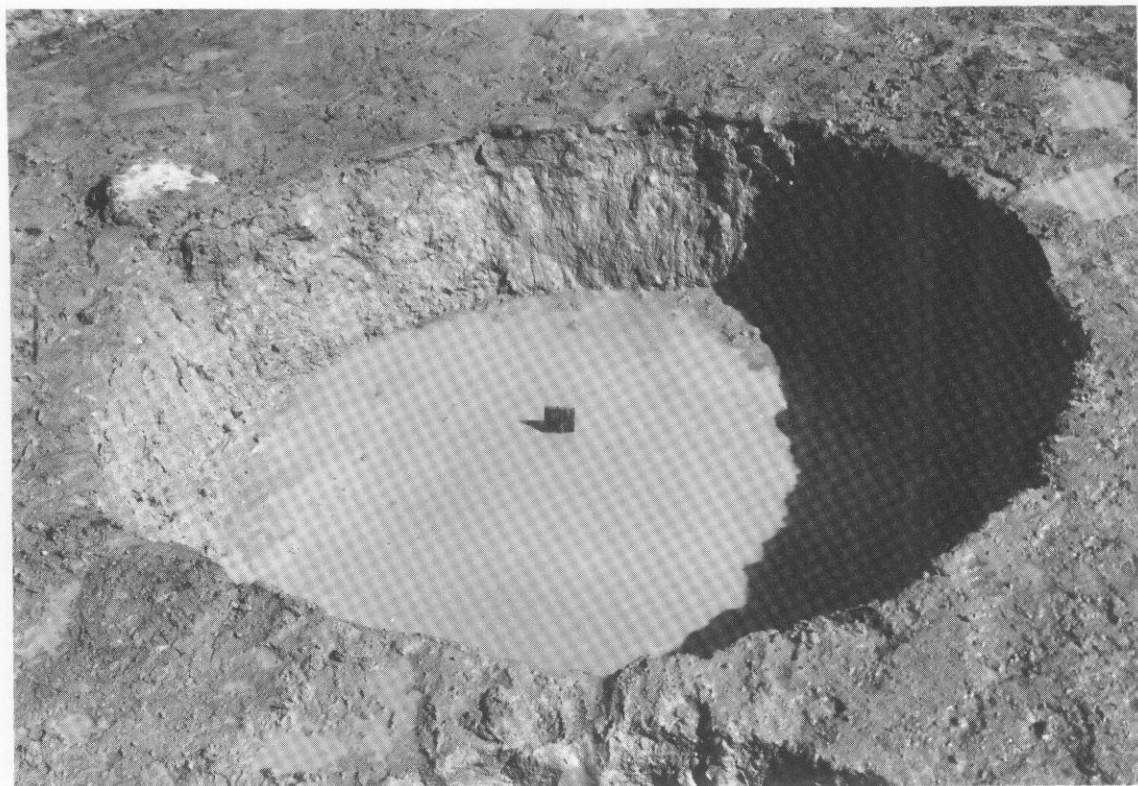




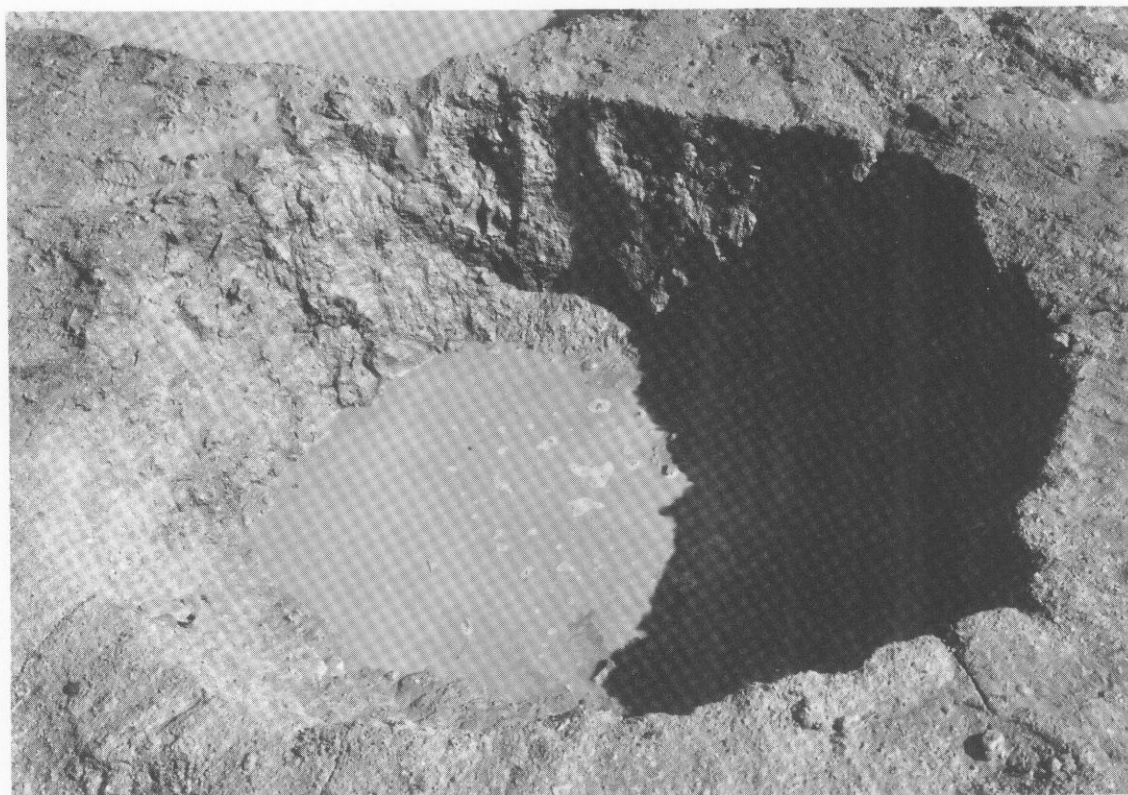
1. SE213井戸



2. SE213井戸

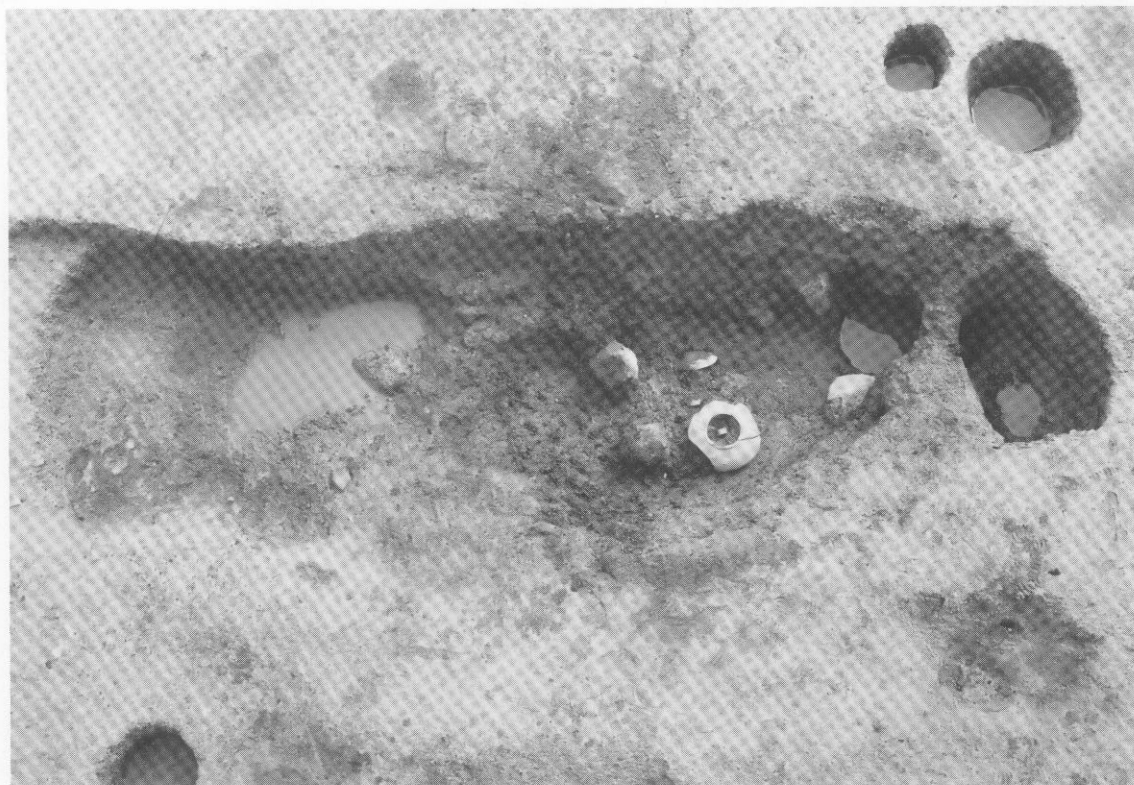


1. S E215井戸

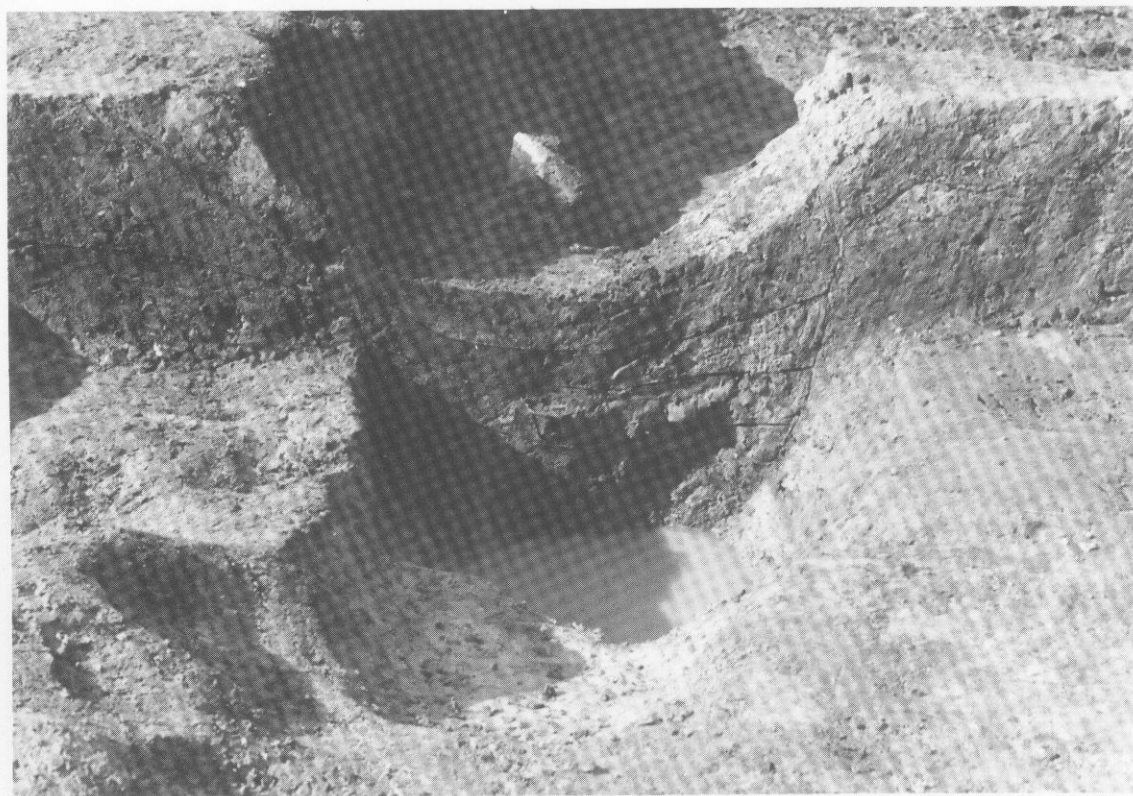


2. S E216井戸

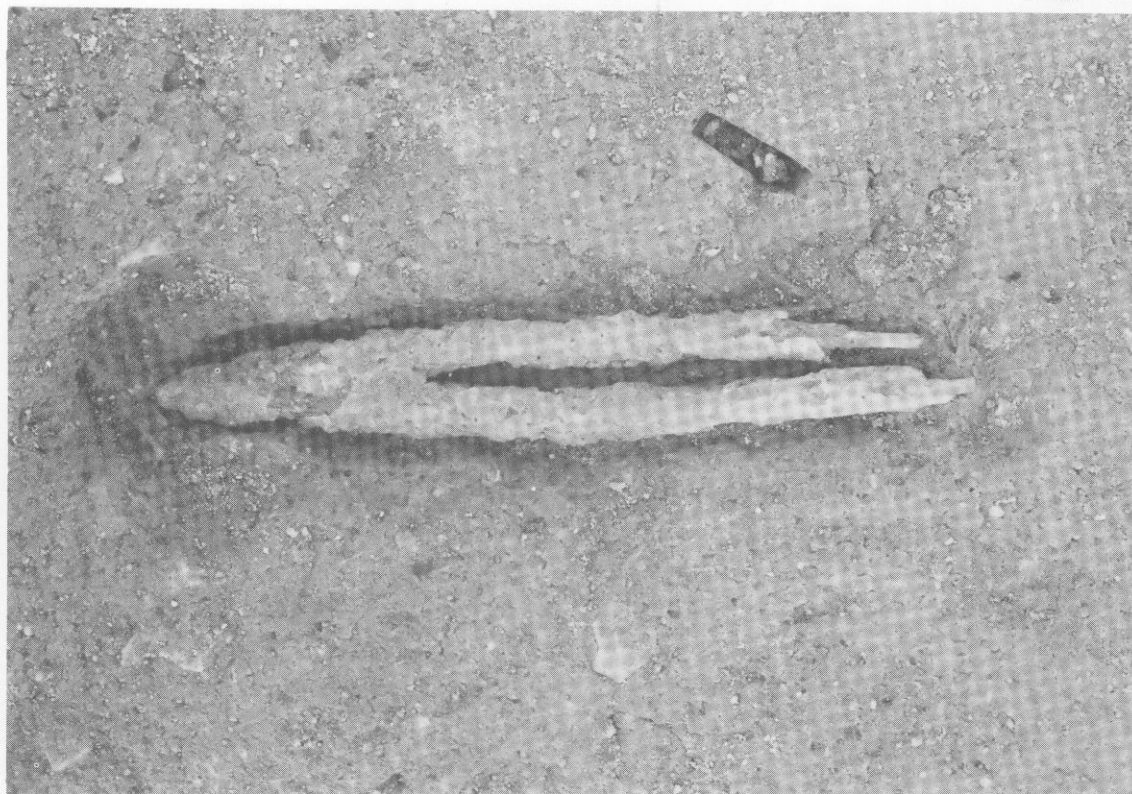




1. SX201窯跡 (北から)



2. SX201窯跡断面



1. やつとこ出土状態

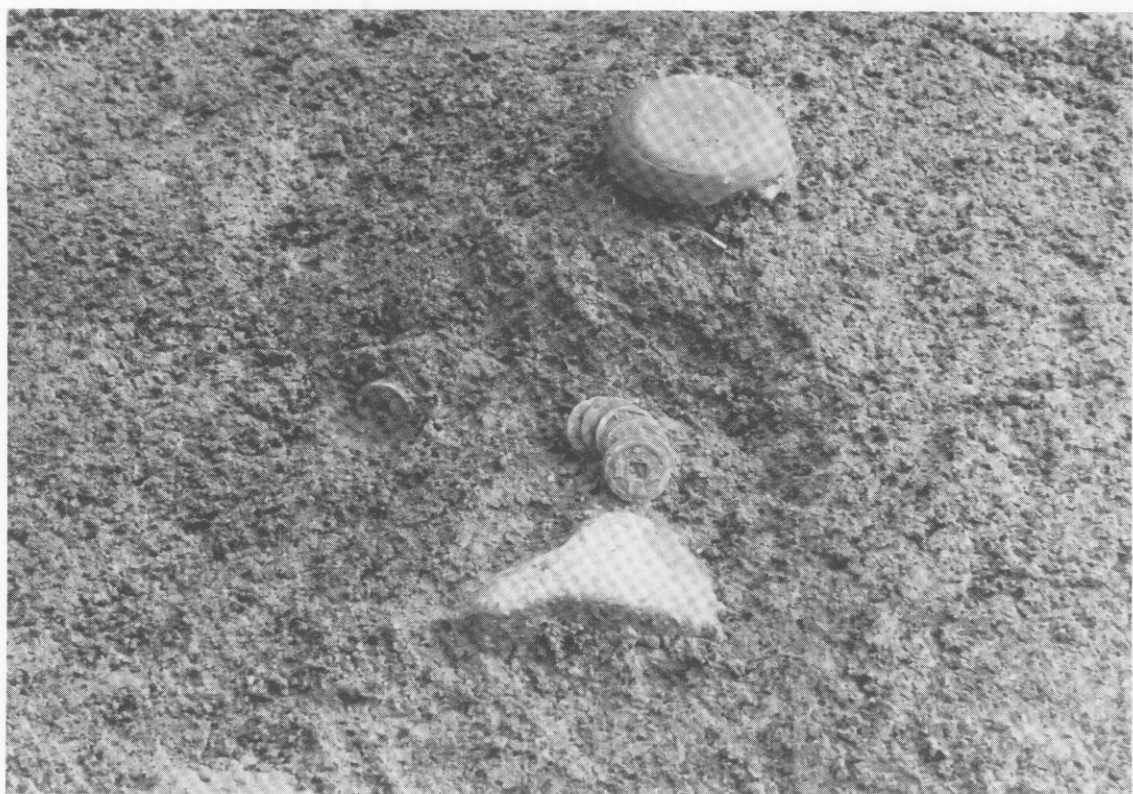


2. 華瓶鑄型出土状態

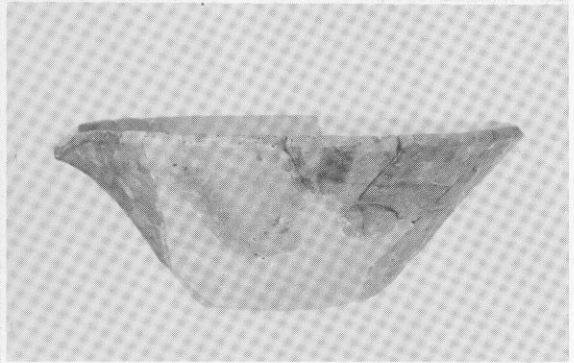
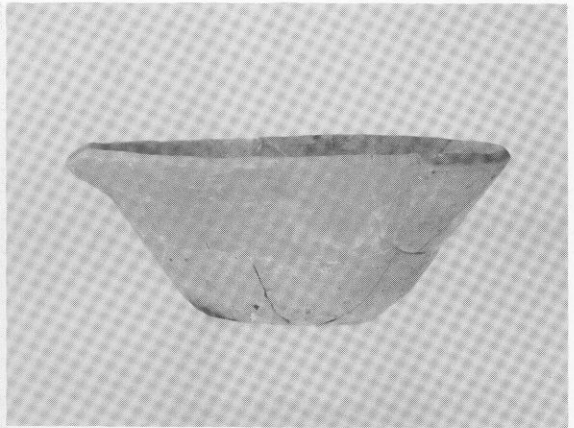




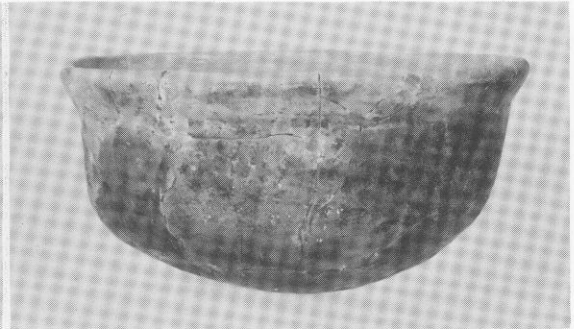
1. 土師器出土狀態



2. 銅錢出土狀態



1. 須恵質および瓦質土器

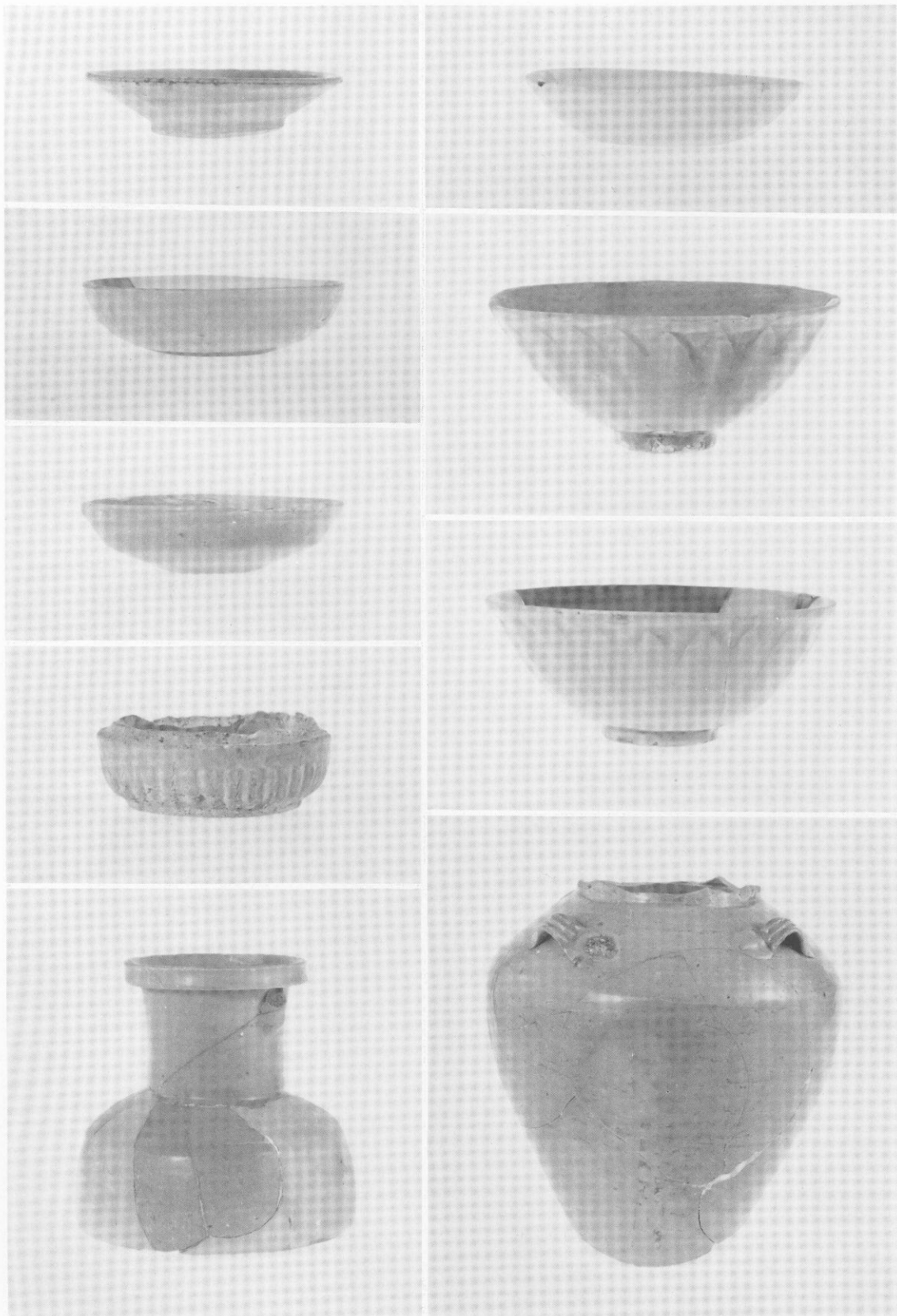


2. 土鍋

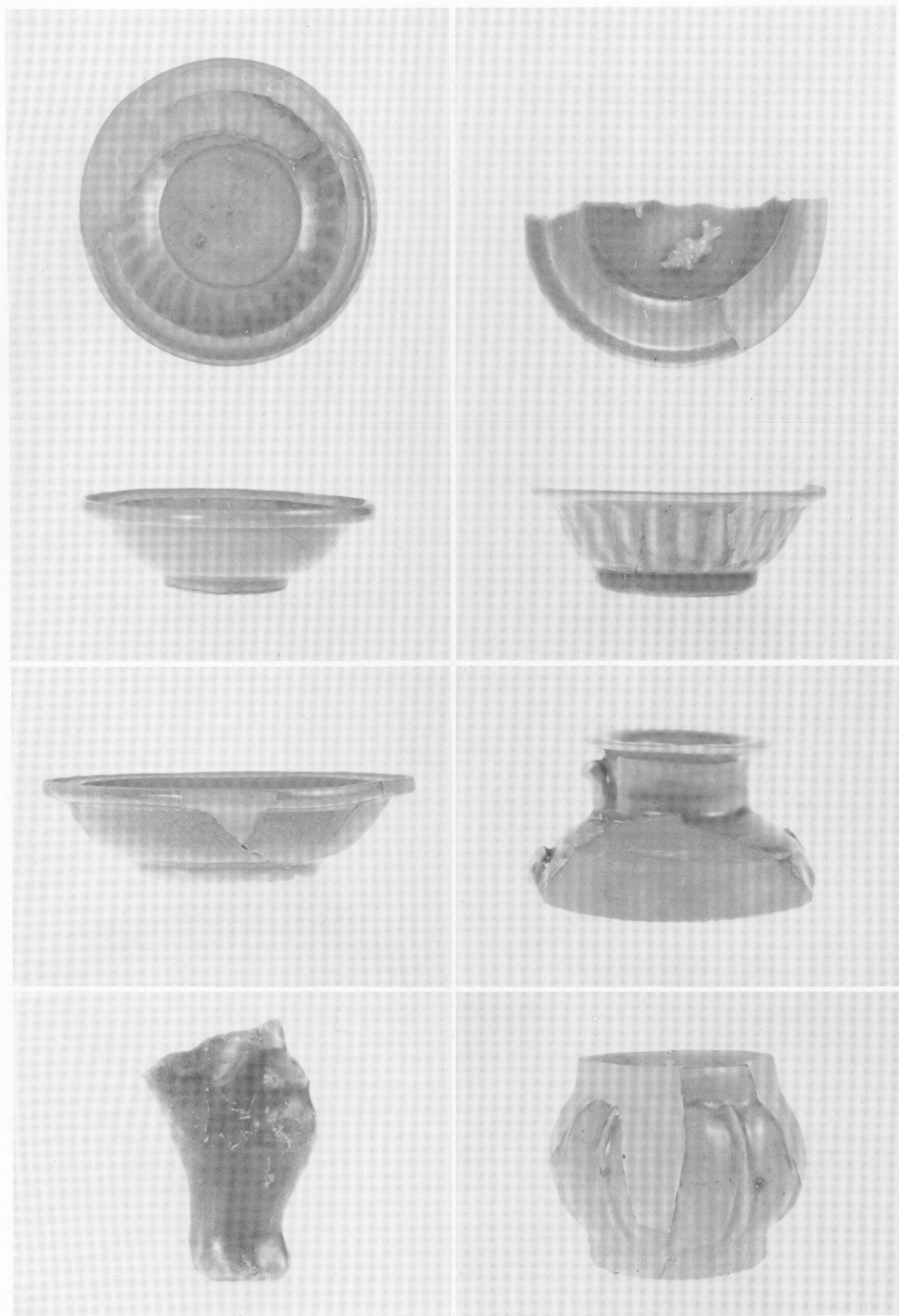


3. 石鍋

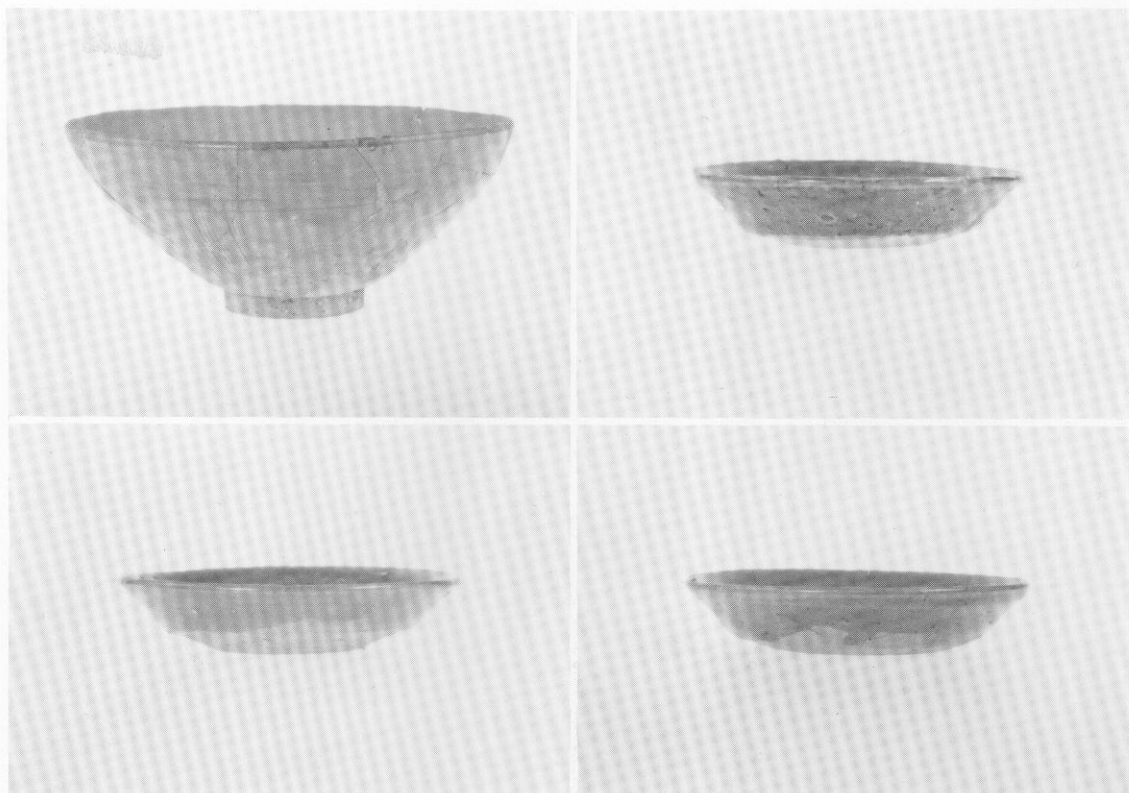




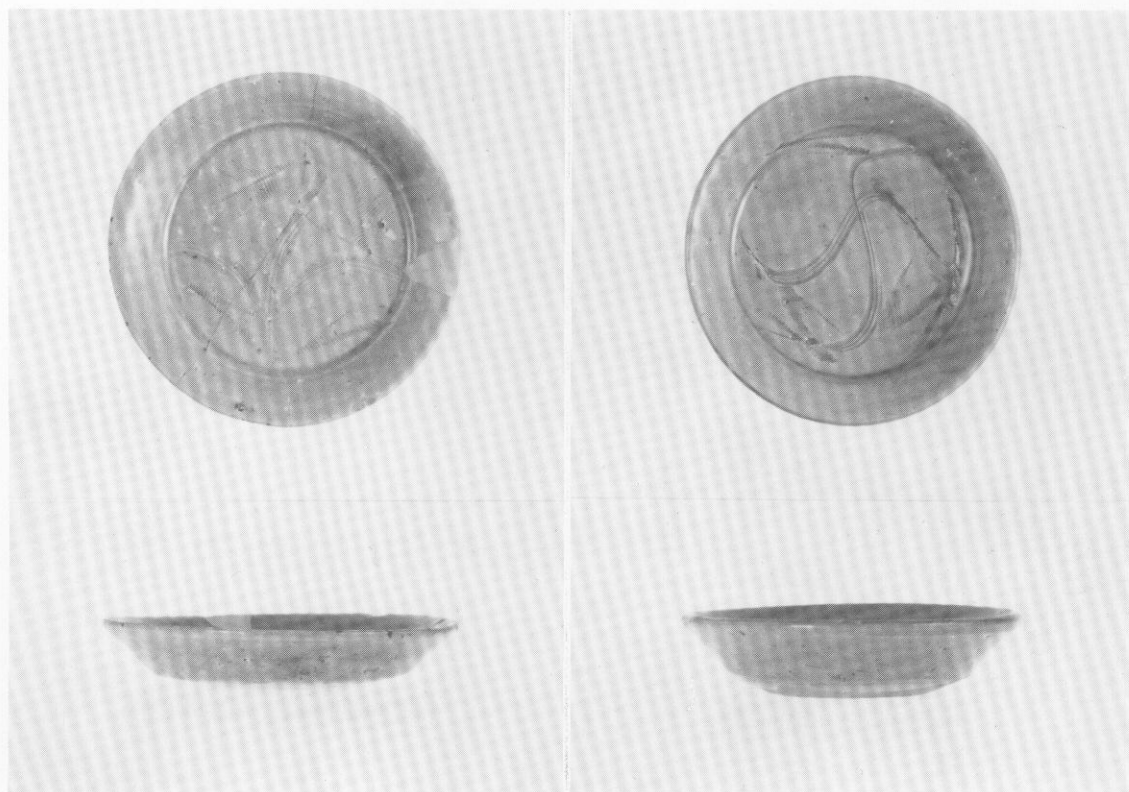
磁器(1)



磁器(2)

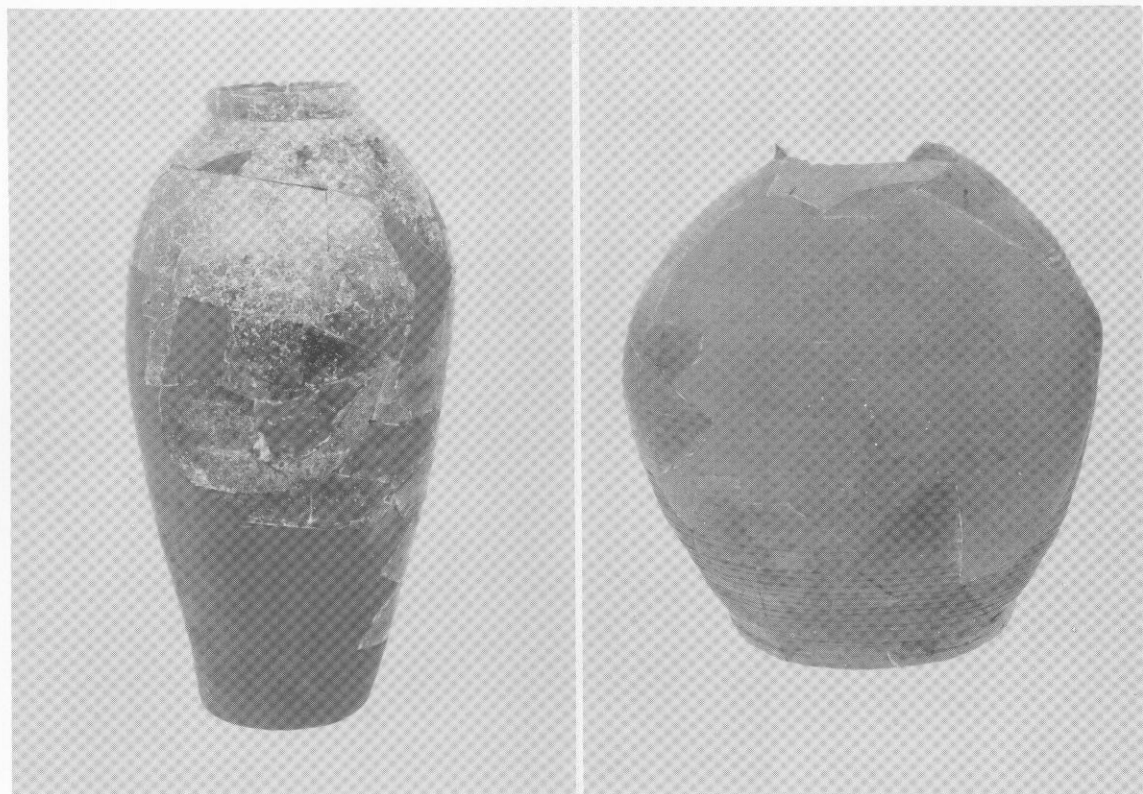


1. 磁器 (9類)

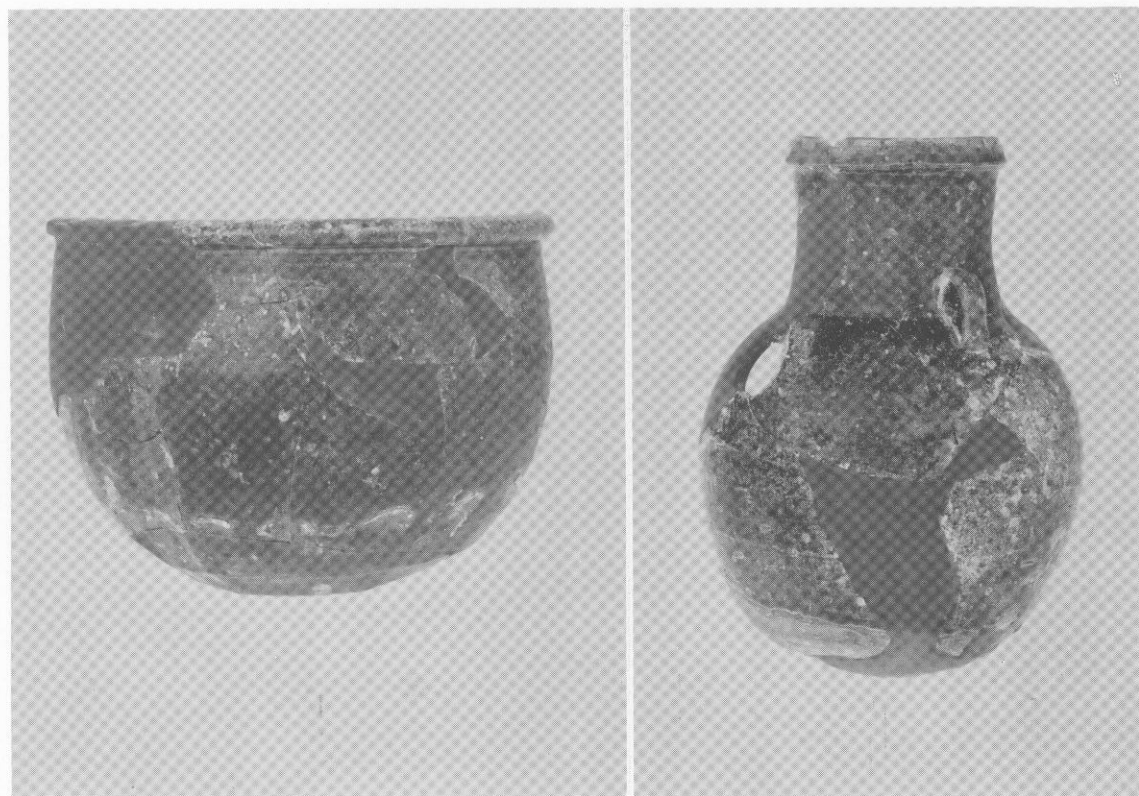


2. 磁器 (9類)





1. 雑器 (左・3類, 右6類)

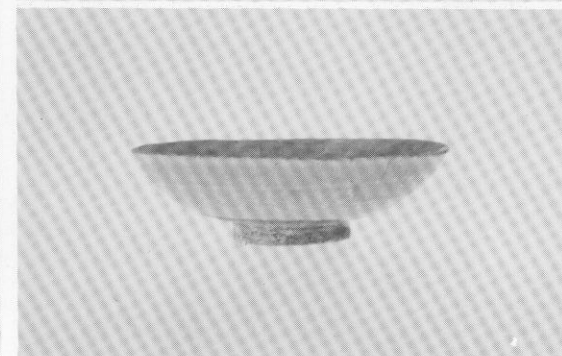
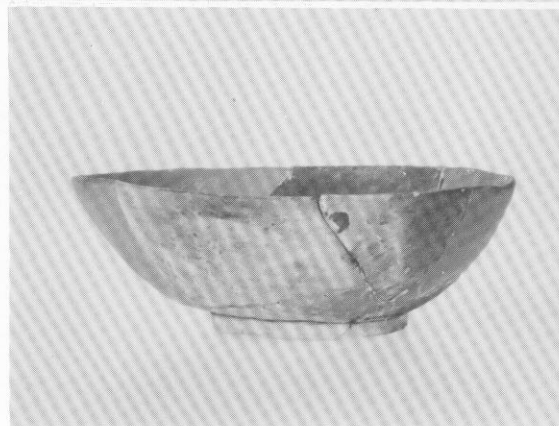
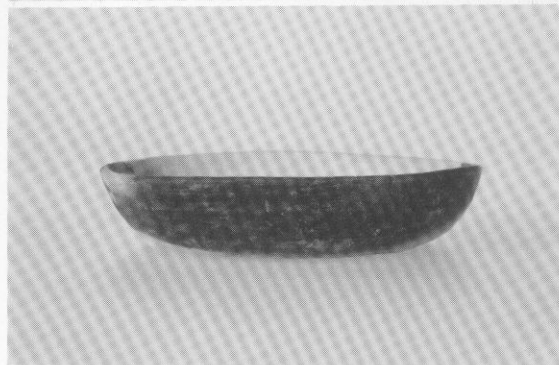


2. 雑器 (11類)

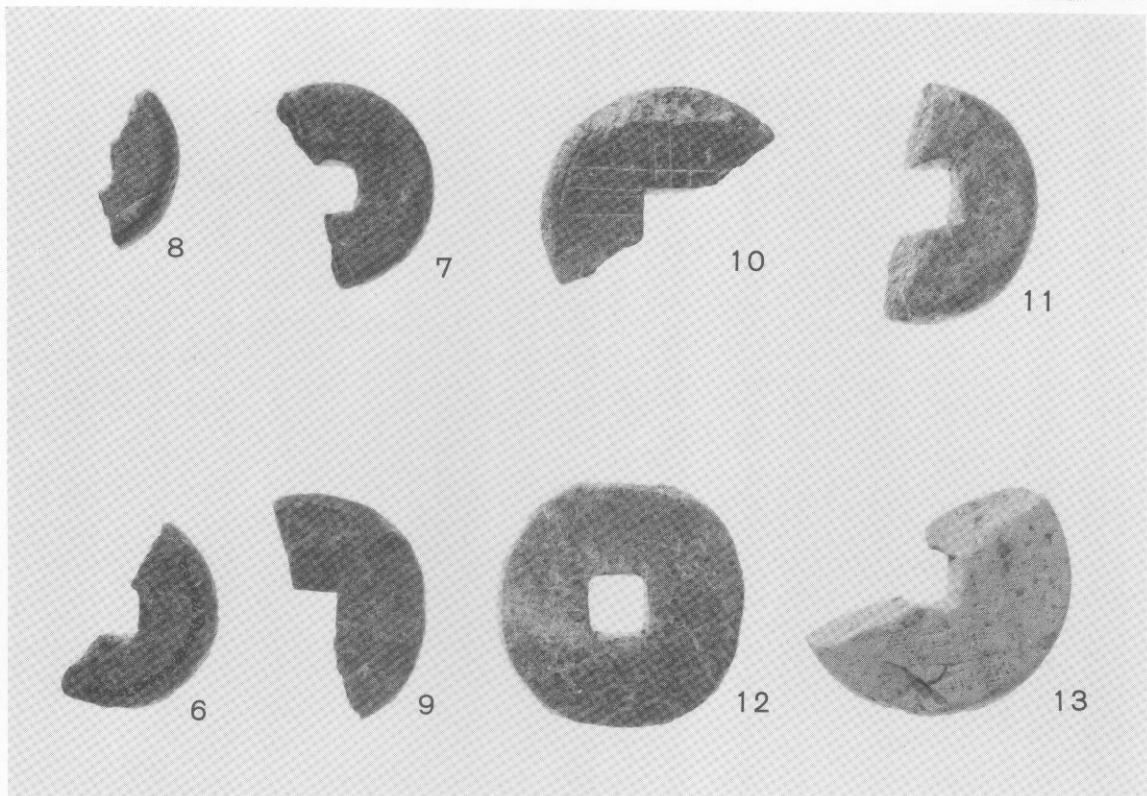


雑器（7類）





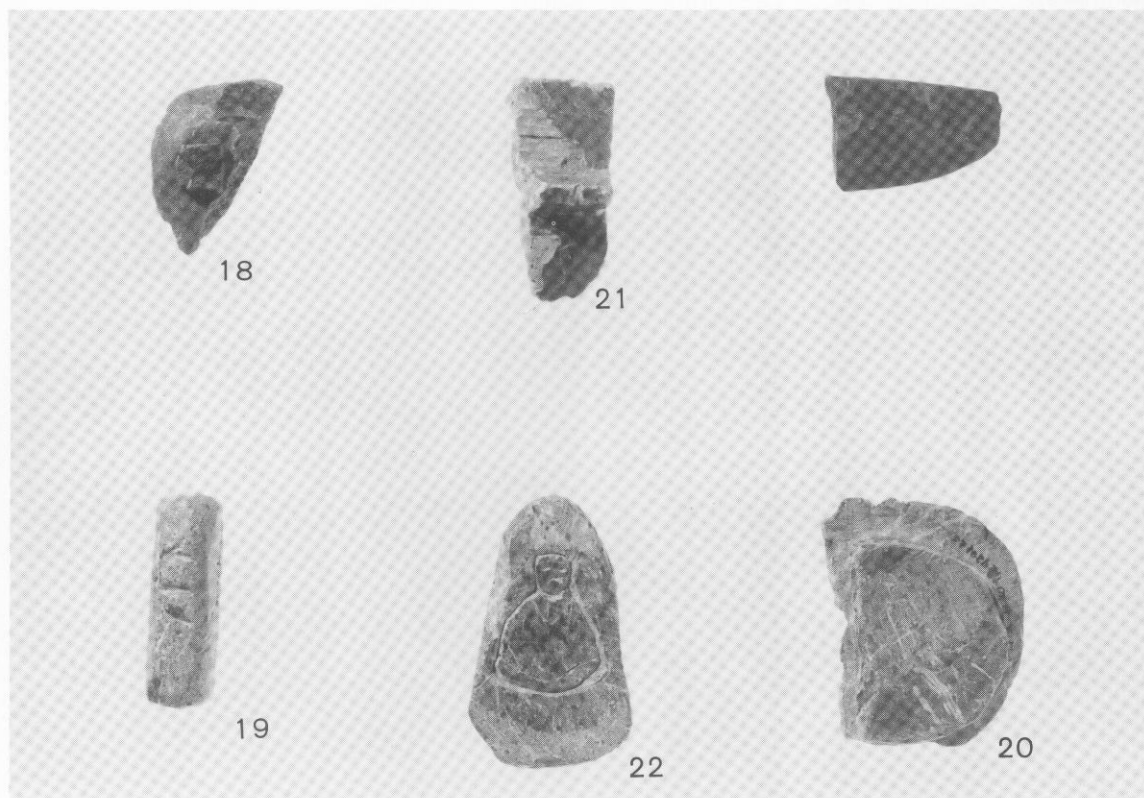
瓦器(左)・古瀬戸(右上)・6 AYECK内関連遺跡出土土器(右下)



1. 滑石および瓦製有孔（方形）円板



2. 滑石有孔（円形）製品

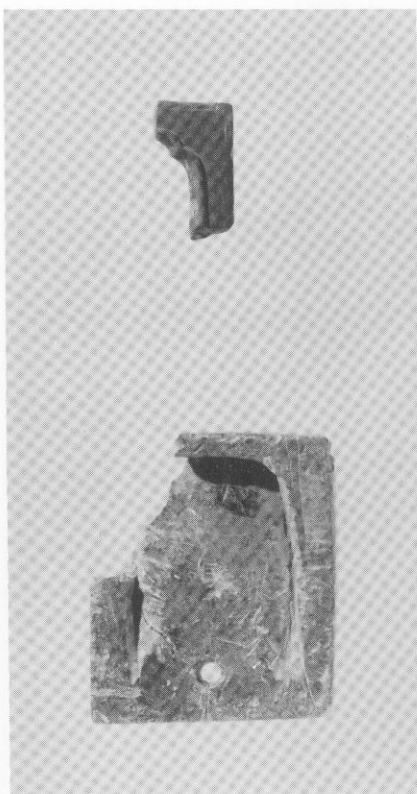


1. 滑石製品・石製品



2. 石製碗

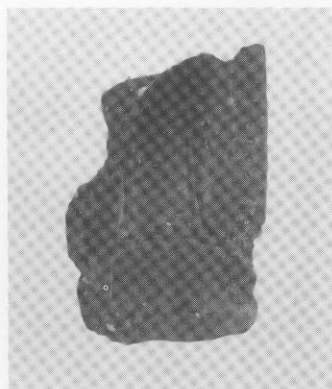




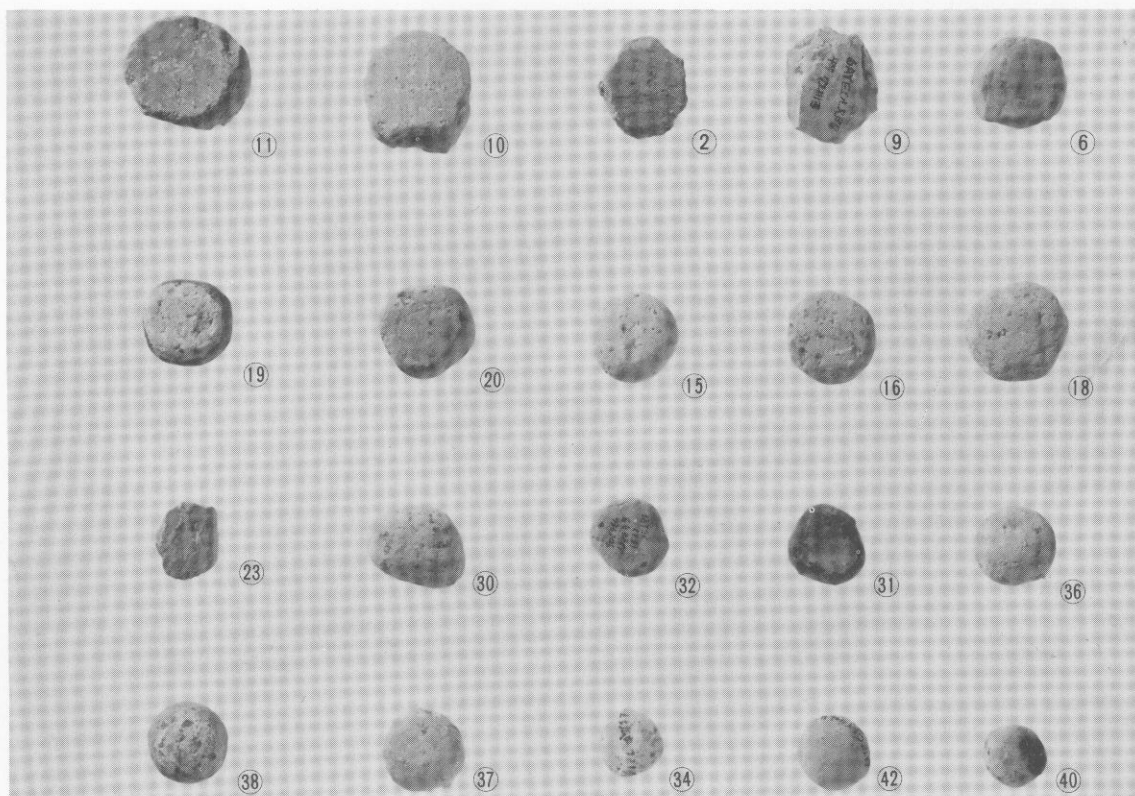
1. 石製硯



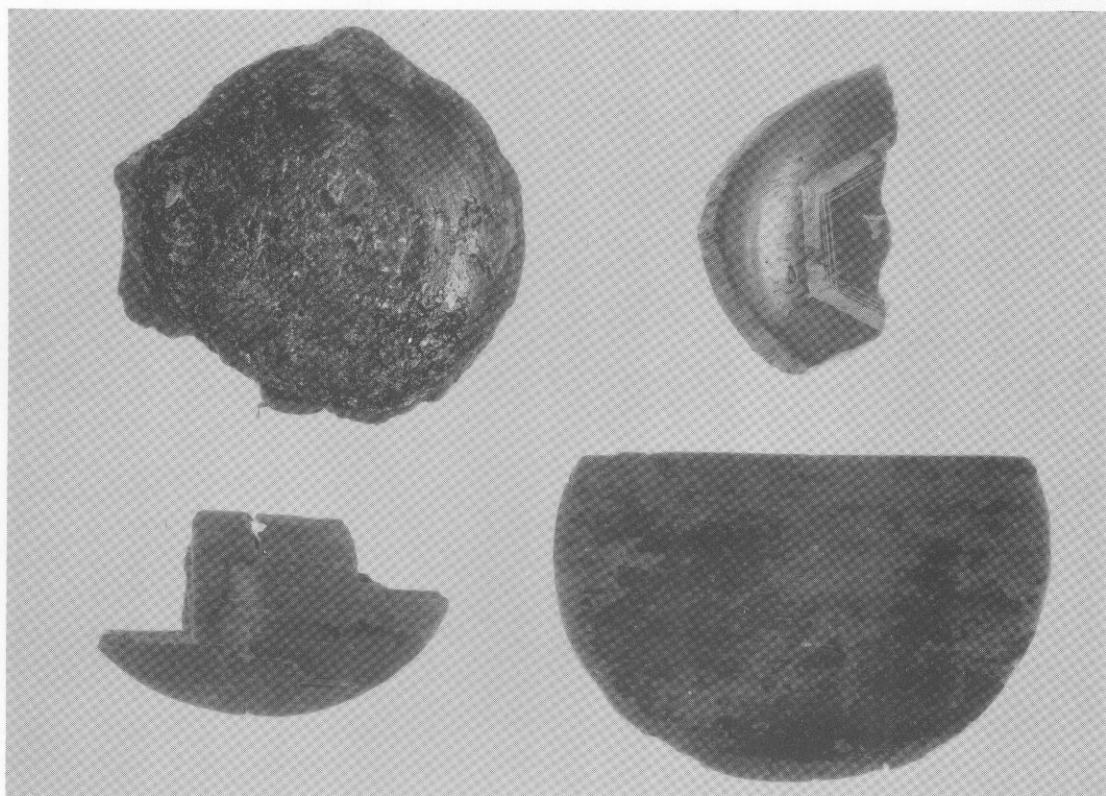
2. 土製立像



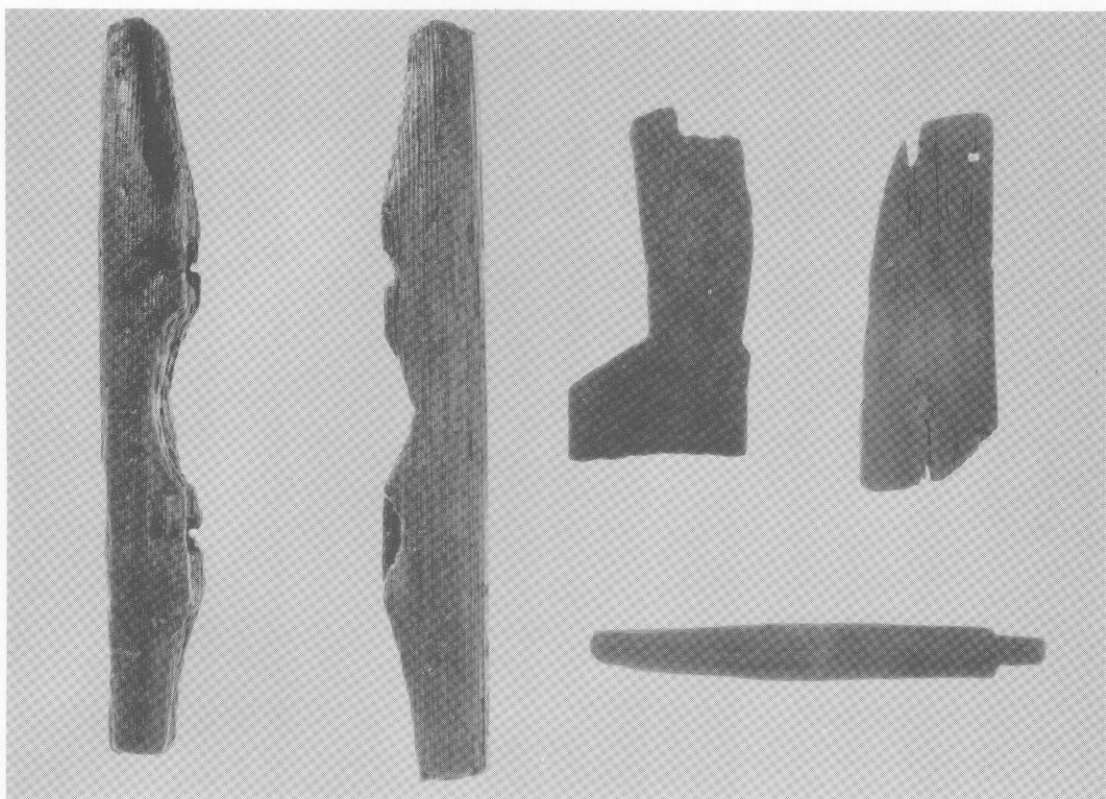
3. 土製品



4. カワラ玉類



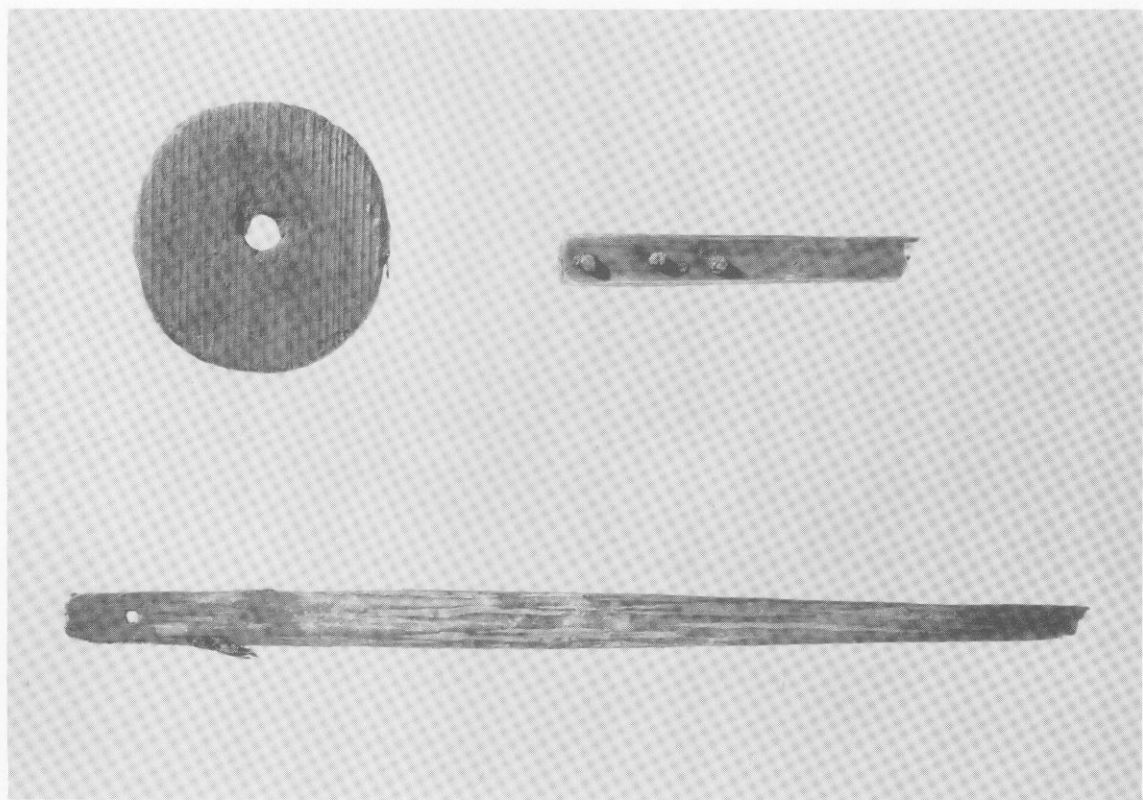
1. 木製品(1)



2. 木製品(2)

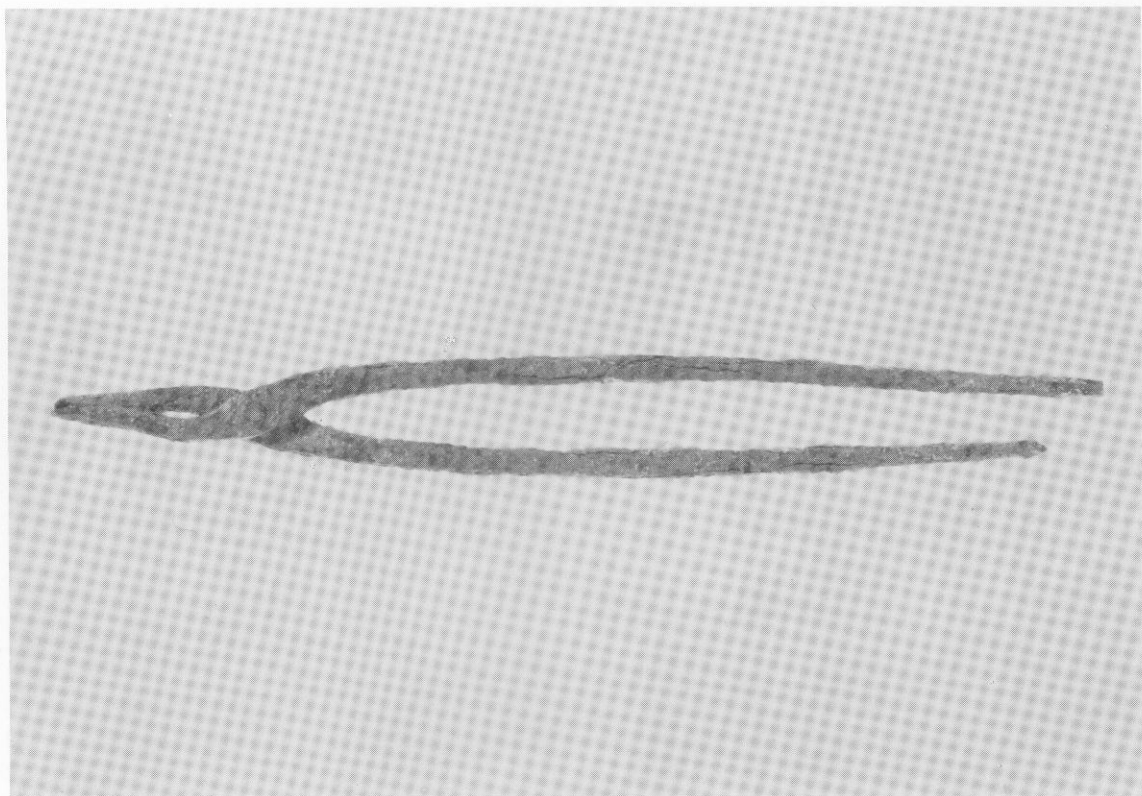


1. 木製品 (3)



2. 木製品 (6 AYECK内関連遺跡出土)

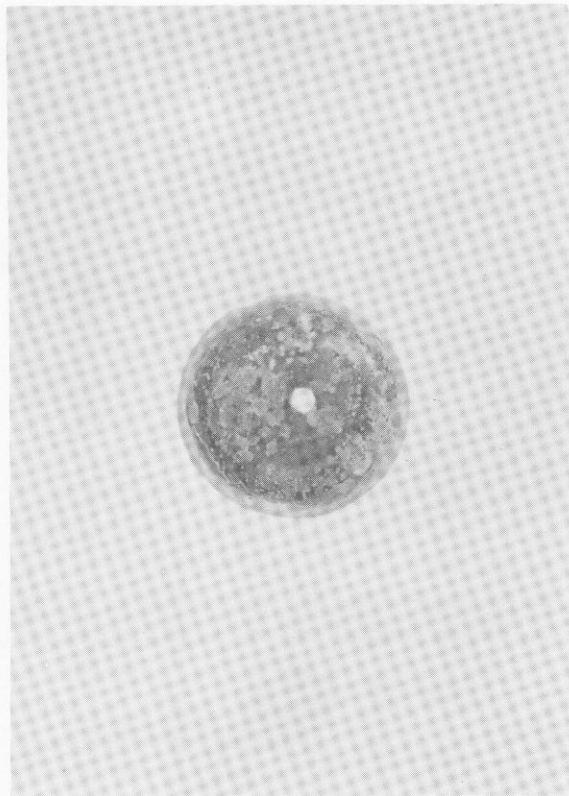




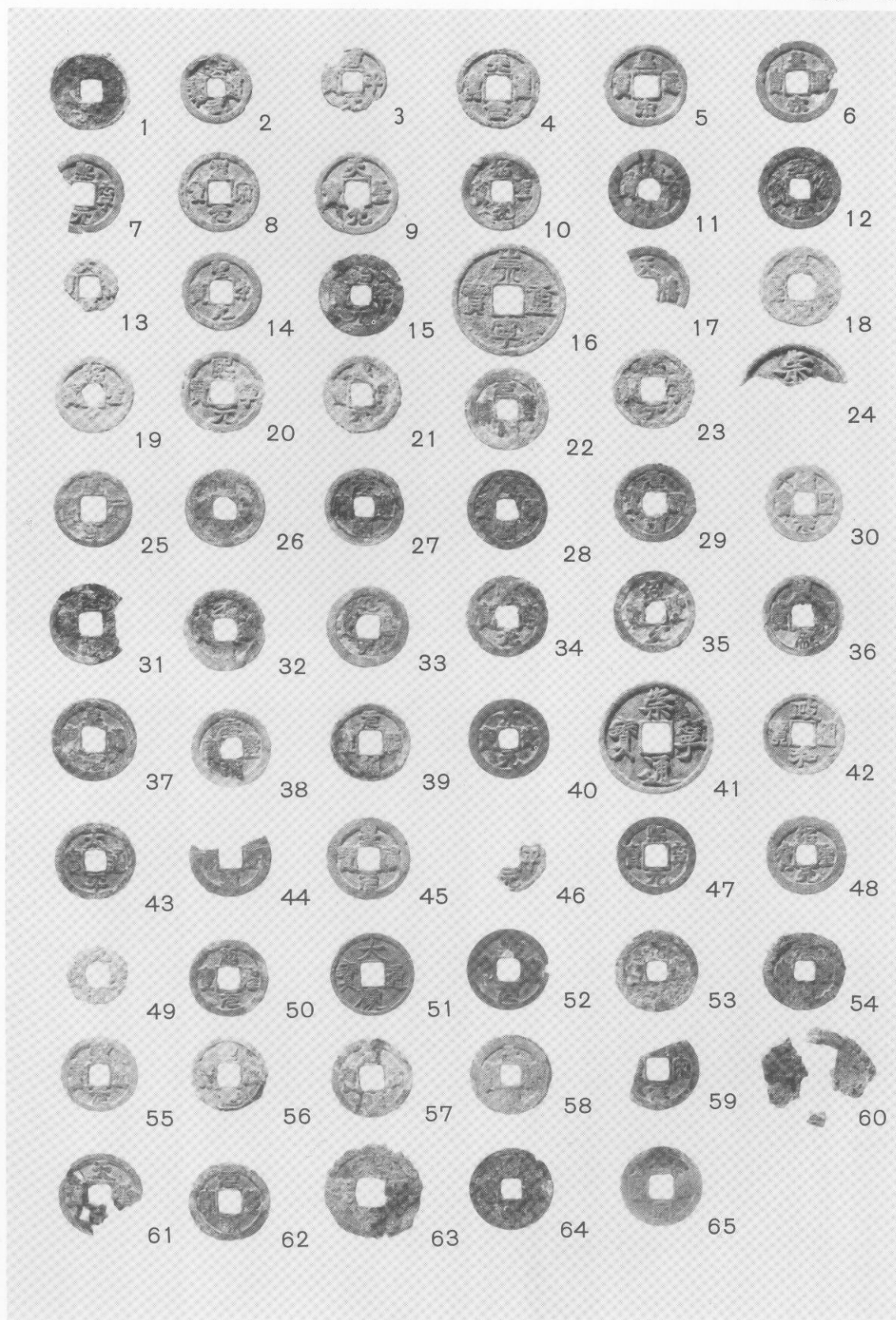
1. やつとこ



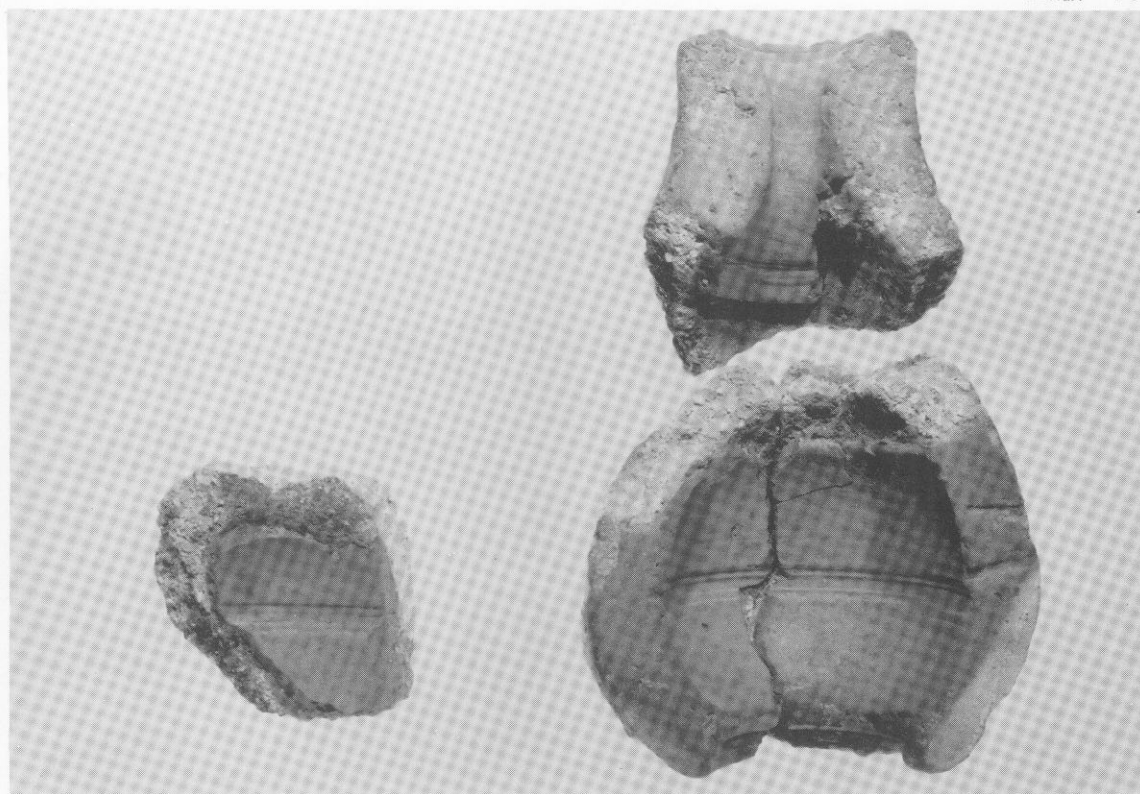
2. 耳搔付簪



3. 銅製品



銅 錢

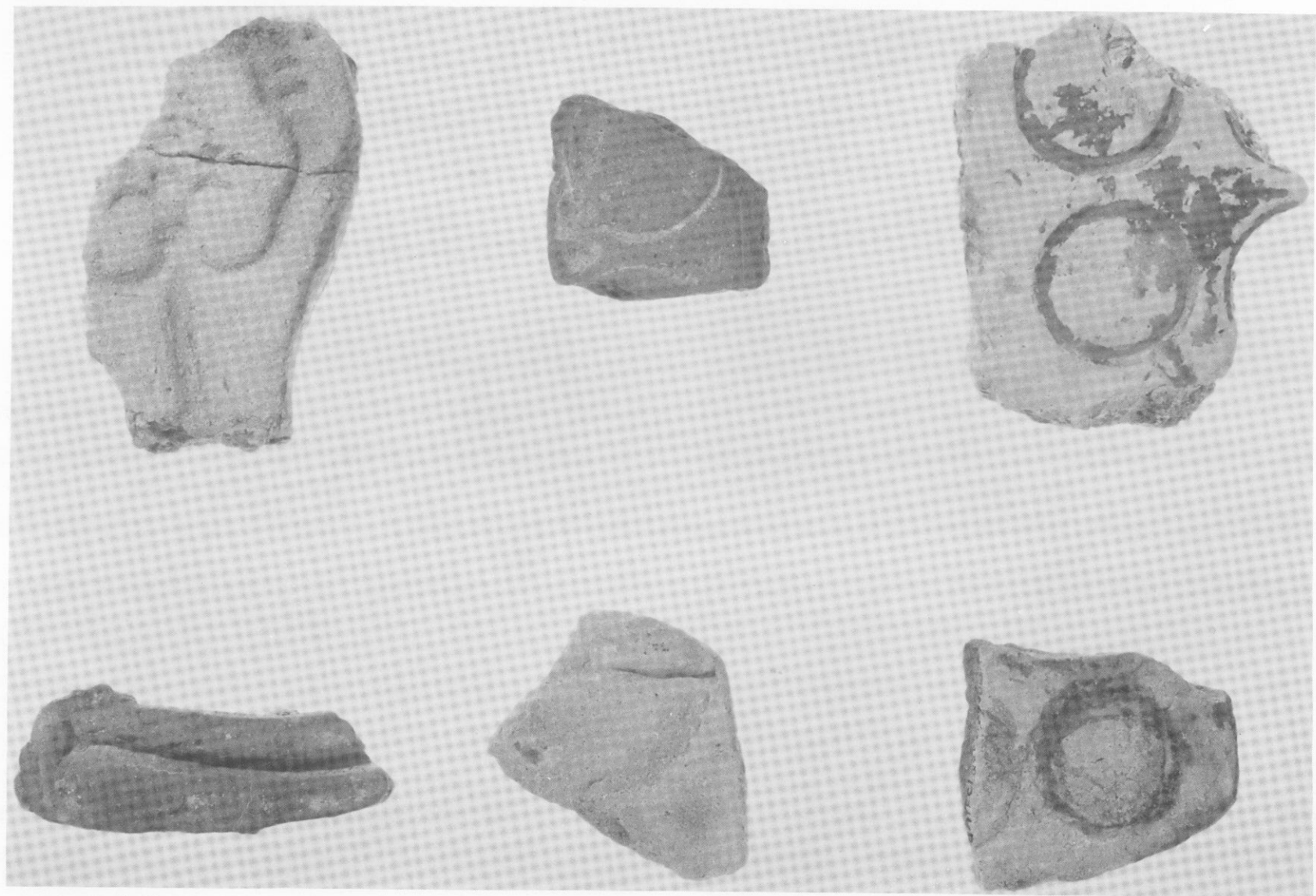


1. 華瓶鑄型(1)

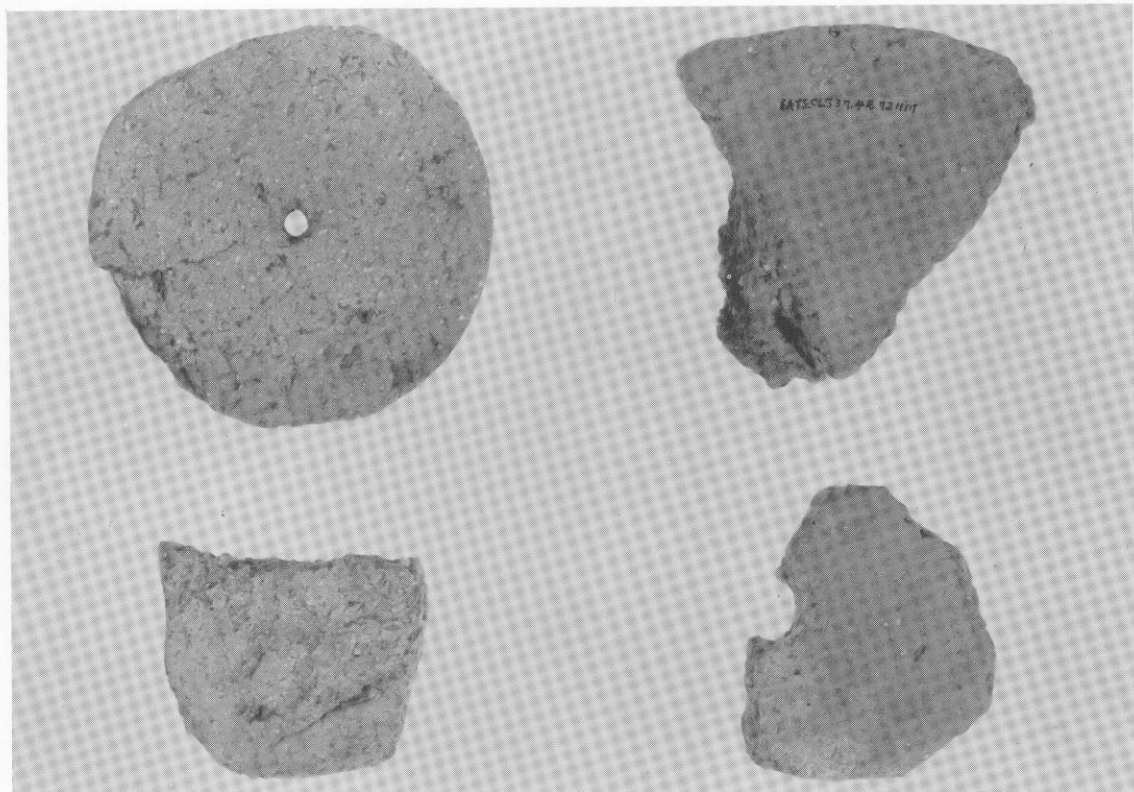


2. 華瓶鑄型(2)

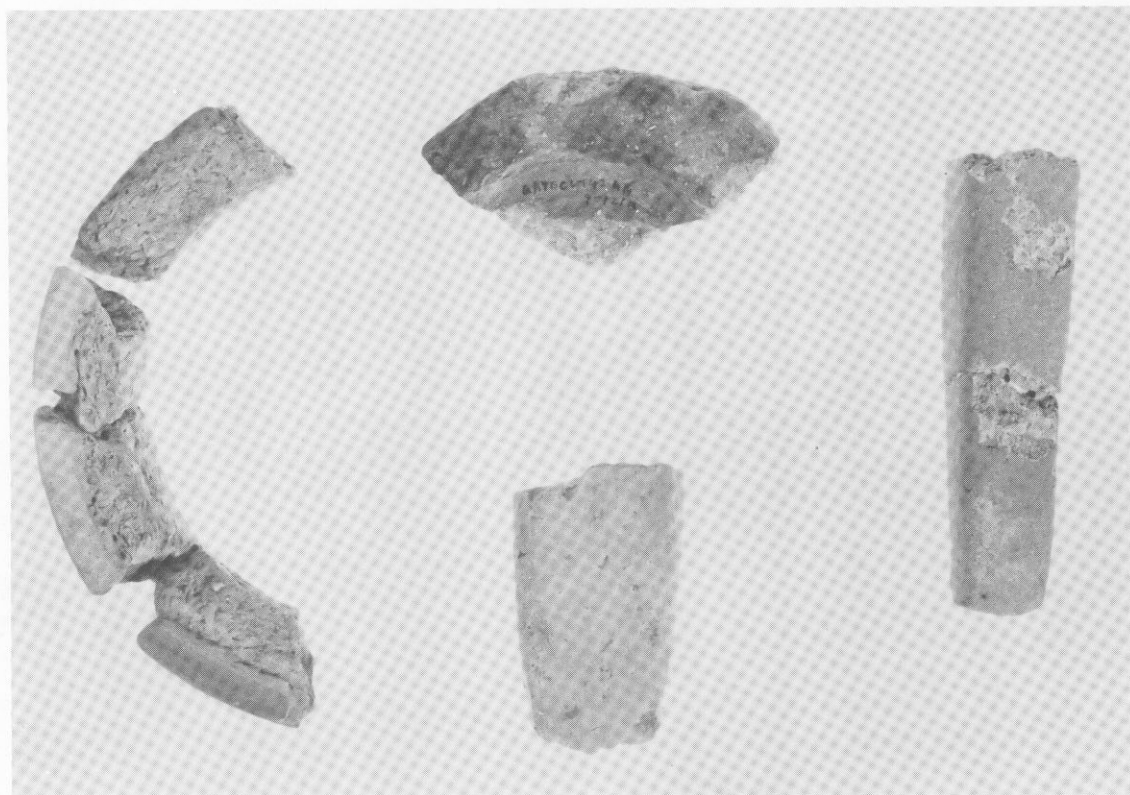




仏具等鑄型

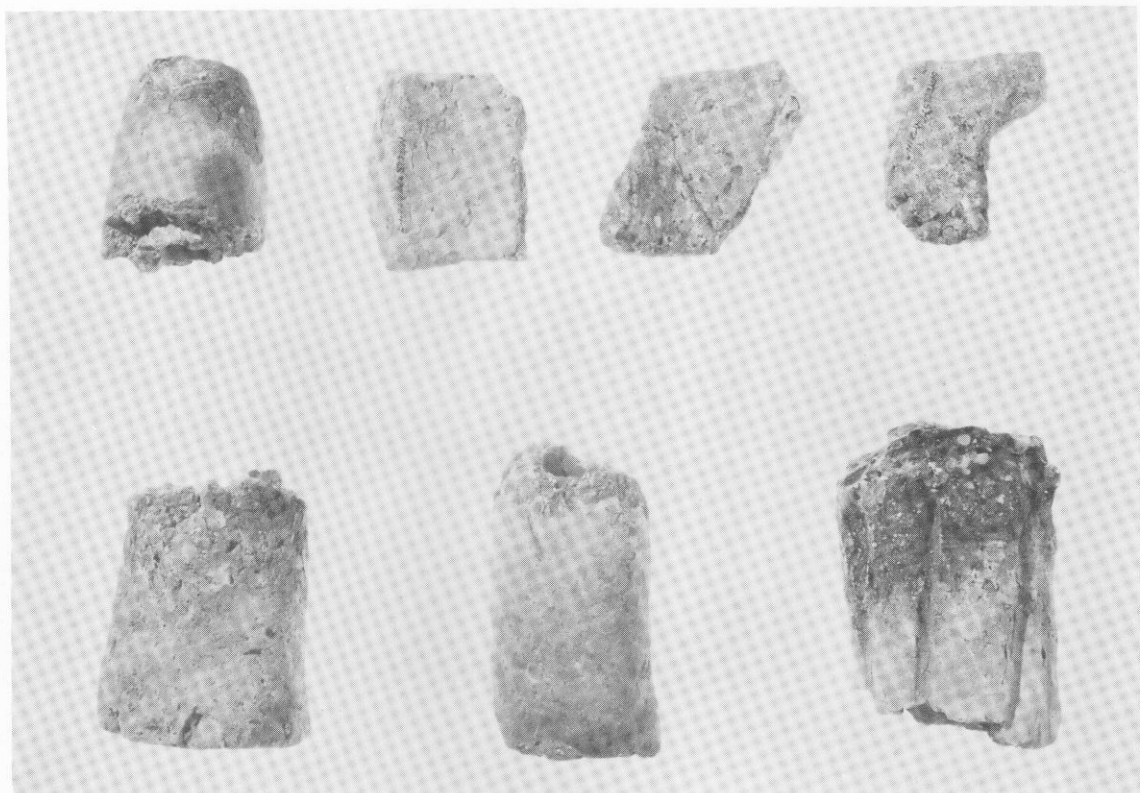


1. 鑄型等鑄物関係遺物(1)

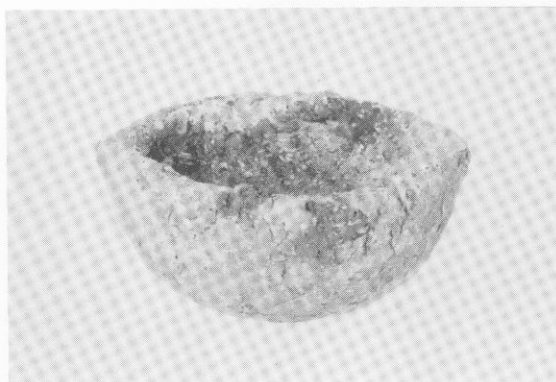


2. 鑄型等鑄物関係遺物(2)





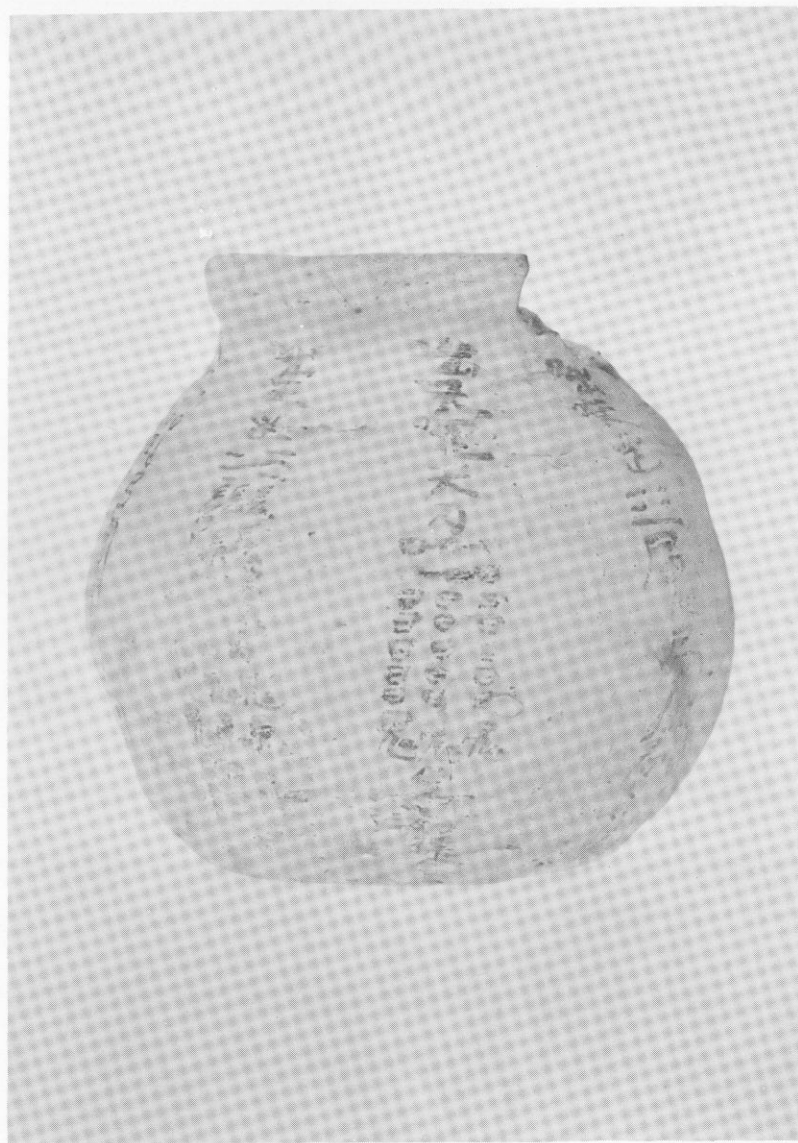
1. 鋳物関係遺物(1)



2. 鋳物関係遺物(2)



2. 呪符墨書壺底部

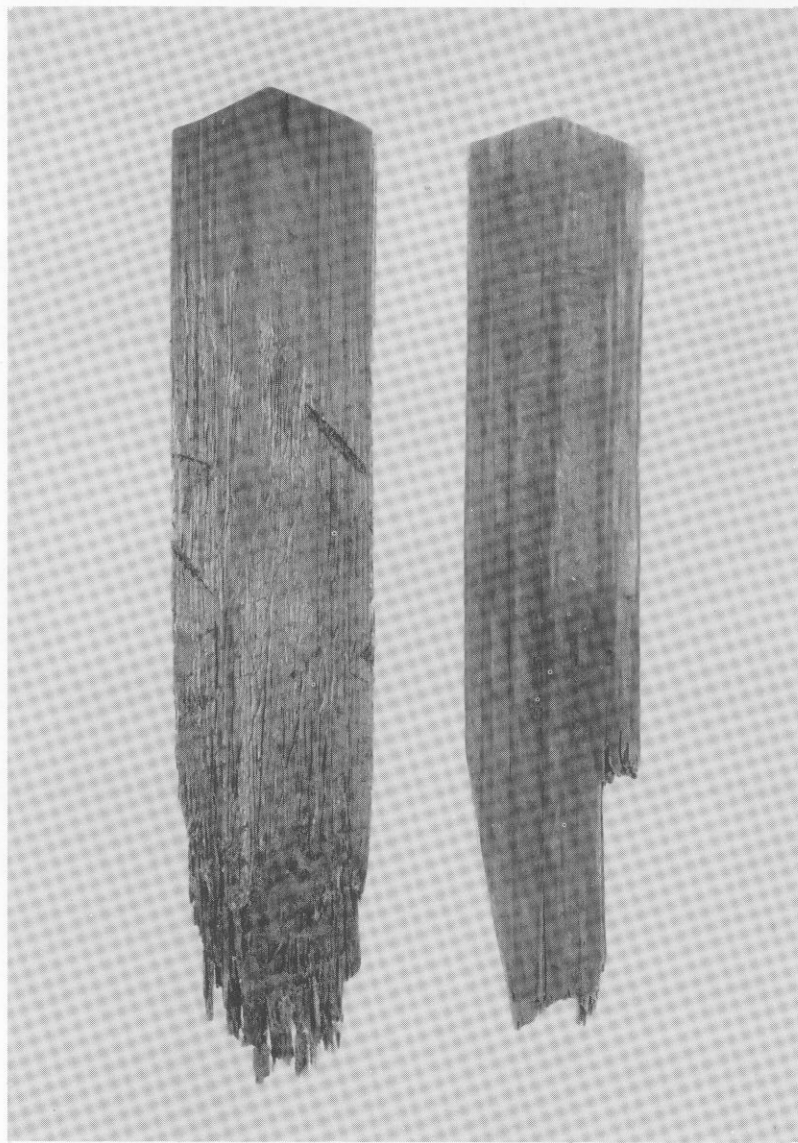


1. 呪符墨書壺



墨書の呪符

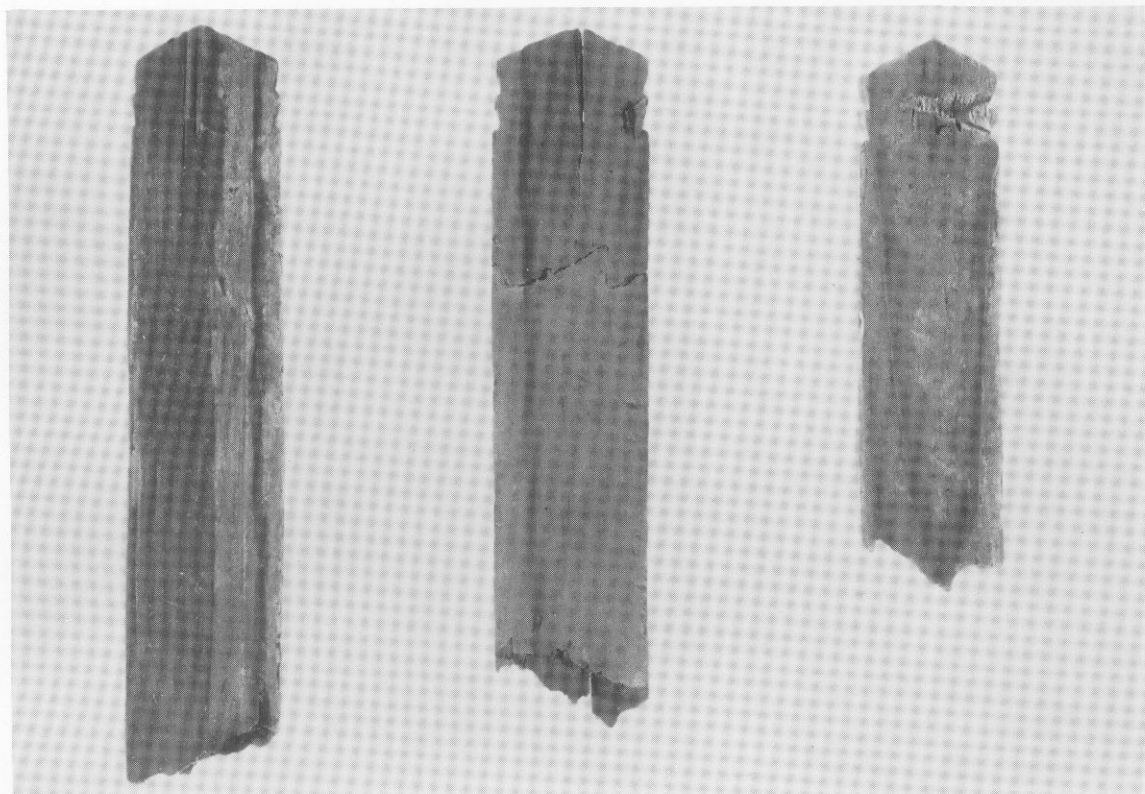




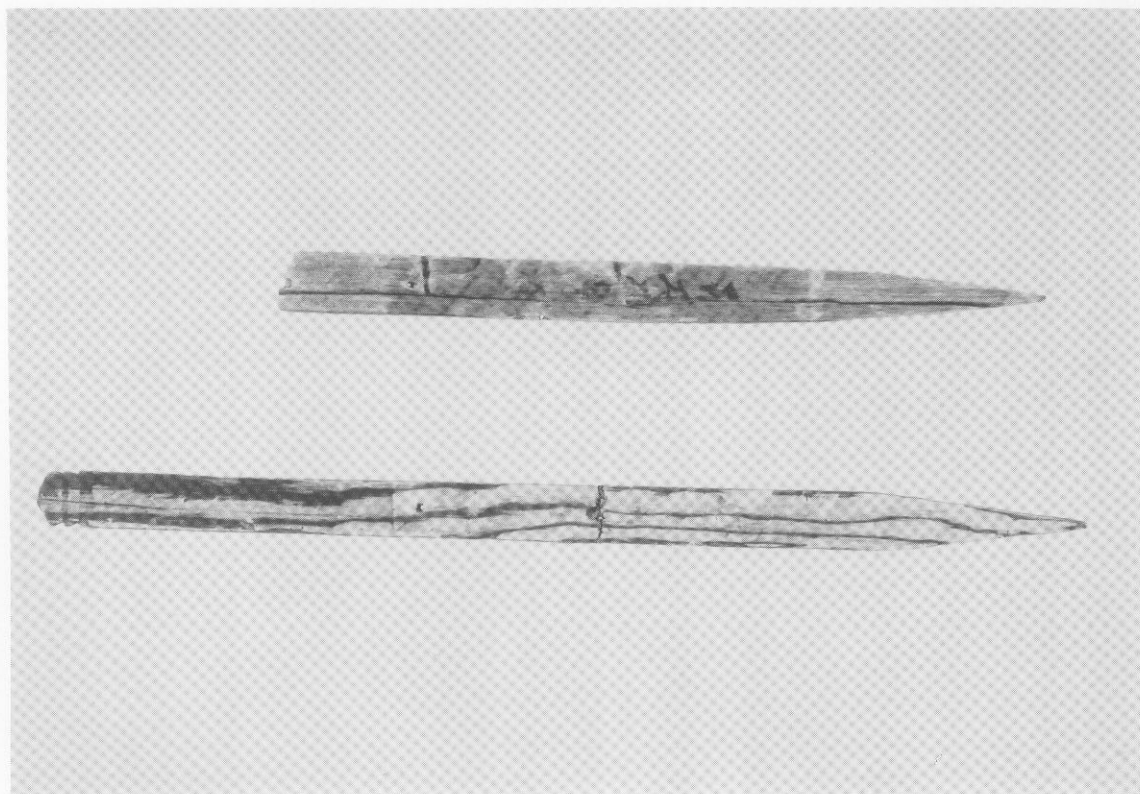
2. 塔婆 (左・第3次調査, 右・第2次調査)



1. 塔婆 (第2次調査)



1. 塔婆 (第3次調査)

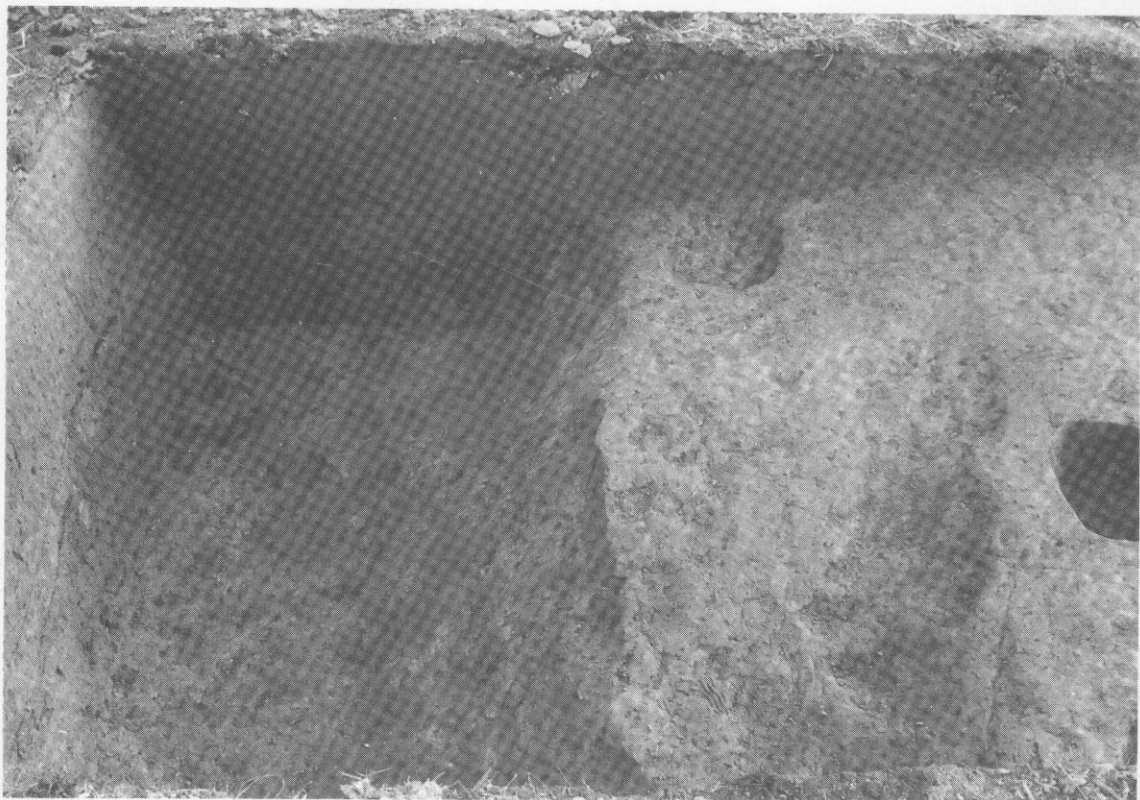


2. 塔婆 (第3次調査)





1. 5地点 D地区遺構出土状態



2. 同溝状遺構

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

—第 8 集—

昭和53年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市中央区西中洲 6 街区29号

印刷 (有) 松古堂印刷  
福岡市西区大字周船字 4 0 7